
東方魅魍月 ~ the Dark of Schwarzschild.

外神 恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方魅魍月 ~ the Dark of Schwarzschild .

【Nコード】

N8640P

【作者名】

外神 恭介

【あらすじ】

アリスと、神綺と、自分と、たった三人いればよかった。ただみんなで笑い合って、いつまでも幸せに過ごせればそれでよかった。そんな想いと裏腹に、異変はその幕を開ける。人妖霊神を問わず命を喰らい、力ある大妖怪達を暴走させる黒い闇から幻想郷を救うべく、紫は旧世界 魔界から魔界神と一人の少年を呼び寄せる。果たして少年は妹を、母を、世界を救えるのか

「闇より昏き深淵より出でし 其は、^{カガク}幻想の恐怖^{ヒカリ}が落とす闇^{カゲ}」

この作品はあくまで東方の二次創作です。色々ぶっ壊れているので原作至上の方はお戻りください。あとチートやらフラグやらひどいことになっているのでご注意ください。

プロローグ（前書き）

まさかの二個目。

向こうと違ってこっちは割と、かなり、すごく、はっちゃけます（え
という訳で、覚悟完了された方からお読みください。
ではごーぞー。

プロローグ

「はい、今回も俺の勝ち」

眼前に佇む少年がそう告げると同時、周囲に充滿していた大量の魔力が霧散した。私は魔導書を抱えながら、全身に力を込めよると立ち上がる。全身には浅からぬ負傷があり、これ以上続行するのは無理そうだ。

「ダメよ蒼衣君。アリスちゃんはまだ幼くて未熟なんだし、あなたはお兄ちゃんだから手加減してあげないと」

と、背後から私を抱き上げたお母さんが、眼前の少年を苦笑いと共に窘めた。赤いローブ越しの温かな感触が、私の心に安らぎを齎してくれる。あつたかいな…。

「少なくとも俺は真剣勝負で手を抜くのは相手に失礼だと思う。アリスは全力で倒しに来てたんだし」

ま、結果は変わらなかったけど。そんな風に溜め息をつく少年は余裕綽々で傷一つ負っておらず、私との差が嫌という程にわかってしまふ。歳もそう変わらないのに、どうしても越えられない壁の存在を理解してしまう。普段こそ気にならないものの、こうして戦っているとどうしても、彼という存在が遠く思えてしまふ。

「まあでも…」

と、近寄って来た少年が私をそっと抱きしめて、頭を優しく撫でてくれた。お母さんと同じ温かな感触に、どうしても頬が緩むのを自

覚してしまっ。

「よく頑張ったな。偉いぞ、アリス」

そう言ってニッコリと笑った少年の顔を、笑顔で見返そうと

「ん…」

目を開いた先にあったのは、少年の顔ではなく天井だった。寝ぼけた頭で周囲を見回し、状況整理を試みる。薄暗くて見にくいけどここは私の部屋で、私は今まで横になって、つまりさっきのは…、

「夢か…」

溜め息と共にもぞもぞと動き、緩慢ながらも体を起こす。窓ガラスに反射して映る私の姿は、夢の中の私とは大分違っていた。あの頃と違って背も結構伸びたし、色々な魔法も使えるようになった。変わらないところと言えば金の髪と蒼の瞳くらい

『よく頑張ったな。偉いぞ、アリス』

「……………お兄ちゃん」

夢の中にいたあの少年　蒼い瞳を持つ少年の名を呟きながら、私は窓越しに空を見上げる。今は遠い場所にいる、同じ色の瞳を持つ少年に思いを馳せながら。

偶然か必然か、夜明けの空も蒼かった。

「…準備出来た？」

「待つて〜、もうちょっと〜」

玄関から振り返り、家の中に声を掛ける。期待とは裏腹に返って来たそれは延長の嘆願。ほわほわしつつも泣きそうな声に強く言うことも出来ず、思わず溜め息が漏れてしまう。というのも、

「…そのセリフ十五回目だよ？」

「だってフライパンが見付からないんだも〜ん」

十回以上も声を掛けたにも関わらず、そんな理由で二時間半も立ちっぱなしの俺のことも少しは察して欲しい。座ればいい話なのだが、声の主が纏めた　　と言うよりも無理矢理詰め込んだ荷物類で塞がれている為それも敵わない。現実って非情。

「現地調達って発想はないの？ていうか一昨日辺りに荷造りしてなかった？」

「あ、そっか〜」

俺の漏らした言葉に同意した声がやや慌ただしく、玄関へと飛び出してきた。…俺の二時間半は本当になんだったのか。誰か教えてくれ、と言ったところで某竹林のお屋敷に住む医者は助けに来ないだろうが。

「蒼衣君、待たせてごめんね」

扉を開けて出て来たのは、十八歳くらいの少女だった。銀色のロングヘアをサイドポニーに束ね、赤いローブを着た柔らかな印象を与える少女。先程の声の主　　神綺さんだ。…彼女、こんな見た目と言動なのに、なのにだ。

「二児の母だもんなあ…」

そう。実際に出産していないとはいえ、彼女は俺ともう一人の娘の母親なのだ。どう見ても頼りない姉にしか見えないが、事実なのでなんとも言えない。しかも彼女、一つの世界を作り上げ治めている魔界神という側面まであるのだから、現実ってヤツは本当に訳がわからない。神様仕事しろ。……………あ、母さんが神様が、魔界まがいだと。

「虹の母？私七色じゃないよ〜？」

「七色は娘でしょうが」

「そつだよ？」

「…もういい」

俺の呟きを律儀に拾い首を傾げながら返されるズレた言葉に辟易し、俺は意思疎通を諦めた。誰か、誰か翻訳機を。もしくは彼女の言動を修正……………無理だな、うん。

「さ、出発しよう。あの人の気が変わって道が閉ざされたら大変だ」

「あ、待って〜」

荷物類を全て『なんの前触れもなく発生した黒い空間』に放り込みながら、最低限の手荷物が入ったワンショルダーバッグを背負い俺は母さんを促す。後ろから危なっかしくも追って来た少女が横に並び、二人揃って『境界』目指して歩き始めた。

「今からそつちに行くからな…、アリス」

ポケットから取り出した古ぼけた写真　　今と全く変わらない神
綺^{母さん}さんと幼少期の俺、そしてこの場にはいない少女　　人形のよ
うに可愛らしい金髪の少女を眺めて、俺はそう呟いた。

「…で、なんの用よ」

私は訝しげな視線と共に、突然の来訪者を見遣る。肩口の開いた紫のワンピース、腰まで伸ばした長い金髪。そして何よりスキマ
見る者に薄気味悪さを与える大量の目や訳のわからない漂流物が見える亜空間に此れ見よがしに腰掛けた、一人の少女。

八雲紫。幻想郷の賢者にして箱庭の管理者。

「ちょっと込み入った話を、ね」

「却下。死ぬかお賽銭入れてから出直して来なさい」

勘に頼るまでもなく、めんどくさい何かを察した私は至ってドライに返す。確かに異変解決の際協力し合うこともあるが、それはつまり厄介事を運んで来るということ。一日平和に縁側でお茶を飲めれ

ばいだけの私の生活に、旧友とはいえ面倒な依頼など不要だ。

「…これを見てなお、それが言えるかしら」

が、紫は僅かに目を細めるとスキマに手を突っ込み、数枚の写真を私に放った。キャッチして見てみるとそこに映っていたのは、

全身がほぼ真っ黒になった、人間。

これは痣…、いや、闇？まるで喰われるかのように体を蝕んだ黒い何か、宿主の生命力を吸っているように見えるけど…。

「……………これは？」

「最近発生している謎の病気　いえ、現象と言うべきかしらね。何せあの月人の薬が効かないのだから。私の能力ですら干渉出来ない代物よ」

月人の薬　永遠亭に住む医者、『あらゆる薬を作る程度の能力』を持つ八意永琳、その薬が効かない…？しかも紫の能力さえ通じないって…。

「…それで？幻想郷の賢者様が解決出来ないような異変を私が解決しろと？」

「当たらずとも遠からず、かしら」

『境界を操る程度の能力』　神にも等しい力を持つ紫が匙を投げた以上、私に出来ることなど何も無い。それを私に押し付けるのかと聞いたところで彼女はいつも通り、胡散臭い妖しげな笑みを浮

かべた。

「これから旧世界から、二人移住者が来るの」

旧世界！？

「バカなこと言わないで！！あの世界は既に封印されて

「私の能力、忘れた訳ではないでしょう？」

私の言葉を遮って、紫が再び妖しげな笑みを浮かべる。そう、彼女の能力なら幻想郷とあの世界を繋ぐことも容易。既に過去の遺物となったあの場所から二人連れて来ることなど文字通り朝飯前だ。

「私だって無闇に許可した訳じゃないわ。相応の理由もある」

でも何故？その問いを予測していたように 実際誰も思うだろうが 紫は根拠を話し始めた。

「この闇から感じた気配 移住者の片方と全く同じなの。でも旧世界からこちらには一切干渉出来ない。だから呼んだの。調べる為に」

「…調べるだけなら来させなくてもいいでしょうに」

この闇と同じ気配、それだけで十分そいつは黒だ。さっさと確保して洗いざらい吐かせればいい そう考える私は短絡的なのだろうか。

「後は…、私の勘、かしらね」

何事も合理的に進めるあの紫が、勘。普段なら異変の前触れか何かとぼやくところだが、この状況でそれはあまりにも笑えない。

「…ま、好きにきなさい。異変解決屋として助力はするわ」

「さすが。話が早くて助かるわ」

溜め息と共に協力を申し出ると同時、紫が満足そうに頷いた。乗せられたみたいで癪だが、今回はかりはそうも言っていない。…こいつが来る度にそんな状況になっていた気もするが。狙ってるのかしら。

「…何事もなく、済めばいいのだけれど」

紫の言葉と私の思いに反応したかのように、一陣の風が吹き抜けた。

奇しくもそれが、この異変の始まりを告げることになるなんて、今の私達には知る由もなかった。

「…まあ、こんなもんか」

深い深い闇の底。そこにオレは居た。今はまだ動けないが、この調子ならあと数週間あれば…。

「多少は溜まって来たな…。これなら動き回るくらいは…、ん？」

自ら動き回るべきか否か、リスクとリターンを天秤に架け思考する

オレの感覚網に、一つの気配が引つ掛かる。懐かしいその正体は

「くっ、くひひ…、ひやははははははっ！！」

それを理解すると同時、思わず狂ったような笑いが漏れた。闇の中にこだました笑い声が、周囲の気を掻き乱す。端から見れば今のオレは、狂人のように見えるだろう。

「…はっ、おいおい、マジかよ」

一通り笑い落ち着きを取り戻し、オレは歪んだ笑みを浮かべる。あいつが来るのは計算外だったが…、オレにとっては好都合だ。

「いいぜ姉弟。来るんなら来い」

間もなく『こちら側』に来る二人の姿を思い描き、オレは先の迷いを断ち切った。あいつが来るならオレが直々に動く必要があるからな…。

「目覚めまで後少しだ…。この異変を乗り越えたその先で…、オレに会いに来い！！」

挑発するように放ったオレの言葉はあいつに届かず、闇の中で反響して消えて行った。

まるで、これからの世界の命運を現すかのように。

プロローグ（後書き）

うん、まあ、まだ最初なもの（オイ
不定期更新なんで気長にお待ちくださると幸いです。

第一話「再会」(前書き)

お待たせしました。ようやく一話です。…短いW
ではごーぞー。

第一話「再会」

「ふあ……」

欠伸と共に体を起こし、眠気に抗うべく目元を擦る。夜中に一度起きたせいかなかなか寝付けず、普段の半分くらいしか寝られなかった。

「あー…、朝ご飯作らないと……」

本来、妖怪である私は睡眠や食事を必要としないのだが、母さんがそうしていたせいかな人間らしい生活習慣が身に付いていた。一人暮らしを始めた頃は食事の度に、家族のことを思い出してたっけ。

「んー…、上海……」

私の声に反応して動き出した、棚に飾られていた人の頭サイズの手製人形。上海が他の人形達を引き連れ、せっせと朝食の準備を始めた。私の能力。『人形を操る程度の能力』の力で上海を始めとしたこの家の人形は、簡単な指示さえ出せば半ば自律で行動してくれる。一人で暮らすにはやや広過ぎるこの家。マーガトロイド邸を綺麗な状態で保つには、彼女達の力無しには難しいだろう。

「ん…、蓬莱もありがと……」

郵便受けから文々。新聞を取って来てくれた別の人形に礼を言い、一人リビングの椅子に腰掛ける。やや寝不足のせいかな声に覇気がないのが自分でもわかる。今日は特に用事もないし、寝て過ごすのもありかな……。

「……………あら？」

朝食のトーストを頬張りながらそんなことを考えていると、二体の人形が目の前に飛んで来た。確かこの子達は…、自宅周辺の警備担当の子だったかしら。彼女達の役割は文字通り来訪者や周囲の不審な出来事を私に報告すること。よほどのことがない限り持ち場を離れることはない。でもその割には緊急じゃなさそうだし…、むしろ困っているような印象を受ける。

「どうしたの？どこかほつれた？」

思い当たる原因を尋ねてみるも、二体は黙って首を振り否定を返した。…最も、彼女達は喋れないから無言なのは仕方ないことなのだが。でもそれじゃないとすると…、何かしら…？と、首を傾げながら考えている私をよそに、何やら二体が動き始めた。他の人形達に『家』と書かれた段ボールを持たせ、『男』と『女』と書かれた紙を胸元に張り、段ボールの前で何やらジェスチャーを交わしている。……………ええと、

「…家の前で男女二人組が何か話してるの？」

それを見た率直な感想を述べると、二体は嬉しそうにくくくくと頷いた。なるほど、今のところ害がある訳でもないが、向こうからの動きがない為判断を迷ったのだろう。この魔法の森にはたまに人間が迷い込んで来ることがある為、似たような出来事は数回経験している。大方道に迷ったとかそんなところだろう。

（着替えたらし様子見に行ってみるかな…）

そう結論付けると共に朝ご飯を食べ終え、洗い物をすべく立ち上がった瞬間チャイムが鳴った。狙っているのかと思いつつ、とりあえず上着を羽織って玄関へ。

「はい、どちらさままで…」

すか、と続けようとした言葉は、しかし叶うことはなかった。何故なら扉を開けた先にいたのは見覚えのある、あり過ぎる人物だったからだ。

「ようアリス。久しぶりだな」

やや癖のある黒髪に、私と同じ蒼い瞳。飾り気のないシャツとズボンに、体全体を覆う漆黒のローブを纏った少年。最後に会った時より大分背が伸びているが　　と言っても数年前だから当たり前だが　　見間違えるはずがない。今朝夢にまで見たその人物は

「アリスちゃああああん！！」

その名を呼ぼうとした瞬間、私は突如赤い物体に押し倒される。受け身も取れず倒れ込むが、運のいいことに頭がぶつかったのは柔らかいマットの部分だった。慌てて赤い物体の正体を確認すると再び頭をハンマーで殴られたような衝撃を受ける。

腰まで届く銀色の髪の一部をサイドポニーに束ね、肩口の開いた赤いローブを着た少女。少年と違ってこちらは全然変わっていないが、だからこそそれが誰なのかをはっきり理解してしまい、私は口を開けない。なんで。どうして。だって。そんな言葉がぐるぐると頭の中を周り、上手く話すことが出来ない。

「こら母さん、気持ちわかるけど一旦ストップ。薄着だから風邪

引いちゃうし、何よりアリスが混乱してる」

と、赤い少女の暴走を止めるべく、黒い少年が私から少女を引っぱがす。残念そうにしながらも、少女は少年に従い私から離れた。…この光景を見ている人に、少年は少女の息子だと言っても、果たして何人が信じることやら。

「えと、大丈夫か？アリス」

相変わらず変な思考を続けたまま動かない私を心配したのか、少年が私に手を差し延べる。こういう小さな気配りや優しさも、記憶の中のものと同分も間違っていなかった。

「ええ、ありがとう。…兄さん」

助け起こしてもらい礼を述べながら私は少年 兄である蒼衣の名前をようやく呼んだ。

「わあ、キツチン広〜い」

「…で、なんで兄さんと母さんがここにいる訳？」

はしゃぎながら家の中を見て回る母さんを尻目に、アリスがジト目で問い掛けて来る。まあ確かに、なんの連絡もせず急に押しかけた訳だし当然か。

「まあなんだ。母さんが「アリスちゃんが心配なの！！」とか言い出して、俺も幻想郷に興味があったので来ちゃった、という訳」

「無茶苦茶適当!？」

あまりにもあんまりな理由に、アリスが全力でツツコミを入れる。当の俺自身未だ信じ切れず、ドツキリ大成功の看板を持った誰かが出て来るとか実は夢でしみたいなオチがあるんじゃないかと考えていた。が、先程触れたアリスの感触は本物だから夢幻の線はないだろうし、こうして話して性格も俺の記憶にあるものと一致する。目の前にいるのは真正正銘、神綺さんの娘で俺の妹でもあるアリスだ。

「ていうか母さん魔界神でしょ!？魔界放り出して来ていいの!？」

「…夢子って、苦勞人だよな」

「ああ…」

魔界神である神綺さんが魔界を放り出して来ていいのか。アリスの当然過ぎる疑問に対し、俺は明後日の方向を見ながらそう答える。神綺さんの作り出した魔界の民の中でも最強クラスのスペックを持つ金髪のメイドを思い出し、アリスも納得したように頷きながら遠い目。もう一人の母親とも言える苦勞人の姉の顔を思い出し、兄妹揃って心の中で合掌した。夢子…、負けるな…。頑張ってくれ…。

「しかし…」

意識を魔界から幻想郷に戻しながら、俺はアリスを眺め回す。数年近く会っていないかったが結構背も伸びており、リボンを結んでいた頭にはカチューシャが付けられていた。服も子供っぽかった昔とは違いゴスロリのようなドレスを着ており、ぶっちゃけかなり可愛か

った。男子三日会わざればとは言いが、女子は一日でもいいんじゃないだろうか。…何言ってるんだ俺。

「…何よ」

「いや、可愛くなったなと思って」

「かわつ…!?!?」

俺の視線を不審に思ったのか眉を顰ながら尋ねてくるアリスに、思ったままを率直に言う。途端にアリスは顔から煙を出し、真っ赤になりながら俯いてしまった。…俺、なんか変なこと言ったかな？

「わ、人形がいっぱい。あ、この人形可愛い」

そんな俺達と裏腹に、母さんは勝手にアリスの家を探索していた。扉を開けた先には戸棚に大量の人形が飾られており、神秘的な雰囲気を感じさせた。…母さん、神様なのに部屋のオーラに負けてるよ。

「そついやあの人形達はなんなの？家の前でも気配感じたけど」

「……………あ、ああ。人形はね、私が魔法で使ってるの。人形遣いだから」

もはや母親どころか妹のような感覚で母さんを見守りながら、俺はアリスに向き直る。しばらくして再起動したらしく、アリスもそう答えてくれた。…こちらの顔を見てくれないのが少し気になったが。

「…お？」

と、不意に足を引つ張られる感触。視線を落とすと小さな人形が俺をわらわらと囲んでいた。少し驚きながらも椅子から退き、しゃがみ込んで視線を低くする。マーガトロイド邸は魔法の森の深くにある為、主人であるアリス以外の人間が珍しいのだろう。…妖怪だが脳内で一人ツツコミをしていると、人形達が一枚の紙切れを差し出して来た。受け取って見てみると「初めまして」の文字。わざわざ挨拶しに来てくれたようだ。

「初めまして。俺はアリスの兄貴で蒼衣。よろしくな」

ニツコリと微笑みながら紙を渡した人形の頭を撫でてやると、群れていた人形が二列になって並び始めた。一体何をするのかと思ったら、「なでなでしてー」と書かれた紙を差し出して来た。…ああ、羨ましくなったから片手ずつに別れて並んだと。なるほどなるほど。頭いいな。

「珍しいわね…。人形達が自分から寄って来るなんて」

「へえー。てか今更だけどこいつらって自我あるの？」

「一応ある、と言うべきかしら。半自律だから簡単な指示なら自分で動いてくれるし」

アリスの答えになるほどと頷きながら、人形達の頭を撫でて列を捌いて行く。終わった者は俺の頭に乗ったり肩に乗ったり周りに浮いたり背中に掴まったりと様々だった。…重くはないが埋もれそうだな、これ。

「なでなでしてー」

「はいはい…。つて母さん!？」

最後の一体、今までの人形と比べてやたら大きい銀髪の子の希望に応えて撫でると同時、それが母さんだと遅れて気付く。なんでナチユラルに人形達に混じってるかなこの人は!？

「わーい、蒼衣君に頭撫でてもらったー」

ほわほわとした笑みを浮かべながら、そんなことを呟く母さん。…ホント、どっちが保護者なのかわからなくなってくる。アリスも溜め息ついてるし。

「…あ、そうだ。兄さん、少し時間いい？」

「ん？なんだ？」

ふと思い出したように尋ねて来るアリスに、両手いっぱい人形を抱え立ち上がりながら聞き返す。一瞬ジト目になるもどこからともなく魔導書^{グリモワール} 数年前から愛用しているそれを取り出し、

「兄さん、勝負よ」

ピシッと指を突き付けてそう宣言した。……………はい？

「え、なんで？」

いきなり過ぎる言葉に、俺は首を傾げて尋ねる。頭や肩から人形が落下しそうになるも、器用にバランスを整え元に戻す。…これ結構楽しいけど大変だな。

「二百五十一戦二百五十一敗…。数年前までならいざ知らず、今の私なら互角に渡り合えるはず。今日こそ勝ち星をいただくわ!！」

アリスの言葉に記憶を漁り、それらしき記憶を引っ張り出す。以前魔界で一緒に暮らしていた頃は度々アリスに頼まれ、修業の為に模擬戦をしていたのだ。未だかつてアリスは俺に勝てたことは一度もないが、修業を積んだ今ならば、と思ったのだろう。我が妹ながら素晴らしい心掛けた。だが、

「出来れば遠慮したい」

「なんでっ!?!」

俺の言葉にずっとこけそうになりながらもアリスがツツコミ。いやなんでって…、ねえ？

「仮にも妹だぞ?こいつらとも仲良くなっちゃったからあんま戦いたくないし。なあ?」

腕の中の人形達を見下ろし同意を求めると、全員揃ってこくこく頷く。出会って僅か数分とは思えない、完璧なコンビネーションだった。

「えー、私見たいなー」

「母さんっ!?!」

が、意外なところから反論され、俺は人形達と一緒に大袈裟に驚くリアクション。…ヤバい、この子達お持ち帰りしたい。

「アリスちゃんがどのくらい強くなったのか気になるし、蒼衣君だって気になるでしょ？」

「そりゃそうだけど…」

確かに俺自身、アリスの成長は気になっている。が、それとこれとは話が別だ。可愛い妹を傷付けるなど、誰が好き好んでするものか。シスコンと揶揄されようとも、そこだけは譲れない。

「…お？」

と、胸元に抱えている人形達が、不意に俺の服を引っ張った。視線を落とすと何かを決意したかのような顔の人形達が、揃ってこくと頷く。

「…お前らも戦いたいの？なんで？」

味方だと思っていた人形達の反逆に尋ねると、「ご主人様のお兄様の力が見たい」と書かれた紙を差し出して来た。…あーくそ、能力ない方が幸せだったな。

「しょうがないなあ…、わかったよ」

もはや味方はいない以上、いくら反論しても無意味だろう。出来るだけ怪我させないようにするからなと呟きながら、人形達をそつと下ろす。

「じゃあ審判は私がやる」

代わりに大量の人形達を抱えながら、母さんがノリノリで手を上げ

る。…ノリいいなあ、相変わらず。

「悪いけど俺弾幕ごっこのやり方は大雑把なルールくらいしか知らないぞ？」

「でも幻想郷に来たってことは、あるんでしょ？スペルカード」

「一応な…」

アリスの言う通りこっちに来るに当たって、あの人に勧められた為スペルカードは何枚か作ってある。が、勿論使ったことはない為ぶっつけ本番。結構不安である。…と言ってもスペルカードとは元々、こちらがこれから行う攻撃の宣言に用いる為使うのはさほど問題ないのだが。

「ほら、さっさと始めるぞ」

「あれだけ渋ってた癖に随分やる気じゃない」

「決まったことをぐちぐち言っても仕方ないだろ？」

「確かにね」

軽口を交わしつつ俺とアリスを戦闘に、マーガトロイド邸から外に出た。母さんと人形達が見守る中、俺とアリスは十メートル程の距離を置いて対峙する。さて、どうなることやら。

第一話「再会」(後書き)

あくまで二次創作 (ry
人形が自律だっていいじゃない、可愛いんだもの 末期

第二話「再戦」(前書き)

お待たせしました、二話です。…相変わらず短いORZ
ではどーぞー。

第二話「再戦」

「で、ルールは？」

「使用するスペルカードは三枚。ダウンするか全部攻略されたら決着、つてのでどう？」

「妥当だな」

向かい側十メートル程の位置に立つ兄さんの問いに、私は大雑把にルールを設定して答える。一枚じゃ少ないし、最大の十枚では多い。来たばかりで慣れていないこともあるし、三枚くらいが妥当だと考えたのだ。

弾幕ごっこ。

正式名称『スペルカードルール』、別名『命名決闘法』。幻想郷内での揉め事や紛争を解決する為の手段とされ、人間と妖怪が対等に戦う場合や強い妖怪が戦う場合に、必要以上に力を出さないようにする為の決闘ルール。基本的に、あらかじめ技の名前とその意味を体現した技をいくつか考えておき、それらを記したお札を一定枚数所持しておく。全ての攻撃が攻略されれば負けとなり、カード使用時には宣言が必要である為不意打ちは出来ないとされる。決闘の美しさに意味を持たせ、危険な妖怪が相手でも対等に渡り合う為の、幻想郷の絶対の掟。

「じゃあ、開始」

母さんが決闘開始を告げた瞬間、私は両手から伸びる魔法の糸

不可視のそれを繰り人形達を動かし始める。幻想郷の記憶と呼ばれる稗田阿求をして『幻想郷一器用』と言われる私の人形捌きで、一度に五体の人形を操り七色の弾幕を放射状に放つ！！

対し兄さんはへえと感心したように吹き、弾幕の中へと突っ込んで来た。密度こそ薄いものの弾幕は弾幕。喰らえばダメージは免れられない。そこへ無謀にも突進して来た兄の行動に私が首を傾げると

「てい」

やたら軽い掛け声と共に、『何か』が私の眼前を掠めた。瞬間、手の先の重みが消失。何が起きたのか確認すべく周りを見回すと

「おおー、お前ら弾幕出せたのか。すごいすごい」

私の操っていた五体の人形を抱き抱え、感心したように吹く兄さんの姿。人形達も何が起きたのかわからずぼかんとしている。ナメているのかと怒りながら人形に攻撃させようと

操れない。

何故か？理由は至って簡単。私と人形を繋ぐ魔法の糸が、全て断ち切られていたからだ。不可視であるにも関わらず。

兄さんが放った、闇よりなお暗い漆黒の弾丸によって。

弾幕ですらない。たった一発の弾丸で、私と人形を一切傷付けることなく無力化させた。彼が周囲に纏う霧のような闇が、それを雄弁に物語っている。相変わらず　化物みたいな力だ。

「幻想郷風（じょうちやうふう）に言うのなら…、『深遠（しんえん）を統べる程度の能力』、かしらね？」

「上手いこと言うじゃん。今日からそれで行こう」

冷や汗混じりの私のセリフに兄さん　『人智の及ばぬ全ての事象』を操る彼は人形達を離しながら嬉しそうに笑う。自らの一部とも言えるそれに名前をもらえたことを喜ぶように、無邪気に。

「なら…、これはどう!？」

そう焚き付けながら私は、ポケットから手の平サイズのカードを取り出す。三枚限定の今回のルールと言えど、出し惜しみするつもりは更々ない。右手で取り出したそれを掲げ、私は発動を宣言する!!

「呪符「上海人形」っ!！」

戻って来た数いる人形達の中のリーダー格　上海人形が両手の先から紫色のレーザーを放つ。かの永夜異変で私の片腕を務めた、私の人形の代名詞とも言える人形。その攻撃は大気を裂き宙を翔け、兄さん目掛け突っ走る!!
対し兄さんは余裕げに、一枚のカードを取り出す。そこに描かれていたのは一筋の光。蒐集仲間である白黒の魔法使いの代名詞とも言える技の絵が、しかし漆黒に彩られたそれを兄さんは宙に放る。

「黒符「シュツルムシュヴァルツ」」

宣言と同時、兄さんの右手に漆黒の闇が渦巻く。圧縮されたエネルギーの塊の前に突き出した瞬間、極太のレーザーが放たれた。マスタースパークと見紛う程の漆黒の光線はなんの抵抗もなく上海のレ

「ザーを飲み込み、慌てて防御結界を展開した私にぶち当たる。あまりの衝撃に吹き飛ばされそうになるが、結界と後ろから支えてくれた人形達のお陰で辛うじて凌ぎきる。思わず脱力して膝をつきそうになる私に、兄さんがニヤリと笑みを浮かべる。」

「別に強くなつたのは、お前だけじゃないんだぜ？」

上等。

心中でそう呟きながら私も笑みを浮かべ、再度人形達を繰る。兄さんはまだまだ全力じゃない。そしてそれは私も同じ。まだ、終わってない。まだ兄さんと戦える。そんな高揚感に包まれながら、私は人形達を殺到させた。

右の剣、左の弾、正面の槍、上の矢、ラツシユ、ラツシユ、ラツシユ。背後と真下以外の全方向から仕掛けられる怒涛の攻撃を避けながら、蒼衣は表情を歪めていた。

確かにアリスの人形達は弱い。それは紛れも無い事実。だが司令塔アリスが的確に運用することで、その事実を完全に覆っていた。蒼衣が接近すれば槍を突き出して離れさせ、下がり過ぎれば剣で押し戻す。それをカバーするように矢が降り注ぎ、動きを封じようと七色の弾幕がばらまかれる。塵も積もればなんとやら。数を生かした搦め手に、蒼衣は徐々に追い込まれ始めていた。

確かに蒼衣が本気で貫手を放てば、水面に石を落とすようになんの抵抗もなく、人形はその小さな体を貫かれ綿を撒き散らしながら壊れるだろう。だが、彼はそれを是としない。糸はいくらでも再構成出来る上、人形はまだまだ家に大量のストックがある為破壊してもただの徒勞。今は戦っているとはいえ、相手は心を通わせた友。作

り物の人形でも、そこにはアリスの宿した命が確かに在る。ならばそれを壊すのは、人を殺すのとなんら変わらない。蒼衣は戦いにおいて基本的に、相手の攻撃手段を潰し戦闘不能に追い込むというスタイルを取っている。相手の被害を最小限に抑えられるが、こちらの実力が相当上回っていないければ出来ないその芸当。だがそれこそが、蒼衣を蒼衣たらしめている要素^{ファクター}。そしてその為に今潰すべき相手は

アリス
司令塔。

それは五分前、既に結論付けていたこと。だがそれを実行に移せないのは、前述の通りに人形の布陣が完璧過ぎる為。弾幕ごっこではそのルールにおいて、『避けられない攻撃』はあってはならないとされている。この怒涛の攻撃も当然そこに含まれ、僅かな隙は確かに存在する。だが、『隙がない』のだ。避けることは出来る。しかし攻撃に移れるベストのタイミングでの確な妨害が入り、断念せざるを得なくなる。互いをカバーし合うような連携プレイは、弾幕の雨という籠の中に蒼衣という名の小鳥を完璧に封じ込めていた。アリスを倒すには人形が邪魔で、人形を止めるにはアリスを倒さねば。そんな堂々巡りを三百秒も続けているというのが、今の蒼衣の状態だった。

蒼衣は襲い来る攻撃を反射のみでかわしながらしばし思考。自らの手札、相手の戦術、場の流れ、その全てが乱数的に生み出す結果を脳内でシュミレート。相手を無傷で無力化出来てかつ自分の被害も最小限に抑えるならば　あれか。

「深淵」

最も効果的な一手を打つべく、蒼衣は二枚目のカードを取り出す。黒色の渦が描かれたそのカード、書かれた符名は、

「ブラックホール」！！」

蒼衣が宣言した瞬間、彼の右手に闇色の 光が一切存在しない
黒色の渦が形成される。手中にある小さな黒いビー玉 巨大な
質量の込められた物体それに生まれる高圧重力が、周囲に存在するあらゆる物体を吸い込もうと唸りを上げる。

こんな話を聞いたことはないだろうか。『地球の質量をビー玉並に
圧縮すればブラックホールになる』と。重力とは星の中心核に向かつて働くもの。地球に掛かる全ての重力が小さな一点に凝縮され、周囲のものを引き寄せ吸い込む危険な天体となる。蒼衣のスペルカードは、超小規模ながらもブラックホールそれを完全に再現していた。

「っ!？」

「あゝれ〜」

驚愕の表情を浮かべるアリスに対し、追い風を受けるような形になった神綺が楽しそうに叫ぶ。右手を軽く振るうと同時、周囲に張っていた結界を強化。ドーム状のその中に蒼衣とアリスだけが取り残される状態になる。幸い吸引力はそこまで強いものではなく、アリスは木を支えにして辛うじて難を逃れた。

だが、支えのない人形達はそもいかない。慌ててわたわたと宙を掻くも、抵抗虚しく渦へと吸い込まれてしまう。

その瞬間、蒼衣は重力操作で加速しアリス目掛けて駆け出した。人形兵はいなくなつた。補充される前にアリス指揮官を潰さねば。

僅か二歩で十数メートルの距離を詰め、アリスの眼前へと至る蒼衣。右手には暗き闇を纏い、一撃で決めるつもりなのは誰の目にも明らか

かだ。人形のないアリスはただの少女に過ぎない。つまり、王手。蒼衣が自らの勝ちを確信した瞬間、

アリスは、笑った。

「戦操「ドールズウォー」!!!」

その笑みに嫌な予感を感じ取った蒼衣が本能的にブレーキを掛け後退した瞬間、アリスが右手に握ったカードの名前を宣言する。どこからともなく現れた槍を持つ大量の人形達がアリスを中心に高密度の方陣を形成し、彼女を守る騎士のように周囲を回転する。スペルカード発動時ならば人形は補充される。そんな事実を蒼衣が知るはずもない。一瞬でも判断が遅れていれば、蒼衣はドールズウォーの餌食となっていただろう。間一髪だった。

「呪詛「蓬莱人形」!!!」

が、アリスの猛攻は終わらない。周囲を固めていた十二体の人形が蒼衣に断面を向けるような形で円状に整列、さながら観覧車のように回転しながらレーザーを放つ!!!

これにはさすがの蒼衣も驚いたが、何もおかしいことはない。彼女は人形遣い、そして人形の中身は綿。ならば人体では到底出来ないような動きも可能。攻撃後の硬直? そんなものは、彼女が操る人形には存在しないのだ。

七色の人形遣い。

その意味を真に理解した瞬間、蒼衣にレーザーの豪雨が降り注いだ。

着弾する瞬間を見届けた私は、ふうと安堵の溜め息をつく。ドールズウォーの方陣で動きを封じ、そこからレーザーを叩き込む蓬莱人形。最近私が練習していた、必殺の連係だ。ドールズウォーをかわされた時には焦ったが、幸いにも兄さんは体勢を崩してでも回避することを優先した。だからこそその隙を逃さず蓬莱人形を発動したのだが…、

「…やり過ぎたかしら？」

「へえ？あれで全力？」

爆発の余韻である土煙に揺らぎが起きないことから兄さんが伸びたのかと思ひついた言葉は、背後からの答えで会話に昇華された。慌てて振り向いたその先には

「油断大敵」

無傷の兄さんが中指を親指に引つ掛ける 俗に言うデコ

ピンの構えをしていた。

「っ」

「ひゃんっ!？」

緩い掛け声と共に私の額にデコピンが叩き込まれ、それ程痛くはなかったが驚きのあまりしゃがみ込んでしまう。え、なんで？あの状態から避けた？いや、そんな、まさか、

「重力操作出来るの忘れたのか？体勢なんざすぐ立て直せるわ」

兄さんの呆れたような説明に、私は頭をハンマーで叩かれたような
まあ確かにデコピンはされたが 衝撃を受けた。高圧重フラス
クホール力の渦を発生させていた時点で、そのことに気付くべきだった。も
し今の兄のデコピンが弾幕ならば ましてやまだ一枚余裕があ
ったスペルカードを使われていたら 私は大ダメージを受けて
いるし、実戦ならばズタボロだ。あまりにも迂闊過ぎる、なんとも
情けない終わり方だった。

「…まあ、なんだ」

ずーんと落ち込む私を慰め始める人形達 いつの間に出て来た
のかは知らないが を見て、冷や汗混じりに兄さんが膝をつく。
私に視線を合わせてニツコリと笑いかけながら、

「ホント強くなってビックリした。今までよく頑張ったな、偉い
ぞアリス」

私の頭をわしゃわしゃと撫でた。

「…うん」

いつだってそうだった。私は兄さんにいつまで経っても追い付けな
くて。だけど兄さんはそんな私をいつだって認めて、褒めてくれて。
数年ぶりの懐かしい感覚に頬を緩ませ、私は清々しい気分でそれを
自らの敗北を受け入れた。

「…なるほど。深遠、ね」

そして、宙に開いたスキマからその戦いを眺めていた者が二人。風に靡く長い金髪を押さえながら、蒼衣と神綺を呼び寄せた張本人。八雲紫が感心したように呟く。深遠　即ち人智の及ばぬ事象。それを操るといふ新たな強者の出現に、彼女は面白そうに笑みを浮かべた。

「笑ってる場合じゃないでしょ。あいつが例の闇と同じ気配纏って闇を操れる以上、私はあまり信用出来ないわ」

「まあ、それはあなたがまだあの子…、蒼衣のことを知らないからよ」

対し隣でそれを見ていた霊夢は不満げに、蒼衣への不信感を露にした。確かに今幻想郷で起きている異変　生命力を喰らう闇、暫定名称『深遠なる闇』^{ダークマター}。それと同種の力を持っているとなれば、信じられないのも無理はない。

だが、紫だけは　神綺を除けばだが　知っている。蒼衣は絶対に幻想郷へ牙を剥かない。幻想郷から追い出されてしまえば最後、彼は

「魔理沙、ひとつ走り行って三人を呼んで来てちょうだい」

「自分で行けばいいだろ？何の為のスキマだよ」

「あら、こんなところに外の世界で見付けた珍しい茸が」

「オツケー任せろ」

過去回想を頭を振って打ち消しながら、紫が居間でお茶請けを摘ん

でいた少女　霧雨魔理沙に向き直る。黒いワンピースのような魔女装束に白いエプロンのようなものを着け、魔女の三角帽子を被った金髪の少女はけだるげに反論し、自分でやれと片手を振る。が続けて放たれた紫の言葉に残像が見える程の速度で立ち上がり、竹箒を携えながら飛び出した。現金な少女である。…霊夢程ではないが。

「素直でよろしい。霊夢、お茶の用意お願いね」

「あんたの式になった覚えはないんだけどね…」

その様子を見て満足げに頷き、今度は霊夢に指示を出す紫。溜め息混じりに了承しながら、霊夢は台所へと姿を消した。

「…さあ、手伝ってもらおうじゃない。今幻想郷を救えるのは、あなただけなのだから」

それを見届けた紫は鋭い視線で、血の繋がらない妹を助け起こす少年を見遣る。彼女の静かな呟きは誰の耳に届くこともなく、宙へと溶けて行った。

「くひひっ…、好き勝手やってんじゃねえの…」

オレは緩む頬を隠そうともせず、力を使って戦っているあいつを笑う。こんな状況でよくもまあ…、今幻想郷がどうなってるのかわらないからこそか。全てを知っているオレとしては笑いしか出て来ない。

「…そういや、そろそろ最初の種が芽吹く頃か」

意識をあいつから切り替え、オレはある少女のことを思い返す。嫌い嫌われることを疎み、瞳を閉じた哀れな少女。オレの予定通りならば…、おそらく三日以内には『発現』するだろう。そうすれば…、

「はっ、まあいい。精々いいもん寄越せよ？閉じた恋の瞳」

生贄に選ばれた少女の二つ名を呟きながら、オレは暗闇の中目を閉じる。目が覚めた頃にはきつと…、オレも…、

「くひひ…、くひひひひ…、ひやはははははっ！…」

闇の中、オレの声がうるさいくらいに反響する。絶望に落ちるあいつの顔が、ひどく待ち遠しかった。

第二話「再戦」（後書き）

…うん、弾幕描写って難しい。てかどう見てもSTGと言っつより黄昏スタイルの描写だよなこれ（オイ

次回は三人が博麗神社へ行きます。相変わらず投稿日は未定ですサ
ーせんorz

第三話「邂逅」(前書き)

はい、三話です。短い上進まねえ…orz
ではごーぞー。

第三話「邂逅」

マーガトロイド邸、リビング。昼ご飯を食べ終えた蒼衣はソファーにもたれ掛かったまま人形達に埋もれるという、嬉しいんだかどうなんだかよくわからない状態ではーっとしていた。あの戦い

アリスとの弾幕ごっこを終えた蒼衣は神綺や人形を伴いアリスの家に戻った。時間帯はお昼。神綺とアリスが腕に縊りを掛けて作ったパスタを仲良くいただき、二人は今皿洗いの真っ最中だ。蒼衣も男とはいえ、教育係である夢子に仕込まれた為人並み程度には家事も出来る。だが数年間一人暮らしで生活して来たアリスには当然劣るし、彼女や夢子を育てた張本人である神綺に比べれば…、むしろ比べる方が失礼とだけ言っておこう。主に蒼衣の精神的安寧の為に。

魔界を統べる神、神綺。見た目や言動からは全く想像も付かないが、彼女は家事全般が非常に得意だ。普段の抜けっぷりを知っていると信じられないが、料理の最中だけはそれが鳴りを潜め、魔界の料理人もかくやと言わんばかりの辣腕を振るう。魔界は神綺が作ったんだから当然と言えば当然なのだが、何と云うか次元が違う。夢子が初めて食べた時、真面目にほっぺが落ちるとか言っつて心配していたレベルとか。本人にその話を聞くと全力で短剣を投げてるので聞かないが。ちなみにアリスも久々の母親の料理に大層感動していた。

「…お？」

賑やかな親娘　　端から見ると姉妹だが　　の会話をBGMに人形を高い高いをして遊んでいると、チャイムの音が聞こえて来た。来客ならば居候（飯）が出るのはどうかと思うが、かと言っつてわざわざアリスを呼び戻すのも気が引ける。という訳で蒼衣はぞろぞろと人形達を引き連れ玄関に向かった。

「はい、どちらさま？」

心持ち平常時より周囲への警戒を強めながら、蒼衣はゆっくり扉を開ける。が、彼の視界に入ったのは黒い三角形だった。視線をそのまま落としてみると、蒼衣より頭一つ程低い金髪の少女がいた。黒いワンピース風の魔女装束に白いエプロン、右手には竹箒。先程の黒い三角形は、頭に被った魔女の帽子。魔法使い　　蒼衣は素直にそんな印象を少女に抱いた。

「お、あんたがアリスの兄貴か」

そんな蒼衣をよそに少女は確認するように呟き、蒼衣を上から下まで眺め回す。何かを見定めているような少女の視線に、蒼衣も思わず動きを止めて視線を返す。当然だが蒼衣には見ず知らずの今日こちらに来たばかりの為当たり前だが　　少女に品定めされるように見られる趣味も謂れもない。不審げに思った蒼衣が声を掛けようとした瞬間、少女が満足したように腕を組みながら頷く。

「私は霧雨魔理沙、アリスの友人だ。よろしく」

蒼衣に手を差し出しながら少女　　魔理沙はニツコリと邪気のない笑顔を浮かべた。ああと納得した蒼衣も警戒を解き、魔理沙と握手を交わす。

こうして魔理沙は、蒼衣が幻想郷に来てから初めての友人となった。

「で、どうしたのよ突然」

「いやーしかし神綺が来るとはなー。驚いたぜ」

「めっさくつろいでんなお前」

紅茶を淹れながらのアリスの質問を華麗にスルーし、適温のそれを飲みながら母さんにそう投げ掛ける魔理沙。あの後俺がリビングに通した魔法使いの少女は何やら母さんの知り合いだったらしく、いきなり昔話を始めてしまったのだ。聞いた話を総合すると俺が母さんに拾われる前の出来事だった為、自然と俺は孤立し虚しさを紛らわそうと部屋の隅で人形と遊んでいた。それを見兼ねたアリスが仕切り直すように本題を尋ねたのだが、魔理沙は全く聞いちゃいなかった。

「久しぶりだもんね〜。ところで魔理沙ちゃん、昔の女の子みたいな言葉遣いは…」

「うわああああー!!」

^{ゴインク}強引マイウェイを貫いていた魔理沙に母さんが何やら尋ねようとした瞬間、顔を青ざめさせた魔理沙が飛び掛かり慌てて母さんの口を塞ぐ。母さんが知っている過去の魔理沙の言動　　どうやら本人にとっては黒歴史のようだ。

「頼む!!頼むからそれを言うな!!ホントに!!」

「え、なんで？」

涙目になりながら必死に頼む魔理沙に対し、母さんはぼけっと首を傾げる。彼女は純粋な質問のつもりだったのだろっが、魔理沙にと

つては核爆弾並の大ダメージなのだ。…おそらく。天然とは恐ろしい存在である。

「…母さん、何を知ってるのかは知らないけどそのことは言っちゃダメだよ」

「わかった 蒼衣君が言うならそうする」

端から見ていて哀れに思える程動揺している魔理沙を見兼ねて、溜め息混じりに忠告する。よくわかっていない母さんはよくわからないまま頷き、どうにか事なきを得た。…本当に自分の母なのだろうかと肩を竦めるのも無理はない。

「…大丈夫か？」

「ああ…、助かったぜ蒼衣…」

頭を振ってアホな思考を追い出し、ぐったりとソファに座り込む魔理沙に尋ねる。冷や汗がまだ残っているところを見るに、相当焦っていたようだ。逆にそこまでして隠されると気になるのが人間

まあ妖怪なのだが だが、失礼なので自重しておいた。

「…で、結局なんの用？」

いい加減話が進まないことに業を煮やしたのか、ジト目のアリスが魔理沙に問い掛ける。…ちやっかり紅茶を五杯も飲まれているのも一因だろうが。

「ん？ああ、なんか紫がお前ら三人に博麗神社に来て欲しいって。私はその使いつぱしり」

スキマ使えよと呟きながら、六杯目の紅茶に口を付ける魔理沙。遠慮ってものがないのかこいつは。…って、

「え、紫さん？」

「ああ。知り合いなのか？」

ふと口にした知り合いの名前に反応すると、魔理沙はこともなげに頷き尋ね返して来た。八雲紫　幻想郷を管理する守護者にして、最強クラスの妖怪。俺と母さんが幻想郷に来る際協力してくれた、胡散臭いというか妖しげというか、どこか不思議な雰囲気を漂わせた少女。…母さん曰く、話してみると結構気が合うらしいけど。

「まあ一応。俺と母さんが幻想郷来る時に協力してもらったんだ」

「なるほど」

「私達と挨拶したいのかな？」

「さあ？」

そんなことを思い出しながら魔理沙の問いに答え、母さんがぼけつとした表情で零した疑問に投げやりに返す。直接話するのはこれが初めてだし、そんなお偉いさんと会うと思うと多少は緊張する。出来れば

「さて、そろそろ連れてかないとどやされちまう。行こうぜ」

「あ、ああ」

「ええ」

「はい」

思い出したように立ち上がりながら促す魔理沙の声に、思考が遮られた俺は慌てて頷く。魔理沙を先頭にアリスと母さんを伴って、俺はマーガトロイド邸を後にした。

「……ここか。博麗神社ってのは」

「ああ、幻想郷の東の端だな」

「わあ、久しぶり」

十数分後。俺達四人は幻想郷の最東端に来ていた。魔法の森と獣道を抜けた先にある、幻想郷を一望出来る小高い丘。石段を上ると視界に入る鳥居をくぐると、そこそこの大きさがある古びた神社

博麗神社があった。異変解決屋が住む神社だというのに立地が悪く、参拝客は見事にゼロ。魔界の神社　母さんの像が祭られている神社でも多少は客が来るというのに、これはいかかなもなだろうか。あのぼけっとした神様に負けるって色々と虚しい気がするのだが……、閑話休題。

本殿へ至る石畳の両脇には桜が生えていて、風に舞う花びらが幻想的な光景を生み出していた。道中の魔理沙の言によれば博麗神社は、幻想郷で一番の桜の名所らしい。確かにこの光景を見れば、その言葉にも頷ける。ホント、春でよかった。アリスも一年ぶりの桜に魅入っており、母さんも久々に訪れるらしい神社にはしゃいでいた。

…子供かい。

「…来たわね」

と、境内に座っていた少女が呟きと共に身を起こし、眼前まで歩いて来て俺を品定めするように眺め回す。脇の開いた奇妙な巫女服を着て、頭に赤いリボンを巻いた少女。異変解決屋として面倒の種は摘みたいのだろう。母さんはともかく俺は彼女と面識がないから、見定めていると言ったところか。

「初めまして。博麗神社の巫女、博麗霊夢よ」

「魔界神の養子、蒼衣だ。よろしく」

満足したように二、三回頷いた彼女　博麗霊夢は、自己紹介と共に左手を差し出す。礼儀として名乗り返しながら、左手で握手。魔界神　魔界の全てを作った母さんは、言うなれば魔界の全存在の母。なのにわざわざ養子と名乗ったのは理由があるからだ。そのワードに反応しないということは、あらかじめ話を聞いていないことか。…単に気にしていないというだけの可能性も捨て切れないが。

「久しぶりね、神綺。三日ぶりかしら」

「うん　紫ちゃんも元気そうだね」

「ちゃん付けはさすがに…」

霊夢の横に空間の裂け目　スキマを開けて現れた、肩口の開いた紫のワンピースと腰まで伸ばした長い金髪が特徴的な少女。こちら

らに来る際に世話になった幻想郷の管理者　　八雲紫も親しげに
母さんに話しかける。相手が女性なら誰彼構わずちゃん付けする母
さんには、さすがの彼女も頭を抱えるようだ。

「それで紫ちゃん、一体どうしたの？」

「引越しの挨拶…、って訳じゃなさそうですね？」

一通りの挨拶を終え、俺と母さんは紫さんに向き直る。霊夢同様険
しい表情をした彼女の用は、間違っても引越しの挨拶ではなさそ
うだ。…ドツキリの可能性を除けば、だが。

「…あなた達二人、正確には蒼衣。あなたにはこちらに来てもらっ
た理由があるの」

「…俺、ですか？」

やがて口を開いた彼女が口にした母音三つの連なり、それは俺のこ
とを示していた。おうむ返しに聞き返した俺に、紫さんは数枚の写
真を渡して来た。アリスや母さん共々覗き込んでみると

「ここ最近幻想郷を騒がせている、生命力を喰らう闇　　あなた
なら言わずともわかるでしょう？」

そこに映っていたのは、黒い人型　　とても形容すべき何かだっ
た。全身を昏い闇に覆われて、生命力を吸われている人間の姿が何
枚も。そしてその闇に、俺は見覚えがある。いや、あり過ぎる。

何故ならその闇は俺が操る闇と同じ　　深遠の闇。アリスも先程
シユツルムシユヴァルツでその力を思い知ったばかりだ。それが、
何故…！？

「そんな、兄さんがそんなことする訳ない!!」

「紫ちゃん…、どういいうつもり？」

呆然とする俺を庇うように前に出たアリスが否定し、母さんも普段の温厚なオーラを消し去り鋭い視線で紫さんを射抜く。過保護な母さんはもちろん、アリスが真つ先に味方してくれたことが嬉しかった。どう見ても俺の仕業にしか見えない状況なのに、それでも信じてくれる二人が嬉しかった。

「もちろん私は、あなたがやったとは思ってないわ。あなたは今まで旧世界にいた。そして旧世界から幻想郷に干渉することは不可能。それに神綺の証言もある。アリバイとしては十分過ぎるくらいに分だわ」

落ち着きなさいと宥めながら、紫さんも当然と言わんばかりに俺のアリバイを立証する。確かに旧世界は強力な結界で囲まれており、紫さんの力がないと世界を繋ぐ道を作ることには出来ない。確かに俺や母さんの能力なら『破壊』は出来るが、その時点で紫さんが結界の異変に気付くはず。第一そこまでのリスクを犯してこんなことをする理由もない。白なのに黒。そんな矛盾した状況に、その場の全員が頭を抱える。

「でもこの闇　仮に『深遠なる闇』^{ダークマター}と名付けたのだけど、私の力でも干渉出来ないの。このままでは遅かれ早かれ死んでしまう。彼らを救う為にあなたの力　『これと全く同質の闇を操れる』
あなたの能力が必要なの」

続けて放たれた彼女の言葉に、俺達は再度絶句する。『境界を操る

程度の能力』　万物の破壊や創造が思うがままと言う八雲紫の能力が通じない。それだけで事の異常さがわかる。だから駄目元で同じ力を持つ俺を呼んだ…、ということか。

「わかりました、協力します」

「へえ？ 案外素直に承諾したわね。証拠隠滅？」

あまりの異常事態に利用されるような形に対して憤慨する気も起きず、俺は間髪入れず頷いた。霊夢が皮肉げに言葉を放るが、確かにそう捉えた方が幾分かわかりやすいだろうし仕方ない。だが、

「少なくとも今これをなんとか出来るのは俺しかいないんだろ？ 赤の他人とはいえ死にかけてる奴を見捨てる程非情に育てられた訳じゃない」

それに疑われるのも嫌だし、と笑いながら付け足すも、霊夢の表情は堅いまま。そのまま正面から見つめ合う形になるが、やがて霊夢が根負けしたように溜め息をついた。

「…いいわ、信用してあげる」

「あら、さっきまであんなに疑ってたのに」

「目を見れば大体わかるわよ。少なくともこいつは信用出来るって私の勘も言ってるし」

「よかったあ…」

「霊夢の勘はよく当たるんだよなあ」

「私自慢の息子です、えっへん」

信用するという言葉に茶々を入れた紫の頭を霊夢が軽く叩き、安堵の溜め息をつくアリスを安心させようと魔理沙が頷く。そして母さんは何故か胸を張っていた。…十分足らずでかなり賑やかになっただなあ。

「で、実際解決出来る見込みはどの程度？」

「実際に見てみないと断言は出来ないけど、多分大丈夫。生命に絡む術式だから慎重にやらないとだけど、一人に付き大体三十分もあればなんとかなる」

「なら早速人里に…」

霊夢の問いに写真を眺め、しばし思考の後そう結論付ける。俺は夢子から魔界屈指の英才教育を受けているし、頭の回転も遅くはない。解析に手間取るだろうが同じ力が使われているならば、きつと解除出来るはず。自惚れでも過信でもない、客観的に考えた結果だ。それに安堵の息をついた紫さんが促そうとした瞬間

ぞくぞくっ！！

「紫さん！！幻想郷の下から俺と同質の巨大反応あり！！」

戦闘時の緊張状態でもないのに、その反応は俺の感覚網に引っ掛かった。それだけの痛烈なプレッシャーが自然と俺の口を動かし、言われて気付いた紫さん達が愕然とする。

「まさか…、地霊殿!？」

「よりによって面倒な場所に…!!！」

「どつちにしろ行かないとな!！」

「紫ちゃん!！」

「ええ!！」

口々に呟く三人を尻目に、母さんに促された紫さんがスキマを開く。
この先がその場所　　地霊殿に繋がっているのだろう。

「先に行くわ!！」

「遅れてたまるかよ!！」

威勢よく叫んだ霊夢と魔理沙が真っ先に飛び込み、アリスと母さんも続く。残ったのは、俺と紫さんの二人だけ。

「突然の連続で申し訳ないけれど…、お願い出来るかしら？」

「今更ですよ。さつき答えたじゃないですか」

それにと遮りながら、頭を下げる紫さんにはつきりと告げる。

「妹をそんな異変のど真ん中に放って置く訳にもいかないでしょう
アリス
?」

あまりにもあんまりな、身も蓋も無い本音を。

「…大事にしてるのね、妹さんのこと」

「兄ですから」

苦笑しながら呟く紫さんに、言葉を返ししながら苦笑い。まあ世界の為って言うよりは、こっちの方がお似合いだと思う。

「じゃ、行きましようか」

「ええ」

表情を引き締めながらそう言うと、紫さんも鋭い視線と頷きを返す。ゆっくりと、しかし確かな足取りで、俺達はスキマに飛び込んだ。

第三話「邂逅」(後書き)

なんかg d g d感が否めない。スキマ時間使って書いてるから仕方ないと言えば仕方ないのかもしれないけどw

第四話「地底」(前書き)

はい、四話です。進まないのは相変わらず。
誰か革命して、主に俺の能力とか脳を(イミフ
ではどーぞー)。

第四話「地底」

目、目、目。暗黒の世界とでも言うべき空間を、無数の目が覆っていた。虚ろな視線達に晒されながら、俺は闇の中を落ちて行く。

紫さんが広げたスキマと呼ばれる空間に飛び込んで、一体どれくらいの時間が経ったのだろう。数秒？数分？数時間？或いは数日か数年？そんな愚にも付かないことを考える程、この空間は異常だった。前後左右、上下や時間といった感覚がまるで感じられない。無重力の何も無い宇宙を漂っているような、そんな感覚。だが不思議と不安はなく、母の胎内をたゆたっているような感覚だった。

と、下に光り輝く一筋の裂け目。抗う術のない俺は、真っ直ぐとそこへ落ちて行き

「っと」

地面から五メートル程の高さに開いた裂け目から落下し、体勢を整えつつ身軽に着地。ゆっくりと周りを見回すと、霊夢や魔理沙、アリスに母さん、紫さんも揃っていた。五人が見つめる先にあったのは、巨大な西洋風のお屋敷だった。

「地霊殿…、か」

「嫌われ者の妖怪達が暮らす、幻想郷の地底にある旧都。その奥深くにあるのが旧地獄。灼熱地獄跡などの管理を任されている妖怪の住家、地霊殿よ」

ボソッと呟くような俺の言葉に、紫さんが短く簡潔に説明する。嫌われ者という言葉が気になったが、今は反応の元を探す方が先だ。後でアリスにでも聞けばいい。

「一応私達は旧都を見回って来るわ」

「弱み握られないように気を付けるよ？」

「何かあつたら呼んでちょうだい。基本的にすぐ行くから」

周囲を油断なく見回していた霊夢がふわりと浮き上がりながら今後の行動を告げ、冗談めかしたよくわからない言葉と共に魔理沙も箒に跨がり宙へ舞う。紫さんもスキマを多重展開し、サッカーボール大の眼球のような式を飛ばしつつ姿を消した。残ったのは俺、アリス、母さんの三人。

「…じゃ、行きますか」

「ええ」

「うん」

確認するような俺の言葉に二人は頷き、気負った様子も見せず歩き始める。心持ち気を引き締めながら、俺達は地霊殿の敷地へ足を踏み入れた。

地霊殿内、とある広間。ゴスロリ風の黒い服を着た猫耳の少女にそこへと通された蒼衣達三人は、ソファーに座り主の入室を待っていた。見た目通り中も西洋風の作りで、ステンドグラスやシャンデリアなどが飾られていた。だが人の気配はほとんどなく、動物達の

おそらくはペットだろう　　気配や視線があちこちから三人

に集まっている。猫屋敷なのかとアホなことを考えながら時間を潰している、やがて一人の少女が入って来た。

「初めまして。地霊殿の主、古明地さとりです」

ゴスロリ風にデザインされた水色のシャツと薄いピンクのスカート、ピンクのショートヘアにカチューシャを付けた、十歳程度の少女。そこまではまだいい。が、胸元に奇妙なものが付いていた。

赤い目　そこから伸びたコードのようなものがカチューシャや袖、スカートに伸び先端にハートマークを形作っている。アクセサリーにしては変わった趣味だなあと、普通ならそう考えるだろう。だが、蒼衣は違った。この館の雰囲気と相俟ってさとりがとても幻想的な、神聖な存在に思えたのだ。名のある芸術家が描いた絵画を見た時のような、しかしそれ以上の感銘を蒼衣は受けていた。

「アリス・マーガトロイドよ。久しぶりね」

「神綺です。よろしくね、さとりちゃん」

「……………？あの…」

「…あ、ゴメン。蒼衣です」

アリスと神綺が応える中、蒼衣はぼーっとしたまま。どうかしたのかと心配そうに尋ねるさとの声に、あまりにも可愛かったんで見惚れてましたとは言えず蒼衣は慌てて頭を下げる。…アリスといい西洋風に弱いのだろうか、なんて思考が脳裏を掠めた。

「かわつ…！？」

「…兄さん、何か変なこと考えた？」

「…へ？なんで？」

が、さとりは急に顔を赤くし俯きながら両の指先をつんつん。唯一彼女の事情を知っているアリスが兄にジト目を向けるも、凶星を突かれた蒼衣は冷や汗混じりに視線を逸らす。

「…さとりはその名の通り覚り。心を読む能力を持つてるのよ」

「……………え」

アリスが僅かに逡巡してから放ったその言葉に、蒼衣の顔から血の気が引く。恐る恐る視線を向けるとさとりと目が合い、彼女は顔から煙を出しながら縮こまる。…さっきの可愛い云々の思考を読まれたのだと気付いた蒼衣は、全力で頭を下げた。

「ご、ゴメン。そんなこと知らなくて…」

「あ、いえ、こちらこそ…」

謝罪と共に頭を下げる蒼衣を遮り、恐縮したように頭を下げ返すさとり。いやいや、いえいえ、と尚も互いに頭を下げ合う二人を見て、コントかとアリスはツツコミを入れたくなった。無粋なのでしなかったが。

「しかし…、心を読む、ね…」

やがて謝罪合戦が静まり、蒼衣が呟いた言葉にさとりは身を強張らせた。心を読む。人の心を踏みにじる忌み嫌われた力。それと対面

した者の反応は、ふざけるなと憤慨するか愛想笑いでごまかすかの二つだけ。今回はどっちだろうと思ったさとりの耳に届いたのは、

「話す手間省けて楽しじゃん」

あまりにも緊張感のない、本心からの笑いだった。

「に、兄さん…」

「でも伝えづらいこととかってあるだろ？そういう時ってありがたいと思うよ、俺は」

呆れたようにずっとこけるアリスとぽかんとするさとりをよそに、蒼衣は笑みと共にそう答える。今までとは違う、しかし温かなその言葉にさとりの思考はフリーズしていた。

「まあ前置きはこのくらいにして本題に移りたいんだけど、いいか？」

「……………あ、はい」

そんなさとりの心情を知る由もない蒼衣が話題を切り替え、呆然としていたさとりも頷きを返した。蒼衣の許可を得て記憶を読み、大まかな事態を把握して行く。

「まさか…、地上でそんなことが…」

「地底ではなかったの？」

「はい。少なくとも私の耳には入って来てません」

「地上だけか…。地底には手を出せないのか、出さないのかが問題だな…」

地上の異変に息を呑むさとりに神綺が当然の疑問を口にし、返された答えに蒼衣が口元に手を当て考え込む。この異変が人為的なものかどうかはさておき、前者と後者は似ているようで全然違う。前者なら感染者を治したら地底に避難させれば済む話だが、後者の場合遅かれ早かれ地底にも被害が及ぶ。後手に回っている今の状況では、いずれ蒼衣にも限界が来てしまう。元凶を叩かなければ、異変というものは終わらないのだ。

「それで、さつき地霊殿周辺から特大の気配を感知したから来てみたんだけど…。兄さん？」

「気配が消えてるな…。そいつと直接会えば特定出来るけど、現段階では無理だな」

続けてアリスが地霊殿じちいへ来た理由を述べ、考え込む兄に状況を尋ねる。が、蒼衣の答えは芳しくなく、向こうの出方待ちというものだった。

「…わかりました。微力ながら私もお手伝いします」

「いいのか？」

「放って置く訳にもいかないでしょう。明日は我が身、とも言える訳ですし」

話を聞き終えたさとりは数秒思考し、協力を申し出た。確認するよ

うに尋ねた蒼衣に、冗談めかして笑いながら答える。家族とも言えるペット達を案じているのだろう、さとりは優しい笑みを浮かべていた。

「ありがとう。こっちとしても助かるよ」

「ただ…、一つお願いが…。私とあと三人、感染しているかどうか調べて欲しいのです」

「ん、オツケー。元々そのつもりだったし」

礼を述べる蒼衣に対し、やや申し訳なさそうに切り出すさとり。その願いを快諾した蒼衣は立ち上がりながら右手に闇の光を纏い、さとの頭へと調べるように翳す。

「…ん、さとりは問題なし。よかったな」

「そうですか…。お空、お燐、いらっしやい」

「「はい」」

反応がないことを確認してそう告げた蒼衣の言葉に安堵の溜め息をつき、さとりは出入口に向かって呼び掛ける。返事と共に現れたのは、緑色のミニスカートに同色で縁取りがされた白いシャツ、胸元に大きな目を持ち背中に鳥の翼を生やした、黒い髪の少女と、先程蒼衣達を案内した黒いゴスロリに猫耳と尻尾を生やした赤い髪の少女だった。

「私霊鳥路空！！核融合出来るよ！！よろしく！！」

「あたいは火焰猫燐。気軽に燐って呼んでくれていいよ、お兄さん」

「お空とお燐。さっき言っていた三人の内の二人で、ペットの世話や灼熱地獄の管理を担当しています」

開口一番に黒髪の方　空が個性的な自己紹介をかまし、続けて赤髪の方　燐が笑みと共に普通に自己紹介。最後にさとりが二人の情報に付いて簡単に纏める。見たところ空は地獄烏、燐は火車猫。話すことの出来ない動物形態時にさとりと出会い、懐かれたのだらうということは想像に難くなかった。嫌われ者と言っていたが、全員が全員否定的ではないと蒼衣は思う。神綺などは特に。

「…ん、空と燐も大丈夫。問題なしだ」

「ホント!?!」

「よかったあ…」

左手にも闇を纏いながら二人に翳し、異常なしと告げる蒼衣。先程の話を聞いていたのか空が嬉しそうな声を上げ、燐も安堵の溜め息さとりも安心したように表情を緩めながら、ぺこりと頭を下げた。

「ありがとうございます、蒼衣さん」

「いって。で、三人目は?」

「それは…」

礼を述べるさとりに対し、気楽に答えながら質問を投げ掛ける蒼衣。

さとり、お空、お燐。さとりの言っていた三人に彼女自身は含まれない。ならば最後の一人はどこにいるのか。そう尋ねた蒼衣にさとりが答えようとすると同時、一匹の猫が駆けて来た。ひらりと身軽に飛び上がった猫はさとりの肩に乗り、乗られた張本人は精神を集中させ心を読む。

「自室ですか…、ありがとうございます。蒼衣さん、アリスさん、神綺さん、こちらです。お燐とお空は仕事に戻って」

「はい」

さとりが礼を述べながら頭を撫でると猫はとてと駆けて行き、ペット二人を仕事に戻しながら蒼衣達を引き連れ歩き出す。かなり大きな屋敷の為、カーペットの敷かれた廊下は四人並んで歩いてもおスペースに余裕があった。

「…もしかして三人目って、あの子？」

「ええ、妹の古明地こいしです」

「え、妹さん？」

「はい。私と同じ覚りなのですが…、第三の目を閉じて心を読む力をなくし、無意識を操る能力を得た私の妹です」

心当たり、というより消去法で弾き出した三人目のことについてアリスが尋ねると、大した逡巡もせず頷くさとり。初耳である神綺が蒼衣同様首を傾げると、さとりは悲しみと怒りがごちゃ混ぜになったような声で答えた。そのことについて蒼衣が聞こうとするも夕イミング悪く、さとりが目的の部屋と思しき扉の前で立ち止まる。

「こいし、入るわよ」

ノックと共に扉を開け、部屋に入るさと。続いて三人も入るが、蒼衣はその光景に言葉を失う。

部屋の中は広めの洋室で、空っぽの本棚と使われた形跡のない机が置かれている。唯一生活感の感じられるベッドの周辺だけは僅かに整っているが、それにしても部屋を使われていない日数の方が多そうだ。

空虚。そんな言葉が相応しい、それだけしかない、空虚で埋め尽くされた部屋だった。

そんな虚ろな部屋の中に、一人の少女がいた。ゴスロリ風にデザインされた黄色のシャツに緑色のスカート。碧銀の髪にエメラルドのような瞳、黄色のリボンが巻かれた黒いハットを被っている。胸には姉と同じ、しかし色は紫でコードの少ない第三の目。フリルがふんだんにあしらわれた服装と可愛い容姿が見事にマッチしていて、姉同様かなりの美少女だった。可愛いなと素直に蒼衣がそう思った瞬間

どくんっ!!

「…お姉ちゃん?どうしたの?」

「…あ、ううん。地上から私の友人が来てくれたから、せっかくだし会って欲しいな、って」

「ふうん…」

そろそろ知らない人を引き連れて現れた姉に不審げな声を投げ掛けるが、さとの説明にとりあえず納得したように頷くこいし。姉

と違って心を読めない彼女には、真偽を確認する術などないのだから。

「初めまして。さとの知り合いの蒼衣。よろしく」

「古明地こいし。よろしく、蒼衣」

蒼衣もこいしの前に出て自己紹介と共に手を差し出す。案外素直に応えてくれたこいしの手を握りつつ、それを確認した蒼衣は見えないように歯噛みした。

「ちょっと、どういうこと？なんであんな嘘を…」

「こいしちゃんが当たりだった、…ってことかな？」

「ああ、最悪なことに大当たり。感染者だ。とりあえずさとりにこまかしてもらったけど…」

と、アリスが念話でさとの嘘　蒼衣達が知り合いだと言ったことについて言及する。蒼衣がさとりに一瞬目配せしたのを、アリスはしっかりと見ていたのだ。混ざって来た神綺の言葉に答えながら、蒼衣は頭を掻きつつ現状と問題を纏めて行く。

「問題はまだ本人の体に発現していないこと。触れてみて少しわかったけど深遠なる闇は^{ダークマター}まだ生命力に侵食していない。体が黒い闇に覆われてないのがその証拠だ」

「…じゃあ、どうするの？」

「発現していない以上手こっちからアクションを起こして暴発さ

れたら堪らない。なにもかもが初めてだから…、しばらく様子見するのが妥当だと思う。母さんは？』

『出来れば悟られない内に片付けたいけど…、経験不足な今の状況じゃ難しいもんね。私もそれがいいと思う』

写真で見せられた人間達はみんな黒い闇に体を覆われていたが、こいしにはそれがなかった。握手した際全身を隈無くスキャンしたが、まだ深遠なる闇は目覚めていない。事を急いでこいしに万が一のことが起きるのも避けたいし、今は情報が少な過ぎる。とりあえず様子見、ということで蒼衣と神綺の意見は一致した。

「じゃあ私は蒼衣さん達を案内してくるから」

「ん、わかった」

一方こいしと会話して間を繋いでいたさとりも話を切り上げ、手を振って退出する。蒼衣達もそれに続き、こいしの部屋を後にした。

第四話「地底」(後書き)

うーん、短いw

次々話辺りで戦闘かなーと考えてたり。

第五話「発現」(前書き)

はい、五話です。割かし急展開です(え
そして何より中二加速します。
ではどーぞー。

第五話「発現」

「わぁ……」

旧都の中心を走る、旧地獄街道。提灯や飾り付けがなされた大街道は妖怪が多く、かなりの賑わいを見せていた。祭り、そう表現するのが一番正しいだろうか。まあ、さとり曰く地底は毎日こんな感じらしいのだが。

「こいしはここ初めてなのか？」

「うん。いつも無意識にふらついてるから、意識してここに来たのはこれが初めてだね」

「そっか」

そんな様子を見て感嘆の吐息を漏らしたこいしに問い掛けてみるも、返って来たのはそんな答え。彼女は無意識に身を任せ幻想郷中をふらふらして過ごしているらしく、地霊殿にいることはあまりないそうだ。それならこいしに深遠なる闇ダークマターが感染していたのも頷ける。あゝの意味当然と言えば当然だ。まあ、早めに見付けられたのは幸いだっただ。

「じゃ、適当に回ろっか」

「ああ」

先に歩き始めたこいしの言葉に頷いて、俺は後を追いつけながら記憶を漁った。事の始まりは三日前、こいしの部屋を出て紫さん達と

客間に集まった時まで遡る

「で、様子見はいいけど具体的にどうすんの？」

旧都の見回りを空振りに終わらせ ある意味当然か 地霊

殿に戻って来た霊夢がソファーに座りながら尋ねて来る。合流した時点で事のあらましは既に説明した為、七人全員がこいしの感染を知っていることになる。さとの判断でこいしは当然として、空や隣にも黙っておくことにした。変に知らせて不安を煽るのは避けたいし、本人に知られギクシャクするのも御免被りたい。そんな心情からか、その意見は満場一致で可決された。

「とりあえず、俺達三人で地霊殿に泊めてもらうのが一番早いと思う」

「さとりちゃんのお友達って思われてるから、お泊りしてても不自然じゃないね」

「私や霊夢達までいると勘付かれる可能性があるし、確かにそれがベストだな」

「私達は別の場所で、有事に備えて待機って訳ね」

「最悪私達が行動出来なくなった場合も鑑みると、それがよさそうね」

俺の述べた意見に母さんがぼんと手を打ち、魔理沙もなるほどと頷く。半分に分けたもう一つの意図を察してくれたのか、紫さんとア

リスも納得したように眩きを漏らした。今まで妖怪に感染した例はなく、しかも未だ発現していない。何が起こつても不思議ではない以上、全滅は絶対に避けなければならない。それに下手に人数を増やしても、そっちに感染してしまえば元の木阿弥。ミイラ取りがミイラになってしまう。

「で、なるべくこいしと一緒に過ごして目を離さないようにする。下手に手を出せない以上、現状ではこれしかない」

「幸い部屋は余っているので問題ありません。こいしが動いたらすぐわかるようペットにも見張ってもらいましょう」

全員納得したのを見届けた俺は、ちよつと情けない今後の方針を告げる。慎重過ぎるかもしれないが、最悪こいしの命に関わりかねないのだから迂闊な行動は避けたい。さとりも俺達の宿泊を快諾し、無意識にふらつく彼女への警戒を強めるて約束してくれた。現段階ではこれが限界か…。

「じゃあ私達は一旦地上に戻るわ。動きがあつたらすぐに知らせて」

「ええ、人形を通じてすぐに」

「知りさえすれば後はスキマですぐ来れるからな」

話の折りもついたらしと霊夢が立ち上がりながら帰宅を告げ、連絡用の人形を渡しながらアリスも頷く。魔理沙も立ち上がりながらそう眩き、ニヤニヤと紫さんに視線を移す。…確かに便利だけどな、あれ。

「じゃ、会議終了。解散」

そして俺のその一言と共に、七人はそれぞれの行動に移った。こいしを、引いては幻想郷を救う為に。

「二人で出掛けてみたら？」

時間は流れ同居開始から三日目の十一時。こいしと俺専用上海

アリスが緊急時や通信用にとくれた人形を交えてババヌキをしていた俺の元に来たさとりが唐突にそう提案した。地霊殿に住み始めてから早速行動を起こした俺は、こいしの部屋へ突撃。話題を振ればきちんと返してくれるし、こいしも素直だったので案外あっさり、そこそこに仲良くなることが出来た。今となつては二人と一体で遊ぶのがデフォになり、昨日はUNOで深夜まで盛り上がつてさとりと怒られた。地下だから外が暗いままな為、時間の経過がわからなかったというのもあるが。閑話休題。

「え、どこに？」

「旧都はどうですか？あそこはいつも活気があつて賑やかですし、たまには外で遊ぶのも悪くないと思いますよ」

「んー、確かにカードゲームはあらかたやっちゃったしねー」

上海共々首を傾げながら尋ねるとさとりはそんな風に答え、こいしも上海からカードを引いて上がりながらそう呟く。確かに三日間ずっとカードゲームしかしていない為、徐々にゲームのレパートリーが少なくなっているのだ。現にババヌキなんて原点回帰までしちゃつてるし。

「ん、じゃあ行ってみるか」

「そうだねー」

上海から最後の一枚を引いて上がりつつの言葉に、こいしも立ち上がりながら頷く。ビリになったシヨックで固まった上海を肩に乗せ、俺達は旧都へと繰り出した。

「…我ながらよくやるよ」

回想を終え現在の時間軸に戻り、俺は一人苦笑い。命が懸かっているとはいえ、つい先日まで見ず知らずだった少女の為にここまで真面目になれるとは。案外お節介なのかもなと再度苦笑しながら、やや遅れていた歩調を戻しこいしの隣に並ぶ。

咎められるかと思っただが気付いていなかったのか、こいしは物珍しそうにキョロキョロしている。通過することはあっても、きちんと見るのは初めてらしいから当然か。現に魔界暮らしの俺もさつきから視線が泳ぎそうになるし、気を取り直した上海も同様だ。

「そろそろお昼か…。なんか食べる？」

「うーん…、どこで食べよっか？」

「いや、地底初めての俺に聞かれても…」

「私もあんまり知らないからなあ…」

時間は十二時。そろそろお腹が空く頃合いだが、そこは初めての土地を彷徨う男女二人。当然飲食店の場所なんて知らないし、万が一ハズレだったりしたら最悪だ。どうしたものかと考え込んでいると

「お？あんたは確か古明地の…」

「あ、鬼さん」

「他人行儀だねえ。勇儀で構わないと言っただらう？」

通行人の一人が何かに気付いたように、俺達の方に寄って来た。どうやらこいしと知り合いらしく、軽く二、三言交わすと俺の方に向き直る。体操服のようにも見える上着に青いスカート、右手には酒の入った赤い杯。腰まで届く金髪に、額から生えた赤い角。こいしの言っていた鬼という言葉を、正に体言したような少女。姐御という表現がよく似合う人だった。

「そつちのあんたは初めましてだね。私は星熊勇儀。怪力乱神を持つ鬼さ」

「初めて、蒼衣です。俗に言う一人一種族妖怪ですね」

彼女　　勇儀さんが自己紹介と共に差し出した手に応え、俺も当たり障りのない　　こいしがいる以上下手に魔界云々を言っただけなら面倒だ　　自己紹介。間違ったことは言っていないしセーフ。

「へえ？ってことは強いんだろ？一つ手合わせしてみないか？」

「いえ、生憎今日は連れがいますから。放つといたらさとりに怒られますよ」

「なるほど、そりゃ違くない」

一人一種族　鬼や天狗、吸血鬼などの種族を持たない妖怪を指し、俗に紫のような強者などを表す言葉。それを使用した俺に勇儀がニヤリと笑いながら勝負を持ち掛けてくるが　強い者を見るのと力比べしたくなる鬼らしい性格故か　消耗を抑える意味もあるが無益な戦いはあまりしたくないし、こいしから目を離す訳にもいかない。まあせっかくのお出かけを棒に振るのも嫌だしと答える　と、勇儀は納得したように苦笑する。まあ機会があればそのうち、とお茶を濁しておいた。

「勇儀さん、こちら辺にオススメや行きつけの飲食店はありますか？地底は初めてなんであまり知らなくて…」

「ふむ、まあ心当たりがないこともない。いいよ、ついて来な」

現状を打破する為ふと尋ねてみると、勇儀さんはあっさりと頷きながら踵を返す。駄目元の思い付きだったのだが、どうやらそう捨てたもんでもなさそうだ。こいしとこっそりしながら、俺達は勇儀さんの後を追った。

この先に、地獄が待ち受けているとも知らずに。…旧地獄じやんとか言っちゃダメ。

「あはははは！！ほら、蒼衣も飲め！！」

「いや、だから俺酒はちょっと…」

「私の酒が飲めないって？」

「酒以外なら…」

「なんだ、つれない奴だな」

隣に座った勇儀さんの誘いを断り続けながら、反対隣のこいしと上海に視線を遣る。こいしは我関せずとばかりにラーメンを啜り、上海はオロオロしながらこいしと俺の顔を見比べている。味方は上海だけという絶望的な状況に歯噛みしながら、俺は自分の迂闊さを呪った。

鬼は無類の酒好き　そんな初歩的な知識さえ忘れていた。別に飲めない訳ではない。まだ二十にも満たない俺だが外の世界はともかく幻想郷や魔界にそんな法律はない。ただアルコールが入った状態でもしものことが起きたら最悪だ。悪酔いはしないタイプだが、それでもリスクは少しでも減らさなければならぬ。その結果、居酒屋に入った瞬間飲み始めた勇儀さんはやたらと酒を勧めて来るし、とぼつちりを恐れたこいしはずっとだんまり。明らかに人選ミスだった。溜め息混じりに口へ運んだラーメンが美味しかったのが不幸中の幸いか。

「で？お前さん達付き合ってたんの？」

「「ぶつ！？」」

ふいにおとなしくなったと思ったら、そんな話題を投げ掛けて来る勇儀さん。不意打ち気味なせいか俺はスープが器官に入ってむせ返

り、こいしも冷水の入ったグラスを置き口元を押さえて咳込む。なんつー下世話な話題を…！！…動揺する俺達も俺達だけど。

「いや、会ってまだ三日ですしそんなんじゃないです」

「またまたー。今だってデートしてたじゃないか」

「いやだから…」

やりにくい。これだから酔っ払いは質が悪い。これ程絡んで来るのなら、酔ってないとしても回ってはいるだろう。…ホント、この人に頼った昔の自分を殴りたい。後の祭りだが。さりげなく紙ナプキンを持って来てくれた上海の優しさが身に沁みる…。こいしの方は後が怖いので見ないことにした。

「あはははは！青春してるなあ…！」

「いやだから話を聞けよこの鬼」

魔理沙以上にマイウェイを突っ走る勇儀さんに思わずタメで突っ込みながら、俺は頭を掻きむしった。その後勇儀さんと別れるまで、散々な目に遭ったのは言うまでもない。

「なんかドツと疲れたね…」

「そうだな…」

どうにか居酒屋から離脱した頃には、俺もこいしもどんよりとした

オーラを纏っていた。勇儀さんとの会話でこっそり気力を持って行かれた為、自然と足は地霊殿の方へと向かっていた。デートなんて言われて気恥ずかしかったのもあるが、これ以上疲れるようなことはしたくないというのが本音。さとりもまさかこんな結末になるとは思っていなかっただろう。

「……………あ」

と、不意にこいしが足を止めた。視線の先には小物やアクセサリーが並んだ露店、正確にはその一角にある水色のハート型ネックレスがあった。…そっぴやさととりもこいしも、ハート好きだったな。

「気に入ったのか？」

「…ううん、別に」

一応声を掛けてみるも、こいしは素っ気なくそう答える。が、足を動かそうとはしないし、視線はネックレスへとちらちら。…素直じゃないなあ。まるでどこかの人形遣いの妹みたいだ。

「ちょっと待ってて」

一言だけ残した俺は間の抜けた声を上げるこいしをよそに、露店の主人に声を掛ける。言い値の数十銭を支払い終え、こいしの眼前へと戻る。状況が飲み込めていないのかぼかんとした表情のこいしに苦笑しながら、右手に買ったばかりのネックレスを握らせた。

「……………え？」

「いや、このくらいなら買えないこともないし。プレゼント」

ようやくそれを認識したのか、訳がわからないとばかりに声を上げるこいし。確かに唐突というか勝手に買っちゃったけど、何もそこまで驚かなくても…。

「…なんで？」

「…え？」

「なんで買ってくれたの？頼んでもいないのに」

「あ…、迷惑だった？」

「答えて」

が、何やら様子がおかしい。俯いている上帽子の鍔が邪魔で表情は窺えないが、急に声のトーンが変わった。まるで何かを警戒しているような、もっと正確に言うならば、

何かに怯えているような。

「んー…。なんとなく、かな？」

が、理由がわからない以上こちらに変なことは言えず、お茶を濁すようにそう答えた。答えてしまった。或いは勇儀さんのからかいを気にせず正直に、「こいしに似合いそうで可愛いから」と答えていれれば。

この後の悲劇を、回避出来たのかもしれない。

「あ……」

答えを聞いた瞬間、こいしがガタガタと震え始めた。自らを抱きしめるようにして、全身を震わせる。

「ああ……、ああ……」

同時、こいしの体に異変が起きた。体の内側から染み出すように、黒いオーラが溢れ出す。暗く、昏い、真つ黒と言ってもまだ足りない、

光が一切存在しない、深遠の闇が。

「ああああああつ……」

こいしが天を仰ぎ絶叫した瞬間、彼女を中心に四方八方へと闇の波動が弾ける。大気を震わせ地表を切るそれは、地底全土へと広がっていった。

悲劇の回避など、出来るはずがなかった。

何故ならもう、彼女の中にはそれが。

タークマター
深遠なる闇という名の、起爆剤が仕込まれていたのだから。

「蒼衣っ！！生きてるっ!?!」

スキマを抜けた先　　間一髪蒼衣が展開した異層結界に飛び込ん

で来た霊夢は、舞い散る砂埃に口元を覆いながら叫ぶ。蒼衣に付いていた上海がアリスに緊急事態を知らせた為、急いで駆け付けたのだが…、

「これが…、発現…？」

「これ程だなんて…、想像以上ね…」

アリスと紫が周囲を見回し、衝撃のあまり絶句する。街道は荒れ果て、建物は吹き飛び、荒廃した都とも言うべき光景が広がっていた。これが蒼衣の作った空間。現実の旧都をコピーして作られた、本物に影響のない世界じゃなかったら旧都は全壊、通行人達もかなりの被害を受けていただろう。短時間でここまでの結界を展開出来ただけでも、かなりの働きをしたと言える。

だが、問題はまだ解決していない。

先頭に立つ蒼衣の視線の先、幽鬼のように佇むこいしは明らかに異常だった。全身に闇のオーラを纏い、肌は黒い炎のような模様に侵食されている。そして何より、その瞳。エメラルドのような綺麗な瞳はその面影を潜め、血のように赤い瞳へと変貌していた。異端　　そう表すのがピッタリな姿だった。

「おい、どうすんだよ蒼衣!？」

「…母さん、許可をくれ」

「…いいの？使って」

「それ以外に方法がある？」

「…わかったわ」

混乱のあまりそう叫ぶ魔理沙に取り合わず、蒼衣は振り返らぬまま母を呼ぶ。確認するような神綺の声に返されたのは真剣な声だけで、僅かな逡巡の後彼女も頷いた。

彼女が両手を広げた瞬間、背に六枚の翼が生える。赤い模様が入った紫色のそれが展開されると同時、手に一本の杖が握られる。翼と剣十字の意匠がなされたそれを振るうと、蒼衣の足元に魔法陣が展開された。彼女は魔力を集束させ、彼が望む術式^モを発動する。

「魔界を創造せし一柱神・神綺が名に置いて、蒼衣・シユヴァルツシルトに掛けた封印を解放します。封印 解除」

「…ありがとう」

神綺が詠唱を終えた瞬間、何かの戒めが外れたような金属音が周囲に響き渡る。場の全員が首を傾げる中それに礼を述べ、蒼衣はこいしへと向き直る。

「 来い」

どくんっ！

「っな…」

「なんだよ…、あれ…？」

蒼衣の一言が宙に溶けた瞬間、彼の体を暗く昏い闇が覆う。闇が漆黒のローブを形成し、蒼衣の体を鎧う防護服となる。言葉にすれば

たったそれだけ　それだけの動作にさとりは息を呑み、魔理沙が絶句して疑問を零す。霊夢やアリスは体を震わせ、あの紫でさえ冷や汗をかいている。五人の体を縛り付けるその感情。古来より安全への待避の行動を促し、しかし強過ぎると身と心を縛る戒めとなるそれは

恐怖。

「昔々、一人の少年が魔界に迷い込みました。少年は望まずして強大過ぎる力をその身に宿し、周りから疎み嫌われ捨てられた可哀相な少年でした」

そんな中ただ一人平然としていた神綺が、杖と翼を宙に消しながら口を開いた。唐突に始まったそれは、なんの脈絡もない昔話。全員が首を傾げる中、アリスだけはそれに心当たりがあった。

「世界の全てに絶望していた少年は、一人の少女に出会いました。少女は彼を自らの母親　魔界を統べる神の元に連れて行き、母親は自らを殺してくれという少年の願いに首を横に振りました」

一人の少女という言葉に反応したアリスに、全員の視線が集まる。もうその頃には四人共、少年の正体が誰なのか、おおよそ見当が付いていた。

「母親は彼に新たな二つの名前を授け、片方の名前と共に力のほとんどを封印しました。そして力を失った彼を引き取り、三人で仲良く暮らし始めました。いつか彼がそれを受け入れて、自らの意味を見付けられると信じて」

あらすじを語り終えた神綺はゆっくりと目を開け、アリスと蒼衣に

視線を移す。そして、その物語に隠された裏話を語り始めた。

「彼に付けられた一つ目の名前は…、少女と同じ澄んだ瞳。蒼穹の如き蒼い瞳から、蒼衣と名付けられました」

蒼衣、即ち蒼い。安直ながらも綺麗で、神綺の心が込もった素敵な名前。そして、その裏に隠された彼のもう一つの名前は

「そしてもう一つの名前は…、彼が力を解き放った時に顕れる赤い瞳。魑魅魍魎を狂わす狂気の月のような瞳から、こつ名付けられました」

人体を蝕み妖怪を狂わす、真の赤い月の姿。彼の瞳にそれを見た彼女は、もう一つの名前を。

「 魑月、と」

魑魅魍魎を狂わす、赤い月と名付けた。

こいしを含めた七人の視線の先、蒼衣はゆるりと目を閉じる。周囲に渦巻く暗く昏い闇が、彼の意志に応え背後へと集束して行く。恐れをなして、跪くかのように。

「魔界神が息子蒼衣の真名、魑月の名に置いて、シュヴァルツシルトの闇を解放する」

静かに宣言した瞬間、背後の闇が蠢いた。ブラックホールのようにも見える空間に開いた穴から、深遠の闇が溢れ出し彼の周囲を舞い踊る。主人の命を得た従者のように、深遠の闇魑魅魍魎は赤い月魑月の呼び声に歓喜した。

「闇より昏き深淵より出でし　其は、カガク幻想の恐怖ヒカリが落とす闇カゲ」

蒼衣　　魎月はゆるりと瞼を開き、眼前の感染者こいしを見据える。その鋭い眼光はまるで　凶兆を予感させる不気味な赤い月のように輝いていた。
現実人間を平伏させ、幻想妖怪さえも恐れさせる深遠魎月の闇が。

今、その力を振るう。

第五話「発現」(後書き)

……………うわぁ。

なあにこれえw

気合入り過ぎといつかはっちゃけ過ぎといつかwやっぱ中二しか書
けないね俺(オイ

次回、蒼衣

魍月VSこいし。

第六話「闇VS無意識」(前書き)

はい、六話です。まさかの前編W

とりあえず慣れてない描写なのであんまり期待しないでくださいW
ではごーぞー。

第六話「闇VS無意識」

「シュヴァルツ…、シルト…」

目の前に広がる非現実的な 常識が通用しない幻想郷といえども、かなりずば抜けてありえない光景を見守りながら、兄さんの言った言葉を復唱する。私と戦った時とは比べものにならない、圧倒的なプレッシャーを漂わせる兄さんを見て、私の内には恐怖とは全く別の感情が沸き上がる。

それは憧憬。紫や幻想郷のごく一部だけが持っている、世界さえも己の思うがままにする力。そんな場所に、自分の兄が立っている。その事実が素直に誇らしく、また羨ましかった。ただ一つだけ、不満を言うとするならば。

…兄さんの本気は、私が最初に引き出したかったな…。

心中でそんな子供染みた嫉妬を燃やしながら、私は二人へと意識を戻した。

蒼衣 麴月は油断なく周囲を警戒しながら、解放した闇と己の状態を確かめる。十年近く封じられていたにしては、闇はあっさりど彼に馴染んでいた。まあ元はと言えば彼の能力の一部なのだから、当然のこととも言えるが。

コンディションは至って良好。残る問題は…、あれか。

そんな思考と共に魎月は、眼前の感染者を鋭く見据える。真名を解放した今の彼なら、彼女に巢食う深遠なる闇がはつきりと見えた。だが、問題はそこから。彼女の胸元　俗に言う心と思われる場所には、綺麗な輝きを放つ珠のようなモノと、それを侵食しようとする黒い淀みが見える。彼女を形作る根幹に、闇が踏み入ろうとしているのだ。妖怪は精神的な存在　それは肉体的負傷がさほど問題ではないということと同時に、そこを傷付けられたら終わりだということも表している。あの淀みをどうにかして払うのが、今回の戦闘の勝利条件。逆に魎月が倒れたり、間に合わなかったらそこで負け。今の魎月　真名解放をした蒼衣ならまず前者は有り得ないが、後者は相手の実力次第。どちらにせよ早めに決着を付けるのが望ましい。

結論、頑張れ俺。以上。

締めこそ軽くしたが僅か二秒でそこまでの思考を済ませ、魎月は精神を研ぎ澄ませる。通算二度目の弾幕ごっこ　最初は相手が慣れ親しんだアリスだったから勝てたものの、今回は相手の情報が全くない。加えて彼のスペルカードは現時点で五枚。一枚は深遠なる闇除去の為温存するので、実質四枚。仮にこいしが一度の弾幕ごっこに置ける限界数　十枚を所持していたらと考えると最悪だ。…こればかりはかわしきれぬことを祈るしかない。

「怖い…」

あらかたの行動パターンを組み立て終わると同時、こいしの微かな声が耳に届く。今度は聞き逃さぬよう聞き耳を立ててみると、

「怖い…!!」

とてもか細く震えた、悲しみと恐怖に満ちた声が聞こえた。発現した原因はよくわからないが、直前まで会話していた自分のせいだと考えるのが妥当。なら、今自分に出来ることは…。

「怖いよっ…!!」

なおも悲痛な声を上げるこいしに、魇月は待つてると静かに呟く。ようやく彼に気が付いたように、幼い子供が親に縋り付くような視線を向ける彼女へと、魇月は優しく笑いかける。

「すぐに俺が…、そこから連れ出してやる」

根拠もなにもない、しかし自信に満ち溢れた声は、確かに彼女の心に届いた。押し潰されそうな絶望感の中、僅かな光を垣間見た少女は、

こくり、と頷いた。

それを見届けた瞬間、魍月は動いた。周囲を漂う闇を圧縮・鋭角化させ、無数の弾丸として射出する。先手を打つということは、戦いに置いて非常に重要だ。一度そうやってペースを握ってしまえば、切り返されない限りはこちら側の　深遠という人智の及ばぬ、しかし破格に強力な攻撃で押し込められる。先人の言った先手必勝も、あながち間違いではないのだ。故に魍月は躊躇わず、心を鬼にして撃った。一刻も早くこの無益な、悲しき戦いを終わらせる為にだが

「表象
」

素直にやられてくれる程こいし　感染により体の制御権を奪われているのだ　は甘くなかった。何かを宣言するように、彼女はスカートのポケットからカードを取り出す。手の平の同程度の大ささのそれには、青いレーザーと赤い玉の弾幕が描かれていた。それが指し示すことは即ち、

「「夢枕にご先祖総立ち」！！」

スぺルカードの、発動。

カードが宙に掻き消えると同時、魍月の背後から青いレーザーが幾重にも重なって、符名の『ご先祖』を表すかのように放たれる。魍月の弾幕を追い越し、こいしの真横にレーザーが至った瞬間、

レーザーが鋭角に反射した。

黒い弾幕を掻き消しながら、^{レーザー}ご先祖が魍月目掛けて宙を駆けた。冷静に考えると凄まじい命名だなと考えながら、魍月は身を捻ってそれをかわす。更に闇を練り上げ始める彼をよそに、

更にレーザーが反射した。

咄嗟に身を屈めて回避するが、こいしは攻撃の手を緩めない。彼女を中心として放射状に赤い玉が放たれ、そのうちのいくつかは魍月目掛けてやや遅めに追尾してくる。

時差付きホーミングかと表情を歪めながら、俗に自機狙いと呼ばれるそれを魍月はかわしきった。レーザーはまだ反射していないのを確認し、ならばと重力を操り足に集束。地面が弾ける程の衝撃を伴って、魍月はこいしの眼前へと至る。重力操作　その応用の幅はとてつもなく広いのだ。

まるで瞬間移動のように現れた魍月に驚いたのか、こいしの動きが一瞬、ほんの一瞬だけ止まる。その隙を見逃さず、魍月は闇を纏った右拳を叩き込んだ。

響く鈍い音にさとりが悲痛な声を上げるが、魍月はそれに舌打ち一つ。視線の先、こいしの眼前にあるのは、薔薇をあしらったエメラルド色の魔法陣。反射かはたまた意識してか、咄嗟に防御結界を張ったのだ。

魎月が追撃すべく一步を踏み出した瞬間、こいしの姿が笑みと共に消失する。彼だけではない。見守っていたアリス達の視界からもだ。無意識を操る程度の能力　つまり他者の無意識下に潜り込み、知覚出来ないようにしたのだ。話だけではあまり理解出来ないが、実際に味わってみるとよくわかる。敵が見えないだけならば、気配から大まかな位置は特定出来る。だが彼女にはそれすらない。戦いにおいて周りが把握出来ないということは、即ち敗北を意味する。あまりにも厄介な　仮に弾幕ごっこに慣れていたとしても、非常に面倒な相手だった。

「表象
」

無駄とはわかっていても周囲の気配を探ろうとする魎月を嘲笑うように、こいしの声が響き渡る。宣言しなければ発動出来ないのがスperlカード弾幕の特徴だが、確かに彼女の声は魎月へと届いた。ならばその『宣言』は、例え姿が見えなくとも通ったと解釈される。

「「弾幕パラノイア」！！」

姿を現したこいしが右手を振るうと同時、カードが宙へと溶ける。それが消える瞬間魎月が見たのは、人型を囲う弾幕とそれを押し潰すような圧倒的物量の弾幕。魎月が警戒を強めた瞬間、それは現れた。

魎月
対象を囲むような、ピンク色の弾幕。

クナイをイメージしたやや小さめのそれは、魍月を逃がさぬように周囲を回っては消えて行き、また新たなクナイとなつてただ回る。自らの役割を淡々とこなす彼らをよそに、こいしは再度手を振るつた。動きを止められた魍月を狙い、水色の玉が放射状に放たれる。

が、かわせない弾幕は存在してはならないのがルール。僅かな隙間を縫いながら、魍月はそれをかわして行く。へえと感心したように呟いたこいしは、三度手を振るつた。

徐々にその水色が、量を増やし始める。当初の倍近くの密度になつた玉の隙間は、一人がギリギリで通れる程しかなかった。が、隙間がある以上かわすことは出来る。出来るのだが、焦りと緊張により体が強張つていく。落ち着けばかわせる。しかし周囲の壁と高密度の弾幕が、被弾するという強迫観念を植え付けていく。偏執病とはよく言つたものだ。精神的にかなり堪えるこの弾幕、長引けばこちらが不利になる。ならば

短く息を吐くと同時、魍月は一発の弾丸を生成する。翳した右手から射出された闇色の弾丸は、主人の意志に応え飛んだ。

上へと。

クナイの壁を抜けた弾丸は頂点へ至り一瞬静止。標的に狙いを定めたそれは弾かれたように加速し、コンマ数秒でこいしの眼前へ。

こいしは辛うじて防御結界を展開するも、野球ボール大の弾丸とは

思えぬ重みと共に吹き飛ばされる。それもそのはず、地球の質量を
ビー玉ボールをサイズに圧縮出来る蒼衣が、魍月として全力を振るっている
のだ。むしろ見た目の数千倍の重さを受けてなお、結界を維持出来
たこいしの方が称賛に値する。

が、それを褒めるはずもなく。心中に感心を押し込めた魍月は再度
地を蹴る。体勢を崩したこいしにダメージを与えるべく、闇を纏い
加速する。が、

「本能　　「イドの解放」！！」

そんな状態にありながら、こいしは三度目のスペルカード宣言。だ
がそれこそが、彼女の狙いだった。スペルカードを宣言した瞬間、
こいしの不安定な体勢が元に戻る。スペルカードには発動時の隙を
消す効果がある　　いつかのアリスの言葉を思い出すと同時、こ
いしが両手を振りかぶった。

手の平の先に灯るのは、ピンク色のハート弾。イド　　精神分析
学に置ける用語で愛情を表す　　が解放されたことにより、こい
しから溢れ出しハートとなって放射状に放たれた。左右から迫る弾
幕が、まるで網のように魍月の動きを制限していく。視界が全て染
まる程、恐ろしく密度の濃い弾幕だった。

複雑な軌跡を描くそれらを辛うじてかわし続けながら、魍月は一つ
の決断をする。この弾幕も先程の弾幕パラノイアと同様の方法で突
破は出来るだろうが、回避で精一杯で弾丸の制御など出来そうもな
い。こいしに無用な傷を付ける訳にはいかないし、かといって悠長
に避け続けるのは問題外。ならば

「深淵」

スぺルカード
切り札の一つくらい、くれてやる!!

「「超大質量ブラックホール」!!」

右手で取り出したそれを宙に放り、魎月は声高に宣言する。手中に現れた黒い闇の珠、それを正面に翳した瞬間、

ハート^{イト}が全て、吸い込まれた。

スぺルカードはその強さに応じて、四段階の格付けがなされている。一番弱いEasyから、Normal、Hard、最強のLunaticというランク付けだ。稀にHard以上の、しかし癖のあり過ぎる弾幕はExtra、同様にLunatic以上はPhantasmと呼ばれることもあるが、基本的には最初に述べた四段階だ。アリスはNormal以上Hard未満、こいしはExtraと言ったところか。

仮に魎月　蒼衣の使ったブラックホールをEasyとするならば、今彼が使ったそれは。

最高位の、Lunatic。

原理は全く同じ、しかしそれに費やされるエネルギーが半端ではない。仮に例えるとするならば、百リットルの水と一億リットルの水では発電出来る量が桁違いといった感じか。現にアリス戦ではビー玉サイズだった珠が、今では手の平を越える程の大きさとなっていた。そして、異変はそれだけに留まらない。魎月がスペルカードを宣言した瞬間、

地面が激しく、歴史上かつてない程に揺れた。

何も驚くことはない、ビー玉サイズでさえあの黒球には地球と同等の質量が詰まっていたのだ。その数十倍の大きさとなった今の重量は、推して知るべし。魎月が張った結界の、現実に一切影響のない結界の中だからこそ出来る暴挙。仮に外で発動していれば、幻想郷どころか地球の在り方そのものさえ変えていたかもしれない代物。まさに深遠、人智の及ばぬ常識外の存在だった。

そんなとんでもないブラツクホール^{アンソウン}は、しかしこいしの弾幕だけを正確に吸い込み消失した。愛が闇に押し潰される、見る者が見れば憐憫の情を抱いたかもしれないその光景。だが渦中の二人は気にかげず、更に弾幕を生成し互いを狙い穿ち合う。

「抑制　　「スーパーエゴ」！！」

弾幕同士がぶつかり合い生じた爆風により、体勢を崩した隙を見てこいしが四枚目のカードを切った。スーパーエゴ、即ち超自我。意識と無意識にまたがり自我とイドを押さえ付ける働きを持つとされる、精神分析学の用語だ。それが指し示すことはつまり

重力制御で体勢を無理矢理立て直し、身を屈めながら魎月は自らの推測が当たったことを確認する。水色のハート弾が渦のような軌跡を描き、こいしへと戻って行ったのだ。まるで、放たれたイドを抑制するかのよう。つまり『イドの解放』と『スーパーエゴ』は二枚で一つ、対になるスペルカードだったのだ。

密度はイド程高くないものの、背後から襲い来るという未知の弾幕に魎月は舌打ち一つ。慣れればどうにかかわせそうだが、ある意味イド以上に質が悪い。ただでさえ自分は弾幕ごっこに慣れていないのだ、こういう変わった弾幕は本当にやりにくくて敵わない。

「闇符 「デアボリックエミッション」！！」

長引かせる訳にもいかない為、魎月は二枚目のスペルカードを宣言。右拳を大地に叩き付けた瞬間、そこを起点に暗黒の空間が球状に広がっていく。囲まれた際の防御や面制圧に特化した、広域空間攻撃のスペルカードだ。

周囲に広がる黒に水色が抵抗するも、一瞬と持たずハート弾は消滅していく。ランク的にはEasyかNormal程度しかないが、現時点での破壊力だけならExtraにも匹敵し得る。が、スペルカードを連続で破られてなお、こいしは笑みを崩さない。

「反応　　「妖怪ポリグラフ」！！」

五枚目　　最大数の半分。その弾幕は今までとは異質な、奇妙過ぎる弾幕だった。

こいしを包むようにして半透明の赤い空間が展開し、ピンク色のレーザーが八本布陣される。そしてそのレーザーが、

回転し始めた。

魍月を閉じ込める壁のようなレーザーが、逆時計回りに回転し始めたのだ。今までとは明らかにタイプの違う弾幕に驚きながらも、レーザーから逃れようと周囲に視線を走らせた魍月は異変に気付いた。

弾丸が、セットされている。

魍月と同じ横軸に　　というよりも魍月を円周上の点とした円状にか　　弾丸が連なるように配置されていた。当然それに当たってやるはずもなく、魍月は前　　円の内側に踏み込んでそれを避ける。が、

弾丸が、ズレた。

まるで魘月の位置に対応するかのようになり、レーザーの壁から生成される弾丸の位置が内側にズレたのだ。舌打ちしながらも高速で後退し、魘月は弾丸をかわしきった。

ふと気になり左　　迫り来る壁の方を見遣ると、レーザーに触れた途端弾丸が消滅するのが見えた。どうやら配置された弾丸は、レーザーに接触すると消えるらしい。このまま避け続けていればこいの周りを一周することになる為、弾丸が残っていたらいずれ避けきれなくなる。さすがにそこまで鬼畜な弾幕ではないようだ。

半周もする頃には、このスペルカードのメカニズムが見えて来た。弾丸は魘月の位置に対応して設置されるが、位置確認から設置に僅かなラグがあった。つまり高速で内側と外側を交互に移動し続ければ、設置された弾丸の連なりに隙間が出来て回避しやすくなる。仕組みさえわかれば簡単だが、延々と付き合って時間を浪費する訳にはいかない。魘月は闇を練り上げて、こいし目掛けて射出する。狙い過たず放たれた弾丸は一直線にこいし目掛けて宙を駆け、

何事もなく貫通した。

驚愕を押し殺しながら回避しつつ、魘月は記憶に検索を掛ける。不可思議な弾幕、消失した相手の当たり判定、それらをキーワードにこの三日間アリスに教わった弾幕ごっこの知識を洗い出し、該当項目を発見。

耐久スペル。

本来スペルカード弾幕は相手に攻略　回避されつつ一定以上のダメージを食らうことでスペルブレイク　スペルカードが攻略され効果を失った状態となる。だが耐久スペルは逆に自らの姿と当たり判定を消し、スペルカードを発動出来る制限時間一杯を使い相手を攻撃するというもの。アリスも一枚だけ持っているが、幻想郷内でもほんの一握りしか扱えないらしい高難易度スペル。

だが、こいしの姿は見えている。その点ではアリスの定義していた耐久スペルとやや食い違っていた。ならばこの妖怪ポリグラフは一体

ポリグラフ？

ふと引つ掛かったワードが気になり、脳内の知識を洗い出す。ポリグラフ。確か動揺するとグラフが大きく変動するタイプの、嘘発見機の名称

嘘？

まさかと一つの予測を立てた魇月は再度闇の弾丸を、しかし先程よりも強力なそれを生成・射出。こいしを貫通するも様子に一切変化がないことを確認し、魇月の予測は確信に変わった。

妖怪ポリグラフは、姿が消えないタイプの耐久スペル。

見えているこいしが嘘で、魇月の移動で変化するポリグラフ。洒落反応が利いているというか何と云うか、自分のとは大違いだなと苦笑しながら魇月は三枚目になるカードを取り出す。耐久スペル？知るか。攻撃が効かないと言うならば

強引に、ぶち破るだけ。

「万有　　「不可視の楔」！！」

魇月が宣言した瞬間、こいしは異変を感じた。弾幕のコントロールに集中すべく閉じていた目を開くと、

レーザーの回転が、止まっていた。

レーザーが回転しなければ、弾丸もセットされない。何が起きたのか確認すべく周囲を見回そうとするが、

首が、動かない。

万有。不可視。楔。それらのワードが繋がり脳裏に一つの言葉を紡ぐ。このスペルカードの正体、それは

重力増加!?

よくよく見れば大地が苦しげに、ギチギチと嫌な音を奏でている。

周辺一帯の重力を増したのだと気付き、こいしは齒噛みした。重力
厄介だとは思っていたが、ここまで応用が利くようなもの
とは思っていなかった。

やがて制限時間に至ったのか、重力が元に戻ると同時に妖怪ポリグ
ラフが消滅した。必殺級のスペルカードを三手共に封殺され、さす
がにこいしも冷や汗を掻き始める。彼女からすれば残り五枚、対し
相手はまだ七枚。実際には五対二なのだが、それを彼女が知る由も
ない。彼女の目には魎月が、格の違い過ぎる相手に見えていた。

地面に危なげなく降り立ちながら、眼前へと視線を移す。対し魎月
は無表情に、闇を纏わせながらこいしを見据えていた。

「すこい…」

戦いを見守っていたさとりが、思わずといったように呟きを漏らす。
地霊殿の主人である彼女だが、戦闘能力はこいしどころか空や隣に
も劣る。彼女からすれば格どころか次元すら違う戦いに見えるのだ
ろう。

「残り五枚か…」

「問題はラスト三つね…」

すっかり魅入ってしまった霊夢と魔理沙も我に返り、現状と問題点を確認する。霊夢と魔理沙は一度彼女と弾幕ごっこをしたことがあり、辛うじて勝利した。その際彼女の能力や、そこから生み出される弾幕に苦戦したのは言うまでもない。パートナーの妖怪達を力を借りて、ようやく五分だったのだ。いくら蒼衣が桁外れに強くとも、無意識下から攻撃されたら負けてしまう。更に、

「兄さんのスペルカードは残り何枚あるのか…、それも問題よ」

「九枚目はポリグラフと同じ耐久型だから、イドやエゴのようなごり押しが効かないものね…」

アリスと紫が切実な、最大の問題点を指摘する。蒼衣は幻想郷こぼに来たばかりで、弾幕ごっこの経験はアリスとの再戦以外一度もない。その際彼が使ったスペルカードは二枚。今使ったのが三枚。三日かそこらでそう何枚も作れる程、スペルカードは簡単なものではない。更にこいしの弾幕には、一部非常に厄介なものがある。それをスペルカードでごり押し出来ない以上、本人の回避センスが全てを決めると言っても過言ではない。ポリグラフのような避け方があるにしろ、既にそのスペルカードは使用済み。超大質量ブラックホールのような上位互換のスペルカードがなければ、同じ手は二度と通用し

ないだろう。

「大丈夫だよ」

善戦している。だがいつ逆転されてもおかしくない。そんな状況に全員が顔を暗くする中、彼の母だけが静かにそう呟く。

「蒼衣君は、絶対に負けない」

根拠など何一つない、だが絶対の信頼を抱ける相手。それが、彼女にとっての蒼衣^{息子}。そんな母に頷きを返しながら、アリスは二人へと視線を戻した。

第六話「闇VS無意識」(後書き)

ちよっとセリフが極端に少ないので見やすくしてみた。
その辺も何か意見あったらどうぞー！。

第七話「心の傷」(前書き)

お待たせしました、こいし戦後編です。14000文字。∴長えw
今回中二が特に爆発しているので、覚悟完了した方から先へ進んで
ください。
ではごーぞー。

第七話「心の傷」

怖い。

見ず知らずの他人が怖い。

無駄に寄せられる奇異の視線が怖い。

欲に塗れた思考が怖い。

じゃあ、俺が守ってやるよ。

だからあの人にそう言ってもらえた時、私はとっても嬉しかった。こんな私でも誰かが守ってくれるって。だから私はお姉ちゃんそっちのけで人里に下りて、人に混じって暮らしていた。

プレゼント。あげるよ。

ある日あの人は、そう言ってハートを模したアクセサリをくれた。はしゃぎながらもどうしてとじつこく尋ねる私に、苦笑いしながら彼が告げた言葉を今でも覚えてる。

なんとなく、かな？

無自覚の、無意識の優しさ。無意識は私達覚りの天敵だったけど、その時だけは感謝した。あまりにも唐突で、あまりにも嬉しいプレゼント。だから私もこっそりプレゼントを買って、草木も眠る丑三つ時、あの人の部屋に忍び込んだ。

どうなんだ？あの覚りの娘は。

楽勝。軽く二、三言掛けてやっただけですぐ信用しやがった。

なら問題なく退治出来そうだな。

あ？もったいねえな、俺が引き取ってこき使ってやるよ。

たわけ。人と妖怪は相容れぬ存在だぞ。

だから使っただけだよ。俺の奴隷として、な。

だけど、待ち構えていた現実是最悪で。これ以上ないくらいに私を、その心を打ちのめした。

聞きたくなかった。考えなくなかった。本心を巧妙に隠していたなんて、信じなくなかった。頭の中がぐちゃぐちゃになって、血が上

ってカッとなって。気が付いたら私は、血の海の中に座り込んでいた。

こいし！？どうしたの！？

騒ぎを聞き付けたのだろうお姉ちゃんが、血相を変えて駆け寄って来る。だけど血まみれの私と狂ったような笑顔を見て、足を止めてしまった。

ねえ、お姉ちゃん。生き物って、みんなこうなのかな。

血に染まった黄色い和服、その胸元にある紫色の球体 第三の目を見下ろしながら私は独り言ちる。今まで見て来た心の中はみんなドロドロしていて、真っ黒で。信じてたあの人だって結局は嘘つきだった。

なら私は…、こんな能力いらない。

私の声に応えて、第三の目が瞼を閉じる。私の世界を賑わしていた心の声が消え、無の静寂に包まれる。すっきりしたようにニッコリと笑った私に対して、お姉ちゃんはただ、悲しそうに俯いた。

本当は心の声が消えて、ものすごく寂しかった。だけど私はもう、なにもかもに疲れきっていて。何かを、誰かを、信じることなんて

出来る訳がなかった。

お姉ちゃんやペット達には普通に接することが出来たけど、やっぱり一定以上踏み込まれないよう線引きして。私はずっと、一人で生きて来た。

だから今私の体を動かしているのは、きっとその代償。誰も信じず家族さえも省みず、たった一人で生きて来た古明地こいしの罪。そして、その罰と贖い。

こいし。それは恋死にして故意死。あまりにも私にピッタリな、悲しい名前。

なのにあの奇妙な妖怪　蒼衣は何故か私に関わって来た。暇な時間を見付けては押しかけて来て、人形を交えて一緒に遊んで。感情なんて朽ち果てたはずなのに、気が付けば私は笑っていた。

たった三日。私の生きて来た時間の1%にすら満たない、僅かな時間。だけどそれだけの時間で、私は蒼衣のいない生活を思い出せなくなっていた。一緒に遊んで、旧都を歩いて、鬼さんにご飯を食べる。そんな何気ない日常が、とても楽しかった。

だから、蒼衣の口からあのセリフ　あの人アクセサリをくれた時と同じセリフを聞いた時、私は怖くなった。この楽しい時間が終わってしまう。蒼衣がいなくなってしまう。

蒼衣も、私を裏切るの？

気が付いた時には、疑心暗鬼は既に膨れ上がっていて。私の中に眠っていた何かと噛み合った瞬間、私は闇に染まった。

だから今私は、蒼衣と戦っている。なくしたくない人を、自ら傷付けようとして。

きっと私は今、世界で一番狂ってる。

ピンクと水色のハートが織り成す絨毯爆撃のような弾幕を、重力操作で加速した魎月はひたすらに避け続ける。五枚ものスペルカードを使ったにも関わらず、こいしの攻撃は切れを失っていない。深遠ダイなる闇によるドーピングか、はたまた元々か。こいしの妖力は全くもって、馬鹿げてる^{クマタイ}としか言いようのない程に高まっていた。

「無意識　　「弾幕のロールシャツハ」！！」

一方的な弾幕攻撃と回避という膠着状態が続く中、業を煮やしたのかこいしが六枚目のスペルカードを取り出す。ロールシャツハという言葉に魎月が反応する間もなく、こいしの周囲に弾幕が展開し始めた。

こいしを囲んで環状に、まるで惑星のような軌跡を描きながらピンク、黄緑、水色の弾丸が配置されていく。奇しくもそれはロールシ

ヤツハテスト 左右対称のインクのシミから被験者が何に見えるか直感的に答える性格検査、それに置けるリサジュー図形無意識直交する二つの単振動を合成して得られる軌跡が描く平面図形に酷似していた。違うのは平面な性格検査ではなく、立体的な弾幕ごっこで用いられているということか。

また洒落た名前をと思う魍月の視界、配置された弾丸が動き始める。複雑に軌跡を描いた結果それぞれが連なるように、しかし程よく拡散して放たれた。交差するそれらの隙間を縫いつつ、魍月は再度闇を練り上げる。確かにこの弾幕もかなり難易度が高いが、どうにか避けられる分イドやエゴ程ではない。

魍月のスペルカードは残り二枚。五枚目 タークマター 対深遠なる闇用とも言えるスペルカードは、何があるうと温存しなければならぬ。そして四枚目は、その際の緊急防御用になるべく取っておきたい。

ならばこの程度の弾幕で、スペルカード 切り札を消費する訳には行かない。

隙間を見付けて前へ。抜けた先から襲い来る弾幕を右に回避。重力操作で一気に跳躍、弾幕の密集地帯から離れつつ更に前。回避しつつも周囲の闇を手繰り寄せ、一発の弾丸を生成。距離を詰め切る頃には、それはHardクラスの威力を持っていた。

右手を振りかぶった魍月が、サッカーボール大の弾丸を高速で射出。こいしが慌てて弾幕を操り、弾丸を止めようと一カ所に密集させる。固まった弾幕とぶち当たり、僅かに速度を落としながらも闇の弾丸は壁を突き破った。が、その先にも壁。抜ける、壁、抜ける、壁、抜ける、壁、その繰り返し。スペルカードの弾幕を全て費やした頃には、魍月の放った弾丸は消滅していた。

僅かな距離を置きながら、両者は荒れた息を整える。片方は弾幕を全て費やした消耗、片方は弾幕を無理矢理に回避した反動から。皮肉にも一緒に遊んでいた為か、両者の体は多少鈍っていた。加えて言うならば旧世界出身の魍月は当然、無意識下で行動しているこいしも弾幕ごっこの経験は数える程しかない。ある意味二人にとって、最悪の戦い方だった。

だが、それでも両者は止まらない。片方は己の体を支配する闇に突き動かされ、片方は目の前の少女を救う為。同じ闘争への選択肢は、しかし両者共違っていた。

こいし　　引いては闇にとっては、魍月を倒しさえすればいい。だが魍月はこいしを倒した上で、彼女の闇を取り除かなければならない。その結果として魍月は再び闇を練り上げ、

「復燃　　「恋の埋火」!!」

こいしは七枚目のカードを切った。

掲げたこいしの手の先に、ピンク色のハートが生成される。今までのものと全く同じそれは、しかし放たれることで姿を変える。

ハートが宙を駆けた軌跡　　そこに赤と青の丸い弾があった。火を噴いて飛翔するロケットのように、ハートの後部から弾が噴き出

していた。

一定の長さしか展開出来ないのか移動と共に弾は消えて行くが、その長さは厄介だ。やや放射状な為弾の軌道が読みづらく、行動範囲が狭まってしまう。

自ら目掛けて放たれたそれを、しかし魍月は悠々と回避。確かに面倒なオプシオンこそ付いているものの、ハート弾は僅か二つ。後続が来たとしてもこの程度なら

背中に、激痛。

「がっ…!?!」

思わず出そうになる苦痛の声を噛み殺し、何が起きたのか確認すべく首だけで振り返る。そこにあったものは

反射した、ハート弾。

その姿にご先祖^{レーザー}　こいしが最初に使用したスペルカードを思い出し、魍月は警戒を怠った己の不注意を悔やむ。だがこいしはそんな時間さえ与えない。与えるはずがない。

更に生成されたハート弾が、斜め左右に向けて放たれた。反射しながら迫るそれを、今度こそ慎重にかわす魍月。それを見たこいしは

更に魍月目掛けて射出。計六つのハートが周囲を飛び交う。

先程述べた軌跡　ハートから放たれる弾は、ハートが複数放たれてこそその真価を発揮する。一定の長さとはいえ、その弾は帯のようにハートの後ろを付いて回る。三本の矢という例え話があるように、単発なら平気でも複数合わさったそれは凄まじい空間制圧攻撃となる。狭まるどころの話ではない。今の魍月はロクに動けず、僅かな隙間を縫って辛うじて回避している状態だった。

頬を掠める弾幕の熱を感じながら、魍月は集中し身に纏う闇の密度を高めていく。闇より昏き深遠の闇　その言葉は伊達ではない。オーラのような闇を寄り集め、

放射状に解き放った。

爆発のように　奇しくも先程のデアボリックエミッションの劣化版のように広がった闇がハートとぶつかり合い、数秒の静止と共に相殺。あまりにも奇妙な発想と打開策に目を丸くするこいしをよそに、上手くいったかと魍月は溜め息と共にふらつく。不意打ちのような状態で食らった為完全にノーガード。しかもExtra級。火傷のような鈍い痛みが、背中をジリジリと焼いていた。

…長くは持たない。速攻で決める。

再度決意を固めながら、魍月は視線をこいしへと戻す。呆然としているこいしに心中で謝罪しつつ、特大の弾丸を叩き込んだ。

「深層　　「無意識の遺伝子」！！」

直撃する寸前我に返ったこいしは、応じるようにスペルカードを宣言。八枚目に当たるそれを発動した瞬間、こいしを赤く半透明な球体が包み込んだ。同時に弾幕を環状に配置し、交差するように展開していく。

分析心理学の開祖であるユングは、無意識には祖先の経験したものが遺伝している部分があるとした。つまり遺伝子　　DNAの二重螺旋をイメージしたのだろう。

魍月の攻撃をバリアのような赤い球体で防ぎ、こいしはゆるりと両手を広げる。荒れ狂う弾幕を従えた少女は、舞を踊るかのようにステップを踏んだ。一步ごとに数メートルの距離を跳び、旧都を縦横無尽に駆け回る。無意識故に、常識に囚われない。その複雑にして華麗な動きは見る者を魅了させ、しかし死と敗北を運ぶ巧妙な罠^{トラップ}。

魍月も並走するように駆け、跳び、かわし、防ぐ。先程のダメージのせいかやや動きが鈍いが、まだこの程度なら捌き切れる。

行ける。否、行く。

そう心に誓い、魍月は更に速度を上げる。全身の感覚を最大まで研ぎ澄ませ、空気の流れからさえも、相手の動きを一秒でも早く察知せんと集中。

緑と漆黒が舞い、交差し、ぶつかり合う。だが時間の経過と共に状況は、緑側の劣勢へと移り変わっていた。

右足を掠めた漆黒の力にこいしは表情を、苦さを孕んだそれへと変える。

無意識の遺伝子^{こいしの動き}に、合わせて来てる!?

驚くのも無理はない。大まかな移動範囲こそ決まっているとはいえ、その動きは基本的にランダム。使用した本人にさえ動きがわからないのに、見ず知らずの彼はそれをかわし、合わせ、破ろうとしている。あの霊夢や魔理沙でさえがスペルカードで相殺しつつ、ようやく打ち破ったという代物なのに、だ。

ここまでの攻撃で、通った攻撃は恋の埋火のみ。八枚ものスペルカード、それもExtra級を費やしたのにこの程度の結果。優秀という言葉を通り越して異常、薄ら寒ささえ感じさせる。

そんな思考に気を取られた為か、こいしの動きが僅かに鈍る。実質いつぱいいつぱいな魇月がその隙を逃すはずもなく地を蹴り加速。弾幕による擦過傷を負いながらも、黒い力を纏った右手でこいしに触れた。

そこから発された僅かな衝撃　しかし至近距離なら十分な威力を持ったそれにこいしはふらつき、無意識の遺伝子が破られる。こちらのスペルカードは残り二枚　あまりにも絶望的な状況だった。

負けるの？

声が響く。自分の声が。全く同じなのに違う声が。

勝ってしまえば、永遠に傍に縛り付けておけるよ？

悪魔のような囁きが、しかし確かに自分の声が脳裏に響き渡る。これ以上ないくらいに狂った、しかし魅力的なその方法に私は心を動かされる。

勝て。

頭の中が掻き回される感覚。ガンガンと鳴り響くような不快感。闇によるものか、はたまた押さえ付けられていた感情か、頭の中を侵していくそれに、こいしは自我の崩壊を感じていた。何が正しくて何が間違いなのか。何が望みで何が嫌なのか。それすらもわからなくなっていく。

ただ一つだけ、わかること。今の状況がとてつもなく怖い。理由もぐちゃぐちゃで纏まらないが、今感じている恐怖は確かに本物。ただ純粹に、何かが怖い。

「…怖い」

そして狂った頭はそれを、眼前の少年へ吐き出すことを求めた。

「怖い…!!」

「お前は、俺にどうして欲しいんだ？」

何度も口にしていたその言葉に、魍月はたった一つだけを尋ねる。
今この状況で、私が彼に望むこと。それは

「助けてっ…!!」

たった一つの、魔法の言葉。それを聞いた彼は頷きと共に、二枚の
スペルカードを取り出す。

「俺のスペルカードは残り一枚だ。そして俺はもうお前を攻撃しな
い」

片方のカードをアリスに放りながら手の内を明かす少年に、こいし
や受け取ったアリスだけでなく他の外野も絶句する。戦いに置いて
手の内を知られるということは敗北と同義。それさえわかってしま

えば対策が立てられる上、隙に昇華された敵のモーションにカウンターを叩き込めるからだ。それを自ら明かすなど、正気の沙汰ではない。

「残り二つの弾幕をかわしきって、そしたら俺のスペルカードで

その闇からお前を救い出す」

だが続けた魍月の言葉に、再度全員が息を呑む。こいしを怖がらせまいとしての行動なのはわかるが、それを口にしたことでその難易度は跳ね上がる。こいしは闇に体の制御権を奪われているのだから、当然抵抗するだろう。その上相手が残した二枚は当然、最強クラスのスペルカード。それをスペルカードなしで切り抜ける。戯言や妄言どころではない。ただの不可能にしか思えない。だが、

「信じるか信じないかは任せるよ。でも俺は、約束を絶対に破らない」

対し魍月は平然と、無防備に両手を広げてみせる。いつしか彼の体を覆っていた闇も消え、顔には柔らかな笑みを浮かべていた。

「来い。お前の恐怖は、俺が全部受け止めてやる」

アリスや神綺がよく知るそれは、絶対の信頼を抱かせるに足る言葉。彼とあまり関わっていない霊夢や魔理沙でさえ、任せてみようと思

わせる響き。

だから、こいしは。

「嫌われ者のフィロソフィ」っ！！」

絶叫と共に九枚目　あの霊夢や紫をして厄介だと言わせる、知^ッ
を恋^{イロソフィ}うの名を冠した耐久弾幕　その発動を宣言した。

周囲が暗い闇に覆われ、光の射さない漆黒の空間となる。発動と共に放たれた全包围弾幕をかわしつつ、魍月は素早く周囲を見回した。が、どこにもこいしの姿はない。いくら感覚を研ぎ澄ませても、彼女の反応は拾えない。どういうタイプの弾幕なのか見極めようと情報を集めるべく視界を動かした瞬間、それが来た。

斜め一直線の軌跡を描く、青。

恋の埋火のハートから噴き出していたのと同じくらいのサイズの弾が四つワンセットになり、僅かな隙間を置きながら斜めに配置され、それが真後ろから迫って来ていた。例えるならばそれはミの字を左右反転させ、それぞれのラインが直線になるようにいくつも並べた

もの、と言つべきだろうか。

ともあれこの程度ならかわせない訳がない。が、かと言って油断すると恋の埋火先程のように足元を掬われかねない。慎重にかつ精密に、消耗を抑えながら魍月はそれをかわしていく。

が、それでは終わらない。奇妙な音を聞き視線を前に戻した魍月は、そこに一つの花を見た。

青い、薔薇。

青い弾の列をレールにしたかのように、巨大な薔薇を模した弾幕が弾に沿って接近して来ていた。舌打ちしながらも魍月は隙間を縫つて左へ。漆黒のローブを掠めるも間一髪で回避する。そして魍月は、見た。

胎児のように体を丸め、薔薇の中で眠る半透明こゝろの少女を。

耐久スペルか！！

驚愕を押し殺しながらそう結論付け、魍月は薔薇から逃れるように足を動かす。まだ行ける、そう確認すると同時に魍月の視界から弾が消えた。

何、と思う間もなく、新たに弾幕が配置され始める。先程同様黄色

のミの字弾幕が背後から、加えてミの字を左に九十度回転させた弾幕が右手から襲い掛かって来た。

斜めの交差弾幕　人によっては避けにくいだろうが、イドの複雑な交差弾幕に比べれば避けるのは容易い。が、再度現れた黄色い薔薇の弾幕が、その難易度を高めていた。

薔薇は弾の並びに沿って動く　それはつまり交差する場所が多ければ多い程、多彩な動きが出来るということ。先程の第一段階では単純な斜め移動だけだったが、この第二段階は縦横無尽。弾がある範囲ならどこへでも移動出来る為、難易度が倍近く跳ね上がった。

視覚からのイメージ的には三倍近く　実際は単純計算で二倍だが　となった弾幕を縫って、魍魎は薔薇を避け続ける。弾は戦闘域をほぼ覆っており、薔薇の軌道を完璧にカバーしていた。うねうねと追い掛けて来るそれは倒す意志だけでなく、無意識に誰かを求めているのかもな、と魍魎はぼんやりとそんなことを考える。愚にも付かない思考をしつつも、針の穴を通すような精密さで僅かな隙間を縫い回避。それを三十秒も続ける頃には、弾幕も第三段階へと至っていた。

新たな弾幕は縦と横。今までとは違い等間隔に単発で設置された赤い弾が、背後と右から迫って来る。心なしか速度も上がっているようだ。

が、第二段階とは違い速度はあるが隙間は広い。密度も少ないし楽勝かと魍魎が思った瞬間

赤い薔薇が、来た。

今までのような大きな薔薇ではなく、それを構成していた小さな
少なくとも一つ一つが魍月と同サイズだが　　薔薇だった。

レールに沿って動くのは変わらないが、今までの動きが嘘のように
速い。レールの役割を果たす弾幕は密度こそ低いものの、戦闘域全
体を覆っている。楽勝という前言を撤回しつつ、魍月は地を蹴った。

一歩で五メートルを踏み込み、薔薇の弾幕を身を捻ってかわす。薔
薇が困んだ四角の中でやり過ごし、通過したら新たな隙間を目指し
て加速。

「あと十八秒です!!」

さとのりの声を背に受けて、魍月は避けることだけを考える。今は他
に何もいらぬ。ただ目の前の障害を乗り越える。それだけ満たせ
ば十分だ。

跳ぶ。駆ける。避ける。屈む。ありとあらゆる動作を組み合わせ、
時間の経過というアドバンテージを獲得していく。通常弾幕やスベ
ルカードならともかく、耐久弾幕においては時間が味方だ。それを
着実に積み重ねていけば、結果は自ずと目の前へと現れる。

十八秒、経過。

姿を現したこいし目掛け、魍月は全身全霊の全てを懸けて突撃する。彼女もここが勝負の分かれ目だとわかっているのか、躊躇いなく最後のカード　　十枚目に当たるそれを取り出した。

「サブタレイニアンローズ」っ！！」

Subte ranean Rose
サブタレイニアンローズ。直訳にして地下の薔薇。その名が巻き起こす力の流れを、魍月は見た。

両手を広げたこいしを中心に、赤と青の全方位弾が交互に放たれる。そしてその広がる弾をレールにした薔薇弾が複数連なり、左右から魍月を撥ね飛ばそうと襲い掛かって来た。

右から来る青い薔薇を下がりながらかわし、魍月は駆け出す。目標は当然、弾幕の発生源　　古明地こいしだ。左の赤い薔薇を避け、隙間を縫って前進。無理に進もうとはせず慎重にかわし、かつ隙間が開いたら一気に詰める。そんなアルゴリズムを数回も繰り返していると、あっという間にこいしの眼前へと至った。決まったと全員が思う中、唯一首を傾げる影がある。博麗の巫女　　霊夢だった。

霊夢は自らの思考に、僅かな引っ掛かりを覚えていた。かつて自分がこいしと戦った時の風景と、眼前の光景が一致しない。客観的に見ているのだからと言われれば納得してしまいそうな小さな違和感

を、しかし勘が裏付けていた。

博麗の巫女としての技能か、はたまた先天的なスキルか。とにかく何かにかけて、自分の勘はよく当たる。魔理沙や紫もよく知るところのそれは、時に危機を察知し命を救ったことさえある。その勘が霊夢に、何かがおかしいと告げているのだ。

サブタレイニアンローズをかわしきり、蒼衣 魎月はもはやこいしの眼前だ。この絶対的有利な状況で、一体何が引っ掛かるというのか。

有利？

そう、霊夢が戦った時もまた、似たような状況だった。歴然の勇士たる彼女にとってこの弾幕は余裕綽々、あっという間に距離を詰めて至近距離でスペルカードを放とうとした。あの時、何が起きた？ 思い出せ、そこに何か手掛かりが

「っ！？蒼衣！！下がって！！」

考え込んでいた霊夢が突如思い出したように、隣に立っていた魔理沙が思わず耳を塞ぐ程大きな声で蒼衣 魎月に叫ぶ。こいしに触れようとしていた魎月は驚きに身を固くしながらも、素直に従い一気に下がる。

瞬間、薔薇が加速した。

こいしの苦々しげな表情を視界の隅に捉えると同時、魎月の背中にぶわっと冷や汗が吹き出す。魎月の目は霊夢が警告した瞬間、何が起きたのかをしっかりと捉えていた。

八個連結されていた薔薇が突如、その数を六個に減らし加速したのだ。

八両と六両の列車、同じエネルギー量しか使えない場合速いのはどちらか。答えは当然、車両車両の少ない後者の方。薔薇の急な加速の原因はつまり、そういうことだ。霊夢の警告がなければどうなっていたか。間違いなく薔薇という名の特急列車に轢かれていただろう。まさに霊夢様々、感謝してもしきれない。

が、種さえわかってしまえば事は容易い。先程とはテンポをずらし、身を掠めそうになりながらも魎月は全力で進む。先程と同じ手がなにとも限らない為、慎重かつ急速に接近して行く。そして再度、魎月はこいしの眼前へと至った。

が、魎月の背筋を一つの感覚が駆け抜ける。嫌な汗と共に感じられるそれは、悪寒。動きが止まったのを確認し、こいしが右手を振りかぶった。

瞬間、薔薇が増える。

慌てて下がる魍月の視線の先、五倍三十個に増えた薔薇が通過した。先程の第二段階が速度重視特急列車なら、この第三段階は範囲重視鈍行列車といったところか。例えば速度が遅くとも、範囲が広ければ前に出づらくなり、自然と下がらざるを得なくなる。守りに入った、そう考えるのが妥当だろうか。

だが、その程度で下がってやる程魍月は甘くない。致命打となる薔薇にだけ気を付けて、被弾覚悟で強引に前へ出る。薔薇の通過と共に前に進み、迫って来たら素直に下がる。もどかしさを覚えながら、三度魍月はこいしの眼前へ。フィロソフィも三段階までだった、ならばもう後はないはず。そう確信した魍月が地を蹴った瞬間、

左から横殴りに、赤い薔薇が激突した。

「が、はっ…!?!」

全身を襲う衝撃に、喉の奥から呼気と赤い液体が漏れた。思いつ切り吹き飛ばされながらも、魍月は自らを襲った薔薇を見遣る。こいしは薔薇を青と赤を交互に放っていた。最後にかわしたのは赤い薔薇、今激突したのも赤い薔薇。それが導き出す答えはつまり、

第四段階!?

どうにか身を捻って体勢を立て直し、足から着地した魍月は舌打ちする。完全に気を抜いていた意識外からの攻撃、それはとてつもなく効いていた。脱臼したのか鈍痛が走り、左肩が全く動かなくなっている。利き手の右が生きていたのは不幸中の幸いだろう。

自分の状態の把握を終え、魍月はこいしに視線を戻す。今までの三つとは違い、第四段階はかなり変わった弾幕だった。今まではレーンとなる全方位弾幕の半径の間隔がそれなりに広がったが、今は一人分くらいに狭まっていた。更に同じ色の薔薇の動きが同期して、並列走行しているのだ。薔薇の数こそ四つに減っているが、気を抜けば下がり続けるはめになりすぐに距離が開いてしまう。さすがにこの後に及んで第五段階はないだろうが確かに最後の一枚、十枚目を飾るに相応しい難易度だった。

魍月は口の中に残った鉄臭い液体を吐き捨て、口元を拭いながら右手を握りしめる。チャンスはまだ潰えていない。頭と右手、能力さえ残っていればどうとでもなる。溜め込んでいた力を解き放ち、重力を操作。いつでも最高速度に持つていけるように集中。準備は万端。^{トップスピード}あと必要なのは覚悟と意地のみ。そしてそれはいつだって、

自らの、心の中に。

鋭く呼吸を吐き出し、魍月は跳んだ。薔薇が右足を掠める、無視。全方位弾が腹を穿つ、無視。弾幕の残滓で額が裂ける、無視。血で左の視界を塞がれながらも、魍月はただ駆ける。今はただ、前へ。

そしてその執念は、四度目にして実を結ぶ。体にやや軽めの重傷を

負いながらも、魍月はこいしの眼前へと至った。もはや躊躇うこともなく、魍月は最後のスペルカードを引き抜き腕を振るう。一面を漆黒よりなお暗い黒で塗り潰した、明かりのない遙か過去の夜空のような色。見た者の脳裏に警鐘を響かせる、太古の闇。

「来たれ 深遠の闇」

魍月が呟いた瞬間、彼が纏う闇がその濃さと量を増す。それは宇宙の遙か先にある深淵、ブラックホールのように見えた。

ブラックホール。重力が非常に大きく、光でさえも脱出不可能な天体。この世界で最速と言われる光の概念が、そしてそれ以下の全ての概念が通じない存在を統べる彼は正に、世界そのものの異端分子^{特異点}。宗教や伝承で絶対や無敵、最強と謳われる光さえも飲み込む、無の深淵。暗黒世界。曰く

「 シュヴァルツシルトの闇 」

彼が再度、真名を解放する際に告げたその名を呟くと同時、右手に深淵より出でし闇が集まって行く。そのまま拳を固く握りしめた魍月は右腕を振りかぶり、

こいしの胸へと、突き込んだ。

見た。

何をと問われたら、全てをと答えるべきだろう。今こいしの胸、正確には心に触れた際、彼女の抱えるトラウマの記憶が一瞬で脳裏を駆け巡った。だから彼女の過去も、過去の痛みも、全部わかってしまった。そう、

何故彼女が発現してしまったのかも。

「そっか」

彼女の声と共に目を開くと、そこは暗い空間だった。足元は透明な床で構成されていて、それ以外の全てが黒で塗り潰されている。空虚　初めてこいしの部屋に入った時と同じそれを、魍月は感じていた。

と、唐突に一人の少女が眼前に現れる。記憶の中で見た、黄色い和服を纏ったこいし。彼女は寂しげな笑みを浮かべ、少しずつ俺の方へと近付いて来る。

「ならわかるよね。私が第三の目を閉ざした理由も、私が無意識に生きて誰とも関わろうとしない理由も」

「怖かったんだな…、隠された思考や本当の意志が」

「そう。だから私は瞳を閉ざしてから、ずっと誰とも関わろうとしなかった。でも」

魇月も答えと共に歩み寄り、両者は三メートル程の距離を置いて対峙する。記憶を見ただけとはいえ、魇月にもその気持ちはわかる。彼もまたその力故に、友に蔑まれ大人に疎まれ、両親に捨てられたのだから。だが、

「蒼衣は何故、私に関わって来たの？」

こいしは魇月の瞳を見据え、そう尋ねる。それはどこまでも純粹で、真っ直ぐな問い。記憶を見たのなら尚更、その心の傷の大きさに怖じ気付いて身を引くはず。姉のさとりでさえ気遣いからその話題を避けていたのに、彼はここまで来た、来てしまった。だからこそこいしは、彼をここまで突き動かす理由に興味が湧いたのだ。

「笑ったら、さ。きっと可愛いんだろうなって」

だが、魇月が返したのはあまりにも、場にそぐわなさ過ぎる答えだった。その答えに口をぽかんと開き、こいしがはから始まる疑問の声を上げる。

「初めは監視が目的だったけど、一緒に過ごしてる内に気付いたんだ。表面上では笑ってても、心から笑ったことが一度もないって」

そう。神綺の養子となつてからも、彼はとある出来事以前は全く笑わなかった。こいしのような表面上の笑みさえ浮かべない、半ば廃人のような状態だったのだ。だからこそ彼はこいしの偽りの笑みに気付けた。その奥に暗い何かがあることにも。

「だから、こいしの笑顔が見たかった。多分俺が頑張る理由なんて、その程度の小さなもんなんだよ」

その出来事以来、彼はただひたすらに頑張った。自らの命を救ってくれた少女と、新たな名前をくれた母と楽しい一時を過ごそうと、^{家族}がむしやらに失った感情を取り戻していった。今回はその頑張り^が、アリスと神綺ではなくこいしに向けられただけのこと。

「俺は絶対裏切らないし、離れたりもしない。呼ばれたらすぐ飛んでってやるし、泣きたくなったら慰めてやる。だから…、あとはお前次第だよ」

確かに他者と関われば、傷付くこともあるかもしれない。でもそれ以上に、他人との関わりで得られるモノは大きい。もしその一歩を踏み出すことを恐れているならば、こちらから手を伸ばしてやれば

いい。さとりやアリス、燐と空。霊夢や魔理沙もいる。幻想郷の大らかな人達は、きっと彼女を拒まないから。だから

「少しだけ…、一歩だけでもいいから、前に進んでみないか？」

魎月　蒼衣は最後にそれだけを呟き、そつと右手を差し出した。かなりクサイことを言っているのは理解しているが、それは紛れも無い自分の本心。なら蒼衣に出来ることは、ただ手を差し延べること。それに対し、こいしは

「……………うんっ」

ほんの少しの逡巡の後、蒼衣の手を握り返した。

瞬間、世界が色付く。

頭上には黄昏に染まる赤い空があり、足元には幾多もの薔薇が咲き乱れている。今までひた隠されていた、庭園とでも呼ぶべきこいしの本当の心の風景。

サブタレイニアンローズ。この言葉にはもう一つ、別の意味がある。最初にそれを思い付いた時はあまりの場違いさに否定したが、今なら自信を持って言える。この言葉の本当の意味は

背後から温かな光を浴びて、今の服に戻ったこいしが柔らかな笑みを浮かべる。蒼衣はそれに笑みで応え、そつとこいしの頭に触れた。そこにあるのは、煌めき輝く碧色の結晶。あまりの美しさに蒼衣は、それが深遠なる闇ダークマターの源であるとは信じられなかった。

が、かといつて目的を忘れた訳ではない。再度右手に闇を纏い、結晶を握りしめる。許容量を越えた力を送り込まれた結晶は砕け散り、決着が着いたことを彼に告げる。

瞬間、二人は光の柱に呑み込まれた。

一方心象世界の外では、アリスが不安げな表情を浮かべていた。あの時　彼の兄がこいしに右手を突き込んだ瞬間、二人を深遠の闇が囲んだ。球体のそれに包まれて、二人がどうなっているかわからない。しかも魍月　蒼衣はあれを発動する前からかなりのダメージを受けていた。そんな状況が三分も続き、外野サイドの全員が緊張感に身を固まらせていたのだ。

大丈夫…、だよな。

心中に沸き上がる不安を打ち消すべく頭を振り、アリスは正面へと視線を戻す。と、

「あ…」

アリス同様異変に気付いたさとりが、思わずと言った感じに声を上げる。闇の球体がその身を徐々に宙へと溶かし、中が見えるようになったのだ。アリスが兄の名を叫ぼうとした瞬間、それが視界に入る。

こいしと半ば抱き合うような形で互いを支え、地に膝を着く兄の姿が。

「兄…、さん？」

あまりにもあまりな光景に、アリスが自信なさ気に彼の名前を呼ぶ。他の面々は声すら出せないこの状況で、よく出来たと言つべきだろう。が、状況は更に急変する。

蒼衣が、こいしを押し倒した。

「っな…！？」

正確には力尽きて倒れたのだが、彼女達はそんなことを知る由もない。さとりに至っては顔から湯気を出し、アリスは口をばくばくさせている。そして。

「熱々だねっ」

神綺の最悪の発言を聞いた瞬間、アリスの中で何かが切れる。それはもうぶちっと、とてつもなく嫌な音を立てて。

「こんの…、バカ兄いいっ!!」

制止しようとする人形達を引きずりながら、アリスは二人へと突撃していく。それを見て思い出したようにさとりがこいしの下へ駆け出し、溜め息混じりの霊夢と爆笑している魔理沙も後を追う。

「…ほんと、やってくれるわね。あなたの息子は」

そんな様子を見守りながら、紫がやれやれと言わんばかりに溜め息を漏らす。偶発的とはいえ暴走するこいしと互角以上に渡り合い、^{ダークマター}深遠なる闇を完全に消し去った。初の仕事にしては上出来、大袈裟に言えば完璧だ。これだけでも彼を魔界から呼び寄せた甲斐はあったと、紫は安堵の息。

「当然。だって、蒼衣君だもん」

対し母親は自慢げに胸を張り、理由になつてない理由を述べ破顔す

る。戦闘が始まってからもただ一人彼の勝利を確信していた、実に彼女らしい笑顔だった。

そつねと苦笑を返しながら、紫は神綺と共に二人の方へ歩み寄る。どうやら今夜は、枕を高くして眠れそうだった。

二人の周囲を覆う闇が消えた瞬間、蒼衣は自らの限界を感じていた。十年ぶりにシュヴァルツシルトの闇を解放した拳句、全身はボロボロのガタガタ。結界を維持するだけの余力もなく、辛うじて意識を保っている状態だった。

「見られちゃった、ね」

と、胸元にある感触に視線を落とすと、こいしが寄り掛かるようにしてぎゅうつと抱きしめていた。既に全身を覆っていた炎のような模様は消え去り、瞳の色も元に戻っている。だが彼女の不安げな声は如実に、一人への恐怖と縋るような感情が込められていた。見られた、というのは恐らく記憶のことだろう。だから蒼衣は心配すんなど、そつと頭を撫でながら。

「さつきも言ったけど、俺は絶対に離れないから」

「…っんっ」

こいしの明るい返事に緊張の糸が切れたのか、蒼衣の体が力を失う。わ、というこいしの声を残しながら、気を失った蒼衣はそのまま押し倒すようにして倒れ込む。顔面から地面にぶつかった癍にぴくりともせず、静かに寝息を立てていた。

「もっ…」

こいしはそんな蒼衣に苦笑しながら、背中へ回した手に力を込める。まだ他の人と関わるのは怖いけど、彼や姉がいればきっと大丈夫。もう私は無意識に逃げたりしないと、固く固く心に誓う。

「…ありがとね、蒼衣」

聞こえていないことを自覚しながら、こいしは小さく礼を述べる。そして彼女はサブタレイニアンローズ秘められたの名に相応しい、今まで生きて来た中で最高の笑顔を浮かべた。

第七話「心の傷」(後書き)

…うん、何も言うまい(え
なんだかんだありましたが、こいしは無事に救えました。めでたし
めでたし。

次回、宴会的な何か。

第八話「宴」（前書き）

はい、八話です。

宴会的な何か＋糖分（笑）です。

ではどーぞー！。

第八話「宴」

「あはははは！！ほら、蒼衣も飲め飲め！！」

額に立派な赤い一本角を持った少女が、眼前で杯に白く半透明な液体を注ぐ。目と鼻の先で空けられたそれから漂うのは、頭をくらくらさせる変わった匂い。言うまでもなくアルコール 酒だ。

「病み上がりは何飲ませる気ですかあんたは。てか飲みませんって」

「何を言う？酒は百薬の長だぞ？一升も飲めばそんな怪我すぐに治るぞ」

「んなもん迷信でしょうに…」

「実際私は一度も病気や怪我をしたことなどないぞ？だからさあ、蒼衣も飲め！！」

蒼衣は昼と同様溜め息混じりに誘いを断るのだが、アップパーの入っている勇儀は聞いていない。二言目には飲めと言い、赤い杯を押し付けてくる。…ああもう、

「だから酒飲めねえって昼言っただろうがこの酔っ払い」

「ありがとう！！最高の褒め言葉だ！！」

いかん、ダメだ、マトモに話が通じない。どう考えても罵ったのに効聞いてない。昼間も大概だったが今回はのっけから全開、フルスロツトルだ。彼女の背後に見える酒樽が、十個以上も空なのは幻だと信じたい。呂律も回ってるし足取りもしっかりしているから、蒼衣は夢なんだと思うことにした。

だとしたら、どこからが夢？

脳内に響き渡る疑問にそれはと答えようとして、蒼衣は記憶を漁り始める。この洒落にならないバカ騒ぎ、きっかけはおよそ八時間前にまで遡る

「宴会をしよう」

こいしの暴走を止めてから約二時間後、目覚めた蒼衣が最初に聞いた言葉がそれだった。嫌な予感と共にぼーっとする頭を向けると、赤い一本角が視界に入る。言うまでもない、蒼衣とこいしを昼間散

々引つ掻き回したあの鬼

星熊勇儀だ。

「とりあえず黙りなさい」

「へぶしっ!?!」

が、その脅威は紫の傘が彼女の脳天を穿つたことで去った。蒼衣が心の中でグツと親指を立ててしまうのも無理はない。が、不意に一人の少女のことを思い出し跳ね起きる。

「紫さん、こいしは!?!」

「落ち着きなさい。とりあえずこいしから深遠なる闇ダークマターの反応は完全に消えたわ。安心なさい」

「…よかった」

慌てて尋ねる蒼衣に紫はまあまあと両手を差し出しながら答え、安堵から気の抜けた蒼衣がドサリとベッドに倒れ込む。そこで蒼衣はようやく、ここが自分に割り振られた地霊殿の一室であることに気付いた。

「…あの後、どうなったんですか？」

「蒼衣君をかくかく揺さぶってたアリスちゃんから引き離して、紫ちゃんのスキマで戻って来たの。こいしちゃんは部屋で寝てて、さとりちゃんと霊夢ちゃんが様子を見てるはず。傷は私があらかた治しといたよ」

自分が最後に見た光景と眼前の光景の差異を埋めるべく疑問を口にする、答えは頭上から返って来た。慈しむように頭を撫でる手と声は、母である神綺のものだ。言われてみれば背中の傷も癒えているし、左肩の感覚も戻っている。額には包帯が巻かれているようだが、あくまで念の為とのこと。左の視界が真っ赤に染まる程の出血だったし、この程度なら甘んじて受けるべきだろう。

「今何時？」

「お昼の二時だよ」

「…で？そんな白昼からなんで宴会なのかしら？」

蒼衣がふと思いついたように問い掛け、神綺が間髪入れずに答えた。そしてそれらの言葉を引き継ぎながら、紫が勇儀へとジト目で振り返る。まあ冷静に考えれば、病み上がりなのに宴会など言語道断だろうが、

「決まっているだろう？めでたいからさ」

勇儀は何を言っているんだと言わんばかりに紫に答え、そのまま蒼衣の前へと歩み寄る。呆気に取られる蒼衣をよそに、勇儀は彼と視線を合わせる為膝を折った。

「私は直接見ていないが…、こいしと何かあったんだらう？あんな晴れ晴れとした笑顔は今まで見たことがないぞ、私は」

「…見てないからなんとも言えないんですが」

「何かあったのは否定しないんだな」

「…事実ですし」

意外にも鋭く真相を突く勇儀の言葉に、蒼衣は冷や汗混じりに答える。昼の時も思ったが、良い意味でも悪い意味でもよく絡んでくる鬼だ。…悪意がない分、ある意味かなり質が悪いが。

「ともあれあのこいしが、あんな風に笑えるようになったんだ。それだけで宴会をやる理由は十分だらう？」

「…昼も気になってたんですけど、勇儀さんはこいしとどういう？」

「ああ、私は一応この旧都のまとめ役をやっているね。その都合上地底への入口とかで番をしている連中と仲がいいんだ。で、遊びに行く時たまに見掛けていたからね」

無意識なのに見えるんですかという蒼衣の問いに、ぼんやりとだけどねと答える勇儀。見たところかなり高位の鬼なのだろうし、そういうことがあってもおかしくない。単にこいしが能力を使っていなかっただけなのかもしれないが。

「それはさておきそういう訳だ。アリスに聞いたがお前さん達、幻想郷^{つち}に来たばかりなんだろう？せっかくだし交遊を深めようじゃないか」

「…まあ、打ち上げくらいならしてもいいんじゃない？」

「おお、そうこなくちゃ」

話題を逸らすように提案した勇儀の言葉に、蒼衣は確認するように紫の方へと振り返る。意を汲んだ紫の苦笑しなからの言葉に、勇儀は嬉しそうに破顔した。

「私は他の妖怪達を集めながら酒を持って来る。他の準備は任せただよ」

「はいはい、お酒なら私も取って来るわよ」

そうと決まったら話は早いと言わんばかりに、勇儀と紫は部屋から退出する。片方はスキマでだが。妙なことになったなあと思いがながら、蒼衣も立ち上がり準備を始めることにした。

ああ、そうだったなあと回想を終了しながら、蒼衣は現実を意識を戻す。そこで終わってさえいけば非常にいい話だったのだが、幻想郷というものはそこまで甘くなかった。

あの後数十どころか百にも届こうかという人数が旧都に集まり、大宴会が始まった。そこでわかったのは幻想郷の住民が、例外なく驚く程の酒好きだということ。会場のほぼ全員が飲んでおり、誘いを頑なに断っているのは蒼衣くらいのものだ。

そして地底にはやたらと鬼が多く、空けていく酒の量が半端じゃない。空気中のアルコールがどんどん増えている昨今、火種が起きないことを切に願う。冗談抜きに。

眼前で一気コールをしている鬼軍団から目を逸らし、蒼衣はやや危なっかしく立ち上がる。別に怪我が後を引いている訳ではない。真名解放の疲労もあるが、それは半日程能力が使えないという形でフールドバックされている。ならば何故か？答えは簡単。それは

「えへへー」

無意識少女が半ば負ぶさるような形で、蒼衣の背中に抱き着いているからだ。

宴会が始まった直後から、こいしはずっとこんな調子で蒼衣にくっついて来ている。何を言われても嬉しそうに笑うだけで、酔っているのかどうなのかわかりにくい。今まで抑圧されていた反動で他人との関わりにも飢えているだろうし、無下に扱うことも出来ないしそのつもりもない。…だから仮に酔っていても、なんだかんだで面倒は見るだろうが。

そんな訳で蒼衣は未だに、挨拶回りすら出来ていないという状況。交遊を深めるどころか話すことすらしていない。していたことと言えばちまちまとジュースやツマミを口にしつつ、こいしに引っ付かれたままぼーっとしていたくらいだ。…時間の無駄遣いこの上ない。

「とりあえず…、あの辺行ってみるか…」

こいしを半分背負いつつ半分引きずるような形で、頭上の上海に気

を遣いながら蒼衣はゆつくりと歩き出す。目指すは宴会場の一角、アリスとさとりが三人の少女を交えて歓談している区画だ。

「…あ、兄さん」

「ああ。ちょっと混ぜてもらっていいか？」

「ええ、もちろんです」

気付いて場所を空けたアリスの隣に座り、反対隣のさとりも笑顔で承諾。円を描くようにして、七人が座る形。いわゆる車座だ。

「飲み物注ぎますね。何がいいですか？」

「酒じゃなけりゃなんでも」

「ふふっ、わかりました」

「お姉ちゃん、私もー」

「はいはい」

さとりがごそごそとクーラーボックスを漁りながら問い掛け、蒼衣は苦笑と共にそう返す。便乗するようなこいしのオーダーにもさとりは温かな笑みで返し、オレンジジュースを紙コップへと注いで配った。

「ホント…、蒼衣さんには感謝してもしきれませんね。こいしを助けてもらった上、心まで開いてもらって…」

「いやいや、そんな大層なもんじゃないって」

軽く乾杯を交わすと、さとりはいきなり頭を下げる。ぼかんとしながらも蒼衣がそう返し、まあこいしが楽しそうだし結果オーライかなと考えると、心を読んだのであるうさとりが苦笑い。いつの間にか蒼衣の膝に座っていたこいしの頭を撫でつつ、蒼衣はふと気になったことを尋ねる。

「事情知っちゃったとはいえあんま実感湧かないんだけどさ、こいしってそんな変わった？」

「ええ。昔第三の目を閉ざした前よりも、明るく楽しそうに笑ってます。地底に来たのは閉ざした後ですから…、面識があっても驚きますよ」

そうなのかと返しながら、上海が運んで来た焼き鳥を三人で頬張る。上海の頭をわしゃわしゃと撫でながら、後で高い高いしてやるうと蒼衣は心に誓った。

「さとりさんと仲良いんだねー、立役者さん」

と、アリスの人形を見ていた三人の内の一人が、感心したように会話へ混ざって来る。黒いシャツに金色のベルトを幾重にも巻いた焦げ茶色のジャンパースカート、金髪をお団子とポニーテールを足したような髪型をして焦げ茶色の大きなリボンを付けた少女だ。

「立役者はやめてくれ。えーと……」

「こりゃ失礼。私は黒谷ヤマメ。病気を操るしがない土蜘蛛さ」

「俺は蒼衣。てか仲良いとおかしいのか？」

「私らみたいな変わり者はともかく、さとりさんは能力のせいではない人と関わりたがらないからね。言い方は悪いが余所者とそんな簡単に話せるとは思えなくてさ」

「ヤマメさん、失礼ですよ」

「いや、別にいい。余所者なのは事実だし」

少女　　ヤマメのノリはやや軽めで話しやすいと思ったのだが、さとりはどうかやら気を遣ってくれたらしく窘めた。が、個人的に畏まられるのも嫌なので、蒼衣はさりげなくフォローしておく。

「…蒼衣、変わってるねえ。さっきのセリフ怒ってもいいところだよ？」

「いやまあ、ヤマメの疑問もわからなくはないし」

そんな蒼衣をジロジロと眺め回しながら、ヤマメが不審と呆れを足したような微妙な表情で呟く。しかし蒼衣としてもそうとしか言い様がないので苦笑いしか出来ない。

「…ま、いいや。悪かったね」

「気にすんな」

「……………妬ましい」

やがて納得したのか謝罪と共に頭を下げるヤマメに、蒼衣は笑みと共に軽く答える。が、そんな二人の様子を見て、別の少女の声がボソツと何かを呟いた。

二人が振り返った先にいたのは、金髪のショートボブの一部を結った髪型、こいしと同じ緑色の瞳。服は前に蒼衣が何かの本で見た、ペルシアンドレスという服に酷似していた。

が、問題はそこではない。何故か彼女は親指を噛み、恨みがましそうな目付きで蒼衣達を見ているのだ。それはもう、どんよりとしたオーラを纏って。

「気兼ねせず話せる新顔が妬ましい……」

「……………えーと」

妙なオーラを出しながらこちらを見ている少女に冷や汗を掻きつつ、蒼衣は助けを求めべく振り返る。意を汲んだヤマメがああと頷き、紙コップから酒を呷りながら説明を始めた。

「あの子は水橋パルスィ。嫉妬心を操る橋姫さ。妬ましい妬ましい言ってるのはいつものことだから、あんま気にしなくていいよ」

「と言われても……」

気にするなと言われても、ガン見されている蒼衣にそれは難しい注文だ。とりあえず困った蒼衣は上海が持って来た焼き鳥を差し出し、

「…えーと、食べるか？」

食べ物で釣ってみることにした。…いや、さすがにこれはどうかと自分でも思ったが、

「…いただくわ」

意外にもパルスィは素直に受け取った。変わった子だなあと蒼衣は内心失礼なことを考えながら、黙々と食べるパルスィを眺めつつ魔界に住んでいた頃の数少ない友人の一人を思い出す。その人物もやや天然というか不思議系なところがあり、パルスィを見ているとなんとなく彼女を思い出してしまったのだ。

「…お？」

ふと気になった蒼衣が残る三人目を探してみると、こちらを窺うように見ていたその少女と視線がぶつかる。緑色の髪をツインテールにし、白い着流しを羽織った割と普通の少女だ。

桶に入っているという、唯一にして最大の疑問を除けば、だが。

視線が合った瞬間その少女は怯えたように縮こまり、桶に隠れながらそっと蒼衣を窺っている。首を傾げる彼に苦笑しつつ、小動物みたいで可愛いでしょと呟きながらヤマメが説明を始めた。

「その子は釣瓶落としのキスメ。ちょっと無口なのと臆病で引つ込み思案なところがあるけど、素直な優しい子だよ」

「キスメって言うのか。よろしく」

ヤマメの紹介を記憶に刻み込みつつ、蒼衣は手を伸ばしキスメの頭を撫でる。一瞬身を竦めたものの、キスメは嬉しそうに表情を緩めた。

「…蒼衣、それ狙ってやってない？」

「？何が？」

「…質悪いねえ」

それを見てジト目で問い掛けるも本気でわかっていない顔で返す蒼衣に、ヤマメはやれやれと溜め息。彼女が知る由もないが蒼衣の周りには頼りない母とやや抜けた姉のような少女、トラブルメーカーの少女にどこか浮き世離れた妹分、更に幼いアリスまでいた為か、自然とそういつた対応が身に染み付いてしまっているのだ。夢子がいなかったら間違いなくあの家は破綻していただろうと、事情を知っているアリスは溜め息。賑やかだが落ち着きのない家だった、とも思う。

「…蒼衣、私も」

「ん？」

と、蒼衣とアリスの視界の端でこいしが動いた。心持ちむくれた表情で、自分も撫でると言わんばかりに頭を突き出す。苦笑いしながらも蒼衣が要望に応えると、あっという間にその顔に笑みという名の花を咲かせた。

「えへへ…」

機嫌を直したのか膝に座り直し、蒼衣の握っていた焼き鳥を頬張り始めるこいしへのスキンシップなでなでを続行しつつ、蒼衣は話のタネを探そうと視線を宙に彷徨わせる。が、悲しくもその行動は十秒と経たず終了することになった。

何故ならアリスがパルスィに勝るとも劣らない、黒いオーラを放って蒼衣を睨んでいたからだ。

「…えーと、アリス？」

「…何かしら」

恐る恐る尋ねた蒼衣兄に対し、疑問符すら付かない吹雪ブリザードのような声で答えるアリス妹。直感的にヤバいと判断した蒼衣は、そのまま何事もなかったかのように視線を逸らそうとする。が、

「あ、タレ付いてるよ？」

蒼衣の頬に付いていた焼き鳥のタレを人差し指で掬い、そのまま口へと運ぶというこいしの行動で状況は悪化した。具体的に言つと、アリスがどこからともなく魔導書グリモワールを取り出すくらいには。

「あの一…、こいしさん？」

「ふえ？なあに？」

アリスのオーラに押され思わず敬語になりつつも、蒼衣はこいしに先程の出来事を尋ねようとす。が、原因である本人には自覚がないのか、不思議そうに聞き返して来た。

「今のは何を…?」

「ん、ほっぺにタレが付いてたから」

「いや、なんでそれ食べたのっていう話」

「もったいないじゃん」

あまりにもあんまりな理由に、溜め息と共に頭を抱える蒼衣。だが状況の悪化はそれだけに留まらず、それにと付け足したこいしが蒼衣の体を抱きしめながら、

「無意識だから仕方ないもん」

ある意味最強の免罪符を振りかざした。

「いや、それ言ってる時点で無意識じゃないだろ……」

「えへへー 無意識無意識ー」

思わず脱力感に襲われながらも蒼衣が突っ込むが、こいしはなおも
無意識免罪符を連呼しながら頬を擦り寄せて来る。懐かれる分には悪い気
はしないが、さすがにこれはやり過ぎだろうと蒼衣が注意しようと
した瞬間、

アリスのいた方角から、何かが切れる音がした。

「…パルスイ、能力使ってないよね？」

「当たり前よ。ああ、私の能力いらずだなんて妬ましい…」

キスメが怯えたように桶に引っ込み、さとりがダラダラと冷や汗を
流す。唯一の希望だったパルスイに尋ねようとすも、彼女とヤマ
メの奇妙な問答でそれは木っ端微塵に砕け散った。上海も体を震わ
せながら蒼衣の右腕に抱き着き、こいしは気付いていないのか相変
わらず蒼衣にくっついたまま。場の緊張感が最大まで高まり、蒼衣
がなんとか口を開こうとした瞬間、

「あ、みんなここにいたんだ？」

神綺という名の、救いの手が差し延べられた。

目は口程にものを言う。蒼衣は必死で母親に助けってくれと、文字通り命懸けでアイコンタクトを送る。これできつとなんとかなると、アリスとこいしを除いた場の全員が安堵した。

だが、蒼衣達は一つだけ。最大のミスを犯していた。あまりにも突発的にこんな状況に陥ってしまった為、一つの認識を忘れていたのだ。

「わ、こいしちゃんにとっても好かれてるんだ」

場の雰囲気を理解していないのか、神綺が蒼衣とこいしを見て嬉しそうな声を上げる。そう、蒼衣達が忘れていたその認識。それは彼女が

「モテモテだね、蒼衣君」

歴史上類を見ない程の、天然であるということ。

そのセリフを聞き終えるか否かというタイミングで、蒼衣は上海を肩に乗せこいしを抱き抱えて立ち上がる。その間僅かコンマ二秒。火事場の馬鹿力というものは、どうやら妖怪にも適用されるようだ。

「あっ!!」

アリスが気付いた時には既に遅く、蒼衣は重力能力を使ってを制御して逃走していた。どうせ言っても離れないだろうという判断からこいしを連れて逃げたのだが悲しいかな、アリスの目には駆け落ちや逃避行のようにはしか見えなかった。

いずれにせよ彼女の身体能力では、蒼衣に追いつくことは不可能だ。覚えてなさいよとドス黒い声で呟きながら、アリスが荒々しく座り込む。

「…ふえ？」

唯一状況を理解していない神綺だけが、ぼけつとした声を上げていた。

「はあ…、マジで死ぬかと思った…」

アリス達のいた車座から百メートル以上離れ、ようやく蒼衣は一息つく。いつも自分の陰に隠れていた素直なアリスという昔を知って

いるからこそ、今のブチ切れ状態とのギャップが恐ろしく怖かった。が、あそこには神綺がいる。あの天然オーラが悉くこちらの意志というものを萎えさせるのは、一緒に暮らして来た蒼衣にはよくわかってる。残して来たさとりとキスメには悪いが、きつと神綺が宥めてくれるはずだ。…ヤマメとパルスィは強かそうだから大丈夫だろう。多分。

「うわー、速いんだねー」

「…まあ、重力弄れるからな」

感心の声を上げる全ての元凶（こいつ）を降ろしつつ、蒼衣は周囲を見回し溜め息一つ。あんな状況で逃げ出して来た以上、戻ったところで待っているのはアリスの説教だけだろう。となるとどこかで時間を潰さなければならぬ。

「…たく…。今まで他人と関われなかったんだから、マナー悪いのくらい大目に見るよ…」

見当違いな愚痴を漏らしつつ、蒼衣は知った顔がないかと探しながら移動を開始。こいしも蒼衣の左手を取り、横に並んで歩き始める。が、こちらに来たばかりの蒼衣には知人が少ない。さっきの車座で知り合いの三割は潰えたし、勇儀は論外。紫はどこにいるかわからないし、こいしはすぐ隣。そうなると残るのは…、

「ありゃ、こいし様にお兄さん？」

「あ、お燐だ」

「よっ」

と、目の前を横切ろうとした知り合いの一人、火焰猫燐が声を掛けて来た。手には酒瓶を持っており、どうやらどこからか調達して来たようだ。

…まあご主人様みいじんの妹だし、声掛けない方がおかしいか。

知り合いとは言っても面識があるだけで、話した機会はほとんどない。どう考えても目的はもう片方だろうなと結論付け、蒼衣は今後の行動に置ける選択肢を模索する。

「あ、なんならお兄さん、あたい達と一緒に飲まない？」

「…へ？……あ、ああ。酒以外でいいなら」

と思っていたところを当の本人に前提から覆され、間の抜けた声を上げつつも答える蒼衣。完全に不意打ちだった為、少し挙動がおか

しかったかもしれないが。

「ん、決まり。お空に巫女のお姉さん、魔法使いのお姉さんも一緒だよ」

「あ、あいつらそっちで飲んだのか」

「そだよー」

燐の後に着いて行きながら、適当に雑談を交わす蒼衣。付き合いが浅くとも知り合いが四人。ならば間は持つだろうし霊夢辺りなら向こうから話題を　主に異変関連だろうが　振って来るだろうし心配なさそうだ。と、

「お、蒼衣じゃないか。こいしとはよろしくやってるみたいだな？」

こちらに気付いたのか一升瓶から酒を呷っていた魔理沙が、からかい混じりに野次を飛ばした。またその話かとげんなりしつつも、蒼衣は彼女を無視して燐へと視線を移す。

「…大分飲んでる？」

「…あたいた達の倍くらい？」

「ちなみに私はその倍よ」

蒼衣の質問に燐が苦笑いと共に答え、頬を赤く染めた程度で呂律もすっかり回っている霊夢が追従する。どうやら霊夢は酒に強いようだ。

「蒼衣、蒼衣、蒼衣も一緒に飲も？」

「いや、遠慮しとくよ」

「え…」

三人が座り込むと同時、いい感じに酔いの回っている空が中程まで入っている酒瓶を差し出しニツコリと微笑む。が、蒼衣の答えを聞いた瞬間笑みを消し、悲しみに表情を曇らせた。

「うにゅ…」

泣き上戸かと蒼衣が内心舌打ちした瞬間、未知の言語を口にしながら空が縮こまる。すんすんと鼻を鳴らし、目元をぐしぐしと擦り始

めた。心なしが周囲から咎めるような視線が突き刺さって来る気がする。

「あ……」

やむを得ないと判断した蒼衣は空の抱えていた酒瓶を掻っ攫い、約一リットルのそれを一気飲みした。全身の血が滾るような、神経が熱せられるような感覚。くらくらするような衝撃に一瞬意識を吞まれそうになるも、蒼衣は空にした瓶を激しい音と共に大地に叩き付けた。

「ごちそうさま。美味かったよ」

全身の力を総動員した作り笑顔と共に、蒼衣は空にそう告げる。実際は頭がガンガンするし、視界もややぐらついている。が、女の子を泣かせるというのだけは、蒼衣には我慢出来なかった。泣き止んでくれるなら、プライドなんて投げ捨てる。

「ホント？」

「おっ」

「えへへ……、よかった……」

蒼衣の言葉に安堵したのか、空は表情を緩めそのまま寝そべる。十秒もしないうちに寝息を立て始めた親友の頭を撫でつつ、燐は蒼衣に全力で土下座した。

「ごめんなさい!!この子ちょっとアホの子だから…」

「すげえ言い草だなおい」

「仮にも親友をアホの子って…」

燐のあまりのこき下ろしっぷりに魔理沙と霊夢がツッコミを入れるが、蒼衣は笑みと共に首を横に振る。

「平気平気。気にすんな」

「そつですか…?」

「ん、問題ない」

なおも心配そうな燐に大丈夫だと言い続けると、ようやく表情を緩

めてくれる。何と云うか、彼女の苦勞人っぷりが垣間見えた瞬間だった。

「…にしても静かだな。てつきり異変こいじのこととか聞いて来るかと思つたのに」

「公私の分別くらい付けるわよ。今は宴会を楽しむ時間でしよう？」

「…違うない」

とりあえず蒼衣は話題を切り替えようと、予想とは裏腹に何も聞いて来ない靈夢を見遣る。が、靈夢の答えは考えてみれば当たり前のもので、苦笑と共に蒼衣は納得した。

「まあ、宴会が終わつたら質問攻めにしてあげるから、精々今の内に骨休めしときなさい」

「…お優しいことで」

一言余計だな靈夢はと呆れのツツコミを入れる魔理沙をよそに、蒼衣はよく冷えた水をちまちまと啜る。思考も大分クリアになって来たが、元々病み上がりの身だ。思えばこちらに来てから口々に休んでいない訳だし、ここらが潮時だろう。

「靈夢、俺は先に戻って寝てる」

「そ。お大事に」

「他の連中には私達が伝えとくぜー」

立ち上がりながらの蒼衣の言葉に靈夢が素っ気なく答え、魔理沙も手を軽く振りながら見送る。いい奴らだなと笑みを漏らしつつ、蒼衣は相変わらず引っ付いたままだったこいしへと視線を向けた。

「こいしもさとのとに戻れ。せつかくの宴会なんだから楽しんで来い」

「え、でも…」

「やっと踏み出せたんだから、この機会に友達増やして来い」

「…っん」

蒼衣のセリフに反論しようとするも、純粹な気遣いからの言葉に渋

々と頷く。心細いのかもしれないが、神綺もいるし大丈夫だろう。そう結論付けた蒼衣はその場を離れるべく、ゆっくりと歩き出した。

「…あ」

「…え」

歩き出して僅か十二秒、蒼衣はアリスと鉢合わせした。どうやら隣同様酒を調達して来たようで、人形達が仲良く連携して運んでいる。便利だなあとか考えてしまう蒼衣だが、それは俗に言う現実逃避でしかない。

「…あの」

「…さつきはゴメン。いくら今まで一人だったとはいえ、マナーの悪さくらいちゃんと叱るべきだった」

アリスが口を開いた瞬間、蒼衣はとりあえず謝った。ぼかんとする彼女をよそに、理由を述べつつ頭を下げる。蒼衣本人としてはそれ以外に思い当たる理由がないからの行動だったのだが、

「……………はあ」

アリス？と視線を上げた蒼衣が見たのは、額に手を当て深々と溜め息をつく妹の姿だった。

「ん、ゴメン。なんかバカらしくなって。こっちこそごめんなさいね」

まさかこいしに嫉妬してたなんて言えないしとぼそぼそ呟くも、幸い蒼衣には聞こえなかったらしく首を傾げるだけ。なんでもないと返すアリスに、とりあえず蒼衣は詮索しないことにした。

「…じゃあ俺、先に戻って寝てるから」

「え、大丈夫!？」

場の空気を読みかねた蒼衣はとりあえず、自らの体調管理を優先させることにしたのだが。予想以上にアリスが食いつき、三歩程あった距離を急に詰めて心配して来た為思わず後退ってしまう。

「…あ、ごめんなさい。つい…」

「いや、別に」

「…でも、ホント無理だけはしないでね？」

「ん、平気平気。心配してくれてありがとな」

アリスも自らの行動に気付いたのか頬を染めながら俯き、蒼衣も苦笑いと共にそれだけを返す。なおも心配そうに兄を気遣うアリスを安心させようと、蒼衣は笑みと共に頭を撫でた。瞬間、アリスの顔から煙が噴き出す程真っ赤に染まったが、地獄街道からの逆光で蒼衣には見えていなかった。

「じゃ、おやすみ」

「…おやすみなさい」

気付かぬまま挨拶を言い残して去る兄に、アリスはどうにかそれだけを返し天を仰ぐ。ひんやりとした風が、火照った頬に心地好かった。背後からは勇儀の豪快な笑い声と、霊夢や魔理沙の野次が響いている。

まだ宴は、当分終わりそうにない。

第八話「宴」（後書き）

いちゃいちゃとパルアリスが書きたかっただけ（おい
しかし長いw

次回、糖分追撃回。期待はしないでね（うざっ

第九話「添い寝」(前書き)

はい、九話です。

熱のテンションと深夜のアップパーが入った結果誰得糖分回に…w
今まで以上に稚拙ですんで期待はしないでくださいw
ではごーぞー。

第九話「添い寝」

「はあ……」

どうにか地霊殿の自室へと辿り着き扉を閉めると同時、蒼衣は盛大な溜め息をついた。この地霊殿、住人は少ない割にめちゃくちゃ広い。灼熱地獄に蓋をするように建っている為当たり前と言えれば当たり前だが、酒が回っている病み上がりには優しくない仕様としか言い様がない。

「……つわ、零時過ぎてら」

備え付けの時計を見てみると、四十分を回った辺りだった。日付が変わったにも関わらず、旧都から響いて来るどんちゃん騒ぎは勢いを衰えさせるどころか激しさを増している。幻想郷の住人は本当にお祭り騒ぎが大好きなようだ。

後に響くのもバカらしいので、当初の目的通り蒼衣は寝ることにした。脱いだパーカーをハンガーに掛け、手首のスナップだけで投擲し壁際に引っ掛ける。スニーカーを脱ぎベッドへ入り、さて寝ようと目を閉じた。

「あ、遅かったね」

「ああ。ちょっと迷ってな」

「あー、地^じ霊^り殿^だ広いもんね。私でもたまたまに迷^まうもん」

「だよなあ……。つて」

隣から聞こえてくる聞き覚えのある少女の声に答え言葉を交わすこと数秒、ようやくその声がこの場にいるはずのない人物のものだと気付いた蒼衣は慌ててそちらへと視線を移す。蒼衣から見て左側、僅か数センチ程の距離。そこに

「おかえりなさい」

古明地こいしが、いた。

「……………いやいやいやいや」

時間に換算して約十秒、本人にとっては無限に近い時間。そこから我に返った蒼衣がまず口にしたのは、現実を否定しようとする無駄な試みの言葉だった。

だがいくら頑張ったところで、目の前の光景は夢幻ではなく現実。至近距離にある整った顔立ちも、花のように柔らかな香りも、感じられる温かな体温も、全て現実。脳内で当人比三日三晩に及ぶ大審議を経て、蒼衣はそれを現実として受け入れることを決めた。

「…なんでここに？」

「わっかんない えへへ」

絶対嘘だと確信しつつ、蒼衣は彼女の能力と先程の会話を脳裏に反芻させる。おそらく先回りしてベッドに入り、今の今まで能力で気配を消していたのだろう。…いや、方法考える前に目的を聞けよ自分。

「だって私のお姉ちゃんが地霊殿の主なんだから、その妹の私がどこにいてもおかしくないでしょ？」

「いやそういう問題じゃないだろ」

脳内でそんなセルフツッコミを入れる蒼衣の表情を読んだのかそう答えるこいしに、蒼衣は再び関西人形無しのツッコミ。確かに地霊殿内においての権限は彼女の方が高いが、だからといってこれは飛躍し過ぎだろう。

「…宴会は？」

「抜け出して来ちゃった」

「……さとりには？」

「寝るって言って来たよ」

「……………宴会や姉を振ってまで来る必要があるとは思えないんだが」
「だって…、ほら」

連続して放った問いも勇儀涙目とさとり涙目の答えで悉く粉碎する
だけでなく、最後の問いを放つと同時にこいしがぎゅっつと抱きし
めてくる。さすがに慌てた蒼衣が胸元のこいしを見下ろすと、

「こんなに…、あつたかいんだもん。ぎゅってしてると、あつたか
い気持ちになれるしね」

安堵の息をつきながらそう呟く姿はまるで、母に縋る赤子のようで。

蒼衣はそれ以上、何も言えなくなってしまった。

「なんでだろ…。こうしていると懐かしい感じになって…、胸の奥がポカポカするんだ…」

きっとそれは、昔彼女が失ってしまったもので。もし普通に生きていられれば、とっくに手に入れられていたもので。だから蒼衣は何も言わず、こいしのしたいようにさせることにした。

「…ね、ぎゅってして」

「…はい？なんで？」

「だって、して欲しいんだもん」

しばらくそうしていたかと思ったら、こいしは不意にそんなことを口にする。思わずマジ顔で聞き返す蒼衣だが、こいしはニツコリと微笑みながらそう答えた。…根本的な答えになっていないと突っ込んだら、その時点で負けなのだろう。多分。

「してくれないなら…、えいっ」

突飛な言葉に呆然とする間も与えず、こいしは次の手に出る。蒼衣の胸元に顔を押し付け、すりすりーと嬉しそうな声を出しながら頬を擦り付けて来た。犬や猫が同様の行動をすることがあるが、相手はあのこいし 並外れた美少女なのだ。いくら幼少期はアリスや神綺達と寝ていたとはいえ、それはもう十年も前の話。そんなものに対する耐性などあるはずもなく、じゃれつかれた蒼衣の心臓は加速しっぱなしだった。

「…もしかして、ドキドキしてる?」

「…知るか」

「ぴとっ」

顔がやや赤くなっているのに気付いたのか、こいしが可愛らしく首を傾げながら尋ねて来る。蒼衣の顔を背けながらの言葉に不平一つ言わず、こいしは擬音と共に耳を胸へと当てた。

「…わ、速くなってる。そんなに私と一緒に寝るのが嬉しいのかな?」

「…逆だろってツッコミはあり?」

「えへへー」

からかうような笑みに蒼衣がジト目でツッコミを入れるも、それさえも嬉しそうに笑うこいしには無駄だと悟り溜め息一つ。安息の眠りはどこに行ってしまったのかと、思わずどこか遠くを眺めてそんなことを考えてしまう。が、

「…これが止まったら、どうなるのかな」

「…おい」

こいしのとんでもない発言により、意識は一瞬で引き戻された。

「大丈夫、止めないよ。だって、せつかくあつたかいんだもん。止まっちゃったら、冷たくなっちゃうんでしょ？」

そしたらお隣に運んでもらわなくちゃだもんねと続けながら、こいしはきゅっと手に力を込める。離すまいと縋るように、顔を擦り寄せながら、

「私は蒼衣と、もっと一緒にいたいから。冷たくなっちゃダメ、だよ」

並大抵の相手なら、一撃で理性を粉碎するであろう言葉を放った。

こいしはあくまで触れ合いを求めてるだけなんだと言い聞かせながら、蒼衣は必死に理性の堤防を補強。先のセリフを忘れる為にも、手持ち無沙汰な右手でこいしの頭を撫でて気を逸らすことにした。

だが、二秒もしないうちに蒼衣はその判断を呪った。こいしの髪はふわふわとした触感が心地よく、ずっとこうしていても退屈しないだろうと思わせる程の魅力。もはや魔性とさえ言えるものを秘めていた。ある意味泥沼である。

「撫でてもらってると…、気持ちいい…」

うつとりしたように目を細めるこいしが、ごろごろと喉を鳴らしそうな勢いで頭を擦り寄せる。この子は猫だ、猫なんだと頭に半ば無理矢理刷り込み、蒼衣はどうにか平静を取り戻そうと努力し続ける。

いっばいいいっばいな蒼衣をよそに、んしょという掛け声と共に更にこいしが距離を詰めて来た。足も絡めて来る辺り狙っているのかと思ってしまうが自覚はないらしく、無意識って怖いなあと蒼衣は再認識。

「あ…」

ふと何かに気付いたように、こいしが真下 自らの足元に視線を送る。一体どうしたのかと疑問を口にしようとすると同様、視線を戻したこいしがぺろつと舌を出しながら、

「スカートめくれちゃってる…。でも、お布団の中だからいっか」

L u n a t i c 級の不意打ちを放って来た。

例えるならばそれは、バットすらへし折る剛速球のストレート。完全に意識外であった予想外の投球は、蒼衣の理性を脳天ごと穿つていった。思わず吹き出しそうになりながらも、蒼衣は再度無心に理性の防波堤を補強工事で復旧し始める。まだ五分くらいしか経っていないのに、蒼衣の消耗というかダメージは昼間の戦闘時を遙かに越えていた。ある意味深遠なる闇よりも質が悪い。

「ねえ…、もつと見せて…」

どうにか再び平静を取り戻し、深々と息を吐く蒼衣にこいしはそんなことを呟いた。見せてもらうのは逆じゃないのかと脳裏に一瞬浮かんだ不謹慎な考えを全力で振り払い、蒼衣はこいしへと視線を戻す。

「蒼衣の内側　　表の心とかじゃなくて、もっともつと深い部分。蒼衣の意識していないところ…、私はいっぱい見たいの」

その宝石のように綺麗な瞳は、何もかもを見通すかのような不思議な色を湛えていて。ああ、こいしこの子はやつぱりさあの子とりの妹なんだなあと、蒼衣の頭のどこかをそんな思考が過ぎった。

そんな納得をする蒼衣をよそに、こいしは更に顔を近付ける。何をするつもりなのかとぼんやり考える蒼衣の耳元に、

すぼめた唇から息を吹き掛けた。

「あはっ、びくってなった」

他人どころか自分でもあまり触れない部分に唐突な刺激を受け、思わず蒼衣は体を震わせ硬直する。そんな反応を無邪気に喜び、小悪魔こいはニコニコと笑いながら視線を蒼衣の顔へと戻した。まるで先程の言葉本心を押し隠すかのように。

「お耳、弱い？それとも、もっとして欲しいのかな？」

「全力で遠慮させてもらう」

「うふふ、残念」

からかうような質問を蒼衣は間髪入れずに否定し、連れのないあと
呟きながらもこいしは笑顔。どんな反応を返しても笑顔で流す彼女
を見て、不意に蒼衣は不毛さと徒労感に襲われた。

「俺をからかってそんなに楽しいか？」

「だって、もっとそういう困る顔が見たいんだもん」

悪女か。

そんなツツコミを入れたい衝動をどうにか抑え、蒼衣はもう何度目
になるかわからない溜め息。昔アリスの面倒を見ていた頃の記憶を
必死で漁るが、両者の性格や方向性^{ベクトル}が違い過ぎて参考にならなそ
うなので断念した。それ以前にこいしが言葉程度で止まるはずもな
い。

「なんだか…、どんどん蒼衣のことがわかっていく気分」

その発言を聞いた瞬間、蒼衣は警戒レベルを最大まで跳ね上
げる。

彼を知るということは、悲しみと絶望のどん底に沈んでいた時の記憶を知るということ。それを知るには、今の彼女では弱過ぎる。何より蒼衣自身としても、あの過去を知られたとは思わない。最悪絞め落としてでも眠らせるか？と蒼衣が自問すると同時、

「だって、お姉ちゃんやペット達と寝ても、こういう反応はしてくれないもん。だから、すっごい新鮮」

その心配は杞憂に終わった。どうやら蒼衣が危惧した意味ではなく言葉通りの意味だったようだ。…冷静に考えれば後者以外の選択肢などあるはずもないのだが、十年ぶりに真名解放をしたせいで過敏になっているのだろうか。

「もっと色んな反応見たいな…」

自分のアホさ加減に呆れる蒼衣を眺めつつ、こいしがぼつりと呟く。やがて決心したのか頷きと共に一瞬身を引き、

「がばーっ」

そんなセリフと共に飛び掛かって来た。

よいしょと口にしながら蒼衣の上に馬乗りになり、こいしは満足げ

な笑みを浮かべる。乗られた本人はといえば、あまりの事態に思考回路がショートしていた。…さっきからいいようにされっぱなしである。

「えへへー、乗っかつちゃった」

蒼衣の腹の上に腰を落ち着け、悪戯に成功した子供のようにはしゃぐこいし。位置的にはスカートから覗く白くて細い足も、その奥にあるものも見えてしまいそうなのだが、幸か不幸かお互いそのことには気付いていなかった。

「ペット達に聞いたんだけどね、動物達はマウントポジションを取られたら、もう降参なんだって。つまり私の勝ちだから、蒼衣はもう私の成すがままー」

饒舌に動物界の掟を語ったこいしは、ゆさゆさーと口にしながら蒼衣の体を揺さぶって遊び始めた。まるで兄や父にじゃれつく妹や娘、おもちゃに気を取られる猫を想起させるが、乗られてる蒼衣は相変わらず固まったままで、そんなことを考える余裕すらない。

「…えと、怒った？」

「……………あ、悪い。予想外過ぎて固まってた」

「そっかあ…。重いーとか言われたら、どうしようかと思っちゃった」

こいしも一分近く何も反応を返さないのを不審に思ったのか、揺さぶる動きを止めて恐る恐る尋ねて来る。その瞳は見捨てられるのを恐れる子供を思わせて、ああ、甘え下手なんだなと納得すると共に蒼衣も再起動。安心させるようにそつと頭を撫でられ、こいしが脱力した笑みを浮かべながらじゃあと蒼衣の上で寝そべる。

「このまま抱き着いて…、ぴとーっ」

こいしは先程と同じ、しかし今度は上方からの抱き着きを敢行。蒼衣の胸元に頬を擦り付け、本当に幸せそうな笑みを浮かべる。鼻先を掠める髪から漂う甘い香りから全身全霊で気を逸らしつつ、どうしようもない蒼衣はぼーっと天井を見詰める。が、天井を眺める蒼衣の視界に、ひょっこりとこいしが顔を出して来た。

「うふふ、嬉しい？」

「…その質問、そっくりそのまま返してやるっか？」

「うんっ 嬉しい」

こちらの反応を楽しんでいるのはさっきのやり取りでわかっていたからそう返したのだが、満面の笑顔付きで十倍以上のカウンを返され蒼衣は口を噤む。少なくとも今のこいしには、口でも態度でも勝てる気がしない。

この異変の犯人見付けたら九割くらい人生終わらせてやろうと密かに誓う蒼衣をよそに、こいしはグーの状態である右手から指を一本立てる。そしてその人差し指を蒼衣の眼前に突き付け、

「サブタレイニアンローズっ!!」

彼女の最強のスペルカードを宣言した。

スペルカードとは本来相手に知らせる為の宣言に用いるなんの効力もないカードであり、そんなものがなくとも弾幕を出すこと自体は余裕で出来る。サブタレイニアンローズの威力は身を以って味わっているし、この至近距離では回避も防御も不可能。こいしが何を考えてこのような行動に及んだのかはわからないが、蒼衣は絶命を覚悟して目を閉じる

「えいつ
」

が、襲って来たのは弾幕でも特急薔薇でもなく、柔らかな指先だった。

「えいえいつ ほっへぽよぽよー」

「…にやにすんふぁ」

「あははっ、面白い」

こいしは両の指先で蒼衣の頬をつつき回し、楽しそうにむにむにといじくり回す。ようやく我に返った蒼衣がジト目でツッコミをいれるが、頬をいじられている為上手く発音出来ず間抜けな声になってしまっていた。

「びっくりした？弾幕出るかと思った？」

「…一瞬死ぬかと」

「ふふっ、出るのは私のほっぺつつき攻撃でしたー」

やがてひとしきりいじり終えて満足したのか、両手を引つ込めたこいしの顔は後光が見えるんじゃないかというくらいに輝いていた。真面目に死を覚悟していた蒼衣としては小言の一つや二つ言いたいところだが、嬉しそうなこいしを見ているとアホらしくなって来て

また溜め息。どうしたものと何度目になるかわからないくらい見上げた天井を眺めていると、こいしが眠たげにふあ…と欠伸を漏らす。

「もう…、このまま寝ちゃうね…。おやすみなさい…」

ぱたんと自分で口にしながら、こいしは蒼衣の上に倒れ込む。その割に衝撃は全くといっていい程なく、見た目以上に彼女の軽さを実感させた。

「えへへー…、胸枕ー…」

いや、ある意味それは当然だったのかもしれない。他人と関わることを避けて、今まで生きて来た空っぽの少女。だが逆に言うならば、これから嫌という程たくさんの出会いや思い出を詰め込んで行けるということ。蒼衣はきつとそうだと信じて、優しくこいしの頭を撫でた。

「心臓の音…、安心する…」

蒼衣の胸元に耳を当て、生命の鼓動を聞きながらこいしはそう呟く。子供が母親と寝ようとするのは、自分を産み落とした存在 絶 対的な自分の味方の温かさに包まれて、その鼓動を聞きながら眠りたいから。自然発生する妖怪に、親子なんて繋がりは存在しない。

だからきつと、これがこいしなりの甘え方。

…あんな口約束だけでここまで信頼してくれるなんて、よほど俺が人畜無害な存在に見えたのかね。

ふとそんな思考と共に苦笑を漏らしながら、蒼衣はこいしの頭を撫で続けた。

「…寝ないの？」

こいしがそんな質問をぶつけて来たのは、それから数分後のこと。眠そうな声の発信源を見遣ると、こいしはじーっと蒼衣を見ていた。

「せつかく一緒に寝てるのに…。もしかして、乗っかってるの重いか…？」

単に寝付けないからこいしの頭を撫でてほーっとしていただけなのだが、こいしは恐る恐るそんなことを尋ねて来る。ホント、嫌われることを極端に恐れる子だなと、蒼衣はそんなことを思った。

「そんなことないよね？お布団みたいなものだよ？お姉ちゃんにも重そうにされたことないし、あつたかくて気持ちいいって言うて

くれるし……」

違う違うと苦笑しながら否定して、蒼衣は安心させようとこいしの頭をぽふぽふと叩く。その感触に表情を緩めるこいしを見て、蒼衣も思わず安堵の息。

「眠りつてさ、気が付くと寝ちゃってるものだろ？意識して寝るのって難しいと思うぞ？」

「じゃあ、私が無意識を操ってあげる」

そうじゃないだと再度苦笑し、蒼衣はどうすればわかってもらえるかと思考を開始。じゃあどうすればと不安げな声を漏らすこいしを見て、蒼衣はその判断を即決することにした。

自分の上に乗っている少女をガバツと抱きしめる。

こいしがわつと驚きの声を漏らし隣にずり落ちてしまつが、蒼衣は彼女を離さない。痛みを感じさせない程度に、しかし強く少女を抱きしめる。かつて不安に怯えていた自分を、神^母綺がそうしてくれたように。

「びっくりしたけど……、なんだろ……、安心する……」

そっか、と納得したように呟きながら、こいしは蒼衣を抱きしめる。何かを悟ったのかその顔は、柔らかな笑みを浮かべていた。

「これって…、誰かと繋がってる、って気持ちなんだね…」

手と手みたいに、心と心も繋ぐもの。それを蒼衣に教えてくれたのは、他ならない命の恩人であるあの少女。化け物ではなく蒼衣として、彼を始めるきっかけとなった一人の少女。

そしてそんな風と一緒にいられたら、きつと心安らかに眠れる。かつて自分にとつてのアリスや、神綺がそうだったように。そう思っただけの行動だったのだが、どうやら無事伝わったようで蒼衣は安堵の息をついた。

「…ね、蒼衣」

ふと視線を戻すと、こいしが何かを決心したような、正確に言えば何か思い詰めているような表情で蒼衣を見ていた。躊躇うように口を開き、思い直したように閉じる。そんなことを十回は繰り返し、ようやくその口が、

「お兄ちゃんって呼んじゃ…、ダメかな」

唐突にも程がある、爆弾発言を紡いだ。

「アリスみたいなのは無理でも…、お兄ちゃんと少しでも、深く深く繋がりたい」

頭をハンマーで殴られたような衝撃を受けフリーズしていたが、その言葉と共に蒼衣は再起動。兄妹ということもあり、自分とアリスはかなり仲がいい。…先の一件で多少は不安になったが、それでも大丈夫だと無理矢理信じる。ならそれにこいしが懂れても、確かに不思議ではないか。

更に妹分が増えるのかと苦笑しながら、蒼衣は笑みと共にこいしの頭を撫でる。言外の答えを理解したのか、こいしの顔はあつという間に薔薇色へと彩られた。

「…ありがとう。私をこんなに、大事に思ってくれて」

嬉しそうな表情を浮かべ顔を寄せながら、こいしはきゅつと蒼衣の手を握る。空いた方の手で頭を撫でつつ、蒼衣は再び天井へと視線を戻した。

「無意識から伝わって来るよ…、お兄ちゃんの気持ち。お昼にはあんなに傷付けちゃったのに…、会った時からずっと変わらない、優しいまま」

そんな大層なもんじゃないと否定する蒼衣に首を振り、こいしはそつと自らの胸元に触れる。そこに蒼衣からもらった優しさや感情があると言わんばかりに、愛おしそつに自らを抱きしめた。

「なんで…、なのかな」

そつ口にしたこいしは、蒼衣へと真つ直ぐな視線を送る。心の中の世界で蒼衣に問い掛けた時と同じ、純粋な疑念の言葉を。それに対して、蒼衣は。

「わっかんない」

あまりにも場違いで、能天気な答えを告げた。

「だってそんなん考えたことないし。言うなれば…」

ぽかんとした表情を浮かべるこいしにしてやったりと笑みを浮かべ、蒼衣はそう言葉を続ける。アリスや神綺はいつでも蒼衣に優しく、しかしそれを無自覚に出来るような人達だった。そんな二人に救われて、憧れて。だから蒼衣もそんな風になりたいくて。だからこれは

「無意識、かな」

蒼衣にとって、無意識当然のこと。

「…ふふっ」

しばらく目をぱちくりとさせていたこいしだが、じわじわと蒼衣の言葉が理解出来たのか、口元を押さえて笑みを漏らす。してやられたというよりも、無意識そのという答えが聞けて嬉しかったというような笑いだ。

「…ね。手も、繋いだままでいいかな？」

不意に表情を真剣なものに戻したこいしは、自らが握った蒼衣の手に視線を移した。両手で蒼衣のそれを愛おしそうに撫でさすり、そっと自らの頬へと当てる。

「こつやあって…、お兄ちゃんとずっと繋がったままでいたいから…。だから…、このまま眠らせてくれる？」

引導渡して欲しいみたいなのセリフだなと苦笑しつつ、蒼衣はそつとこいしを抱きしめる。言外の答えに安心したのか、ありがたという

言葉と共にこいしは再度体を擦り寄せて来た。

「それじゃ…、おやすみなさい…」

その一言を最後に、こいしはまるで糸が切れたかのように眠りに落ちた。蒼衣はぼーっと天井を見上げ、こいしの頭を撫で続ける。かつての自分の姿を、その少女に重ねながら。

夜はまだまだ、明けそうもない。

第九話「添い寝」(後書き)

正直に言います。この話書き上げた時ガチで死にそうでした。
無論、こいし可愛いよ的な意味で。

…自己満ですねスミマセンorz

次回は未定(え

詳しくは活動報告で(宣伝

第十話「地霊殿の一日 午前の部」(前書き)

お待たせしました、十話です。…短いW
基本ゆるぐだ路線です。
ではどーぞー。

第十話「地霊殿の一日 午前の部」

地霊殿、客室。ソファやデスクなどの必要最低限の調度品だけが置かれた簡素な部屋。その数少ない家具の一つ、ベッドから一人の少年が起き上がる。やや癖のある黒髪に蒼い瞳が特徴的な少年。言うまでもなく蒼衣だ。

「…八時か」

両手を組みながら伸ばして欠伸を漏らし、壁に掛かった時計を見てそう呟く。灼熱地獄の真上ということもあるが、地底世界故か地熱こがあり部屋は大分暖かかった。地上ではまだ少し冷える春だが、地こ底だと五月くらいの気温だろう。

暖房要らずでエコロジードなあとは呑気に考えつつ、蒼衣は寝間着からいつもの飾り気ないシャツとジーンズに着替える。幼い頃に神綺かみがあれこれ着せていた反動か、蒼衣は最低限の身嗜みさえ整えれば頓着しない性格へとなっていた。…素材そざいが少々標準を越えている為、それでも十分なくらいなのだ。

知らぬは本人ばかりなり。そんなことを知る由もない蒼衣はありふれたスニーカーを履き、ハンガーから取ったこれまたありふれたパーカーを羽織る。すやすやと眠る上海をそつと肩に乗せ、一人と一体は部屋を出た。目指すは食堂、そこで母が用意しているであろう朝食だ。

「…お」

「あ、兄さん。おはよう」

と、一步を踏み出したと同時に隣の部屋から一人の少女が出て来る。金の髪には一見カチューシャのように見える赤いリボンがあり、青いワンピースのようなノースリーブに白いケープ、そして蒼衣兄と同じ蒼い瞳。蒼衣の妹、七色の人形遣いことアリス・マーガトロイドその人だ。

「おはよ。母さんは？」

「多分キッチン。私が起きた時にはもういなかったし」

そっかと頷きを返しながら、蒼衣はアリスの隣に並んだ。ステンドグラスの天窓の下、黒と赤のタイルで出来た床を歩く足音が、朝の静かな空気に生まれては溶けていく。まるで洋風な美術館を二人で歩いているような雰囲気、蒼衣は思わず笑みを漏らした。

「…どうしたの？」

「いや、二人きりだなあって」

「ふたつ…!？」

そんな蒼衣にアリスが不審げな表情を向けるも、予想外のカウンタ―に顔を赤くして黙り込んでしまった。前述したように蒼衣はあくまで感傷的な意味合いで言ったのだが、物事の受け取り方というのは人それぞれ違う。アリスにとって蒼衣は頼れる兄であり、ずっと追い掛けて来た目標であり、何より一番身近な異性でもある。長年一緒に暮らしていたとはいえ、年頃の少女に意識するなという方が難しい。

が、そんなことに全く気付かないまま進んでいた蒼衣がふと振り返ると、両者の距離は十メートル近く開いていた。声を掛けられたアリスもはっと我に返り、心持ち頬を染めながら追い掛け隣　　と　　というより斜め後ろに並ぶ。

「あ、闇のお兄さんに人形遣いのお姉さん」

「隣か。おはよ」

と、ちょうど角を曲がったところで、また別の少女と出くわした。黒の下地に緑の模様が入ったゴスロリ服に、深紅の髪を両サイドで三つ編みにして根本と先をリボンで結んだお下げ。腕や腰、首元、左足にはリボンが巻かれていて、瞳は燃え盛る炎のように赤い。

そして何より目を引くのは頭頂部に黒い猫耳があり、なおかつ側頭部に人の耳があること。

火焰猫燐　地霊殿の主である一人の少女のペットであり、猫が長生きすることで生まれると言われる、火車の妖怪だ。

「つか闇のって…」

「間違っていないでしょ？」

「いやまあ…」

間違っていないとはいえその呼び方はどーよと苦笑と共に内心思う蒼衣。とは言っても彼も愛称のお燐ではなく呼び捨てで燐と呼んでいる為ある意味五十歩百歩なのだが。

「あら、お空はいないの？」

「昨日こいし様に連れてかれてたからそっちじゃないかな？」

「へー、こいしがねえ…」

どうやら最近こいしは毎日誰かと一緒に寝ているようで、昨日本人がそんなこと言ってたなあと思いつく蒼衣。一昨日はさとりだっけかと漏らしながらそのまま歩き出し、そうだねーと肯定した隣が隣に並ぶ。アリスと隣に挟まれる形となった蒼衣だが、幼少時代は女友達ばかりだった為あまり表立った反応はない。…先日のこいしのように迫られるとたじたじだが。

「あ、蒼衣君 アリスちゃんと隣ちゃんもおはよー」

程なくして食堂に辿り着くと、ぽやぽやした少女の声が三人を出迎えた。銀色のロングヘアに、一部を括ったサイドテール。肩口のゆったりした赤いローブと、その上からエプロンを着用している。アリスの母であり蒼衣の義母 魔界の神である神綺だ。どうやら朝食を作っているようで、顔と対照的に手元はテキパキと動いている。これはまあいつもの光景なので問題はない、のだが。

「母さん…、頭のそれは何さ…」

「え？メロンだよ？」

「」「知ってるよ！」「」

何故か彼女の頭の上には網目模様の果物

俗に言うメロンが乗

つていた。何故乗せているのかを問うたのにそんな答えを返して来る神綺^母に、思わずアリスと燐までツツコミ。ふえ？と首を傾げながらも手元はぶれずメロンも落ちない為、凄まじくシユールな光景だった。とりあえず天然神へのツツコミを放棄した三人は、溜め息と共に椅子へ座る。…これが神様だと言ったら外の世界の宗教はいくつ壊滅するのだろうか。

「あの…、あれは一体…？」

「『『『気にしたら負け』』』」

「あ、はい…」

程なくして食堂に来たさとり　薄紫の髪にフリルの多く付いたゆったりした服装と、ヘアバンドなどと複数のコードで繋がれている胸元の第三の目が特徴的な、ここ地霊殿の主である心を読む覚りの少女だ　も当然疑問に思い尋ねようとするが、既にその無意味さを知っている三人が異口同音に放った重い声に押され、冷や汗混じりに頷いた。その後もさとりはチラチラと神綺の方を見ていたが、やがて頭を抱えて溜め息を漏らす。こいし並というかそれ以上に何も考えてない人だから、その心を読もうと試みたことで疲れたのかも知れない。ご愁傷様と三人は内心で合掌。南無。

「ふあ…」

「おはよ…」

頭を抱える人数が増えたところで、こいしと空も現れた。どうやらまだ眠いらしく、二人共まだパジャマ姿で目元を擦っている。遅くまで騒いでいたのだろうかと考える蒼衣をよそに、空はそのまま燐と反対であるさとの隣に、こいしはアリスと反対である蒼衣の隣に座った。この光景にも大分慣れて来たなあと苦笑し、蒼衣は自らに寄り掛かり始めた少女の髪を手櫛で軽く解す。眠たげながらもこいしは表情を緩め、ニコニコと嬉しそうだ。

「出来たよー」

タイミング良く全員揃ったところで神綺が朝食の完成を告げ、お盆に乗せたそれを運んで来る。ハムエッグに生野菜のサラダ、それとテーブルに置かれているトースターと食パン。簡素ながらも芳ばしい香りが食欲をそそる、朝ご飯の定番と言えるメニューだった。

いただきますと七人の声がシンクロし、各々歓談しながら食事を取る。宴会の後は、このような光景がデフォとなっていた。蒼衣に自分の分を分けるこいしをアリスが咎めるのも、空がうつらうつらと舟を漕ぐのも、今となっては見慣れたもの。見た目も年齢もバラバラだが、確かにその食卓は家族のような温かさ一角に包まれていた。

ちなみに例のメロンは、後に生ハムとセットで美味しくいただいたそうな。

そんな朝の一時を終え、自室に戻って来た蒼衣はベッドに寝転がった。緩く放物線を描いて落下して来た上海をキャッチ、また上空に軽く放り投げるといふ謎のループを繰り返しながら、蒼衣は今後の予定を考える。正直なところ地底にはあまり娯楽がない為、日に日に選択肢が狭まっている訳だが。かといってノープランでほつつき回るのも、なんか負けた気がして嫌だ。プチ飛行体験にはしゃぐ上海をぼーっと眺め、一日こうして過ごすのもありかなあとあまりにも非生産的な結論に至ろうとした瞬間、

「がばーっ」

「うおわっ!?!」

意識外からの抱き着きを受けて、蒼衣の口から思わず裏返った声が発される。ジト目で胸元を見下ろすと、先程食堂で別れた少女がいた。

薄く緑がかった癖のあるセミロングの銀髪に緑色の瞳、薄い黄色のリボンが付いた鴉羽色の帽子。二本の白いラインが入った緑の襟と黒い袖が付いた黄色い生地姉の服に、これまた二本の白いラインが入った緑色のスカート。左胸にはさとりと同じ第三の目があり、二本

のコードは両足へと繋がっている。私服に着替えたこいしは無意識を操る妖怪少女だ。おそらく今さっき抱き着く前も、能力を使用していたのだろう。

「ビックリした？」

「…心臓に悪いから程々にしてくれ、マジで」

「お兄ちゃんの反応が面白いからやだ」

脱力しながらも蒼衣が突っ込むが、生き生きとした表情のこいしはこれっぽっちも聞いちゃいなかった。枕にダイブ寸前だった上海を溜め息と共にキャッチして降ろしつつ、蒼衣はとりあえず身を起さず。こいしも蒼衣の上から降りて隣にぺたんと座り込み、ニコニコと微笑んだまま澄んだエメラルドのような瞳で蒼衣をじーっと見上げている。いかにもどうかしたのか聞いて下さい、と言わんばかりの表情だ。

「…どうかした？」

「お散歩行こうよ…！」

とりあえず聞いてみるも間髪入れずに返して来たこいしに苦笑しつつ

つ、蒼衣はここ最近の記憶を漁る。こいしは無意識に身を任せ幻想郷をあちこち放浪する趣味があるらしいが、地底世界はあまり歩き回ったことがないらしい。そして例の宴会　　正確にはその少し前にあつた戦闘か　　以来懐かれた蒼衣は度々こいしに連れ出され、地底世界を探検するのが日課になりつつあつた。

「今日はどの辺？」

「うーん…、灼熱地獄？」

「空の仕事場か…。ちよつと興味あるな」

特にやることもなかった為立ち上がりながら聞いた目的地は、地底世界で最も熱い場所だった。核融合炉心部とかがあるんだっけと眩きを漏らしつつ、蒼衣は上海を肩に乗せ歩き出す。こいしも素直に立ち上がり、蒼衣の左腕に抱き着くようにして隣に並んだ。苦笑しながらもそのまま数分歩き、蒼衣は食堂へと入る。いくら近場とはいえ、この時間から外出してわざわざ昼食時に戻って来るのは面倒だ。ならば適当に何か作って持って行こう、と考えたのだが。

「…あれ、さとりに母さん？」

「蒼衣さん？」

「あ、蒼衣君にこいしちゃんだー」

キッチンには何故かエプロンを装備したさとりが立っており、同じくエプロン装備の神綺と共に何やら作業の真っ最中だった。さとりの手元にはバター、砂糖、卵、小麦粉などがあり、クッキーでも作るのかなと蒼衣は予想。とりあえず聞いてみることにした。

「二人は何を？」

「あ、はい。神綺さんにお菓子作りを教わってまして」

「さとりちゃんは飲み込みが早いから教え甲斐があるよー」

「へえ……」

二人の答えに感心したようにこいしが呟くが、蒼衣はあまり驚いていなかった。神綺は料理が上手いこと、加えて世話焼き好きであること、そしてさとりはこの地霊殿の家事をほぼ一人でこなしていること。それらの式を合わせれば、この光景という解が導き出されても別段おかしくはない。アリスや夢子達を鍛え上げたその腕は折り紙付きだ、さとりは元々上手な方だし、きっとすぐに上達するだろう。

「母さん、ちょっと場所借りていいかな？」

「うん？どしたの？」

「いや、これから出掛けるから昼飯作って持ってこようかなー、って」

二人の邪魔をするのも気が引けるが、蒼衣がここに来た本来の目的はそれだ。指示出しは隣でなくても一応出来るし、五分もあればおにぎりくらいは作れるだろう。多少物足りないかもしれないが、最悪旧都で調達すればいい。少なくとも蒼衣は、そう考えていたのだが。

「そついうことなら私が作るよ」

「え、いやでもさとりに教えてるんじゃない？」

「大丈夫大丈夫 おかーさんに任せなさい」

断ろうとする蒼衣を邪気のない満面の笑みで沈黙させ、神綺は慣れた手付きで調理器具を取り出す。さとりへの指示を継続しながら、水を張った鍋に卵を置き点火。切った豚肉に衣を付けて熱した油へ

投入し、パンの耳を切り落として行く。しばらくして揚がったカツをカットしてパンに挟み、黄身と白身を潰しマヨネーズを混ぜた茹卵をこれまた別のパンに挟んだ。ハムやチーズ、シーチキンのマヨネーズ和えなどのそれらを挟んではまとめ、手早くバスケットに詰め込んで行く。気が付けばあっという間に、二人でもギリギリ食べ切れるかというくらい量のサンドイッチを作り上げていた。

「はい、出来たよー」

にこやかな笑みと共にバスケットを差し出す神綺に、三人は揃って口を噤む。素人が見てもわかる洗練された無駄のない動きはまるで舞のように鮮やかで、彼女がとても遠い存在のように思えたのだ。実際には三十分も経過していたのだが、見惚れていた三人の体感的には五分にも満たない。神綺を良く知る蒼衣もだがこいしはぼかんと口を開いているし、さとりに至っては完全に手元が止まっただけ、その凄まじさを物語っている。

「?どしたの?」

「...いや、母さんって凄いなあ、って」

「神様ですから」

えっへんと胸を張る神綺に苦笑し、蒼衣はバスケットを受け取った。

さとりに軽く挨拶を残し、驚愕から再起動したこいしを促して食堂
を出る。先程とは別人の様に両手を振って見送る神綺に手を振り返
しつつ、蒼衣とこいしは地霊殿を後にした。

第十話「地霊殿の一日 午前の部」(後書き)

うん、ゆるぐだ。

午後の部もきつとこんな感じ。

第十一話「地霊殿の一日 午後の部」(前書き)

お待たせしました、十一話です。：今度は長いW
ではどーぞー。

第十一話「地霊殿の一日 午後の部」

灼熱地獄へのアクセスは至って簡単。地霊殿の中庭からひたすら下に降りて行けば、マグマの煮え滾る灼熱地獄へ一直線だ。デフォルトで飛行能力を持つ幻想郷の住民にとつては、朝飯前な一本道のルート。熱気のある方に向かえばいいだけなので、道案内も必要ない程だ。

ただ、一つだけ。一つだけ、問題があるとするならば。

「わかつてはいたが…、暑いな」

「灼熱地獄、だもんね」

崖から落下しない程度に離れた道なき道を歩きながら、二人がそんな言葉を交わす。マグマの底から三百メートル以上も離れているのに、肌を焼くような熱気はここまで上がって来ている。蒼衣は既に^{バカ}上着を脱いでおり、こいしも袖を捲っているが、それでもなお暑そうだ。先程まではどこから取り出したのか上海がパタパタと団扇で二人を扇いでいたが、今はバテたのか蒼衣の肩で荒い息を吐いている。キョロキョロとある人物を探すこいしを横目に見つつ、昼飯傷まないといいなあと蒼衣が考えていると。

「あ、こいし様に蒼衣!!」

上空からふわり、と一人の少女が舞い降りた。長いボサボサの黒髪に緑の大きなリボン、鴉らしい真つ黒な翼の上から白いマントを掛けていて、その内側には宇宙空間が描かれている。胸元には大きな真紅の目があり、白いブラウスと緑のミニスカートを着用。右足は象の足にも見える溶岩状の固形物で覆われており、左足には電子が絡み付いている。トドメとばかりに目を引くのは、右手に装着された多角柱だ。

霊鳥路空　さとのりのペットであり隣の親友でもあり、太陽の化身である八咫鳥の力を取り込んだ地獄鴉。核融合という途方もなく強大な力を操る、地底世界最強クラスの少女だ。

「お空、やっほ」

「よ、お勤めご苦労様」

こいしの挨拶と蒼衣の労いの言葉に、空はえへへと子供のように純粹な笑みを浮かべる。危険な力こそ持っているものの性格は素直な子供そのもので、言えばきちんと聞くととてもいい子だ。灼熱地獄の管理という仕事もしっかりこなしているし、そう怖がることなどない。

「それにしても、どうしてこんなところへ？」

「お兄ちゃんとお散歩」

「ま、暇潰しにな」

可愛らしく小首を傾げながら尋ねて来た空にこいしが満面の笑顔で答え、その頭をぽふぽふと叩きながら蒼衣も追加説明。そうなんだと頷いた空の視線は、次第に落ちて蒼衣の持つバスケットへと注がれ始める。

「そのバスケットは？」

「サンドイッチ。母さんが作ってくれた昼飯だよ」

「そっかぁ。それにしても、どうしてこんなところへ？」

蒼衣が軽くバスケットを持ち上げながら答えるも、続けて放たれた問いにずっとこけそうになる。先程と一言一句違わぬ質問を大真面目にされれば、そんな反応をしても仕方ない。

「いや、散歩」

「そつか。そのバスケットは？」

「…後でわかるよ」

うにゆ？と首を傾げる空の頭をわしゃわしゃと撫でてごまかしつつ、蒼衣は隠れて溜め息をつく。この少女　　鳥故か物忘れが非常に激しい。鳥は頭がいいはずなのだが、どうやら眼前の少女にそれは当て嵌まらないようだ。主人や親友サトウなどの大切なことは絶対に忘れないが、普段の生活では直前の行動を忘れることもザラだ。なのでこの様な問答は、既に何回か経験している。名前を覚えてもらえただけラッキーだと考え、蒼衣は不毛な思考を打ち切った。

「とりあえず飯食える場所知らないか？」

「うにゆ？もうちょっと先に休憩小屋ならあるよ？」

「じゃあそこで食べよっか」

幸い周辺の地形は覚えていた為　　自らの仕事場なのだから当然
と言えば当然だが　　そこへ三人で向かうことにした。道すがら
聞いてみたが、一週間に一回程度見に来ればいいだけらしい。空が
灼熱地獄の火力調整、温度が下がったら燐燃料が死体を放り込んでの適
宜調整を担当していて、最近は小康状態を保っているとか。空の仲
間である地獄鴉　　こちらは空と違って見た目は鴉そのものだ

が見張っているし、心配はないという。なら遠慮する必要もないし、三人で楽しくランチにしようと蒼衣が考えていると。

「ねえねえ蒼衣」

「ん？」

「どうしてこいし様と手繋いでるの？」

ふと気が付いたような空の質問に疑問符を浮かべながらも、蒼衣は右手へと視線を落とす。そこにあるのは、神綺からもらったサンドイッチ入りのバスケットだけ。だよなあと納得しながら空いているはずの左手へ視線を移すが、それを見た瞬間蒼衣の動きが止まる。

不思議そうに首を傾げるこいしの右手が、しっかりと蒼衣の左手を握っていたからだ。

いつの間にと問い掛けようとするが、不毛だと思い直してやめる。おそらく無意識に無意識を操って、気付かれないようにしていたのだろう。本当、厄介というか心臓に悪い能力だ。

「…なんでだろうな」

「じゃあこいし様はなんで？」

どこか遠くを眺めながらそう答えた蒼衣をよそに、空は質問の対象をこいしへと移す。ふえ？と不思議そうな声を上げるも、

「だって、あつたかいもん」

迷うことなく、満面の笑みで答えた。

「え？でもここ暑いよ？」

「違うよ。あつたかいのは…、ここ」

夏と変わらない温度である灼熱地獄にいるのに何故と聞き返す空に首を振り、こいしは自らの胸元にそつと手を当てる。忘れるはずもない、そこは以前蒼衣が深遠なる闇を被^{ダークマター}うべく触れた、心の在り処だ。

「お兄ちゃんと一緒にいるとここがあつたかくて…、幸せな気分になれるんだよ」

嬉しそうにそう説明するが、よくわかっていないのか空は首を傾げている。文字通り子供のような精神年齢だからか、そういった概念を理解出来ないのかもしれない。

しばし考えて結論が出たのか、空が右手の制御棒を外し背後にポイツと放る。そのままとてと蒼衣の右隣に移動し、

両手で蒼衣の右手を包み込んだ。

唐突な事態に反応出来ずにいる蒼衣をよそに、空は唸ったり首を傾げたりしながら握り方を変えたりしている。核なんて物騒なものを扱っているにも関わらず、空の手は綺麗で柔らかかった。まるで純粹な空の心が、反映されているかのように。

「うーん…、よくわかんないや」

五分程続けていたがやがてその言葉と共に、空が残念そうに手を離す。そうすればわかると思っていたのだから、やはりわからなかったようだ。ようやく蒼衣も我に返るが、しきりに首を捻っている空を見て毒気を抜かれ溜め息一つ。

何が「地底は嫌われ者の住まう土地」か。確かに病気を操る者や心を読む者達もいるが、それはあくまで能力がそうなだけ。パルスイのようにとっつきづらい者もいるが、本人達は至って気さくで優しい。他者との関わりを避ける者も少なくはないが、それは自らの能力で疎まれるのがわかっているから。

そこまで考えて、蒼衣はああと納得する。この親近感に似た感情がなんなのか、ようやく理解出来た。

似ているのだ。かつて能力のせいで親に捨てられ、心を閉ざしていた自分とこの住人達が。自分の場合はアリスや神綺が根気強くこちらに関わって来てくれたが、彼女達にはそのような人物がいない。もし彼女達にとってのアリスや神綺が現れたら

「蒼衣？」

「どづかしたの？」

思わず足を止めて思考に耽っていた蒼衣に、制御棒を拾った空とこいしが気遣うように声を掛ける。なんでもないと笑みを返し、蒼衣は再度歩き出した。

もし、彼女達にとってのアリスや神綺が現れたら。

きっと地底は、とても賑やかになるだろう。

…皮肉にも自らのことであると蒼衣が気付くことは、おそろくない。

「…で、なんで勇儀さんがここにいらっしゃるんですか」

「暇だからだ!!」

「自慢げに言えることじゃないですからねそれ」

その後小屋に辿り着いたはいいものの、そこには何故か星熊勇儀

体操服のような服に青のロングスカートを着用し、長い金髪に赤い一本角が特徴的な鬼の少女がいた。当然酒も入っており、その頬はほんのりと赤らんでいる。前回や前々回の惨劇　もとい絡み酒っぷりを忘れるはずがない。この少女を見た瞬間、蒼衣は自らの警戒レベルを最大にまで引き上げていた。

「うにゅ!!このサンドイッチ美味しい!!」

「お兄ちゃんのお母さんって、ホント料理上手だよなー」

そんな蒼衣をよそに空と蒼衣の膝に座ったこいしは昼飯のサンドイッチをぱくついており、勇儀には見向きもしていなかった。賢明な判断である。まあ酒さえあれば静かにしてるだろうと内心考えつつ、蒼衣も神綺特製の昼飯をいただくことにした。

二人は卵サンドを食べていたので、自然と多めになっていたカツサンドを手取る。ソースの色と香りが染み付いたそれはとても美味しそうだが、相対的にカロリーが多いことも示している。味も病み付きに成り兼ねない程抜群であることを考えればなるほど、確かに女子としてはあまり手を出したくないかもしれない。

そんなことを思いながら、蒼衣はカツサンドを頬張る。噛み締めた肉からジワツと肉汁が染み出し、ソースと絡み合い絶妙なハーモニーを奏でていて、絶品とでも言うべき仕上がりとなっていた。もう母さん以外の料理マトモに味わえなくなるんじゃないだろうか、なんて考えつつ黙々と一つ目のサンドイッチを消化。新たにシーチキンのそれを取ろうとすると、不意に伸びた手がサンドイッチを掻っ攫っていった。

「はい、あーん」

何事かと顔を向けると同時、そんな声と共に蒼衣の眼前へとサンドイッチが差し出される。犯人は誰を隠そう膝の上の少女、古明地こいしだった。

「…何してんの？」

「え？あーんだよ？」

不思議そうに首を傾げるこいしに見ればわかるとツッコミそうになるも、どうにか押し殺した蒼衣は溜め息一つ。元々こういう性格だったのか、抑圧されていた分はっちゃけているのかはわからないが多分両方だろう。そういうことは姉かペット相手にやって欲しい。

「つまんなーい、ぶーぶー」

蒼衣は差し出されたそれから視線を逸らし、自分の手で取ったサンドイッチを食べ始める。が、気に入らなかったのかこいしは頬を膨らませぶんすかと怒るふり。

「相変わらず仲良いなあ。付き合ってるのか？」

「…またそんな下世話な」

そんな様子を見て懲りずにそう問い掛けて来る勇儀に、蒼衣は半目でツッコミ。前はあまりにも唐突でむせたんだっけなあと思いついて返している。

「私達、来月結婚しますっ！！」

「元気いっぱい何言ってるんだお前!?!」

まさかの張本人こいしがボケた。思わず吹き出しそうになりながらも全力でツッコミを入れ、蒼衣はこいしへと視線を移す。

「ん？どしたの？」

「…お前、無意識って言えば何でも許されると思っ
てないか？」

あまりにもわざとらしく首を傾げて尋ねて来るこいしにそう突っ込むと、えへへーと蒼衣に擦り寄って来る。何を言っても通じないと悟った蒼衣は抵抗を諦め、好きにさせることにした。

「え、こいし様と蒼衣って結婚するの!？」

「しないから」

純粹過ぎてボケの通じていないアホ空の子にツッコミを入れつつ、蒼衣は別のサンドイッチに手を付けた。

「うーん…、こんなところかな」

「ん、サンキュな」

「えへへー、どういたしまして!!」

夕方。空の案内であらかたの場所を回り終え、最後の場所である核融合炉心部から出た空と蒼衣はそんな会話を交わす。こいしはと言えばはしゃぎ過ぎて疲れたのか、蒼衣に背負われ静かに寝息を立てていた。無意識にフラフラと歩き回ると、自らの意志であちこち歩き回るのは天と地程に差がある。ここ最近毎日出歩いていたし、かなり疲れが溜まっていたのだろう。

「俺は地霊殿に戻るけど空は？」

「私も帰るよ。お仕事は終わってるし」

そっかとかと呟き、蒼衣と空は同時に地を蹴った。蒼衣は重力を操作して、空は背の黒き翼で飛ばたいて空へと舞う。制御棒と分解の足、融合の足を外した空の手に握られたバスケットから、顔を出した上海が眼下の光景にはしゃいでいた。落っこちないといいなあと心配する蒼衣に、注がれる視線が一つ。気付いた彼がそちらを見ると、空が首を捻りながら蒼衣を見ていた。

「どうかした？」

「…蒼衣はどうやってこいし様を変えたの？」

空の抽象的な質問に首を傾げそうになるも、蒼衣は遅れてその意味を理解する。彼女はあの戦闘を見ていないし、さとりの様に過去を知っている訳でもない。彼女からすればいきなりこいしの態度が変わったように感じるだろうし、だとすれば原因は間違いなく、最近こいしにちょっとかいを掛けていた蒼衣だと思うだろう。こいしの懐きっぷりから考えても、そう推測するのが妥当だ。が、蒼衣は苦笑いと共に変えてないよと答える。

「俺はただこいしを縛ってた思い出から引つ張り出しただけ。だからこれが本来のこいしってことだよ」

実際蒼衣は、自分でその程度にしか思っていない。自分の様に過去に縛られていた少女を、その戒めから解き放つ手伝いをしただけ。結局一步を踏み出したのはこいし自身の意志であり、持ち上げられても礼を述べられても蒼衣はなんとも言えない感情しか抱けない。

「蒼衣は面白いね」

「…褒められているのかバカにされているのか」

そんな蒼衣の言葉にぼかんとしていた空がやがて満面の笑みと共にそう告げ、それに対し蒼衣は苦笑い。悪意はないのだろうか、面白いという言葉がなんとも微妙な感情を抱かせる。

「ところで…、蒼衣はどうやってこいし様を変えたの？」

やっぱり空はアホの子だった。そんな感想を抱きつつ、蒼衣は溜め息混じりに地霊殿への帰途に着いた。

「相変わらず何回見てもすげえなあ…」

夜。相も変わらず賑やかで宴会一歩手前の夕食を終え、蒼衣は地霊殿内部にある天然温泉へと来ていた。地底故か旧都は源泉が豊富で、一部のものは地上に間欠泉を届かせる程らしい。ここ地霊殿も例外ではなく、二、三種類の源泉を引いて温泉が作ってある。蒼衣の眼前に広がっているのも、その内の一つだ。

「うおおあああー…」

やや熱めのお湯が張られた湯舟に入り、なんとも抜けた声を漏らす蒼衣。単にお湯を張った風呂と源泉から引いて来た温泉では、その感じ方には天と地程の差がある。疲れた体に熱が染み渡る様な感覚は普通の風呂でも味わえるが、温泉ともなれば格別だ。全身の筋肉が弛緩していく心地好さを感じながら、蒼衣は脱力して浴槽の縁に寄り掛かる。満天の星空でも見えれば最高なのだが、仰いだ上方にあるのは地底世界をドーム状に覆っている岩盤のみ。入れるだけでも儲け物なので、そのまままったりさせてもらうことにする。

「私が一番っ!!!」

と、どこかで聞いたような声が響くと同時仕切られた壁の向こうから、何かが水の中に勢いよく叩き込まれたような巨大な水音が響く。上方から霧雨のように降って来るお湯に目を細めながら、蒼衣は事態を把握するべく感覚を研ぎ澄ませようとする。

「こらお空、湯舟に飛び込んじゃダメよ」

「転んだりしたら危ないよ〜?」

「うんっ、わかった!!!」

が、それよりも早く先程の声と別の声が二つ聞こえて来たことにより、その行動が実行されることはなかった。空とさとり、神綺のも

のだと思いと同時ようやく合点が行く
女性陣も温泉に入りに来たのだ。

無論蒼衣もその可能性を考えなかった訳ではない。だが、普段からなるべく鉢合わせないように入る温泉や時間帯などのパターンをズラしていた為、その発想がとっさに出て来なかったのだ。仕切りの壁があるとはいえ、男一人で女性陣の話の聞かされ続けるのは精神的に非常に疲れる。というかそれ以上に気まずい。

「それにしても…、ホント温泉ばかりね」

「地底だからね」

「旧都に行けばもっとあるよ？ 銭湯も温泉だしね」

続けて聞こえて来たアリスとこいし、燐の声を背にサツサと上がるうと思ふ蒼衣だが、当然蒼衣は温泉の中。急に動けば水音で悟られる可能性がある上、不幸なことに蒼衣のいる場所は脱衣所の扉から最も遠い位置である。のびのびと温泉を満喫していたツケがこんなところで来るなど、誰が予想出来たであろうか。

「わー、あつたかーい」

「こんな温泉に入れるんなら、案外地底も悪くないわね」

「あ、なんならそれで宣伝して交流するのはどうですか？」

「それもそうね…。そのうち紫さんや勇儀さんに相談してみましようか」

慎重かつ迅速にお湯の中を進む蒼衣だが、そんなことを知る由もない女性陣が待つてくれる訳もなく。まだマシな会話の内に急げと逸る本能を押さえ付け、蒼衣は静かに脱衣所を目指す。

「むー…」

「うにゅ？どうしたんですかこいし様？」

と、湯舟の半分辺りまで到達すると同時、蒼衣の耳は不機嫌そうなこいしと不思議そうな空の声を拾った。嫌な予感に背筋を冷や汗が流れるが、無視してただ進むことだけを考えようと試みる。

「お空って割と胸大きいよね…」

「うにゅ？」

が、その試みは無駄の一言に終わった。不意打ちにも程があるこいの発言に、蒼衣は頭を巨大な鉄槌で殴られたような衝撃を受ける。いくら女子しかいないとはいえ、あくまで向こうからすればだが、あまりにもあんまり過ぎる話題だろうと蒼衣はげんなりするしかない。

「もう…、こいしつたらまたそんな…」

「だってお姉ちゃん！！この六人の中でぺったんこは私達だけなんだよ！？」

「話が全く繋がってないように聞こえるんだけど…」

「アリスちゃんも昔はぺったん…」

「余計なこと言わなくていいからね、母さん」

「…アリスちゃん目が怖い」

が、彼女達には容赦も慈悲もなかった。何故が始まった胸談義にツッコミたい衝動を全力で押し伏せ、蒼衣は無心になろうと頭の中で適当に十桁の掛け算を始めることにする。が、少女達の声はまるで

掘削機でも使っているかのように、蒼衣の脳内にぐいぐいと侵入して来ていた。

確かに蒼衣も昔はアリスや神綺と風呂に入ったことはあるが、それはもう十年以上も前の話だ。それにどこをどう間違っても、あんな身の置き場というか反応に困る会話などしたことがないしする訳もない。こんな珍妙な事態に対応出来るような経験などあるはずもなく、蒼衣はただ神にこの会話が一刻も早く終わることを祈った。…少なくともその祈る相手が母でもあることに気付かない時点で、蒼衣もいっぱいいっぱいなのだが。

「そっぴや神綺さんも結構あるねえ」

「ふえ？そんなことないよ？」

「…説得力が全くないわよ母さん」

「とか言うアリスだってある方じゃない!」

「なっ!?!私は別に標準…!」

「ねえねえさとり様、みんななんの話をしてるの?」

「…お願いだから私に聞かないで」

「うにゅ？」

が、そんな願いが通じるはずもなく、話は加速というか妙な方向にヒートアップしていた。そういやアリスも成長してたなあなど思いかけ、蒼衣は慌てて頭を振るいその思考を頭から追い出す。まさにガールズトーク　　というか一歩間違えばセクハラ紛いの会話に、蒼衣は自らの精神力がガリガリと削られていくのを感じていた。まるで動きを封じられて、少しずつ埋められていくかのような感覚。まるで新手の拷問だ。

これ、スペカに登録出来そうじゃね？いや、ねーよ。そんなセルフポケッツコミで自意識を保ちつつ、蒼衣はようやく脱衣所前の扉へと辿り着く。直線距離にして百メートルにも満たないその旅は、蒼衣にとっては冗談抜きでシルクロード以上の道のりに感じられた。疲労を癒すどころか更に疲れた気がするのは錯覚ではないだろう。

「こっぴなったら…、えーいつ…！」

「え、ちよ、こいしやめ…！」

脱衣所内に入り、扉を閉めた蒼衣は盛大な溜め息をつく。最後に聞こえたアリスの悲鳴は、聞かなかったことにした。主に自身の精神衛生上の為に。

「…戻るか」

手早く着替えた蒼衣はぼそつと呟きを残し、脱衣所を後にした。さつさと寝ようと、それだけを考えながら。

「はぁ…」

湯上がりで火照った体を抱くようにしながら、アリスは人気のない廊下を歩いて行く。先程の風呂での出来事のせいかな、やや疲れているようにも見えた。いきなりこいしが胸を揉みしだこうとして来た為、温泉の中でひたすら逃げ回っていたのだ。水の抵抗と精神的な疲労の相乗効果で、アリスは疲労困憊の状態だった。

「…まあ、死守出来たからいいかな」

自らの体に触れられるなら、やはり最初は自分の好きな人がいい。乙女のような思考回路だが、少なくともアリスはそう思っている。笑うことなかれ、アリスとて年頃の少女なのだから。

好きな人？

しかしそこまで思い至った瞬間、アリスの動きが固まる。何かを想像しているのか心ここに在らずといった体で宙を眺め、やがて頬を赤くし顔から煙を出しながら頭を振ってそれを追い出す。何を考えられているのよ私はと小声で呟きを漏らし、早めに寝ようと止まっていた足を動かし始める。

自分の部屋に入り、ベッドへとダイブ。昼間はひたすら人形作りをしていたせいもあり、アリスの意識は驚く程あっさりと睡魔の闇に落ちて行った。

「おやすみなさい……」

誰に向けたかも定かではない声と共に、アリスは目を閉じる。何故だかベッドからは懐かしさを感じさせる香りがして、安堵の笑みを浮かべながらアリスは眠りに落ちた。

最後にアリスが聞いた音は、扉が開く音だった。

「やっぱり風呂上がりはフルーツ牛乳だよなあ……」

右手に握った瓶の蓋を開け、一気に半分程を煽りながら蒼衣は満足げに息を吐く。キッチンから持ってきて来たキンキンに冷えており、湯上がりの体に驚く程素早く染み込んで行った。

昔、魔界の銭湯に行った時は、七人で仲良く飲んでたっけ。

ふと十年前の色褪せた記憶を思い出し、蒼衣は思わず苦笑を漏らす。夢子達今頃何してるかなあと思いを馳せつつ、蒼衣は自室の扉を開く。瞬間、蒼衣は思わずフルーツ牛乳を吹き出しそうになった。

何故ならアリスが、蒼衣のベッドで寝ていたからだ。

オーケー、落ち着け蒼衣。何事も冷静につて夢子も言っていたはずだ。

とりあえず平静を取り戻すべく、蒼衣は大きく深呼吸。改めてベッドへ視線を移すが、アリスはちゃんとそこにいた。呼吸に合わせて肩が上下していることやベッドが僅かに沈んでいるところを見る限り、幻や兄バカの妄想という線はなさそうだ。

じゃあ何故と考えようとして、蒼衣は一つの理由に思い至る。アリスの部屋は蒼衣の隣であり、ということなら部屋を間違えてもおかしくはない。既に熟睡していることは入ってすぐに寝たのだからうし、だとすれば眠気で判断力が鈍っていたということも考えら

れる。

おそらくそれで間違いないだろうと結論付け、蒼衣は次の思考に入る。原因究明は完了したが、状況は全く変わっていない。このままでは蒼衣が寝る場所がないという問題は、全然解決していないのだ。

プランその一、床で寝る。 起きた時アリスが気にしそう。

プランその二、アリスの部屋で寝る。 妹とはいえ年頃の女の子の部屋で勝手に寝るってどうよ？

プランその三、一緒に寝る。 アホか。

…やはりアリスを部屋まで運ぶのが無難だろうか。アホな脳内会議を終えてそう決めた蒼衣はアリスをそっと抱き抱える。

「軽…」

が、予想していたよりもアリスの体は軽く、思わず声に出してしまった。人形のようなだとは常々思っていたが、ともすれば本当に中が空洞なのではないかと思ってしまう程に。昔抱き抱えた時も似たようなこと考えてなかったっけと苦笑しつつ、蒼衣は静かに部屋を出る。扉を開けてくれた上海に礼を述べつつ、アリスの部屋へとお邪魔する。

入ると同時視界に映るのは、人形作りに使われていたと思われる綿や布と、棚で仲良く眠る人形達。地霊殿に間借りしているとはいえ、生活感を感じられる部屋だった。

そこまで観察した蒼衣は不躰だと己を律し、アリスをそつと横たわらせる。布団を掛けてやり任務完了、さつさと戻ろうと踵を返すと同時に、シャツを引っ張られる感触。何かに引っ掛かったのかと振り返った先にあつたのは、

裾を掴む、アリスの姿。

もちろん起きている訳でもないし、勝手に部屋に入ったことを咎めようとしている訳でもない。ただ赤子が無意識に母親から離れるのを嫌がるような、そんな印象を受けた。

「お兄…、ちゃん…」

どうしたものかと思案する蒼衣の耳に、アリスのその声はしつかり届いた。それは十年前、アリスが蒼衣に対して使っていた呼び名で。過去の懐かしさを感じつつも、思わず苦笑してしまふ。

「…まだそう呼んでくれるんだな、お前は」

起きてる時は絶対言わないだろうなと再度苦笑しつつ、蒼衣はそつと頭を撫でる。さらさらした金髪は柔らかく、手入れの丁寧さを実感させた。頬を緩めるアリスの寝顔を見守りつつ、蒼衣はそのま妹を撫で続けることにした。一晩くらい寝なくとも、蒼衣のよう

な妖怪には大して問題はない。幻想郷に来てからこつちどたばたしてばかりだったので、このくらいはすべきだろう。

「おやすみ、アリス」

可愛らしい寝息を立てて眠るアリスにそう告げ、蒼衣は現在時刻を確認する。十一時　　夜明けには程遠い。仕方ないなと蒼衣は苦笑し、片手で上海と戯れながら夜を明かすことにした。

翌朝、アリスの部屋から悲鳴と爆音が響き渡ったそうなの。

第十一話「地霊殿の一日 午後の部」(後書き)

うん、最後のアリスは完全に思い付きだが反省はしていない(え
次回は紅魔館への導入っぽい感じかなーと。

第十二話「涙、出発、反応」(前書き)

十二話です。投稿間隔極端すぎるWWW
ではごーぞー。

第十二話「涙、出発、反応」

「ま、こんだけ何もなければ問題なしだろ」

最後にもう一度こいしの全身を隈なくスキャンし、ぽふぽふと頭を叩きながら蒼衣はそう結論付ける。椅子に座っていたこいしは嬉しそうな笑顔を浮かべ、背後に控えていたさとりも安堵の息をつく。壁に寄り掛かっていた紫も警戒を解き、神綺は上海とハイタッチしていた。

今日で蒼衣達が地霊殿に滞在し始めてから一週間。つまりこいしの発現から四日が経過している。その間蒼衣はなるべくこいしの傍で過ごしていたが、深遠なる闇の残存反応や後遺症などは一切現れていない。早く人里に向かって感染者らを治さなければならぬ以上いつまでも地霊殿にいる訳にも行かない。なので紫や神綺と話し合った結果、もう一度反応を洗い出し、異常がなかったら地上へ戻ろうということになった。

そして今、その確認も無事終了。これで蒼衣達は心置きなく地霊殿を後に出来る。荷物は既に上海達が纏めていてくれた為、後は紫のスキマを使えば一瞬だ。

「地霊殿ともお別れか…。長いようで短かったな」

「またいつか来ればいいじゃない」

「異変が終わったなら、ね」

感傷に浸りながらそう呟く蒼衣に、アリスと紫がそう諭す。わかつてるよと苦笑で二人に応え、蒼衣は古明地姉妹　　まずは主人さとしの方へと向き直る。

「今まで世話になったな。色々助かったよ」

「こちらのセリフです。こいしのこと、本当にありがとうございませす」

一週間の間部屋を提供するくらい、妹の安全と引き換えなら安いもの。おまけに昔と同じか以上に明るい性格に戻ったのだから、さとりとしては感謝してもし足りないくらいだろう。それらの理由から深々と頭を下げるさとりだが、蒼衣としては当然のことだと思っっている為困ったように笑うしかない。

「ま、色々頑張れよ」

「あ…、はい」

励ますように頭を撫でられ、表情を緩めながらもさとりは力強くそ

う答える。それに満足そうに頷いた蒼衣は、こいしの方へと視線を移す。先程とは打って変わって、その瞳は不安と悲しみで彩られていた。

「お兄ちゃん、行っちゃうの？」

「ああ。まだ異変は解決してないし、いつまでも地霊殿で世話になる訳にも行かないしな」

いくら発現などの事情があったにしろ、蒼衣もここまで懐かれるとは思っていなかった。こいしからすれば自らを救ってくれた恩人である為ある意味当然なのだが、蒼衣からすればそれは当然の行動。同じ事象でもそれに対する自身と他者の認識が違うのは当たり前のことだが、ここまで食い違っていることにはお互いに気付いていない。何と言つか、世界の理不尽さが垣間見える図式である。

「でも、また戦いに行くんだよね？今度は怪我じゃ済まないかもしれないよ？」

「いやまあ…、なんとかなるっしょ」

こいしの言葉についてこの間の戦闘を思い返すが、最終的に神綺が治してくれたし問題はない。母に迷惑を掛けるのは心苦しいが、それでも自分がやらなければまたあんな悲しいことが起きてしまう。な

らば蒼衣は迷うことなく、戦場へと身を投じる。大変だけどいつかは解決出来ると、そういう意味でそう答えたのだが。

「むうー…」

不真面目だと思われたのか、こいしは頬を膨らませて怒りをアピール。あまり怖くはないのだが、このまま放って地上へ戻る訳にも行かない。仕方ないなと溜め息をつき、蒼衣が口を開こうとした瞬間、

こいしの姿が、消えた。

無意識を操る程度の能力　己が有するそれを使用し知覚するという意識すら出来ない深度へと自らを潜らせたのか、こいし の存在を部屋にいた全員がロストする。一体何をするつもりなのかと蒼衣が思考するも、その答えは数秒と経たずに理解することになる。

左手に持っていたワンショルダーバッグが、突然なくなるといふ形で。

「なっ、こいしー!？」

姿を現したこいしが蒼衣のバッグを抱きしめながら、部屋を出て全力で駆け出す。まさかこのような行動に出るとは思わなかった為反

応が遅れたが、我に返ると同時に慌てて後を追い掛けた。

こうして地霊殿を舞台に、地上への帰還を賭けた鬼ごっこが始まった。

部屋を飛び出した瞬間、左側に方向転換したこいしは再び能力を使用。左右どちらの道を行っても、廊下の曲がり角までは距離があり身を隠すことは不可能だ。不意を打ったとはいえ、重力加速が出来る蒼衣に見付かったらその時点でほぼ勝敗は決する。

ならば角まで能力でやり過ぎ、蒼衣の視界から外れるのが最適解。そう考えての能力使用だったのだが、その目論見は上手く行った。部屋を飛び出したはいがこいしを視界に捉えられず、蒼衣はキョロキョロと辺りを見回している。

その光景を見て勝利を確信した笑みを浮かべたこいしは、角を曲がなるべく右足に力を込めた。全体重が右足へと掛かるが、そのまま地を蹴れば蒼衣の視界からは外れる。だからこいしはそうした。

勝った。自らの勝利を確信したこいしは能力を解除。ペース配分の為やや速度を落とし、そのまま無人の廊下を駆け出そうと

「捕まえた」

「ふえっ!？」

したが、それは叶わなかった。不意に眼前に現れた人影が、こいしを軽々と抱き留めたからだ。間違えるはずもない、何度も飛び込んで行くうちに覚えたこの感触の持ち主は、世界でたった一人だけ。

「ったく…、何考えてんだお前は？」

こいしを床へと降ろした蒼衣は、呆れたような笑みと共にそう尋ねた。バッグを取り返す素振りも見せず、ただこいしの言葉を待っている。

「だって…、だって…!!せつかく昔みたいに戻れたのに…!!一緒にいてくれるって言ったのに…!!」

だから、こいしも。辛うじて心の中に押し込められていた言葉を吐き出してしまふ。なんでもないうように振る舞えていても、やっぱり本当は一人でいることが怖くて。少しは前に進めたけれど、先の見えない暗闇はやっぱり怖くて。

だから心の拠り所である蒼衣が地霊殿から出ると聞いた瞬間、こいしは足元が崩れるような感覚を味わった。

「やだよ…、離れたくないよ…」

ポロポロと涙を零しながら、こいしは蒼衣の体を思いつ切り抱きしめる。まるでそうしてないと、蒼衣が今すぐにでもいなくなってしまうと言わんばかりに。

そんな様子を見て、蒼衣は心中で己の迂闊さを呪う。尋常ではない程の信頼や甘えっぷりは知っていたが、まさかここまで自分の存在が彼女の中で大きくなっているとは思わなくて。

だからこれは、放って置けないからと後のことも考えず、今までそうして来た自分の行動が招いた事態。ならば蒼衣がすべきことは

「昔みたい、じゃないだろ？例えどんな在り方でも、こいしはこいしなんだから」

こいしをそつと抱きしめ、優しく頭を撫でながらそつ諭す。今までがどうだったにしろ、こいしはこいし。蒼衣が親に捨てられたことや元人間であることは変えられないのだから、今も昔も自分は自分。少なくとも蒼衣はそう考える。

「それに…、俺はちゃんとここにいるだろ？」

こいしの胸元を指差しながら、蒼衣はニツコリと笑い掛けた。いつだって心の中には、大切な人への思いが息衝いている。アリスも、神綺も、魔界のみんなも、いつだって蒼衣の中にいるのだ。まるで死んだみたいだねとかつて呆れられたこともあるが、そんな風に支え合っているのは自分だけではないと蒼衣は思う。

「寂しいかもしれないけど、また会いに来るから。それまでに友達たくさん増やしてさ、俺に紹介して驚かせればいいじゃないか。お前はもう、一人じゃないんだから」

こいしの澄んだ瞳を正面から見据え、蒼衣はそう諭す。さとりや空に燐、勇儀達だって傍にいる。ただ気が付くのが難しいだけで、彼女を思ってくれている人達はたくさんいるのだから。

「…ズルいよ」

その一言を告げると同時、こいしが肩を震わせ始める。断続的なそれは悲しみではなく、むしろ対極。笑いのそれだった。

「そんなこと言われたら私…、頑張らなきゃじゃない…」

泣き笑いのような表情で呟きながら、こいしは再度蒼衣を抱きしめる。これで最後だからと、自らに言い聞かせながら。好きになった

方が負けってホントなんだねと、こいしは以前何かの本で読んだ一文を思い出していた。

「…ありがとう、お兄ちゃん」

数分後、ようやく落ち着いたこいしが礼と共に蒼衣から離れた。名残惜しそうな彼女を見て思わず手を伸ばしそうになるも、蒼衣はそれをどうにか堪える。きつと今触れたら、こいしの決心が揺らいでしまうと思ったから。

「さ、戻るぞ」

「あ、待って」

だから蒼衣はそれだけを告げ、バッグを拾って歩き出す。が、三歩も歩かないうちに背後から呼び止められた。何かあったのかと振り向き尋ねようとした瞬間、

「えいつ」

頬に触れる、柔らかな感触。

「えへへー、お返し」

頬を染めながら悪戯に成功した子供のよような笑みを浮かべ、こいしは軽やかな足取りで廊下を歩き出す。が、蒼衣の脳内は先程の出来事にフリーズしており、間の抜けた表情でこいしの様子を眺めていた。

無意識って怖いなあと、そんな認識を再確認した午後であった。

「話は付いた？」

「うんっ」

「…一応は」

部屋に戻って来た二人に放たれた紫の問い掛けに、しかし返されたのは対極的な答えだった。当然明るい方がこいしで、疲れたような

声が蒼衣だ。さとりやアリスはそれに首を傾げるが、紫は全てを見ていたと言わんばかりにニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべている。…神綺はといえばいつものぽけぽけ顔だが。

「じゃ、行きましようか」

ニヤニヤ笑いはそのままに、紫がスキマを展開する。荷物を抱えた上海達が先陣を切り、アリス、神綺が続く。残ったのは古明地姉妹と、来る時同様紫と蒼衣だけ。

「…まあ、なんだ。二人共頑張れよ」

相変わらずニヤニヤしている紫に鋭い視線を飛ばしつつ、頭を掻きながら蒼衣がそう呟く。二人は姉妹らしく全く同じタイミングで頷き、それがなんだかおかしかった。

「じゃ、またな」

「ええ、またいつか」

「お兄ちゃん、またね!!」

最後までニヤニヤを崩さない紫がスキマに引つ込んだのを見届けてから、蒼衣は片手を上げそう言い残す。柔らかな笑みのさとりと元氣いっぱいの子いしに見送られ、蒼衣はスキマへと飛び込んだ。

「…おお」

来る時同様奇妙な感触を味わうこと数秒、蒼衣の眼前にはマーガトロイド邸があつた。一週間ぶりだなあと伸びをしつつ、振り返つた背後にはアリスと神綺。紫がないことを不審に思うが、ふと横を見れば頭一つ高い位置に紫の胸があつた。本来なら紫の身長は神綺と同程度　蒼衣より少し低いくらいなのだが、宙に浮くU字のスキマに腰掛けている為彼女の視点は二メートルを越える位置にある。彼女のことだから、あまり深い意味はないのだろう。

「で、これからどうするんですか？」

「とりあえず荷造りして来なさい。その後スキマで人里に案内するわ」

見上げながら尋ねる蒼衣に、足を組みながら紫がそう答える。地霊殿への急行は完全に予定外だった、荷物の類いは紫が適当に持って来たものだ。それにしても必要最低限というレベルしかなかったの

で、今回はあらかじめ準備しろということなのだろう。蒼衣はともかくアリスや神綺の場合、必要なものも多いはず。なんなら自分だけ先に行こうかと蒼衣が口にしようとした瞬間、

どくんっ!!

「っ!?!蒼衣!?!」

「わかってます!?!」

心臓の鼓動によく似た、しかしあまりにも異質なそれを感じた紫が声を上げ、蒼衣も答えながら目を閉じ感覚を研ぎ澄ませる。雨水が地面に染み込んで行くようなイメージで己の闇を幻想郷全土へと広め、呼応する反応を探し出す。やがて蒼衣が向き直ったのは北東

山の見える方角だった。

「そっちの方にあるのは霧の湖と紅魔館よ」

「今回の感染者は…、位置的に遠い方にいます」

「よりによって紅魔館…、最悪ね」

アリスの補足に蒼衣がその解を結論付け、紫が顔を歪めながらそう呟く。紅魔館　妖怪の山の麓に位置する霧の湖、そこに隣接している西洋風の紅い館。運命を操る吸血鬼や七曜の魔女、時を操るメイドが住む幻想郷内でも危険度の高いエリアだ。

「…ともあれ里の人間には悪いけど、行き先変更ね」

「ですね…」

仮にそんな場所の住人が発現すれば、こいしの時以上に被害が出るのは明白だ。千を殺し万を救うという訳ではないが、優先度的には紅魔館の方が上回る。少なくともそれなら、これから起きるかもしれない被害を抑えられるのだから。狙ったかのようなタイミングに思うところはあるが、かといって見過ごすのは論外。ならば、すべきことは一つだけだ。

「私は霊夢と魔理沙に声を掛けて来るわ。先に行つて」

それらの思考をコンマ数秒で済ませ、紫が二つのスキマを展開する。片方のスキマに身を埋めつつ、そう言い残した紫は姿を消した。もう片方のスキマが紅魔館へと繋がっているのは、どう見ても間違いないだろう。

「…じゃ、行くか」

「ええ」

「うん」

背のバッグを背負い直し、蒼衣はそう呟きながらスキマを見据えた。アリスと神綺の答えを聞き届け、スキマへと突入する。三人を呑み込むと同時にスキマが宙に溶け、後に残るものは何もなかった。

木々を不気味に揺らす、嫌な風以外には。

第十二話「涙、出発、反応」(後書き)

やらかした感がry

次回、紅魔編本格始動。

第十三話「紅い館の住人達」(前書き)

お待たせしました、十三話です。

基本的に紅魔組の顔見せ回みたいなものなんで期待しないでください

いw

ではごーぞー。

第十三話「紅い館の住人達」

「…悪趣味だな」

スキマから出て来た蒼衣は眼前のそれを見て、思わず率直な感想を口にしてしまう。赤、朱、一面の紅。壁から屋根、果ては時計台まで全てが紅く染め上げられた西洋風の屋敷が、三人の目の前にあったからだ。目に悪いことこの上ない外観なのだから、その感想はある意味当然とも言える。庭に植えられている花や木がなければ、もつとひどかったかもしれない。

「…見入ってる場合じゃなかったな」

そのあまりにも周囲から浮いた屋敷から視線を外し、蒼衣はしばし思考する。悪趣味なのはいただけだが、これだけの館となれば人の一人や二人は確実にいるはず。地霊殿の時のように館の主と話をしなければ、今後の活動に支障を来すのは明白だ。なのでドアノックカーなりチャイムなりを探さなければならぬ、のだが。

「…あれ、何だよ？」

ぼやく蒼衣の視線の先　立派な紅い門の前に、一人の少女がいた。華人服とチャイナドレスを足して割ったような淡い緑色の服を着ており、龍と書かれた星の飾りが付いた帽子を被っている。髪は

赤く腰まで届くストレートで、側頭部を編み上げリボンをつけて垂らしていた。身長も幻想郷内では割と高めで、すらりとした足がスリットによく映える中華系の少女だった。

だが、それはまだいい。門の前に人がいる程度でぼやく程、蒼衣は狭量な人間ではない。彼が少女に呆れている理由、それは

彼女が立っただまま寝ていることだ。

「お昼寝中、かなあ？」

「相変わらずよく寝る門番ね……」

神綺が首を傾げながら疑問を零す横で、アリスは口から溜め息を漏らす。わざわざ門の前に立っているということは門番や護衛などの役職なのだろうが、寝ていてはなんの意味もない。ちなみに寄り掛かりもせず立ったまま寝るといふのはある意味凄まじく難しいのだが、驚きよりも呆れが上回っている為感動もへったくれもなかった。

「…アリス、あれの知り合いか？」

「一応ね……。とりあえず起こして話を聞いてもらわないとただけど……」

「でへへ…、咲夜さん…」

上海と遊び始めた神綺をよそに、蒼衣とアリスは顔を寄せてひそひそと話し合う。二人が視線を送った瞬間少女がアレな寝言を漏らし始めた為、二人は揃って盛大な溜め息。無断侵入はさすがに避けたいし、どうしたものかと考え

「あの…、紅魔館に何かご用ですか？」

ようとするが、背後から掛けられた声でそれは遮られた。振り返った二人の視線の先、一人の少年がいる。黒い執事服を着こなした、細身で背の高い少年だ。見た目が十九歳くらいだから、青年と言っべきかもしれない。髪も瞳も黒く、手には買物袋を提げている。

「あなたは？」

「私はあの館で執事をしている者です。何かあるなら私が承りますか？」

いかにも「ちょっと買い物に行った帰りです」と言った風情の少年に蒼衣が問い掛けるも、少年は完璧な営業用スマイルでサラリと切り返して来た。相手の家の前でたむろっていた形になるのだから、

その瞳にやや不審そうな色があるのは仕方がない。

「俺はアリスの兄で蒼衣といいます。出来れば館の主人と話がしたいんですが、お願い出来ますか？」

「確認するまではつきりとした返事は出来ませんが…、そちらはアリスさんですよね？」

こんなところでいざこざを起こすつもりもないので、蒼衣は自己紹介と共に単刀直入に用件を告げた。それで納得したのかふむと頷いた少年は目から不審の色を消し、アリスへと向き直り一つだけ尋ねる。唐突に話が回って来て多少驚きながらも、アリスはしっかりと頷いた。

「アリスさんはパチュリー様から「通しても構わない」と言われている方の一人ですし、そのお連れ様なら問題ないでしょう。お嬢様との面会については確認して来ますので、それまで大図書館でお待ちください」

再確認するように呟きながら買物袋を漁り、差し入れなのか紙パツクの烏龍茶を少女の足元に置きながら少年はすたすたと門を通過する。あまりにもあっさりとした態度に呆気にとられるも、蒼衣とアリスも神綺を引きずるようにして後を追った。

「あの、あなたは？」

蒼衣の肩に上海が乗るのを確認してからふと思い出したように放たれたアリスの問いに、ああ、これは失礼と少年が軽く頭を下げる。館への扉を背後に少年が向き直り、先程とは打って変わって真面目な表情になった少年が瀟洒に一礼した。

「申し遅れました。私はこの館、紅魔館のメイド長である十六夜咲夜さん直属の執事、あざいむと申します。以後お見知り置きを」

「うわ…、広いな…」

あざいむという奇妙な名前の執事に案内され、蒼衣達は紅魔館地下の大図書館に来ていた。見渡す限りの空間に本棚が敷き詰められていて、魔導書から学術書、図鑑に漫画まで幅広いジャンルの本が整頓されている。窓がない為薄暗く埃っぽいが、書物が歩んで来た時の流れを雄弁に語っているようにも感じられた。

「ここにアリスちゃんの知り合いがいるんだっけ？」

「ええ、魔法使いがね。こあー？」

こんな状況でも全く自分のペースを崩さない神綺がアリスに振り返り、アリスも頷きと共に奥の方へと声を放る。するとはいいと返事が聞こえ、数秒もしないうちに一人の少女がこちらに駆け寄って来た。

白いシャツに黒いベスト、同色のロングスカートを着用しており、髪は赤い長髪で頭と背中に蝙蝠のような羽が生えている。失礼な上に陳腐な表現だが、悪魔という言葉がピッタリ似合う少女だった。

「アリスさん、お久しぶりです」

「久しぶり。元気にやってる？」

「もちろんです」

やって来た少女と親しげに二、三言交わしたアリスは兄と母に向き直り、彼女を前に押し出す。改めて見ると顔立ちも整っており、幻想郷には俺以外美形しかいないのかと蒼衣はどこかズレた感想を抱いた。…かく言う蒼衣自身も割といい方なのだが、自覚がないというのは皮肉である。

「紹介するわ。この大図書館の司書をしている名無しの小悪魔よ。私達はこあって呼んでるわ」

「小悪魔です。気軽にこぁと呼んでください」

アリスの紹介と共に少女

こぁがぺこりと頭を下げる。小悪魔

力の弱い悪魔というカテゴリで括った呼び名であり、本来は強い悪魔などに仕えるという西洋妖怪だ。ということはこの館には悪魔、もしくはそれに準ずる何かに住んでいるのだろうと蒼衣は思考。まあ後でわかるかとそれを頭の片隅に押しやり、現実へと意識を戻す。

「よろしくねー、こぁちゃん 私はアリスちゃんのお母さんの神綺です」

「俺は蒼衣。アリスの兄だ。よろしく」

礼儀として名乗り返す神綺と蒼衣だが、ふとこぁが首を傾げ蒼衣を上から下まで眺め回す。どうかしたのかと尋ねようとすると同時に、こぁが納得したようにぽんと手を打った。

「なるほど、つまりアリスさんの言っていたお兄さんが蒼衣さんだった訳ですね」

「？知ってるのか？」

「はい それはもう昔の話とか二人の馴れ初めとか…」

しきりにうんうんと頷くこゑに投げ掛けた質問は、しかし得意げな顔という残像を残して宙に溶ける。蒼衣が視線を右にズラしたその先、壁の隅にこゑを追い詰めたアリスの姿があった。

「こゑ、それ以上余計なことを言ったらワイヤーで吊すわよ?」

やや遠い為アリスの声はよく聞こえなかったが、こゑが顔を青ざめさせながらぶんぶんと首を縦に振っていることは確認出来る。よろしいという呟きと共にこゑを解放し、何事もなかったかのようにアリスが戻って来た。

「…どうかしたのか?」

「!?!? ななななななんでもないわ!?!」

「いや、顔真つ赤だぞ? 熱でもあるんじゃない?」

「なんでもないから!?! ホント!?!」

当然不審に思つた蒼衣が尋ねるも、こゝとは対照的に顔を赤くしたアリスが首を振つて否定。風邪でも引いたのかと心配し伸ばされた蒼衣の手を押し止め、無理矢理納得させるかのように声を上げるアリス。そこまで言うならと蒼衣が諦めると同時、アリスの顔が安堵で彩られたのは仕方ないとも言える。

「で、パチュリーは？」

「いつも通り奥で魔導書を読んでらっしゃいます」

そつと頷きを返したアリスは、勝手知つたる足取りですたすたと歩き出す。こゝに案内され蒼衣と神綺も後に続き、数分もすると少し開けた場所に出た。

「…来たわね」

休憩兼調べ物用なのか、チェアとやや大きめのテーブルが設置されている。そしてそこに、一人の少女がいた。分厚い本から顔を上げた彼女は、不健康というか暗いイメージを抱かせる少女だった。

長い紫色の髪の毛をリボンで纏め、紫と薄紫の縦縞が入ったゆつたりとした服を着ている。更にその上から薄紫の服を羽織り、頭にはドアキャップに似た帽子。また服の各所に青と赤のリボンがあり、帽子には三日月の飾りが付いていて、それらの容姿は魔女というワードを想起させる。そしておそらく、事実その通りなのだろう。

「いらっしゃい。二週間ぶりね」

「ええ、色々あってね」

こゝと同様親しげに言葉を交わし、空いているチェアに腰掛けるアリス。こゝに促されとりあえず座った蒼衣と神綺の眼前、湯気を立てる純白のカップが置かれた。ふと視線を上げれば、いつの間にか二人の背後に一人の青年がいた。あざいむと同じ漆黒の執事服を着ていて、しかし髪は茶色だ。二十代くらいだろうか、しっかりした体つきの青年で、顔には穏和な微笑みを浮かべている。手にはティーポットを持っており、紅茶を淹れたのが彼であることは明白だ。

「あなたが蒼衣と神綺ね。話は聞いているわ。私はパチュリー・ノールレツジ。紅魔館の主人とは親友で、この大図書館に住んでいる魔法使いよ」

「初めまして、アリスちゃんのお母さんです」

「同じく兄です」

執事が多いなあと思考するよそに魔女の少女　パチュリーが自己紹介を始め、神綺と蒼衣も挨拶を返す。二、三度頷いたパチュリ

ーは手元に置かれたカップを手に取り、ゆっくりと紅茶を飲んだ。

「…まあ、悪くないと思うわ。レミィなら「ヤダー!!」とか言いそうだけど、私はこの味好きよ」

「あ、ありがとうございますっ!!」

「パチュリー、この人は？」

「あつと、自己紹介がまだでしたね」

表情一つ変えず紅茶の味を評価するパチュリーに、感極まったのか執事の青年が礼と共に頭を下げた。そんな様子を見て疑問に思ったのかアリスが尋ねるが、名乗っていないことを思い出したのかすみませんと頭を下げ、青年が改めて向き直る。

「僕は執事研修中のコウと言います。今はパチュリー様にアドバイスをいただきながら紅茶の淹れ方を勉強中です」

「…紅魔館、大分賑やかになってない？あざいむって執事も初めて見たし」

「最近幻想入りして来る人が多くてね。珍しく咲夜が拾って来たのよ」

「犬かよ…」

青年　　コウの挨拶に神綺と頭上の上海がこくこくと頷き納得するが、アリスは微妙な表情でパチュリーへと向き直る。

蒼衣は知る由もないが紅魔館という広大なお屋敷が維持出来ているのは、偏にメイド長の力に依るところが大きい。メイド妖精はあまり労働力にならない為、確かに使える人員は欲しいだろう。

だが、女性しかいない紅魔館に男を入れるのはどうなのか。そういった意味合いも含めてのアリスの疑問だったのだが、パチュリーの答えは当の本人が原因というものだった。蒼衣のツツコミを黙殺し、なら仕方ないかとアリスも溜め息と共に追及を終える。

「で、いきなりどうしたの？週一で来てたのにそれが途切れたってことは、何かトラブったのかしら？」

こあが運んで来たお茶請けのクッキーを頬張りつつ、パチュリーがアリス、蒼衣、上海とクツキーを重ねて遊んでいる神綺と順に視線を移し、何も見なかったことにしてアリスと蒼衣に視線を戻す。蒼衣も呆れて視線を逸らしつつ、ふとパチュリーの言葉に引っ掛かりを覚えた。

「アリスさんは魔法の研究の為にうちの図書館を利用しに来るお得意さんなんですよ」

「なるほど…」

週一という言葉に蒼衣が首を傾げるも、こゝろがこつそりと耳元で真相を教えてくれたので納得する。確かにこれだけの蔵書量なら、魔法の研究と言わず調べ物にも持って来いだ。かくいう蒼衣も先程から興味深そうな本をいくつか見付けており、手を伸ばしたくてうずうずしている。今は一応自重しているが。

「話したいのは山々なんだけど…、この後レミアアに会って同じ説明をしないとだからそれまで待つてくれないかしら？」

「…割と真面目な話みたいね。いいわ、待つてあげる」

ありがとと呟きながらアリスもカップに口を付け、紅茶を飲んで一息つく。クッキータワーが崩れてしまいどんよりしたオーラを纏い始めた神綺アホの子達と上海から視線を外し、蒼衣も紅茶をいただきリラックス。

「お待たせしました」

と、不意に音もなく蒼衣の背後から少女の声が響く。気配すら感じさせず一瞬で現れた何者かを警戒すべく、一瞬で立ち上がりながら振り返った先にいたのは一人のメイドだった。

銀色のボブに両方のもみあげ辺りから、先端に緑色のリボンを付けた三つ編みを結っている。青と白を基調としたミニスカートタイプのメイド服を着用しており、頭にはカチューシャを装備。涼やかというかクールさを感じさせる、十代後半くらいの少女だった。

「初めまして。この館の主レミアお嬢様お付きのメイドで、メイド長の十六夜咲夜といえます。お嬢様との謁見許可が出ましたのでお迎えに上がりました」

唐突に現れた少女　　咲夜は何事もなかったかのようにお辞儀と共に自己紹介。周りはその様子を意に介していないのか、蒼衣のような目立った反応は寄越さない。

「…今のはなんだ？」

「ちょっとした手品、と言っておこうかしら。アリスのお兄様」

「…蒼衣だ」

蒼衣と問いにもはぐらかすような答えだけが返され、名前の訂正にも失礼と軽く頭を下げるだけ。知らない顔で警戒しているのかその声は堅く、最低限の会話は成立するものあまり話せそうにない相手だと蒼衣は思考。まあいきなり押しかけて主人に会わせるなどと言つ相手を信頼する方がおかしいか。

「そう、わざわざありがと。パチユリー、いいかしら？」

「ええ」

「…パチユリー様も？」

「必要なことよ」

「…そう」

紅茶を飲み終えたアリスが立ち上がりながら声を掛け、答えつつパチユリーも立ち上がる。咲夜が怪訝な表情を見せるも、アリスの言葉に納得したのか深く追求はして来なかった。アリスとは面識がある為か、砕けた口調で話していたようだが。

「それではご案内致します。最強の吸血鬼、紅い悪魔の二つ名を持つ我が主　レミリア・スカーレットお嬢様のお部屋へ」

そんなことを思う蒼衣をよそに、咲夜がスカートをつまみつつ一礼し口上を述べる。西洋風の廊下と相俟って、その姿はまるで一枚の絵画のように様になっていた。

第十三話「紅い館の住人達」(後書き)

名前すら出てない美鈴さんw

二名程知らない方がいますが気にしたら負けです(え

次回、カリスマ(笑)とご対面でs(グングニル

第十四話「紅い館のご主人様」(前書き)

お待たせしました、十四話です。

いよいよ紅い館のご主人様の登場です。

ではどーぞー。

第十四話「紅い館のご主人様」

「こちらです」

咲夜に連れられ歩くこと数分、蒼衣達は一つの扉の前へと辿り着いた。その大きな紅い扉は重厚な雰囲気漂わせており、この巨大な館の主がいるのに相応しいとも言えるオーラを放っている。

「お嬢様、お連れしました」

「さ、咲夜！？ち、ちょっと待ってて！！」

やや緊張した蒼衣が息を整えると同時、咲夜が扉をノックし主人へと客人の到来を告げる。だが返って来た声は予想とは裏腹にやや、というかなり慌てた様子の、幼い少女のものだった。

「もう来ちゃうなんて…、こつなつたら…！！」

「あ、お嬢様そんなはしたない…」

その少女が何かをぶつぶつと呟くと同時に、別の少女の声と共に金属と陶器が擦れ合うような音が断続的に響く。まるで何かを掻き込ん

でいるような、そんな印象を受けた。訳のわからない蒼衣達は、互いに顔を見合わせて首を傾げるしかない。

「いいわよ!!」

「かしこまりました。どうぞ」

三十秒程経つと、中から幼い方の声が入室を許可した。咲夜はそれに一礼しながら扉を開け、蒼衣達を中へと促す。

その部屋は、かなり広かった。さすがに大図書館程ではないが、主が住まうには十分過ぎる程の広さを持っていた。壁から床、拳句天井までが紅く、調度品の白と混ざり合ったそれは部屋の品格を高めている。天蓋付きのベッドやソファ、ティータイム用のテーブルなども置かれていて、ここでの暮らしはかなり快適そうだ。

そんな紅い部屋の中、チェアに一人の少女が腰掛けていた。白みの強いピンク色のナイトキャップを被り、同じ色のゴスロリ風ドレスを着ている。背にはこゝ同様悪魔のような翼があり、腰回りには大きなリボン。サラサラの銀髪は青みを帯びていて、瞳は血のように紅い。まさに吸血鬼という種族を体言したような、しかし可愛らしい少女だった。

「よく来たわね。歓迎するわ」

威厳たつぷりな声で少女は蒼衣達を歓迎するが、蒼衣達は何も答え
ない。いや、答えられない。何故なら

少女の頬に、ベタツとケチャップが付いていたからだ。

目の前のテーブルに空っぽの皿とスプーンがあることを踏まえれば、
彼女が直前まで食事中　　大方オムライスかその辺りだろう

　　だったであろうことは想像が付く。先程の掻き込むような音は、
おそらくそれが原因だろう。蒼衣達が来ると知って、急いで昼食を
食べたのだ。…結果としてこのような光景を見ることになるとは、
誰も思っていなかっただろうが。

「私がこの館の主の…、何笑ってるのよ？」

そのまま自己紹介に移ろうとするも、腹を抱えて爆笑している上海
や口元を押さえているアリス、微笑ましそうな笑みを浮かべる神綺
にやれやれと溜め息をつくパチュリーを見て、少女がムツとしたよ
うに呟く。そんな子供らしい怒りの表現に、四人は笑いを濃くする
だけ。

「…いや、頬にケチャップが」

「……………!?!?」

そのまま黙っているのも可哀相なので、吹き出しそうになりながらも蒼衣がこの状況を作っている元凶を告げる。何を言っているのかわからないと言った風情で少女が首を傾げるも、スプーンに反射して映った自分の顔を見た瞬間、サツと頬に羞恥の赤を浮かべる。

「りん！！なんで言わなかったのよ!？」

「すみませんお嬢様、実は私目が見えないんです」

「~~~~っ!!」

思わず少女が背後に控えるメイドの少女に食ってかかるも、りんと呼ばれた少女はいかにも嘘くさい言い訳と共に微笑ましい笑みで主人を鑑賞しているだけ。ちなみに唯一味方になりそうな咲夜はといえば、主人の慌てっぷりとそれを仕組んだメイドの少女にサムズアップしていた。誰一人味方のいない少女の頬、その赤があつという間に顔全体に広がり、

「うーっ!!」

昼下がりの紅魔館に、少女の叫びが響き渡った。

「…さて、改めて自己紹介と行きましようか」

メイドの少女から受け取ったハンカチで頬を拭き終え、少女がこちらへと向き直る。椅子が高い為足が床に届かずぷらぷらしているのがなんとも言えない感想を抱かせるが、話が全く進まなくなるのでその場の全員がスルーした。

「私がこの館の主、レミリア・スカーレットよ。歓迎するわ」

「…いきなり押しかけた割には寛大だな？」

「だからといってわざわざ無下にする必要もないでしょう？アリスの知り合いみたいだし、話を聞く価値くらいはあるわ」

少女　レミリアは見た目や言動こそ子供そのものだがなるほど、確かにこれだけの館を仕切るのに十分な器量を持ち合わせているようだ。蒼衣に対する咲夜の警戒も、単なる義務感以上にそこから来る忠誠心に依るところが大きいのだろう。

「単刀直入に言うと異変…、なのかしら。里の人間が闇に生命力を吸われてるのは知ってる？」

「ええ。紫が助力を請いに来たけど、私の知識も魔法も全く効果なし。ムキになってあれから調べてはいるけど、あんまり成果はないわね」

「最近今まで以上に大図書館に籠りきりだったのは、それが原因だったんですか…」

手始めにアリスが口を開き、事の始まりを説明する。紫が依頼していたというのは当然初耳だったが、改めて話すと長くなるので事情を知っているのは幸いだった。メイドの少女も納得したように頷いているところを見ると、内密な依頼だったのかも知れない。

「…紫曰く、私の兄さん　　蒼衣の能力とその闇が同じものらしいの」

「らしい、じゃないぞ。間近で見てわかったけど、実際同じだった」

「…それで？蒼衣が疑われてるから、濡れ衣を晴らすのを手伝ってこと？」

名前で呼ばれたの久しぶりだなあと思いつつ、蒼衣はアリスの説明を補足する。それを聞いたレミリアが眉を顰めるが、そう思うのは

無理もない。あの闇は完全に蒼衣のものと同じ深遠の闇だったし、その源と思われる碧色の結晶　紫と神綺には一応報告したが、見たのは蒼衣だけだ　はかなり精巧に作られていた。知性あるものの犯行　そう考えるのが妥当だろう。

「むしろ逆よ。紫は兄さんにこの異変の解決を依頼したの」

「正確には解決じゃなくて里の人間の治療だけだな」

一応こいしとの一件でなんとかするのは証明済みだしと蒼衣が独り言のように呟くと、パチユリーが驚いたように目を丸くする。当然蒼衣は知らないのだが、彼女はアリスやもう一人と共に、地底に赴く魔理沙のサポートを買って出た一人なのだ。故にこいしを知っているし、彼女の厄介さ　言動でも能力でも戦闘でもだ　も知っている。それを切り抜けて来たという蒼衣を感心したように見遣るパチユリーだが、

「それが何故、紅魔館に来ることに繋がるのかしら？」

「その闇の反応を拾ったからだよ、紅魔館内部でな」

当然脈絡のない話の展開と今の現実が噛み合わない為、レミリアがその疑問を口にする。そして蒼衣の答えを聞いた瞬間、紅魔館メンバ―の表情が陰のあるそれへと塗り替えられた。幻想郷箱庭の管理者、

妖怪の賢者でさえが手を出せなかった未知のモノダークマターが自分達の館の中に在ると言われたのだ、それも当然の反応だろう。

「だからその反応の持ち主を探し出して、深遠なる闇を消さなくちゃいけない。暴走した事例もあるから、出来るだけ早く」

「…いいわ、滞在を許可しましょう」

「お嬢様!?!」

蒼衣の締めくくりの言葉に目を細め、僅かな間と共にレミアアが答えを下した。当然咲夜は驚き真意を聞こうと振り返るが、主人の鋭い視線を受けてその身を止める。

「あのスキマが匙を投げた山よ? 下手に拒否して何か起きたらそれこそ面倒になるわ」

冷静な声で正論を諭され、反論を封じられる。確かに冷静に考えれば、その選択が最良の判断だ。あの八雲紫ですら太刀打ち出来ないモノだが、蒼衣というウィークポイントは存在する。紅魔館内部で反応があつた云々以前に、滞在させた方が有事にも対応が出来る。アリスというストッパーもいるのだから悪いようにはならないはずだし、それらを踏まえて考えれば、誰でも自ずとその結論へと至る。

「手の空いてる連中は好きに使ってくれて構わないわ。咲夜もその辺りは徹底させなさい」

「…かしこまりました」

レミリアの言葉に僅かな間を空けつつも、礼儀正しく一礼しそう答える咲夜。遅れてそれらのことを理解したのかその口元は僅かに歪んでいたが、それを咎めるような者はこの場にいなかった。

「…そういえばフランは？」

その様子を見てどうにかなりそうだなと安堵の息をつく蒼衣の隣、アリスがふと思いついたように質問する。本人からすれば少し気になるが、他意のないちょっとした質問だったのだろう。

だが、その質問は一瞬で部屋の空気を変質させた。

「…いないわ」

僅かな間を置いてレミリアがそう答えるが、アリスも蒼衣もそれに答えない。いや、答えられない。それどころかレミリアを除き、部屋の中にいる全員が動きを止めていた。何故なら

「いないわよ、フランなんて」

アリスの質問を聞いた瞬間　　正確には「フラン」という言葉を聞いた瞬間、レミリアから凄まじく重厚で濃密な殺気が放たれたからだ。

「ちよつと、レミィ…」

「パチエー！」

尋常ではないレミリアの様子とあまりの言い草にパチュリーが思わず口を開くが、レミリアは一喝でそれを黙らせた。レミリアが口を開く度、その鋭い視線が対象を射抜く度、圧倒的な暴力のように災厄のように殺気が振り撒かれる。何がなんだかわからない為、どうしようもなく、アリス達はそれを黙って受けることしか出来ない。

「この住人は私と咲夜とパチエ、こあと美鈴にあざいむとコウとりん。後は名無しのメイド妖精達だけよ」

まるで全ての感情が喪失してしまったかのように、レミリアは淡々とそう答える。そこには先程の可愛らしい子供のような言動も、主

らしい堂々とした威厳もなく、ただ癩癩を起こし当たり散らす子供のような印象を受けた。感情の自制が利いていない　　そんな風にも捉えられる豹変ぶりだった。

「…りん、部屋まで案内してあげなさい。咲夜はパチエを」

「…かしこまりました、お嬢様。皆さん、こちらです」

少しは落ち着いたのかやや柔らかくなった声でレミリアが指示を出し、背後に控えていたメイドの少女が動き出す。そのまま彼女に連れられて、蒼衣達は部屋を出た。やや心配そうな表情をしながらも、咲夜とパチユリーも部屋を後にする。広い広い部屋の中、残ったのは幼い吸血鬼だけ。

「そうよ…。その方があの子だって…」

扉が閉じられる間際、レミリアが最後に零した言葉は誰の耳にも届くことなく、静かに宙へと溶けて行った。

「…どひごひじとん？」

「こっちのセリフだ。さっき言ってたフランって誰だよ？レミリアはいないとか言ってたけど」

案内された部屋の中、アリスがチェアに腰掛け納得が行かないと言わんばかりに呟きを零す。しかしそれは蒼衣も神綺も同様で、フランという知らない単語　おそらく名前だろうか　を発した瞬間急変したレミリアに疑問を抱かないはずがない。上海に至っては先程から震えっぱなしで、蒼衣にしがみついたまま離れようとしていない程だ。どう考えても尋常ではない。

「レミリアの実妹よ。情緒不安定らしいからあまり表には出て来ないけど」

「いるはずなのにいない、ってことだよな？」

「喧嘩…、なんて可愛いレベルじゃなさそうだよな、あの様子だと」

とは言えアリスも彼女　フランとそこまで親しい訳ではない為、詳しいことはわからない。だがただならぬ事情がありそうなのは、今日会ったばかりの蒼衣でもわかる。そんな中で生活していくのも気が引けるし、一体どうすべきか

「気になりますか？」

そんな三人の思考を、少女の声が断ち切った。入口へと振り返れば、そこには二人の人影がある。一人は魔導書を左手に携えたパチュリー・ノーレッジ。そしてもう一人は

「あなたはさっきの…」

「自己紹介がまだでしたね。お嬢様のお付きでりんと申します。咲夜さんの後輩ですね」

アリスの呟きに抱えていた来客用のシーツなどをベッドに置いた彼女。りんが自己紹介と共に一礼する。艶やかな黒髪は膝近くまで伸ばしてあり、穏和そうな雰囲気を持つ十代後半くらいの少女だ。黒と白を基調とした咲夜とは対照的なロングスカートタイプのメイド服を着ており、それがまた様になっていた。

「私達も気に掛けてはいるのよ、レミィとあの子のことは。ほら、見てみなさい」

「これは…、アルバム？」

パチュリーがどこからか古ぼけた本を取り出し、受け取った蒼衣がパラパラとページをめくっていく。隣から覗き込んだアリスが零し

た通り、そこにはいくつもの写真が貼り付けられていた。

今より大分前　背景から推測するに少なくとも百年単位で、だ
の写真で、着ている服も今と全然違っていた。どの写真にも
銀髪と金髪の少女ばかりが写っており、そしてその全てが

満面の、笑顔だった。

「前にアルバムを整理していた時に見付けたんです。お二人共、幸
せそうに笑ってますよね？」

いつの間にかシートなどをセットし終えたりんが蒼衣の正面に回り
込み、アルバムの最後のページを開く。そこには抱き合った二人の
大きな写真が飾られており、今見ていたどれよりも最高の笑顔を浮
かべていた。

「私はお嬢様に拾われてから二ヶ月程度しか経っていませんが、今
のお二人がぎこちないことくらいはわかります。差し出がましいの
はわかっているんですが、姉妹ならやっぱり仲良くして欲しいんです
よね」

「レミイは良くも悪くも子供だから、素直になれないのよ。親友と
して、このくらいの世話焼きはしてあげないとね」

アルバムを回収したりんが困ったような、しかし強い意志を秘めた

笑みを浮かべ、パチュリーも苦笑しつつ同意する。それは純粹に主人を思いやつてのことで、ああ、ここの住人達に好かれているんだなあと、蒼衣はそんな感想を抱いた。

「それはありがたいけど…、具体的にはどうするのよ?」

「簡単よ。蒼衣、これからあなたを妹様 フランドール・スカ
レットのところへ連れていく」

言外の協力宣言は確かに心強いが、その方針をアリスは問い掛ける。いかに優秀な人間妖怪が集まっても、方向性が定まらなければ全く意味がない。それに対するパチュリーの答えは至って単純明快、そして意外なものだった。だが、

「直接ご対面つて訳か…、上等だ」

「その心意気…、信じるわよ」

蒼衣は不敵な笑みを浮かべ二つ返事で承諾し、それにパチュリーが満足そうに頷く。そのままパチュリーが部屋を出て、りんも蒼衣を促しつつ退出する。

「じゃ、ちょっと行って来る」

肩の上海をアリスに預けつつ、努めて軽い声で蒼衣はそう告げる。
何か言いたそうにしていたがアリスは結局口を開かず、気を付けて
ねとだけ呟いた。

「いってらっしや〜い」

神綺の相変わらずな声に背を押され、蒼衣は苦笑と共に部屋を出る。
先に出ていた二人と顔を見合わせ、頷き、りんが先導するように前
へ出て歩き始める。一つ大きな息を吐き、蒼衣はパチュリーと共に
後を追った。

第十四話「紅い館のご主人様」(後書き)

カリスマはグングニルに縛り付けて月までブン投げました(キリッ
という訳で次回、妹様とご対面。

第十五話「鳥籠姫」(前書き)

お待たせしました、十五話です。

いよいよ妹様登場ですよWk tk Wk tk (おい
ではどーぞー。

第十五話「鳥籠姫」

「…で、なんで図書館？」

眼前に広がる本の山　　もはや要塞と形容しても許されるレベルのそれを前に、蒼衣は溜め息混じりに疑問を零す。しかもそれらの大半が強力な魔導書なのだから、要塞という比喻もあながち間違っ
てはいない。部屋を出てりんの案内で歩き出した蒼衣は何故か現在、
再度パチュリーの城である紅魔館地下大図書館へと戻って来ていた
のだ。

「妹様はこの大図書館より更に下　　地下室にいるんですよ」

「精神的に不安定だから、有事の際には私が足止め出来るようにそ
う設計してあるのよ」

広い大図書館内を進みながら、りんとパチュリーが端的に蒼衣の質
問に答える。だが蒼衣は、そんな彼女達に一つの疑念を抱かざるを
得なかった。そう、それは

「そこまでする必要があるのか？いくら吸血鬼で情緒不安定だつて
言っても…」

確かにこの大図書館内ならば、パチュリーの能力を十二分に発揮出来るだろう。拠点を構え入念に準備を整えた魔法使いは、それこそ難攻不落の要塞と成り得る。だが、だからこそ、そこまでする必要性に疑問を抱いたのだ。

吸血鬼。彼らはとてつもなく強力であると同時に、弱点が多いことでも知られている。日光はもちろん流水やんにく、鱈の頭に銀のナイフなどなど、信憑性の高低を問わなければそれこそ両の指を軽く越える程だ。ならばその弱点を突けば、簡単に倒せるのではないか。それこそ物語のように、あっさりと。

「あるわ。彼女の能力故にね。妹様の能力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』
文字通りあらゆる物質を破壊出来る、危険極まりない能力よ」

だが蒼衣の甘い考えは、パチュリーの言葉で跡形もなく碎け散った。その『ありとあらゆるもの』の定義にもよるが、聞いただけでその危険さは臍げながらも想像が付く。

「知ってる？全ての物質には緊張していて、力を加えると簡単に壊すことが出来る。『目』というものがあるの。『目』を攻撃すると物質は自らを維持出来なくなり、跡形もなく碎け散る」

その説明を聞いた蒼衣は、ふと魔界にいる一人の友人を思い出す。彼女はそんな小さな体に、馬鹿げているとしか言いようのない強力な能力を宿していて、『目』とよく似たものを『視る』ことが出来る

のだ。そしてそこを攻撃すれば最後、例え対象が人間だろうが妖怪だろうが、拳無機物でも確実に殺せる。ならばその妹様も

「妹様は右手の上に、その全ての物の『目』を呼び出すことが出来るの。そのまま右手を握りしめて『目』を潰せば

「相手は無条件で木っ端微塵、って訳か…」

そういうことよと頷きを返したパチュリーから視線を外し、蒼衣は自らの予想が当たったことに齒噛みする。そんな反則クラスの能力を相手に、一体どうやって戦えというのか。深遠の力とて万能ではない。物質としての形がある以上、当然『目』も存在する。その友人が全力を出すと、刃物を軽く当てるだけであらゆる攻撃を殺せるだけの力があつた。つまるところこちらの攻撃が一切届かず、向こうの攻撃に抗しきれないという一方的虐殺になる可能性も十分以上に有り得る。それらを踏まえて考えれば、この要塞図書館にも納得が行く。むしろこれでも足りないのではと、そう思えるくらいだ。

「で、件の地下へはどうやって?」

「それは私から説明しましょう!」

「「「忍者ですかああなたは!」」」

蒼衣が本題に入ると同時、三人から五メートル程離れた床がパカッと開き、中からいきなりこあが現れた。三人共思わず全力でツツコミを入れてしまおうが、敬語を崩さない辺りりんは一流である。

「こあ、準備は出来てる？」

「もちろんです」

パチュリーの声に答えたこあが指を鳴らすと同時、本棚に仕舞われた魔導書の一部が光を放ち始める。それらは互いを点として線を結び、六芒星を孕んだ円を形成した。結果、それも術者の回復を促進する効果まで付いた、かなり高度なものだ。

「臨戦態勢よ。こつちのことは心配しないでいいわ」

「何かあったら念話でお知らせしますね」

「お願いします。さあ蒼衣さん、こつちです」

いつも通りクールなパチュリーと見る者を安心させる笑みを浮かべたこあに頭を下げ、蒼衣の手を取ったりんが奥目指して歩みを進める。暗い昏い黒に覆われた、隠されるように存在する通路を歩くこ

と数分。ようやく抜けた先、一つの扉の前へと辿り着いた。奇妙な
紅い紋様が描かれたその扉は、地下という割にはかなり綺麗に保た
れており、人がいるのだということを実に物語っている。

「ここです。この向こう側に妹様がいます」

「いよいよか…」

緊張で喉を鳴らしながらも、蒼衣は一步前が出る。離れたりんが頷
いたのを確認し、静かに扉を開けていく。

そこは、広い部屋だった。レミアアのものとは比べても遜色ないレベ
ルの大きさに、格式の高さを感じさせる調度品の数々。挙句天蓋付
きのベッドまであり、所在地とは裏腹にかなり優遇された部屋だっ
た。

そんな部屋の中央、クレヨンや紙、人形が散乱する中に

「…誰？」

膝を抱えて座り込む、一人の少女がいた。

サイドテールに纏められた金髪の上から姉と同じ帽子を被っていて、瞳は血のように赤い。服も真紅を基調としており、半袖とミニスカートを着用している。見た目は十にも満たぬ幼女だが、その背中から一對の翼。それも枝のようなものに七色の結晶がぶら下がった特殊な翼だ。が生えていることから、彼女が人ならざる者であることは容易に想像がつく。おそらく いや、ほぼ間違いなく彼女が件の妹様だろう。

「俺は蒼衣。一応この客人ってことになってる」

目に明らかに警戒の色を浮かべている彼女にもわかるように、至って簡潔に説明する。ふうんと頷き納得した少女に安堵しつつ、蒼衣も自己紹介を促した。

「私は…、フランドール・スカーレット」

「じゃあフランだな。よろしく」

案外素直に答えてくれたことに少し驚きながらも、蒼衣はフレンドリーに右手を差し出す。あだ名とも言える呼び方と差し出された手に彼女。フランは一瞬ほかんとした表情を浮かべるが、律儀に応えてくれた。素直な子だなと、蒼衣はそんな感想を抱く。

「蒼衣、お絵描きしよ？」

「…大したもんは描けないぞ」

そのまま周囲に散乱した紙とクレヨンを拾い上げ、そんな誘いを口にするフラン。人並み程度にしか出来ないことを宣言しつつ、蒼衣も筆立てから鉛筆を引っ抜いた。意外とノリノリで何を描こうかなど部屋を見回した蒼衣はしかし、一つの事実気付いて動きを止める。

入って来た時は緊張で気付かなかったが、壁には大量の絵が飾られていた。文字通りどれも子供の落書きレベル。正直に言ってしまうとそれ以下かもしれないが、描かれている人物がそんな感想を打ち消すだけの衝撃を蒼衣に与えていた。

描かれていたのは、彼女の姉。

下手なりに全力を尽くしたのであるうことは、部屋の隅に築き上げられた紙屑の山を見るまでもなく明らかだ。一見すればなんてことない、どこにでもある子供の落書きなのかもしれない。だがその一枚からは、溢れんばかりの彼女の想い。姉に対する親愛の情が見て取れた。

「フランは…、どうしてこんなところにいるんだ？」

だから、だろうか。蒼衣は単刀直入にそう尋ねていた。

「…わかんない」

出会ってまだ五分も経っていない二人だが、それでもフランは答えてくれた。率直に自らの心中を語る少女に、蒼衣はそつと視線を移す。四つん這いのような姿勢で彼女が描くのは、やはり彼女の姉だった。

「なんでかわかんないけど…、私はここから出ちゃいけない。ここにいなきゃいけないって、そんな気がするの」

その憂いを帯びた横顔を見て、蒼衣は思考を巡らせる。妹などいな
いと言う姉と、理由もわからず閉じこもる妹。わかっ
てはいたが、単純な問題ではない。二人の間にある見えない確執
を意味するのか、今はまだわからない。だが
それが何

「……………」

今はそれを言う時ではない。頭を振るうことで心中に沸いた言葉を打ち消し、蒼衣は紙面に鉛筆を走らせる。意識をそちらに集中させることで思考のループから抜け出し、蒼衣は久しぶりのお絵描き遊びに

没入していった。

赤より紅い館、紅魔館
それを眼前にして佇んでいる、一つの人影がある。

異様　　そう表すのが一番しつくり来るだろうか。全身を覆うケープ付きの黒いロングコートを身に纏い、フードで隠された顔を窺うことは出来ない。夕暮れの光に照らされる男か女かもわからないその姿は、まさに異様の一言に尽きた。浮いているどこの話ではない。

だがそんなことを気にも留めず　　元より悪魔の住まう館に近付きたがる者などいないのだが　　それは館のとある一点を凝視する。奇しくもそこは館の主　　レミリア・スカーレットの部屋であつた。

得体のしれないそれはただ風にコートを靡かせ、その一点を見ているだけ。漆黒のそれは微かに口元を緩めると、とある方向へと歩き出した。『例え起きていても絶対に気付けない』その存在に、寝ている門番が気付くはずもなく。その行動は、誰にも。一切咎められることはなかった。

一体どれくらいの時をそうしていただろうか。窓一つない空間で一つの事柄に没頭していると、時間という感覚が消失することを蒼衣は身を以って知った。

「…悪くない、かな」

だがその甲斐あつてか、彼がひたすらに描き続けていたそれは完成していた。そこにあつたのは、

笑顔。

その落書き　　もはや絵と言えるそれを見れば、誰もがその第一印象を抱くだろう。りとパチュリーが持って来たアルバム、その最後に飾られていた写真を思い起こしながら、蒼衣が出せる全てを出し切って描き上げた渾身の力作だ。時間さえかければ案外出来るもんだなと苦笑し、床に座り込んでいた蒼衣は立ち上がる。

「フラン、ほら」

「え？わっ」

ちょうど描き終わったらしいフランに声を掛け、蒼衣は描き上げたそれを軽く放る。驚きの声を上げながらもしっかりキャッチしたフ

ランに満足げに頷き、蒼衣は軽く伸び。長時間同じ姿勢でいるというのは、意外と身体に負担が掛かるものだ。

「これって…」

「ん、あげるよ」

呆然とそれを眺めるフランに、蒼衣は至って普通に軽い口調で答える。持ち帰ってもあまり意味がないし、ならば彼女に渡した方が大事にしてくれる。そう思ってたの行動だったのだが、

どくんっ!!

「っ!?!」

気を抜いていた蒼衣は久しぶりのその感覚に、背筋が凍り付くのを感じた。忘れるはずがない、間違えるはずがない。一週間前妖怪の賢者に追うよう頼まれ、地底で反応を拾ったそれ。こいしの心を侵し身体を操り、自らに重傷を負わせたそれ。後遺症や悪影響がないか調べる為、全身の感覚器を全開にして探していたその名前は

ダークマター
深遠なる闇!?

忌まわしきその反応に蒼衣が思わず顔を歪め、今後の行動と方針について思考を回転させ始めた瞬間

紅魔館に、爆音が響き渡った。

『蒼衣さん！！聞こえますか！？』

『ああ！！一体何が起きた！？』

驚愕から即座に立ち直り、脳内に響いたこゝの声　おそらく彼女の言っていた念話だろう　に答えを返しつつ、蒼衣はフランの様子を見遣る。呆然と怯えが入り混じった彼女の表情から、この爆音の原因からフランを除外。いずれにせよ閉鎖された地下では何もわからない為、こゝに尋ねる以外に道はない。そしてこゝから返って来た答えは

『エントランスホールに侵入者　いえ、襲撃者です！！』

『んなっ…！？』

至って単純明快な、しかし予想だにしないものだった。

蹴り飛ばされた衝撃でエントランスホールを横切り壁に激突した扉を見て、漆黒のそれ　　紅魔館を見上げていた黒装束の存在は首を傾げる。力加減を間違ったかと言わんばかりのその仕草は、しかしこの状況では不気味以外の何物でもない。何しろ

自らの二倍近くの高さがあり、五メートルは下らない幅を誇る両開きの豪華な扉を、ただの蹴りで蝶番ごと十数メートルも吹っ飛ばしたのだから。

まあいいかと呟きを零し、それはすたすたと歩き始めた。エントランスホールの惨状を気にも留めず、何事もなかったかのように至って平然と。

紅魔館の主、レミリア・スカーレットの居場所を目指して。

第十五話「鳥籠姫」(後書き)

妹様と謎の襲撃者。波乱の展開デスネー(棒
ちなみに言うまでもないですが襲撃者はオリキャラです。

次回、襲撃者VS咲夜さん。

第十六話「襲撃者」(前書き)

お待たせしました、十六話です。

久々に戦闘なのでテンション上がった方がいいものの相変わらず低クオリティorz
ではどーぞー。

第十六話「襲撃者」

考えればひどく単純な答えだった。深遠なる闇がフランの中にあるダークマターとわかった以上、無意味に刺激するのは自殺行為。自らを守る意味でも、アリス達を守る意味でも、そしてフランを守る意味でも。無用な厄介事　　即ち襲撃者を倒すのが一番安全だ。

「…蒼衣？」

そこまでをコンマ数秒で結論付けた蒼衣はフランに近付き、わしゃわしゃと頭を撫でた。ぽかんとした表情で蒼衣を見上げるフランの顔から不安の色が消えたことに安堵し、フランと視線を合わせる為蒼衣はしゃがみ込む。

「ちよつと様子を見てくる。危ないかもしれないから、フランはここでじつとしてて」

「…わかった」

最優先事項であるフランの警護を盤石たるものにする為には、彼女自身の協力が必要不可欠だ。拒否されるかも思ったが、その心配は杞憂に終わった。素直でいい子だなと思わず笑みを零し、ぽふぽふと頭を軽く叩いた後部屋を出る。扉を閉めると同時に意識を切り替え、今後の行動を模索、最適化。完了。

「あ、蒼衣さん!!!今のつて…」

「りんさん、ゴメン!!!」

部屋を出たことに気付いたのか駆け寄って来るりんに謝罪し、蒼衣は彼女を抱き抱える。所謂お姫様抱っこの形で抱き上げられりんが戸惑いの声を上げるが無視。暗い通路を僅か数秒で駆け抜け、大図書館へと帰還する。りんへの負担を考慮して能力は使わなかったが、それでもなお速かった。

「来たわね」

「早かったですね…」

パチュリーこそ冷静だがこあはやはり驚いており、降ろしたりんも何が起きたのかわかっていないといった顔をしている。緊急事態とも言える状態なのだから、仕方ないと言えば仕方ないが。

「パチュリー、こあ、りとフランを頼めるな？」

「当然」

「お任せ下さい!!!」

今からエントランスホールに行くと言外の宣言に、パチュリーとこゝろは間髪入れず頼もしく答える。アリスはおそらく神綺が押さえているはずだし、これで不安要素は消えた。後は目の前のことに集中するだけ。

「じゃ、行ってくる!!!」

その一言だけを残し、蒼衣は重力加速全力でを使用して駆け出した。

紅いカーペットが敷かれた長い廊下を、一人の人影が歩いている。紅魔館へと侵入した、黒装束の人物だ。その様子は扉を蹴りで破壊するという野蛮極まりない方法で侵入したとは思えない程大人しく、興味深そうに周囲の装飾を眺め回しながら至って呑気に歩いていた。が、不意にその足を止まり虚空を見据える。フードから僅かに見える口元が、緩やかに弧を描いた。

「…そろそろ姿を現したらどう?おかしな能力者さん」

その口から高い声　少女の声が出ると同時、彼女の見据えていた場所に突如人影が現れる。紅魔館のメイド長　十六夜咲夜だ。

「面白いね、これ。足止めには最適だ」

「招かれざる客人にはちょうどいいでしょう」

言葉通り楽しそうに語る少女に冷たく返しながらも、心中で咲夜は驚きを隠せずにいた。

理由は二つ。一つは侵入者　頑丈な扉をぶち破った者の正体が少女であること。重さにして数十キロの扉を、なんの予備動作もなく片足で放った一発の蹴りで、十数メートルも吹き飛ばしたのだ。並の妖怪ではないし、仮に人間だったとしたら尚更警戒が必要だ。

そしてもう一つは、彼女がこの『空間』の仕掛けを、いとも簡単に見破っていたこと。

時間を操る程度の能力　それが咲夜の能力だ。時間を止めて自分だけ移動したり、時間の流れを遅くして超高速で動いたり、時間の流れを速めて林檎ジュースを林檎酒に変えるなど幅広い使い方が出来る、ある意味フラン以上に反則的な能力。チカラ

彼女がこの廊下に入った瞬間、咲夜は一つの仕掛けを施した。空間を捻曲げることで廊下の端と端を繋ぎ、脱出出来ないようにしたの

だ。時間と空間は密接に関係するモノ　空間に流れる時間を操ること、彼女は擬似的に空間を操作することが可能なのだ。紅魔館内部の空間を捻曲げ本来の数倍に拡張しているのも、彼女の能力である。

だがそれを数歩も歩かぬ内に見破り、しかも悟られないよう周囲の空間を歪めた咲夜が、彼女の近くで監視を始めた正にその瞬間、少女が話し掛けて来たのだ。それこそ、隠れたところで意味などないと言わんばかりに。

「招かれざる客人かあ…、こりゃ手厳しい」

咲夜の言葉に少女は肩を竦め、やれやれと溜め息をつく。その様子は一見隙だらけで、いつでも倒せるように見えた。

最も、下位クラスの妖怪や中位クラスの人間なら、そこを突こうとしてカウンターで秒殺されるのだが。

少なくとも彼女　咲夜にはそれを見抜くだけの技量があった。故に警戒を維持したまま、いつでも少女を葬れるよう手段を模索し戦術を組み上げていく。が、

「やめておいた方が賢明よ。あなたじゃ私には勝てないから」

「…言ってくるじゃない」

警告するように放たれた少女の言葉に、咲夜は目を細め食い殺さんとばかりに少女を睨み付ける。正面から来て扉を破壊しておいてこの狼藉。拳銃先程のナメたようなセリフと来れば、咲夜でなくとも沸点を越えるであろう。

「おとなしく投降するか引き返せば、悪いようにはしないわ」

「勝てないって言ったのに…。従者としては満点だけど、生物としては落第ね」

最後通告として放った言葉が少女の溜め息に流された瞬間、咲夜は一本のナイフを全力で投擲する。不意打ちの上時間加速により亜音速で放たれたそれを、しかし少女は首を傾げるだけでかわした。だがそれさえも想定の内だと言わんばかりに、咲夜は地を蹴り駆け出した。

「…母さん、どういつつもり？」

蒼衣達に割り当てられた客間。そこは不穏な雰囲気孕んでいた。

より正確に言えば、その雰囲気はアリスから発されていた。

「ほえ？見ての通りだよ？」

理由は至って簡単。神綺が廊下へと通じる扉の前に立ち塞がったからだ。まるで、爆音と同時に魔導書を手に取り駆け出そうとしたアリスの動きを見透かしたかのように。

「兄さんが心配なの。行かせて」

「ダメだよ」

焦燥に駆られるアリスとは対照的に、神綺はあくまでマイペース。緊急事などではないと言わんばかりのいつも通りの母の態度が、アリスを更に焦らせる。

「蒼衣君ならきつとこうすると思うよ？アリスちゃんを危ない目に遭わせたくないって」

「だけどっ！！」

わかっている。これが自分を心配しての行動だということも、今頃

兄は原因の究明や解決に奔走しているであろうことも、巻き込みた
くないという気持ちも痛い程わかる。だが、それがアリスには我慢
出来ない。

「大丈夫だよ」

自分はなんの役にも立たない足手まといなのではないか。そんなネ
ガティブな思考に囚われそうになったアリスを救ったのは、皮肉に
も神綺のそんな言葉だった。

「あと五分くらいでわかるから」

顔を上げたアリスにそう告げ、ニッコリと微笑む神綺。そのあまり
にも緊張感のない笑みに毒気を抜かれ、アリスはソファーに座り込
む。五分　　何かの根拠があつて言っているのか、単なるあてず
っぽうなのかはわからない。

だが、信じよう。家族なのだから。あの神綺が蒼衣を見殺しにする
はずがない。きっとこれには何か訳がある。そう自らを納得させた
アリスは溜め息を零し、天井を見上げながら兄へと想いを馳せた。

少女と咲夜の戦いは、近距離主体の格闘戦となっていた。

相手の手の内や能力がわからない以上、下手に弾幕ごっこを挑んで敗北すれば目も当てられない。咲夜の背後には自らの主、レミリア・スカーレットがいるのだ。わからない弾幕に挑むより、多少の情報がある格闘戦の方がリスクは低い。咲夜は少女に勝つことより、負けないことを優先したのだ。

この館にはまだ、魔法に長けたパチュリーがいる。格闘技に長けた美鈴がいる。そして何より、最強の吸血鬼であるレミリア・スカーレットがいる。後者はさておき前者二人は援護に来る可能性もあるし、時間を掛ければ相手の手の内も見えてくる。時間を稼げば稼ぐ程、咲夜の勝率は上がるのだ。

ならば下手に倒そうとせず、回避と防御に徹するのが最適解。最悪の場合時間を止めて、相手の喉笛なり脳髓なり心臓なりを掻き切つてやればいい。

その咲夜の戦術組み立ては、正に完璧。一切の無駄がなく、主を守る為なら自らの力不足も恥をも受け入れる。この方法ならば、確実に少女を無力化出来る。

はずだった。

「ぐっ……!!」

少女の蹴りを辛うじて防ぎ、咲夜は自ら背後に飛ぶことで衝撃を逃がす。しかしそれでもなお、身体には異常なまでのダメージが残っ

ていた。

着地の際に生じる僅かな隙を突き、少女が絨毯の敷かれた床という名の地を蹴る。彼女が一步で数メートルの距離を詰めたという現実を咲夜が認識すると同時、既にその脚は振るわれていた。

対し咲夜は反射的に時間停止を発動。荒れた息を整えつつ、少女の周囲に幾多ものナイフを設置していく。止めた時が動き始めると同時、対象を囲ったナイフが加速し一斉に襲い掛かる、咲夜の必殺の力。これを避けられるのは、それこそ天狗や吸血鬼、紫くらしいものだろう。

「わお」

時間停止を解除。同時、自らの周囲に突如現れたナイフの大群に少女が驚きの声を上げる。だがそんな言葉とは裏腹に、

ナイフは全て少女を貫通した。

肉を裂き骨を貫いた訳では断じてない。まるで立体映像を突き抜けるかのように、咲夜のナイフは少女の身体を擦り抜けたのだ。

「何故…!?!」

咲夜のこの言葉も、もう何度目になるだろう。いくらナイフを投げようとも、その全てが今と同じように無効化されているのだ。この必殺の状況で、何故あれを避けられるのか。幻影の可能性も考えたが、それは決してありえない。咲夜の身体に叩き込まれた彼女の拳が、脚が、その結論を否定している。

だが逆に言えば、攻撃の最中は確実に実体があるということ。カウンターで叩き込めれば、ダメージは通るはず。それなら

「……………？」

ダラリと手を下げ脱力した咲夜を見て、少女が首を傾げる。敵前で取るにはあまりにも無警戒な態度に、不審の念を抱くのは当然と言えるだろう。

しばらくして問題なしと判断したのか、少女が軽く息を吐く。同時に全力で地を蹴り跳躍、一瞬で咲夜との距離を詰めた。視認すら出れない速度で膝を叩き込み、それで終了。それが彼女の思い描いたシナリオであり、この状況を見た大多数の結論だろう。

だが、それは果たせず終わる。

少女が膝を叩き込んだ瞬間、咲夜の姿が消失した。咲夜が攻撃を受ける直前に時間を停止させ、背後へ回りつつナイフで取り囲ませたのだ。パーフェクトメイドと称されるそのスキルは、対打撃に特化したカウンター技。少女は今まで拳や脚による打撃以外の攻撃を一

切行使していない。分が有るとは言え半ば賭けのようだったそれは、咲夜のタイミングの見極めにより実を結び、現実のものとなった。

「っ!？」

顔こそ隠れていて見えないが、少女が初見特有の驚きを含んだ表情を浮かべたのがわかる。カウンターで来るとは思っていなかったのか、一瞬動きが明らかに鈍った。

だが、それだけでは終わらない。

放たれたナイフが加速し、少女目掛けて宙を裂きながら疾走する。しかしその軌道は少女を切り裂くものではない。少女の動きを制限するかのよう、彼女の輪郭線目掛けて放たれたのだ。

「なっ…!？」

当然直撃コースだと思っていた少女は不意を突かれ、少女の動きが止まる。そしてその隙を、みすみす逃がす咲夜ではない。

鋭く呼吸を吐き出しながら、咲夜は一枚のカードを取り出した。赤い軌跡が描かれたそれを宙へと放り、スペルカードの発動を宣言する。

「傷魂「ソウルスカルプチュア」ッ！！」

両手に構えたナイフを高速で振るい、斬撃によって生じた真空の刃を幾重にも飛ばしていく。時間加速によって強化された赤き刃は、その一発一発が並の妖怪を軽く屠れる程の威力を秘めていた。無論得体の知らない少女とて、無傷では済まされないはずだ。

だが、そんな攻撃にわざわざ当たってやる程少女も優しくはないし甘くもない。自らの動きを縛るナイフは単発。ならばそのナイフさえ叩き落とせば回避は容易

「っ!？」

しかしその目論見は、咲夜のもう一つの仕掛けによって崩壊した。単発だったはずのナイフが、いつの間にか幾重にも連なる列となっている。咲夜が時間を複写させることで、軌跡上に多重のナイフを発生させたのだ。

「くっ…!!」

無意識の慢心が招いた窮地に舌打ちし、少女が右手を振り上げるが全てが遅過ぎた。赤き鎌鼬の如き怒涛の嵐が少女へと殺到し、

周囲の空間ごと切り裂かれた一帯が、弾け飛んだ。

「……………はあっ」

すっかりボロボロになった廊下を眺めながら、警戒を解いた咲夜が思い出したように息を吐き出す。もはや周囲に生ある者の気配はなく、侵入者が排除されたのは明白だった。

荒れた床や絨毯を尻目に、片付けが大変だなあと咲夜は溜め息一つ。得体の知れない侵入者を主人の元へ通すのに比べれば死ぬ程マシかとポジティブに考え、何から始めたものかと腕を組みながら虚空を仰

「隙有り」

ごうとした瞬間、腹部に凄まじい衝撃を受け咲夜の身体は宙へと浮いた。

「がっ！ー！げほっ、しほっ……」

時速数十キロの速度による数秒間の飛行体験は、壁へと強かに背中

を打ち付けることで終わりを告げた。放射状に刳れた壁をずり落ちながら、遅れて咲夜は激しく咳き込む。口の端からは血が線を引き、頭を打ったのか視界が歪んでいた。

「あら、割と頑丈ねえ」

「な…、何故…」

並の人間ならば即死　下手すれば身体が爆散するレベルの攻撃を叩き込んだのと同一人物とは思えない程の軽い声を零しながら、少女がすたすたと歩いて来る。その姿を視界に捉えた瞬間、痛みを無視した咲夜が苦しげに声を絞り出し、

「…何故なんの傷も負っていないっ!？」

彼女の最大の疑問を投げ掛けた。

「まあ、平たく言えばこれが私の能力^{チカラ}だから。仕方ないというか当然^{チカラ}というか」

だから勝てないって言ったじゃないと溜め息をつきながら、『無傷どころか汚れ一つ付いていない』少女が咲夜を見下ろす。敗者になることによろやく見えたその顔は、しかし脳で理解する前に視界か

ら遠ざかっていった。

「おやすみなさい。紅い悪魔の従者さん」

その言葉と同時に彼女が離れた訳ではなく、自分が意識を保てなくなったのだとようやく理解する。心中で幼い主人に謝罪しつつ、咲夜は意識を失った。

「…よし、終わりっ」

メイドの少女の『後始末』を終え、少女が軽く伸びをする。テストを終えた学生のようなその仕草は、意外と様になっていた。

「…さて」

フードの奥で目を閉じながら、少女は周囲の気配を探る。少し離れたところにメイドの少女と互角クラスの反応と、よくわからない反応が一つずつ。更に離れた所にそれを下回る反応。門番の反応がある。屋敷内に溢れる雑多な反応はおそらく妖精で、それよりマシな反応。おそらくは人間が二つ。

そして最も遠い所に多少大きめの反応が一、小さめの反応が一。更

にその奥には

「…ずいぶんとまあ、凄まじいモノを持つてるみたいね」

近くにいる人間一人はさておき、少女の目的である反応とよく似た反応が一。おそらくは彼女の妹か血族なのだろうが、秘めている力は姉をも上回る程だった。そして

「……………あら？」

ふと少女が後方を顧みて、間の抜けた声を漏らす。というのも、こちらに向かって来ている反応を一つ見逃していたからだ。普段の彼女ならば絶対に有り得ないことだが、その反応がなんと奇妙だったこともあり見逃していた。

「…ま、いつか」

得体の知れない　まるで深い深い崖の底を眺めているような、そんな感覚を抱かせる反応。興味が無いと言えば嘘になるが、目的が最優先。この様子なら五分もしない内に鉢合わせるだろうし、後からでも遅くはない。そう結論付けた少女は、歩みを再開した。

メイドの少女が気絶したことで、少女を閉じ込めていた空間は元に戻っている。もはや何者にも阻まれることなく、少女は悠々と歩み

を進めていた。

やがて少女の目の前に、玄関ホールのものと同レベルの扉が現れる。中に目的の反応があることを確認しながら、少女はゆっくりと扉を押し開けた。

「…咲夜が負ける運命は見えていたけれど、にわかには信じられないわね」

開いた扉の先、こちらに背を向けて豪華なソファーに座っている人影があつた。幼い少女の姿をしていながら、背から生えた蝙蝠のような黒い翼がそれを打ち消している。彼女が人ならざる者であると、雄弁に物語っていた。

「聞きましょうか。目的は何？」

音一つ立てず床に降り立った少女　侵入者の少女の目的であるレミリア・スカーレットが、こちらへと歩いて来る。その様子に一切の乱れはなく、恐れなど抱いていないのは明白だ。

「強いて言うなら再会、かしら」

そうでなくちゃねと心中で笑みを漏らしながら、少女はフードを外しながらそう答える。瞬間、レミリアの表情が激変した。

「な…、んで…」

緊張から驚愕、そして疑問へと塗り替えられて行くレミリアの顔を見て、少女は意地の悪いチエシヤ猫のような笑みを浮かべる。度肝を抜かれたようなレミリアの顔、これこそが少女の求めていたもの。それがまんまと成功したのだ、笑わずにはいられない。

「久しぶり、レミィ」

再会の挨拶を零すと同時、少女はレミリアへと襲い掛かった。

「くっそ…!!」

長い長い廊下を駆けずり回りながら、蒼衣は思わず舌打ちを漏らす。見た目以上に中が広い紅魔館内で、どこにいるのかもわからない侵入者を探しているのだから無理もない。そもそも蒼衣は玄関ホールから大図書館までと、大図書館からレミリアの部屋まで、レミリアの部屋から自室までと、自室から大図書館までのルートしか知らないのだ。現在位置を見失わないようにしつつ探している以上、効率の低下は避けられない。

アリスか神綺に頼ることも考えたが、敵の情報は何一つない状態であの二人を出させたくない。神綺に戦いが出来るとは思えないし、アリスは

「…っ!!」

考えるのは後だと自らに言い聞かせ、蒼衣は速度を上げる。先程レミアの部屋に近い位置から轟音が聞こえた為、それを確認しに行くところなのだ。

蒼衣にとってのアリスや神綺は、咲夜にとってのレミアと同じのはず。ならば自分と同様の考えに至り、侵入者の迎撃に出る可能性はかなり高い。

だとすれば先程の轟音が奏でられた場所に、咲夜と侵入者がいるはず。そう結論付けた蒼衣はもはや現在地の把握を捨て、辿り着くことを最優先にしてひたすら駆けていた。

「な…、んだよ…?これ…」

数十秒もしない内に目的地へと辿り着いた蒼衣が、その場の光景を見て言葉を失う。放射状に割れた壁や、無残に切り裂かれた一帯が戦闘の凄まじさを物語っていた。

例の轟音以降なんの戦闘音も響いていないということは、決着は既

に付いたのだろうか。どちらにせよただでは済んでいないだろうなと考える蒼衣の視界に、ふとある物が飛び込んできた。

それは、半開きになった扉だった。それだけならなんてことない、どこにでもある光景。だが周囲の扉が全て閉まっている中、一つだけ半開きになっていてのだとしたら受けるイメージは大きく変わって来る。畏の可能性も考えられるが、侵入者にとって時間の経過はウィークポイント。時間が経てば経つ程こちらは人員を大量に動員出来る分有利になるからだ。なので除外。その裏を掻いて待ち構えているというケースも有り得るが、延々と考えてもキリがないので無視。軽く息を整え、蒼衣は部屋へと踏み込んだ。

「っ!？」

が、蒼衣が見たのは予想とは裏腹。というよりも全く予期していないものだった。部屋の中央に置かれた三人掛けのソファ、そこに横たわる人影は

「おい!!しっかりしろ!!」

即座に意識を切り替え、蒼衣はその少女。咲夜へと駆け寄る。目立った外傷こそないものの、ダメージが大きいのか身体を起こすだけでも辛そうだ。

「やられたわ…。あの女、とてつもなく強い…」

蒼衣に支えられ背もたれに寄り掛かった咲夜が、苦々しげにそう漏らす。蒼衣は彼女の強さを知らないが、吸血鬼こんな場所の住まう館でメイド長などという役職を務めているからには、アリスと互角かそれ以上には強いはず。それをこつもあつさり退けたということは、侵入者の女は相当強いのだろう。

「行って…、あいつが相手じゃお嬢様といえど危ない…!!」

その言葉に僅かに逡巡するが、蒼衣は頷きと共に咲夜に背を向け駆け出す。彼女を殺さなかつたということは、少なくともここに居れば安全は保証されるということ。

ならば今自分がすべきことは、他のメンバーの安全確保。咲夜が心配ではないと言えば嘘になるが、かといって治療などが出来る程の器用さなど持ち合わせていないことは、自分自身が一番よくわかっている。自分に来ることをする。夢子の教えに従い行動するのが、この状況に置ける最適解。

なら、迷っている暇なんてない。

「…気を付けるよ!!」

最後にそれだけを言い残し、蒼衣は部屋から勢いよく飛び出す。幸

いにも見覚えのある廊下だった為、レミリアの部屋へのルートはすぐにはわかった。

逸る心を全て脚を動かす力に変え、僅か数秒でレミリアの部屋の扉の前へと辿り着く。偶然かはたまた必然か、その扉も先程同様半開きになっているのが背筋に冷や汗を伝わせ、嫌な予感を走らせる。

だが、だからといって入らない訳にはいかない。

「レミリアっ！！」

館の主人の名を呼びながら、意を決して部屋へと飛び込む。が、次の瞬間に蒼衣の身体は　　　　　というか精神も完全にフリーズした。

何故なら頭から全ての物事が吹き飛びかねない程の、衝撃的な光景が広がっていたからだ。

「きゃははははっ！！ちよっ、やめっ、ひあっ！？」

「数百年ぶりのくすぐりはどうよ？ほれほれ」

「ちっ、そこは…、ひゃんっ！！」

部屋の中には脇腹などをくすぐられ何やら色っぽい悲鳴を上げているレミリアと、彼女を軽く羽交い締めにしてくすぐり続けている、見たことのない少女がいた。息も絶え絶えな上涙目なレミリアの様子は何故かやたらと扇情的で、そっちの趣味がある人なら一発で陥落させられるであろう破壊力を秘めている。というかそれよりも重要なのは彼女の反応がイジメたい欲求　俗に言うサド心を非常にくすぐられる反応だったということだ。…まあ、正体不明の少女より先にそんなことを分析している時点で、蒼衣も相当動揺しているのだが。

そんなこんなでようやく我に返り、蒼衣は改めて少女へと意識を移す。外見上の年齢は蒼衣と同じくらいだろうか、黒の短髪を後頭部でツインテールのように結っていて、瞳はアメジストのように綺麗な紫色をしている。身体はケープ付きの漆黒のコートに覆われていて、対照的に肌は眩い白だ。フードは外されているが、おそらくは彼女が例の侵入者なのだろう。黒という言葉が似合い過ぎるくらい似合う少女だった。

「…あら？意外と早かったわね」

と、ようやくこちらに気付いたのか、少女がレミリアを解放しながら蒼衣へと向き直る。一体どれだけの間そうされていたのか、ぺたんと座り込んだレミリアはそのまま床に突っ伏し、荒い息を吐きながらひくひくと痙攣していた。…どこぞの銀髪メイド長と黒髪メイドが見たら卒倒するかもしれない。

「……………あんだ、誰？」

脱力し倒れ込んだレミリアから視線を外し、蒼衣が数ある疑問の中でも最大のそれを問い掛ける。混沌極まりないこの状況でそれが言えただけでも、上出来と言えるだろう。

「私？私は吸血鬼でレミリアの古い知り合いの赤夜^{あかしや}亞愛^{あくあ}。好きなことはレミリアイジリで、得意なことはレミリアイジリ。趣味はレミリアイジリで、将来の夢はレミリアをイジリ倒すこと。よろしくっ

」

対し少女　　亞愛は至って平然と、しかし楽しそうに自らの名前とほとんど問題しかないプロフィールを告げ、ニッコリと微笑んだ。

第十六話「襲撃者」(後書き)

はい、そんな訳でオリキャラ二人目・亞愛登場回でした。

いやあ、とあるキャラを元にしたはいいものの原型粉々になるくら

いカオスですねこの子 作った人

ちなみにイメージC.Vは奈々様だったりします(え

次回、色々進展回。

第十七話「認識」(前書き)

お待たせしました、十七話です。
色々進展?回です。ではどーぞー。

第十七話「認識」

「赤夜…、亞愛…?」

おうむ返しにそう呟き、蒼衣はその名前を脳内で反芻する。当然だが聞き覚えはなく、会ったことも当然ない。

ただ、どこかで亞愛という言葉ワードを聞いたような、そんな気がしてならない。喉に小骨が引つ掛かっているような、居心地の悪い感覚でも言おうか。突っ込みたいところは山程あったが、その違和感が拭えない。首を捻って唸りながら考え始めると

「兄さんっ!!大丈…」

上海共々息を切らしながら、アリスが部屋へと駆け込んで来た。心配の声を投げ掛けながら素早く周りを見回すが、その視線がレミアアと亞愛に至ると同時に言葉が止まる。…見たことのない少女と床に突っ伏すレミアアという混沌極まりない光景を見れば、無理もないかもしれないが。

「……………何これ?」

「……………むしろ俺が知りたい」

三つ程間を置きそう尋ねたアリスに対し、蒼衣は溜め息と共にそう答える。実際蒼衣にも何がなんだか全くわかっていないのだ、現状を説明出来る第三者がいるなら恥も外聞もかなくなり捨ててでも引きずって来て説明を求めるところである。

「あ、やっぱり亞愛ちゃんだ」

と、扉の陰からひょっこりと顔を出した神綺がそんな言葉と共にニコリ微笑み、とてととと無警戒に亞愛へと寄って行く。場の全員が呆然とする中、亞愛が目をぱちくりとさせたと思ったらパアッと破顔した。

「神綺じゃない！！なんでこんなところに!？」

「ちょっと色々あってね。亞愛ちゃんも元気にしてた？」

端から見てもテンションの上がっている亞愛と、嬉しそうに話しを始める神綺。知り合いなのかその口調はかなり砕けており、そんな二人に蒼衣達はますます混乱する。

「蒼衣！！今度は紅魔館に反応が出たって本当か!？」

が、それだけでは終わらなかった。不意にスキマが開いたと思っ
たら、魔理沙が飛び出して来たのだ。ちょうど足元にいたレミアを
思いつ切り踏ん付け、ぐえと断末魔を漏らしそのまま昇天。ちよ
うど周囲の確認を終えた魔理沙が振り返って、

「……………何だこれ」

「……………だから俺が知りたい」

アリス同様三つ程間を起き尋ねて来た為、蒼衣も思わず似たり寄っ
たりな答えを返してしまう。人数が増えた分混乱が伝染したのか、
收拾が付かなくなって来ていた。

「とりあえず…、状況を整理しましょうか」

続けて顔を出した紫が場の奇妙な空気を察し、一応と言った感じで
提案する。霊夢の深々とした溜め息が、亞愛と神綺を除くその場全
員の意思を代弁していた。

「なるほど…。そんな異変がねえ…」

蒼衣達の自己紹介と大雑把な事情説明を聞き終えた亞愛が興味深そうに頷き、りんの淹れた紅茶を啜り一息付く。その後全員で客間へと移動し、咲夜やパチュリー達も呼び戻したのだ。咲夜のダメーじや荒れた廊下は、神綺がよくわからない術を使って一瞬で直^治してしまった。相変わらず妙なところで仕事が速い。

「さあ、今度はあなたの番よ。お嬢様の知り合いみたいだけど、何故こんなことをしたのか、納得のいくように説明して貰うわ」

一通り話し終えたこちら側の人間である咲夜が、殺気を隠そうともせずに亞愛を睨み付ける。彼女からすれば屋敷を破壊し自らを負かした、敵と呼んでも差し支えない相手なのだ。レミリアの知り合いということまで辛うじて自制しているが、いつまた火種が再燃するかわからない。

「んー、まあとりあえず改めて自己紹介。私の名前は赤夜亞愛。気軽に亞愛と呼んでくれて構わないわ」

そんな咲夜とは対照的に、紙に書かれた自らの名前を見せながら、気楽な様子の亞愛が改めてその名を名乗る。ずいぶん変わった漢字を使うんだなあとは思ったが、蒼衣も割と五十歩百歩である。

「種族は吸血鬼。結構長生きしててね、昔生まれただったレミィの面倒を見てたのよ。今回の一言で言えばサプライズ、かな」

「昔から亞愛には散々イジられてたわ…。言っても聞かないから諦めたけど」

羽はないけどねーと笑う亞愛に溜め息をつき、レミリアがどこか諦観したような声で補足する。先程の様子から見ると、数十年単位であんな日常を過ごしていたのだろう。どこか遠くを見るような目になっっているレミリアから、その場の全員がそっと視線を逸らした。

「…それで、あなたの能力は？」

そんな自分の主人をさておき、咲夜が据わった目で亞愛を問い詰める。殺気立っていることによく気付いたのか、気付いていて無視していたのか。亞愛が軽く驚いた表情で、視界に咲夜の姿を捉えた。

「うん？気になる？」

「当たり前です。お嬢様に害を及ぼさないと確信出来るまで、私はあなたを信じるつもりはありません」

わざとらしくすっぱける亞愛と対照的に、咲夜は冷たく言い放つ。先程の敗北も一因だろうが、何より咲夜は主人の^{レミリア}ことを氣遣ってい

る。例え汚名を着せられようと、咎められるような視線を向けられようと、レミリアには指一本触れさせない。そんな覚悟が宿った、強い意志を秘めた瞳だった。

「うん、いいよ。従者の鑑な咲夜の忠誠心に免じて教えてあげる」

敵対するつもりもないしねーと漏らしながら、亞愛が軽い掛け声と共に立ち上がる。そのまますたとレミリアの眼前に至り、

音速の拳を、鳩尾に叩き込んだ。

「貴様っ……!!」

「待つて!! 様子が……」

咲夜がどこからともなくナイフを取り出し飛び掛かろうとするが、腕を掴んで霊夢が阻止する。言われて確かによく見ると、二人の様子がおかしかった。

平然とソファーに腰掛けたレミリアが見下ろす胸元、確かに亞愛の腕は突き刺さっている。だが、『まるで立体映像の亞愛が触れているかのように、彼女の腕がレミリアの胸を貫いている』のだ。

「…相変わらず心臓に悪い冗談ね、これ」

「吸血鬼が心臓に悪いとか言うのも滑稽だけどね」

痛がる素振りも見せずそう呟くレミアに、皮肉を返し苦笑する亞愛。そのままブンブンと腕を振るうも、やはり亞愛の腕はスカスカと空回るばかりだ。当然何が何だかわからず、激昂していた咲夜でさえ目を回しそうになっている。

「これが私の『認識をズラす程度の能力』よ。文字通りあらゆる認識をズラして思い通りに出来るわ。今は『私の腕』という認識をズラして、レミイの身体を透過させている状態ね。認識がズレてるから、レミイの身体には当たらないし干渉も出来ないわ」

気付かなかった？と笑みを零しながら、亞愛が窓の外を指差す。『カーテンの開いたままの窓』の先には、茜色に染まった太陽があり、

「いくら夕方とはいえ太陽光は吸血鬼の^{私達}大敵。もう十分近くは浴びつばなしよ？」

その言葉を聞いた瞬間、ようやく全員が『吸血鬼は日の光が苦手』という事実^に思い至る。いくら夕暮れ時で弱まっているとはいえ、日光を浴びれば焼け焦げるかのように身体から煙が出るはずなのだ。

「太陽光の認識をズラしたのね…」

「正解。太陽に意識はないけれど、向こうは今私達のいる場所には何もないと認識してるわよ」

だが、現に二人はなんの異常もなく平然としている。その奇妙な現象の答えをパチュリーが告げ、よく出来ましたと言わんばかりに亞愛が微笑んだ。確かにそのような使い方をすれば、日中でも日傘なしに屋外での活動が可能になる。

「私のナイフを擦り抜けたのも…」

「私の身体という認識をズラしたのよ。スペルカード使われた時はさすがに焦ったけどね」

五百メートルくらいズラしたかな？と零す亞愛に、咲夜が思わず冷や汗を流す。おそらく亞愛の能力は、一瞬あれば発動出来る類のものなのだろう。つまり完全な不意打ちで気付かれずに倒す以外、彼女への攻撃が一切通用しないことを意味する。無敵なんて可愛いものではない。一介の妖怪が持つには、荷が重過ぎる強力な能力だ。チカラ

「…無茶苦茶だな、それ」

「あなたの能力も大概だと思っけど？深遠を統べる蒼衣君」

思わずといった感じで蒼衣が呟くが、チエシヤ猫のような意地の悪い笑みを浮かべた亞愛がそう返す。深遠と認識。確かにどちらも強大で、下手すれば世界の在り様さえ変えかねない危険なものだ。他の誰かならばともかく、少なくとも蒼衣がそれを言う権利はない。

「で？神綺と知り合いみたいだけどそれはどうなんだ？」

「レミイと別れた後だったかな…、ちょっと魔界にね。そこで色々世話になったのよ」

「三年くらい一緒だったよ」

ふと気付いた魔理沙が最後の疑問を尋ねると、意外な答えが返って来た。どうやら本当に知り合いだったらしく、蒼衣がなるほどと納得する。確かに神綺の友人の話ならば、臃げながらも幼い頃に聞いていた記憶がある。おそらく奇妙な違和感の正体はそれだろう。

「それにしても…、よく亞愛だってわかったわね？」

「気配だね。殺気はなかったし、一緒にいた吸血鬼の話は聞いてた

から、大丈夫かなって」

アリスが感心したように神綺を見るが、当の本人は大したことないよと否定の笑み。普段は抜けているとか掴み所がないのに、急事の際は冷静に対処している。そのなんとも言えないギャップがおかしくて、思わず蒼衣は苦笑いを零した。

「…で、レミィ。私もあなたに聞きたいことがあったのよ」

互いの疑問を消化し終え、一息つこうかというタイミングで不意に亞愛が口を開く。気のない返事を返すレミリアへと向き直り、

「地下フロンにいる子が今、ここにいないのは何故かしら？数百年前はそれこそ双子みたいに一緒だったのに」

その質問を、ぶつけた。

レミリアがアリスの時同様食い殺さんとはかりに鋭い視線をぶつけるが、当の亞愛はどこ吹く風と言った体。先程までのふざけた態度は一瞬で掻き消え、真面目な表情で正面からレミリアを睨み返していた。

「…まあ、私も余所の家の事情をとやかく言えた義理じゃないけど

さ。さつき蒼衣から聞いた話だと、単独での行動は危ないんじゃない？」

「……………わかってるわよ」

と、根負けしたのかバカらしくなったのか　おそらく両方だろう、亞愛が表情を崩して苦笑を漏らした。釣られてはくれなかったがレミリアもほんの少しだけ表情を緩め、同時に殺気が収まる。伊達に彼女の面倒を見ていた訳ではないのだろう、初めて彼女が年長者らしい振る舞いをする姿を見て、蒼衣達は軽く呆気に取られた。

「…レミィ」

「わかってるってば！！」

だがなおも、レミリアの表情から暗い影は拭われない。気を揉んだようなパチュリーが親友の名を呼ぶが、レミリアは癩癪を起こした子供のように叫ぶだけ。…どうもフランのことが絡むと、冷静ではいられないようだ。

「いいわ、フランを出すことを許可する。ただし言い出した以上しっかりやりなさいよ、蒼衣」

やがて踏ん切りが付いたのか、ソファから降り立ったレミリアが蒼衣を正面から見据えそう告げる。亞愛じゃなくて俺なのかという内心の驚きを押し隠し、蒼衣はしっかりと頷いた。もう二度とあんなこいしの時のような悲劇は繰り返させたりしない。自らの出せる全てを賭してでも、フランを助けるつもりだった。

「パチエ、咲夜、助力は惜しまないでね」

「…かしこまりました」

「はいはい、わかってるわよ」

親友と従者に目を遣りながら、短くそう告げるレミリア。僅かな間と共に咲夜が、手をひらひらと振りながらパチユリーも肯定を返す。パチユリーはともかくとして、咲夜はレミリアの様子に気が気でないようだ。本当に主人想いだなあと、蒼衣は何度目になるかわからないそんな感想を抱く。

「紫、あんたも…」

「わかってるわ。私は今回の件に関して、下手な手出しはしないつもりでいるのよ」

専門家様がいるし、ね。そう続けた紫は妖しげな笑みを浮かべ、蒼衣へと振り返る。確かに深遠なる闇に干涉出来るのが蒼衣しかいなダイクマターい以上、専門家と呼ぶことも出来る。だがそのふざけたような呼び方はどうよ、とその場の誰もが思わない訳がない訳で。胡散臭いと評される紫の性格、その一端が垣間見える言葉だった。

だがレミリアはそれに言い返すこともなく、足音荒々しく部屋を出る。その小さな身体は見るからに激情のオーラに包まれており、関わることを拒絶しているようにも見えた。

「…藪蛇だった？」

「…多分ね」

やがてそう呟きながら亞愛が全員に振り返り、僅かに間を起きながらアリスも肯定を返す。あちゃーと自らの頭をペシツと叩きながら嘆くが、誰も亞愛を責めるつもりはない。彼女なりに二人を心配しているのは、その場の全員がわかっていたから。

「まあ考えても仕方ないわね。ちゃっちゃんとフラン迎えに行きましょ」

場を執り成すように靈夢が、しかし気怠げにそう零し、紫も頷きながら大図書館目掛けて移動を開始する。蒼衣もパタパタと飛んで来た上海を肩に乗せ立ち上がり、二人の後に続いて歩き出した。

悪魔の妹を、鳥籠の中から引つ張り出す為に。

自室へと戻って来たレミリアは固く閉ざした扉に寄り掛かり、盛大な溜め息をつく。そこに込められていたのは何かに疲れきったような、諦観したそれ。見た目こそ十にも満たない幼い少女だが、確かに数百年の時を生きて来た化生なのだとわかるものだった。

「…なんでよ」

やや掠れた声でそんな呟きを漏らしながら、レミリアはふらふらと天蓋付きベッドの方へと歩み寄る。彼女一人が使うには大き過ぎるそれに、脱力したように倒れ込む。枕へと顔を埋め、シーツを引き裂かんばかりに握りしめ、

「なんでまたあの子が…、あの子ばかり…」

涙混じりの声を漏らしながら、彼女は一人この世の理不尽さを嘆き、悲しみ、呪った。

果たしてそれは、幸か不幸か。彼女のその慟哭は、誰にも届くことはなかった。

第十七話「認識」(後書き)

はい、亞愛もやっぱりバグでしたw

最後のシリアスっぽいの？アハハーナンノコトカナー(え

次回、進展回その2。

第十八話「開いた鳥籠」(前書き)

お待たせしました、十八話です。

ちよつとギャグ? 込みの進展回です。

ではどーぞー。

第十八話「開いた鳥籠」

「…わお」

大図書館の扉を開け放つと同時に、亞愛が驚いたような声を漏らす。
…まあ、視界を埋め尽くす大量の本と棚を見れば誰でもそうだろうが。

「こりやまた凄いわね…、なんの法則性もなくこれだけ掻き集められた本って初めて見た」

「書物に貴賤はないわよ」

本棚に並べられた古今東西の本を物珍しそうに眺め回す亞愛に、パチユリーはそう答える。貪欲に知識を求める者にとっては、媒体の種類がなんであれ変わりはない。昔に『先生』 魔法への憧れから独力で世界を渡って来た少女がそんな風に言ってたなあと、蒼衣はふと昔のことを思い出した。今頃どうしているのだろうか、いや、あの人ならおそらく毎日楽しく魔法と科学の研究でもしているだろうと脳内で自問自答。どちらにせよ今会うことは敵わないのだが。

「さすが愛読家」

「度を越してる気もするけど…」

「そんな本買う金あるならお賽銭入れなさいよ」

「却下」

そんな思考の脱線を繰り広げている間に、魔理沙やアリスも会話の輪に加わっていた。霊夢が恨みがましそうにパチュリーを睨むが、当の本人は柳に風と言わんばかり。…そんなにお賽銭が欲しいのだろうか、この巫女は。

「あ、おかえりなさい」

「…ずいぶん大所帯になって帰って来ましたね」

「コウさん、こあさん、お疲れ様です」

と、そんなこんなの中に定位置に戻って来たようだ。軍手を嵌めていたコウが本棚から視線を外し、苦笑と共に一礼。りんも応えるように頭を下げ、紅茶を用意していた小悪魔ことこあを手伝うべくパタパタと駆けて行く。

「…蔵書整理も予定通り進んでるみたいね。いいわ、休憩に入りなさい」

「あ、ありがとうございます!!」

ザツと本棚に目を通したパチュリーが満足げに頷きながら、コウに労いの笑みを向ける。まだ働き始めて日が浅いのか、単に恐縮しているのか。手早くその場を片付け一礼し、コウは外へと出て行った。

「体力は有り余ってるみたいだから、かなり重宝してるわ」

「拾った甲斐があつたようで何よりです」

そんな光景を尻目にパチュリーは彼の功績を褒め、咲夜も表情を緩めて笑みを零す。さりげなくひどいことを言っている気もするが、悪意がないのは明らかなので野暮なツツコミはやめておくことにした。

「失礼します。咲夜さん、いいですか?」

そんな二人に苦笑していると、背後の扉が開く音と声が響き宙へと溶ける。振り向いてみれば例の奇妙な名前の執事　あざいむが足音一つ立てず優雅な所作でこちらに歩いて来るところだった。

「あら、どうかした？」

「いえ、お嬢様がお呼びでしたので」

首を傾げながら尋ねる咲夜に、あざいむはあくまでも丁寧に答えた。納得と共に頷きを返し、二人の従者はその場を後にする。

かに見えたか、退出する直前に咲夜が蒼衣へと向き直った。

「蒼衣、だったわね。くれぐれもお気を付けて」

相も変わらず鋭い視線　しかし敵意の大分和らいだそれに向けながらそう言い残し、今度こそ咲夜は大図書館から姿を消す。単なる心境の変化か、はたまた死なれては寝覚めが悪いからか、気遣うような言葉を残していった彼女に、蒼衣は呆気に取られていた。…亞愛よりは信用出来るという程度の認識かもしれないのが、なんとも虚しいところだが。

「…霊夢、一つ頼んでもいいかしら」

そんな蒼衣をよそに、扇子を口元に当て長考していた紫がようやく

口を開く。見るからに剣呑な雰囲気を纏った彼女に、名指しで呼ばれて無視することも出来ず。気怠そうな声色を隠そうともせず、霊夢は何？と視線を動かした。

「少しの間幻想郷全土を監視していてちょうだい。深遠なる闇ダークマターが別地点で発生しないとも限らないわ」

「別にいいけど…、その間あんたは何する訳？」

唐突と言えは唐突過ぎる、しかし冷静に考えれば筋の通ったその結論話。理解は出来るが何故自分でやらないのかという霊夢のささやかな反抗の声に紫はええ、と頷き、

「ちょっと気になることが…、ね」

目を細めて何処とも知れぬ虚空を睨み、静かにそれだけを告げた。

「蒼衣、神綺、任せても大丈夫ね？」

「…全力は尽くします」

「もちろんだよ」

その異様な気配に神綺を除いた全員が吞まれる中、当の本人は特に気にした風もなくあっさり二人に後を托す。あまりの変わりつぷりに反応が遅れたが蒼衣はしっかりと、神綺はいつも通りに答えた。無論託されるまでもなく、蒼衣は誰一人として被害は出さないつもりだった。

「じゃあまた後でね。」武運を

「へますんじやないわよー」

そんな意志を無意識に感じ取ったのか満足げに紫が頷き、いつ開いたのかもわからないスキマの中に身を沈めていく。霊夢も脱力した声で応援の言葉を残すというシニールな離れ業をこなしつつ後に続き、気が付けば残ったのは当初の顔ぶれの七割となっていた。

「さて、じゃあ行くか」

そんな中真つ先に声を上げたのは、今の今まで本を品定めしていた魔理沙だった。箒を肩に担ぎながら伸びをする魔法使いに視線を移し、不躰とわかっていても思わず彼女を上から下までジロジロと眺め回してしまう。

確かに彼女は今まで幾多の異変を乗り越えて来た、弾幕ごっこのエキスパートであろう。だがあくまでも人間である彼女の身体は、見た目通り十代半ばの少女のものでしかない。しかも相手は亞愛と同じ吸血鬼。数十キロの鉄塊をただの蹴りで吹き飛ばせるような人智を超えた存在なのだ。これから行うのは彼女に会いに行くという行動であり、弾幕ごっこという命が保証されるルールがある訳でもない。蒼衣のような強力な妖怪ならまだしも、彼女を連れていくのは自殺行為に他ならないのではないのか

「お前も来るのか？」

「おう。一応面識はあるし、役には立つはずだぜ」

それらの混じり合った感情のままに尋ねるも、ぐるぐると肩を回す魔理沙自身は行く気満々の様子。面識があるなら滅多なことはないと信じ、蒼衣はそうか、とだけ返すことにした。

……………最悪俺か亞愛が守れば何も問題はないだろう。

そう結論付けた蒼衣は案件を脳の片隅に押しやり、パチュリーへと向き直る。彼女はと言えばこぁとりんの用意した紅茶とクッキーでティータイムと洒落込んでおり、何と云うかマイペースだった。

「さっきと同様に付き省略。死なない程度に頑張りなさい」

「励ましてんのか脅してんのかわかりにくいな…」

「期待してるのよ、一応」

呑気にそう言うパチュリーに思わず苦笑いしながら皮肉を返すが、苦笑と共に意外な言葉を投げ掛けられる。姿勢を正して向き直ったパチュリーは透き通った瞳で蒼衣を射抜き、

「心を閉ざした覚りに比べたら、多少不安定な吸血鬼くらい数倍マシでしょ?」

「…五十歩百歩じゃないのか?」

何故こいしのことを知っているのかと突っ込むよりも先に、思わずそつちを先に反論してしまう蒼衣。確かに話し合いたい意味では楽かもしれないが、初めて会ってから三時間も経過していないのだ。最悪の場合戦闘になれば、純粹に攻撃特化した彼女の相手はこいしよりも面倒なことになる。そういう意図を込めての反論は、かもね、という言葉と苦笑によって受け止められた。

「ま、やれるだけやってみるよ」

参ったなと心中で苦笑し、そうとだけ答える蒼衣。出来る保証はないから確約は出来ないが、全力を尽くすつもりだ。一度こいしの時に経験しているのだから、同じ轍は踏むまいと決意する彼の横、心配げに兄を見ていたアリスが、

「…そういえば亞愛は？」

とんでもない疑問を零した。

言われて視線を巡らせてみれば、あのチエシヤ猫吸血鬼の姿がどこにも見当たらない。上海と遊んでいる神綺を除けば、全員が何かしらを口になっている。そんな状況であの騒ぎの塊が、何も喋らずにいられるだろうか、否、無理だ。だとしたら彼女はどこへ消えたのか

「…何故かしら兄さん、嫌な予感しかしないんだけど」

「…奇遇だなアリス、俺もさっきから冷や汗が止まらないんだが」

思わず兄妹揃って顔を合わせ、引き攣ったような表情で乾いた笑みを浮かべる。神綺達を除いた場の全員が、凄まじい悪寒というか嫌な予感を感じた瞬間、

フランのいる地下室から、爆音が響き渡った。

「あんの…、ドアホおおおおおっ！！」

思わず絶叫を漏らしながら、蒼衣は魔理沙を伴って全速力で地下へと駆け出す。あの女絶対一発殴ると、そんな決意を密かに固めながら。

「…こりやまたずいぶんとまあ」

爆音が響く少し前、パチユリー達が蔵書整理云々の話をしている辺りで抜け出して来た亞愛は眼前のそれを感じたように眺め回す。奇妙な赤い紋様が描かれた豪華な扉は大きく、暗さと相俟って見る者を圧倒する迫力を秘めていた。

「対物理・魔力結界が最高レベルまで編み上げられてるわね…。いい友人に恵まれたみたいじゃない」

が、当然亞愛にとってその程度は瑣末なこと。威圧のいの字も感じませんと言わんばかりの体で扉にぺたと触り、結界の強度や技

術を確認している。唯我独尊というか、傍若無人というか。亞愛はまさに、それを体言した人物だった。

「回りくどいのは苦手なのよねー私」

チェックが終わったのか、そんなセリフを零しながら亞愛は数歩後ろへ下がる。当然諦めた訳でも、気圧された訳でもない。

何故なら彼女の口元には、これ以上ないくらいに嫌な予感を感じさせる笑みが浮かべられているのだから。

「せーのっ」

掛け声と同時に、散歩でもするかのように軽く踏み出した亞愛は徐々に速度を上げていく。扉の眼前に至ると同時地を蹴り脚を振るい、

「どっかーん」

なんとも気の抜ける擬音と共に、バイクに乗ったバツタのヒーローも真つ青な飛び蹴りを放った。

吸血鬼の馬鹿力と慣性、亞愛の全体重が乗せられた一撃は容易く扉

を蹴破り、一瞬で瓦礫の山へと姿を変えた。そのまま宙を突っ切った亞愛はバランスを整え、スタツと華麗に着地を決める。放たれた対象が悪の怪人ではなくなんの罪もない扉なのが、なんとも亞愛らしかつた。

「だ、誰…!？」

当然そんな予想外　　というか前代未聞の奇行と共に入って来る知り合いなどいる訳もなく、フランは警戒と怯えの入り混じった声を投げ掛ける。警戒心の強い猫のような態度に頬を緩め、亞愛はそちらの方へと歩き出した。

「はい、久しぶりねフラン。相変わらず可愛いこと」

「あ、亞愛!？」

挨拶と共に土煙を切り裂いて現れた漆黒^{亞愛}の少女に、フランは思わず目を丸くする。数百年前生まれただった彼女達の面倒を見ていた姉のような存在とこんな再会をすれば、誰だって開いた口が塞がらないだろう。破天荒という言葉は彼女の為にあると言っても、あながち間違いではないかもしれない。相変わらず台風のような少女だった。

「うんうん、案外いい部屋じゃない。これならまだマシな方ね。全

く、レミィったら何考えてんのよ」

呆然とするフランをよそに、うんうんと頷きながら亞愛は部屋の中を眺めている。調べられた室内を見て満足げに頷き、レミアアへの不満を口に

しようとした瞬間、鈍い音と共に彼女の姿が消失した。

いや、消失したというのには語弊がある。正確には『上方からの衝撃を受け、地面に突っ伏した』だろう。

何故か？それは簡単。息を切らしながら駆け付けた蒼衣が、割と本気で亞愛の頭を殴ったのだ。無論、ツツコミ的な意味で。

「いったー！？何すんのよ蒼衣！？死ぬかと思ったじゃない！？」

「こつちのセリフだこの大馬鹿！！女の子の部屋に扉蹴破って入る奇天烈な奴なんて初めて見たぞ！？」

ガバツと起き上がりながら亞愛が不平不満をぶちまけるが、実際には傷一つない。なので蒼衣は謝罪という選択肢を頭から消し去り、全力でツツコミを入れる。フランに深遠なる闇ダークマターという劇薬が仕込まれているという説明はちゃんとしたのに、自分から刺激しに行く亞愛の言動に蒼衣は怒りさえ覚えていた。

「だからって女の子の頭殴るのはダメでしょ!!! フェミニズムの欠片もないの!?!」

「ああ確かに女性殴るのは人として失格だよただし亞愛てめえは除外だ!!! 一日に何回も扉ぶっ壊す吸血鬼を女の子とは言わねえ!!!」

「ひつどーい!!! いいわ、だったら力付くでわからせてあげる!!!」

「そうやってすぐ力任せにしてる時点でアウトだこのドアホおおお
おお!!!」

互いに歯止めすらする気がない為、言い合いはどんどんエスカレートして行く。被害者であるフランはと言えば、友人二人が額を突き合わせて口喧嘩するのをぼかんと眺めていた。目の前の現実が、処理の許容量をオーバーしたのだからうことは想像に難くない。

「ようフラン、元気か？」

と、そんなフランの頭をぽふぽふと叩きながら魔理沙が現れた。その感触に現実感を取り戻し、生返事を返しながらフランは魔理沙の顔を見上げる。

「魔理沙…、アレは一体…」

「知らん」

唯一この場で頼れそうな魔理沙相手に尋ねてみるも、彼女はそれを遮ってぴしゃりと答える。その瞳はどこか遠く　　少なくとも眼前で騒いでいる二人以外の何かを見ていた。

「え、でも…」

「いいかフラン、私達は何も見ていない。だから早くここから出よう。いいな？」

なおも聞こうとするフランの肩に手を寄せ、魔理沙はその紅い瞳を真正面から見据えた。釣られて見返した魔理沙の顔は『今の二人と関わりたくない』というオーラをこれでもかとかばかりに放っており、気圧されるようにフランは頷く。よしと頷きを返した魔理沙は立ち上がり、フランの手を引いて部屋を後にした。

再度部屋から爆音が響き渡るのは、その数秒後のことである。

「まったく…、二人共何やってんのよ…」

「こいつが悪い」

鼓膜をつんざく爆音からしばらくして帰って来た二人に、パチユリが頭を抱えながら愚痴を零す。が、無傷である当の本人達は至って平然とお互いを指差し、責任のなすりつけ合いをしていた。亞愛が子供っぽいのと蒼衣がぴりぴりしているのが合わさって、二人の相性はかなり悪いようだ。

「まあそれはさておき、この後はどうするんだ？」

「行動方針は決まってるの？」

そんな微妙な雰囲気漂う場を仕切り直したのは、意外にも魔理沙だった。パチユリも気を取り直し、暫定的なリーダー兼専門家である蒼衣へと視線を送る。

ちなみに件のフランはと言えば、神綺の膝に座りアリスの人形劇を魅入られたように見詰めている。会ったことはあれど話すのや能力を見るのは初めてらしく、自在に動き回る人形達に目を輝かせていた。

「もう日も落ちてるから…。亞愛の力を借りるにしても外で遊ぶのは難しい」

「かといって地下室にいたフランには室内の遊びじゃ物足りないだろうし…、本格的に動くのは明日からね」

そんな三人の様子を眺めながら、せつせとクツキーを運んで来てくれた上海を労いつつ蒼衣が壁際の巨大な古時計を見遣る。亞愛の言った通り主な遊びは外を予定していたのだが、時刻は既に七時過ぎ。いくら夜目が利くといっても、そんな中で遊ぶには辛いものがある。故に今日のところは休んでおこうというのが、二人の共通見解だった。…相性は悪い癖に息ピッタリである。

「つまりこいしの時と同じで、遊ぶなりなんなりして一緒にいるってことか？」

「基本的にはな。現段階じゃ感染方法にしる発現条件にしる、^{クマター}深遠なる闇の情報が足りなさ過ぎる。まずはフランのことを知らないかどうかにもならない」

「同感ね。^{対象}こいしの感情が発現のトリガーになった可能性は高いし、限度はあるけど本人の好きにさせてやるのが妥当だと思う」

二人の言葉を纏めた魔理沙に頷き、蒼衣とパチュリーは溜め息を零す。まだ見ぬ里の人間を除外すれば、感染例はこいしただ一人。たった一度のその接触で、得体の知れないブラックボックスである深^{クマター}遠なる闇のことを全て知るのとは不可能だ。

仮にパチュリーの感情絡みという推測が当たっていたとしても、人が宿す感情など十人十色どこの話ではない。故にじれったいのを承知してでも、安全牌を出す以外に道はないのだ。

「後手に回ってる感は否めないけど…、仕方ないか」

「遊び相手くらいならいつでも付き合えるぜ」

亞愛もその点は理解しているのか不満そうながらも頷き、魔理沙は気楽にそう答える。まだまだ先は見えないが、このメンバーならなんとかやって行ける気がした。

「ん、じゃあ暗い話題は終わり。晩御飯にしましょう」

伸びをしながら立ち上がった亞愛が場の雰囲気^{雰囲気}を断ち切るようにそう告げ、三人もそういえばと思に至る。現在時刻は午後七時、普段なら晩御飯を食べ始めていた頃だろう。フ란の感染や亞愛の襲撃で緊張続きだった為気付かなかったが、蒼衣の空腹度合いもそろそろ限界に達していた。

「こんなこともあろうかと!!」

「既に準備しておきました!!」

と、そんな亞愛に合いの手を入れたのは、紅茶を淹れて以降姿が見えなかったこあとりんだ。カートには人数分のハンバーグが載せられており、それを作る為に席を外していたのかと全員が納得。本当に隙がないというか、完璧な従者達だった。

「…図書館内の飲食は基本的に厳禁なんだけどね」

「防臭結界なら張っておいたよ」

そんな二人にパチュリーは半目でじとーっとした視線を投げ掛けるが、不意に隣に現れた神綺の発言に目を丸くする。言われて探ってみれば確かに、図書館全体に彼女のものと思われる結界が張られていた。曲がりなりにも大図書館はパチュリーの城、そこに結界を張られて気付かないなどありえない。神綺はなんでもないことのように微笑んでいるが、その技術はまさに一流　　否、それを通り越した領域にある。

魔界神　　その言葉の意味を、パチュリーは真に理解した。

「…そうね、今日くらいはいいか」

が、そんな緊張もカートを見てはしゃぐフランを見ているうちに薄れ、苦笑いと共に頷きを返す。元来図書館とは静かであるべき場所だが、たまにはこういうのも悪くはない。

……いつぶりかしらね、こんな騒がしい晩餐は。

そんな思考と共に席を立ち、パチュリーは自らのハンバーグを^{晩御飯}厳選すべく人込みの中へと向かって行った。

第十八話「開いた鳥籠」(後書き)

いやあ亞愛がいると話が進む進む(あ
カオスな子って書くの楽ですね！(おい

次回、主にほのぼの時々カオス。

第十九話「紅魔館の一日」(前書き)

大変お待たせしました、十九話です。

前半ほのぼの後半ゴニョゴニョ。割と長いかな？
ではどーぞー。

第十九話「紅魔館の一日」

午前六時、紅魔館廊下。未だ夜の明けきらぬ薄暗い通路を、一つの人影が移動していた。幼い体付きと七色の水晶をぶら下げた翼が特徴的な、少女のように見える人影だ。

こっそりと足音を忍ばせた少女　フランは出せ得る最高速度を維持しつつ、しかし慎重に人気のない廊下を駆けて行く。彼女の目指す先は客間　そこで眠る人物の一人だ。

キィ…、と僅かに扉を軋ませ、静かに部屋へと侵入する。夜明け時の朝日が僅かに差し込むその部屋で、三人の少年少女達が眠っていた。

「わ〜い……、ケーキがいつぱい……」

ふと彼女の聴覚が、そんな柔らかな声を捉える。そちらへ視線を向けると同時、フランは思わず息を呑んだ。

シートへと流れる銀の髪は僅かな朝日を受け煌めいていて、肌は新雪のような白。タオルケットの隙間からはすらりとした足が覗いており、まるで絵画に描かれた女神のようだった。

「蒼衣君とアリスちゃんも呼んで〜、みんなでパーティーなんだよ〜」

幸せそうな表情でそんな寝言を零した彼女　神綺がもぞもぞと寝返りを打つ。これで二児の母だというのだから、世の中というものは理不尽というか訳がわからない。

彼女を見た女性の大半が抱くであろうそんな感想は、しかし侵入して来た少女には無縁のものだった。幼い故に純粋な彼女は、綺麗だなあの一言だけでその光景を流してしまう。

と、フランの視線が左にズレる。その瞳の先、神綺の右手のベッドで寝ているのは、金の髪を持つ少女だ。枕元には数体の人形、サイドテーブルには布きれや裁縫セットが散らばっていることから、人形達の手入れをしていたのであろうことは想像に難くない。

穏やかな寝息を立てて眠るアリス　彼女もフランの目的ではない。となれば、残るは右　神綺の左手で眠る三人目の人物だ。

純白のシートと対になるような、漆黒の髪を持つ少年。アリス同様静かに眠る彼こそが、少女の目的の人物　蒼衣だ。

「蒼衣ー、朝だよー」

他の二人に気を使い声を潜めながら、ゆさゆさと蒼衣を揺らすフラン。だがその眠りは深いのか、何一つ反応を返さない。

「朝だよー」

ゆさゆさ。ゆさゆさ。

ちよつと強めに揺すってみても、反応は変わらない。

……フランは知らない。彼が夜な夜な少女の為に遊びや術式の調べ物を、二時近くまで敢行していたことを。少女を思うが故に彼女の声に応えられないというのは、なんとも皮肉だった。

「蒼衣ー」

ゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさ。

なおも反応は返って来ない。いくら妖怪とはいえ蒼衣は元人間、睡眠時間が少ないというのは中々辛いものがある。慣らしている者ならば話は変わってくるが、三日連続四時間睡眠で稼働出来る程蒼衣の生活習慣は乱れていなかった。

「むう……」

一分程続けてみるも、効果は全くなし。いい加減焦れて来たのか、フランが頬を膨らませる。その表情は五百年近くも生きて来た吸血鬼とは思えない程生き生きとしていて、幼い少女のそれそのものだった。

「えいつ」

と、何を思ったのかフランは地を蹴り跳躍。蒼衣の腹に着地を決めると同時、鈍い音と僅かな声が響いた。

「あーあーいー」

が、それに気付かなかったフランは蒼衣に跨がる形で、なおもゆさゆさと揺さぶりを掛ける。既に先程の衝撃で蒼衣の目は覚めているのだが、いい所に入ったのか起き上がれないようだ。

「あーさーだーよー」

当然フランがそんなことに気付くはずもなく、揺さぶりはどんどんエスカレートしていく。微かな鈍痛を残す腹から意識を逸らし、寝起き特有の霞む瞳で蒼衣は少女へと焦点を合わせに掛かった。

「あーそーぶーのー」

ゆさ。

いい加減酔いそうなので蒼衣は軽く深呼吸。腹筋だけで身体を強引

に起こし、バランスを崩し倒れそうになるフランをひよいと抱き上げる。何事もなかったかのようにフランを下ろし、現状把握にそのまま数秒。そして、

「……フラン、ちょっと座ろうか」

ようやく全てを理解したのか、頭を押さえながら溜め息と共にそう告げた。

「座ってるよ？」

「いやまあ」

確かに座ってはいるのだが。座っている場所が蒼衣の膝の上というのが問題な訳で。仕方ないので再びフランを抱き上げ、向かいにある神綺のベッドへと座らせた。

「あのな……、何やってんだお前は」

向き合う形になったフランが可愛らしく小首を傾げるが、蒼衣は深々と溜め息をつきながらそう尋ねる。……とは言っても十中八九、理由は一つしかないのだが。

「蒼衣と遊ぼうと思って」

ですよねーと心中で冷めたばやきを零しながら、どうしたものかと蒼衣は考える。

いかに数百年の時を生きて来たと言っても、彼女の精神はまるっきり子供のそれだ。蒼衣や他大多数が危惧するであろうあれやこれを説明したところで、理解してくれるとは思えない。こいしも似たような行動はしていたが彼女は間違いなく自覚があつてやっているし、無意識を免罪符に振りかざしてくるのでぶっちゃけ諦めていた。

が、フランならまだ間に合うはず。あのような精神的に疲れる小悪魔少女へと進化する前に、どうにかしてその辺をしっかりと教えなければ。

かといって蒼衣は余所者なので、迂闊なことは話せない。どう説き伏せたものかと頭痛寸前の頭を回転させようと

した瞬間、蒼衣は床に突っ伏していた。

「いよっしゃ、奇襲大成功!!」

蒼衣を叩き伏せた張本人 脚を振り抜いた姿勢のままの亞愛が、ガッツポーズと共に鬨の声を上げる。完全に不意を打たれた形の蒼衣の身体はベッドから叩き落とされ、頭は床に半分以上減り込んで

いた。吸血鬼の馬鹿力をもろに食らったのだから、当然と言えば当然だが。

「えと、亞愛……。蒼衣は……」

「え、大丈夫でしょ。生きてはいるし」

思わず心配げな声を漏らすフランだが、亞愛はひらひらと手を振りそう答える。……息をしてさえいれば生きている、と言わんばかりの言い草だった。

と、頭を無理矢理引っこ抜いた蒼衣が、ゆらりと幽鬼のように立ち上がる。暗く淀んだ蒼い瞳は真っ先に亞愛を捉え、

な・に・し・や・が・る・こ・の・ク・ソ・ア・マ。

聴覚ではなく視覚からその言葉を理解すると同時、亞愛の頭は万力のように締め上げられていた。いわゆるアイアンクローで。

「よつこの暴力馬鹿女。朝っぱらから愉快に素敵な目覚めをありがとう。最近の目覚まし時計は無防備な寝起き頭を蹴りでぶっ飛ばすのが主流か？あ？」

「うふふ喜んで貰えて光栄よこのミスターロリペドフィン。その歪んだ性根をとやかく言う気はないけど私の知り合いに手を出すのはいただけないわね」

互いに互いの頭をギリギリと締め上げながら、凄まじい悪寒を感じさせる笑顔で言葉を交わす蒼衣と亞愛。心なしか二人の妖力魔力が漏れ出し、周囲の空間が歪んでいるような気さえする。

言うまでもなく亞愛は他人をイジるのが生き甲斐なので引き下がるつもりはさらさらないし、普段なら軽く流す蒼衣も蹴りのせいで頭のネジが数本ぶっ飛んでいるのか収まる気配は全くない。……本当に相性が悪いというか、犬猿の仲というか。どこまでも相容れない二人である。

当然眼前でそんな光景が繰り広げられて、フランが黙っているはずがない。みんなで仲良く遊びたいのだから、喧嘩など以っての外だろう。慌てて仲裁に入ろうとするが、

「わ……、ちっちゃいアリスちゃんだ……」

寝ぼけた神綺にがっしりとホールドされてしまい、布団の中へと引きずり込まれてしまう。フランは懸命に抵抗するが、柔らかな身体と温かな布団に包まれた中抗うのは難しい。ただでさえ早い時間なのだ、見た目通りの精神年齢である彼女とてあと一時間は寝たい年頃だろう。

いけないとは思いつつも、睡魔に勝てるはずもなく。蒼衣を起こし

に来たはずのフランは、夢の世界へと旅立ってしまった。

蒼衣達のいがみ合いとフランの二度寝は、アリスが起床するまでおよそ三十分程続くこととなる。

「……………朝早くからお元気ですね、お二人共」

「……………まあな」

そんなこんなを経て約一時間。朝食を終えた蒼衣はフランと魔理沙を伴い外へと出ていた。視線の先ではフランが準備運動をしており、蒼衣の傍らで朝の顛末を聞き苦笑いを零しているのはいつか門で寝ていた中華系の少女だ。

彼女の名前は紅美鈴　紅魔館の門番をしている、武術に長けた妖怪らしい。面と向かって話したのは三日前が初めてだが、それにしても亞愛に気付かず素通ししたとして咲夜に折檻を受けていたところを通り掛かった為だ。よく昼寝をする癖こそあるものの、性格は真面目で優しく穏やか。太極拳をやっているところは数回見掛けたが、腕が立つ門番というより近所のお姉さんというイメージがしつくり来る少女だった。

「……しかし、未だに信じられませんね」

話が一段落すると、美鈴がちらりと視線を移す。その先には燦々と輝く太陽の光を浴びつつ、ラジオ体操をしているフランの姿。今彼女の身体には亞愛の能力が働いており、太陽光を素通りさせている状態なのだ。この光景を見るのも三度目になるが、いつ見ても相変わらず吸血鬼という範疇カテゴリーから激しく逸脱した光景である。彼女の正体を知る者はまず正気を疑うか、夢か何かだと思っだろう。

「そういえば……、亞愛はどこ行っただ？」

「知らん。まずあいつの行動基準がわからないし」

そして件の亞愛はといえば、朝食を食べ終わるなり姿を消していた。放って置いたらまた何かやらかしそうに恐ろしいが、かといってフランから目を離す訳にもいかない。現在大絶賛放置中。最悪レミアを差し出せばおとなしくするだろうとさりげなくひどいことを考え、魔理沙にそう答えた蒼衣は両手をぐっと伸ばし欠伸を零した。

「蒼衣ー、準備出来たよー」

「んで、組み合わせはどうするんだ？」

と、準備を終えたフランがとてとと近寄って来た。白と黒の五角形が組み合わさって出来たボール。いわゆるサッカーボールをリフティングして遊んでいた魔理沙も蒼衣へと向き直る。

「バランス的に魔理沙とフランが組めばいいんじゃないか？さすがに三対一は無理だろうし」

二者の視線を向けられた蒼衣はしばし思考、そう結論付け言葉を紡ぐ。四人の中で一番頑丈な美鈴はキーパーで確定として、フランはもちろん魔理沙も手加減が出来るようには思えない。全力でぶつかり合って怪我でもしたら目も当てられない。つまりその二人を味方同士にさせるのがいいと考えたのだ。

「……なんか失礼なこと考えなかったか？」

「気のせいだ。美鈴もそれでいいか？」

「ええ、構いませんよ」

ジト目で問いたただす魔理沙を華麗にスルーし、蒼衣は美鈴に問い掛けた。頷きと肯定を返した美鈴に安堵した蒼衣は、ちらりと視線を左に四十度程ズラす。その先にあったのは

「…………深夜のテンションって恐ろしいな」

彼とパチユリーが昨夜　　といつかほんの五時間前に作ったサッカーゴールだ。

ここまで来れば、誰でもわかるだろう。これから四人がやるのは、ブラジル発祥の世界的に有名な球技　　サッカーである。

「まあ一言で言うならボールを蹴ってゴールに叩き込めば勝ちっていうシンプルなスポーツだ。フランは魔理沙と協力して、俺の妨害を抜けてゴールにシュートすればいい。美鈴が守ってるからそこは上手くやってくれ」

手早くルールを説明し、蒼衣は美鈴から五メートル程離れた場所に陣取る。ゴールまでの距離なんか覚えていないし、遊びなのだから適当でいい。そんな訳でフランはゴールから十五メートル程の位置に立たせている。

……………ま、どうとでもなるだろ。

そんな思考を心中で呟き、蒼衣はフランの方へと向き直った。

「蒼衣、負けないぜ」

「……負けず嫌いな奴」

と、目の前にはいつの間にか白黒の魔法使いの姿。蒼衣をマークするつもりなのか、わざわざ魔理沙は蒼衣と付かず離れずの位置をキープしていた。思わず蒼衣が呆れたように零すが、幻想郷の少女達の半分以上は負けず嫌いである。

「えっと……、これをあそこに入れば勝ちなんだよね？」

二人がそんなやり取りを交わす中、腕組みをして長考していたフランが顔を上げ蒼衣に確認する。思わず魔理沙と顔を見合わせるも互いに首を傾げるばかりで、とりあえず頷きを返した。そっかと笑顔で答えたフランは背を向け、不意にたたたと駆け出す。ボールから五メートル程離れるとくるりと身を回し、大きく深呼吸。

「……なあ魔理沙、とてつもなく嫌な予感がするんだが」

「……奇遇だな蒼衣、私もさっきから本能が『ここから逃げろ』って叫んでるんだ」

「……せーのっ」

その様子に何かを感じ思わず冷や汗を流す蒼衣と魔理沙だが、当のフランはお構いなし。先程以上の速度で駆け出したと思っただら四歩で一気に距離を詰め、

「どっかーん！」

亞愛直伝の掛け声と共に全力で右足を振り抜いた。

フランの速度と体重の全てを叩き込まれたボールは唸りを上げて大気を切り裂き、ゴールネットに突き刺さるところか貫通。勢いを全く緩めぬまま紅魔館の敷地を飛び出して行き、木々を数本薙ぎ倒してようやく止まった。この間、僅か三秒。

『……………いやいやいやいやいや』

その光景を見届け約十秒、ようやく再起動した三者が目の前の現実を否定しようとしてツッコミですらない声を上げる。いやまあ確かにルールには抵触していないのだが、誰が超弩級そんなものロングシュートを予想出来ただろうか。

「わあい、入ったあ」

そしてとんでもない剛速球を放った張本人であるフランは、両手を挙げてぴよんぴよんと喜ぶ。そのギャップがなんとも言えず、蒼衣は溜め息と共に座り込んだ。規格外にも程があるだろう。

「……とりあえず、死なないことを最優先にするか」

『……賛成だぜ』

その後約五時間半、途中から加わったメンバーを交えた蒼衣達は、文字通り命懸けで遊んだ。ちなみに死人・怪我人は、幸い一人も出なかったらしい。

「……元気いっぱいだね、あの子」

外で騒がしく遊ぶ蒼衣達　正確にはフランの様子を見下ろし、亞愛は表情を緩ませそう呟く。地下にいた頃の陰りはなく、純粹に遊ぶことを楽しんでいる彼女を見てみると、自然と心が温かくなった。……シユートをマトモに食らったコウが吹っ飛ばされているが、そこはまあ「愛敬」。

「たった三日であそこまで懐かせるなんて……。やるじゃない、ロリコンジェダイ」

三日　亞愛が紅魔館こくまに来てからたったそれだけの時間で、地下にいた少女は元気に遊べるようになった。その原因の半分を担っている少年へと視線を移し、憎まれ口ともとれる言葉を漏らす亞愛。とは言っても毛嫌いするような声ではなく、友人同士がからかい合うような優しいそれだった。

確かに二人共口喧嘩してばかりだが、あくまでそれはふざけ合いの範疇に収まるレベル。互いが互いの力を必要としている以上険悪になる必要性は皆無だし、接触の機会はなるべく多く設けるべき。いついからかうことを優先してしまうが、深刻ぶるのも気疲れするだけだし無駄の一言に尽きる。

ならば少しでも明るく道化のように振る舞い、暗い空気を払拭する方が建設的だ。蒼衣もそれをわかっていて乗って来てくれている。つまり喧嘩する程仲が良いという、そんな言葉を体言したような関係。少なくとも亞愛自身は自分と蒼衣の関係についてそう考えていた。

などと思考に耽っているうちに美鈴まで星になったが、気にしたら負けである。

「あなたは混ざらないの？……レミィ」

「混ざる訳ないでしょ。今更どの面下げて会えって言うのよ」

脇道に逸れていた思考を断ち切り、座っていた柵からテラスへと降り立ちながら亞愛は部屋の中の少女へと振り返る。一人用のソファに腰掛け背を向けていたレミリアは、堅い声でただそれだけを返した。その小さな後ろ姿からは拒絶のオーラが漏れ出ており、私に関わるなと雄弁に語っている。

まるで、自分とフランは関わってはいけないとでも言うかのように。

「またまた子供みたいに意地張っちゃってー。うりうり」

「ちょ、ひやめなしいよ!!--」

そんな親友に心中で溜め息を零しつつ、亞愛は能天気な声と共に背後からレミリアの頬をむにむに。反論するレミリアを華麗お子ちゃんまにスルスル、強張った頬をこれでもかと揉みほぐして行く。

「りーん、準備出来たー?」

「「じちら」」

レミリアの抵抗をいつそ清々しい程に無視しつつ、亞愛は同志へと声を掛ける。呼ばれた少女はどこからともなく現れ、俗に回転テーブルと呼ばれる日本発祥の中華テーブルをこれまたどこからともなく取り出ししっかりと設置。亞愛はそれに頷きながらレミリアを抱き上げ、そちらへと歩みを進めて行く。

「ち、ちよっと!!何するつもり!?!」

ふふふふと怪しげに笑みを漏らす二人にビビりながら、レミリアは必死に虚勢を張りつつ尋ねる。そんな様子にはくそ笑んだ亞愛が、レミリアを回転テーブルの上に正座させた。

「意地っ張りなレミリアちゃんには…」

「罰として大回転していただきますーす」

しっかりとテーブルの縁を握らせながら、そんな爆弾発言を投下する悪魔が二人。この後の結末を理解したレミリアの顔から凄まじい勢いで血の気が引いていくが、そんなことで止まる二人でもなく。

レミリアを乗せた回転テーブルは、吸血鬼亞愛の馬鹿力により凄まじい速度で回り始めた。

「……止めないんですか？」

そんな様子を部屋の隅から眺めていた二人の内、いつもの黒い執事服を着たあざいむが隣の咲夜に問い掛ける。問われた咲夜は深々と溜め息をつき、

「……言って止まると思っ？」

「……愚問でしたね」

そのやり取りで満場一致、このまま放置という結論に決定した。わかればよろしいと咲夜は頷くが、根本的な解決になっっていないことに突っ込むのは野暮というものだろう。誰だってあんな残像の見える速度で回りたくはない。というか三半規管がやられる。

「……まあ、多少の気晴らしにはなると思います」

「……手段はアレだけどね」

そんな言葉を苦笑と共に交わしつつ、二人はなおも騒ぎ続ける三人

を見遣る。ついに地獄のティーカップもどき（仮）から離脱したレミリアが反撃に出るが、身長差を上手く使った亞愛に届かず地団駄を踏んでいるところで。

心なしかその表情は、先程よりも幾分和らいでいた。

『…………死ぬかと思った』

昼。昼食の為中断された死の遊戯デス・ゲームから生還した者達は、何を差し置いてもまずその一言を吐き出した。五時間にも及ぶサッカーワンサイドゲームという名の一方的な試合で、プレイヤーが空を舞った回数は優に二十を越える。…………うち半分は美鈴、もう半分はコウというのがなんとも言えないが。

かと言って大空へフライしなかったメンバーもフランの強烈なシュートをかわすのに全力を費やし疲労困憊。あと十分でも咲夜の呼び出しが遅ければ、みんなで仲良く新たな星座に生まれ変わっていただろう。

「似たような展開は予想してたけど、まさかここまでとはね…………。治癒魔術いる？」

『……………お願いします』

床に転がる死体　もとい死に体の四人を眺め、冷や汗混じりのパ
チユリーがそう問い掛ける。魔理沙、美鈴、こあ、コウの四人は一
も二もなく頷き、展開された緑色の魔法陣　回復促進魔法の光に
包まれリラックス。ちなみに蒼衣は魔界時代の訓練の賜物か、椅子
に座れる程度には回復していた。……………いずれにせよ死に体数歩手前
だが。上海に顔をぺちぺち叩かれようがアリスに心配げな声を掛け
られようが、拳句神綺に頭を撫で回されようが、覇気のない声でど
うにか返す程度である。

「ねえねえ、次は何して遊ぶ？」

そしてこの地獄絵図を生み出した張本人である悪魔フランの妹はと言えば、
まだまだ元気いっぱいだった。目をキラキラと輝かせ、次はどんな
楽しいことをして遊ぶのかと期待に胸を弾ませている。

一説によると吸血鬼は、鬼並の怪力と天狗と同等のスピードを持ち
合わせているらしい。この光景を見れば確かに、嫌でも納得せざる
を得ない。それでも納得出来ないと言う輩がいるのなら、荒れ果て
た紅魔館の庭を見せればぐうの音も出せず押し黙るだろう。論より
証拠という言葉を、こうまで体言した光景はそうないと断言出来る
程の惨状となっているのだから。

「とりあえず午後は……………、隠れ鬼で行こうか……………」

『……………異議なし』

どうにか起き上がった蒼衣が、口から魂すら吐き出せそうな重い声でそう提案する。隠れ鬼　いわゆる鬼ごっこかくれんぼを合わせた遊びという意見に、反対する者は誰もいなかった。……………反論する気力もなかった、という方が正しいだろうが。

「？」

ただ一人フランだけが、可愛らしく小首を傾げていた。

「はあ……………、はあ……………」

そして死に体がここにも一人。紅魔館の最上階にもいたようだ。午前中いっぱい亞愛にイジられ続けた彼女　レミアは息も絶え絶えな状態で、ソファーにだらしなく寝そべっている。吸血鬼の威厳はどこへやら。今の彼女はどう見ても、外見相応の少女にしか見えなかった。

「いやあ……………、ホントレミイは逸材だわあ……………」

「ですねえ……、お嬢様マジ天使です……」

まあ、この二人の場合は二十四時間三百六十五日年中無休で、レミリアを少女としか見ていないのだが。

ひとしきりイジって満足したのか、今は喉元をくすぐったり頭を撫でたりと割とおとなしい。普段なら猫かと突っ込むところだが、それだけの余力もない模様。されるがままと言った体だった。そんな状態のまま既に六時間が経過しており、外は既に夕暮れ時となっていた。

「……で、いい加減意地張るのやめたら？」

そんな穏やかな時に終止符を打ったのは、亞愛のそんな一言だった。今までのふざけた態度と打って変わった真面目な声に、レミリアも一瞬で纏う空気を切り替える。張り詰めた空間の中取り残される形となったりんでさえ、自らの主人をまつすぐに見据えていた。

「たかだか数百年程度で崩れる程、私の知ってるスカーレット姉妹の絆は脆くないわ。それがこうなってるってことは余程重大な何かがあった……、そういうことでしょ？」

「……あなたには関係ないわ」

ここ三日ずっとレミリア、もしくはフランに張り付いていた亞愛の結論は、的確にして鋭利だった。それを悟られまいと表情を厳しいそれに変え、レミリアは冷たく切り捨てる。

数秒前までの仲の良い空気さえも一瞬で打ち砕くそれ程の『何か』を解決しない限り、二人はいつまでも前に進めない。出口のない迷路に囚われた姉妹が脱出するには、二人が手を取り合うしかない。亞愛は考えている。フランに付きっ切りな蒼衣と同様に、亞愛も亞愛なりに事を進めていたのだ。協力してくれたりんには感謝してもしきれない。

「確かに私はあなた達を少し知ってる程度の余所者でしかない。でも私にとってあなたは吸血鬼同胞である以前に　娘みたいなものなのよ」

だからこそ、ここで引き下がる訳には絶対にかかない。蒼衣の為、りんの為、そして何よりレミリアとフランの為　諦めるなどという選択肢は絶対には選ばない。

「言って、レミィ」

最後にそれだけを口にして、亞愛はただレミリアを見据える。万感の想いをその瞳に秘め、ただ真っ直ぐに親友へとその視線で語りか

ける。言葉はもういらぬ。やれるだけのことはやった。

あとは、彼女次第。

「……………私は」

やがて根負けしたのか、それとも沈黙に耐え切れなくなったのか、レミリアが静かに口を開く。だが、その後の言葉を聞く者は誰もいなかった。何故なら

恐ろしい程濃密な闇の気配が、紅魔館内部から爆発的に広まったからだ。

「な……………!?!」

「くっ……………、間に合わなかった……………!!」

あまりに突発的な事態にレミリアの思考がフリーズするが、本能的に全てを悟った亞愛は舌打ちと共に駆け出す。最悪の事態にだけは、ならないようにと祈りながら。

「……無理ゲーだろこれ」

遡ること数分前　　紅魔館のエントランスホールで、蒼衣は一人愚痴を零していた。

隠れ鬼という安全な遊びに逃げたはいいが、蒼衣は一つだけ重大なミスを犯していた。何分この紅魔館　　バカみたいに広い。元々の部屋数は軽く五十を越え、しかも咲夜の手により空間拡張が施されている。そんな中で隠れ鬼など、正気の沙汰ではない。六時間も続けているというのに、鬼役になったのがフランと魔理沙だけというのがそれを如実に物語っている。

このゲーム、隠れる側はかなり楽だが、探す側は凄まじく面倒なのだ。

「早く探さないと終わっちまうな……」

時刻は六時半少し前といったところ。太陽こそまだ沈みきっていないものの、そろそろ夕食の時間である。そうなれば当然お開きであり、鬼役のままゲームを終えた者が敗北感に打ちのめされるのは明々白白だ。それだけはなんとしても阻止せねばならない。

咲夜が来るまでがリミットだなと心中で現状分析を終え、意外と負けず嫌いの蒼衣は軽く深呼吸。周囲の気配を探るべく、感覚の網を

広げ

ようつとした矢先、銅像の陰からはみ出ている七色の水晶がぶら下がった枝のような羽を視認した。

「……………」

いや、彼女はあれで隠れているつもりなのだろう。ただ羽のことにまで思考が行かなかっただけで。

……………突っ込むな、突っ込んだら負けなんだ。

神^母綺のボケによって鍛え上げられた故の反射的なツツコミを必死に押し殺しながら、蒼衣はそちらに歩みを進める。気付かれた故に固まったのか、気付かれていないと確信しているのか。微動だにしない彼女に心中で謝罪しつつ、

「フランみつけ」

容赦なく頭にタッチした。

「え！？なんで!?!」

どうやら後者だったようで、銅像の陰から顔を出したフランが心底驚いたような声を上げる。ここは指摘してやるべきなのだろうが、それにより落ち込んだ彼女を見るのが嫌な蒼衣は先程のことを胸の奥に仕舞っておくことにした。甘ちゃんである。

「……追い掛けるのは十秒数えてからだぞ」

とりあえずそれだけを言い残し、蒼衣は背を向け小走りで廊下を指す。直前まで鬼だった人にタッチしてもセーフなルールなので、うかつかしていたらまた鬼に逆戻りだ。最初フランが鬼だった時は律儀に『いち、にーい、さーん』とカウントしていたから大丈夫

「いちにいさんしいごおろくしちはちくうじゅうー!!」

恐ろしい程の早口で十秒カウントしたフランが、蒼衣目掛けて全力で駆け出した。

「ちよっ、んなのありかよ!?!」

「魔理沙がやってたから大丈夫!!!」

大丈夫じゃねえよ！！と心中でフランとついでに魔理沙にもツッコミを入れつつ、蒼衣も速度を上げる。蒼衣の身体能力もわりかし高い方だが、さすがに天狗並の速度を誇る吸血鬼相手では分が悪い。おまけに相手は子供故の全力疾走。能力を使えば振り切れるだろうが、それは人としての敗北、勝負に勝って試合に負けるようなものだ。

あ、負けたわこれと悟る精神とは裏腹に、身体は勝利を得るべく疾走をやめない。だが一歩ごとに両者の距離はじりじりと縮まって行き、

「っーかまーえたっ！！」

追い付いたフランが、蒼衣の左腕を思いつ切り握り締めた。

そう、フランの精神は幼過ぎた。『蒼衣を捕まえること』しか頭になかったが為に、『吸血鬼の全力』を以て、蒼衣の左腕を握り締めてしまった。

「がっ……！！？」

瞬間、腕の骨が軋みを上げ肉は潰れ、血が激しく吹き出した。

いかに強力な妖怪といえど、蒼衣の身体の強度は人間とそう変わらない。その身体を優に百を超える握力で、全力で握ればどうなるか。答えは至って簡単。今の蒼衣の姿が全てを物語っている。

「あ……」

ようやく自らが起こした事態。惨状とも言えるそれを理解し、フランの顔が急激に青ざめていく。ただか三日とはいえ、一緒に遊んでくれた友人を傷付けた。その事実には純粋な少女の心を、罪悪感という名の剣で絶え間無く串刺しにしていく。

「ち、違うの……。私は……」

「落ち着けフラン、大丈夫だ！！こんな掠り傷だ！！」

我ながら苦しい言い訳だなと心の中で冷めた感想を漏らす自分を殴り倒し、蒼衣は必死に呼び掛ける。がたがたと震える今の彼女の負担を少しでも減らそうと、痛みを押し殺しながら語りかける。

だが、それはとても些細な。蟻が象に挑むような、端から見ても絶望しか抱かせない程度の虚しい抵抗でしかなかった。

「あ……、ああ……」

頭を抱え俯きながら、少女はただ悲しげな声を漏らす。更に示し合
わせたかのように、彼女の足元から暗い何か　深淵から溢れ出し
た闇が這い上がって来る。

もはや避けようがない。彼女はもう、『それ』に魅入られ
ていたのだから。

「ああああああっ！！」

悲しみ。後悔。絶望。それらの全てであってどれでもない、ぐちゃ
ぐちゃの感情が込められた絶叫。慟哭のようなそれが紅魔館全土に
響き渡り大気を震わせ、その現実を嫌という程に理解させる。

発現が、始まった。

第十九話「紅魔館の一日」(後書き)

後半の加速っぱりエ 書いた人

とりあえずおぜうはイジられてなんぼですよね！)あ

次回、VSフラン。

第二十話「狂気」(前書き)

お待たせしました、二十話です。

相変わらず戦闘になると筆が速いこと速いことW
ではどーぞー。

第二十話「狂気」

闇。闇。闇。

炎。炎。炎。

紅い館のエントランスホールを埋め尽くす、黒と赤のコントラスト。まるで死と血を体言したかのような舞台の中、その少女は独り佇んでいた。

姿形は数分前と何も変わっていない。サイドテールに束ねた金の髪も、紅を基調とした可愛らしい服も、七色の水晶がぶら下がった枝のような羽もそのままだ。

だが、よく見れば違う点があった。白い肌は炎のような黒い模様に侵食され、身体は一切の光を感じさせない闇で覆われている。元々紅かった瞳は美しさを失い、禍々しい不気味な輝きを放っていた。

見た目こそ同じだが、内に秘められたモノが正反対と違っていい程に違っている。無邪気で純粋な内面は掻き消え、在るのは狂気と破壊衝動だけ。そこにいるのは確かにフランドール・スカーレットであり、決定的に違う何かだった。

「フランドール……」

そんな彼女の変貌をまざまざと見せ付けられ、蒼衣は呆然と少女の名前を呼ぶ。腕の痛みすら消し飛ばす程に美しい光景は、しかし負

の感情に溢れ返った凄惨な絵画のようだった。

その声が聞こえたのか、フランは右手を宙へと翳す。その手を握り締めると同時、彼女の掌には歪なモノが現れていた。

黒い棒　　とでも呼ぶべきだろうか。両の先端にトランプのスペード　　ハートとすることも出来る奇妙なものが付いた、緩やかなS字に曲がった杖のようなモノだ。見方によっては、悪魔の尻尾ともとれるかもしれない。

だがそんな道化のような見た目とは裏腹に、あの杖が放つオーラは異常の一言に尽きる。見た目こそただの棒なのに、対峙している蒼衣にはそれが世界を威圧する魔剣のようなイメージを受けた。

全て傷付ける魔の杖。

人に害成す魔法の杖。

世界を焼き滅ぼす剣。

呼称はなんでもいい。アレはそういうモノ　　生半可な者では触れることすら能わない、強力な力の塊のような存在だ。

そんな馬鹿げたモノを平然と携えて、フランはこちらに向き直る。頬に付いていた返り血を舐め取り、爛々と瞳を輝かせて、

「遊ビマシヨ？」

狂ったような笑みと共に身をたわめ、破滅の杖を振りかぶりながら勢い良く飛び出した。全身のバネを生かした跳躍で床は割れ爆ぜ、刹那の間に数メートルの距離を詰める。

だが彼女が地を蹴り跳躍した瞬間、蒼衣は反射的に右手を振るっていた。能力を押さえ込む為十年にも及ぶ鍛練によって培われた経験と、生存本能による反射的な危機回避行動が、一瞬で三層に及ぶ防御結界を生成するという高度な技を成功させる。

並の弾幕なら容易く防ぐそれに対し、フランはただ手中にあるそれを叩き付けた。事も無げに片手で振り下ろされた杖は結界に接触し、

ただの一撃で全ての結界を砕ききった。

邪魔魔理な感情を押し殺しながらも両手をクロスさせ、瞬時に防御の構えを取る蒼衣。空いた左手で振るわれた拳はしかし、必殺と称するに足るだけの威力を秘めていた。

「っぐ……!!」

先程握られた左腕に直撃し蒼衣が苦悶の声を漏らす、それをフランが聞き届けたのは彼が外へ吹き飛んでからだだった。少女のもものは有り得ぬ膂力によって、蒼衣の身体は宙を舞い玄関をぶち破り、庭まで弾き飛ばされていたのだ。

………重い！！

空中で体勢を立て直し着地しながら、蒼衣はフランの一撃をそう評する。拳を食らう寸前に背後へ跳躍し衝撃を逃がしたというのに、数十メートルもの距離を吹き飛ばされているのがその証左だ。全身には未だ衝撃の余韻が響いており、マトモに受けた左腕など感覚が消えている。そんなふざけた相手とやり合うには、重過ぎるハンデだった。

「……………バカか俺は」

だからなんだというのか。やらなければまたあの時の二の舞になる。忌み嫌われたこの力で他人が救えるのなら、使わない道理などここにもない。

ならやることは一つだけ。やらなければならぬという決断を、既に彼は下している。ならば状況がどんなものであれ、『決意そのものに勝てるか否かという計算は必要ない』のだから。

「母なる神綺と蒼衣が真名廻月の名において、シュヴァルツシルトの闇を解放する」

目を閉じ精神を集中させ、解放の為の詠唱を口にする。前回の戦いで十年に渡る強力な封印は解除した為、そのステップは幾分簡略化されていた。以前ならばいざ知らず、この能力を頻繁チカラに使うことに

なる以上必要なのは速度のみ。仮に封印が弱まったとしても、全てを終えた暁に完全に封じれば何も問題はないのだから。

「闇より昏き深淵より出でし

其は、幻想の恐怖が落とす闇」

詠唱を終え目を開くと同時、蒼穹の如く澄んでいた瞳が赤い紅い輝きを灯す。いつもの飾り気のない服の上から、深淵の闇が凝り固まって出来たようなローブともコートともつかない衣を纏い、眼前の敵を見据える。左腕は解放のお陰で回復促進が働き、最低限の機能は取り戻せた。身体は動く。覚悟も決まった。

あとは、ただ往くのみ。

「行くぞ フラン」

感情を殺した冷徹な声でそう呟き、蒼衣は地を蹴り駆け出した。

踏み締めた地面を切る程の勢いで飛び出した魍月を出迎えたのは、数えるのも嫌になるほどの弾幕の集中豪雨だった。量、密度、威力、それら三点の全てに置いて、蒼衣がこれまで見て来たどの弾幕をも上回る。能力を抜きにしてもかなり強い 概算でも軽くHクラス

と渡り合えるレベルだ。

それらを衣に掠めさせながらも、僅かな隙間を縫って魇月は回避と前進を同時に行う。引いても無駄だと言わんばかりの突撃はしかし、接近戦に主を置いていない弾幕ごっこでは効果的だ。魇月は弾幕主体より近接主体の方が強い為、基本的にはそのスタイルを取って戦うことにしている。一歩間違えばルール違反だが、感染者相手にそんなことを気にしていたら一瞬で敗北してしまう。しかも紫が匙を投げた以上、一度感染者を救った魇月の行動を咎めることなど出来るはずもないのだから。

「禁忌」

魇月がフランの眼前へ至ると同時、少女はスカートのポケットから一枚のカードを取り出した。トランプの意匠があしらわれたそれを構えた腕を横薙ぎに振るい、獰猛な笑みを浮かべ、

「クランベリートラップ」!!!」

スペルカードの発動を宣言した。

同時、魇月を大きく囲むようにして四つの魔法陣が出現。四角形を描きながら公転運動を続ける魔法陣から、矢継ぎ早に色とりどりの弾幕が放たれる。連なるようなそれは奇しくもクランベリー 果物の収穫方法に酷似した菱形をしていた。

だが、温い。地底での戦闘で、魍月は無意識下の攻撃という驚異的な弾幕を経験している。フィロソフィやサブタレイニアンローズをかい潜つて来た今の彼には、たかだか密度の高い『見える』弾幕など、そこまで難易度の高いスペルには感じられなかった。

前後から襲い来る弾幕を軽々とかわし、左右からの挟撃飛び越えるようにして回避する。距離さえ詰めてしまえば、なんの問題も

眼前に、いつの間にか自ら距離を詰めて来た少女がいた。

「あは
」

思わず全てが静止する中、フランは心底楽しそうに笑みを漏らす。そう、問題ならあった。厳然たる大問題が。何故なら彼女は

「壊レチャエ」

その手に立派な、災厄^{得物}の杖を携えているのだから。

「ちいっ………!!」

しくじったことに舌打ちし表情を歪めながら、魍月は素早く両手を

振るった。即座に五層もの結界が展開し、魎月の前面を固める。

しかし破滅の名を冠するその杖を相手に、急造の結界など在于て無いようなもの。容易く漆黒の結界を引き裂き、悪魔の尻尾が振り下ろされた。

が、伊達に魎月も深遠の名を冠している訳ではない。例え一瞬で破壊されるとしても、ほんの僅かなラグは確実に生じる。そのラグの積み重なりがコンマ数秒という時間を生み出し、魎月はその時間を対価に重力制御を行使。後先のことなど考えず、全力で背後へ跳んだ。

そして魎月のその判断は、的確としか言い様がなかった。少年の頭部に叩き込まれるはずだった杖は彼の残像を切り裂き、軌跡上にあつた大地を放射状に切り取つたのだから。生成されたクレーターの半径は、およそ五十メートルにも届こうかという程だ。防がず回避を選んだ魎月は反射的なその判断を下した己の頭脳と、それを身体に叩き込んだ金髪の紅いメイドに感謝した。

「…………へえ」

手応えがないことに気付き目標ターゲットを探していたフランが、視界に捉えた無傷の魎月を見て感嘆の溜め息をつく。彼女の紅く輝く瞳は、ただ一言だけを告げていた。

オモシロイオモチャ、ミツケタ。

その意味を理解すると同時、魍月の背筋にゾツとする程の悪寒が走る。彼女に罪悪感はない。あるはずがない。ただ彼女は、『目の前の存在がただの遊び道具であると心底信じきっているだけ』なのだから。

足りない。

地底でも痛感したが、幻想郷の少女達の能力は正に十人十色。ただでさえ戦闘に特化した吸血鬼　しかも『ありとあらゆるものを破壊する』という馬鹿げた能力を持った少女を相手にするには、ただの深遠では圧倒的に力不足だ。

力任せに叩き付けるだけなら猿でも出来る。力を力たらしめるのは、振るう者の意志だ。膨大な力を寄り集め、束ねて振るわねば意味がない。ならば

「
深呼吸と同時に精神を集中させ、脳裏にそれをイメージする。破滅^規の杖を相手にするには、こちらも同等の規格外で応じるしかない。そして魍月はその規格外を、その身の内に秘めていた。」

「
来い、黒鐵^{クロガネ}」

静かにそう呟くと同時、魍月は右手を左肩やや上の虚空へと伸ばす。何も無い、在るはずがないその場所に、果たしてそれは現れた。主人の呼び掛けに応えたそれを握り締め、魍月は勢い良く引き抜く。

それは、一振りの剣だった。

深淵から溢れ出した闇を吸い込んだかのような漆黒の刀身は厚く長く、魍月の身長を越える程。彼の性格を反映したかのように装飾の少ない大剣は、しかし場を威圧する覇気に満ち満ちている。

巨大な漆黒の大剣　黒鐵。これこそが蒼衣の持つ武器にして、フランに対抗する為の力だった。

「……まだまだ元気そうだね」

柄を握り締め感触を確かめる蒼衣に対し、フランはボソツとそんなことを呟いた。クランベリートラップはどうやら時間切れらしく、後続の弾幕は現れない。それを確認し顔を上げた魍月の視線の先、少女は歓喜の笑みを浮かべ、

「マダ壊レチャ、ダメダヨ？」

再度大地を踏み砕きながら、矢の如く飛び出した。

大上段から神速で振り下ろされた杖を、魎月は横つ飛びにかわす。着地に使用した右足を軸足に設定し慣性に身を任せ、回転と共に巨大な得物を横薙ぎに振るった。

「っ……！！」

とつさに攻撃を中断し杖で防御するが、フランは砲丸のように吹き飛ばされてしまう。いかにフランの膂力吸血鬼が凄まじいものだとしても、体格差や体重差は厳然たる事実として両者の間に存在する。攻撃をかわされバランスが不安定になったところに、狙い澄ましたように放たれた重い一撃。その結果としてフランは宙を舞っており、蒼衣は慣性を殺さず左足でいつでも踏み込める状態となっている。狂化して思考が単純化していたのか、驚く程あっさりと引っ掛かってくれた。

現状フランのスペルカードは残り九枚、対し魎月はシュヴァルツシルトの闇を含めて七枚。まだ相手の優位が揺らがぬ以上、迂闊な突撃は避けるべき。板挟みの思考に囚われ追撃に移るか否かを決めかねている間に、フランは空中で強引に体勢を整え着地。猫のように四つん這いになり地を滑りながらも、ダメージが残っている様子全くない。戦いに置ける取るべき行動を、半ば本能的に察しているかのようにだ。

「！！」

が、その本能さえも狂気の前ではあつてないようなものか。牽制用であろう弾幕と共に、少女は再度踏み込んで来た。弾幕の嵐の中を突っ込んで来る彼女の顔には、相も変わらず壊れたような笑み。かわせるものならかわしてみろと、そう言っているように思えた。

だが魍月はその行動を選択肢から外す。避けてばかりでは状況は変わらない。死地に活路を見出さなければ、いつまでも前には進めないのだから。

呼び出し練り上げた闇を黒鐵に纏わせ、袈裟掛けに全力で振るう。杖とぶつかり合った剣は同等の力を込められ拮抗し、溢れ出した闇は周囲の弾幕を食らい呑み込んでいく。剣圧で鎌鼬のような暴風が生み出され木々が刻まれるが、中心にいる人外には傷一つない。その光景はある意味優雅な舞踏のようで、しかし荒々しい舞闘でもあった。

「禁忌」

埒が明かないと判断したのか、黒鐵を弾きながらフランは背後へ跳ぶ。更にポケットからスペルカード　炎の線が描かれたそれを取り出す。だが魍月はそれを見た瞬間、己の思考がフリーズしたのを感じた。

炎の軸となっている、黒い杖というそれを。

「魔符
」

来る。何かはわからない。だが間違いなく必殺の、あの杖を使った何かが来る。対抗するにはこちらも同系統の 己の武器を強化するようなスペルで打ち合うしかない。反射的な刹那の思考で結論付け、魎月もそれを取り出す。

膨大な闇を纏った、黒鐵が描かれたそれを。

「レーヴァテイン」！！」

「 シュヴァルツセイバー」！！」

宣言は同時、踏み込みも同時。炎を纏った災厄の杖 レーヴァテイン もはや剣となったそれと、闇を纏った深遠黒鐵の剣が、膨大な魔力を撒き散らしながらぶつかり合った。

北欧神話に置ける神々の終焉、ラグナロク。その中に出る無銘の剣は炎を操り、大地に突き立てられると共に世界を焼き切ったと言われている。

名前がないということは、正体がわからないということ。古来より

理解不能の存在は、人々の恐怖を煽る要素として確かに在った。

だが不可解な現象でも、カテゴリーに括り名付けてしまえば認識は変わる。名前を与えることで人々はそれを認識し、恐怖を和らげて生きて来た。

故にその力を恐れた人々は、古来よりある名前の力へと縋った。畏怖と恐怖と絶望を込めて、全てを焼き尽くす炎の剣をこう呼んだ。

レ・ヴァテイン
世界を滅ぼす炎の魔剣、と。

その名を冠するだけのことはあり、フランの一撃は異常なまでに重かった。いかに魇月といえど判断が数秒でも遅れていたら、今頃炭化した身体に別れを告げ天国か地獄への道行きの真つ最中だっただろう。

しかし魇月のスペルカードは、その災厄とほぼ互角に渡り合っていた。激しく闇を吹き出しながら、炎を食らい尽くさんと更に闇を呼び出していく。

そんな拮抗状態を崩したのは、意外なことに二人同時だった。互いの得物を弾きながら後退し、再度跳躍してぶつけ合う。

身の丈の数倍を誇る魔剣を力任せに叩き付ける少女に対し、少年は正確無比な一撃で切っ先を逸らし、隙を生み、叩き込んでいく。それを少女が剣で防ぎ踊り狂う炎をけしかけるが、闇はそれを無慈悲に呑み込んでしまう。が、荒れ狂う炎は闇を内から弾けさせ、そんな攻防を尻目に両者はただひたすらに打ち合うのみ。

一合、二合、三合。黒き剣撃が焰を切り裂き、紅き炎剣が闇を切り裂く。それはいかなる神話の再現か、舞いのような二人の戦いは、見る者を魅了する魔性に満ちていた。世界には自分と相手の二人しかいない。そう言わんばかりの傲慢な、いつそ清々しいまでの戦いだった。

だが、遂にその均衡が崩れ始める。元から力任せだったフランの動きが、更に精彩を欠き始めたのだ。

確かに彼女は強い。優れた身体能力に膨大な魔力、加えて手に携えた災厄の杖。それだけの圧倒的な力を持ちながらも、アンバランスなことに担い手の精神は子供そのもの。相手を一瞬で屠れるだけの力を以てなお、未だ成果を上げられない。その現実が彼女を苛立たせ、動きの質を荒くしていく。堅実な立ち回りを心掛けていた魍月の行動が、ようやく実を結んだのだ。

機を見てとつた魍月は踏み込みと共に、バランスを崩したフラン目掛け黒鐵を振り上げた。反射的にレーヴァテインで防御するが、マトモに受けた為宙へ吹き飛ばされてしまう。空中で不安定な体勢を立て直すには、いかに飛行が可能だとしてもそれなりの時間を要する。だが魍月がいるのは地上、フランに比べ隙はやや少ない。加えて言うなら魍月の能力は深遠。ブラックホールを操ることであり、ブラックホールとは高圧重力の塊である。それを操るといことはつまり重力が操作出来るということだ、

即ちそれは、不安定な体勢を強引に整えられるということ。

鋭く呼吸を吐き出しながら、魎月は宙を翔けた。重力操作故に初動すらなく完全な不意打ちとなる形のそれは、まさに必殺のタイムニング。避けられるはずがない、何故ならそれを狙っていたのだから。

闇の衣をはためかせ、魎月は再び黒鐵を振るう。大上段から叩き込まれる黒い剣撃はなんの抵抗もなく少女が構えたままだったレーヴァテインにぶち当たり、

「禁忌「フォーオブアカインド」」

瞬間、魎月の背中を衝撃と爆発が襲った。

「が、はっ……!!?」

爆圧で吹き飛ばされ地表を数メートルに渡って切り、そこでようやく魎月の身体は止まった。驚愕で停止しそうになる思考を叱咤し、ダメージの把握を開始する。闇の衣で幾分減衰されてはいるが、背中があらかた焼けているようだ。熱量を伴った攻撃　おそらくは弾幕だろう。

結果はわかった。だが過程が理解出来ない。確かにフランは眼前にいた。周囲にも気を配っていたから、彼女自身が攻撃をした可能性は限りなく皆無。だがそれなら今の現象をどう説明付ける？

わからぬのなら確認するまで。土に塗れた顔で上空を見上げれば、そこに在るのは誰もが予想だにしない光景。レーヴァテインを携え

たまたま、宙に腰掛けるようにして嫌らしい笑みを浮かべるフランがいた。

それも、四人。

ある者は膝を抱え、ある者は両手を広げ、ある者は杖を揺らし、ある者は侮った視線を向けて来る。しかしその全員が共通して、壊れた笑みを浮かべていた。

「なあんだ」

「弱いね」

「その程度？」

「つまんない」

少女達は口々に、魍魎をバカにするような言葉を零す。幼さ故の真っ直ぐな、嘘偽りのない言葉が輪唱のようにこだまして、頭の中にガンガンと響いている。

フォーオブアカインド トランプの有名なゲームであるポーカーにおける、フォーカードの別名称。なるほどそれは確かに、この状

況を説明するのに最も適切だ。四人に増えたフラン　しかも深遠ダイなる闇のおまけ付き。本来では有り得ないという共通項も相俟つて、鬼ごっこで複数の鬼に囲まれた、そんなような心地を覚えていた。

「……ナメるな」

だが、そんな感想はこの場においては不要だ。一刻も早くフランを闇から解き放つ。最優先にするべきは彼女であって自身ではない。ならば動け、考えるのはそれからでも出来る

無理矢理身体を引き起こし、魍月は地を蹴った。天へと昇る黒き流星を、赤き四凶星は歓喜と共に迎え入れる。黒は少しでも活路を開こうと目まぐるしく動き回り、赤は構わないとばかりに大振りの攻撃で追い込まんとする。杖を弾き、弾幕を斬り、爪を、拳を、脚をかわす。

だが、限界は思った以上に早く訪れた。

元々万全の状態で、魍月はどうにか互角に渡り合えていた。ダメーヂを受け動きが鈍った状態で、四人もの吸血鬼フランを相手にすることなど土台無理な話だったのだ。

「ほらほら」

「もう終わり？」

徐々に失速し始める魍月を嘲笑うかのように、左右から挟む形で拳と脚が迫り来る。辛うじてかわすも先には三人目が待ち構えており、レーヴァテインを容赦なく全力で振り下ろして来た。

「ぐっ……!!」

とっさに黒鐵で防御するも、衝撃を流しきれず魍月は弾き飛ばされる。落下地点には待ってましたと言わんばかりに四人目がおり、向かって来る形となった魍月を高密度の弾幕で歓迎した。

爆発と共に吹き飛ばされ、地面を転がって行く黒い姿。端から見ても満身創痍である彼は、しかしまだ立ち上がる。もはや戦闘ではない。蹂躪と敗北と死しか待ち構えていない戦場に、それでも一歩ずつ踏み出そうとしていた。

それを見苦しく思ったのか、ただ単に飽きたのか。少女達は笑みを消し、膨大な魔力を練り上げる。弾を、炎を、力あるものをただ生み出し、目の前の少年へと叩き付けるべく魔力を高めていく。

「遊びは」

「終わり」

「もういない」

「死んじゃえ」

異口同音に死を宣告した少女達が身をたわめ、一斉に勢い良く飛び出す。右、左、上方、正面、退路を塞ぎ一秒にも満たぬ時間で距離を詰めて来る。その陣からボロボロの魍月が、逃れ得るはずもない。

……………ここまで、なのか。

魍月の心中が諦めで満たされようとした、まさにその瞬間。

「そうね。遊びはもう終わりよ、フラン」

涼やかな声と共に、紅き閃光が突っ走った。

あまりの光量に目を閉じた瞬間、魍月の聴覚はそれを捉えた。何か地面に倒れ込むような、やけに軽く響く音。恐る恐る目を開けた彼の視界に映ったのは、明らかに異常なものだった。

まずフラン。必殺の状況だったはずの少女達は足を止め、呆然とただ一点を見ている。『三人』の視線を追った魍月は、次の瞬間我が

目を疑った。何故ならそこに在ったのは

胸に巨大な風穴を開け、地に倒れ伏しているフランだったからだ。

「やれやれ、派手に暴れてくれちゃってまあ。修繕めんどくさそうねこれ」

上方から襲い掛かるはずだった分身が灰へと還っていく様を呆然と眺める四人の聴覚を、新たな声音が刺激する。フランの背後　紅魔館の方からその少女は、この状況を作り出した少女は何でもないうに平然と現れた。後頭部で結われた黒の短髪も、アメジストのような紫色の瞳も。ケープ付きの漆黒のコートまで、出会った時そのままだ。

ただ、今の彼女は何かが違う。力なきものでさえわかる程、膨大で圧倒的な魔力を撒き散らしている。まるで今までの赤夜彼女亞愛は、全て偽物だったとも言つかのように。そこにいるのは誰もが知る、しかし誰も知らない少女だった。

「ご無事ですか」

ふと気付いた瞬間、魍月はエントランス入口に立っていた。身体は咲夜に支えられており、既に独力で立つこともままならない。そこまで考えて彼はようやく、咲夜が時間を停止させ彼を下がらせてく

れたのだと理解した。

「兄さん、大丈夫!？」

「待ってて、今治すから」

すぐにアリスが心配げに駆け寄り、神綺は治癒魔法を発動する。よく見ればパチュリーや美鈴達も集結しており、一番気になっていたレミリアはといえば苦しげに面を伏せていた。

「まあ確かに？弾幕ごっこは一対一で行うのがルールだし、私がここで干渉するのは反則なんでしょうね」

背中への傷やダメージが和らいでいくを感じながら、片膝を着いた麴月は視線を少女達へ戻す。三人に減った少女達の眼前、彼女はあくまで堂々と、気負うことなく立っていた。自嘲気味に自らの行動を評価しながら、しかしその瞳はどこまでも真っ直ぐで。

「でもね、生憎と私は 目の前の誰かを見捨てられる程器用じゃないのよ」

それだけで十分だと、言い切った。

「だからここは私の出番。蒼衣が復活するまで、私が相手してあげる。そつちだつて四人なんだし　バランスとしては丁度いいんじゃない？」

そこまで言うと肩を竦め、彼女は爪先で地面を叩く。ブーツの履き心地を確認するその様子は、先程の言が嘘ではないのだと雄弁に物語っていた。

だが、事ここに至って魍月の頭はようやく機能を回復する。いかに彼女が優れた力を持つ吸血鬼だとしても、今のフランと渡り合えるとは思えない。慌てて立ち上がり止めに入ろうとするが、

「大丈夫だよ、蒼衣君。見てればわかるから」

神綺はそれを許さず柔らかく、しかし確かな力で魍月の肩を押し座らせる。反論しようとする魍月に苦笑しながら、神綺は唐突に口を開いた。

「昔ね、私の世界に一人の女の子が現れたの。その子は魔界を囲む結界に興味があったらしくて、直接聞こうとして殴り込んで来たんだ。ちょうど手の空いてたゆーちゃんに迎撃してもらったんだけど……。その子ね、ゆーちゃんを倒しちゃったの」

突然始まった神綺の昔話を聞いた瞬間、魍月とアリスの動きが止ま

る。ゆうちゃん　死を見る魔眼を持つ魔界内でも最強レベルのあの少女を、その少女が倒した。その話は二人の行動を、完全に停止させるだけの重みを持っていた。

「そして私のところに来ての第一声が　『この結界調べさせてもらうけど別にいいわよね？』だったの」

昔を思い返しながら、苦笑と共に事の顛末を告げる。荒っぽく侵入しておいて、本題はたかだかそんなこと、そのギャップがおかしかったのか、神綺はくすりと笑みを零したそうだった。

「そんな調子の彼女が面白くて、気が付けば三年くらい一緒に過ごしてたんだ。その時その子の身の上も聞いたんだけど　アカーシヤ・ブラッドリバーって知ってる？」

「っ……！？史上最古の吸血鬼の名前じゃない！！」

神綺が呟いた聞き慣れぬ横文字　それが誰かの名前だと全員が理解すると同時、ただ一人沈黙を保っていたレミリアが驚いたように声を上げた。

「銀の髪と赤の瞳を持ち圧倒的な力を誇る、全ての吸血鬼の原点たる真祖……！！^{私達}吸血鬼の間でも伝説やお伽話レベルの存在の名前を、どうしてあなたが！？」

「簡単な話だよ。魔界に現れたその女の子が、『アカーシャの生まれ変わりだった』ってだけ」

問い詰めるようなレミリアの声に、神綺はあっさりとはんどんでもないことを答えた。史上最古の吸血鬼の生まれ変わり。にわかには信じ難いが、悠久の時を生きて来た神綺の言葉は信頼に足る重みを帯びていた。

「閻羅えんらの外法げぽうっていう特別な術を使って、姿形を変える為に生まれ変わったんだって。自分の姿と異名のせいで怖がられて、他人とコミュニケーションが取れないのが嫌だったみたい」

亞愛ちゃんらしいよねと神綺が苦笑すると同時、アカーシャ亞愛はコートを勢い良く脱ぎ捨てる。その下の白い肌を覆っていたのは、いわゆるチャイナ服だった。黒を基調として金の刺繍が施され、袖はなぐスリットは足の付け根近くまでと深い。動き易さを追求したその姿はしかし、不思議な魅力　カリスマのようなものを放っていた。

「真祖が末裔赤夜亞愛の名において、アカーシャ・ブラッドリバーの血を解放する　」

目を閉じそう呟いた瞬間、魔力の放出が更に強まる。大気を威圧し空を割り、紅き光の柱が上空へと迸る。そしてその中心にいる亞愛

の髪は、長く流れるような銀髪へと変わっていた。

「さあ　踊りましょう？」

見開いたその瞳は輝く赤。レミアアやフランと同じ、吸血鬼特有の
紅い赤。身構える三人のフランを相手に最強の吸血鬼　^{アカーシャ}　亞愛はた
だ、薄く笑った。

第二十話「狂気」(後書き)

まさかの亞愛参戦。そして見るからに厨設定。
わーさすが俺の中二脳一(棒

次回、亞愛VSフラン。

第二十一話「真祖」(前書き)

お待たせしました、二十一話です。

やっぱり休みの日は書くよりもゲームしちゃいますねw仕方ないね！

(おい

ではごーぞー！。

第二十一話「真祖」

彼女は、ずっと一人で生きて来た。

強大過ぎる力を持つ存在は、いつの時代も孤独が付いて回る。故に全吸血鬼の頂点に立つ彼女とて、例外ではなかったのだ。

永い永い時の中、関わったのは腕試しに挑んで来る吸血鬼同族と退治しようとする人間弱者、そして最初の頃の者達だけだった。

好奇心は猫を殺す。

寂しさは兎を殺す。

臆病は獅子を殺す。

そして退屈は、死ぬことのない長寿の妖怪の精神を殺す。

ノスフェラトゥ
不死者の異名を誇る彼女が生涯勝ち得ぬ敵がいたとしたら、まさにそれこそが最大の敵だろう。生きること 否、存在することに飽きるのに彼女の精神は万単位の時を要し、それでもなお継り付いた僅かな希望が完全に断たれるのに億の時間を要した。

そこで彼女が思い出したのが、とある天才陰陽師が編み出したとされる転生の術。何代にも渡り転生を繰り返し、小さな里を纏め上げているという稀代の天才。直接話を聞こうと彼女は大陸を横断し、

肉体の認識を書き換え海を渡り、東の国の小さな里へと辿り着いた。

お待ちしておりました。最古の吸血鬼のお嬢さん。

警戒と敵意剥き出しで彼女を包囲する里の人間達をよそに、その天才陰陽師はまるで来訪を予想していたかのように彼女を里に招き入れた。彼女が大陸を渡り歩いて身に付けていた魔術と彼の築き上げて来た陰陽道に合わせることで、不安定な転生術を完全なる物へと昇華された。

これは特殊な術です。人の魂ならばともかく、あなたのような大妖怪は魂の複雑さ、濃密さが違います。おそらく使えるのは一度だけでしょう。

完全なる転生術を手に入れ喜ぶ彼女に、陰陽師はただそれだけを告げた。失敗すれば二度とチャンスはない。言外のその忠告に彼女は怯みもせず術を行使した。言うなれば今の彼女は死に至る病に侵逼されていて、成功率の低い手術という光明を見出だしたようなもの。

彼女にとってはもはや、生きるも死ぬも同じことだったのだ。

偶然か必然か、はたまたその空虚な欲望故か。彼女の転生はなんなく成功。事前に準備した『空の肉体』に魂を癒着させ、陰陽師の

助力を受け身体を馴染ませていった。半年もすれば身体は思い通りに動くようになり、二年もすれば前世の頃と同じように異能の力を振るえるようになっていた。

里を後にし世界を渡り歩き、様々な人々と出会って来た。だが身元も知れない彼女と普通に接してくれる者はおらず、二百年もするとやがて彼女の心に暗雲が立ち込め始める。

………所詮、無駄な足掻きだったのか。

そう諦観しかけていた彼女はイギリスで、吸血鬼の姉妹と出会った。

それからは時が矢のように過ぎて行った。知識も何も無い姉妹に吸血鬼の特性、歴史、その在り方を叩き込み、仲の良い三姉妹のように過ごした。長女が冗談を口にし、次女が慌てふためき、三女が笑う。どこにでもあるような、温かな光景。

十年。

たったそれだけの、彼女の二回の人生の何十万分の一にも及ばない短い時間。だがそこには確かに、同族というだけではない確たる『絆』があった

……………それが、どうしてこうなっちゃったのかしらね。

過去の語り部にして回想の中の『彼女』　　亞愛は眼前の光景を見て、そんな寂しげな感想を抱く。

あれから約五百年弱　　独り立ちすると言って彼女の下を飛び出した二人は何故か仲を違え、妹に至っては訳のわからない力に身体を侵されている。かつて彼女が見ていた二人は、今はもうどこにもいなかった。

ただの姉妹喧嘩如きでああなる程、二人の絆は弱くない。ならば今の状況へと至る、決定的なきっかけがあったと考えるのが妥当。

真祖^母として、何より彼女達の家族^姉として。独力でそれを乗り越えられないというのなら、助けてやるのが当然のこと。

……………だからこそ、私達がやらなきゃいけない。

心中の邪魔な感情を押しやり、思考回路をクールダウンさせていく。目の前の存在は守る対象であるが、今この瞬間だけは敵と認識しなければならぬ。

さもなければ、彼女達は一生出口のない迷路に囚われたま

まなのだから。

「さあ 踊りましょう？」

故に万感を押し込めて、亞愛はその言葉を口にした。かつてその強大な力を振るっていた真祖、アカーシャ・ブラッドリバーとして。

最強と狂気の戦いが、始まるうとしていた。

亞愛の声を受けた瞬間、三人のフランは同時に動いた。大地を踏み砕き全力で加速、亞愛の首を刈らんと三方向から同時に襲い掛かる。だが、亞愛の方が速かった。フラン達が踏み出すよりもワンテンポ速く、

目の前へと倒れ込んだ。

否、正確には違う。そう見せ掛けて身を沈め、たわめた左足で大地を全力で踏み抜いた。まるでクラウチングスタートのような、しかし鋭角過ぎるそれで飛び出した亞愛の姿が他者の視界から消失する

瞬間、右手のフランが吹き飛ばされていた。

紅魔館を囲う塀に激突し灰に還っていくフランの分身と、右の正拳を突き出した形で静止する亞愛。その光景を目視出来たのは果たして何人か。視認すら許さないと言わんばかりの速度で右足の踏み込みと共に叩き込まれた亞愛の拳は、ただの一撃でフランを沈めたのだ。

だが、亞愛の攻勢は留まることを知らない。半身になりながら左足で再度地を蹴り、振り返り様の右の肘鉄が亜音速で左手のフランの鳩尾を穿つ。心臓を衝撃で打ち抜かれたフランは溜まらず吐血、その血さえも亞愛に届くことなく灰へと還っていった。

「くっ……!!」

舌打ちと共にフランが腕を振るうと、再度虚空から分身が現れる。だがその数は先の三倍。計十体のフランに囲まれる形となり、亞愛は周囲に目を走らせる。しかし脱出出来る程の隙間はない。追い詰めたとばかりに、フランの顔が愉悦の笑みを浮かべた。

『死ンジャエ』

全員の声がシンクロした瞬間、四方八方から弾幕の雨が降り注いだ。

量と質を兼ね備えた反則レベルの弾幕は中央でぶつかり合い、激しい爆発を引き起こす。

これならさすがにと誰もが思考するが、土煙が晴れた先はもぬけの殻。全員が慌てて周囲の気配を探るが

「どこ見てるのよ、間抜け」

赤き夜の王の前では、決定的な隙でしかなかった。

見上げた先の空　翼もなく宙に浮く漆黒の少女は、聖者のように両手を広げる。掌の間に紅い光が集束・収斂し、一つの物体を形作った。

それは、槍。

紅き光と魔力を纏った、亞愛の身の丈を越える程の長槍。ごくシンプルなデザインなのに、見る者に神々しさを感じさせる巨大な槍を握り締め、亞愛はどこからともなくカードを取り出す。

「聖槍」

カードを宙に放ると同時、亞愛が槍を振りかぶる。だがその段に至ってなお、フラン達は回避しようとしなない。何故なら、そう

「スピア・ザ・ロンギヌス」

満月を背に聖者の槍を携えるその姿が、あまりにも美しく
つたから。

全身のバネをフルに活かしてそれが投擲された瞬間、空間が歪んだ。聖者を貫いた槍の名を冠する長槍は巨大な力の塊となって、空間を押し退け自らの存在を確定化させ大気を切り裂きながら進む。

我に返ったフラン達が慌てて防御を固めるが、それは無駄としか評しようがなかった。全てを平伏させ突き進むからこそその聖槍 故に防御も回避も無意味なのだから。一度狙われたが最後、その身を貫かれる以外の結末は有り得ない。

吸血鬼魔の存在から放たれた光の柱は聖槍亞愛の元いた地点にぶち当たり、放射状に広がった紅き波動がフラン達を呑み込んだ。一瞬で灰へと還つていく分身に紛れ、一際後退する一体 彼女こそが本体。

それを確信する頃には、亞愛は既に地上へと戻っていた。

「っ!？」

「せいっ!」

銀の長髪が翻り、とっさにガードしたフランへとハイキックが打ち込まれる。ピンボールのように弾き飛ばされながらも、フランは空中で強引に体勢を立て直した。

タンツと身軽に降り立つと同時に、両の腕が振るわれる。応えるかのように周囲の圧力が増した瞬間、悪夢のような光景が展開された。

「くすくす」

「うふふ」

「あはは」

「きゃははは」

現れたものは、フランの分身。だが、その数は更に五倍。これも^{ダークマター}深遠なる闇の恩恵か。優に五十を越えていた。亞愛を取り囲むこれがそうでないなら、他の何を以て悪夢と呼ぶのか。^{ナイトメア}いくら亞愛が強いとしても、あまりにも圧倒的な戦力差だった。

「……やれやれ」

フォーオブアカインドならぬファイフティーオブアカインド 当然そんな役は存在しないが とでも呼ぶべき光景を前に、亞愛は呆れたように溜め息一つ。そこに気負った様子は全くなく、本気で呆れているだけのように見えた。しょうがないわねと肩を竦めた亞愛は軽く身を沈め、

「ちよつとだけ……、本気を出してあげる」

先を越える程の速度で、集団へと突っ込んだ。

まず手始めに目の前の一人。右拳で顎を打ち抜き、宙に浮かせると同時回し蹴りで吹き飛ばす。左方の二体の動きをそれで封じ、両の裏拳で地へと沈める。

後方から追い縋って来た一体の爪を屈んでかわし、オーバーヘッドの蹴りを顔面一発。慣性を殺さずもう一体の肩に爪先を引っ掛け、身を起こし肩に立つと同時に空いた足で首を薙ぐ。

着地と同時に地を蹴り加速。両のリアットとフックで四体を薙ぎ倒し、右手を地に着きながら左足の蹴り上げで一体。身を捻りながら左手も着け、右足も振るいもう一体。

「とっておきをくれてやるわ」

起き上がり様に右の拳で鳩尾を貫き、左の肘鉄で顔面を潰す。その隙を見てとつた一体が上空からレーヴァテインを振りかぶるが、亞愛のその手にはいつの間にか一枚のカードが握られており

「六式

「エレメントセクステット
元素六重奏」」

瞬間、彼女の身体を赤、水色、紫、黄緑、黄、黒の輝きが覆った。

宣言の余韻に浸る間もなく、新たに三体が襲い掛かる。だが亞愛はニヤリと笑い、

「タイプ・エス
型式・火」

右手が振るわれると同時に、『炎を纏った拳』が一体を吹き飛ばした。

「タイプ・ユウ
型式・水」

訳がわからないといった体で動きを止める二体の首を『水刃を纏った手刀』で刎ね、亞愛は跳躍。

「タイプ・シー型式・風」

風を操り集団を飛び越え、ついでとばかりに鎌鼬が数体を纏めて切り刻む。降り立った亞愛は地に手を着け、

「タイプ・イー型式・地」

地中から突き出た石槍が、更に追加で串刺しに祭り上げた。

元素六重奏　西洋魔術の基本理念となる六つの力である火、水、風、地、光、闇を操るスペル。膨大な魔力を持ち億単位の時を生きた記憶を引き継ぐ彼女が、その程度のことを出来ないはずがない。

だが、標的亞愛が並でないのなら、フランもまた並ではない。更に分身を生成し、標的亞愛目掛け一斉にけしかけさせた。思考回路がリンクしているのか、もしくは本体が全ての分身を動かしているのか。先程までとは打って変わった連携で、徐々に亞愛を押し始める。

「ちいつ……！！タイプ・エル型式・光！！タイプ・ディー型式・闇！！」

劣勢を悟ったのか亞愛が両手を振るい、光と闇の弾丸を豪雨のように叩き込む。だがそれらを受けるのは分身であって、フラン本人は痛くも痒くもない。灰に還ったところで所詮は魔力で生み出した紛

い物　　莫大な魔力を誇る彼女にとっては造作もないことなのだ。

「後ろ」

「もらった」

大技を叩き込み隙が出来た瞬間を、フランは量というアドバンテージで突いた。崩れ落ちる灰の向こうから、燃え盛るレーヴァティンを振りかぶったフラン達が襲い掛かる。

回避も防御も間に合わない。間に合わせまいと更に数体が突っ込んで来る。ヤバ、と亞愛が冷や汗混じりに呟こうとした瞬間、

「深遠「虚・水迅」！！」

蒼き清流の糸が迸り、分身達を賽の目に切り刻んだ。

「ギリギリ間に合った、か……」

やれやれと溜め息をつきながら蒼衣

颯月は亞愛を庇うようにし

て前が出る。負った傷は神綺の手により最低限は治されている為、行動に支障はない。ぶら下げられた右手の指　五本あるそれらは、奇妙なものが纏わり付いていた。

それは　水。透明度の高い清らかな、清らか過ぎる水がこよられた紐のようになっていた。指に対応するかのように五本あるそれはそれぞれの指先から伸びており、犬の尻尾のようにひゅんひゅんと動いている。

深遠「八卦虚式」　蒼衣が生み出していた、新しいスペルカード。中国に伝わる八卦の属性　それを我流にアレンジした、八つの属性を操るスペル。今使ったのは水　鋼鉄をも切り裂く高圧水流を束ね、ワイヤーのように操っているのだ。

「……あなた、能力詐称してた訳？」

初使用にしては上手く出来たなと安堵の息をつく横、亞愛がジト目で問い掛けて来る。確かに彼の能力は『深遠を統べる程度の能力』であり、間違っても『水を操る程度の能力』ではない。亞愛の疑問も当然と言えるだろう。

「現実では有り得ないモノも、また深遠足り得る　そういうことさ」

ならば何故か　その答えを魇月は婉曲させて答える。深遠とは即ち、『人智の届かぬモノ』であり、それはある意味『未だ実現し得

ない技術』と言い換えることも出来る。

例えば、撰氏などという尺度では計りきれない程の業火。

例えば、鉄どころかダイヤモンドさえ容易に切り裂く水流。

例えば、大都市で消費される電力を丸々補える程の雷条。

これらもまた、深遠と呼べるのではないか。

ある意味こじつけに近いものはあるが、実際に魍月はそれを可能にした。闇や重力に特化している為持続時間こそ短いが、八つの属性を切り替えながら次々と使うことが出来る。それが、このスぺルカードの秘密だった。

「……やっぱり無茶苦茶よ、あんた」

「お互い様、だっ!!」

互いに互いを毒づくと同時に、両者は同じタイミングで地を蹴った。魍月の水系と亞愛の水刃が振るわれ、一気に数十の分身を葬り去る。いつしか分身は再度増殖していたが、二人となった今では何の問題もない。

「深遠「虚・紅蓮」！！」

魍月が業火纏う脚を叩き込めば、

「タイプ・エル型式・光！！」

取りこぼしを亞愛の光弾が撃ち抜いて行く。

「タイプ・ユウ型式・水！！」

亞愛が水刃で敵を切れば、

「深遠「虚・せきが赤牙」！！」

カバーに入った魍月が土の牙で亞愛を囲い守る。

「深遠「虚・迅雷」！！」

魍月が轟雷を纏った拳で敵を穿てば、

「タイプ・エス型式・火！！」

応えるように亞愛も炎の拳で背後をカバー。

「タイプ・イー型式・地！！」

亞愛が攻撃を石柱で防げば、

「ぜっえい深遠「虚・絶影」！！」

隙を見て取った魎月が闇を纏った黒鐵で纏めて叩き切る。

「こっけい深遠「虚・光霸」！！」

魎月が光弾を上空から叩き込めば、

「タイプ・ディー型式・闇！！」

応えるように亞愛も黒き弾丸をばらまき面で制圧する。

表裏一体、阿吽の呼吸、まさに完璧なコンビネーション。寸分の狂

いもなく互いが互いをカバーし合い、戦力を何倍にも何十倍にも高めている。いかに悪ふざけとはいえ、度々いがみ合っていた二人と同一人物だとは到底思えない凄まじい戦いぶりだった。

「深遠「虚・疾風」！！」

魍月が左手を突き出すと同時に、小型の竜巻がフラン達を呑み込む。荒れ狂う竜の舞いのように見えるそれを前に、魍月と亞愛は同時に手札を切る。

「タイプ・シー型式・風！！」

「深遠「虚・氷華」！！」

亞愛の風によって苛烈さを増した竜巻が、魍月の氷を付加されることで吹雪となる。いつの間にか昇っていた月の光が煌めく氷に乱反射し、周囲を照らし上げる。

『あわせわざ合業！！」「ブリザードストーム風に舞う華」！！』

美しい花には刺がある。その言葉をまさに体言したような光景を、二人はそう名付けることと宣言とする。凍結の暴風は二人の声に相應るように収斂し、爆散すると共に凍らせたフラン達を完全に砕き

きった。

「……やるじゃない」

その戦い 否、蹂躪を見届け、フランはボソツと呟く。分身では無駄だと悟ったのか、新たなそれが現れることはなかった。

「いいよ、遊びは終わり。ここからは……」

空へと舞いながら、彼女は独り言のようにそう零す。右手には新たなスペルカードが握られており、

「
本気で殺す」

瞳が妖しく輝いた瞬間、今までとは比べものにならない程莫大な量の魔力が一気に吹き出した。

「禁忌 「カゴメカゴメ」」

カードが宙に溶けると同時、幾多もの魔法陣が垂直に交わった。方眼紙のラインのような軌跡で緑色の弾が配置され、行動が制限される。だがその隙間はお世辞にも狭いと言えるものではなく、亞愛共

々 魘月は首を傾げる。

本気で殺す　その言葉とは裏腹に弾幕のレベルは低い。一体どう
いうつもりなのかと思考しようとすると同時に、フランが右手を振り
かぶり黄色い特大の弾を放り投げた。フランとそう変わらないサイ
ズの剛速球が、弾幕のラインに接触する

瞬間、ラインが崩れた。

フランの投擲した弾が弾幕に触れた瞬間、緑色の弾は四方八方に弾
け飛んだのだ。あまりにも奇天烈な攻撃方法に反応が遅れるも、亞
愛共々辛うじて回避する。が、

「あアっはははははハハハハハ！！」

休む間など与えぬとばかりに魔法陣は縦横無尽に宙を駆け回り、フ
ランは両手を振りかぶり弾を投げまくる。それはまるで、力任せの
ビリヤードだ。限られた空間の中ではいずれ、あの攻撃範囲の内に
捕われてしまう。

本命と跳弾の豪雨の中、互いに回避を最優先に設定。水迅や型式・
風で切り裂くことも考えたが、こつも量が多くては押し負けるのが
目に見えている。

今この場で必要なのは、高火力で周囲一帯を薙ぎ払える強力なスペ
ルだ。しかし魘月の手持ちでそれに当て嵌まりそうなのは、先に使

用したシュヴァルツセイバーのみ。弾幕ごっこにおいて一度使用したスペルカードは、その勝負が終わるまで二度と使えない。発動だけなら出来ないこともないが、万全ではない今の状態で本来の威力を發揮するのは難しい。そうなれば自然と手段は亞愛頼みになる

「……あ」

いや、待て。お前にはもつと、上手いやり方があるはずだ。何も力任せでなくていい。弾幕をどうにか出来るなら、手段は問わないのだ。例えば、そう

ブラックホールとか。

「亞愛！！」

即断即決 相棒に声を飛ばしながら、魍月は一枚のカードを取り出す。黒一色に見えるそのカードは、その実内に巨大な力を孕む正体不明の天体。急造な為範囲はやや落ちるが

「深淵 「中間質量ブラックホール」！！」

この場においては、それで十分。

ルナティックの超大質量には劣るが、その力はハードクラスと互角の域。即座に周囲の弾幕を吸い込み、核の高圧重力でマイクロ単位のサイズに潰していく。あまりの吸引力に場の全員がたたらを踏むが、

「ナイスロリコン」

認識を操れる彼女にとって、『その程度のこと』は関係ない。

やたら良い発音で魍魎の妙手を褒め讃えながら、亞愛が大地を全力で踏み抜いた。進路はクリア。最強の吸血鬼を止めるものは何もない。

「漆黑」

間を置かずしてフランの眼前に辿り着き、亞愛は一枚のカードを構える。遅れてフランが構えようとする前に、

「ムーンライトデビル」！！」

亞愛はそれを切った。

宣言と同時に現れたのは、あまりにも巨大な漆黒の十字架。聖者を磔刑にするはずのそれは、狂気の悪魔さえも封じる圧倒的な力。天を貫く光る闇は、その莫大なエネルギーの中にフランを呑み込み荒れ狂う力を叩き付けて行く。

ムーンライトデビル　レミアアのスカレットデビルの元となった、亞愛愛用のスペルカード。己を始点として四方向に魔力を放出し、巨大な十字架を形作る力任せな、しかし強力なスペルだ。

「よし、決まった!!」

「いくら妹様でもあれなら……」

それを見た魔理沙が歓喜の声を上げながら右拳を左手に打ち付け、やや心配そうにしながら美鈴も追従する。静かに戦場を見守る神綺を除き、誰もが決着を予感した。

「……っつ」

やがて効果時間が切れたのか、十字架の中心にいたはずの亞愛が魎

月の元に戻った。あの膨大な魔力を解き放ったせいか、若干ふらついている。つまりそれだけ強力なスペルだったということなのだろう。

「……………あは」

だが、レミリアだけは知っていた。

誰もがフランの敗北を確信する中、土煙の中から少女の笑い声が響く。あれだけの攻撃を受けてなお、少女の影はしっかりと二本の足で大地を踏み締めており、

「きゃははははははっ！！」

歓喜と狂気を込めて、笑った。

そう。あれだけの攻撃を叩き込んでなお、フランを止めるにはまだ足りないのだ。

「スゴイスゴイ！！一瞬死んだかと思った！！」

可愛らしい服は所々裂けており、帽子もどこかへと吹き飛んでいる。

彼が来た時から強まっていたさの想いが、ふとレミリアの胸を過ぎる。本来なんの関係もないはずの彼がフランの心を開き、救う為彼女と共に必死に戦っている。対し姉である私は、何もしていない。何も出来ていない。何故か？簡単だ。

最低限保たれている今の関係を、壊したくないから。

「重降「グラビティフォール」！！」

思考の海から這い上がってみると、舌打ちと共に魍月がカードを取り出し、宣言と共に両腕を振り下ろす。応えるかのように重力が増し、フランの放った弾幕は全て地に突っ伏した。

だが、遅い。それを予知していたかのように、既にフランは効果範囲から逃れている。月を背に翼を広げ空に舞い、レーヴァティンを左手へと持ち替える。

「禁弾」

カードを放ると同時、レーヴァティンが緩やかなくの字へと変化する。先端から弦が伸び、虹色を纏う炎の矢が番えられる。

あれは、まずい。

昔、フランは星虹スターボウの名を冠する弓矢を使うスペルカードを持っていた。光の七色を持つ矢を解き放つ、彼女の持つスペルカードの中でも三本の指に入る高火力スベル。あまりにも危険な為、師である亞愛はその使わせ方を変えた。虹の七色を七種の弾幕に分け、降り注がせるものとしたのだ。故にそのスペルカードはブレイク 原形が壊されている。

それを、あの子は。

「「スターボウブレイク」！！」

フランが叫ぶと同時に、星虹の矢は放たれた。宙を翔ける 否、周囲の空間を切りながら進むそれは、魍月や亞愛を十回殺してなお余りあるだけの威力を秘めていた。

ダメだ。

今の二人ではあれに対抗出来ない。回避や防御が出来るような代物ではない。あれを相殺出来るのは魍月が使ったシュヴァルツセイバー、亞愛が使ったスピア・ザ・ロンギヌスクらいのものだろう。

或いは

気が付いた時には遅かった。フランのスペルカード　巨大な矢は既に目の前。魇月・亞愛共に不調、回避も防御も迎撃も間に合わない。王手、詰め、言い方はなんでもいい。今この瞬間がまさにその状況だった。

だが、諦める訳にはいかない。フランを狂気と闇の檻から引き出さなければ、彼女はずっとあのままだ。亞愛も同じなのか間に合わぬと知りつつ、決定打を持つ魇月を庇うように前へと駆け出す。ならば自分も、諦める訳にはいかない。投了するにはまだ早い。活路を開かねば全てが終わってしまう。それだけは許せない。何を置いても絶対。

まだ、終わっていない。

「神槍　「スピア・ザ・グングニル」!!!」

そしてその思いに、現実はあまりにも意外な形で応えた。

二人の間を突き抜けたのは、赤い朱い深紅の槍。投擲されたそれは唸りを上げて大気を切り裂きスターボウブレイクへとぶち当たり、

貫いた。

「つな……」

必殺の力を破られ、思わずフランが固まる。僅かに掠めた頬から血が流れ出しているが、それさえ気に留めずある一点を凝視している。

「そうよね……。あなた達に任せきりって訳には、いかないわよね……」

背後から歩み出たのは、永遠に紅い幼き月。深紅の名を持つフランスカーレットの姉　レミリアだった。

「避けていても、遠ざけても、それはただのその場凌ぎ……。根本的には何も変わってない。そして私は、『今』が変わるのが怖かった」

ぽつぽつと一人独白しながら、レミリアは二人の前に立つ。伏せられた顔から表情を窺うことは出来ないが、その声は自らの臆病さを悔いているように思えた。

変わってしまったえば『今』はなくなる　奇しくもそれはかつて、魔界に迷い込んだ少年が抱えていた闇に通じるものだった。

「でももう怖がらない。迷ったりなんかしない。私はあの子の
フランの姉なんだから」

だが、少年は勇気を出して一步を踏み出した。その一步があったか
らこそ、彼の『今』は『未来』に変わった。その一步を踏み出す勇
気 それを手にしたレミリアの瞳には、ただ強さだけがあった。

悪魔のような翼を広げ、レミリアは右手を振りかぶる。その手には
新たな紅槍^{グングニル}が握られており、覇者の風格を醸し出している。

「こんなにも月が紅いから」

そして紅い悪魔^{レミリア}は、その力を以て。

「あなたの狂気 本気で殺すわよ!!」

狂気^{フラン}の妹を救い出すと、宣言した。

第二十一話「真祖」(後書き)

カリスマ降臨！遂におぜうがガチで本気出すお！

魍月と亞愛の戦闘シーンは結構苦労しましたw宣言多過ぎw

次回、フラン戦決着。

第二十二話「愛憎」(前書き)

お待たせしました、二十二話をお届けいたします。

スランプとブランクのせいか実力が更に低下しておりますが、温かく見守ってやってくれると幸いです。

ではごーぞー。

第二十二話「愛憎」

それは、悲しい事故だったのだ。

『やーいやーい！！取れるもんなら取ってみろー！！』

『うーっ！！』

亞愛と別れて数十年。二人だけであることに飽き始めていた姉妹は、遂に人間と関わることを選んだ。亞愛に貰った日光避けのペンダントを着け、翼を隠し、夕暮れの街で遊ぶ子供達に混じる。その目論見は呆気なく成功し、二人が遊びに行くようになってから既に二週間が経過していた。

『ほらほらー、全然届いてないぞー！！』

『うるさーい！！』

そんな中一人の少年が、レミリアにちょっかいを出していた。彼女の帽子を引つたくり、届かないように手を伸ばしているのだ。好きな相手の気を引きたい。子供特有の屈折した、それ故の行動だった。

だが、フランにはそれが理解出来なかった。理解出来なかったからせめて レミリアが本気で嫌がるようなら、間に割って入るうと考えていた。

そしてこの光景は、既に10分近く続いている。いい加減我慢の限界だったフランは背後から近寄り、帽子を奪い返そうとした。

『へっへーん！！そんなんじゃいつまでも経っても、』

取り返せないぞという言葉は、続かなかった。

少年も頃合いだと感じていたのか、鬼ごっこのようなものに切り替えるつもりだったらしい。確実に取り返す為割と本気で素早く帽子に伸ばされたフランの手と、動き出した少年の頭が、重なってしまった。いかにごまかしているとはいえ、フランは吸血鬼。鉄板ですら呆気なく貫くその手が、視認出来ない速度で伸ばされたのだ。

たかだか子供の頭など、容易に貫けないはずがなかった。

『え……………』

『あ……………』

姉妹の声が重なる。だが現実是不変ならない。脳を全損した少年は痙

攀した後、地面に突っ伏した。……物言わぬ、骸と成り果てて。

『き、きゃああああっ!!』

『ひ、人殺しだ!!』

『警察!!警察!!』

あまりにも非現実的な光景によろやく理解が追い付いたのか、子供達が騒ぎ始める。加害者となってしまったフランは呆然とするばかりで、しかし脳裏には別の思考が渦巻いていた。

見られた。

バレた。

もうここにはいられない。

逃げる？

ダメ。

証拠が残っている。

逃げ切れない。

証拠？

子供達ト死体。

なアんだ。

簡単。

全部全部。

殺セバいい。

壊シテ壊シテ。

殺セバいい。

ソウ。

全部。

殺セバいいんだ。

一人残ラズ。

ミナナ。

『……ラン、フランー！』

フランが姉の呼びかけで我に返った時には既に遅く。遊び場となっていた路地裏の広場は、血と肉と骨の散らばる墓場となっていた。彼女の周囲は一瞬で身に覚えのない光景が広がっていて、何故か自分は血塗れだった。

何故か？いや、違う。覚えている。手足を引きちぎった感覚も、心臓を貫いた感触も、頭を握り潰したことも、全部。

バラバラにして、殺した。

『お姉、ちゃん……』

フランはぼろぼろと涙を零しながら、恐怖の声を漏らす。血塗れの広場が、周囲に散らばる死体が、そして何よりそれを引き起こした自分自身が。フランはとても、恐怖を感じずにはいられなかった。

『いいの、フラン。私……』

『……お姉ちゃん、私を殺して。きっと私は壊れてる……。私と一緒にいたら、お姉ちゃんまで殺しちゃうかもしれない……。だから……』

自分を庇おうとするレミリアを遮り、フランは端的に願いを告げる。こんな状況では思い詰めないはずもないが、それにしたってあまり

にも突飛な結論だった。

『出来る訳ないじゃない……っ！！』

『じゃあせめて、私を閉じ込めて。もう誰にも会わないように、もう誰も傷付けないように』

当然承諾するはずもなく、レミリアは血を吐くかのような悲痛な叫びで拒絶する。だがフランはなおもそう続け、レミリアの退路を塞いで行く。

『お願い』

『……ごめんね』

レミリアの最後の抵抗は、フランの真っ直ぐな瞳の前ではなんの意味もなかった。噛み切ってしまった唇から血を流しながらも、レミリアは手刀を延髄に叩き込む。

笑顔を浮かべながら気を失った妹を抱き留め、姉はその場を後にする。全てから逃げるかのように全力で、振り返りもせず。

そうしてその日から、互いに互いを避け合う日々が始まった。姉は事件について固く口を閉ざし、一人暗い地下に閉ざされた妹は罪悪

感と恐怖で壊れていった。そしていつしか妹は全てを忘れ狂気を宿し 自らを閉じ込めた姉に憎悪を抱くようになった。

「……………あは」

戦闘態勢に入ったレミアアを見て、呆然としていたフランが微かに笑い声を上げる。微かだったそれはやがて大きなそれとなり、

「あははははははっ！！何言ってるのお姉様！？殺す！？私を！？出来る訳ないじゃない！！私が怖くて逃げ出した臆病者の癖に！！」

嘲りの声を上げ、自らの姉を見下すフラン。おかしくて堪らないと言わんばかりの声はいつまでも続くかと思われたが、

「今更出て来て…………、姉面なんかするなああああっ！！」

瞳に憎悪の炎を点したフランが、離れた場所にいるアリス達までもが耳を塞ぐ程の絶叫をレミアアに叩き付けた。同時にレーヴァテインが宙を指し示した瞬間、上空より七色の弾が土砂降り of 集中豪雨のように降り注ぐ。魍月や亞愛を相手にしていた時とは明らかに異

質な感情の爆発。誰が見てもわかる。フランは間違いなく殺意を持って、レミリアを殺そうとしていた。

「そうね……。確かに今更過ぎるし、そんな資格なんてないわよね……」

そんな死の光景を前にして、レミリアは表情を歪めながらそう嘆く。その瞳はただひたすらに、自らの愚行と痛々しい妹の姿を哀しんでいた。

思えばあの時、無理矢理にでも連れ出せばよかったのだ。亞愛を探すなりなんなりして、歩み寄ればよかったのだ。

……でも、私は遠ざけてしまった。

今更贖えるとは思わない。許してもらえとも思わない。だけど、それでも、

「それでも私は　あなたの姉だからっ！！」

フラン。血を分けた肉親。たった一人の可愛い妹。まだこの手が届くのならば

「神術　「吸血鬼幻想」！！」

今度こそ、救ってみせる。

スperlカードを切ると同時、レミリアが左腕を振るった。前方目掛け大きいサイズの弾が放たれ、七色の弾を相殺していく。フランの弾幕が狙いも何もない散弾銃だとするならば、レミリアのそれは必要最低限の弾幕を撃墜する狙撃銃。加えて言うならばその狙撃銃は、『連射』が利くのだとすれば

「ぐっ……！！」

大弾の軌跡に配置されていた一回り小さいサイズの弾が崩れるように動き出し、波のようにフランへと襲い掛かる。フランの弾幕は質量ともに膨大だが、慣れていないのか無駄が多い。そしてレミリアはその隙を突き、こうしてフランと互角かそれ以上に渡り合っていた。

「はあっ！！」

思考を断ち切り前進、大地を踏み砕く程の脚力で眼前へと至り、右手の槍を全力で叩き付ける。フランも元に戻したレーヴァティンで防御するも、とっさの迎撃だった為力を十全に活かせていない。次第に両者の均衡が崩れ、フランが押し込まれていく

「な……、めるなああああつ!!」

「っ!?ぐっっ!!」

が、間一髪のところまでフランの憎悪が勝った。刀身から溢れ出した地獄の業火が、大蛇の如くレミア目掛け宙を翔ける。反撃を予想していなかったのかマトモに食らい、レミアは吹き飛ばされた。

だがフランはなおも追撃に出る。体勢を崩したレミア目掛け大地を蹴り、両手に構えたレーヴァティンを大上段に振りかぶる。その黒い刀身がレミアに触れようとした瞬間

間よりなお黒い漆黒の剣が、その一撃を止めた。

「俺達を忘れてもらっちゃ困るぜ?」

レミアの前に割り込み黒鐵を振るった魍月が、不敵な笑みを浮かべながらフランの得物を弾く。先程とは逆転し、今度はフランが体勢を崩す。望まずして宙を見る形となったフランの視界に、

銀の髪が、翻った。

「猛蹴　「一　八連式嵐脚」！！」

涼やかな声が響くと同時、フランの身体に怒涛の蹴りが叩き込まれる。宣言通り百八発のそれを一瞬の内に受けたフランは勢い良く吹き飛ばされ、紅魔館の壁へとめり込んだ。

「蒼衣……、亞愛も……」

尻餅を着く形となったレミリアが呆然と視線を上げるも、真つ先返されたのはチョップだった。しかもダブルで。あまり力は込められていなかったものの、不意打ちだった為驚きは大きい。頭を押さえながら顔を上げると、

「一人で先走んなこのバカ」

「間に合わなかったらとヒヤヒヤしたわよ」

「づぐ……」

今度は単独行動を叱られた。確かに二人が間に入らなかつたらあのままレミリアは両断され、再生する間もなくこの世からログアウトしていただろう。そこを言われるとぐうの音も出ない。

「けどまあ……」

フランを想うあまりやり過ぎたか　そう思い暗いオーラを纏い下を向いていたレミリアの頭に、ぽふっと魇月の右手が置かれる。思わず上げた視線の先には、穏やかな笑みを浮かべた魇月　彼女が知る由もないがかつてレミリアと同じことを迷っていた者　がお

「頑張ったな」

今が終わる恐怖。これからの在り方。それらに向き合う覚悟。かつてそれを経験した彼の言葉は、まるでレミリアのそれを認めて、褒めてくれたかのようで。

その一言だけで、レミリアは報われた気がした。

「とりあえずロリコンはほっとくとして……、深遠、認識、そして運命。これだけいけば、致命打くらい余裕で叩き込めそうよね？」

「殺してどうする……。あくまで「シュヴァルツシルトの間」を当てるだけの隙を作ればいいだけだ。あとロリコン言うな次言ったら殴る」

そんな魎月を半目で茶化す亞愛の言葉に、レミアアの頬は知らず赤くなる。幸か不幸かその表情は、亞愛に言い返すべく振り返った魎月の目に映ることはなかった。

「フランのスペルカードは残り四枚……、勝ち目は十分あるわ」

「だな」

くだらない冗談で互いに緊張を和らげながらも、冷静に状況を分析する二人。魎月のスペルカードは、「シュヴァルツシルトの闇」を含め残り三枚。亞愛は六枚、レミアアは八枚。例え万全の状態のフランを相手にしてもお釣りが来るレベルだ。

能力を使われなければ、の話だが。

「レミイ、フランの能力をあなたの能力で不発に終わらせられる？」

「出来なくはないけど……、三回が限界ね」

この後一切戦闘に参加しなければ、だけど。最後にそう付け足した

レミリアの表情は、自らの力不足に怒っているように見えた。

いくら生来の能力とはいえ、運命を変えろという行為は莫大なエネルギーを消費する。一つの運命を変えたとしても、それによる周囲の影響は、計り知れない程甚大なものへとなりかねない。運命を変えろということとは、即ち未来を変えろということ。SF小説などで度々取り上げられるその事象は、破滅を齎した結末も少なくはない。

……まあ、そもそも運命を多少なりとも操れる時点で、色々つぶっ飛んでいるのだが。

「つまりフランに能力を使わせる前に、蒼衣の切り札を叩き込めばこっちの勝ちって訳ね」

「不確定要素であるスペルカードは全部破っておきたいが……難しいな」

魎月の切り札 「シュヴァルツシルトの闇」は、凄まじい集中力を必要とする。何せ深遠の闇に侵された心へと干渉するのだ、下手に制御を誤れば術者も対象も一生植物状態という事態にもなりかねない。だからこそこいしの時には全てのスペルカードを破ってから発動させたのだが フランが相手ではどこまでやれるか。

「とりあえずやるしか……、っ!？」

とりあえずわかっているのは、ここで喋っていてもなんの解決にもならないということ。動きが止まった今の内に、削れるだけ削るべき。そう提案しようとしたレミリアの言葉は、しかし中断せざるを得なかった。何故なら

「残念、ハズレ」

槍のように鋭い炎弾が、危うく頭蓋を貫通するところだったからだ。

「やっぱり普通にやろっかな」

スピア・ザ・グングニル 単発の弾丸に魔力を集束させ、高速で投擲することで槍とする姉のスペルを真似たつもりか。レミリアの頭上を掠めたそれは、あまりにも鋭利過ぎて先端が良く見えない程。あんなものを食らったら、頭に綺麗な丸い風穴が開いていただろう。

「禁弾 「カタディオプトリック」！！」

だというのに彼女 フランはケタケタと笑いながら、新たなスペルカードを切る。蒼い大弾を先頭とした膨大な量の弾幕が、五条の閃光となって三人へと襲い掛かる。

「二人共下がって!!」

時折壁に当たり反射したかのように軌道を屈折させる弾幕を前に、レミリアもスペルカードを取り出す。紅一色で彩られたカードは美しく、しかし確かに覇者の風格を宿していた。

「紅符　「スカーレットマイスタ」!!」

レミリアがカードを放ると同時、フランのものとよく似た　しかし鮮烈な紅い弾幕が放たれた。紅と蒼　相反する二色の弾幕は互いに潰し合い、周囲に爆発の嵐を生み出していく。

「11のっ!」

「させないっ!」

舌打ちと共に追加された蒼き怒涛を、鋭い叫びと紅き爆流が相殺する。姉妹故かその応酬は一切外れることがなく、結果紅と蒼はただ互いを食らい合うのみ。

その隙を逃さず、亞愛が再度槍を生み出す。先のロンギヌス程ではないにしろ、優に一メートルと半分はあるだろうか。計十本の悪魔デモンの晚餐の食器が高速で投擲され、フランは弾幕をばらまきながらも

それを首を傾けつつ側転のような挙動で回避。神業染みた反射神経と回避に感心するも、亞愛の目的は達されていた。

何故なら回避先には、既に黒鐵を構えた魍月がいるのだから。

「くっ!!」

魍月の一撃をレーヴァテインで受け、流し、後退しながらフランは再度蒼の奔流を召喚する。流星と言ってもよい輝きを宿したそれは、しかし対象を裂き砕き壊す魔の弾丸。そしてそれを抑えるのは紅き血の弾丸。レミリアの弾幕だ。

状況は五分。先程より多少マシになった程度だ。フランの攻撃を捌くこと自体は、亞愛と魍月だけでも事足りていた。

だが、所詮は捌くこと止まりでしかない。フランに致命打を与えなければ、消耗戦となって押し切られる。今はレミリアが攻撃を押し止めているが、それも時間の問題だ。早急に倒さなければ、こちらのペースが崩される。

「このっ……!! 邪魔だああっ!!」

しかし、フランも同様に焦っていた。膨大な魔力による力任せの技と弾幕。それらの粹であるスペルカードを七枚も費やしてなお、

未だ一人も倒せていない。その事実がフランを苛立たせ、仕留めたいが為に力を費やし、魔力残量の低下を招く。

短期決着。両陣営が思い描くその結末は遅々と、しかし確実に忍び寄っていた。

「禁弾　　「過去を刻む時計」！！」

業を煮やしたフランがポケットからカードを取り出し、八枚目となるそれを切る。二つの魔法陣が両者の宙に展開され、膨大な魔力を寄り代として巨大な十字架を発現させた。

それが、回る。

中世の拷問の車輪を彷彿とさせる禍々しき十字はそれぞれ逆方向に回りながら、こちらを挟み込み押し潰そうと戦場を踊り狂う。彼女の弾幕　それは狂気が成せる業か。トリッキーでもあり、力任せでもあるそれは、対面する相手の予想を遙かに飛び越えていて。しかし、荒々しくも魔性のような美しさを秘めていた。

前面は十字架で塞がれている。ならば上。単純明快な回避の為の思考は、しかし相手にも出来ること。飛び上がり災禍の十字をかわしたレミリアだが、しかし眼前には追撃の弾幕があった。

「……………！！」

辛うじてかわすが、内何発かは身を掠めて行く。迎撃に当たれば簡単に叩き潰せる程質は低いが、かといって足を止めれば物量に押され蜂の巣になるのは想像に難くない。故に回避が最善手　かわせるだけの力があれば、だが。

一方魍月達とはいえ、十字架を飛び越えフランへと突っ込んでいた。襲い来る弾幕を必要最低限にかわし、ただひたすら前へと進む。それは気を引く陽動にもなるし、そのまま行けるのであれば本命にも化け得る妙手。しかし

『んな……！？』

魍月の一閃と亞愛の一撃を、フランはあろうことか素手で受け止めた。

「きゃはっ！！」

万力のように剣と脚を締め上げつつ、フランは二人を放り投げる。振り下ろされた腕に応えるかのように、二人目掛けて十字架が襲い掛かる

「ナメるな……！！」

が、それを許すような亞愛ではない。宙で強引に体勢を立て直し紅い魔法陣を展開、ミシミシと盾に悲鳴を上げさせながらも、左右からの十字架の挟撃を受けきった。

「何も十字架は……、あんなだけの専売特許じゃないのよっ!!」

その魔法陣に魔力を通し再構成、十字架として構築。フランのものより小振りな　しかし破壊力は優に上回るそれを亞愛は投擲する。その数、およそ二十。

「グツと引いて……」

乱舞する十字架を前に、フランはレーヴァティンを両手で構え振りかぶる。刀身に炎を纏った災厄の杖を、

「どっかーん!!」

全力で振り抜いた。

「ちよっ、マジ!?」

「あはははははっ！！飛んだ飛んだ！！」

前面を薙ぎ払う一撃を受け、亞愛の投擲した十字架は痛烈なピッチャー返しとなって襲い掛かる。すかさずレミアが弾幕を放ちカバ―に入るが、曲がりなりにも最強の吸血鬼である亞愛の攻撃を急造のそれで相殺出来るはずがない

「野球ならよそでやれ」

だが、同格の存在はこの場にいた。黒鐵を両手で構えた魍月が、その極厚の刀身に深淵より溢れ出した漆黒の闇を纏わせる。長さを約二倍にした黒鐵を握ったままぐるりと身を回し、

全ての十字架を打ち返した。

「ぐっ……！！」

ピッチャー返し返しにより速度を更に増した弾幕を受け、さしものフランも苦しげな声を上げる。集中力が途切れコントロールを手放してしまったのか、過去を刻む時計もその姿を薄れさせて行く。これでフランのスペルカードは たった二枚。

「いよっし！！ロリコンナイス！！」

「…………後で覚えてるよてめえ」

背後に下がって来た魇月に亞愛がからかいと労いの声を掛け、それに魇月はボソツと答えながらも油断なくフランを見据えている。…
…相変わらず、仲が良いのか悪いのかわからない関係だ。先程の舞踏のようなコンビネーションは偶然だったのだろうか。

「…………あはっ」

濛々と立ち込める土煙の中、しかし現れた悪魔の妹は健在だった。袖は完全に焼失し、サイドテールにされていた金髪は解け夜風にはためいている。だがその瞳に宿る狂気は、些かも衰えてはいないようだ。

「ホント強いね、蒼衣も亞愛もお姉様も。私、こんなに楽しい戦いなんて初めて」

周囲を睥睨し心の底からそう言うフランに、三人は心中で冷や汗を流す。魇月や亞愛は言うに及ばず、レミリアも間違いない強者の部類に入る。元から強力な存在だったとはいえ、今のフランの強さは異常を通り越している。三人を相手にしてここまで立ち回れているのが、何よりの証左だ。

「だからお礼に見せてあげる……。私の切り札、その一つ。全員が消えて失くなる、禁忌中の禁忌を」

禍々しい笑みを見せると同時、フランは九枚目となるスペルカードを取り出す。赤・青・緑・黄・橙の弾で彩られた、暗い昏いそのカードを。

「秘弾」

そのカードに秘められた魔力に、対峙する魍月達は疎か外野であるアリス達さえ、背筋に凄まじい悪寒を覚える。唯一亞愛だけが発動を阻止しようと地を蹴るが間に合わず

「　　」
「そして誰もいなくなるか?」「」

彼女は世にも恐ろしいその名を、呼んだ。

宣言されると同時、フランの姿が一瞬で宙に掻き消えた。これと全く同じ現象を、魍月は一度地底で見ている。

………耐久スペルか。

脳裏をその答えが過ぎると同時、始まりを告げる弾幕が現れた。三方向に尾を引く青い弾が三発　　颯月、亞愛、レミリアのそれぞれ目掛けて襲い掛かる。

引いた尾　　拡散し滞留する弾幕こそ厄介なもの、しかし速度は小走り程度の遅々としたもの。冷静さを失わなければ、回避自体はあまりにも容易だ。致命的ではないものの、三人の心に僅かな安堵、そして油断が生まれる

瞬間、弾が五倍に増えた。

まさかそれが狙いだった訳ではなかるうが、不意を突かれる形となった三人は対応が僅かに遅れる。十五発となった弾は縦横無尽に宙を駆け回り、逃げ道をじわじわと少しずつ奪っていく。

「獄符「千本の針の山」ッ!!」

直感的に危ないと判断したのか、レミリアが四枚目になるスペルカードを切る。現れたのは放射状に放たれるナイフ型弾幕と、シャワーのように降り注ぐ赤き弾幕。レミリアを中心にほぼ全包围に放たれるその血と刃は、フランの青き弾幕を次々に打ち消していく。

だが、それは序曲始まりに過ぎなかった。

三人を囲い込む檻のように、赤き弾が全包围から迫り来る。規則正しく並んだそれは上空から見れば、辺の歪んだ長方形のように見えただろう。

これだけならばどうということはないが、廻月は次の囲いが準備に入っているのに気付き舌打ちを漏らす。青と緑の弾が上下左右から、格子状に放たれたのだ。三色の入り乱れる空間に囚われながらも、三人はその隙間を縫ってかわして行く。

しかしそれでもフランは追撃の手を緩めない。黄色とオレンジの二色が追加され、一周してまた赤の弾。更に密度を上げる弾幕をかい潜りながら、亞愛は一つの事実気が付いた。

加速している。

弾速のこともあるが、問題はそこではない。五色一セットのサイクルそのものが加速している。先程は黄色が追加された時点で赤が消えていたが、今はオレンジが追加されても残っている。耐久スペルがあと何秒続くかは知らないが、いずれ詰みに限りなく近い状況に至るのは確定的だ。

そこまで思考を至らせた亞愛は、このスペルの名前の意味を真に理解する。

文字通り、誰も彼も消し去るスペルなのだ、これは。

耐久スペル中は宣言者の姿は完全に掻き消え、実体そのものさえ虚空に解ける。そんな中この弾幕の嵐に取り残された者が辿るのは、被弾の未来だけ。

そして、誰もいなくなる。

常に生き残るのは勝者だけ、そしてそれは最強の種族たる吸血鬼フリスのみ。彼女以外の者は全て、倒す前に膝を屈する。まさに暴虐、まさに覇者。人との交わりを戦いの中でしか知らぬ故の　悲しくも強力なスペルであった。

だが　だからこそ　負ける訳にはいかない。

こんなものを目の当たりにおいて、放って置くことなど誰に出来ようか。魎月蒼衣やフランと過ごした日常こそが、彼女の本来の姿なのだ。亞愛は知っている。姉妹仲良く暮らしていた数百年前のことを、亞愛は鮮明に覚えている。

だから　彼女は今こそ、禁じ手を使う。

「蒼衣！！」

鋭い叫びを飛ばしながら、亞愛は右の腕を袈裟掛けに振る。聡い彼ならばその一言だけで、意図していることは伝わるハズ。ここ三日の中で培ったそれは、魇月に確かに届いた。

魇月は声でなく視線で答え、弾幕の密集する中心へと駆け出す。黒鐵を携えた彼はぐるりと身を回し、

『姿を現していた』フラン目掛けて振り落とした。

「っな……!?!」

間一髪レーヴァテインで受け止めるが、フランや外野には何が何やらわからない。耐久スペルは効果時間が切れるまで宣言者に絶対の守りを施す。それがルールのはずだ。フランが自分からスペルを打ち止めにするハズがないし、効果時間はまだ十秒以上残っている。

ならば何故か。そんなことは至って単純明快。ルールそのものをぶち壊せる存在が、今この場にいるというだけのこと。!!

「これで」

フランが反射的にスペルを中断したのか、『耐久スペルの保護が切れ姿を現したレミアアが』深紅の血槍を作り出す。魇月と罅迫り合いをしているフランに、それをかわす術はない

「終わりよっ！！」

鬼と同等の膂力を誇る吸血鬼の、全力を以て放たれた一撃。空間そのものを喰らい削るかの如き勢いで、紅の彗星は悪魔の妹へと

「
Grip and Breakdown
ギユツとしてドツカーン」

届くことなく、爆散した。

詩のような一節が紡がれフランが右手を握りしめると同時、宙を翔ける紅槍が砕け散った。跡形もなく木っ端微塵、塵一つ残さずに。まさか、と魎月がフランをまじまじと見た瞬間

「
壊レチャエ」

悪魔の右手が、握られた。

全ての物質には緊張していて、力を加えると簡単に壊すことが出来る『目』というものがある。『目』を攻撃すると物質は自らを維持

出来なくなり、跡形もなく砕け散る。

少女は生来、右手の上にその全ての物の『目』を呼び出すことが出来た。そのまま右手を握りしめて『目』を潰せば、相手は無条件で木っ端微塵。文字通り徹底的に『破壊』される。

そのあまりの危険さ故に、少女は人と遠ざけられ暮らしていた。英断？否、最悪だ。何故なら少女は 人と関われなかった彼女は、人の脆さと儂さ、生命の尊さを知らない。故に彼女は、何の躊躇いもなくその能力^{チカラ}を行使する。

それがどのような結末を及ぼすのかを知らないままに。

死を覚悟した魇月は、しかしその思考が十秒を越えて続いたことに疑問を覚える。とにもかくにも生きていることは確かなので、呆けた表情のフランから遠ざかりつつ思考。

アレは避けようと思つて避けられるような類のものではない。いくら逃げようと攻撃対象である『目』は彼女の手中、あらゆる防御も回避も意味を成さないのだ。

そしてその答えは、意外とすぐに判明した。そう、認識をズラすこととの出来る彼女ならば、魇月の身体という認識をズラすことで間接的に『目』そのものもズラすことも可能。そう思い視線を動かしてみた先には

「っ、っぶ……」

血を吐く亞愛の姿があった。

「これは……、想像以上にヤバいかな……。スペル一回が限界かも……」

ありとあらゆるものを破壊する 即ち万物を壊す神の如き力に逆らうのは、並大抵のことではなかったらしい。当然と言えば当然なのだが、亞愛自身にも相当の負担が掛かったようだ。

感謝と心配の聲が口を衝いて出そうになるが、それは後からでも出来る。今やるべきことから目を逸らしたら、それこそ亞愛の行動が無駄になる。

即座に意図を汲んだのか、視線を受けたレミアは紅き弾幕を大量に生成。吸血鬼の身体能力を十全に活かし、それらを連続で投擲する。あまりの速度に弾丸から長槍へとランクアップしたそれは、フランを穿たんと唸りを上げて襲い掛かる

「 Q E D 」

が、紅き槍の雨は再度阻まれた。無数に現れた青き弾丸が、圧倒的

な物量を以て紅槍を撃墜したのだ。
青の爆流を従えるのは、黒と紅を纏った悪魔の少女。天に掲げられた手に応えるように、莫大な量の弾が彼女の周囲を踊り狂う。

「495年の波紋」！！」

宣言と同時に右手が振り下ろされ、破壊の波動が解き放たれた。彼女を中心として放射状に広がる青い弾が、三人を穿ち貫かんと宙を疾駆する。

何の芸もない放射状弾幕 そんな訳では断じてない。まるで見えない壁に当たったかのように、周りの弾が反射している。まさに奇々怪々、トリッキーな弾幕だった。

QED Quod Erat Demonstrandum。数学などに用いられる、証明終了を意味する言葉だ。495年という悠久の時を、狂気と共に過ごした彼女が導くその結末の証明 それがこの拡散する青き波動ということか。自らを中心に放たれる破壊の波は、穿った見方をすれば『誰もが消えて失くなる自分一人の世界』を現しているようにも見える。

それが、^{彼女}フランの世界。

「これさえ破れば勝てるわ……。ここまで来てぶっ倒れんじやないわよ二人共！！」

感じたモノは同じだったのか、魔力を手繰り寄せながら亞愛が鋭く叫ぶ。あれだけの激闘を潜り抜け破壊の余波を受けてなお、どこにこれだけの余力を残していたのか　底無しと称してもいい程の魔力が、彼女へと集っていた。

「当然……!!」

証明完了？知ったことか。前提そのものが間違っていれば、証明などただの文字の羅列に過ぎない。そしてこの場に集まったのは、その前提をぶち壊せるだけの力を持った絶対強者。ならば　負けることなど万に一つも有り得ない。

「集え」

麵月はここが踏ん張り所だと言いつつ、身体に鞭打ち闇を呼び集める。数十の弾丸へと凝り固まった闇を、青き波動の一角に叩き込む。

即座に意図を汲んだのか、レミアアと亞愛もその一角に集中して弾幕を叩き込み始める。三人の狙いに気付いたのか、フランが悔しげに表情を歪めた。

そう　このスペルカードは波紋の名が示す通り、全方位に放たれる放射状弾幕。つまりそれは、フランの力が均等に全方向へと振り分けられているということ。いかにフランが強力な力の持ち主だと

しても、三人の力を集中させて一点突破すれば　この程度の弾幕、
破れぬハズがない。

「はあああつ！！」

廻月が闇を纏った黒鐵を振るい、特大の斬撃を叩き込む。辰気の収
斂により加速した刃は一撃の名の下に、敵へと続く一筋の道を切り
開いた。

フランが次弾を放とうとするが、しかし亞愛の方が速い。余波で十
数メートルの距離を吹き飛ばされながらも、彼女は己の成すべきこ
とを果たしていた。

「っあ……！！」

紅き聖槍の直撃を受け、フランのスペルカードが破られる。それを
確認するまでもない、亞愛ならばやれると信じていたから。そして
トドメを司るのは、姉のレミアア・スカーレット。主人の呼び声に
応え深い紅色の魔力が寄り集まり、再度それを形作る。

神槍の、再誕。

「穿ち　貫けえええっ！！」

裂帛の気合いが込められた絶叫と共に、レミリアの手からグングニルが放たれる。全力全開。乾坤一擲。そう形容するに相応しい、レミリアの象徴である紅き長槍が宙を翔けフランにぶち当たり

カードとなって、消えた。

「^{スター}巨星射抜く」

分身 三者がその真相を理解すると同時、その声が耳に届く。消えたフランの陰から現れたのは、七色の光を纏いし矢を番えたレヴァ^ワテインの担い手 フランドール・スカーレットだった。

この時を虎視眈々と狙っていたのか、フランの動きには一切淀みがない。スペルカードを全て破れば勝ち それは何も限定的な条件ではなく、弾幕ごっこに置けるルールであり普遍的なものだ。それを予測して網を張っていたのか……!?

「^{ホウ}極光の魔矢!」

内心の混乱をよそに、極光の魔弾は放たれた。視認を拒絶するかのように高速で翔ける一矢はしかし、一番近くにいた魇月を素通りする。亞愛がいるのは反対方向。ならば狙いは

「……………っ!!」

消去法でそこまで弾き出した魎月は、後先も考えず全力で跳躍とんだ。練り上げた重力を代償に速度を得て、ただひたすらに彼女の下へ

「死ねええええっ!!」

「レミリアああああっ!!」

期せずしてシンクロする、フランの絶叫と魎月の叫び。突然のこと
で対応しきれないのか、そのまま矢はレミリアの心臓を

すんでのところで、貫き損ねた。

間一髪、魎月が押し倒すような形でレミリアの小さな身体を地面に
引き倒していた。魔弾はレミリアの髪を掠めるだけに留まり、

代償に魎月の背と腕を刳っていった。

第二十二話「愛憎」(後書き)

はい、いいところで切りました(自分で言うな

書いてたら伸びる伸びる、これ含めて二話で終わらせるつもりが
話増えちゃいましたw

次回、今度こそ決着。

第二十三話「姉妹」(前書き)

お待たせしました……、いやはええよ。

元々書けてたのを分割しただけなので早いですw
ではどーぞー。

第二十三話「姉妹」

「……………っ!？」

背筋に猛烈な悪寒を覚え、少女はガバツと身を起こす。荒い息を整えながら、彼女　古明地こいしは周囲を見回し、自らの置かれた状況を認識していく。

洋風に眺えられた広い部屋は、姉であるさとりのもの。やや大きめのベッドには、パジャマを着た自分。いつも通りの光景　彼が地霊殿を去ってからの三日間、ずっと続いた光景だ。

なのに、なんだろう。この胸のざわめきは。

「……………お兄、ちゃん？」

胸裏で鎌首をもたげる不安を沈めようとして、こいしは彼の名を呼ぶ。が、当然彼は今ここにはいない。返るはずのない言葉だとわかってはいても、全身を侵す毒のような焦燥感に抑えが利かない。

会いたい。

「ん……………こいし……………?」

このまま地霊殿を飛び出してしまおうかという考えが脳裏を掠めると同時に、隣で寝ていた姉が目覚めます。若干寝ぼけているのか、目を擦る仕種が愛らしい。ピンクのパジャマもやや乱れており、襟元からはなだらかな胸元が

「お姉ちゃんああん!!」

「え、ちょ、こいし!?!」

がばあと擬音を自ら口にしながら、こいしはさとりに飛び付く。そのまま押し倒すような形になり、さとりは冷や汗をダラダラ。逆にこいしは爛々と瞳を輝かせ、何故か寒気を覚える笑みを浮かべていた。

「お姉ちゃんなう!!」

「なうって何よ!?!」

訳のわからない宣言をするこいしに、さとりは思わず全力で突っ込む。一週間のあの事件で吹っ切れたのか、最近こいしのスキンシップが過激になりつつある。端から見ている分には必死に飼い主の気を引こうとする犬猫のようで可愛いのだが、自らがその対象に

なると話は変わって来る。しかもその全てを『無意識だから仕方ないんだよお姉ちゃん!』の一言で片付けるのだから始末が悪い。彼も大変だったんだろうなあと、さとりは現実逃避も兼ねて今頃人里にいるはずの少年に思いを馳せた。

「ぺろっぺろっ　ぺろっぺろっ　お姉ちゃんをぺろっぺろっ

」

「やつ、ちよっ、やめ……、きゃあああああっ!?!」

抵抗がなくなったのを無意識に悟ったのか、隙有りとはかりにこいしが襲い掛かる。マウントポジションを取られたさとりに抗う術はなく、哀れぺろぺろ　もとい妹の愛の渦に沈んでいった。

大丈夫、だよね?

さとりとじゃれあいながら、こいしは心中で遠い所にいる彼へと呟く。届かないのはわかってはいるけど、彼が笑い返してくれた気がして。こいしはそのまま姉を愛でる行為に没頭していった。

「お兄ちゃんっ!?!」

兄の身体から血の華が宙に咲く光景を見てか、アリスの口から絶叫が放たれる。あ、余裕なくなると昔の呼び方に戻るんだ。魍月はそのなどどこかズレた感想を抱くが、次の瞬間には脳内を苦痛の二文字で埋め尽くされる。無理もない。背と腕の肉をかなり剝られ、場所によっては白い骨まで見えているのだから。

「っの……！！あんだ馬鹿！？」

間髪入れずに飛んで来た亞愛が、魍月とレミアを連れ一気に下がる。符を取り出し魍月の背に張り付け、小規模ながらも治癒結界を生成。見た目程傷は深くないが、出血が夥しい。体力の低下と衰弱は免れられないだろう。

「あんたがいなきゃあの子は救えないでしょうが！！死ぬ気！？」

この戦闘の大前提として、魍月は何が何でも生き残らなければならぬ。フランに巣くう深遠の闇は、同じ深遠の『シユヴァルツシルトの闇』でなければ相殺出来ないのだから当然だ。魍月の脱落は即ち、亞愛達の敗北に直結する。

加えて言うならば、吸血鬼という種族は生来回復・再生の力が強い。炭化しようが腕が吹き飛ばうが数秒あれば再生するし、心臓や脳などの複雑な器官さえも、時間を掛ければ完全に再生出来る。フランの魔弾とて時間は食うが、再生出来ない程のものではない。

要するに、魍月の行動は無駄でしかなかったのだ。

「それでも……、あいつがレミリアを傷付けるのだけはダメだ……」

それをわかっけていてもなお、彼はレミリアを庇った。魔弾を放った隙を突けば、確実にフランを救えたことも痛い程よくわかっている。だが、それでも。フランがレミリアを傷付けたら、二人の関係が決定的に壊れる。例え暴走していたとはいえ、フランは実の姉に怨嗟と憎悪の声を叩き付けている。それに加えて傷を負わせたとなれば、関係の修復にはどれだけ時間が掛かるかわからない。目先だけではない、先の先まで考えた末の魍月の結論に、亞愛も口を閉ざす。

「……………あ」

だが、それさえも無意味だった。

「違う……。違う……。私は……」

ガタガタと身体を震わせ譫言のように呟きながら、フランがじりじりと後退る。正気の色を宿した瞳は、今や恐怖で覆い尽くされていた。それを見たレミリアは、妹の身に何が起きたのかを直感的に悟

った。

思い出してしまったのだと。

「あ……、ああああああっ!!」

血を流し倒れる^{友達}魇月、その手を血に染めたフラン。数百年前と同じシナリオ。皮肉にもそれはトリガーとなり、彼女が無意識の内に封じ込めていた記憶を、解放してしまった。

目の前の光景を否定すべく、様々な感情がごちゃ混ぜになった絶叫をフランが放つ。同時、フランから闇、炎、弾、ありとあらゆる破壊が解き放たれた。その様はまさに、嵐のようとか言い様がない。

「ちよっ、どうすんのよこれ!？」

「マ……、ズい……」

間一髪防御結界を展開した亞愛が、あまりの絶体絶命っぷりに半ば泣き混じりの悲鳴をあげる。あの波状攻撃を乗り越え魇月の切り札を叩き込めたとして、果たして彼女は正気でいられるのだろうか。いや、そもそも彼女の元へと辿り着けるのだろうか。無理難題のオンパレードにさしもの魇月も表情に苦いものが混じり、切れた唇から溢れた鮮血が噛み締めた口元を伝う。

と、今更ながら魇月は重大なことに気が付いた。先程自分が引き倒したはずのレミリアが　いない。

何故？どこへ？その答えは灯台下暗しの諺通り、すぐ近くに転がっていた。あろうことかレミリアは、あの波状攻撃をかい潜り前進していたのだ。炎が肌を焼き弾が帽子を吹き飛ばし、闇纏う風が頬に一筋の朱を作る。

が、彼女は臆することなく、ひたすらに自らの妹目掛け駆けていた。

「お姉様……、逃げ……」

あと数メートル。その段に至って気付いたのか、フランが警告の声を上げる。意識は元に戻っているのか、瞳の赤に先程までの禍々しさは感じられない。だが身体の方はまだ支配権を握られているのかその手には剣に戻ったレーヴァテインが握られており、突っ込んで来るレミリアを迎え撃つかのように腰溜めに構えられていた。眼前まで至れば最後、あの剣が彼女を貫くであろうことは想像に難くない。

だがそれを理解していてなお、レミリアは前へ進むことをやめない。必死の形相でありとあらゆる障害を跳ね退け、ただ妹のいる場所へと駆けていく。独り孤独に泣いている、たった一人の家族の元へ。

あと五メートル。

四メートル。

三、二、一。

そして、ゼロ。

眼前へと辿り着いた姉は、妹へと手を伸ばし。

破滅の剣は、持ち主の姉の腹を容易く貫いた。

「ゴメンね……」

驚愕と絶望の色を顔に浮かべるフランを、レミリアはそっと抱きしめる。不器用ながらもその抱擁には、彼女の精一杯の愛情が込められていた。

「私が弱かったから……。私が向き合えなかったから……。ずっと一人で……。辛かったよね……。寂しかったよね……」

弱さ。果たしてそう呼べるだろうか。彼女は彼女なりに妹を思いやり、憎悪の捌け口となることで彼女の心を守っていた。他人からの悪意を受け続ける。それは並大抵のことではない。苦行にも等しいそれをたった一人の家族の為、彼女は数百年耐えて来た。それ

は十分、立派な強さだ。

「でももういいの。あなたは一人じゃない。もう地下室で膝を抱えて過ごす日々はおしまい」

口の端から血を流しながらも、レミリアは笑みを浮かべる。額をこつんと合わせ、抱きしめる力を強めながら、

「今度は 私が守るから」

誓いの言葉を、告げた。

「お姉……、ちゃん……」

お姉様。その呼称は畏怖と尊敬の表れであり、同時に両者を隔てる距離の長さでもあった。あの日以来ずっとあった心の壁は 今ここに終焉を迎える。

瞬間、フランの身体から闇が溢れ出した。

過去を乗り越えたことで深遠の闇の介在する余地がなくなったのか、凄まじい勢いで闇が吹き出していた。だが闇はなおも拠り所を求め、ダークマター

フランの周囲を漂い取り入ろうとする。

その光景を見た魍月の脳裏で、撃鉄のような何かが弾けた。

「ぐっ、ああああっ!!」

レミリアは命懸けでフランを救った。その心を絶望から解き放った。なのになんだ？自分のこの様は。

紫に頼まれたのに、フランが泣いているのに、レミリアが死力を尽くしているのに、お前は地面に這い蹲って一体何をしている？

今はたかだが背と腕が削れた程度で突っ伏していい時ではない。立て。進め。解き放て。今すぐ一分一秒でも早くあの闇をどうにかしろそれは深遠即ち俺にしか出来ないんだからほら何してるんだ立てよ動けよ俺の身体動けよ動けったら

「文句なら後でいくらでも聞いてあげる。だから」

白熱する思考に亞愛の声という名の冷や水をぶっかけられ、魍月はハッと正気に返る。首だけ動かしてみれば魔力を集中させた足先を思いつ切り引いた亞愛がおり、

「頼むわよ!! 蒼衣!!」

全力で蹴っ飛ばされた。

もーちょっとマシな運搬方法があるだろうよと思わないでもないが、この際いいっこなしだ。もはや亞愛にも魍月を抱えて走るだけの余力はないだろうし、魍月は立つのがやっと。ならばこれが一番手っ取り早い。

「「シユヴァルツシルトの闇」よ　　！！」

スペルカードを取り出し宙に放り、魍月はそれを宣言。フランから溢れ出すそれよりもなお暗く昏い、深淵より出でし闇を喚び出す。

「てめえがなんでも引きずり込む深遠の闇だつてんなら　　！！」

それらを右手の一点に集中、空中で無理矢理体勢を立て直し眼前を見据える。狙うはフランの胸元　　紅き輝きを宿す珠。

フランの、心。

「悲しみも絶望も……！！全て食らい尽くせええええっ！！」

交錯する一瞬、絶叫と共に魍月は右手を胸元に突き込む。徐々に色付き始める心象世界の海を深く深く潜り、過ぎ去って行く記憶の映像の狭間を抜け、対象を探し当てる。

あった。

碧色の輝きを放つ、小さな小さな結晶。フランに宿った闇の源泉、全ての元凶。そのフランに拒絶され、輝きは徐々に失われている。あとはこの結晶に引導を渡し、終わりを始めるのみ。魍月はそれを力一杯掴み

砕き切った。

「っ！！がっ！！ごっっ！！」

一秒にも満たぬ間に体感的には数分近いマインドダイブを終え、現実へと戻る魍月。亞愛に飛ばされた勢いそのままに地面へとぶつかり、ごろごろと数メートル程転がりようやくやむ止まる。

痛む身体に鞭打ってどうにかこうにか動かし、魍月は姉妹の方へと視線を送る。二人はしばらく抱き合ったままだったが、やがて気を失ったのかバランスを崩しそのまま倒れ

「つと」

なかった。時を止めて移動したのか咲夜が間に入り込み、二人をしつかりと抱き留める。フランの肌からは黒い呪印が消えており、完全に決着が付いたのだと実感する。

と、安堵して気が抜けたのか。真名が再封印され蒼の瞳に戻った蒼衣の視界が色彩を失い、どんどん狭まりながら霞んでいく。最後に彼が見たものは、駆け寄って来る妹と母の姿だった。

……………少し寝よう。疲れた。

全身に纏わり付く疲労に身を委ね、蒼衣は自らの意識を手放す。頬に触れた優しい感触　おそらくアリスの手だろう　に懐かしさを覚え、そこで蒼衣の意識は完全に途絶した。

「……………気付いた？」

「……………ええ」

幻想郷、某所。無数の目が覗く隙間の世界で、二人の少女が言葉を

交わす。彼女達の視線の先には隙間からの映像ビジョン　蒼衣達に治癒を始める神綺の姿が映っていた。だが彼女達が見ているのはその光景ではない　虚空だ。

「蒼衣があゝの結晶を破壊した瞬間　　ダークマター 深遠なる闇がどこかに喚び出された」

紅白の巫女服を纏った片割れ　　三日前から姿を消していた博麗霊夢が、真剣な面持ちで告げる。そう　　蒼衣が暴走の原因であるあの結晶を破壊した瞬間、抛り所を失い霧散するはずの深遠なる闇が、ダークマター「一瞬で消え失せた」のだ。

いかに媒体を失ったとて深遠の闇、一瞬で消えるはずはない。本来なら風船が萎んでいくように、徐々に消えなくてはおかしいはず。だが現実はその対極　　辻褄が合わないのだ。

そして傍観者に徹していた二人は、それをしかと見届けた。結晶が破壊された瞬間漆黒の魔法陣が一秒にも満たぬ間展開され、深遠なる闇を吸収し掻き消えるその光景を。ダーク

「蒐集　　のつもりには大分お粗末ね」

再度その際の映像を式に映させながら、もう一人の少女　　八雲紫がしてやられたと呟く。妖怪のエネルギーを供物としているのか、はたまた何か条件　　制約と言ってもよい　　があるのか。いずれにせよこんなやり方では、目的の達成には十年以上掛かる。

「でも上手いわね。常人には臆げにしか察知出来ない深遠なる闇をダークマター隠れ蓑に、吸収したエネルギーを集めるなんて」

「こいしの疲労と消耗は戦闘が原因かと思っていただけ……、どうやらそう簡単な話じゃなさそうね」

だが速度を代償に、この異変の仕掛け人は誰にも見付からぬよう巧妙にエネルギーを集めていた。だからこそ妖怪の賢者さえ欺いていたのだが、博麗の巫女の目はごまかせなかったようだ。

そしてこの発想力。暴走を囿にしてまでエネルギーを集めるこの手口。明らかに霊夢や紫 幻想郷の守護者達の目を意識して組まれたもの。元凶 この異変を起こした人物は、どうやら一筋縄ではいかないようだ。

「しばらくは様子を見るわ。蒼衣が戦う時にまた同じことが起きたら」

「消えた先を追って元凶を叩く。でしょ？」

スキマで生み出した椅子に腰掛け、紫が静かに呟きを零す。続けて霊夢も言葉を紡ぎ、ふわりと宙に腰掛けながら不敵な笑みを向けた。幻想郷でここまで大規模な異変を起こした者 興味が湧かない訳

がない。

「今の内に好きなだけ笑ってなさい。すぐに尻尾を掴んであげるわ」

紫も笑みで同意を返し、スキマの映像を切り替える。幻想郷の全土を隙間なく映し出し、異常を感知したらすぐさま伝えるよう式に命じる。必ず見付け出してみせる。　　獰猛な輝きを灯した紫の瞳は、雄弁にそう語っていた。

この世のいずことも知れぬ、暗く黒く広い場所。格子状に白いラインが走る、透明な足場の続く巨大な空間。その最奥の神殿のような建築物の石段に、一人の少女が腰掛けていた。

背まで届く金の髪に、悪魔を思わせる一対の大きな紫翼。頭には赤いリボンと花の髪飾りが付いており、左の頬には赤い星のマーク。この場の神聖さ　　幻想的な光景と相俟って、彼女が真正正銘の悪魔だと言われても信じられる、そんな風に思える少女であった。

「……あ、反応消えた」

「これで二度目、ですか」

そんな少女が気が付いたように口を開くと、神殿の奥から新たな少女が現れる。ゆったりとした白いベルスリーブと、タートルネックが特徴的な青い袖なしワンピースを着ている。青みを帯びた長い銀髪に糸目、純白の六枚翼。悪魔のような少女との対比も相俟って、天使のような印象を受けた。

「しかも前回からまだ一週間。尋常ではありませんね」

天使のような少女の言葉に同意して、音もなく現れる三人目。どこか浮き世離れた二人の少女達とは違い、彼女はまだ一般的な服装だった。……メイド服を一般的、と言えるかどうかは各々の主観によるが。

ロングスカートが特徴的な赤いメイド服に、白いエプロンを着用。メイドカチューシャが付けられた髪は長い金髪で、吊り目がちな瞳も金。クール？涼やか？否、瀟洒。心身に従者としての心構えを叩き込んだパーフェクトメイド。そんな印象を与える少女だった。

「しっかしなんで今になってホイホイ使っちゃってるのかねえあいっ」

「そうするに足るきっかけがあった……、ということでは？」

「……行っっ」

悪魔の少女が頭の後ろで腕を組みながら、納得がいかないとばかりに言葉を漏らす。天使の少女が首を捻りながら発言するが、それが憶測だとわかつているのかその口調に自信はない。そんな二人の禅問答を断ち切ったのは、今まで一度も口を開かなかった四人目の少女の声だった。

背は低い。天使の少女とメイドの少女が高めというのもあるが、それを差し引いても低い部類に入る。一見すると巫女服のようにも見える金色の襦袢と袴を着用した、この場で唯一和装の少女。セミロングの金髪は後頭部でポニーテールに束ねられ、前髪に隠れている左目は赤。ある意味この場において、最も浮き世離れた少女だった。

「ここで話しても真相はわからない。なら確かめに行くのか一番早い」

「……ユウ、本気ですか？」

金色の少女　ユウの断言するような口調に、メイドの少女が咎めるような声を上げる。だが決意は固いのか、ユウの瞳には強い意志の光が見て取れた。

「夢子の力があれば不可能ではないし、あの人ならきっとそう思うと思う」

ユウがメイドの少女　夢子を見据えながらそう述べる。確かに『この世界』はある術で他の世界から隔絶されているが、夢子が生来持つ特殊な能力チカラがあれば出ることはさほど難しくくない。

が、夢子にとつて重要なのはそこではない。何より効いたのは、ユウが発した『あの人』の存在。この世界を生み出した神の如き存在否、まさに神だ　彼女なら、何よりも息子や娘達、この世界の民を思いやる彼女なら、ありとあらゆる障害を越えてでも彼の元へ向かうだろう。

「……仕方ないですね」

「な、サリエル!？」

自らの職務と主の理念　天秤が揺らぎ迷いを見せる夢子を後押しするように、天使の少女　サリエルが口を開く。まさか彼女が賛同するとは思っていなかったのか、夢子の声には驚愕の色が強く宿っていた。

「あのユウがここまで積極的になったことなんて数える程しかありませんし、私も彼のことが気に掛かります」

「ちなみにあたしは行く気満々だよ?」今の幻想郷』にも興味ある

し」

「エリスまで……」

サリエルの言葉に悪魔の少女 エリスまでもが便乗し賛成した。ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべるエリスに、夢子は額を押さえ深々と溜め息を零す。

だが、趨勢は決した。

「……わかりました。念の為地獄から『あの方』に来てもらいましょう。さすがに私達全員が魔界を留守にする訳にはいきませんし、ね」

「さすが夢子！！なんだかんだで最後にはデレる！！」

しかし四人が四人共この世界^{魔界}を留守にするのは良くない。代わりにと代案を提案する夢子に、抱き着きながらエリスが一言。しようがないなあと言わんばかりの笑みを浮かべていた夢子の顔は、しかしエリスの最後の一言により一瞬で絶対零度の冷たさを宿す。

「刺しますよ？」

「じゅめんなさい」

どこからともなく取り出した短剣を片手に複数構える様を見て、エリスは光の速さで土下座。目が笑ってない上凄まじいまでの作り笑顔を浮かべる今の夢子を見たら、誰であろうとエリスのようになるだろう、絶対に。誰だって命は惜しい。エリスは別に死にたがりでもマゾでもないのだから。

「とは言ってもすぐには出られません。仮にもあの方と妖怪の賢者、先代が全力を以て張った結界ですし、抜くのに時間も掛かります」

溜め息と共に短剣を虚空に掻き消し、夢子は上空を見上げる。夜の暗闇とは違う異質な黒で覆われた天には、しかしよく目を凝らせば薄い膜のようなものがある。あれこそが魔界、いや、幻想郷の揺らぎの中にある全ての世界を覆う大結界 『神性博麗大結界』だ。

そして 夢子が破るべき対象でもある。

「いつでも出られるよう、準備だけしておいて下さい」

「うん」

「はいはい」

「わかりました」

三人に声を掛けておき、返事も聞かぬ間に夢子は作業を開始する。結界を破壊せず通り抜けるだけの隙間を生み出す。鍵の掛かった小箱の中身を壊さずに取り出すのとそう変わらない難題を解くには、夢子の能力と高い集中力、その維持が必要不可欠だ。別に脱出は出来なくとも構わない、せめてあの方とコンタクトが取れさえすれば

「神綺様……、アリス様……、蒼衣様……」

最後に夢子は三人の顔。自らの主とその娘、養子の顔を思い浮かべる。それさえ心の中になれば、決して従者は屈しない。意識を切り替えた夢子は、結界抜きの作業に没頭していった。

いずことも知れぬ幻想郷の某所。暗い昏い闇にこだまするのは、耳障りな少女の笑い声だった。

「いやあ、想像以上だよ姉弟。まさか悪魔の妹まで破るたあな」

くつくつくつと笑いを噛み殺しながら、玉座に腰掛けた少女は愉快げに笑う。無造作に散らされた長い黒髪に、獰猛な獣を思わせる鋭い瞳。身体は漆黒のドレスに覆われ、その上から漆黒のロングコートを羽織っている。闇の中から生まれた　　そう形容するのに相応しい少女だった。

「笑いごとではないぞ魅月^{みつき}。このままではプランに支障を来す。どうするのだ？」

そんな少女の様子がカンに障ったのか、少し離れた場所に座っていた青年がカツカツと音を立てて歩み寄って来る。銀髪に黒スーツという外見はどこか異常さを感じさせ、縁無し眼鏡の奥から覗く金の鋭い双眸がその印象に拍車を掛ける。猛禽類を思わせる、不気味なオーラを纏う青年だった。

「どうするもこうするも計画は続行するさ。オレ達の宿願　　忘れ
たとは言わせねえぞ？」

「魅月の言う通りだ」

青年の言葉に魅月と呼ばれた少女が軽く言い返すと同時、闇の中からまた一人黒を纏いし者が現れる。漆黒のゴスロリ風ドレスを纏った、十の半ばにも満たないような少女だ。煌めく銀髪を靡かせ颯爽と歩く様には気高さが宿っており、碧色の瞳には苛烈と表現してもいい力強い意志が込められている。見た目に似合わぬ重厚なオーラ

を纏う少女は、青年の方へと向き直る。

「あと十人も取り込めば、ディジエネレイト・ケラール 堕ちた聖杯は完成する。過ぎた慎重は臆病と変わらんぞ？この千載一遇の機をみすみす逃すつもりは、我等の誰にもない。そうだろう？たかせ 貴瀬」

「……それもそうだな」

「で、今後の方針はどないするん？リーゼロッテの言うことがほんまやとして、十人に目星とか付いてるんか？」

少女の言葉に納得したのか青年 貴瀬も素直に引き下がる。同時にそのタイミングを窺っていたのかまた新たな黒が現れる。漆黒の和服で身を包んだ、長い茶髪を持つ少女だ。紫の瞳は笑みを含みながらも隙はなく、周囲を舞う黒い揚羽蝶達が不気味さと神々しさを煽っている。背を見せたら一瞬でやられる そんな感情さえ抱かせる程に。

「私の目を疑うつもりか？」

「落ち着けリーゼロッテ。現時点で使えそうなのは五人だな……。そいつらからどれだけ搾り取れるかにもよるが、ノルマには届くだろ」

亡霊のような少女の問いに、ゴスロリの少女　リーゼロッテが声を荒げる。それを仲裁しながらしばし思考すると共に、魅月はすらすら答えた。重要な言葉を省いた必要最低限の会話は端から聞いているとちんぷんかんぷんだが、当の本人達には余すことなく伝わっていた。

「油断は禁物ですよ、魅月さん」

と、亡霊のような少女の陰に隠れる形となっていた、もう一人の少女が姿を現す。当然というかなんというか、今度の少女もまた黒装束だった。

リボンで飾られた紫色の長髪に、黒いワンピースのような服。巫女服のような袖があるが、しかし腋は空いている。何より目を引くのは、背にある白い六枚翼だ。霞み掛かって見えるその翼は、しかし少女に妖精のような印象を与えていた。

「わあってるよキリノ。瑠璃^{るり}、そっちはどうだ？」

「仕込みは完了。後は時期を見計らって発動、ってとこやな」

妖精のような少女　キリノの頭をわしゃわしゃと撫で、魅月が瑠璃　亡霊のような少女へと振り返る。瑠璃は宙を舞い戯れる黒揚羽蝶達を見遣りながら、万事問題ないとニッコリ笑みを浮かべた。

「ワンコ達は生贄探しだったけ？毎日大変だなあ」

「私達が表立って動けないからね」

満足げに頷いた魅月が背もたれに寄り掛かりながら、独り言のようにそう零す。リーゼロッテの補足を受けつつ、魅月は今ここにいない四人へと思いを馳せる。心配はしない　彼女達を信頼しているからだ。

「まあそれももう終わりだ。ワンコ達が戻り次第本格的に動くぜ。スキマ妖怪があちこち嗅ぎ回ってるし、準備は整いつつある。ここで二の足踏んでたら全部終わりだ」

思考を断ち切った魅月が静かに呟き、玉座の上へと立ち上がる。リダー格の少女の行動に、自然と全員の視線が集まった。

「聞くぜお前ら！！望みはなんだ！？」

ワールドエンド
世界終焉！！

ワールドエンド
世界終焉！！

ワールドエンド
世界終焉!!

「オレ達はなんだ!？」

アウエンジャー
復讐者!!

アウエンジャー
復讐者!!

アウエンジャー
復讐者!!

「我等滅びの担い手なり!!」

シヤッツメント
Judgment!!

「派手に行くぞお!!」

ジャッツ
Jud!!

広くもなく狭くもない空間に、五人の叫びが木霊する。絶望。怨嗟。

憤怒。字面通り彼女達の声には、ありとあらゆる負の感情が込められていた。まるで王の圧政に抗う、反乱軍のようだ。

事態は至って静かに、しかし確実に進み始めていた。

第二十三話「姉妹」（後書き）

決着、そして徐々に動き始める各勢力。

どうなることやら……、テンション上がってキター！

次回、紅魔編集結。

……こ、今度は伸びないよ！（汗

第二十四話「夜明け」(前書き)

お待たせしました、二十四話です。最近進みが速いこと速いことW
反動って怖いね！WISどつなるやら！W
ではどーぞー。

第二十四話「夜明け」

「……………」

目覚めは割と、快適に近い方だった。直前までの記憶がないことを除けば、健康と言って差し支えない。柔らかなシーツから離れることにはかなりの抵抗を覚えながらも、蒼衣はゆっくりと身を起こした。目に入ったのは紅い部屋。見覚えがあるのはおそらく客間だからだろう。……まあ、『客間』なのだから当然と言えば当然のだが、蒼衣達が滞在していた部屋の面影が見て取れる程に似通っていた。

「気が付きました？」

そんな紅に包まれた部屋の中、たった一人そこにいた人物が口を開く。細身の長身に黒い執事服を着こなした青年。確か名は

「……………あざいむ、だっけ」

「ええ。気分はどうですか？」

「……………？別に問題ないけど……………、っ！？」

確かめるように呟く蒼衣に肯定を返しつつ、体調を気遣うあざいむ。言われて自らの状態を確認し答えた蒼衣は、ようやくそれを思い出す。

闇。炎。銀。紅。槍。そして発現と戦いと、二人の吸血鬼

「レミリアとフランは!？」

「落ち着いてください。二人共無事です。今は一緒にお嬢様の部屋で寝ていますよ」

思わず身を跳ね起こす蒼衣の肩を押さえ留めつつ、あざいむは端的に事実だけを告げる。そつかと安心したように脱力する様に苦笑を漏らし、袖から銀の懐中時計を取り出す。文字盤を一瞥すると同時に、彼はタイを解き襟元を緩めた。

「…………ふう、やっぱり堅苦しいのは疲れるな」

首をコキコキと鳴らし呟きを漏らすあざいむに、蒼衣は目を丸くする。別に蒼衣自身はとやかく言うつもりなどないが、執事が曲がりなりにも客人の前で寛いでいいのだろうか？ 咲夜辺りが聞いたら血相を変えて飛んで来そうなものだが

「あ、今深夜四時なんで時間的にはオフなんです」

「……バイトのシフトかよ」

視線に気付いたのかそう答えるあざいむに、思わず蒼衣は半目で答えを返す。確かに彼の仕える対象は吸血鬼であり、しかし彼自身は普通の人間だ。確かに人間という生物の習性上、昼も夜もぶっ続けで働くには辛いものがある。しかしなんだろう、この脱力感。納得出来るのに納得出来ない。

「あんたが診てくれてたのか？」

「いえ、俺は見てただけです。最初はアリスさんやら魔理沙さんやら拳句の果てにはお嬢様方まで来てましたが、さすがにそれは辛いかと思ひまして」

気を取り直し尋ねる蒼衣に、あざいむは苦笑と共に答えを返す。目を覚ました時に周りが女性ばかりで、しかも全員が全員気遣うような視線を向けている。そんなもの光景を想像して、蒼衣は嫌な汗がダラダラと背を伝うのを感じた。心配してくれるのはありがたいが、そんな中で目覚めるのは正直御免被りたい。

「……助かった」

「いいんですよ。女性ばかりの中に混じるキツさはよくわかってますから」

素直に礼を述べる蒼衣に対し、気にするなとあざいむは苦笑と共に手を振る。名も無きメイド妖精を除いても、女性七人に対し男性は僅か二人。それは誰よりもここで働くあざいむがよくわかっている。しかし

「……………それでも、ここで働くのか？」

「……………憧れたんですよ、咲夜さんに」

そんな中で働いていくのは、想像以上に辛いはずだ。それでもなおここに留まるのか。言外にそう尋ねた蒼衣の言葉に、あざいむが返したのは簡潔かつ明快な答えだった。

「たった一人の相手にあそこまで親身になれる人なんて、世界中探してもそうはいません。恋とは違う想いの形。忠誠ってヤツですかね。それを見て思ったんです。ああ、俺もこの人みたいになりたいなああって」

そう呟きながら過去を懐かしむように、どこか遠くを眺めるあざいむ。彼の瞳には純粹に、十六夜咲夜というただ一人の女性への敬意

と憧憬があつた。

「……なんかいいな、そういうの」

「コウさんやりんさんも似たり寄ったりですよ。みんなこの館の主や従者の気高さとか絆とか、カリスマみたいなものに引き寄せられて来たんです。……りんさんはお嬢様に命を救われたってオプショ
ン付きですが」

自分とそう変わらない年齢の少年のひたむきさに触れ、蒼衣は素直にそんな感想を零す。あざいむは淡い笑みと共にそう答えるが、蒼衣はそんな彼が少しだけ羨ましかった。

何故なら自分には、^{蒼衣}そんな目標なんてなかったから。

「話が脱線しちゃいましたね。蒼衣さんやお嬢様方の傷は、全部神綺さんが治してくれました。ついでに荒れた庭とかも直してくれたので、美鈴さんは感動のあまり泣いてましたね」

脇道に逸れた話題を戻すあざいむの声に、蒼衣もハツと我に返った。無為な思考を断ち切りあざいむとの話に意識を集中させる。どうやら前回同様、傷は神綺が治してくれたようだ。激痛は余韻すら残さず掻き消え、背も腕も問題なく動く。つくづく良い母親を持ったなと、蒼衣はその幸福を噛み締めた。

「アリスさんは魔理沙さんとパチユリー様と大図書館。神綺さんは隣の部屋で就寝中。咲夜さんはお嬢様方の部屋。美鈴さんは門へ。亞愛さんはテラスに。こんなところですかね」

話を本筋に戻したあざいむが、手短に皆のその後を伝える。ある意味妥当と言えば妥当な組み合わせと行動に、蒼衣も頷きだけを返した。……さて、どうしたものか。

「……とりあえず図書館だな」

とは言っても、既に決まっているのだが。

「あ、やっぱりそうですか?」

「散々無茶やらかしたから、早く顔見せて安心させてやらないとな」

自分の思考が見透かされたことに気恥ずかしさを覚えながらも、苦笑と共にそう答える蒼衣。最後にもう一度礼を述べ、ベッドのシーツ交換や掃除の為に残るらしいあざいむに背を向ける。部屋から退出し後ろ手に扉を閉め、蒼衣は一路大図書館を目指し歩き出した。

時は遡ること数分前。紅魔館地下大図書館。奥まった場所にあるテーブルでは、三人の魔女によるお茶会が開かれていた。……いや、正確には二人が一人を無理矢理引っ張って来た、なのだが。

「で、そこんとこどうなんだ？」

「……何がよ？」

引っ張って来た張本人であるところの魔法使い 霧雨魔理沙が対面に座るアリス 引っ張られて来た張本人を見遣る。兄である蒼衣が心配で離れようとしない為強引に連れて来たのだが、そのせいかさつきからアリスの顔は不機嫌一色に彩られていた。カップを手を取っては飲まずに置き、ちらちらと地上 蒼衣の寝ている客間の方へと視線を送っている。既にこの光景を見るのも数十回目だ。

「何って蒼衣のことよ。あなた、彼のこと好きなの？」

気もそぞろなアリスを見兼ねたのか、対面のパチュリーが単刀直入に あまりにもストレート過ぎる質問をぶつける。アリスの動揺は凄まじく気付かぬ内にカップを落下させ、上海がとっさに受け皿でキャッチしなければ紅茶は床にぶちまけられていただろう。……

ベタというか露骨というか、あからさま過ぎる反応だった。

「な、な、なななな何言ってるのよ!？」

顔を真っ赤にしテーブルをバンバンと叩きながら声を荒げるアリス。そんな友人の様子にこれみよがしな溜め息をつき、魔理沙とパチュリーは顔を見合わせた。

「何って……、なあ？」

「しょっちゅう目で追ってるし、妹様と遊んでると不機嫌になるし。どう見ても……、ねえ？」

「　　っ!？」

ちらつと確認するようにこちらを見遣りながらそう告げる二人の言葉に、アリスの頬が更に赤くなる。言い返してやりたいところだが、凶星だった為とっさの反論が出来ず口ごもってしまう。

しかしそれも仕方ないだろう。想い人と十年ぶりの再会を果たしたというのに、いきなり訳のわからない異変に巻き込まれたのだ。地霊殿に行つてはこいしにじゃれつかれ、紅魔館に行つてはフランに懐かれ、ロクに会話すら出来ていない。確かに二人共深遠なる闇にタクマター感染していた為放置する訳にはいかなかったのだが、理性で感情が

収まるようなら苦労はしない。アリスの嫉妬はある意味、当然のことだと言えた。

「べべ別にそんなんじゃないわよ！！私はただ……」

「ただ、何なんだぜ？」

どうにかこうにか月並みな反論を口にするも、魔理沙の言葉とニヤニヤ笑いに遮られ威勢をなくしてしまうアリス。これまでも魔理沙の強引な理論や言葉には散々苦労させられて来たが、今の状況と比べればその数千倍はマシだと、心底そう思える。

「そのニヤニヤ笑いをやめなさい！！だから私は別に……」

「じゃあ私ちょっと告白してみようかしら？」

なんとか言い返そうとするも、今度はパチュリーに横槍を入れられた。別段好きでもない癖に いやまあさすがに友人としての好意はあるだろうが そんなことを囁く悪魔パチュリーに、アリスは頭が沸騰しそうになる。例え冗談だとわかっていても、その発言はアリスにとって禁忌中の禁忌 劇薬に等しかった。

「ああもう……！！ちゃんと話聞きなさいよ！！」

『オツケー、二人の馴れ初めの話からじっくり聞かせてもらおうじゃないか』

半ば自棄になりそう叫ぶも、綺麗にシンクロしたカウンターを叩き込まれアリスはぐうの音も出さず口を閉ざす。円形のテーブルに三角形を描くような配置で座っている為、二人の視線から逃れることは出来ない。

言葉に詰まるアリスを見て、魔理沙とパチュリーはニヤニヤ笑いを更に加速させていく。どうやら二人の加虐心に火が点いてしまったようだ。が、実質アリスにとっては迷惑以外の何物でもない。苛立ち、気恥ずかしさ、様々なメーターが色々と吹っ切れそうだ。

「だから私と兄さんは別にそんなんじゃない……」

「俺がなんだって？」

ともあれこの場を切り抜ける為口を開くも、アリスの言葉は三度遮られた。それも予想だにしない背後から、よりもよって当の本人の声で。

「兄……、さん……？」

「おう、一体どうし　　うおう!?!?」

油の切れた機械もかくやという低速で振り返った視線の先には、至って自然体で立つ兄の姿。それを確認した瞬間、アリスの頭の中は完全に真っ白になった。別に比喻でもなんでもない、無事に対する安堵と傷の心配がその他の感情を上回っただけのことだ。

「大丈夫!? 怪我とかない!?!?」

「落ち着けそれと苦しい。母さんがバツチリ治してくれたから問題ない」

思わず詰め寄り襟首を掴む妹を宥めつつ、蒼衣は気楽にぶらぶらと手を振って答える。魔弾を受けた後遺症はどこにも見当たらず、アリスは安堵の息を吐いた。

「よかったあ……………」

「……………心配かけたな、悪い」

決して神綺^母の力を信頼していない訳ではない。だがやはり自らの目で確認すると、より一層安心感を得られる。割と後先を考えない兄

にはヒヤヒヤさせられたが、本当に無事でよかった。上海も長らく会えなかった蒼衣の登場を無邪気に喜び、定位置である肩の上に待ち焦がれていた時間の到来にアリスは口を開こうとするが

「おお、あついあつい」

「こりゃ確定だな」

水を差すような魔女二人の茶化す声を聞いた瞬間、アリスは修羅と化した。

「何か言った？」

『いいえ何も言ってますんアリス様』

恐ろしいくらいの作り笑顔を浮かべ、どす黒いオーラを放出しながらそう問い掛けるアリス。反射的に土下座する魔理沙とパチュリーを見遣り、満足そうに頷く悪魔が一人。蒼衣にしっかりと背を向けている辺り、全く抜け目がない。幸いなことに前後の脈絡もわからない蒼衣には理解出来なかったようだが、見られたら確実にドン引きモノである。恋する乙女恐るべし。

「魔理沙、それにパチュリーも。迷惑かけて悪かったな」

ともあれ蒼衣も空いていた椅子に腰掛け、魔理沙とパチュリーに頭を下げる。知人の暴走、紅魔館の損壊、そして蒼衣の重傷。どれも解決したとはいえ、気苦労を掛けっぱなしだ。

「こっちのセリフよ。元はと言えばレミイ達の関係の歪みを放置していた私達が悪いんだから」

「蒼衣は十分頑張ったんだ、気に病む必要なんかないぜ」

が、パチュリーも魔理沙も咎めることなく、笑顔でそう答える。二人からすれば蒼衣の気にし過ぎなのだが、蒼衣にとってはその程度で済まされない。自らの力の源泉である深遠の闇。この異変の原因を操れる者としては、周囲にかなりの心苦しさを覚えるのだ。苦勞人である。

「で、これからどうするの？」

「とりあえずは顔見せ。あとあいつらも心配だから様子見に行くよ」
後ろ向きな話題を打ち切るべく、パチュリーが蒼衣に質問を投げ掛けた。意図を察したのか蒼衣も即座に乗っかり、ここに来るまで考えていたことを口にする。一通りの挨拶が終わったその暁には、も

う一つの目的を果たさねばならない。

「確か次は人里だろ？ 霊夢も紫も忙しいみたいだし、私が案内してやるぜ」

「サンキユ。助かるよ」

そう、目的とはまさにその件のことだ。本来里の人間を助ける為に呼ばれた蒼衣だが、地霊殿や紅魔館でのごたごたがあった為十日も過ぎてしまっている。いかに暴走の危険性が低いとはいえ、放置しておけるような問題ではない。急を要する上幻想郷の地理に明るくない蒼衣にとって、魔理沙からの申し出はこの上なくありがたかった。

「……変なことしたら承知しないわよ」

「想像にお任せするぜ」

アリスが威嚇するような視線を向けるも、素知らぬ顔で紅茶を口にする魔理沙。アリスに軽く発破を掛ける程度の考えだったのだが、どうやら想像以上の効果を発揮したようだ。下手すれば刺されかねない。

「じゃあちよつと荷物纏めとくか。蒼衣、アリス、また後でな」

アリスの視線から逃れる意味も含めて、魔理沙が立ち上がり自らに宛てられた客間の方へと歩き出す。牽制するように視線を送っていたアリスも、それでようやく警戒を解いたようだ。

「知識が必要ならいつでも大図書館（こく）を頼ってちょうだい。出来る限りの手助けはするつもりよ」

「何から何まで悪いな……」

空になったカップを置きながらそう告げるパチュリーに、蒼衣は済まなさそうな表情で頭を下げる。そんな蒼衣の言葉を当然のことよと呟いて受け流し、笑みを浮かべたパチュリーはゆっくりと右手を差し出した。

「じゃあね、蒼衣。またいつか」

「……ああ、またいつか」

唐突な行動に一瞬面食らったものの、すぐさま気を取り直した蒼衣も笑みと共に右手を差し出す。細く色白いパチュリーの手と至って普通な蒼衣の手が交錯し、数秒の間を置いて離れた。

それで終わりだと悟ったのか、蒼衣が背を向け大図書館を後にする。アリスも即座に後を追いつ、残されたのは静寂とパチュリーだけ。

「……賑やかなのも、案外悪くないのかもね」

本来の姿を取り戻した大図書館に一抹の寂しさを覚え、冗談混じりに独り言を零すパチュリー。静けさと本さえあれば生きていけると自負する、知識と日陰の少女らしからぬ発言だった。

ついこの間までは、そんな風に思えなかったのにね。

くすくすと笑いを漏らし、パチュリーもゆっくりと立ち上がる。たまには普段と違う　あまり手を出さない本を読んでみるのもいいかもしれない。例えば、そう

恋愛小説とか、ね。

ありえない自分の思考に再度笑みを漏らし、魔女はふわりと宙に浮く。目的の本を手取るべく、大図書館の主は広い庭の中をふわふわと飛んで行った。

テラスに出てみたものの姿が見当たらない為、蒼衣は重力制御を行
使しつつ床を蹴る。気配を感じる方向　時計塔の屋根の上へと近
付くにつれ、一人の少女の姿が見えて来た。

夜風を受けはためくのは、深い黒のロングコート。輝く月の光に照
らされ、紫の瞳は煌めきを宿している。最強の吸血鬼にして夜の王
赤夜亞愛は一人月見を洒落込んでいた。

「あら、おはようロリコひでぶっ!?!」

気配に気付いたのかそう声を掛けてくる亞愛を、蒼衣はほぼ反射的
に殴り飛ばす。何か大事なことを忘れていた気がしたが、今の亞愛
の一言で完全に思い出した。

「さつきはよくも散々言ってくれたな?あ?深遠なめとんのかブラ
ックホールにぶち込んで塵以下にすんぞこのバカーシャ」

「ちよっ、待つ、死ぬ死ぬ死ぬホントすいませんでした反省してま
す二度と言いません」

驚く程感情の込もっていない平坦な声を発しながら、容赦なく往復
ピンタを叩き込む蒼衣。光の消えた蒼い瞳にさすがにヤバイものを
感じ取ったのか、亞愛はただひたすらに謝罪。喧嘩する程仲が良い

とは言うが、ここまで来るともはや別種の何かに思えてくる。例えばそう、敵の敵は味方とか。

しばらくそんな光景が続いた後、満足したのかやれやれと溜め息をつきながら蒼衣が亞愛を解放する。あれだけのビンタを叩き込まれておいてなお、亞愛の頬は赤くなってすらいない。吸血鬼の再生力その力の一端が垣間見える光景だった。……もちろんお互いそんなことは心の底からどうでもいいのだが。

「……その調子なら全く問題なさそうね、ミスター・ロリペドフィン」

「……いい加減キレるぞ？」

性懲りもなく即座にからかいの言葉を投げる亞愛に、「冗談抜きで視線で人を殺せそうな眼光を向ける蒼衣。冗談よと亞愛は笑いと共に否定するが、蒼衣はムスツとした表情でそっぽを向いたままだった。

「あの後一回起きて来たけど、二人共特に問題はなさそうよ。あの馬鹿げた力の気配もないし、姉妹仲も良好そのもの。すぐに昔みたいな関係に戻るわ」

「……そうか」

それでも蒼衣が欲しい情報をしっかりと話してくれる辺り、抜け目がないというか嫌らしいというか。後で顔を出しに行くつもりだったが、何の問題もないと聞いて安心した。最低限のやるべきことは果たせたらしく、蒼衣は安堵の溜め息をつく。

「ねえ、あなたはその後どうすんの？」

やがて亞愛が珍しく、本気で気遣うような視線を向けて来る。先程の戦闘でも大分傷付いていたことから、ふと不安を抱いたのかも知れない。

彼の優^{おほ}しさが、いずれ破滅を招くのではないかと。

「……夜明け前にはここを出て人里に向かうよ。いい加減紫さんに頼まれた約束を果たさないとな」

「……私はしばらく紅^こ魔館に残るわ。どうせ当てもやることもないし、ここなら退屈しなさそうなもの」

脳裏を掠めた馬鹿な考えを切り捨て、蒼衣は端的にそう答える。大図書館でも言っていたが、人命が掛かっている以上早いに越したことはない。夜明けと言わず準備が整い次第、すぐにでも出るつもりであった。

一方亞愛の選択は滞在。曲がりなりにも暴走した後の感染者から離れるのは良くないのだが、地底程遠くはないし亞愛がいれば大抵のことは何とかなる。蒼衣の打算に近いその意図を、しかし亞愛はしっかりと汲んでくれたようだ。……もとより、あの亞愛がここから去る訳などないのだが。レミリアイジリ的な意味で。

「何かあつたらすぐ呼びなさい。出来る限りは力になるわ」

ともあれこれで後顧の憂いは消えた。そう安堵する蒼衣の耳に、信じられない言葉が飛び込んで来る。思わず振り返った先には手をひらひらと振る亞愛がおり、

「フラン妹分を助けてもらった借りを返すだけよ。別に惚れたとかじゃないから安心しなさい」

「……好きですとか言われたらまず正気を疑うかお前を殴るから安心しろ」

「それはそれでムカつくわね……」

まあそんなことだろうと予想していた蒼衣が素っ気なく返し、亞愛は亞愛で怒るふり。やはりこの二人は馴れ合うより、どつき漫才のような付き合いの方が性に合うようだ。

やがて亞愛が立ち上がり、蒼衣に右の手を差し出す。ぽかんとした表情を浮かべる蒼衣に苦笑し、亞愛は口を開いた。

「三日だけどそれなりに楽しかったわ。いつかまた会うまで元気にしてなさいよ、蒼衣」

「……こっちのセリフだ。うっかり能力切って灰になるなよ、亞愛」

蒼衣もまたゆっくりと立ち上がり、亞愛とハイタッチを交わす。快音が月下の空に響き渡り、それが二人の絆の強さを表しているようにも思えた。

かくして一度交わった二人の道は、しばらくの間分かれることとなる。

最後の目的地 レミリアの部屋へと辿り着いた蒼衣は、相も変わらず豪華な扉を見上げ様々な感情がないまぜになった溜め息をつくともあれ礼儀としてノックをすると、どうぞという声が返って来た。予想通りの展開に苦笑を漏らしつつ、蒼衣は静かに入室した。

「蒼衣様でしたか。お身体は大丈夫ですか？」

内で蒼衣を出迎えたのは、十六夜咲夜その人であった。だが蒼衣は彼女と対面した瞬間、思わず絶句し失礼だとわかっていてもマジマジと彼女を眺めてしまう。

「……………どうかしましたか？」

「いやまあ……………、なんつーか……………、何かあった？」

さすがに疑問を抱いたのかそう問い掛けて来る咲夜に、蒼衣はどうかそれだけを返す。よくよく思い出して欲しい。咲夜は当初、蒼衣に対し多少風当たりのある態度を取っていたことを。

深遠だの異変だの厄介の種を持ち込み、彼女の主を危険に晒したのだからそれは当然。むしろ嫌われて然るべきだと思っていたし、追いつかない方が不思議なくらいだ。まだ蒼衣が人であった頃は能力のせいで疎まれていた為、嫌われるのには慣れている。だからこそこんな風に。急に手の平を返されたように好意的に接されるのが、蒼衣には不思議であると共に凄まじい居心地の悪さを覚えていた。

「いえ、私の中で蒼衣様の評価をただの客人から準主人格に変更しただけです」

「どっぴいっことだよ……」

実のところを言えば重傷を負ってなおレミアを庇ったことや、倒れる寸前まで全力を尽くしたこと、何よりフランを救ったことが彼女の中で好感度アップに繋がっていたのだが、蒼衣がそれを知る由もない。下手に気遣われない分、以前の方が良かったなあと蒼衣は後ろ向きな思考。しかし意味はあんまりない。

「……頼むから普通に話してくれ。なんかすげえ違和感が」

「そうですね？……残念です」

外見といい喋り方といい夢子を想起させるのでそう頼むと、咲夜は心底残念そうな表情を浮かべる。冷や汗ダラダラの表情で咲夜に振り返るも、冗談ですわと彼女は至って涼しい顔。……態度の軟化で気付くのが遅れたが、こちらが彼女の地なのだろうか。

「お嬢様方ならあちらで就寝中よ。あれだけ暴れ回った後だからぐっすり寝てるわ」

真面目モードに切り替えたのか、咲夜が部屋の奥を視線で示した。そのギャップに戸惑いながらも、蒼衣は言われた方へと歩みを進める。

そして、蒼衣は二人の天使を見た。

大きな天蓋付きベッドに、二人の少女が眠っている。片や青みを帯びた銀髪の少女、片や煌めきを宿す金髪の少女。仲良く並び互いの手を取って、姉妹は幸せそうに安眠を貪っていた。寝息は激闘の余韻を感じさせない程穏やかで、見る者に最上級の癒しを提供してくれる。

何よりも二人の距離　姉と妹を隔てていた壁の消失により、二人の在り方に違和感がない。以前なら二人が並んだところで歪な違和感しか感じなかっただろうが、今となっては二人一緒にいることが当然に思える。世界中の絶景を束にしても敵わない　最高の風景がそこにあつた。

「……数百年ぶりなんだろうな、この光景も」

「でしようね」

時の概念すら忘れそうになりながらも、蒼衣はそう眩き感覚の網を広げる。姉妹共々全力を以て解析しても、あの異常な闇の気配はない。咲夜の声に頷きを返し、蒼衣はホッと安堵の溜め息をついた。

これで、心置きなく行ける。

「準備が整い次第ここを出る。二人はこのまま寝かせといてやる。」

「別れの挨拶もなしで？きつと悲しむわよ？」

「別に幻想郷からいなくなる訳でもないし、会いたきゃいつでも会えるだろ。」

蒼衣の静かな呟きに、わかっけていても咲夜は問い返す。地底から去るあの時を思い返し、郷愁と寂しさを振り払って蒼衣は背を向けそう答えた。さすがに全員が全員こいしのような反応をする訳ではないだろうが、今は後ろ髪を引かれていい時ではない。

「湿っぽいのは好きじゃないし、な。」

それらの思考を押し隠すように呟いて、蒼衣は咲夜に苦笑を向ける。それで内心を悟ってくれたのか、咲夜は困ったような笑みを浮かべながらもお辞儀と共に蒼衣を見送る。

「ご武運を。蒼衣様。」

咲夜の最後の一言を背に受け、蒼衣は部屋を出た。決して、振り返らずに。

「あ、兄さん。終わった？」

「ああ。そっちは……、聞くまでもなかったな」

蒼衣が目を覚ました部屋の隣　元々三人が滞在した部屋へと戻って来て、蒼衣は何となく懐かしさを覚える。アリスの声に振り返り、質問を投げ掛けようとするもベッドを見た瞬間結論は出た。

タオルケットを被り熟睡しているのは、二人の母である神綺。サイドポニーは解かれているが、その他は起きていた時と全く変わっていない。皺になったらどうするのかと、蒼衣はどこかズレた感想を抱く。

「母さん、そろそろ出発するよー」

「ふにゃ……」

疲れているだろうしこのまま寝かせておいてやりたいが、しかし時間には有限にして貴重だ。蒼衣は心を鬼にして、だが優しく母の身体を揺さぶる。当然その程度で起きるはずもなく、神綺は相変わらず

夢の中だ。

「おーい母さん」

「うみゆ……」

心持ち力を強め揺すってみるも、やはり起きる気配はない。というよりこの程度で起きるなら、とつくにアリスがその任を全うしているだろう。さて、どうしたものか……。

「お？どうした？」

最悪背負って行くかと考える蒼衣の耳に、アリスのものではない新たな声が響く。振り返ってみれば小振りなナップザックらしきものを手に提げた魔理沙が、部屋に入ってきて来るところだった。どうやら準備は終わったらしい。

「……はーん、なるほどな。よし、私に任せとけ」

部屋の中を見回しだいたいの事情を察したのか、魔理沙が自信あり気になだらかな胸を叩く。すたすたと神綺の元に歩み寄り耳元に口を近付け、

「アリスがおニユーの水着披露してるぞ」

「アリスちゃん!？」

光の速さで起きた。

「ほら起きた」

「……で、起こした後は？」

キラキラと瞳を輝かせ水着のアリスを探す神綺を見て、魔理沙はフンと笑みを浮かべる。が、嫌な予感しかしない蒼衣はどうにかそれだけを聞き返す。やがて嘘だったと理解したのか神綺の瞳から輝きが消え始め、

「知らん!！」

魔理沙が自信満々に断言した瞬間、彼女は壁を突き破りぶっ飛んで行った。

「……えーと、母さん？」

心当たり　というより原因がそれしか思い付かなかったので、アリス共々蒼衣はそつと背後を窺ってみる。流れるような銀髪で隠された目は不気味な輝きを宿しており、

「嘘つきさんには針千本、だよ」

神綺^{悪魔}は笑顔で死刑^{判決}を下した。

薄ら寒ささえ感じさせる満面の笑みを残し、神綺は壁をしつかりと修復してから魔理沙を追い外へ飛び出した。それを見送った蒼衣とアリスは互いに顔を見合わせ、溜め息と共に二人を追う。どうやらまた面倒なことになりそうだと、諦め混じりの笑みを零しながら。

やがて、夜明けの赤と青の混じり合う空に、魔理沙の悲鳴が木霊した。

第二十四話「夜明け」(後書き)

という訳で感想でロリコンロリコン連呼してくれた方には、もれなく蒼衣君から「死ぬか泣くまで往復ビンタ」をプレゼントだそうです。約二名は全力で逃げましょう。

さて、これで紅魔編も無事？ 終結。次回からは式神編が始まります。

第二十五話「追跡者」(前書き)

お待たせしました……、だから速いよwww三日でwww
式神編と銘打ってはいますが九尾も化け猫も出ないのでその点はご
了承ください。
ではござー。

第二十五話「追跡者」

「では決を取ります。皆様意見をどうぞ」

暗い暗い森の中、一人の少年が口を開いた。少年の視線は三人の少女 自らを含めて円を描くようにして並んだ少女達に向けられている。その面持ちは沈痛で、場の空気は不気味な静けさを伴っていた。

「魔理沙が悪い」

「魔理沙ちゃんが悪い」

「私は悪くない」

金髪の少女、銀髪の少女、もう一人の金髪の少女の声が輪唱し、趨勢が決する。少年は最後に口を開いた少女 霧雨魔理沙へと向き直った。その視線は鋭く、魔理沙を捕らえて離さない。

「さて、弁明はあるか？」

少年が最後の機会とばかりに、魔理沙に発言権を与える。魔理沙は

しばしの思考の後、

「出来心なんだぜ」

てへっと可愛らしい仕種付きでそう述べた。

「遺言はそれだけかな？」

その言葉をGOサインと受け取ったのか、どこからともなく翼と剣十字を象った杖を取り出した銀髪神崎の少女が満面の笑みを浮かべる。だが表情とは裏腹に、言葉と纏うオーラはどこまでも純粹にどす黒かった。

「すみませんでした」

リアルに命の危機を感じたのか、人体の限界を超えた速度で魔理沙が反射的に土下座。仮にこれがボクシングならば、試合終了のゴングが高らかに鳴り響いていただろう。

こうしてまた、一人の罪人に裁きが下されたのであった。

「まあ魔理沙への弾効はさておくとして、これからどうする？」

「そうね、魔理沙はさておきこの状況はマズいわね」

「……お前ら冷たいぞ」

そんな裁判ごっこ染みた何かを終え、真面目な表情で蒼衣とアリスが顔を見合わせる。さりげなく責められている魔理沙がボソッと不満を零すが、

『「こつなつたのは誰のせいかしら？」』

「……すみません、私もう黙ります」

神綺^{母親}そつくりの真つ黒な笑みを前に、魔理沙はそれだけを答えすぎること引き下がる。そのまま大木の根本に体育座りし、どんよりとした瞳で虚空を眺め始めた。

あの後神綺を追った蒼衣とアリスが見たのは、凄まじい速度で逃げ回る魔理沙とそれを追う神綺の姿だった。魔理沙は元よりすばしっこいが、神綺も伊達に神の名を持っている訳ではない。気を抜けば一瞬で見失いかねない二人を蒼衣とアリスはただ全力で追い掛け、

神綺が魔理沙へのお仕置きを終える頃には、全員が全員現在位置を完全に見失っていた。即ち

大絶賛迷子なのである。

「多分魔法の森のどこかだと思っただけ……」

「その『どこか』がわからないから動けない、と」

ええ、と兄に領きを返し、アリスは口元に手を当て思考を巡らす。魔法の森は人間の里を挟んで紅魔館のだいたい反対側にあるのだが、あちこち走り回った為方向感覚が狂っている。

魔法の森は幻想郷で最も湿度が高く、人間が足を踏み入れる事が少ない原生林の総称だ。茸の胞子が宙を舞っている為普通の人間は息をするだけで体調を壊し、一般的な妖怪も居心地が悪いのか近寄らない。

しかし茸には魔力を高める効果がある為、魔法使い達はこの近辺に住居を構えることがある。魔理沙やアリスもその例に漏れず住んでいるのだが、この広大な森の中を全て網羅しているかと問われれば答えは当然否だ。

「魔理沙、あなたならわかるんじゃないの？」

「草木に見覚えが全くないから……。未踏エリアのどこか、ってことくらいしかわからない」

アリスに比べてかなりアクティブな魔理沙に尋ねてみても、その答えは芳しくない。魔法の森の探索をライフワークとする彼女でさえもわからないと言うならば、完全にお手上げだ。

「つまり八方塞がりか」

「困ったねえ……」

魔界から来たばかりの蒼衣と神綺は、当然幻想郷の地理に疎い。アリスも魔理沙もダメとなると、望みはゼロに等しい。定位置である蒼衣の肩に乗った上海も、心なしか不安そうに周囲を見回している。

「大雑把な方角はわかるから、そっちに進むしか……。ん？」

だがここで話し合っていたところで妙案が降って湧く可能性は限りなく低い。ならば行動して道を開くのみ。そう考え一歩を踏み出した蒼衣は、しかし聴覚に異常を感じすぐさまその足を止めた。

「なあ、今何か聞こえなかったか？」

「え？何かつて？」

不意にそんなことを質問され、アリスがぼかんとした表情で聞き返す。言った蒼衣も確信が持てないのか、怪訝そうな表情で辺りを見回していた。

「なんか鳴き声みたいな……。ほら、また」

「私には聞こえなかったが……。あ、おい！！」

言いながら蒼衣は深淵を解放。八卦虚式の風 即ち大気を操り不純物を排し、音の伝動率を上げる。三度目のそれを聞いた瞬間、蒼衣はそちらへと駆け出していた。

「ああもう、また迷っちゃうじゃない！！」

アリスがそんな叫びを上げながらも、率先して後を追い掛ける。神綺は既に走り出しており、慌てて魔理沙も地を蹴った。

昼間でも日の光が地面にまで届かない魔法の森は歩くだけでも危ないのだが、異変解決家達や神とその娘をその程度では止められない。誰一人脱落することなく走る数十秒。それは四人の視界に飛び

込んで来た。

「……狐？」

アリスが口にした通り、そこにいたのは一匹の狐だった。体長は五十センチ程だろうか、野良ながらも薄い金色の毛並みは美しく見る者を魅了する。だが

「妖獣の類か……。こいつが？」

「怪我してる……。間違いなさそうだ」

蒼衣の言う通り彼は 或いは彼女は 地に倒れ伏していた。よく見れば右前足に小さくない傷があり、鮮血で美しい毛皮を汚している。瞳は閉じられぐったりとしており、見るからに辛そうであった。妖怪ですら堪え難い森の瘴気に、人型ですらないただの妖獣が耐え切れるとは思えない。

「川か湖 なんて気の利いたもんある訳ないか」

周囲の空気を清めつつ、蒼衣は再度深淵と己を接続^{「リンク」}。八卦虚式の水を喚び出し、妖狐の傷を洗い流す。傷に触れるとやや辛そうに表情を歪めたが、抵抗はしなかった。

「蒼衣君、私が……」

「ダメ。俺の治療や紅魔館の修復で疲れてるんだから、これ以上は無理させられない」

神綺の言葉を遮って、蒼衣は数少ない手荷物の中からポーチを取り出す。幸いにもそこまで傷はひどくない為、手持ちの物でどうにかなりそうだ。消毒を済ませガーゼを当て、包帯を手早く巻いていく。夢子に教わっていた応急手当が思わぬところで役に立ったようだ。

「とりあえずこんなもんか」

「全くもつ……」

包帯の巻き具合を確かめ、蒼衣はふうと溜め息一つ。薄く目を開けた妖狐もそれに気が付いたのか、弱々しい鳴き声と共に蒼衣の手の平に頭を擦り付ける。そんな様子を見て毒気を抜かれたのか、アリスの声は言葉と裏腹に柔らかかった。

「とりあえず、今度こそ出発だ」

上海が片付けてくれたポーチを受け取り、肩に妖狐を乗せた蒼衣がゆっくりと立ち上がる。定位置である反対側の肩に上海が乗ったのを確認し、蒼衣はそう呟いた。

こうして新たに一匹を加え、蒼衣達は魔法の森を脱出すべく歩き出した。

気配は七つ。

強大な力を押さえ込めたのが一つ。

力を眠らせているのが一つ。

標準的なのが一つ。

不自然なまでに小さいのが一つ。

やたら大きいのが一つ。

変に薄い隠れたのが一つ。

それに連なり隠れたのが一つ。

前者五つは共に行動中。

後者二つはそれを追跡中。

四番目は断定出来ないが、三番目は確実に人間であると推測可能。

己が使命と感情に従い、行動を開始する。

目標

人類の、塵殺。

「……………」

歩き始めること数十分。三人を気遣いながらも率先して前を進んでいた蒼衣が、怪訝そうな表情と共にその足を止めた。気付いた三人も立ち止まるが、蒼衣はそれを気にも留めず背後を見遣っている。

「どうかしたの？」

「いや……………」

兄の不審な態度にアリスが問い掛けるも、蒼衣は首を傾げながらそ

う答えた。だが再び歩き出して三步もしないうち、足を止め背後に鋭い視線を投げ掛ける。

「……ねえ、何かあったの？」

「……いや、なんでもない」

『三人共、俺が合図したら足を止めて耳を澄ませてくれ』

さすがに問わずにはいられなかったのか、アリスが再度口を開く。対し蒼衣はまた同じ答えを返し、しかし念話で奇妙な指示を促して来た。

不思議に思いながらも三人共念話で了解の意を返し、三度歩き始める。蒼衣はといえば歩きながらも空気を清浄化し音の伝動率を上げ、自らの疑念を確信に変えるべく環境を少しずつ作り替えていく。

『今!!』

やがて三分程経過した頃、蒼衣が念話で鋭い声を飛ばす。驚きながらも足を止めた三人は、確かにそれを聞いた。

「兄さん……」

『聞こえたか』

思わず振り返ろうとするアリスを諫めつつ、蒼衣は念話で確認を取った。神綺も魔理沙も意図を察したのか、肯定の意思を送って来る。そう、四人が同時に足を止めた際

足音が、一つ余分に多かった。

『嫌がらせ目的って訳じゃなさそうだな……。心当たりは？』

『強いて言うならこの異変の犯人くらいだな』

後を付けられている。その見解は四人の中に等しく浸透し、気持ちを整へと切り替える。悪戯目当てならば姿を消す必要もないし、そもそもそんなことを考えるなら行動はもつと拙いはず。よって残った可能性は、四人の中の誰かが目的と見るのが妥当。その中で誰が一番確率が高いかと言えば、この異変の解決に奔走している蒼衣だろう。

『このまま放っておいて後から何かあったら面倒だ。片付ける』

『作戦は？』

短時間の思考でそこまで勘定を叩き出した蒼衣は簡潔に行動方針を告げ、思考を巡らせていく。切り替えの早い神綺の声に促され、現状と戦力を分析　算出完了。

『重力で動きを止める。仮に相手が俺と同じ能力を使えるとしても、少しは動きが止まるはずだ。あとはアリスのワイヤーで捕獲。魔理沙は母さんを』

下された結論は、誰もが妥当と頷けるものだった。相手は蒼衣と同じ　少なくとも形質の近い能力を持ち合わせている。足止めは一瞬でしかないだろうが、それでも十分事足りる。アリスのワイヤーが相手を捕らえれば、それで片が付くのだから。

妖狐を神綺へと預け、蒼衣は静かに深呼吸。体内で深淵の力を引きずり出し、振り返り様高压重力を相手へと叩き込む。

が、感触がない。疑念を確信に変える為とはいえ、不審な行動をとったのがまずかったのか。躲されたかと思考する間も置かず、蒼衣は重力の揺らぎを精査、探索。いかに姿が見えなくとも、形あるものに重力は等しく降り注ぐ。ならば不自然な場所に在るのは

「魔理沙！！左四十五度と右六十度！！」

「任せる！！恋心　「ダブルスパーク」！！」

唐突過ぎる指示にも関わらず、しかし魔理沙はしっかりと応えた。三二八卦炉を持った右手が高速で動き、二本の光の直線が放たれた。タイムレスに発射されたそれを、しかし二人の追跡者達は躲す。だが

「アリス！！右二十八度！！」

「ええ！！」

元より狙いは撃墜ではなく捕縛。左の方へ駆け出しながら、蒼衣はアリスに指示を飛ばす。しっかり準備を整えていたのか、アリスの返事と同時に多数の人形が宙を舞う。魔法で操られたワイヤーが光を反射し煌めいたと思った瞬間には、見えない何かをしっかりと握め捕っていた。

一方蒼衣はアリスの返事を聞く前に、重力制御を行使していた。俊足の踏み込みと同時に、見えない相手の肩を掴み足払いで地面へと引き倒す。頭を打たないように配慮はしたが、それでもなお一秒にすら満たぬ早業であった。

「え、わっ！？」

「きゃっ!?!」

警戒を絶やさず空いた方の手で闇を練り上げるも、真下と右方から聞こえて来た聞き覚えのある　　ありすぎる声に蒼衣の行動がピタリと止まる。壮絶なまでの嫌な予感に冷や汗をダラダラと流しながらも視線を動かすと、能力を解いたのか一人の少女の姿が露わになった。

「もう、お兄ちゃんつたらこんな場所で大胆なんだから……。でも愛があるなら私はいつでもウエルカムだよお兄ちゃんっ!!」

頬を両手で押さえながら、照れたふりをしてそんなことを言う追跡者その一。何よりも特徴的な幼さを残しながらも元氣一杯でハイテンションな声と、溢れんばかりの親愛の情を間違えるはずがない。蒼衣が幻想郷イノに来てから初めて、死力を尽くして戦った相手。いつの間にか己のことを、兄と慕うようになった少女。

「……なんでお前がこんなところにいるんだよ。……こいし」

蒼衣の心底呆れたような声に彼女　　古明地こいしは、可愛らしくピースサインで応えて見せた。

ともあれ追跡者が彼女だと言うなら、警戒の必要はないどころか絶無に近い。身を起こしながらも蒼衣はこいしの手を掴み、痛くないよう優しく助け起こした。

「さりげない優しさに痺れるー」

「はいはい……」

そのままガバツと抱き着いて来るこいしに投げやりな声を返し、蒼衣はやれやれと溜め息一つ。会つのは三日ぶりのはずなのだが、何故かとても懐かしく思える。……それだけ、紅魔館での三日が濃密な日々だったのだろう。

と、紅魔館というワードに引つ掛かりを覚え、蒼衣は右方　アリスに任せた追跡者その二の方を見遣る。次の瞬間蒼衣の口から漏れたのは、マリアナ海溝より深い溜め息だった。

「……フランもかよ」

「蒼衣、これ解いて」

魔法の糸で宙吊りにされていたのは、紅魔館で姉と共に寝ていたはずのフランドール・スカーレットであった。アリスが凄まじく器用

なのか、或いはフランが容易に引つ掛かったのか。フランは後ろ手に拘束され、身動き一つ取れない状態だった。……さすが人形遣い、と言つべきなのだろうか。

「アリス、頼む」

「……………え？あ、うん」

勝手に切断するのも如何なものかと思つたので、蒼衣はアリスに声を掛ける。思わぬ二人の登場に放心状態になつていたアリスは、その一言でようやく現実に戻還。言われるままに拘束を解き、フランはめでたく地へと降り立った。

「……………で、なんだってこんなところに？」

少し赤くなつた肌を摩るフランと相変わらず引つ付いているこいしの間で視線を往復させ、蒼衣は半目で問い掛ける。本来地霊殿と紅魔館にいるはずの二人が、何故こんなところにいるのか。疑問を抱かない方がおかしい。当然とも言える蒼衣の質問に対しこいしは、

「偶然です」

この状況下で最も有り得ない答えを返した。

「必然です」

蒼衣の表情が引き攣つたのを理解したのか、こいしが再び口を開く。しかし返された答えはやはり、ふざけているとしか言い様のないそれだった。

「運命です」

「そろそろ怒るぞ？」

表情がどんどん無に近付いて行くのを見てこいしが三度口を開くが、蒼衣はそれに笑っていない笑顔で応えた。さすがにふざけ過ぎたと思っただのか、徐々にこいしの表情に焦りと不安の色が混ざり始める。

「無意識に何かを感じたんじゃないかな？蒼衣君のマインドダイブで心に糸パスみたいなのが繋がったのかも」

「うんうん、そんな感じ」

さりげない神綺のフォローを受け、こいしがこくこくと頷く。穏や

かとは言えさすがは魔界神　その分析に思わずなるほどと無条件で納得してしまいそうになる。

糸とはある二者の精神的な繋がりパスのライン　安っぽい響きになるが赤い糸や虫の知らせのようなものだ。シュヴァルツシルトの闇を介したとは言えこいしの心の深い所まで触れた以上、糸パスが結ばれていてもおかしくはない。無意識を司る彼女だから、なおさらそういった第六感的なものに対する感受性も強いのだろう。実際数時間前に重傷を負っていた訳だし、有り得ない話ではない。

「で、フランお前は？」

だが、だとすればフランの場合説明が付かない。確かに彼女にもシュヴァルツシルトの闇を行使したが、こいしの時とは違い彼女の心は既に姉の手で闇を払われていた。蒼衣はその後始末をしただけに過ぎず、糸パスが結ばれているとは考えにくい。ならば何故

「起きたら咲夜に『もう出た』って言われて……。お礼もまだだったから追い掛けて来たの」

だがフランが口にしたのは、とてもとても小さな　しかし優しい理由だった。わざわざその為だけにこんなところまで追って来たのかと思うと、蒼衣の心に温かいものが広がる。やはり彼女は純粹でいい子だ　蒼衣はその認識を再確認した。

「で、似たようなことしてるこいしと鉢合わせて」

「晴れてお兄ちゃん追跡し隊が結成されました」

わーぱちぱちぱちーと口で言いながら囃し立てるこいしに辟易しつつも、蒼衣は深々と溜め息をつく。こいしのハイテンションさを見ていて気分がいいが、こういう状況ではこつも対応に困るものだとは思わなかった。フ란の優しさに浸る余韻すらない。

「理由はわかった。で、この後はどうするんだ？」

ともあれ各々の事情は把握出来た。しかし問題は解決していない。今後二人はどうするのか、という重大な問題が。蒼衣の真剣な表情と質問に対し二人は

『ついてくー!』

綺麗にハモって即答した。

「あのなあ……。危ないってわかってるか？」

『お兄ちゃん蒼衣の方がよっぽど危なっかしい』

脅すつもりはないが蒼衣の旅は、危険や死と隣り合わせにあると言っても過言ではない。そんな道に二人を連れていく訳にもいかない。なのでそう答えたのだが、二人のカウンターにうぐ、と口を閉ざす。こいしといいいフランといい生半可な相手ではなかった為負傷も多かったが、そのことを突っ込まれると面目ないとしか答え様がない。

「いいんじゃないかな？」

どう説得するか思考を巡らせる蒼衣の耳に、状況を見守っていた神綺が口を開く。しかしそれは息子に味方するものではなく、二人の少女の側の意見だった。

「どっちにしろここから出るまでは、家まで送ることも出来ないよ？」

「だけど……」

確かに蒼衣達ですら迷っているこの状況で、二人だけが無事脱出出来るとは限らない。ならば目の届く範囲にいる方が安全だし、気を揉む必要もなくなる。しかし蒼衣の近くに以上、トラブルに巻き込まれる可能性も否めないのでは

「それに、何かあった時は蒼衣君が守ってくれるし。ねー」

『ねー』

しかしそんなささやかな反論は、神綺の言葉と三人の笑顔で完全に封殺された。神綺のそれは無責任な他人任せでなく、確たる信頼があるからの言葉だと理解出来たからだ。三人の笑みには疑いなど、これっぽっちも込められていない。そこまで言われてもなお拒否するのは、その信頼に対しての裏切りだ。

「……人里の用が済んだら速攻で帰らせるからな」

故に蒼衣は、そう返答するしかなかった。

「わーい お兄ちゃん優しいー」

嬉しさが許容量を超えたのか、ガバツと抱き着いて来るこいし。溜め息混じりに頭を撫でながら、地底で出会った当初のこいしが懐かしいなあと蒼衣はどこか遠くを眺める。……どちらがいいかと聞かれれば、そりゃ断然生き生きとしている今の方なのだが。

「ねえ蒼衣、こいしとどういつ関係なの？」

そんな様子が気になったのか、フランがふとそんなことを尋ねて来る。心なしかその表情はムツとしていて、不機嫌そうなオーラが感じられた。

「私とお兄ちゃんは愛し愛される禁断の関係です」

「ありもしないことを捏造するな。フランと同じで深遠なる闇の元ダークマター感染者だよ。その時に色々とな」

突飛な答えを返すこいしをチョップと共に諫め、手短にそう答える蒼衣。それを聞いたフランは二、三頷くと口を開き

「じゃあ私もお兄ちゃんって呼ぶ」

その発言を聞いた瞬間、蒼衣の思考は完全にフリーズした。

「……………はい？」

「私と同じって言ったもん。ならそう呼んでもおかしくないよね？」

数十秒経ってからようやく再起動しそう聞き返す蒼衣に、フランは

拗ねたような表情でそう答えた。まるで対抗するかのようには反対側から抱き着き、唸り声を上げそんな顔でこいしを睨んでいる。

「呼び方一つで追い付けるとでも思った？」

「足元救われても知らないもんね」

ふふんと勝ち誇った笑みを見せるこいしと、不敵な笑みで答えるフラン。心なしか二人の間には、激しい火花が飛び交っているように見えた。そんな様子を見て蒼衣は、ああ、遊び相手を取られた子供みたいなアレか、とどこかズレた納得をしていた。……独占欲に違いはないのだが、方向性は全然違う。さすが忌み嫌われていただけあって、好意というものに凄まじく鈍感な蒼衣であった。

「話は終わったかしら？」

だが二人の睨み合いと蒼衣の思考は、絶対零度よりなお冷たい声で遮られる。振り返った三人が見たのは、腕を組んで仁王立ちしこれ以上ないくらいの作り笑顔を浮かべる阿修羅アリスの姿だった。

「紛らわしいから今後こつこついうことはしないこと。いいわね？」

『すみませんでした』

すぐ後ろに邪神が見えそうなアリスの言葉に、何故か蒼衣まで土下座で謝罪。ここで反論したら命が危ないと、本能が反射的に身体を動かしていた。人体の神秘である。

「……アリス、怒ってる？」

「……怒ってない」

怖々と尋ねる蒼衣に、顔を背けそう答えるアリス。二人を兄から引きはがしたかっただけの嫉妬だと、悟られなくなかったのかも知れない。……少なくとも魔理沙にはわかっていたが。

「いやでも……」

「怒ってないってば！！」

蒼衣はなおも尋ねるが、アリスに一喝されすごとこと引き下がった。そんな光景を見てアリスはまたやってしまったと後悔し、自己嫌悪の悪循環へと陥っていく。

「……やれやれ、素直じゃないって損だな」

ただ一人全員の事情を理解している傍観者である魔理沙が、深々と溜め息をつく。友人の恋の前途多難さに、深く同情しながら。

こうしてメンバーは当初の五割増し 即ち最初の倍になった。

第二十五話「追跡者」(後書き)

ま・さ・に！妹クライシスry

ごめんなさい地霊と紅魔最初に持ってきたの全部この為ですすいません(土下座)

てか式神編とか銘打ってるくせにただのラブコメもどきじゃん！)
今更

次回、色々急展開。

第二十六話「呪怨」(前書き)

お待たせしました、二十六話です。
分割した結果短くなっちゃった^q^
ではどーぞー。

第二十六話「呪怨」

「……私が言うのもなんだが、お前らホントにここから出る気あるのか？」

『あるよ？』

こいしとフランが加わり歩き始めること十数分。先導していた魔理沙が背後に振り返り、呆れたように言葉を漏らす。そのセリフの向けられた先 蒼衣をしつかりとマークしつつ物珍しそうに周囲を眺め回っていた妹二人は、綺麗にハモって答えを返した。地下室から出られなかったフランは元より、無意識に身を任せ歩き回っていただけのこいしも、かなりの幻想郷知らずのようだ。見たことのない草木を見付ける度立ち止まる為、蒼衣達は未だ百メートル前後しか進んでいなかった。

「でも私はお兄ちゃんがいればそれでいいや」

「同じくー!!」

「威張るなよそこ……」

が、フランがボソッとそんな言葉を漏らし、便乗する形でこいしも

手を挙げながらそう答える。溜め息混じりに蒼衣がツッコミを入れるも、その程度で止まる程この二人は甘くない。

「こんなペースじゃ森を出る頃には年寄りになっちまうぜ」

「……年寄りはい過ぎだけど数日掛かるのは確かね」

そんな様子を見てやれやれと、魔理沙は溜め息を零し空を見上げる。アリスも消極的に同意を返し、魔理沙に習って視線を上へ移す。生い茂った木々の隙間から見える太陽の位置は既に高く、おおよその時間は十二時前後か。ともあれあまりモタモタしていると、こんな危険極まりない森の中で野宿することになってしまう。蒼衣ならばともかく魔理沙やアリスはれっきとした年頃の少女だ、それは辛いものがあるだろう。

「こいし、フラン、気持ちはわかるけど観光は後だ。今この瞬間にも里の人達は死にかけてるかもしれない。いいな？」

そう考えた蒼衣は身を屈め、二人と視線の高さを合わせる。アリス達への気遣いもあるが、それ以上に人命が懸かっているのだ。多少の我が儘なら付き合っただりやいが、今回ばかりはそうも行かない。

「はい」

「うん、わかった!!」

真摯な言葉が通じたのか、元々そこまで拘泥することでもなかったのか、或いは兄の言葉だからか 全部という可能性もあるのが恐ろしいが 二人は至って素直に頷き、元気な答えを返して来た。蒼衣もホツとしたように表情を緩め、二人の頭を軽く撫でながら立ち上がる。

「という訳でペースアップを図ろうと思うんだが、まだ未踏エリアか？」

「たまに見覚えのある植物が出て来たから、もうすぐ知ってる場所に出るはずだぜ」

そのまま先導役である魔理沙に振り返り、蒼衣は質問を投げ掛ける。背後の木を指差しながらそう答える魔理沙に、場の全員が安堵の声を上げようとした瞬間、

「あ、いたいた」

この場の誰のものでもない、幼い少女の声が聞こえた。

声の発生源　上空へ視線を移した蒼衣は、そこに摩訶不思議なものを見た。青みを帯びた霧のような気体が、まるで意志を持っているかのようにこちら目掛けて移動しているのだ。とっさのことに反応が出来ない中霧は地表に到達し、やがて霧は一つのモノ　少女の身体へと変化していった。

容姿は幼く、薄い茶色のロングヘアは先端付近で纏められている。瞳は真紅で頭の左右から生えているのは、身長と不釣り合いに長く捻れた二本の角。白のノースリーブに紫のロングスカートを着用し、頭と左の角にはそれぞれ赤と青のリボン。紫色の瓢箪を持ち、三角錐、球、立方体の分銅を手首や腰から鎖で吊している。登場といい容姿といい、見るからに普通の存在ではない。妖怪　それもかなり高位の強力な者、大妖怪だ。

「お、萃香じゃないか。どうしたんだ？こんなところに」

「こっちのセリフだよ。紫に頼まれて来てみれば……、何やってんのさ？」

そんな異質な登場をした大妖怪に、しかし魔理沙は至って気軽に話し掛ける。萃香と呼ばれた少女も気にせず会話している辺り、おそらく知り合いなのだろうが

「ふむふむ……。ひよっとして蒼衣達ってさ……、方向音痴？」

「……素直にバカと言ってくれ。微妙な気遣いが逆に痛い……」

などと思考している間に、アリスと魔理沙が既に説明を終えていたようだ。半目でこちらを眺めてくる少女に、蒼衣はどうにかそれだけを返す。改めて自分達のアホっぷりが、情けなさ過ぎて仕方ない。

と、蒼衣はふと奇妙なことに気が付いた。彼女は何故、蒼衣の名を知っているのか。まだ名乗ってすらいはないはず、ならば

「っと、自己紹介がまだだったね。私は伊吹萃香。見ての通り鬼さ」

「……蒼衣だ。人間上がりの名無し妖怪だよ」

すたすたと近寄って来た少女　萃香はそう簡潔に自己紹介する。蒼衣も礼儀として名乗り返しながら、最後の一言にああと納得した。かつて蒼衣は一度地底で鬼　星熊勇儀に出会っている。ならば彼女から話を聞いていても、なんらおかしいことはない。

「紫って言うってたけど、何かあったの？」

一人納得し頷いている蒼衣を尻目に、アリスが萃香に疑問を投げ掛ける。言われて記憶を辿ってみれば、確かに『紫に頼まれて』と口にしてきた。紫とも顔見知りとなれば、いよいよ蒼衣のことを知っ
ていてもおかしくない。しかし一体なんの用件で

「何かも何も、みんな仲良く迷子でしょ？案内してやってくれって頼まれたのさ」

「……すまん」

そんな詮索混じりの思考はしかし、萃香の一言で中断された。というより中断せざるを得なかった。紅魔館で分かれて以来一度も顔を合わせていないが、彼女は彼女なりに打てる手を尽くしているはずだ。なのに自分達がこの様では、わざわざ魔界にコンタクトを取って来た彼女に申し訳が立たない。

「いーのいーの。蒼衣達の仕事は異変解決であって道探しじゃないんだから。このくらいの手助けは喜んでするさ」

うなだれる蒼衣に笑いかけ、バシバシと背中を叩きながらそう励ます萃香。彼女自身の性格か、はたまた鬼という種族柄か。いずれにせよ豪快というかパワフルな少女である。

「そっぴやお前の能力って深遠ダークマターなる闇には効かないのか？」

「あの紫ですら匙を投げるような代物だよ？私にゃ無理無理」

ふと疑問に思ったのか、魔理沙は萃香にそんなことを尋ねる。対し萃香は「ふらふらと手を振り軽い調子で、しかし不可能だと断言した。自らの力量をしっかりと弁えている。過剰な自信のない真摯な回答に、蒼衣は少し好感を持った。」

「萃香の能力って？」

「『密と疎を操る程度の能力』。簡単に言えば密度操作だよ。」

しかし当然能力のことを知らないので蒼衣が疑問を投げ掛け、萃香は大したことないと言いたげに右手を持ち上げる。その指先は青みを帯びた霧状になっており、それを見た蒼衣は吸血鬼の伝承「狼や蝙蝠、霧への変身能力を思い出した。」

「さっきの霧は自分の身体を疎の状態にしてたってことかな？」

「正解。さすが魔界神、頭の巡りが速いね。」

そんなことないよと否定する神綺だが、十分もしないうちに萃香の能力を看破する辺りさすが神と言ったところか。彼女の観察眼と洞察力には、目を見張るものがある。

「逆に密の状態になると？」

「高熱を伴った塊になるよ」

ほらと持ち上げた萃香の左手には、火の玉のように見えるモノが乗っていた。密度の高い地球の核　いわゆるマントルもかなりの高熱を帯びている。それと似た原理だろうと、蒼衣は納得し二、三頷いた。

「ところで蒼衣、私からも一つ聞いていいかな？」

「ん？ああ、なんだ？」

火の玉と霧を掻き消した萃香が、改めて蒼衣へと向き直る。気楽に聞き返す蒼衣とは対照的に、萃香の表情は真剣そのもので

「……なんだって紅魔館と地霊殿の主の妹が揃い踏みしてるんだい？」

「……付いて来ちゃった、としか言えない」

聞かれた瞬間、蒼衣は溜め息と共にそう答えるしかなかつ

た。

「妹その一です」

「その二です」

「あら、私はノーカンかしら？」

未だに蒼衣の両隣を陣取っていたこいしとフランが元気良く答えるが、アリスの絶対零度の笑みを前にすごすこと引き下がる。心なしかその身体は、がたがたと震えていた。……あの笑みを向けられては無理もないが。

「まあまあ、悪気はないんだし……」

「……ふんっ」

険悪なムードを断ち切ろうと蒼衣が仲裁に入るが、アリスはそっぽを向いてマトモに取り合わない。そんな様子を端から見ていて、萃香と魔理沙は深々と溜め息をついた。

「……何て言うか、苦勞してそうだね」

「わかってるんなら代わってくれ……」

同情と哀れみの目を向ける萃香に、魔理沙は死んだ魚のような虚ろな瞳で答える。こつもトラブル続き　しかも色恋沙汰のそればかりだと、当事者よりむしろ無関係の人間の方が心労が大きい。神綺のような次元を超越したのほんオーラを宿していれば別だが、一般人に過ぎない魔理沙にとってこの空気は堪え難いものがある。

「ともあれ人里までの最短距離に行くから、はぐれないようしっかり付いて来なよ」

仕方ないので萃香がそう割って入り、すたすたと歩き出す。これ幸いと魔理沙が続き、蒼衣もこいしとフランに引っ張られ後を追った。ニコニコ微笑む神綺が後に続き、溜め息と共にアリスも歩き出す。波乱だらけの一行は、こつして森から脱出するべく先へ進み始めた。

増えた。

大きいのが一つ。

計八つ。

しかも「丁寧にもこちらに向かって来ている。

条件は完璧。

後はこの戒めさえどうにか出来れば

「……大分開けて来たな」

萃香に先導され歩くこと二十分弱。木々が生い茂る道なき道が獣道のようなそれに変わり、蒼衣がそう呟きを漏らす。獣道なのだと思えば、生ある者が存在するということ。茸の胞子も大分空気中から減り、肩の妖狐も心なしか安堵の息を漏らしていた。

「里の人間も使う道が近いからね。多少は切り開かれてるさ」

「ここまで来れば私でもわかるぜ」

突き出ていた枝を潜りながら萃香が口を開き、木の根に足を捕られないようにしながら魔理沙も呟きを漏らす。人里が近いのが視覚的にわかったのか、全員の顔が明るくなる。

が、不意にこいしとフランが立ち止まった。

「……どうかしたか？」

「んとね、なんか変なの」

「誰かに見られてるみたいな……、そんな感じ」

不審に思った蒼衣が尋ねるが、返された答えに目の色を変える。誰かに見られている。それは、まさか

「他に何か特徴は？」

「うーん……、強いて言うなら……」

「私達に馴染み深い、闇と負の気配」

蒼衣の緊張が伝わったのか、目を閉じ集中してその感覚を辿る二人。やがて下された結論に、今度こそ蒼衣は絶句した。闇と負。それを表す存在を、蒼衣は一つしか知らない。

深遠なる闇の、感染者。
ダークマター

「蒼衣君」

「わかってる」

神綺の静かな、しかし鋭い声に促され、蒼衣は感覚の網を広げる。周囲の反応を精査、一つの見落としもないように洗い出していき見付けた。ここから二時の方向に、約二百メートルの地点。そこにいる。

「感染者とは少し違うけど……、確かにいるな。異質なのが」

だが予想とは裏腹に、その反応は感染者のそれではなかった。確かに良く似た雰囲気を感じているが、深遠なる闇特有の背筋を凍らせ
ダークマター
るあの悪寒が感じられない。ならば一体これは

「……どうするの？」

「……万が一の可能性もある。念の為調べよう」

アリスの質問をきっかけに、高速で回転していた思考が一つの結論を産み落とす。仮にこれが感染者だとすれば、放置する訳にはいかない。可能性の芽は一つでも多く潰さなければ、最悪幻想郷はあっという間に終わってしまう。

蒼衣達は互いに顔を見合わせ、頷きを交わすと同時方向転換。脇道に逸れる形で、草木が繁茂する道なき道を歩み始めた。

「これは……、祠？」

「大分古びてるね……。最低でも数百年単位だよ」

やがて蒼衣達の目の前に現れたのは、こぢんまりとした木製の祠だった。祠　神を祀る社にしては、禍々しい雰囲気を感じていた。見るからにボロボロで、しかもこんな沈鬱な森の中。どう考えてもご利益のある神だとは思えない。

「見るからにヤバ気なオーラがぶんぶんしてるぜ」

「フランと同じか……、下手すりゃ上回るレベルだな……」

實際魔理沙の言う通り、その祠は異常なまでのオーラを放っていた。霊感のない人間でさえも本能的に回避しようとする、危機意識に警鐘を鳴らすようなそれだ。邪神を鎮める為に祀っているとされた方がまだ納得出来る。感染なしにこれだけの負の気配を持つなど、蒼衣は俄かには信じ難かった。

二人はアレに近付けさせないべきだ　直感に近いその思考に従い本能的に二人を下がらせようとするが、両の手が宙を泳いでしまい蒼衣の思考は打ち切られる。慌てて視線を周囲に走らせ二人を見付け出すも、

『あ、開いた』

彼女達はなんの躊躇いもなく、祠の扉を開けていた。

『何やってんだお前らああああっ!?!?』

その光景を見た瞬間、神綺以外の全員の声がシンクロする。これだけの声量でのツツコミなど、後にも先にもこの一回だけだろうと思えるレベルのそれで。

「なんだろこれ……、人形?」

「藁人形だと思う。パチュリーの本に書いてあったよ」

そんな外野を気にも留めず、こいしとフランは祠の奥を覗き込む。狭い扉の向こうには、どうやら御神体のようなものが祀られているようだ。物珍しげなこいしとフランの詮索はしかし、即座に飛んで来た蒼衣によって中断させられる。

「このバカ……！！警戒心つてものがない」

のか、という言葉は続かなかった。

「……………ニン、ゲン」

悪寒を感じ振り返った先、扉の奥に鎮座する一体の黒い藁人形。そこから少女の声が発せられ、周囲の空気が完全に静止する。この濃密な邪気を纏う張本人が、その姿を現そうとしていた。

「……………殺ス」

やがて藁人形はポルターガイストのようにがたがたと動き始め、ゆっくりと宙に浮遊する。紫光を纏ったそれは蒼衣達の目の前で止まり、ゆっくりと輝きを強めていった。

「人間八……、全て……」

蒼衣が二人を背後に押しやり身構えると同時、藁人形が爆発的な輝きを放つ。光が収まった先にいたのは、一人の少女だった。

背は低めの小柄で、歳の頃はアリスと同程度だろうか。その細い身体を覆うのは、一枚の白いボロ布のみ。絹糸のような白髪は光に溶けてしまいそんな美しさと儚さを宿しており、瞳は血のように禍々しい赤色。

そして何より、世界全てを呪うかのような圧倒的な負のオーラ。

「皆殺しに、する」

付喪神の類かという蒼衣の思考は、少女の静かな声によって断ち切られた。掲げられた少女の右手に黒いエネルギーが集い、怨霊のような顔が多数映る球体となっていく。膨大な力に啞然とする間も与えられず黒球が解き放たれ、

蒼衣達は爆発に呑み込まれた。

第二十六話「呪怨」(後書き)

はい、頭で分割とか言っていましたが一話分伸びました^q^
考えなしでサーセンw仕方ないよね!

次回、急展開その二。

第二十七話「顕現」(前書き)

やらかしました、連日投稿ですw

戦闘描写ばっかですがよければお付き合ってください。
ではごーぞー。

第二十七話「顕現」

私は物として生を受けた。

人を呪う為の道具。それだけが私の存在意義だった。

私を生み出した村の人間達は、それこそ毎日のように誰かを呪っていた。

隣の村の大金持ち。侵略者達の親玉。悪事を働く極道者。村の不利益となるありとあらゆる人間を呪い殺して来た。

だけど私はそれで良かった。

私はただの道具だから。使われる為の存在だから。使用されることに喜びを見出だすモノだから。

例えその手を血に染めようと、私はそれで幸せだった。

だけど私は異常だった。

この身に宿った力が強過ぎた。

毎日使われることで力の使い方を覚えて、日増しに力を強めていった。

私はそれを喜んだ。

これでもっと使ってもらえると思ったから。

村の人間達が喜んでくれると思ったから。

だけど、私は強くなり過ぎた。

呪いの範疇を超える力を得てしまった。

故に村の人間達は私を恐れた。

私を崇め奉り、態度も余所余所しくなった。

そんな日もあるだろうと、私はあまり気にしなかった。

ある日、私を飾る祠が作られた。

私の為のご褒美だと言われた。

私の頑張りが認められたみたいで嬉しかった。

祠に飾られ、扉が閉ざされた。

古来より祠とはそういうものらしい。

私は納得し頷きながら、次に使われる時を待った。

そのまま週単位の時が流れた。

珍しいなと私は思った。

そのまま月単位の時が流れた。

おかしいなと私は思った。

外に出ようとしたけれど出られなかった。

私の力は危険だから、そう簡単に触れられないようにしてあるんだと納得した。

そのまま年単位の時が流れた。

ようやく私は捨てられたという事実を受け入れた。

そう、私は強くなり過ぎた。人の手には余る程の力を手にしてしまった。

だから恐れられ、捨てられた。

私はただ、使われたいだけだったのに。

なんとも皮肉な話だった。

そして私は理解した。

これが人間なのだ。

好き勝手に他人を扱い、飽きたら捨てる愚かな存在。まるで子供、いやそれ以下だ。

だから私は心に決めた。

人間は全て皆殺しにする。

私を捨てた人間を。私を恐れた人間を。

こんなに辛いのならせめて。

心なんて、なければ良かった

さあ、扉は開かれた。

今こそその願いを叶えよう。

命を削り血を吐こうとも。

世界全てを、呪うまで。

「兄さん!!」

「心配するな!!無事だ!!」

爆発に呑まれた兄を見てアリスが叫び声を上げるが、蒼衣の声に安堵の息を零す。爆煙の中からバックステップで戻って来た蒼衣は、確かに傷一つなく健在だった。

「こいし！！フラン！！自分達と母さんを守ることだけ考える！！」

『う、うん！！』

抱き抱えていた二人の少女を解放し、下がらせながら蒼衣は指示を飛ばす。その表情には二人に対する怒りなどなく、いかに眼前の脅威へ対処するかの算段を組み立てていた。いくら強力な力を持っているとしても、二人は戦闘において素人でしかない。そしてスペルカードルールが適応されない以上、この戦闘においては蒼衣も自らの戦闘スタイルを十全に力を発揮出来る。

ならば、答えは一つだけ。

「アリス、魔理沙、萃香、戦闘準備！！」

「え、ええ！！」

「了解だぜ！！」

「やる気満々みたいだね……、少なくとも向こうは!!」

黒鐵を虚空より引き抜きながら、蒼衣は三人に声を飛ばす。アリスはハッとしたように、魔理沙は即座に、萃香もやれやれと言わんばかりに妖力^{魔力}を喚び集め始める。真名解放もしておきたいところだが、この少女　明確な殺意を持って襲って来た少女の前で隙を見せれば、一瞬で葬られてしまいかねない。故に蒼衣は魎月ではなく、蒼衣として戦うことを選択した。

「集え　　怨念乱舞」

対し少女は興味がないとでも言いたげに、両の手に黒き怨念をかき集める。先のそれより数倍は強力なそれを、少女は弾のように解き放った。

対し蒼衣達は回避を選択。受ける義理も理由もないし、防御で力を消費するより回避して温存した方が賢明だ。幸い速度はそれほどもない為、かわせないことは

「ちよ、え!?!」

が、アリスの叫びはその現実を否定する。駆け寄ろうとして蒼衣もようやく、その事実が付いた。

足が、動かない。

まるで枷でも嵌められたかのように、膝から下が全く動かない。眼前の黒球も相俟って、底無し沼に捕われた小動物のような心地だ。

普通の妖怪が相手なら、間違いなく死ぬであろう必殺の力。並大抵の者ならば逃れることも能わず、黒き死にその身を食い散らされていただろう。

だが生憎と、蒼衣は普通でも並大抵でもなかった。

蒼衣は至って冷静に重力制御を行使。星に満ちる辰気のを招き集わせ手繰り込み、束縛を無理矢理振り払って脱出する。射線上にいたアリスを拾いつつ、蒼衣は黒球を悠々と回避した。

大地に降り立ち周囲を見回せば、箒に跨がり無事脱出していた魔理沙が確認出来た。射線上にいなかった為か、はたまた狙う価値なしと判断されたのか　こいしとフラン、神綺も無事のようだ。

だが、萃香がいない。

まさか巻き込まれたのか　そう考えた蒼衣の視界の隅に、長く捻れた二本角が映る。霧に紛れていた小さな身体は、なんと少女の背後を取っていた。疎の力を操り霧散することで、あの奇妙な束縛を

逃れていたのだ。

鋭く呼吸を吐き出しながら、萃香が右の拳を全力で振り抜く。密の力で高熱を帯びた正拳が、少女の身体に突き刺さる

寸前に、止められた。

「鬼の怪力を……、素手で止めたっていうの!?!」

「いや、違う!?!これは……」

アリスの驚愕に満ちた叫びが、この場の全員の意志を代弁していた。あろうことかその少女は、左の掌で萃香の拳を受け止めていた。燃え盛る炎の右手を、怪力を誇る鬼の一撃を、今にも折れそうな程か細い一本の手で、だ。攻撃した張本人である萃香は何か気付いたようだが、少女はゆるりと黒い輝きを宿した右手を掲げる　!!

「伏せろつ!?!」

蒼衣の判断は迅速だった。重力制御を用い一瞬で十数メートルの距離を詰め、黒鐵を横薙ぎに振るう。少女は苦々しげに表情を歪め、右手で黒鐵を受け止めた。その一撃は萃香のそれ同様なんなく止められるが、とつさに萃香が放ったハイキックで少女の身体は宙へと舞う。互いが距離を取り直す形となり、状況は仕切り直しとなった。

「食らえっ!!」

そんな中隙を窺っていた魔理沙が、宙に展開した魔法陣から緑色に輝くレーザーを乱れ打つ。魔理沙の十八番である光の魔法　イリユージョンレーザー。攻撃範囲こそ難があるものの、速度も火力も申し分ない。確実に決まるかと思われた閃光は、

しかし少女が一瞥しただけで宙に静止した。

「んなっ……!?!」

魔理沙が面食らったように叫びを漏らす、それは誰もが同じだろう。対象目掛け疾駆していた光の矢が、あるうことか宙に縫い留められたかのように止まっているのだ。まるでそう　少女の赤い瞳に恐れをなしたかのように。

「
バックドラフト
逆流」

少女が手を振るうと同時、言葉と同じ事象が起きる。レーザーの方向性が逆転し、放たれた地点　即ち魔理沙目掛けて襲い掛かった。とっさの出来事に誰も彼も、反応することが出来ない

「ボサツとすんな！！死ぬぞ！！」

が、直撃よりも速く動いた蒼衣が、魔理沙を抱えつつ射線上から脱出する。魔理沙の身体に風穴を開けるはずだった光線は、間一髪蒼衣の後頭部を掠めていくだけに留まった。

「た、助かったぜ……」

「礼は後でいい、今は目の前に集中しとけ」

我に返り礼を言う魔理沙を押し止め、蒼衣は油断なく少女の動向を見据えている。対し少女はゆっくりとした動きで、蒼衣の方へと向き直った。その赤い瞳が細められ、ゆるりと右手が伸ばされる。不審な動作に蒼衣は即身構えるが、

「^{ウガチ}穿」

少女の眩きが響いた瞬間、胸元を押さえ膝を着いた。

「がつ、は……！？」

少女が右手を握ると同時、蒼衣の中で何か大事なものが停止した。心臓、肺、その他五臓六腑のことごとくが、その動きを完全に止めている。その事実を理解した頃には、既に蒼衣は地に倒れ伏していた。いかに妖怪と言えど素体は人間。全ての生命維持活動が一瞬にして停止し、蒼衣は成す術なく死に至る。

「蒼衣君、大丈夫!？」

寸前、神綺の声が意識を覚醒させた。

神綺の手が触れた瞬間、蒼衣を蝕んでいた力が霧散した。急激な身体の変化に思わず激しく咳き込むが、それは身体がすっかり生きているという何よりの証拠。間一髪のところ、蒼衣は一命を取り留めた。

「……大丈夫、ありがと母さん」

「あの子の能力は 呪いだよ」

ようやく落ち着いた蒼衣が礼を述べると同時、神綺は静かに口を開いた。魔を統べる神の断言するような言葉に、全員の意識が集中する。呪い 災いが起きるよう神仏に祈るといふ行為で、あれらの奇妙な現象が全て説明出来るのだろうか？

「最初の枷みたいなのは蒼衣君達の『速度のベクトル』を呪って移動量を『ゼロ』にして行動不能にしたの。萃香ちゃんの攻撃は『威力のベクトルのゼロ化』、魔理沙ちゃんのレーザーは『速度のベクトルのマイナス化』。そして今のは　呪いで蒼衣君の『生命力そのものを減衰』させてた」

神綺の冷静かつ的確な、何より驚愕に値する分析に、思わず全員が沈黙する。ありとあらゆる力の減衰　つまり最悪の場合こちらの攻撃が全く届かず、逆に向こうはいくらでも致命打を与えられるということ。そんな馬鹿げた能力を相手にするには、それこそ紫のような破格の能力がなければ話にならない。

確かに蒼衣を始めフランや萃香も、かなり強力な能力を持っている。だがそれはあくまでも火力や破壊力などの『純粹な意味での攻撃力』であり、彼女のようなタイプを相手にした場合そこらの野良妖怪と実力はなんら変わらない。例えるならば一メートルと一キログラムではどちらが大きいかというような、答えのない問いのようなものだ。一メートルは別に相手が少女一キログラムだろ蒼衣うが五百グラム萃香だろ強さの方向性うが構わない。根本的に単位が違強さの方向性う以上、理論上での答えは結局出ないのだから。

「名前を付けるなら　『呪詛を穿つ程度の能力』ってところかな」

「『ありとあらゆる力をゼロ化或いはマイナス化する呪い』　馬鹿げてるってレベルじゃないねえ」

神綺と萃香の分析に、全員の纏う空気が暗く重くなる。富めるモノを呪詛で減衰させる。まさに呪いの藁人形。彼女の本来の姿に、これ以上ないくらいピツタリな能力だ。

しかし理解出来たところで、対策が取れるようなものではない。対処法も打開策も見出だせない彼女の力は、まるで天災。わかっていても抗い様がない。そんな相手を前にどうすればいいのか

「舞え」

そしてそんな思考の猶予を与える程、少女は優しくなかつた。

少女の白く透き通るような指先から、負の念が凝り固まったかのような黒球が矢継ぎ早に放たれた。彼女が内に抱える負の感情。それらが溢れ出したかのような怒涛の弾幕が、集中豪雨のように降り注ぐ

「禁忌「レーヴァテイン」！！」

が、黒き怨念の嵐は破滅の炎剣によって一撃の下切り捨てられた。少女が視線を動かしてみれば、刀身に煉獄の如き炎を纏ったレーヴァテインを構えるフランの姿がある。単純な火力で言えばフランの力は、この場で三本の指に入る程。問題の呪いさえ使われなければ

ば、彼女一人でも十分少女を圧倒出来る。

「酔神　「鬼縛りの術」！！」

その僅かな隙を見逃さず、萃香がスペルカードを切った。どこからともなく現れた鋼鉄の縛鎖が、少女の身体を十重二十重と絡め取っていく。不意を突かれた為か抵抗さえ出来ず、少女は戒めの鎖に身を蹂躪された。

その隙を見て取った蒼衣が、黒鐵を両手に構え地を蹴る。地が割れ爆ぜる程の踏み込みを以て、漆黒の大剣を少女目掛け横薙ぎに振るうが

少女は事もなげに鎖をぶち破り、黒鐵を軽々と受け止めた。

「鎖の構成力を……！？」

無数の鉄の塊　砂粒サイズまで砕け散ったそれを見て萃香は驚愕の表情を浮かべるが、即座に何が起きたのかを理解した。鎖を構成する原子や分子の結合力を打ち消した　しかも展開が恐ろしく早い。

更に付け足すならばそれは、人体などにもその力　有り体に言っ
てしまえば破壊出来ないモノなど存在しない馬鹿げた力を行使出来る
ということ。同質のことが出来るフランを速度の点で完全に上回

っている以上、いつあなってもおかしくはない。気が付いたら死んでいた、なんてことも十分以上に有り得るのだ。より身近に死を感じ、全員の背筋が否が応でも凍り付く

「恋符！」「マスタースパーク」ッ！！」

そんな中皆を鼓舞するように、魔理沙が一枚のカードを切った。霊夢と並ぶ古参の異変解決家 霧雨魔理沙の象徴たる極太のレーザーが、宙を引き裂き少女目掛けて突っ走る。今まで数多の妖怪を打ち倒して来た彼女の技は、

しかし少女が軽く触れただけで霧散してしまった。

「無傷かよ!？」

速度と威力を呪ったのか、少女のきめ細かな肌には傷一つ存在しない。マイナス化されなかつただけマシだが、こつも簡単にあしらわれるとあまりの理不尽さにやり場のない怒りを覚えてしまう。

「ちっ……！！萃香！！アリス！！」

「おひねー……」

「ええ!!!」

再度怨念の弾幕を放って来る少女に対し、前へ出ながら蒼衣は萃香とアリスに指示を飛ばす。萃香の炎弾と少女の黒弾が飛び交う中を高速で駆け抜け、大上段から黒鐵を全力で叩き付けた。

さすがにその瞬間ばかりは弾幕を止め、防御に集中する少女。闇纏いし漆黒の大剣は容易に止められるが、蒼衣は己の任を全うしていた。

少女の動きを止める、という役目を。

「注力「トリップワイヤー」!!!」

十近くの人形を展開していたアリスがこれ以上ないくらいのタイミングで、スペルカードを切り人形を繰る。アリスの指先から人形へと繋がった魔法の糸マジックワイヤー。魔力で強化されたそれらを駆使し、執拗なまでに少女を雁字搦めに拘束した。

兄や母には及ばずとも、彼女は魔界神の一人娘。持てる魔力の総量は莫大とまでは行かないが、並の魔法使いに比べればその差は歴然。その全力が込められたこの拘束ならば或いは

「無駄」

しかしアリスのそんな望みは、少女の一言で粉碎される。糸の魔力ワイヤと構成力を減衰させられ、いとも簡単に脱出された。だが

「ぎゅっとして」

背後に控えていた悪魔の妹が、破滅の右手を解放する。残酷にして無慈悲なる破壊の渦が、少女の中心点を穿ち破壊せんとその力を膨らませていく。

しかしフランの行動に危険なものを感じ取ったのか、少女は苦々しげな表情を残し一瞬にして姿を消す。透化？いや、そんなはずは混乱に襲われるフランだが、それは無理からぬことであろう。彼女は戦い慣れしていない分、想定外のアクシデントに対する耐性が全くといっていい程存在していない。その迷いが命取りであるということを理解出来るのは、その命が刈り取られる時だけ

普通ならば、の話だが。

「そこっ！..!」

フランの手を引き全力で飛び退きながら、こいしがハートの弾幕を先程までフランがいた地点に叩き込む。何も無い空間を通過するはずだった水色のハートは、しかし黒い障壁によって遮られた。

舌打ち混じりに姿を現したのは、姿を消していたはずの少女。自らの存在感を呪い知覚出来なくなったのだと、フランは遅れて気が付く。例え知覚出来なくとも、無意識を操るこいしにはそれがわかる。故にこそ間一髪だったが、とっさに割って入れたのだ

「呪符「上海人形」!!」

「光符「アースライトレイ」!!」

領きを交わした魔法使い達が、同時にスペルカードを切った。上海から放たれる紫色のレーザーと、魔法陣から放たれる光の線が少女を穿たんと空を疾駆する。

挟撃される形となった少女だったが、彼女はそれぞれの攻撃を両の手で打ち消した。更に前後から迫り来る鬼の拳と黒き剣に対しても慌てることなく身を回し、威力をゼロに打ち消し反動で投げ飛ばす。端から見れば何かの舞に見える程、鮮やかな捌き方であった。

「ちいっ……!!」

「キリがねえな……!!」

焦れたように舌打ちする魔理沙と、打開策を探し思考を巡らす蒼衣。

こちらがどう仕掛けても、暖簾に腕押し糠に釘なのは自明の理だ。起死回生の一手がなければ、蒼衣達を待ち受けるのは死と敗北のみ。しかしそんな妙手がそう簡単に見付かる訳もない

焦りで迷走する思考をクールダウンさせ、蒼衣は再度少女へと視線を移す。何か状況を切り開く方法、そのヒントがないかと念入りに少女の一挙手一投足を観察する。そう考えた蒼衣が見たのはしかし、

急に吐血し粗末な服を鮮血で染める少女の姿だった。

「な………!？」

迂闊だとわかっていても、思わず動きを止めてしまう蒼衣。畏か真か。いずれにせよ動揺を招くという点では、少女の行動はこれ以上ないくらいに効果的だった。

だが、追撃に移る様子がない。今のが畏だとすればその隙を突くのが目的のはず。動かないということは今の血はまさか

「ただの付喪神が振るうには、あの能力は強過ぎたんだ……。このままじゃあの子は自分自身の力に喰われて、跡形もなく消滅する……!！」

蒼衣の想像を裏付けるように、神綺が己の分析を口にする。それを

聞いた瞬間、蒼衣は今までどんな戦いの中でも味わわなかった恐怖に近い感情を覚えた。能力に喰われて消える　　それではまるで過去の

「おいお前!!今すぐ能力を解除しろ!!」

その衝動に衝き動かされ気が付けば、蒼衣は口を開いていた。急な言動に驚きこそ見せたものの、反対する者は誰一人としていなかった。例えばいきなり襲い掛かって来た少女だとしても、むざむざ見殺しにするつもりなどない。応戦する形で戦ってはいるが、蒼衣達に少女を倒す必要など存在しないのだ。

だが少女は答えることなく、再度漆黒の弾幕を乱れ撃った。これが答えだと言わんばかりに、執拗なまでに攻撃を仕掛けて来た。まるで躍起になって塗り絵を塗り潰す子供のように。

「聞く耳持たずかよ……!!どうするんだ!?!」

「とりあえず殴ってでも止める!!話はそれからだ!!」

「単純明快でわかりやすい……、ねっ!!」

魔理沙の問いに答えながらも、漆黒の弾幕をより昏き漆黒の剣で切り裂いていく蒼衣。軽口を叩きながら萃香も加勢し、火の玉をばら

まき少女の攻撃を相殺していく。

「人間……」

全ての弾幕が破られてなお、少女は攻撃をやめない。力を引き出す度口の端から血が流れ出すが、それでも瞳に宿る憎悪は揺らぎなく蒼衣達へと打ち付けられていた。何が彼女をここまで動かすのかその凄まじい執念には背筋が凍らされる。

「待つて!!」

あまりの痛々しさに耐え切れなくなったのか、アリスが前へ出て両手を広げる。無謀極まりない行動に少女が一瞬動きを止めるが、即座に気を取り直し再度怨念をかき集めていく。

「お願い!! 話を聞いて!!」

「アリス、ダメだ!! 下がれ!!」

アリスはなおも辛抱強く声を掛けるが、蒼衣にはわかっていた。あの少女が止まるのは、死んだ時か自分と同じ時だけだと。そしてアリスの今の行動は、そのどちらでもない

蒼衣の当たって欲しくない予測通り、少女はその動きを止めなかった。無抵抗かつ無防備なアリス目掛け、怨念に満ちた負の力を解き放つ

「んの馬鹿……!!」

寸前、蒼衣がアリスを抱き抱え脱出する。

左手首に攻撃を掠めながらも、アリスには傷一つ負わせず蒼衣は黒き弾を回避した。重力制御は意志一つで容易に発動出来る為、こういう急場程真価を発揮出来る。スタートは同時で距離も蒼衣の方が遠かったが、執念と深遠が少女のそれを上回った。

「蒼衣!!」

「掠っただけだ、大したことない」

宙に舞った鮮血を見たのか魔理沙が心配の声を掛けるが、即座に身を起こした蒼衣は端的にそう答える。実際傷は浅く痛みもほとんどないのだが、動脈に当たったのか血は止まることを知らず手を伝い流れ落ちていく。しっかり止血すればすぐに治る程度の軽傷だ。

「あっ!!」

そんな中場の空気を変えたのは、神綺のそんな声だった。何事かと思えば彼女の抱えていた妖狐が飛び出し、まっすぐ蒼衣達目掛けて走って来る。急な戦闘ですっかりその存在を失念していたが、走れるということとは傷も治ったのだろう。

「なっ、おい!？」

だが妖狐は蒼衣の前ではなく、蒼衣が作った血溜まりの前でその足を止めた。それを見た瞬間妖狐の思惑を察し、蒼衣は慌てて手を伸ばす。

古来より妖怪の血には、尋常ならざる力が宿っているとされている。人ならぬ身を動かす生命の力。物によっては魔力さえ帯びたそれは、当然莫大な力を秘めている物がほとんどだ。実際とある陰陽師の家系では倒した妖怪の血を体内に取り込み、その力を身体に受け継がせているらしい。

ただしその方法は、力を得る為とはいえあまりに危険。その陰陽師の家系は世代を重ねることで身に血を馴染ませていったが、なんの耐性もない人間がそれを口にすれば身体を襲うのは激痛の責め苦。人としての部分と妖怪の血が争い始め、体内で暴れ回ることによって生じる魔の痛みだ。素養のない者が飲めば最後、死に至る可能性もある。

人間上がりとはいえ当然蒼衣も妖怪の端くれ。しかも能力は一級品。その血に秘められた力はおそらく、幻想郷でも十の指に入るく

らには強力だ。そんな劇物を一介の妖狐が飲んだところで、

果たして反動に堪えられるのだろうか？

「馬鹿、やめ……」

僅かに逡巡する様子を見せる妖狐を止めるべく伸ばされた手は、しかし虚しく宙を搔く。一瞬早く動いていた妖狐が、劇業血溜まりに口を付けていた。

瞬間、妖狐が膝を着くと同時蒼き光が稲妻のように迸る。

やはり反動は凄まじいのか　妖狐の毛皮を伝う蒼光は、まるで分不相応な力を欲した者に下される拷問のようだ。だが一度口にしてしまった以上、吐かせたところで効果はない。蒼衣に出来ることは、ただ指をくわえて見守るだけ

「おい！！しつかりしろ！！おい！！」

居ても立つてもいらねず、蒼衣は妖狐に触れ必死に呼び掛ける。意味はないとわかっていても、何かせずにはいられなかった。急転に次ぐ急転に付いて行けないのか、少女もポカンとした面持ちで蒼衣達を見ている。致命的な隙を晒しているのはわかっているが、今は

こちらが最優先だ。

「おい！！死ぬな！！」

「お願い！！生きて！！」

蒼衣だけではなく隣にいたアリスも、妖狐へ必死に呼び掛け続ける。やがてゆっくりと身を起こした妖狐は応えるように、天を仰ぎ長い長い鳴き声を上げた。

瞬間、妖狐の身体から爆発的な量の光が溢れ出す。

あまりの光量に目を開けられず、その場にいた全員が目を庇うように腕で視界を塞ぐ。太陽が眼前にあるかのような　そう錯覚する程に強い光だった。

やがて光が収まり、蒼衣はゆっくりと腕を退け目を開く。眩む視界を叱咤し妖狐がいた地点を見遣ると同時、今度こそ蒼衣は言葉を失った。

そこにいたのは、一人の少女だった。

歳の頃はアリスと同じくらいか、しかし背は割と高めだ。水色のT

シャツにジーンズ、腰に巻かれたパーカーと格好は現代風。手首には青と白を基調としたリストバンドがあり、風に揺れるのは腰まで届く黒みを帯びた茶髪。風のように軽やかな少女だと、蒼衣はそんな感想を抱いた。

蒼光の余韻が消えると同時その少女　いや、いい加減認めよう
かつて妖狐だった少女が目を開く。その瞳は空のように透き通った、綺麗な紫色をしていた。

妖狐はくるりと身を回し、未だ動きを止めたままの少女へと向き直る。虚空より一本の刀を生み出し、片手で軽く構えた。

「　止めてあげる」

鋭い視線をぶつけながら、少女は静かに口を開く。その身体から発散される莫大な霊力が、その意志を物語っていた。

戦意を向けられ我に返ったのか、少女も静かに両手を広げる。漆黒の怨念を弾へと変え、周囲に浮遊させる。

こうして、新たな少女は初陣を遂げた。

第二十七話「顕現」(後書き)

そう、狐っ子はこの為の布石だったのだよ！(え
付喪神と妖狐は随分前から構想してた子だったのですよやく出せて
嬉しかったり。

次回、決着。

第二十八話「名前」(前書き)

お待たせしました、二十八話です。

式神編はこれでラスト。楽しんでいただければ幸いです。
ではどーぞー。

第二十八話「名前」

私の家系は先祖代々、鍛冶師をしていたらしい。

人の姿を借りて人里に混じり、鍬や鋤を作り生計を立てて暮らしていたそうだ。

八百年　それだけの時を錬鉄と共に生きてきた私の一族。その家系には一つ、言い伝えに等しい昔話があった。

かつてありとあらゆる外敵から身を守るべく、呪いに手を出したとある一族。その村には莫大な呪力を身に秘めた、付喪神の少女がいたらしい。彼女は理不尽なまでに強力な呪いを操り、周囲の村をことごとく壊滅させたそうだ。

だがその少女はあまりにも強過ぎた為、謀叛を恐れた人間達が彼女を祠に閉じ込めた。やがて力を失った村は滅びの道を辿ったが、今もなおその少女は閉じ込められていると。

誰もが根も葉も無い作り話だと笑ったが、私はその話を信じ祠を探し続けていた。実在するのはわからないが、それではあまりにもその少女が可哀相だと思ったのだ。

付喪神とは強き念を宿した道具の成れの果て、そして道具とは本来使われる為に生み出される物。己の任を全うし持ち主の腕の中で朽ち果てる　他者からすればなんてことはない、しかし彼女達にとつてはとても大切に小さな願い。それすらも叶えられず千二百年の孤独を味わうなんて　あまりにも酷過ぎる。

物を生み出す一族として、私はその少女を助けたいと思った。穴蔵から飛び出し日本中を渡り歩き、私は一人の鬼と出会った。そして自らを嫌われ鬼と称する彼の話に出て来た、幻想郷という場所に興味を持った。

外の世界から忘れ去られたモノ達が辿り着くという最後の楽園もしかしたらそこに、彼女の祠があるかもしれない。村の跡地に手掛かりがなかった以上、私にはそれしか頼るものがなかった。

道標をくれた彼に礼を述べ、私は一路幻想郷へと向かった。幾多の山と谷を越え、やがて私はそこへと辿り着いた。

妖精が気ままに暮らし、妖怪が地上を跋扈し、神々が生を謳歌する理想郷。浮世に馴染めぬ者達に与えられる、最後にして最高の幻想。私の捜し求めていたものが、そこにはあった。

が、いかんせん私は低級な妖狐。妖怪に襲われ傷を負い、茸の胞子にやられそこで生を終えるはずだった。

けれど私は生き長らえた。蒼い瞳を持つ漆黒の少年に救われて、どうにか一命を取り留めた。

彼を中心とした奇妙な一行と短な旅をし、そして私は彼女を見付けた。ただ彼女是我的想像を遥かに超える、強大な力の持ち主で。私よりも強い少年達でも敵わないくらいに、強い強い力を持っていた。

憎悪と殺意を剥き出しにして、少年達を追い詰める少女。だけど私には何故か、彼女が泣いているようにしか見えなかった。

力が欲しい　そう思った私の脳裏に、ふとあの鬼の言葉が蘇る。人外の血には強大な力が秘められており、それを口にすることで爆発的な力を手にすることが出来ると。ただしその代償として身を激痛に苛まれ、最悪死へと至ることもあると

迷いはなかった。だって私は最初から、その為にここを目指していたのだから。目的も手段も目の前にある。ならばあと必要なのは私の意志だけ。

そして私はそれを口にした。反発による激痛は想像以上だったけど、私はただ必死に堪えた。少年が死ぬなど、彼の妹が生きてと言ってくれた。だから私は立ち上がり、万感の想いを込めて応える為の叫びを上げた。

瞬間、文字通り私は生まれ変わった。人の姿を得た私の力は、生来の霊力の高さも相俟って少女に十分匹敵し得る程強力なものだった。

だから私は刃を抜く。

少女の悲しみを終わらせる。

彼女の全てを知る者として。

錬鉄の妖狐としてこの力を、

今こそ、解き放つ。

生み出した刀を構えながら、妖狐は油断なく少女を見据える。突然姿を変えた彼女を警戒しているのか、少女は怨霊を従えたまま動かない。

その判断は賢明だ。相手の出方がわからない場合、待ち受けてカウンターで叩くのが上策。或いは逆に先手を取り、最初の一撃で倒しきるか。古来より武士同士の決闘はそういうものだが、ある意味それはどの戦いにおいても等しい。

力のある妖怪同士がぶつかり合えば互いの魔力は疲弊していき、最終的な決着はなんでもない幕切れのことが多い。町一つを滅ぼせるような存在が全力で戦うのだ、自らだけでなく周囲への被害も大きなものになる。故に相手が全ての力を出し切る前に、自らの全力を以て叩く。それが最善だと彼女は考えていた。

だが、その理屈は目の前の相手には通用しない。

野生動物特有の鋭い勘に引っ掛かるものがあり、妖狐はとっさに右へ跳ぶ。少女が苦々しげな表情と共に怨霊を操るのを見て、妖狐は反射的に今の出来事を理解した。

生命力を、呪うつもりだったのだと。

心臓を鷲掴みにされたような心地を覚え、思わず妖狐の背筋が凍る。

相手の殺意が自分に向けられている　その事実はこの間にも恐ろしいことだったというのか。

あの少年達は、こんな恐怖に晒されながらも戦っていたというのか。

「くっ……!!」

黒き弾幕を横つ飛びに躲し、逸れて来た一発を妖狐は手にした刀で切り裂く。が、所詮は無銘の刀　ただそれだけで鈍色の刀身は根本から碎け散った。

これではダメだ。あの怨念を切り裂くには、ネムレス・ソード無銘の剣では明らかに力不足。千年を超える負の感情を打ち砕くには、もっともっと強力な　妖刀や業物クラスでなければ敵わない。

そこまで考えた妖狐は足を止め、脳内に意識を集中させる。家に飾られていた刀剣の書籍の記憶を辿り、目的のそれを見付け出す。彼女のお気に入りの一つ　かつて源氏が所有していた宝刀髭切。貪狼の太刀の二つ名を持ち、夜鳴きなど様々な伝承を残す至高の刀を

マテリアライズ
「顕現」

迫り来る弾幕を前に目を閉じたまま妖狐は右手を前に伸ばし、見え

ない何かを握るような構えを取った。脳内で思い描いた克明なイメージを、丸ごとそのまま右手へと持って来る。

かつて一条戻橋で、酒吞童子の最も重要な家来である茨木童子の右腕を切り落としたとされる髭切。鬼退治の伝承を準えて、その刀は畏怖を込め新たな名を与えられた。その名を

「鬼切！」

妖狐が叫ぶと同時に、その手の中には一本の刀が握られていた。長さは八十センチ程だろうか、漆黒の柄と白銀の刀身を持つ刀だ。山のような三つ又の根本を重ね並べたような奇妙な鍔、付け根の部分がV字型で片方が鍔と繋がっている刀身と、その外見は明らかに異形。得も言われぬオーラを放っている。

妖狐は感触を確かめるようにそれを握り直し、しっかりと正面を見据える。両手に構えた鬼切を高速で横薙ぎに抜き打ち、

ただの一振りですべての怨霊を切り裂いた。

さすがにこれには驚いたのか、少女が目を睜り警戒を強める。先程の倍近い量の弾幕の瀑布を以て、叩き潰さんと手加減なしに襲い掛かって来た。

しかしそこは天下の鬼切。数が増えたところでその切れ味は揺るがない。妖狐は地に触れんばかりの低姿勢で駆け出し、その悉くを

切り裂いていく。

確かに敵の弾幕の質は先程と同じ　しかしその数が圧倒的に多い。血を飲んだお陰で身体能力が上がっているとはいえ、限界の壁は歴然と存在する。ほぼ全方位から迫り来る弾幕を掻い潜っている現状こそが異常なのだ。

手数が足りない　舌打ちと共に後退した妖狐はそう思考する。鬼切は確かに業物だが、あくまでも一振りの刀でしかない。刀は剣と違いぶつけるだけでなく、しっかりと刃を当て『引く』ことで初めて斬撃へと昇華される。その扱いの難しさも相俟って一度に切れる数は限られている為、あの猛攻を抜けることが出来ない

……………　　だつたら、『^刀手数』を増やせばいいだけのことよ！！

「マテリアライズ
顕現　　蜘蛛切！！」

再度脳裏にイメージを思い描き、それを丸々左手へと持って来る。顕現の掛け声と共に、その手には新たな刀が握られていた。

デザインはほぼ鬼切と同じだが刀身が付け根の部分が奇妙な形で歪曲しており、横から見ればあまりにも長さの不揃いなブーメランのようにも見える。鏢は三つ又状になっており、その隙間はまるで蜘蛛の巣のように編み目状になっていた。

鬼切同様夜鳴きの伝承を持ち、土蜘蛛を切ったとされる源氏の宝刀。髭切の兄弟剣である膝丸が、長い歴史の中でも同じ場所に留まるこ

とのなかった二振りの刀が、共に肩を並べ今ここに在った。

「簡単に倒せるなんて思わないでよね　まだ始まったばかりなんだから!」

感触を確かめるべく蜘蛛切をクルクルとバトンのように回し、不敵な笑みを浮かべながらそう告げる妖狐。対し少女は無表情に、再度怨霊達を手繰り寄せる。しっかりと握り締めた二振りを手に、妖狐は少女目掛け駆け出した。

「……なんだよ、あれ」

黒き弾幕の中を天狗や吸血鬼にも劣らぬ速度で飛び回る妖狐を見て、魔理沙がどうにかそれだけを呟く。実際この場の全員が、魔理沙と同じ心境だっただろう。

蒼衣の血を飲むと同時に人の姿を得て、爆発的な力を手に入れた妖狐。元々保有している霊力には目を瞠るものがあつたが、まさかここまで伸びるなど誰が想像し得ただろう。

加えてあの能力　無^{ゼロ}から有^カを生み出すあの力。最初の刀こそ簡単に砕けてしまつたが、今振るっているのは紛うことなき至高の一品。まさか本物ということはないだろうが、その秘められた力は本物に

も勝る程だ。

「……………どうするの？」

現実が脳の処理許容量を超えたのか、ぽかんとした表情で兄に振り返り尋ねるアリス。表情が神綺そっくりだなあとか考える辺り、蒼衣も結構パンク寸前だったりする。

ともあれ現状を鑑みて、蒼衣は思考を巡らせる。襲って来た謎の少女は能力を使う度自分にダメージが来るにも関わらず、自分達を殺そうとしている。そして妖狐が人の姿となり、少女を止めようと戦っている。あまりにも不明瞭過ぎるのは確かだが、

……………考えるまでもなかったな。

「とりあえず妖狐については保留だ。敵対するつもりもなさそうだしな。言葉も通じるみたいだし、あいつと強力してあの子を止める」

「妥当なところだね」

蒼衣の下した決断に、萃香が拳を掌に打ち付けながら不敵に笑う。あの理不尽な能力を持った少女を止めるには、同様に理不尽な能力で立ち向かうしかない。とびっきりの戦力が増えたのだ、やってやれないこともない

「俺と萃香とあいつで前に出るから、アリスと魔理沙はサポートを頼む。こいしとフランは母さんと一緒に下がっててくれ」

手早く方針を纏め、蒼衣はゆるりと目を閉じる。体内に眠る一つの扉を解放し、その最奥にある渦へと手を伸ばすイメージ。深淵の解放 その前準備だ。

……少しばかり、本気を出すか。

膨大な魔力を手繰り寄せつつ、蒼衣はそんな思考を抱く。全力を以てあの少女を止めようとしている自分に、若干のおかしさも感じた。だが、きっと何もしなかったら後悔する。世界全てを呪う少女かつての自分のような少女を放っておくことなど出来るはずがない。自分はアリスや神綺という心優しい人達に救われたが、目の前の少女にはそれがない。

だからこそ、その苦しみを知っている自分が止めなければならぬ。

絶対に止める その決意を固めながら、蒼衣は『それ』と繋がったことを確認する。ゆっくりと目を開きながら、蒼衣は己が抱える闇を解き放った。

イメージを顕現する程度の能力　それが彼女の目覚めた力。脳内にイメージし思い描いた刀を、自らの霊力を以て物質化させる能力だ。

ここで重要なのは、あくまでも物質化するのには自らのイメージであるということ。自らの想像が不完全であれば、創造されたモノも当然不完全。現に不明瞭なイメージしか出来なかった最初の刀は、あつという間に砕け散ってしまった。

だが鬼切と蜘蛛切は違う。様々な伝承や武勇伝を持つ、歴とした実在する刀だ。その口伝は聞き手の想像力を膨らませ、有り得ない程力強い刀をイメージさせる。

もちろん本物の鬼切と蜘蛛切は、外見こそ他の刀となら変わらな。学のない者になまくらだと言って見せれば、簡単に納得されてしまう程に。当然奇妙な刀身も鏢も存在しない、至って普通の刀である。

ならば何故この刀は異形なのか　その答えこそが『イメージ』だ。

伝承こそ広まっても、源氏の宝刀であるそれを見ることは能わない。だから人々は想像力を働かせ、己の脳内に己だけの宝刀をイメージした。ましてや鍛冶で生計を立てて来た者の末裔、人ならざる者のイメージだ。姿形こそ原型オリジナルとは違うが、その刃は文字通り鬼さえも切り裂くだけの力を持っている。

ある意味本物以上に本物として相応しい、真正銘の妖刀だ。

左手の蜘蛛切で前面の弾幕を両断し、返す刃で少女へと斬撃。その白刃は容易く回避されてしまうが、その先まで考えていた妖狐の鬼切が少女の身体へと吸い込まれるように突き出される。やむなく少女は能力を行使し、呪いで速度を殺して鬼切の軌道を逸らすもその時は既に蜘蛛切が振るわれており、少女は後退を余儀なくされる。それを追って飛び出す妖狐も相俟って、まるで二人きりの鬼ごっこのようにも見えた。

確かに少女の能力は強力だが、それでも限界は存在する。蒼衣や萃香のようなパワータイプの攻撃は、どれだけ強かろうと所詮は一撃たった一回の能力行使だけで、いとも簡単に止められてしまう。

しかし妖狐の攻撃は違う。一撃の威力こそ蒼衣達の半分にも満たないが、十分致命傷足り得る上それが怒涛の連撃となつて叩き込まれているのだ。妖狐の流れるような太刀筋は一秒に十近い斬撃を誇り、臨機応変にくるくると太刀筋をシフトさせている。ただでさえ能力の反動がひどく、回転が速い為反撃にも移れない。よって少女はどう足掻いても、後退せざるを得ないのだ。

だが少女もただ下がっている訳ではない。黒き弾幕をばらまきながらも力を練り上げ、反撃の機を窺っている。執念なのか意地なのか
いずれにせよその意志には感嘆せざるを得ない。

鬼切の一閃を躲した少女はくるりと身を回し、特大の黒き弾を妖狐

目掛けて解き放つ。対し妖狐は身を捻りながらの斬撃を以て、その漆黒の球体を両断した。少女はなお下がりがつつ、牽制に小振りの弾をばらまいていく。

しかしそんな融通こつこは、闇の大剣が弾幕を切り裂いたことで終わりを迎える。少女と同じ赤い瞳を輝かせた魇蒼衣月が、黒鐵の一撃と共に戦場へと舞い戻ったのだ。

突然の介入に二人共呆気にとられるが、立ち直るのは妖狐の方が速かった。まだ動きを止めている少女目掛け、身を捻り力を乗せた二刀の斬撃を叩き込む。少女もようやく状況を認識したのか、慌てて両の手で鬼切と蜘蛛切を受け止める。だが発動が遅かった為か力の全てを流し切れず、不安定な体勢でギリギリ堪えている状態だった。

魇月は躊躇うことなく黒鐵を振りかぶり、練り上げた闇を纏わせた大剣を振り下ろす。対し少女は苦々しげに二刀を弾き返し、魇月並の跳躍力で後退した。重力か摩擦抵抗力か　おそらくはその辺りを呪ったのだろう。

「……状況はわかるよな？」

妖狐へと振り返った魇月が、確認するように一言だけ呟く。彼の瞳は色こそ先と違うが、その意志には一片の揺らぎもない。彼も妖狐も目的は同じ　ならば協力し合えるはずだ。互いが互いをカバーすれば、きつとその力は数倍にも及ぶだろう。

「当然。あの子を止める、でしょ？」

ニヤリと笑いながら答える妖狐に、話が速くて助かると言わんばかりに不敵な笑みを返す魎月。血を飲んだ影響か、二人共どこか似通っている気もする。

「一分 いや、三十秒でいい。お前の力であいつの動きを止められるか？」

表情を引き締め黒鐵を構えながら、魎月が背後にそう問い掛ける。妖狐はその問いに脳内の刀剣書架を漁り、使えそうなものがないか
検索

該当物、発見。

「ちよーつとだけ痺れるかもしれないけどオツケー？」

「……後遺症とか残すなよ」

確認するように尋ねる妖狐の声に、忠告を残しながらも頷く魎月。はいはいと気楽に答え、妖狐は右手の鬼切を地に突き刺した。

妖狐はゆっくりと目を閉じ、脳内に意識を集中させる。今回の刀は少しばかり『特殊』な為、より強く克明なイメージを描かなければ

ならない。臃げだった全体像を少しずつ鮮明にしていき、完全なる刀としてイメージする

「マテリアライズ
顕現 雷切！！」

イメージが完全に固まった瞬間、目を開きながら妖狐が高らかに叫ぶ。瞬間、瞼の裏に映る程渴望したその刀が、イメージそっくりそのままの形で彼女の右手に握られていた。

八つの円から幾何学状に線が結ばれた鍔に青い柄、刀身の付け根の部分が奇妙な形で歪曲しているのが特徴的な刀。鬼切や蜘蛛切程ではないが、しかし強烈なオーラを放っている。

イメージ通りに物質化出来たことに満足しながら、妖狐は感触を確かめるようにくると雷切を一回転させる。そのまま身体を弓のようにならせ、逆手に構えたそれを少女目掛け高速で投擲した。

かなりのスピードで投擲されたそれを、しかし少女は軽々と躲す。いかに速度が乗っていようと所詮は点の攻撃。か細い射線上から逃れてしまえば、当たることなど万に一つもない。能力を使うまでもなく、雷切はあっさりと躲され地に突き刺さった。

だがそれさえも本命ではなく、鬼切を拾った妖狐は少女の回避先へと先回りしていた。交差するように横薙ぎで振るわれた二刀をしかし、少女は屈むことで回避する。純白の髪が僅かに断たれ宙に舞うが、少女は気にせず右の黒き手を妖狐の心臓目掛け突き込まんとする。

が、少女の右手は妖狐へと触れる前に地へと叩き付けられた。いや、右手だけではない。彼女の身体そのものが、地べたにはいつくばることを強要されている。

何に？考えるまでもない。こんな芸当が出来るのは、ブラックホール深淵を操る彼一人だけ

身を回し体重と遠心力を乗せ、黒鐵を叩き付けようと魎月が落下するようにして少女に迫る。分厚く黒い鋼の刃は、見る者に嫌が応でも断頭台ギロチンを想起させる。漆黒の衣も相俟って、さながら魎月は執行人 死神のようだ。

眼前の脅威死に舌打ちしつつ、少女は能力を行使する。自らを縛る引辰の力を呪い、重力の楔から己を解き放った。即座に身を転がし黒鐵の軌道から逃れ、少女は俊敏に身を起こす。血を吐き捨てながらも両の手を振るい、怨霊達を二人目掛け殺到させる。

だがそれは極太のレーザーと業火纏う拳によって、標的に届くことなく消滅する。少女の一瞬の驚愕は、しかし捕縛用のワイヤーを付けられた人形達が周囲に展開されたことによって心の片隅に押しやられた。

状況は五分 いや、徐々に少女の方が劣勢に追い込まれている。妖狐の加勢と能力の反動とが合わさり、少しずつだが天秤が傾き始めた。逆に言えばこれだけの条件が揃ってようやく、両陣営の実力は拮抗しているのだ。

単に殺すだけならば、それこそ十秒も掛からない。ブラックホール高压重力で潰すなり、『目』を破壊して爆散させるなり、手段はいくらでもある。

まさに指一本で事足りるレベルだ。

だが蒼衣達はあくまで少女を救う道を選んだ。相手を傷付けることなく無力化するには、相手と互角程度では圧倒的に力不足。ましてや相手はありとあらゆる力を呪う付喪神　並大抵のことでは抑えられないだろう。

しかし妖狐の参戦により、欠けていたピースは集まった。全員が全員の全力を発揮し、カバーし合い、互いの弱点を消していく。こと手数という一点においては、妖狐の右に出る者はいない。これなら行ける　知らぬ間に全員の顔に、希望の色が宿り始めていた。

「そこっ！！」

魔理沙のレーザーに気を取られた隙を逃さず、萃香が踏み込みと共に左の拳を打ち込む。威力を減殺されダメージは通らないが、鬼の猛攻はまだ止まらない。くると身を回しながら右の肘を叩き込み更に踏み込んで左脚。一発一発が岩をも砕く力を持ちながら、しかも秒にも満たぬ間に矢継ぎ早に放たれる。少女も呪いで威力を打ち消すが最初程切れがなくなってきたおり、表情に苦いものが混じる回数が増えて来た。

ここが正念場と踏んだのか、低く身を屈めた妖狐が地を蹴り加速。神速の踏み込みを以て、大上段より二刀を振り下ろす。さながらそれは、肉食獣の二本の牙か　妖狐の全力が込められた、これ以上ない最高の一撃だと理解出来た。

しかし少女は躊躇わずに能力を行使し、二刀を片手で受け止める。

刃が肉を裂き鮮血が流れ出すが、少女は気にも留めず右手に黒き力を集束させていく。

「舐めるな……」

ぼそりと漏らされた声に宿るのは、果たして憎悪か悪意かはたまた殺意か。そのどれでもあつてどれでもない感情を込め、少女は右手を妖狐の腹へと叩き込んだ。

細腕から繰り出されたとは思えぬ重く鈍い音と共に、妖狐の身体が宙に舞う。あまりの衝撃に手放した二刀が、地に落ち金属質な音を立てる。だが

彼女は、笑っていた。

「五雷神君の天心下り、十五雷の正法を生ず」

この状況　会心の一撃を当てたと思つた少女が、ほんの一瞬油断することを見越していたかのように、ダメージの見受けられない様子の妖狐は動き始めた。空の右手で印を組みながら、彼女は唄う様に言葉を紡いでいく。器用に空中で体勢を整え、軽やかに着地しながら妖狐は腕を振るう。その一連の動きはまるで、鮮やかな舞を見ているかのようにだった。

……… 馴染む。わかる。理解出来る。この能力の扱い方が、自身の力を十全に発揮出来る戦い方が！！

「十五雷正法、三運 禁！！」

やがて妖狐が祝詞を終えると同時、稻妻の如き青白い奔流が昇竜の様に天を貫いた。

『少女の真後ろにあつた雷切』を、支点として。

戦国時代から安土桃山時代に掛けての武将であり、人格者として知られる立花道雪が雷神を切ったとされる刀 雷切。古来よりこういった伝承では、切ったモノの力が刀剣に宿るのが付き物だ。真の雷切がどうかは知らないが、少なくともこの雷切には落雷にも勝る雷の力が込められている。担い手がそうイメージしたからだ。

「っ、ぐ……！！」

轟雷と称するに相応しい雷撃を超至近距離で受け、さしもの少女も動きが止まる。苦悶の声を上げる少女の病的なまでに白い肌を、帯電した様に青白い稲光が迸っていた。

確かにあの呪いは理不尽なまでに強力だが、反面しつかりと対象を認識し指定しなければない為、発動に僅かなラグがある。正面から

来る攻撃ならばともかく、意識外である背後からの雷に対しては即座に反応することが出来ない。だから不意を突く形で放たれた今の雷撃は、呪いで相殺することが出来なかったのだ。

雷切を最初に設置する^{手放す}ことで意識から逸らし、本命に見せ掛けた二刀で設置ポイントに誘い込むなど、一体誰が想像出来よう。

「お望み通り止めてあげたわよ!!」

「よくやった……!!」

両手に喚び戻した鬼切と蜘蛛切をくるりと回しながら宣言する妖狐にそう言い残し、魇月は地を強く蹴り飛び出した。あれだけの雷を浴びた以上、すぐに動くことは出来ないはず。ならば勝機は今

「蒼衣君!!」

神綺の声に視線を向ければ、魇月目掛けて飛来する何か。キャッチしてみればそれは、彼岸花をあしらった髪飾りだった。目配せすれば、真剣な表情で静かに頷く母の姿。

それだけで魇月は、彼女の意図を察した。

少女まであと十メートル。重力操作が可能な魍月にとっては、一秒もあれば踏破出来る程度の距離。だが、

「っ、な……!?!」

あと八メートルというところで、魍月の動きが完全に止まる。移動力を呪われた。そう気付いた時にはもう遅い。少女の瞳は真っ直ぐに魍月を見据え、彼の身体を宙に縫い留めていた。

「魔理沙あつ!」

手は動く。そう確認すると同時、魍月は手中の髪飾りを白黒の魔法使い目掛けてぶん投げる。意図を察した魔理沙は器用にそれをキャッチし、魍月の代わりだと言わんばかりに少女目掛けて加速する

「ちっ……!!アリス!!」

しかし少女まで六メートルという地点で、魔理沙も急に動きが止まる。対応策を知っている魔理沙は、宙に髪飾りを放り投げ少女の名を呼んだ。キャッチした上海と共に、二人の意志を継いだアリスが駆け出す

「兄さん!!」

少女の視線が向けられるや否や、アリスは兄へと髪飾りをパスする。もはや限界が近いのか、少女も一度に一人しか呪って来ない。融とつこにも程があるが、これ以外に道はない

「つぐ、あああああつ!!」

あと四メートル 本格的に危機感を覚えたのか、少女が吐血しながらも右手を振るう。魇月の動きを止めると同時、大量の怨霊を叩き込んで来た。動きが封じられている以上、避けることは出来ない

「頼むつ!!」

判断は一瞬 髪飾りを背後に放り投げ、妖狐の少女へと全てを託す。爆発に吞まれた魇月に何かを言いかけるも、妖狐はそれらを切り捨て駆け出した。

「くっ……!!」

「JG……!!」

拒絶するかの様に放たれる弾幕を掻い潜り、妖狐はただひたすらに走る。他には何もいらぬ、前へ進むことだけを考えひた走る

「いい加減っ……!!」

当たらないことに業を煮やした少女が、両の手を握り締めた。同時、妖狐の動きが完全に停止する。有りったけの力を注ぎ込んだのか、指一本動かすことが出来ない。

「しまっ……!?!」

まだ余力が残っていた？否、そんなはずはない。現に少女は口の端から生命の象徴たる紅い液体を流し、ぽたぽたと血溜まりを生み出しているのだから。

つまり彼女を衝き動かしているのは、彼女自身の意志ということに他ならない。強靱な精神力で身体を無理矢理動かし、命を削って能力を行使しているのだ。

凄まじいとは思っていたが、ここまで来ればもはやそれは執念などという生易しいものではない。どこまでも純粹で、一途なまでのその悪意は、まさに呪いそのものだ。

だが、そんなものに負ける訳にはいかない。

いくら強力な能力チカラを持っていようと、彼女はただの迷子に過ぎない。信じていた者から捨てられ、己の存在意義を無くし、世界全てを呪ってしまった、そんなたった一人の少女でしかない。そして妖狐はそんな少女を救いたいと、目の前で泣いている子を助けたいと、そう願ったのではなかったのか。悔しさのあまり唇を噛み切りそうになる妖狐は、

「きゅっとしてドカーン!!!」

幼き少女の声と共に、自らの枷が砕け散ったことを知った。

673

少女が慌てて振り返ってみれば、最奥に控えていた少女が己の能力を行使していた。差し出したような右手を左手で握り締め、狙いを定めるようにして片目を閉じたフラン彼女の力は絶対破壊。森羅万象に終わりを与える、抗い様のない終焉の力。形のないモノでさえも彼女にとってはどこにでもある、破壊出来る何かでしかない。例えそれが呪いであっても、所詮は脆く儂いただのモノなのだ。

「行け!!!」

渾身の呪いを打ち砕かれた反動か、はたまた虚脱感の限界か。一瞬、しかし確実に動きが止まったのを見て取って、少年の声と重力カ加速

が妖狐の背中を押した。僅かに驚きながらもすぐに思考を切り替えて、妖狐は一路少女の元へ飛ぶ

半ば倒れ込む様な形になりながらも、妖狐は少女の場所へ辿り着く。強引に体勢を立て直し、少女のちっぽけな身体を思いつ切り抱きしめた。

「あなたが捨てられたっていうなら、新しい主人を探せばいい。あなたを傷付けようとする人がいたら、きっと私が盾になる」

呆気に取られる少女に対し、妖狐はそう語りかける。聞き分けのない子供にそうする様に優しい声で、大丈夫、大丈夫と。怯える子供を安心させるように。

「確かにこの世界は辛いことばかりかもしれない。でもあの人達みたいに、見ず知らずの他人の為に命を懸けられる人もいる」

だから、さ。

「その力の新しい使い方を探して、誰かの為に使ってみようよ。昔みたいに、ね？」

妖狐が言葉を紡ぎ終わると同時、少女の脳裏をとある人物の姿が過ぎる。彼女を作り出した人形師 年若い青年だった。

『力を貸して欲しいんだ、この村を守る為に。例えこの手を血に染めようとも、私には守りたいものがある』

その青年はいつだって少女を気にかけ、少女の手を汚すことを気に病んでいた。病で急逝するその時まで、少女と村のことだけを考える人格者だった。

彼を亡くしてからも少女はその意志を継ぎ、呪いで幾多のものを殺めて来た。そのせいで恐れられ、封じられ。憎悪で本当の願いを忘れ去っていた。そう、少女はただ、

自分を使ってくれる人が欲しかった

「お前に意味を与えてやる」

千年を超える激情の渦から解放された少女は、黒い少年の言葉を聞く。見上げた先、逆光を背に立つ少年の服は所々煤けていた。あれだけの怨霊を叩き込まれてもなお、彼は己の為すべきことを果たしたのだ。

「使つてやるよ、神の救い無き村を一人守り続けた殺めの少女。今この瞬間からお前の名前は 神無菖蒲だ」

かなあやめ
神無菖蒲だ

あれだけの会話で大方の事情を察したのか、そう口にしながら魍月
は少女　菖蒲をそっと抱きしめる。すっぽりと収まる程、彼女の
身体は細く華奢だ。こんな小さな双肩であれだけの力を背負ってい
た　そのことが魍月の心を痛ませる。かつての自分やフラン達を
見ている様にしか思えなかったから。

「望むなら使つてやる。壊れるその時まで使いきつてやる。だから
もう独りで泣くな」

だから魍月はそう告げ、菖蒲を正面から真つ直ぐ見据える。かつて
自分がそうされた様に、柔らかく微笑みながら。独りじゃないと言
つてやる。

彼女の求めていたちっぽけな、だけど大切なたった一つの願い。そ
れは彼女と似た道を辿った者と、彼女を知り救いたいと願った者の
想いで夢の花を咲かせる。気が付けば彼女はボロボロと涙を零し、
大声を上げて泣き始めた。やっと手にした小さな願いを、その手に
握り締めながら。

こうして少女は、千二百年の呪縛から解き放たれた。

第二十八話「名前」（後書き）

はい、これで式神編　妖狐と付喪神のお話は終わりです。相変わらずオリキャラの性能が壊れ気味ですが仕方ないよね！

次回、いよいよ人里編開始。

第二十九話「別行動」(前書き)

お待たせしました、二十九話です。ようやく人里編開幕です。課題忙しくて夏休みなんてなかった状態でちまちま書いてた結果ボリュームがひどいことに……w最近万越えデフォだね！wではどーぞー。

第二十九話「別行動」

「ここが人間の里か……」

魔法の森との境目に立ち、蒼衣が感嘆とも落胆ともつかない微妙な声を上げる。彼の目の前に広がるのは、目的地であった人間の里だ。広さは紅魔館や地霊殿くらいだろうか、少なくとも旧都程大きくはない。昼を過ぎた辺りだからか人も多く、賑わった様子を見せている。

「大都会の魔界に慣れてると面食らうわよね。私も最初はそうだったわ」

「私らからすればこれでも大分賑わってるんだけどな」

しかし外の世界と同等かそれ以上の文明を持つ魔界からすれば、何と云うか拍子抜けするような光景だ。魔界から出たことのない蒼衣にとっては、過去にタイムスリップしたような心境なのだろう。幻想郷と魔界、両方のことを知っているアリスと魔理沙が、苦笑と共にそう補足した。

「じゃ、私はお役御免かな。色々大変だろうけど頑張ってるね、蒼衣」

そんな様子を眺めていた萃香が両腕をぐつと伸ばし、首をぐるぐる回しながらそう告げる。元はと言えば人里までの案内の為に来たのだから、その責務を終えた以上離脱しても不思議ではない。見た目が人間に近いアリス達はともかく、角を持つ萃香は里の中ではかなり目立つ。その辺も考慮したのだろうか、蒼衣はそんな感想を抱いた。

「世話になったな。次会う時には礼に菓子折りでも持ってきてよ」

「えー、どうせならお酒がいいな」

せめてもの感謝を込めて蒼衣はそう言うが、萃香は気にするなどでも言いたげに冗談めかした答えを返す。そのままぶらぶらと手を振って、彼女は雑踏の中へと消えて行った。

「……とりあえずは服屋かな？」

周囲をぐるりと見回し、視線をとある一点で止めた神綺がそう提案する。その瞳に映っているのは先程一行に加わった、人波をおっかなびつくり窺っている神無菖蒲その人だ。彼女は白いボロ布一枚の上から蒼衣が戦闘時に纏う漆黒のコートを羽織っただけという、かなり浮いた格好をしていた。せつかく可愛い顔立ちをしているのだからそれらしい服を着せてあげたいというのは、ある意味当然の思考と言える。

「それもあるけど里の様子も気になるな……、二手に分かれようか」
蒼衣もその点に関しては完全に同意するが、かといって里の問題を放置する訳にもいかない。既に紫に頼まれてから十日も経っているとしても、目の前に里があるのにこれ以上引き延ばすのは気が引ける。なので蒼衣の思考回路は、その結論を叩き出した。

「母さん、アリス、妖狐に菖蒲は服屋組確定として……、残りは里を回るか」

「え、なんで私も？」

テキパキとメンバーを振り分けていく蒼衣の言葉に、アリスが疑問を差し挟む。本人としては当然兄と一緒に良かったのだが、その思惑を当の蒼衣に否定されたのだから仕方ないだろう。

「菖蒲は俺か妖狐にベツタリで、妖狐は俺とアリスくらいしかまだ打ち解けてないだろ？お前がいた方が気楽だろうし、俺達には里の案内役も必要。そうなると自然にこう分かれるんだよ」

しかし蒼衣の続けた言葉に、アリスは思わず口を閉ざす。現に菖蒲は蒼衣の陰に隠れるようにして周りを窺っているし、妖狐にしても今のところアリスや蒼衣、菖蒲以外と自発的な会話をしていない。

深遠なる闇が絡んでいる以上蒼衣を外すことは出来ないし、ここで
アリスを外してしまえば妖狐も菖蒲も完全に孤立してしまう。妖狐
は明るくフレンドリーだし、神綺もいるから大丈夫な気もするが、
それでもなるべく知人は多い方がいい。そこまで考えての言葉だと
理解してしまつた以上、ただの恋愛感情如きでそれをどうこうする
ことは出来ない。

「すぐ終わるし大丈夫さ。じゃあまた後で……」

「ストップ」

落胆するアリスの心情など知る由もなく、蒼衣はそう言い残し歩き
出す。が、その歩みは三にも満たぬうちに止められた。背後から妖
狐が声を掛けて来たからだ。

「……どうかしたのか？妖狐」

「それよそれ」

どれだよ、などと返した日には鬼切と蜘蛛切を持ち出しかねないの
で、蒼衣は大人しく留まり振り返る。視線の先には見るからにご立
腹な様子の妖狐が仁王立ちしているが、当然ながら蒼衣には全く心
当たりがない。

「なんで菖蒲には名前あげたのに私にはくれないの？不公平じゃない」

「不公平ってお前な……」

その理由が彼女の口から告げられると同時に、蒼衣は盛大にずっこけた。菖蒲には過去と決別する意味合いも込めて　蒼衣がかつてそうだったように　新たな名前を与えたが、道すがら彼女達の事情や経歴を聞いた時は確かに名乗っていなかった。

「断固抗議するわ。人権を尊重しなさい」

「いやお前人じゃねえだろ……」

ぶーぶーと不満を告げる妖狐に魔界にいる一人の友人の姿が重なり、蒼衣は呆れつつも思考を回転させ始める。この様子ではきつと名前をもらうまで収まらないだろうし、いつまでも妖狐妖狐と呼び続けるのも面倒だ。二元論で言ってしまうと、名前はあった方がいい。そう考え思考を巡らせること数十秒、蒼衣の頭にポンと一つの名前が浮かんだ。

「……水月鏡花、とかどうだ？」

鏡花水月、という言葉がある。水面に映った月がそうであるように、鏡に映った花がそうであるように。どれだけ手を伸ばそうと、例えそれが虚構であつても、真に美しいものは凡人の手には届かない。本物以上に美しく強大な虚構^刀を生み出す少女には、これ以上ないくらい相応しい名前だと思えた。

「お、いいじゃないそれ。気に入ったわ」

「綺麗な名前だね」

蒼衣の命名がお気に召したのか妖狐　鏡花は満足そうに頷く。いつものニコニコ笑顔で神綺も同意し、あっさりと鏡花の名は決定した。

「んじゃ鏡花も納得したし俺達はこれで……」

あまりにも簡単に決まった為面食らうが、ともあれこれで鏡花も文句はないはず。蒼衣は身を翻し、今度こそ歩き出そうとする。

が、服の裾を小さな手に掴まれたことにより、再度歩みは止まってしまった。

「……離してくれないと歩けないんだが」

ちらりと視線を動かしてみれば、菖蒲が蒼衣を引き留めようと蒼衣の上着を力強く掴んでいた。その瞳は明らかに蒼衣がいなくなることを恐れており、能力を使いかねない程に危うさを孕んでいた。

「ほら菖蒲、いつまでも服借りてる訳にはいかないでしょ？」

「……ん」

が、そんな二人の間に割って入ったのは意外なことに鏡花だった。窘めるように菖蒲の頭をばふふと叩き、しばらく逡巡した後頷きと共に菖蒲が手を離す。……本当に菖蒲に関してだけは面倒見がいいようだ。

「何かあったら連絡してくれ。すぐ戻る」

肩の上海とアリスの間で視線を往復させ、そう言い残した蒼衣が雑踏の中へ歩みを進めた。辺りを物珍しそうに眺めていたこいしとフランがすぐに続き、アリスに片手を上げて謝罪しながら魔理沙も後を追う。

「アリスちゃん、行こ？」

「…………ええ」

神綺の手を引かれながらの言葉に、アリスもハッと我に返る。道を知っているのは彼女しかない為、必然的に彼女が先導しなければならぬのだ。今すぐにでも兄の背中を追い掛けたい衝動を抑え、アリスは反物屋を指して歩き出した。

「……………あら？」

聞き覚えのある声に顔を上げてみれば、長い銀髪の少女と金髪の少女が何やら言葉を交わしている光景が見えた。見間違えるはずもない、あの少女は

「どつかしましたか？」

「いえ別に。少し見覚えのある顔が見えたものだから」

ふと店主に声を掛けられ我に返り、『彼女』は意識を目の前に戻す。彼女がいるのは一軒の花屋　品揃えと店主の対応の良さから、幅

広い人々に愛されている『Lotus Land』という名の花屋だ。花に異常なまでのこだわりを見せる彼女が、唯一認めた花屋でもある。

見れば店主である二十代後半くらいの男性が、首を傾げながらこちらを見ている。なんでもないわと微笑み返しながらも、その裏では高速で思考を回転させていた。

……まさかあなたまで幻想郷こいしじに来てるなんてね。一体なんのつもりかしら？

先の二人は既に人波に紛れ見えなくなってしまうたが、まさか白昼夢ということはないだろう。いかに巧妙に力を隠したところで、彼女にはわかってしまう。何分古い付き合いで、百年単位での友人なのだから。

「ごめんなさい、さっき頼んだのは次の機会にお願いするわ。代わりにサネカズラを貰ってもいいかしら」

「はい、畏まりました」

彼女の注文に一瞬首を傾げるも、店主はすぐに頷き店の一角へと向かう。ぱっと見大きめなキイチゴのように見えるサネカズラを三つ程選び取り、手早く束ねて包んで行く。ものの一分程で、店主は彼女の望むものを完成させていた。

「ありがとうしゃるりん。相変わらず手際がいいわね」

「あ、ありがとうございます」

出来上がった花束を受け取り、彼女は店主　しゃるりに礼を述べる。黒っぽいジーンズに赤いシャツの上からエプロンを着けるといふ花屋らしからぬ容姿の彼だが、花に関しての知識は彼女にも比肩し得る程だ。仕事も優秀だが人当たりも良く、評判の高さは彼の人徳によるところが大きい。実際に彼女の急な注文変更にもそつなく対応出来ているのがいい例だ。

「これで悪癖の寝落ちさえ治ればねえ……」

「うぐ……。ぜ、善処します……」

そんな完璧人間に近い彼の数少ない欠点の一つが、異常なまでの寝落ち癖。仕事熱心な為か、はたまた睡魔に愛されてでもいるのか。店頭でもしょっちゅう寝落ちており、顔に眼鏡の跡が付いていることもザラだ。近所の子供達はそのことで彼をよくからかっており、後で寺小屋の教師の頭突きによるお仕置きを受けていたりするのだが、それはまた別のお話。

代金を払い礼を述べ、彼女は店を後にする。サネカズラの花言葉は

再会　懐かしい顔を見たこともあり、不意に心変わりを起こしてしまった。彼には悪いことをしてしまったので、次に来る時は珍しい花の一つでも持って来ようかと彼女はそんなことを考える。

あの少女とはきつと、そう遠からず会うことになる。もし再会したその時は

「色々話を聞かせてもらおうよ？……神綺」

彼女はそう呟き、流れて来た人波に紛れ姿を消す。人波が消える頃には、白い日傘と花束を携えた彼女の姿はどこにもなかった。

「……で、実際どうするんだ？」

「一番手っ取り早いのは聞き込みだろうけど、魔理沙はともかく俺は顔馴染みって訳でもないし難しいか……？」

里の中で最も人の行き交う十字路で足を止め、魔理沙が背後に振り返りながら尋ねた。対し蒼衣はそう答え、手を口元に当てながら思考を巡らせる。

里の人間が深遠なる闇に生命力を奪われている　蒼衣が幻想郷へ

呼ばれた原因であるこの出来事は、あくまで紫という他人から聞いただけの話でしかない。しかも当の本人がいない以上、細かな事は全くといっていい程わからない状況だ。ならば知っている者　つまり里の人間達に聞くしかない。

だがそれは、少しばかり難しい話でもある。人里は狭い　つまり近所付き合いは密になり、常連は自然と顔を覚えられる。魔理沙は当然ながら顔馴染みだが、紅魔館から出たことのないフランや無意識に身を任せあちこちを放浪していたこいし、魔界から来て二週間も経たない蒼衣は面識がない為不審がられる可能性もある。

しかも聞く内容が内容だ。見ず知らずの人物にそんな核心を突くような質問をされて、果たして平静でいられる者が何人いるか。事が人命に関わる以上なるべく早急に、しかし慎重に動かなければならないのだ。

「……まあやるだけやってみるか。当たって砕けるって言葉もある訳だし」

だがこうして考えたところで、妙案を閃く保証はない。時間は有限にして貴重、刻一刻と過ぎていく。ならば行動あるのみ　そう結論付けた蒼衣に対し、魔理沙は見るからに呆れた表情を浮かべる。

「当たって砕けるの用法が微妙に違う気がするんだが」

「気にすんな。こいしとフランもそれで……」

魔理沙の野暮なツッコミをサラリと流し、蒼衣は後ろを付いて来て
いるはずの妹達に振り返る。普段なら間髪入れず同意を返すはずの
二人はしかし、

「わー、すごい!!」

「何これ美味しそー」

店頭に飾られた様々な物品、主に食品系を見て瞳を輝かせ
ている真つ最中だった。

「……お前ら人の話聞けよ」

『ほえ?』

思わず額を抑えながら蒼衣はぼやくが、当の本人達はよくわかって
いないのか仲良く首を傾げている。二人共世間知らずだから、周り
が目新しいものばかりで浮かれているのだろう。未来の大都心に夕
イムスリップしたような感覚に近い。……いや、若干似て非なるも
のか。

ともあれ気を取り直し、蒼衣は二、三咳払い。真面目な様子を感じ

取ったのか、二人の表情も真剣なものになる。蒼衣はそんな妹達の瞳を真つ直ぐ見据え、

「いいかよく聞け、おやつは三銭までだ」

あまりにも見当違いなツッコミをしていた。

『はい』

「突っ込むところが違えよ!!」

元気に答える二人を遮り、思わず魔理沙が全力で突っ込む。あれ、あなた確か異変解決しに来たんですよ？本題どこ？迷子？蒼衣の言葉にペースを狂わされ、魔理沙の脳内はそんな風にしつちやかめつちやかに掻き回されていた。……ちなみに幻想郷の貨幣価値は、だいたい一銭〃外の世界で言う百円である。

「せんせー、バナナはおやつに入りますか？」

「おかずじゃなけりや多分おやつだ。この論法ならそうめんとかもきつとおやつ」

「アバウトだなおい！？そして変なこと教えんなよ！！」

ふと疑問に思ったのか、こいしが手を挙げながらそんなことを質問する。蒼衣の暴論極まりない答えに突っ込む自分を、魔理沙は何故か恐ろしいくらいに冷めた目で見ていた。演劇を真上から見下ろしているような、意識が剥離する感覚　俯瞰とでも言うような状態だ。

「せんせー、オススメのおやつはなんですか？」

「麩菓子だな。俺は嫌いだが」

「チョイスが渋い！？てか嫌いなら何故薦めたお前！？」

だがそんな魔理沙を気にするはずもなく、ボケのループは止まらない。フランの問いに対する蒼衣の回答に、魔理沙は再び全力でツッコミ。自分の嫌いなものを勧めるなど、ある意味子供より性質タチが悪い。

「さて真面目な話だが、これから聞き込みをするので変なことはいないようにな」

『はい』

「切り替え早えよ!!むしろお前らが変だよ!!」

そんなやり取りをしておいて、蒼衣は一瞬で真面目な表情に戻り二人にそう諭す。まるで事前に打ち合わせでもしていたかのように答える二人に、魔理沙のキャパも限界を迎えた。読めない。主に場の空気とか会話の流れとか蒼衣の考えが。この時程竜宮の遣いの能力が羨ましかった時はない。

「何漫才みたいなのツツコミしてんだよ。M-1の練習か？」

「全部お前らのせいだよ!!」

拳句この力オスな空気を生み出した張本人にまでそんなことを言われ、半ば自棄になりながら魔理沙が叫ぶ。ぜえぜえと荒い息を吐いているのは、決して叫んだからというだけではないだろう。例えば精神的な疲労とか精神的な疲労とか、それと精神的な疲労とか。というかM-1見ていたのか蒼衣よ、というツツコミはこの際置いておこう。ていうか置いておかないと処理能力が限界に近い。

「まあふざけるのはこれくらいにして、と。こいし、一つ頼みがある」

「うん？なあに？」

怒涛のツッコミラッシュのせいで肩で息をしている魔理沙から視線を外し、蒼衣はこいしへと向き直る。若干ふざけ過ぎたのは否めないが、緊張しっぱなしでもいい結果は出ないだろう。かといって緩み過ぎるのもいけない、ここからは真面目にやらなければ。

「能力で聞き込み相手の無意識を操って欲しい。心象によって聞ける内容も変わってくるだろうし、違和感を抱かせたくないからな」

「ん、任せて」

蒼衣の口にした考えは、確かに理に適っていた。互いの印象や心象によって、会話の空気はそれこそ万華鏡のように多様な変化を見せる。少しでも場に溶け込み良い印象を持たれた方が聞けることも増えるはず。そう考えての提案だった。

だが全ての説明を聞き終える前に、こいしはそう頷き微笑む。彼女にとって蒼衣は誰よりも頼れる人であり、彼の言葉なら無条件で信じられる。端から見ると危うく見えてしまう程の、しかし強く確かな信頼だった。

「お兄ちゃんお兄ちゃん、私は？」

「フランはお休み。菖蒲の時に頑張ってくれたし、ゆっくり休んでる。な？」

そんな様子を見て対抗意識を燃やしたのか、フランが蒼衣にそう尋ねる。だが蒼衣の答えは単純で簡潔な、しかし優しいものだった。

フランの能力　ありとあらゆるものを破壊する程度の能力は、完全に戦闘に特化されたそれだ。人脈も会話術もない彼女は、少なくとも今の状況では何の役にも立たない。しかし蒼衣はそれを突き付けず、逆に先の戦いで功績　菖蒲の枷を壊し鏡花を救ったことを褒め、引き下がらせようとした。

「むー……、わかった……」

そんなことを知る由もなく、頬を膨らませ不承不承ながらフランが納得する。自慢げになだらかな胸を張るこいしと火花を散らし始めるフランだったが、二人纏めて頭を撫でられるとすぐに争いをやめ、全く同じタイミングで物凄く幸せそうな笑みを浮かべる。……好意とは恐ろしい。

「そんじゃまあ、始めますか。聞き込み調査」

やれやれと溜め息を漏らしつつ、蒼衣は視線を通りへと戻す。初めに聞く相手を選別しながら、四人は纏まって歩き出した。

「ここならあらかた揃ってるわよ。穴場だから人目も気にしなくていいし」

「わ、アリスちゃん通だ」

アリスが案内したのは、こぢんまりとした店だった。家屋の一階部分が店になっており、木製の看板には『八代屋』と書かれている。看板だけだと何をしている店なのかわからないが、店の中を覗いてみれば大量の服が陳列されていた。他の客がいる様子もなく、今の状況にピッタリのチョイスである。……ただでさえ菖蒲のコートの下は血塗れのボロ布なのだし。

「なかなか雰囲気いいじゃない。早く入りましょ」

「あ、ちょっと待って」

店全体を眺め回し満足げに頷き、菖蒲を引っ張りながら早速店に入ろうとする鏡花。だが背後からの声に呼び止められ、思わず足を止めてしまう。振り返ってみれば珍しく真面目な表情をした神綺が、二人を真っ直ぐに見据えていた。

「一応説明しとくね。今菖蒲ちゃんが付けてる髪飾りは、能力の反動を抑えるおまじないが掛けてあるお守りなの。さつき蒼衣君の血を貰ったお陰で大分安定してるけど、なるべく外さないようにね」

あの時泣き止んだ後、菖蒲は蒼衣の血を飲んでる。身体へのダメージはすぐにも回復させられるが、強すぎる能力に対する根本的な解決にはならない。結果として蒼衣の破格の力を持つ妖怪の血を飲ませ、内側から強化しようということになったのだ。

鏡花の手で左側頭部に飾られた髪飾りが能力を抑制していることもあって、今の菖蒲は大分落ち着いている。自らを使ってやると言ってくれた少年の顔を思い出しつつ、菖蒲はこくこくと頷いた。その様はまるで小動物のようで、見ている者を和ませる。

「鏡花ちゃんもそうだけど、血の効果は持って半日くらい。だから今血の効果を定着させるお守りを作ってるからちよっと待っててね」

補足説明を加えながら、神綺はニコニコといつも笑顔。しかし鏡花と菖蒲は、彼女に対する畏怖の感情を拭いきれなかった。

先程の髪飾りといい今のお守りといい、一体いつの間につったのかあれだけの魔道具を作るには、いかにすぐれた術者でも最低三日は掛かる。それをあの短時間で、しかも完全に菖蒲専用フルチューンした一品を作り上げるのは、尋常なことではない。

そう考えると彼女の笑みが、何か恐ろしいものに見えてしまう。ま

るで底が見えない井戸を覗き込んだような 得体の知れないあの
感覚。慣れているはずのアリスでさえ、背筋に薄ら寒いものを感じ
てしまう。

魔界神 魔の世界そのものを生み出した創造神。その肩書きは伊
達ではないのだ。

「……あれ？その口ぶりだと定期的に血を摂取するのでも大丈夫な
の？」

「それでも大丈夫だけど、蒼衣君に負担が掛かっちゃうからオスス
メは出来ないかな。こつちの方法なら一回定着させれば二度と摂取
しなくて大丈夫だし、戦ってる時とかに血が切れたら大変だからね」

ふと疑問に思った鏡花の質問に対し、神綺の回答は単純明快。いか
に人外と言えど血の量は人間とそう変わらないし、ましてや蒼衣は
素体が人間。失血死などしたらそれこそ洒落にならない。

「私は神様でお母さんだから、みんなが幸せになる方法を探さなき
やなのです」

えっへんと胸を張りそう告げる神綺に、鏡花と菖蒲は一瞬前の自分
を恥じる。確かに彼女は得体の知れない しかもとても強力なそ
れを持っているが、あくまでも彼女が望むのは平穩。家族や友人を
救う為に力を振るうのみで、敵意などこれっぽっちも存在しない。

彼女は既に、鏡花達に手を差し延べているのだから。

認識を改める二人をよそに、神綺はニコニコと微笑みながら店内へ。アリスに促され我に返り、鏡花と菖蒲も後を追った。

「いらっしやいませー」

店内に入ってまず四人を迎えたのは、柔らかな印象を与える女性の声。やがてパタパタと音を立て、奥から一人の少女が駆けて来た。

白い少女　陳腐だがそう表現するのが一番早い。白のゴスロリを身に纏った、アリスとそう変わらない年頃の少女だ。髪は長い茶髪で、頭頂部にピンと立ったアホ毛が見る者を何となく和ませる。声と同じで柔らかな印象を抱かせる、そんな少女だった。

「アリスさんでしたか。こんにちはです」

「こんにちはは、笙しやう。お邪魔するわね」

四人の先頭に立つアリスと、親しげな様子で話す笙。アリスの口ぶりから、かなり打ち解けていることが理解出来る。どうやら常連客のようだ。

「洋モノが入荷する日でもないのに来た、ということは急用ですか？」

しかもこの少女、アリスの指向性をしつかりと把握している。そのルーチンから外れた行動であることを見抜き、現状を素早く理解していた。見た目や雰囲気こそ可愛らしいが、なかなか侮れない少女のようだ。

「察しが良くて助かるわ。この子　　菖蒲に合いそうなものを見繕って欲しいの」

そんな笙の言葉に笑みで答え、アリスは背後にいた菖蒲を前に押し出す。一歩前になる形となった内気な少女は、初対面の少女相手にオロオロと落ち着かなさそうだ。だが笙は気にせず足を屈め、視線の高さを合わせ菖蒲をまっすぐに見据える。

「初めまして、菖蒲さん。私は八代笙^{やっしろ}、アリスさんのお友達です。怖がらなくても大丈夫ですよ」

そのままニツコリと、見ていて癒されるような柔らかい笑みを浮かべ、改めて自己紹介する笙。その態度が功を奏したのか、菖蒲も恐る恐る頭を下げて応える。そんな様子を見えますます笑みを深くしながら、笙は肩に下げたポーチきらメジャーを取り出した。

「透き通るような白い髪……、赤く綺麗な瞳……、華奢で儂げで小さな身体……、むむむ、難題です」

菖蒲の特徴を呟きながらも手慣れた様子でメジャーを扱い、身長やスリーサイズ、座高から腕回り足回りまで細かく計測する筈。役目を終えたメジャーを収納し店内を散策、あれでもない、これでもない、と様々な服を見ては思考を巡らせている。先程までとは打って変わり、まさに仕事人といった感じの働きぶりだ。

「……そういえばこの店、現代の服も多いのね」

そんな筈を目で追っていた鏡花が、その事実が気が付き口を開く。店内には確かに幻想郷風の服。どこかしらにフリルがあしらわれた和洋の服が揃っているが、半分は鏡花が身に纏っているジーンズやシャツなど、外の世界で見えるものが並べられている。鏡花のものは人の姿を得る際にイメージしたもの。外の世界から来た為そちらにイメージが偏っていたからだが、何故こんなにも外の服が揃っているのか

「魔法の森にある道具屋　香霖堂でしたっけ。家ではあそこと同じで外の世界の品物、特に洋服を扱ってるんです」

「もちろん普通のも揃ってるから結構便利よ」

菖蒲の服を選びながらも笙が補足説明を入れ、アリスが更に追加の一言。確か裏にまだ他のがとバックヤードに姿を消す店主を見送り、鏡花はへえ、と納得する。

……こちらに来て数時間の彼女はまだ知らないが、外の世界で忘れ去られたものがたまに幻想郷へと流れ着くことがある。紫と霊夢が張った二種の結界により二つの世界は隔てられているが、形あるモノは不変ではないし万全でもない。まれに結界に揺らぎが生じ、その際結界を越えて人間や物品が流れ込むその事象は一般的に『幻想入り』と呼ばれている。……ある意味鏡花も結界を越えて幻想入りして来ているのだが。

そういった訳で香霖堂やこの店も、そういった物品を扱っている。珍しい品物が集まる為、物好きご用達の場所だ。

「魔界のと似てるね」

「だからかもね。かなり足を運んでるわ」

魔界は結界で厳重に閉ざされており、十年前の蒼衣を最後に一度も外からのモノが流れて来たことはない。しかし魔界には、『教授』と呼ばれる少女が度々やって来ている。蒼衣と同じく外の世界から来た彼女は、幻想郷どころか外の世界すら上回る科学技術を持ち合わせていた。彼女の協力で魔界の文明は飛躍的な進歩を遂げ、いつしか『未来都市』とまで呼ばれるまでに成長。店先には洋服や電化

製品が並び、街には高層ビルも建っている。魔法と科学が融合した、まさに幻想の世界なのだ。

そんな環境で暮らしていた為か、魔界のそれとどこか似たこの店を見つけた時、アリスは郷愁の念を抱いた。花の密に誘われる蝶のように入店し、笙と出会い、いつしか友人となっていた。少しでも魔界に　そこにいる兄に近い場所へ行きたかったのかも知れない。

そんなアリスの思考を遮るように、パタパタと木張りの床を足が叩く音が響く。お待たせしましたと近寄ってくる笙は、手に一着の服を持っていた。それは

「……………巫女服？」

はいと答える彼女が抱えていたのは、アリスの言葉通り巫女服だった。丁寧に折り畳まれている為詳細はわからないが、パツと見ただけでもかなり上質なものと理解出来る。

「サイズが一回り大きいのしかなかったのですが、神秘的な雰囲気と相俟って似合うかなーと思ひまして。どうでしょうか？」

「なるほど、確かに合いそうですね。とりあえず試着してみましょ」

「……………ん」

笙の説明にふむふむと頷き、気負った様子もなく巫女服を受け取る鏡花。そのまま菖蒲の手を引き、店内の一角にある仕切られたエリア　試着室へと向かっていった。

「……………最近忙しいんですか？」

「……………ちよつとね」

カーテンの向こうから聞こえてくる鏡花の楽しげな声をBGMに、笙がこつそりと傍らのアリスに尋ねる。まさか馬鹿正直に『異変解決に奔走する兄を追い掛けてます』と答える訳にもいかず、気まずそうに視線を逸らしながらアリスはそう答えた。

「何かあったら言ってくださいね。出来ることがあれば力になりますから」

それだけのやり取りで何かを察したのか、深く尋ねることはせずにとだそれだけを告げる笙。その柔らかな笑顔は同性のアリスから見ても、とても魅力的なそれに見えた。

「……………ん、ありがとう」

思わず頬を緩めながら、笑みと共にそう答えるアリス。その答えに満足したのか、笙も安堵の笑みを浮かべる。

「はい、三人共ちゅうもーく」

そんな穏やかな空気を断ち切ったのは、鏡花の鶴の一声であった。三人が視線を送った先、自慢げな様子の鏡花が仕切りのカーテンを勢い良く開ける。

そこには、巫女服を着込んだ菖蒲がいた。

といっても、霊夢が着ているような腋の空いた特殊なそれではない、至ってノーマルな巫女装束だ。白の小袖と紫色の袴というツートンカラーで、腰には大きめな白いリボン。足元もご丁寧に足袋と草履と、幻想郷らしく和を重んじた服装だ。

「あら、似合ってるじゃない」

「菖蒲ちゃんかわい〜」

「やっぱりピッタリでしたね」

まるで生まれ変わったような菖蒲を、三人が口々に褒め称える。ややサイズが大きめな為手が半分程袖で隠れてしまっているが、それがまた菖蒲の小動物らしさを現しているように思えて可愛らしい。彼女の為に誂えたのではないか　そう思える程に似合っていた。

「本人も気に入ったみたいよ？」

鏡花も同意見なのか、ちらりと振り返りながら菖蒲を指差す。件の彼女はといえば大層気に入ったらしく、姿見の前でくるくると回り自らの容姿を確認していた。感情表現の乏しい彼女の口元に笑みが浮いていることから、一目瞭然だろう。

「決まり、かな？」

「みたいね」

その様子を見て、保護者二人の腹は決まったらしい。神綺がどこからともなく蝦蟇口の財布を取り出し、ごそごそと中を漁る。筈に会計を頼もつと、アリスが口を開こうと

瞬間、来客を告げるベルの音が鳴る。

振り返った五人の視線の先、入口に立っているのは一人の少女だっ

た。白のシャツに黒のスカートとモノトーンを基調とした服装で、白いリボンの巻かれた黒い中折れ帽子を被っている。髪は濃いめのブラウンで、同色の瞳は興味深そうに店内を眺め回していた。

「あら、なかなか良い雰囲気ね。お邪魔するわ」

ハキハキした綺麗な声はその少女のものだと理解する頃には、既に彼女は店内を散策し始めていた。飾られた服を眺めたり身体に当てたりしては、年相応の少女らしい笑みを浮かべている。……大分アクティブな少女のようだ。

「案外私達の世界の服も並んでるのね……、着てる人はあんまりいないみたいけど」

「蓮子さん……、ちょっと待ってください……」

何やら興味深そうな呟きを漏らす少女の声は、しかし再度鳴り響いたベルの音で遮られた。蓮子と呼ばれた少女を含む六人が振り向いた先、在ったのもこもこだった。

いや、正確には『大量の手提げ袋を抱えた一人の少年』だ。黒いTシャツに青のジーンパンを着用し、黒白を基調としたクロスシャツを羽織っている。髪と瞳は蓮子同様ブラウンで、その顔には疲労の色が見て取れる。……一体どれだけ引っ張り回されたのだろうか。

「何よベッテル、もうへばったの？男の子なんだから体力付けなきゃ」

「そういうセリフは一つでも荷物持つてから言ってください」

お楽しみを遮られたせいも蓮子が不満そうに呟くが、ベッテルと呼ばれた少年のツッコミを受けると同時あさつての方向を向いて下手な口笛を吹き始める。……古典的というかベタというか。なんだかんだで仲は良さそうだが。

「……あれ、メリーは？」

「だから待つてくださいつて言ったじゃないですか……。五分くらい前から見失ってます」

ふと何かに気が付いたのか、店内を見回しながら蓮子が疑問の声を上げる。その質問に答えたのは、当然といえば当然だがベッテルだった。

「だったら……」

「ちなみに呼び止めようとした俺の話も聞かずに先進んだのは蓮子

さんですからね」

それに言い返そうとする蓮子を遮り、ベッテルは坦々と事実を告げる。ピタリと動きを止めた蓮子は腕を組み、しばし思考。そして、

「……あるえー？」

おかしいなと言わんばかりの表情で、首を傾げたのだった。

「……変だ」

「……変だな」

「……変だね」

「……変だよ」

午後一時過ぎ。里の中で最も活気のある街角に立ち、仲良く首を傾げる影が四つ。打ち合わせでもしたかのように横一列に身長順で並

んでいるのは、言うまでもなく蒼衣、魔理沙、こいし、フランの四人である。

あれから蒼衣達は四人で固まって、十人程に聞き込みをしていた。こいしの能力で無意識を操ったおかげで、違和感を抱かれることなくすんなりと話を聞き出すことが出来た。不躰とさえ取れるような質問にもあっさり答えてくれたことに罪悪感がないといえば嘘になるが、後にそれは杞憂だったことが発覚する。

何故なら、里の人間を脅かしていた深遠なる闇ダイクマターはもう、完全に消滅していたのだから。

「……どういふこと？」

「……俺が聞きたいんだけどなあ」

思わずといった感じで漏れたこいしの呟きに、ぼやくようにして蒼衣が答える。あまりにもあまりな事態に、その場の誰も彼もが頭を悩ませていた。

話によると昨日の夜　ちょうどフランの深遠なる闇ダイクマターが消えた頃か。里の人間を覆っていた黒い闇が、『一瞬で消え去った』のだという。それもまるで、『示し合わせたかのように一斉に』だ。解放された人間達は体力の低下や記憶の混乱を除き、特になんの支障もなく日常生活を送っているのだとか。

話を聞いた永遠亭の医者朝方検診に来たらしいが、結果は全くの健康体。半日前まで仮死状態だったというのに、なんの異常も見られないのだという。実際に蒼衣達もその被害者達に話を聞いて来たが、仮死時の記憶がない以外なんの問題もないと言っていた。

当然ながら、蒼衣は全く何もしていない。フランの解放を確認すると同時に意識がブラックアウトし、翌四時まで寝ていたのは間違いない。魔理沙やあざいむの証言もあるし、それは確実だ。その後に関してもアリス達と森の中を彷徨ったり菖蒲を止めたりと、十分過ぎるくらいにアリのバイが揃っている。

ならば何故こんな状況になっているのか。妖怪の賢者たる八雲紫ですら干渉出来ない代物を、蒼衣以外の存在がどうこう出来るとは到底思えない。今この幻想郷で、一体何が起きているというのか

「魔理沙、こういった異変関連で詳しくそうな知り合いはいないのか？」

「……二人程心当たりがある。この時間だと慧音はまだ寺子屋だな……、稗田屋敷に行こう」

迷走する思考を押し止め、蒼衣は傍らの魔理沙にそう尋ねる。しばしの思考と共に魔理沙はそう答え、どこかを目指してすたすたと歩き始めた。

「稗田屋敷ってどんなところ？」

「行けばわかるさ」

その後を追い掛けながら、フランが興味津々といった様子で質問する。対し魔理沙の答えは素っ気なく、人波を縫いながらひよいひよいと先へ進んでいる。店先の物に気を取られるこいしを引っ張りながらも、蒼衣もひたすらに後を追い掛ける。……魔理沙本人としては単に、説明がめんどくさかっただけなのだが。

「事前に知識くらい欲しいんだが……」

「わかったわかった、教えるって。稗田屋敷ってのはな……」

蒼衣のその言葉はさすがに聞き過ごせなかったのか、魔理沙が振り返りながら口を開く。が、その説明は背後からの声により遮られ蒼衣達が耳にすることはなかった。

「あのー……、友達を探してるんです」

四人の視線の先にいたのは、所在なさ気に佇む一人の少女。紫色のドレスのような服を着用し、フランが被っているのと似たデザインのナイトキャップを被っている。髪はウェーブ掛かった金色で、サファイアのようなブルーの瞳は言葉通り誰かを探してあちこちを彷徨

徨っていた。

本来の蒼衣なら即座に相談に乗り、人探しを手伝うところ。しかし蒼衣どころか魔理沙や妹達でさえ、口を開くことが出来なかった。何故ならそう、眼前の少女があまりにも　あまりにも彼らの知る一人の少女とそっくりだったから。

八雲紫、という少女と。

「蓮子とベッテルっていう名前なんですけど……、知りませんか？」

青天の霹靂という言葉に相応しい、唐突で奇妙極まりない遭遇。荒れ狂う四人の心中を知る由もなく、柔らかな声で少女はそう尋ねたのであった。

第二十九話「別行動」(後書き)

まさかの秘封

という訳でやったった 時系列? そんなことは些末な問題(自重
まあ某添い寝サークルも早苗×メリーとかやってたしいいよね!

次回、蓮メリちゅっちy……、秘封倶楽部の面々となんやかんや。

第三十話「秘封倶楽部」(前書き)

大変長らくお待たせいたしました、三十話です。

色々と忙しくてちまちな書いてた為拙い文が更にアレですがご容赦を。

ではごーぞー。

第三十話「秘封倶楽部」

沈黙。場を支配しているのは、その一言に尽きる。蒼衣だけでなく魔理沙達も、突如現れた紫似の少女に警戒を露わにしていた。纏う雰囲気こそ正反対だが、髪や瞳の色、声に顔立ち、体格に至るまで、同一人物としか思えない程に似通っている。世界には自分と同じ顔の人間が三人いるという話があるが、彼女と紫はまるで双子。ここまで来ると『変装した八雲紫』と考えた方がしっくり来るレベルだ。

「あの……」

そんな剣呑な雰囲気を感じ取ったのか、紫似の少女がおずおずといった感じで声を絞り出す。その態度からはとてもではないが、あの胡散臭い紫とこの少女をイコールで結び付けることが出来ない。今の幻想郷は緊迫した状況にある。少なくとも蒼衣はそう考えている。というのに、これさえも演技だというなら悪趣味極まりない。

「……紫、なのか？」

「……？えと、私の名前はゆかりじゃありませんけど……」

さすがに自信がなくなってきたのか、魔理沙が恐る恐る尋ねてみる。当然といつかなんとというか、目の前の少女は紫ではないようだ。……まあ、仮に紫本人だとしてもはいそうですと答えるはずがないが。

「すみません、知り合いに似ていたので驚いてしまいました。あなたは？」

とりあえず眼前の少女 紫という仮の認識を意識し、蒼衣は丁寧に質問する。彼女が本当は紫だったとしても、あの様子では追求を続けたところで納得出来る答えが返って来るとは思えない。ならばここは話を合わせるのが一番 そう考えての結論だった。

「あ、いえいえ。私はマエリベリー・ハーンです。仲の良い友達はメリーって呼んでますね」

対し少女 メリーは恐縮したように頭を下げ、簡潔に自己紹介。聞き覚えのない名前を脳裏に刻み込み、蒼衣は頭を下げ返す。先程までの会話を反芻し、会話の糸口となりそうなものを探し 見付けた。

「で、メリーさん。友達を探してるって話ですけど……」

「はい、五分くらい前に逸れてしまって……。白黒の服にハットを被った女の子とジーパンとシャツを着た男の子なんですけど、知りませんか？」

そう、彼女は最初そう言っつて声を掛けて来た。友達を探していると
言う彼女はなるほど、確かに所在なさ気な様子。アリスが逸れた時
もようやく見付けた時は大泣きしてたなあ、と過去の記憶を懐かし
みながらも、蒼衣は里に来てから全ての記憶を洗い出していく。結
果、彼女の言う現代風の格好をした二人の姿は なかった。

「俺達は見てませんけど……」

振り返った先の三人も首を横に振るのを見て、蒼衣はメリーにそう
答える。見たのに見ていないと言うことは出来るが もしそうだ
としても言わない理由はないのだが 見ていない以上見たと答え
ることは出来ない。蒼衣の答えを聞いたメリーの表情は、明らかに
残念そうな顔だった。

「そうですか……。ありがとうございます」

「あ、ちょっと待ってください」

『アリス、ちょっといいか？』

そのままフラフラと立ち去ろうとするメリーを呼び止め、蒼衣は目
を閉じ軽く集中。里の中にある無数の反応の中から、最も馴染みの
ある個体に精神的な糸を繋ぐ。別の場所にいるアリス達からの情報
を求めて声を掛けたのだが、

『!?!?ににににに兄さん!?!?』

『…………何を動揺してんだよ』

相手
アリスは何故か目茶苦茶動揺していた。…………そりゃいきなり蒼衣好きな人から念話が来ればこのような反応は当たり前、当然の節理なのだが
蒼衣がそれを知るはずもなく。今日もまた蒼衣は乙女心という名の難題を相手に首を捻るのであった。

ともあれ大雑把に事情を説明し、アリスにそんな容姿の二人を見ていないか尋ねる。対しアリスが返して来た答えは

『…………その二人なら今日の前にいるわ』

大当たりであった。

『…………マジですか』

もしアリス達が見ていけば、程度の軽い気持ちだったのだが、こうもタイミングが噛み合つと逆に気持ち悪い。出来過ぎた偶然とでも言うのだろうか、幻想郷世の中は狭いなあと思わされる。

『菖蒲の服は調達し終わったから、二人を連れてそっちに向かうわ。場所は？』

『いや、聞き込みは終わりだ。とりあえず稗田屋敷を目指すことになったから、その途中で落ち合おう』

手短に報告を交わし、互いの行動を寄り合わせる二人。この辺りはさすが兄妹と言ったところか、互いに互いを知り尽くしている為『一を聞いて十を知る』を難無く実行出来ている。ある意味ベストパートナーだ。

アリスの了解の声と共に接続を切り、蒼衣は軽く息を吐く。不思議そうな表情のメリーを尻目に、魔理沙達へと向き直り口を開いた。

「どうやらアリス達とその二人が鉢合わせてるみたいだから、屋敷に向かう途中で合流しよう」

「……………世の中って狭いんだな」

魔理沙の呆れたような返答に、蒼衣だけでなくこいしとフランも苦笑い。どうやら四人共全く同じ感想を抱いていたようだ。……………まあ、探し人が自分達の連れと鉢合わせていたなど笑うしかないだろうが。

「そういう訳なんで……、案内しますよ。お友達の所まで」

雑談的な空気を断ち切って、話に置いていかれ首を捻りまくっていたメリーに向き直る。苦笑いを浮かべたままの蒼衣がそう告げ、道を知っている魔理沙を先頭に五人は歩き出した。

「……という訳で、そのメリーって人は兄さん達と一緒に行動して
るみたい。稗田屋敷に向かっているらしいから、途中で合流しましょ」

兄からの念話を切った後、事情を説明していたアリスがそう締め括る。目の前には先程聞いた特徴と寸分の狂いもなく合致する、現代風の装いをした少年と少女の二人組。……全く、運命というヤツは意地が悪いというか皮肉だ。

「すみません、助かりました」

「気にしない気にしない 一期一会、持ちつ持たれつだよ」

丁寧に頭を下げる少年に、気にすることはないと笑いかける神綺。

この辺り彼女の性格や信条、温厚な気質が表れている。言動こそ天然極まりないが、その芯となる部分は純粹な優しさだ。行きずりの

少年を養子として迎えるだけでも、その器の大きさがわかる。少年は一瞬、しかし確実に、彼女に慈母の姿を見ていた。

「世話になったわね。笙、ありがとう」

「……またね」

「いえいえ、よければまた来てくださいね」

その横でアリスは友人に感謝と別れの挨拶を告げ、笙は菖蒲の小さな一言に表情を綻ばせている。相手との関わり方がわからないだけで、根はとても純粹で良い子だ。その認識を再確認し、鏡花の心に温かいものが満ちていた。

「しっかしすごいわねえ……、テレパシーってヤツ？」

笙に見送られ店を後にし、稗田家に向かう一行^{六人}。そんな中最初に口を開いたのは、黒い中折れ帽子を被った少女。蓮子と呼ばれていた少女だった。

「魔法使いや妖怪にとっては割と普通のことよ。それこそ人間だって練習すれば出来るようになるわ」

「へー……、そんなもんなんだ……」

興味深そうにアリスを見る蓮子に、こともなげにそう返す張本人。実際念話というスキルは初歩の初歩　魔法の修業を始めてすぐに覚えるモノだ。アリスにとってはその程度のモノだが、力を持たない者からすれば十分以上にすごいだろう。蓮子の瞳にはとめどない好奇心の色が見えた。

「で、もう一度聞かせてもらっていいかしら？あなた達が幻想郷に来た経緯を」

そんな蓮子の視線に気付かないふりをして、アリスは先程も放った質問を問い掛ける。彼女には悪いが、どうしても信じられない。だからもう一度話を聞いて、状況を整理しておきたかったのだ。

「私の親友　メリーって言うんだけどね。彼女は生来特殊な『目』を持つてるの」

目というより心眼に近いけどねと補足を入れながら、蓮子は苦笑いと共に説明を始める。何度聞いてみてもおかしな話だが、理解し受け入れなければ始まらない。未知を解き明かすことこそ、人が発展して来た大きな理由の一つであるのだから。……魔法使いだという野暮なツツコミはこの際なしだ。

「彼女の目は境目　夢と現の境界を視ることが出来るの。夢の中で何度かこちらに来たこともあるみたいだから、五感の視覚とはまた別じゃないかなーって私は考えてるわ」

境界　やはり信じられないのはそこだ。夢と現、即ち幻想と現実の境界など、そう簡単に見えるモノではない。しかも境界　それは幻想郷の管理者に等しい、妖怪の賢者が持つ能力チカラに密接に関わっている。そんなモノが見える人間など、明らかに人の範疇に収まるものではない。マエリベリー・ハーン　八雲紫によく似た少女は、一体何者なのか

「それで今朝の……、四時くらいだったかしら。いきなり私の家に押しかけて来て、『行くなら今しかない』とかなんとか言って山奥まで引きずられてって、いつの間にかここに」

街中でタクシーを拾いひたすらに車を走らせ、霧が深い山の中で下車。五里霧中そのままの光景の中、先導するメリーに着いて行ったら幻想郷にいたのだという。……幻想アリスの存在が言えたセリフでもないが、あまりにも現実味に欠ける話だ。

「……よくもまあそんな時間帯に山奥なんて行けたわね。タクシー使うにしても女の子二人じゃ怪しまれるでしょ？」

「ま、秘封倶楽部としては一回くらい幻想郷に行つときたかつたし

ね。それにその辺はあいつに丸投げしたから」

感心半分呆れ半分といった体で鏡花が蓮子を見遣るが、蓮子はこともなげに背後を指差しサラリと答える。言われて振り返った二人の視界に入ったのは、

大量の荷物を抱えて疲労困憊な一人の少年だった。

「……聞きそびれてたけど、彼は？」

「私達の後輩で見習い部員ってとこ。要するに雑務担当ね」

「……荷物持ちは雑務に入るんですか」

アリスの質問にふふんと笑みを漏らしながら答える蓮子に、思わず少年　ベッテルが投げやりにツッコミを入れる。明らかに日系の風貌だが、もちろんこれは本名ではない。きちんとした名前はあるが、あだ名でしか呼ばれない為正すのを諦めたのだとか。……なんというか災難な少年である。

「細かいこと気にしないの。いちいち細かいとモテないぞー？」

「……前向きに検討しておきます、一応は」

頬を膨らませ反論する蓮子に、しばし間を置いて答えるベッテル。疲労の色が濃い顔からは、先の返答が嘘か真かの判断はつきそうにない。ほとんどが蓮子の買った物である荷物を抱え直し、ベッテルは再び歩き出した。

「何て言うか……、デコボココンビね……」

一応それで満足したのか、頷きと共に視線を外す蓮子を見て、アリスがなんともいえない微妙な表情で呟きを漏らす。つい昨日までこれに限りなく近いやり取りを紅魔館で見ていた気もするが、それと言うと最強クラスの人外二人に睨まれるので口は固く閉ざしておいた。

「……アリスと蒼衣も微妙に噛み合っていない気が」

が、そんな思考をしていたアリスの精神は、鏡花の不意打ちに近い一撃で根こそぎ持って行かれた。言われるまでもない 慌ただしい再会に始まり地霊殿や紅魔館に引つ張り凧で、兄とマトモに会話する機会など一度もなかった。今となってはこいしとフランも着いて来てしまっているし、更に可能性の芽は摘み取られてしまっただろう。

「……ドンマイなの」

「……ありがとう」

菖蒲の不器用ながらも優しい心遣いに、どんよりとしたオーラを発し始めたアリスの心も少しだけ和らぐ。今後は色々頑張ろうと内心決意しながら、アリスを先頭とした一行は稗田屋敷へと向かった。

「そつえば、さっき言ってた『秘封倶楽部』ってなんなんだ？」

蒼衣達を先導しながらメリーの話聞いていた、魔理沙がふと気になったように振り返る。こちらに来る時の経緯を聞いていた際に聞いたワードなのだが、特にそれらしい説明もなかった為気になっていたのだ。

「簡単に言えばオカルトサークルよ。といってももそれらしいことはあんまりしてないんだけどね。部員は私と蓮子とベツテルの三人」

会話により緊張も解れて来たのか、楽しそうに説明するメリーの弾んだ声を聞き、多少外の事情を知っている蒼衣は驚いた。オカルト

世論から言ってしまうえば胡散臭いこと極まりないモノを研究するサークルなど、冷やかし半分の人間か頭のネジが外れた人間で構成されるのが常だ。

しかし彼女達は本当にオカルトの力 幻想郷における『能力』を持っていて。宇佐見蓮子という少女は『星を見ただけで正確な時刻月を見ただけで現在位置がわかる』という能力、ベッテルという少年は『目を閉じるだけで正確な方角がわかる』能力を持っているのだとか。

「ふえー……、変わってるね……」

「変わり者同士、気が合ったのかもしれないわね」

その経歴故にサークル活動のような『みんなで同じ一つのことをする』という経験のないこいしが感嘆の息を漏らした。素直な反応が嬉しいのか、メリーも頬を緩ませている。出会いこそイレギュラーだったが、それなりに打ち解けてはいるようだ。

「しかし……、『境界を見る目』か……」

そんなほのぼのとした二人とは裏腹に、蒼衣は先程聞いたそのワードに危機感を覚えていた。メリーの能力である『結界の境界が視える』という能力 偶然かはたまた必然か、紫に瓜二つの彼女は能力すらも似通っている。あくまで『視る』ことしか出来ないらしい

が、夢の中とはいえ境界を越えた以上鵜呑みには出来ない。

能力というモノはとてつもなく不安定　蒼衣のように急激に力を増すタイプや、こいしのように突如変質するタイプもあるのがいい例だろう。計算式のように一定で誰にでも扱える科学とは違い、魔術は様々な要因が影響し合うことによって万華鏡のように姿を変える。

故にこそこの少女は、第二の八雲紫になり得る唯一無二の存在だ。先程から何度も思わされているが、このマエリベリー・ハーンという名の少女には得体のしれないところが多過ぎる。まるでパンドラの箱　解き明かそうとする者に災いを呼ぶそのようだ。

「考えるのは後だ、とりあえず稗田屋敷に向かおうぜ」

「……それもそうだな」

悪い方に傾き続ける思考のスパイラルは、しかし魔理沙の一言によってスッパリと断ち切られた。案ずるより産むが易し　わからないことをいくら考えたところで、正しい解答に辿り着くことは不可能に近い。ならば無遠慮な詮索などやめ、今自分達に出来ることをすべき　確かにその通りだ。いつの間にか止めていた足を動かし、蒼衣は慌てて魔理沙を追い掛けた。

「……あれ、慧音？」

「ん？」

と、再開した歩みもそこそこに、魔理沙が唐突に立ち止まる。その視線の先、気が付いたように振り返ったのは、一人の少女だった。

青のメッシュが入った、腰まで届こうかという長い銀髪。青いワンピースのような服を着用しており、スカート部には幾重にも重なった白いレースが付いている。やや開いた胸元には赤いリボンが飾られており、袖は短い白。何より存在感を主張するのは、頭に被った奇妙な帽子だ。文字に似た赤い模様が描かれ、六面体と三角錐の間に板を挟んだような形で頂に赤いリボンが飾られた青い帽子。一見すると弁当箱のように見えなくもないが、あまりにも失礼なのでこの感想は胸の奥に仕舞っておくでしょう。

「おお、魔理沙じゃないか。見慣れない顔をぞろぞろと引き連れてどうした？」

「阿求のところにな。ちょうど良かった、少し聞きたいこともあったんだ」

慧音と呼ばれた少女はこちらに歩み寄り、至って気楽に会話を始める。魔理沙の碎けた態度からも、彼女の内面が窺えた。どうやら悪い人ではなさそうだ。

……慧音？それって確かさっきの……

「あ、『飢饉者トーマス』のお菓子だ！」

「ちょ、ちよつと待つ……」

蒼衣がその事実思い当たると同時、不意にこいしが歓喜の声を上げる。メリーの手をぐいぐいと引っ張り、そのまま近くの駄菓子屋へと入って行った。……何かすぐく場違いなワードが聞こえた気がしたが、気にしたら負けな気もする。なので蒼衣はスルーを選択し、こいし達を見送った。

当然ながらなんの関係もない一般人であるメリーを、こちら側の事情に巻き込む訳にはいかない。故にメリーを遠ざけたかったのだが、蒼衣に気を遣ったのか、単にお菓子目当てなのか。無意識に生きたあの少女には、たまによくわからないところがある。だがきつかけはどうあれ、これでお膳立ては整った訳だ。

「あつちには私に任せて、蒼衣は好きなだけ質問しとけ」

「……助かる」

手の掛かる妹みたいだなと苦笑いを零しながら、魔理沙は軽く手を挙げ二人を追う。あの小型台風のような少女を放っておくのは不安

だし、魔理沙がいればそこまでひどいことにはならないだろう。素直に甘えることにして、蒼衣は魔理沙を見送った。

「初めまして……、だな。私は上白沢慧音、寺小屋で教師をしているワーハクタクだ」

今は仕事上がりだがな、と手を差し出してくる慧音に、蒼衣も同じ行動をとることで応える。白く柔らかな彼女の手は、保護者の温もりを想起させる温かさを宿していた。良い先生なのだろうなどと、自らの先生に当たる赤い少女を思い出しながら蒼衣はそう思った。

「蒼衣です。名無し妖怪でアリスの兄をやっています」

「ああ、よろしく。で、蒼衣。さっそくで悪いんだが……」

慧音同様手短に自己紹介を済ませ、蒼衣は握ったままだった右手を放した。笑みで応えた慧音だが、しかし微妙な表情と共に視線を蒼衣の上方へと向ける。

「……その子は？」

言われて僅かに視線を動かし、蒼衣は自らの肩に掛かる僅かな重みと温度を思い出した。蒼衣に肩車される形でいるのは、小型台風二

号 もとい、フランドール・スカーレットだった。

「お兄ちゃんはおげないんだからね！」

「……いやまあ、なんか懐かれちゃいまして」

がるるると威嚇の唸り声を上げながらがつしりと兄をホールドするフランと、苦笑で答えを返す蒼衣。先程の慧音との握手が原因なのか、蒼衣が盗られるとでも思ったのだろう。子供の独占欲って怖いなあ、蒼衣はズレた感想を抱いた。

「……まあ、その辺りは置いておこう。長くなりそうだしな」

「ええ、時間もあまりないですし」

気を取り直したようにそう言う慧音に対し、蒼衣は慣れたもの。肩こ車こに至るまでのあらずじ 主にこいしとフランの諍いやら五十回近くあいこが続いたじゃんけんやらを話していたら、それだけで日が沈みかねない。故にその辺りは綺麗にすっ飛ばすことにして、蒼衣は自分が幻想郷来た経緯や来てからの大まかな流れを手短に説明した。

「……なるほど、それで阿求のところに、か」

「はい。慧音さんはどう思いますか？」

話を聞き終えた慧音は考え込むように、軽く握った拳を額に当て目を閉じる。正直なところ蒼衣の行動にしても、深遠なる闇ダークマターの反応を追いあちこち奔走してただけ。元凶をどうにかしなければこの異変は終わらない、そしてその為に必要なのは情報だ。魔理沙が候補に挙げるくらいの存在ならと、嫌が応にも期待は高まる。だが、

「私が知り得る範囲では……、過去にそんな事例はなかったな。稗田の屋敷にはほぼ全ての幻想郷の歴史が記録されているが、望みは薄い方だと思う」

「……まあ、こんなイレギュラー過ぎる異変が頻発してたら堪りませんけど」

全くだと苦笑する慧音に合わせながらも、蒼衣は少なからず落胆していた。未だに手掛かりはゼロ。逸つてはいけないとわかっていても、そう簡単に感情を御することは出来ない。遅々として進まない状況に、焦りは募っていくばかりだ。

「ただ……、一つだけ引つ掛かることがある」

が、続けて口を開いた慧音の言葉に、蒼衣は妙なモノを感じ取った。虫の知らせとでもいうのだろうか。胸の奥がざわめくような、不快感を伴った嫌な感覚であるそれを。

「およそ十年前、一つ大規模な異変があったんだ。それこそ、幻想郷そのものを揺るがすようなとんでもない異変が」

………十年、前？

十年前。それは蒼衣にとって人生の転機。身も心もボロボロな状態だった当時の蒼衣。人だった少年は人の世から弾かれ、あちこちを彷徨いながら、

いつしか魔界へと辿り着いていたのだ。

奇妙な符合は蒼衣の心に静かな波紋を呼び起こし、我知らず背中から冷や汗が吹き出す。蒼衣と同じ深遠なる闇^{ダークマター}、蒼衣と同じ十年前。自分が何かしでかしたのではないか。思わずそんな馬鹿げた想像さえ頭を掠めてしまう。

「だがこの異変は 表向きには『なかつたこと』にされているんだ。痕跡を消し去られたかのように、何の資料も残っていない。しかもそれから起きている異変は計十一。規模こそ大なり小なりだが……、ペースが異常だ」

さざ波のように広がっていた動揺は、しかし慧音の言葉により一旦収束を迎える。隠蔽された大異変のことは気に掛かるが、資料がない以上それを知る術はない。情報のない過去の出来事より、情報のある現在の出来事を優先させるのが正解だ。

「およそ年一回ペースか……。普段は二、三年に一回くらいですか？」

「いや違う。年一回じゃない、『六年で十一件』だ」

二、三年に一回は合っているがなという慧音の言葉を聞きながらも、蒼衣は驚きを隠せずにいた。規模こそ多種多様に分かれるものの、平均のおよそ四倍近い頻度で起きる異変。これはいくらなんでも、

「異常過ぎる……」

「最近の幻想郷はどうも慌ただしいからな……。ついこの間の騒ぎでも寺の下から偉人が蘇ったそうだし」

思わずといった感じの蒼衣の呟きに、慧音も苦々しい表情で頷きを返す。この異変頻発も十年前の大異変が原因なのか？ならば空白の四年間はなんだ？とめどなく溢れ出す疑問の数々に、蒼衣の思考も

迷走し始める。これはあまりにも　厄介過ぎる異変に関わってしまったようだ。

「ふむ……、まあこれも何かの縁だ。屋敷で資料探しくらいなら手伝おう」

「いいの？」

思考を巡らせる蒼衣をよそに、考え込むようにして口を閉ざしていた慧音が不意にそんなことを言う。気が付いた時には頭上のフランが、唸ることも忘れて首を傾げながら聞き返していた。……無自覚なのだろうがその仕種は、その手の趣味がある人間なら一瞬で籠絡してしまう程の愛らしさであった。

「……今更だが、大丈夫なのか？日光とか」

問われて答えようとした慧音だが、ふと気が付いたように深刻と呆れが入り混じったような表情で問い掛ける。時刻は午後一時を過ぎたところか　頭上では燦々と、太陽が日光を振り撒いている。吸血鬼には様々な伝承があるが、取り分けその中でも有名なのが日光だ。

東洋の吸血鬼と西洋の吸血鬼　俗に言うヴァンパイアは、似ているようでまるで違う。東洋の吸血鬼は、まず外見が普通の人間そのままだ。日光を浴びれば一瞬で灰になるし、にんにくも十字架も弱

点足り得る。しかしその代わりに様々な能力に特化しており、狼・蝙蝠・霧などの変身能力、リーダーの『感知』、同族の傀儡化の『支配』などその幅は多岐に渡る。

一方で西洋の吸血鬼はといえば、羽や翼などの悪魔的な外見が多く目立つ。更ににんにくや十字架も効果がない。感知や支配などの能力は持ち合わせておらず、変身能力も蝙蝠以外ほとんど使われていない。代わりに多少ながら日光に耐性があり、一瞬で消えることはないという。

レミリアやフランは名前からわかるように、前世が真祖である亞愛も西洋系。西洋系故かさすがに一瞬で灰になったりはしないが、それでも太陽光を浴びたところは虫眼鏡の焦点を当てたかのように焦げていくはず。しかしフランは別段変わった様子もなく、蒼衣の肩に跨がったままだ。

「うん！亞愛がこれ付けてれば大丈夫だって」

「……あのお節介め」

一体何故　その答えは至って単純明快。認識をズラすという馬鹿げた力を持つ赤夜亞愛が、その力を発揮したからだ。フランが胸元から引つ張りだして来たのは、紅い宝石で形作られた十字架の装飾品。どうやら物にも力を植え付けられるらしく、レミリアにも同じ物を与えたそうだ。相変わらずお節介というか、捕え所がないというか　脳裏にあのチェシヤ猫染みた意地の悪い笑みが映ったので、蒼衣はとりあえずそのイメージを腹いせに殴ることで現実に復帰す

る。

「……まあ、ともかくだ。今回の異変には少し気に掛かるところがある。個人的に調べたいと思っていて、今から屋敷に向かうところだったんだ。情報は共有した方がいいだろう？」

「……すみません、助かります」

咳払いと共に気を取り直した慧音が、瞳に真剣な光を宿し蒼衣に話し掛ける。世話になる申し訳なさはあるが、蒼衣の決断は速かった。慧音は蒼衣の持つ知識と経験を、蒼衣は慧音と稗田屋敷が持つ歴史をそれぞれ欲している。共に目的はこの異変の解決。ならば手を組むのが妥当にして道理だ。

「魔理沙、こいし、そろそろ行くぞ」

「はい」

「お、案外速かったな」

話が纏まったところで、蒼衣は駄菓子屋内の二人に声を掛ける。答えた二人の手にあるのは、山程駄菓子が詰め込まれた袋だった。成り行きで引きずられたメリーも手に小さな袋を持っている辺り、ど

うやら楽しめたらしい。店員と思しき小柄な少女に見送られ、六人は店を後にした。

「……そついや聞きそびれてたけど、結局稗田屋敷ってどんなところなんだ？」

こいしが袋から飢饉者トーマスガム 線路上を必死の形相で爆走するみすばらしい身なりの青年がプリントされたそれを取り出し包装紙を剥がし始めるのを横目に、蒼衣は隣の魔理沙へと振り返る。メリーの登場で聞きそびれていたが、これから向かう先である稗田屋敷の情報を聞くところだったのだ。

「……余計なこと思い出しやがって」

「露骨に嫌そうな顔すんなよ……」

が、聞かれた魔理沙はと言えば、非常にめんどくさそうな表情を浮かべボソツとそう呟いた。そんなに嫌かと思う反面、どんな場所なのかと想像ばかりが膨らんでいく。慧音が申し出たのは資料探しの手伝い つまり書物の類が保管されているのだろう。紅魔館の大図書館や魔界の万魔図書館を思い出し、蒼衣は若干の懐かしさを覚えた。

「じゃあその辺りは私から説明しよう。ただ歩くよりは退屈しない

だろうし」

「あ、ありがとうございます」

包装紙を剥がすのに四苦八苦するフランに温かな眼差しを向けながら、慧音が名案だとばかりに口を開く。メリーの事情はあらかた聞いた為別段話題もなく、場を繋ぐのにも好都合だったので、蒼衣は迷うことなく即決した。

「そうだな……、どこから話したものか」

口元に手を当て思考する慧音を、こいしとフランが興味津々と言った体で見詰めている。フラフラと一人脇道に逸れそうになるメリーとその方向を修正する魔理沙に苦笑いしつつ、蒼衣は慧音の言葉に先生耳を傾けたのだった。

第三十話「秘封倶楽部」(後書き)

という訳で慧音先生登場。やっぱ人里と言えばこの方だね！

秘封倶楽部も加わって大分賑やかになったのはいいが魅魍魎の明日はどっちだ(おい)

次回、稗田屋敷で色々。

第三十一話「稗田乙女」(前書き)

お待たせしました、三十一話です。日常パート苦手なのに書きたいこと書きまくってたら13500文字程行ってしまった……。ノリって怖いね！)

若干gdったりネタに走り過ぎてる部分もありますがよければ見ていってやってください。
ではごーぞー。

第三十一話「稗田乙女」

「一言で言うなれば稗田屋敷は……、『幻想郷の記憶が眠る場所』かしらね」

お昼時で賑わう人里の通りを先導しながら、脳内の知識を纏めながらアリスは静かに口を開く。向こうの蒼衣達と同様、興味津津な蓮子にあれこれと質問されたので、解説を始めるところだったのだ。

「稗田家は里の人間の中で最も多くの資料を持つ、千年以上続く由緒正しい知識深い人間の家系なの。その膨大な蔵書には過去の幻想郷のあらゆる記録が収められていて、兄さんやあなた達のいた外の世界の資料も存在するらしいわ」

稗田屋敷に所蔵されている資料の数は、ちょっとした博物館並だ。千年もの間幻想郷を見続けて来た家系だ、そこに眠る物の数々は、見る者が見れば喜びの絶叫を上げるだろう。年表や古書は言うに及ばず、当時の物品や未解決資料に至るまで。理路整然と纏められたそれらは、知的好奇心を刺激すること請け合いだ。

「中でも取り分け有名なのが、稗田家に代々伝わる『幻想郷縁起』。現稗田家当主である稗田阿求が、千二百年も掛けて編纂して来た幻想郷のあらゆることが纏められている冊子で……」

『ストップ』

興が乗って来たのかとめどなく知識を吐き出すアリスを、蓮子と鏡花が両手を前に出すジェスチャーと共に止める。無論このまま放つて置いたら終わらないだろうという危惧もあるが、理由はそれだけではない。

「人間の家系なのよね？その阿求って人が千二百年も掛けてつかしくない？」

蓮子の鋭い指摘に賛同するように、鏡花と菖蒲もこくこくと頷く。そう、稗田家は人間の家系であり、人間の寿命はどう足掻いたところで百年前後が限界。その阿求という人物が千年以上もの時を掛けて編纂するのは、どう考えても不可能なのだ。

「ごめんなさい、ちょっと語弊があったわね。先に阿求のことから話しましょうか」

その矛盾を突かれお互いの認識のズレを悟ったのか、アリスが苦笑と共に謝罪する。幻想郷で暮らす者と、幻想郷に馴染みない者。見解や知識が異なるのは当然のことだ。

「稗田家には『御阿礼の子』^{みあれ}と呼ばれる子供が百年から百数十年単位で生まれてるんだけど、実はこの御阿礼の子 千二百年前から

転生を繰り返してる稗田家の開祖なの」

阿求はその九代目ねと補足しながら、アリスは現稗田家当主 九代目阿礼乙女の少女を思い出す。転生を続けて来たという背景を持ちながらも、平凡という言葉がよく似合う普通の少女だった。霊夢や魔理沙、咲夜のような色々とコメントに困る人間よりも、よっぽど人間らしい。

………魔界の先生も人間の割にぶっ飛んでたものね、色々と。

「つまり阿求は稗田阿求であると同時に、稗田阿礼でもあるってこと。彼女が転生しながら書き続けているから、人間でありながら千二百年も掛けられるって訳。一代に付き一冊出す決まりらしいから、阿求が出すのは九冊目ね」

脳裏に魔界で教鞭を執っていた少女 戦艦の如き船で外の世界から幻想郷へ辿り着いた赤い少女を思い描きながら、アリスは解説を続ける。過去の思い出に浸るのもいいが、今すべきことは稗田家の説明だ。

幻想郷縁起は元々力のない人間に妖怪の知識 弱点や対策を広める為に始めたものだったのだが、結界で隔離されて穏やかな今の幻想郷ではそんなことも少ない。だから今回の幻想郷縁起は、ちよつと趣が異なっている。具体的には、

「妖怪の弱点や対策という今までのスタンスを継続しつつ、妖怪の私生活に一步踏み込んでみたり、妖怪に取材して自己アピールしてもらったり……、ちよつと変わった妖怪資料集みたいな感じかしら」
それに加え当の妖怪達からも『強そうに書いてくれ』などと希望されておき、事実とは異なった大袈裟な内容になっている。本来の意味が見失われたかのように見えるが、その実幻想郷縁起は重要な役割を担っているのだ。

実際のところ、現在では妖怪が私利私欲の為に人間を襲うことは、ほとんどないと言っている。だがそれを馬鹿正直に書いてしまうとただでさえ稀にしか行われていない人攫い・妖怪退治が今まで以上に行われなくなってしまう、双方が平和ボケしてしまう。そうなるともし外の世界から強力な妖怪が幻想郷に入ってきた際、現状の妖怪では歯が立たずに幻想郷を支配されてしまう恐れがある。実際、吸血鬼異変においてそれに近い危機 外部から入ってきた吸血鬼によって幻想郷の妖怪が悉く打ち負かされるという出来事が起こっているのだ。

もちろん幻想郷のバランスである博麗霊夢や、幻想郷の管理者である八雲紫の力があれば、そんな危機が訪れようとおつという間に解決してしまうだろう。だがそれが頻発するようになってしまえば、いずれ二人共力尽きる。その時こそ幻想郷は、新たな支配者に服従することを余儀なくされてしまうだろう。

それを防ぐ為例え形式的なものに過ぎなくても、『妖怪は人を襲うもので、人は妖怪を退治するもの』という建前が必要。幻想郷縁起 阿求自身もその意図を汲んでおり、妖怪の危険度を水増ししているのだ。

「へー……、面白そう……」

『それだけの場所なら、この異変に関してなんらかの資料があるって可能性もあるしね』

興味が湧いたのか感嘆の息を漏らす蓮子を横に、鏡花が念話で確認を取るように語りかけて来る。アリスはそれに肯定の思念を返し、自分達の本来の目的を思い返していた。

元々彼女達が人里に来たのは、深遠なる闇に侵されている人間達を助ける為。こいしやフランの発現など想定外の事態こそあったが、紫が最初に依頼したのは人間の救命だ。感染者を放って置けばどれだけの被害が出るかわかったものではないので後回しにしていたが、命に関わる以上事は一刻を争う。

しかし実際に蓋を開けてみれば、感染した人間などどこにもいなかった。まるで紫の狂言に躍らされたかのように、深遠なる闇など影も形もない。前例などある訳もない理解不能な現実を前に、何も知らないアリス達はただ手掛かりを求めて奔走する以外の道もなく。途中でまた秘封倶楽部との遭遇に見舞われたが、情報を得るといふ目的は忘れていない。

一般人を巻き込むつもりもないし、関わってしまえば危険な目に遭う可能性も否めない。故に蓮子達が合流したら、即座に分かれ屋敷内で阿求に会う。そんな算段を立てていたのだが。

「じゃあ私達も行くところかしら、その稗田屋敷」

何の前触れもなく唐突に、蓮子がそう言った。

「……はい？」

「いや、だから私達も行くところかなって」

思わず素で聞き返したアリスに、蓮子が大真面目な表情で言い直す。冗談を言っているようには見えないし、彼女はそんな冗談を言うような少女でもない。

「幻想郷の資料が山程あるんでしょう？なら行くしかないじゃない」

「ご迷惑なのは重々承知ですが……、俺も興味があります」

生き生きとした表情で期待に身を踊らせる蓮子と、申し訳なさそうにしながらも瞳に好奇心の光を宿したベツテル。あまり異変に繋がりそうなことに関わらせたくなかったのだが、さてどう説得したのか……、

「いいんじゃない？」

「母さん!？」

そう考え思考を巡らせようとした矢先、神綺の承諾発言にアリスは勢い良く振り向く。彼女の懸念は念話で伝えたはず、ならば何故

「このまま勝手にフラフラされるより、慧音ちゃんに身の振り方とか色々教えてもらった方がいいだろうし。それに……」

正論過ぎる神綺の意見に、アリスは口を噤まざるをえない。確かに当てのない彼女達を放置して、戦場で再会するようなことがあれば最悪だ。その際絶対に守りきれぬ保証もないし、見知った顔に死なれでもしたら寝覚めが悪い。アフターサービスのバーゲンセールねと内心溜め息をつくアリスに対し、

「賑やかな方が楽しいよ？」

……………全く、本当にこの母親は。

「……………好きにして」

やれやれといった体で呟くアリスを尻目に、蓮子と神綺がわあいとハイタッチ。ドンマイだと言わんばかりに頭を撫でてくる肩の上海に礼を述べつつ、アリスは稗田屋敷に向かう足を速めた。

「……とまあそういう訳だ。理解出来たか？」

「非常にわかりやすい解説でした。慧音さん、ありがとうございます」

慧音の御高説を聞き終え、蒼衣は丁寧に頭を下げる。寺小屋で教鞭を取っていることもあってか、彼女の説明はわかりやすく無駄がない。さすがは先生、と言ったところか。

「ふみや！？」

気にするなと笑みを浮かべる慧音だが、つかの間の平穏な空気は軽い破裂音と共に破られた。反対隣に振り返ってみれば若干涙目になったこいしが、ガムの破片　破片？　で可愛らしい顔を汚していた。

「うー……、ベタベタする……」

「何やってんだよ……。大丈夫か？」

大方調子に乗ってガムを膨らませ過ぎたのであろうこいしに呆れつつも、ポケットティッシュを取り出し顔を拭ってやる蒼衣。八卦の水と組み合わせテキパキと世話をしてやるその様は、優しい兄という言葉がよく似合う。

「えへへー」

触れられるのが心地いいのか、頬を緩め笑みを浮かべるこいし。対し蒼衣は慣れたもので、ティッシュを飢饉者トーマスの包装紙で包むと同時に能力を行使。高圧重力でゴミを塵以下に押し固め、完全に消滅したそれを見届けふうと一息。相変わらず汎用性の高い能力である。……。横から恨みがましい視線を向けてくるフランに気付かない辺りは相変わらずだが。

「お、やっと終わったか」

「……お前は少し慧音さんを見習うべきだと思っぞ」

そんな蒼衣に近付いて来たのは、店を見て回るメリーの付き添いをしてきた魔理沙だ。彼女らしいというか何と言うか、こっぴどい話を

聞くのはあまり好きではないらしい。確かにアクティブなイメージがあるし、座って真面目にお勉強という柄でもないだろう。

「普段はこんな奴だが実は凄い努力家だな？暇さえあれば魔法の研究ばかりして」

「うわああああああ！？」

そんな光景に苦笑を漏らしつつ口を開いた慧音だが、悲鳴のような声を上げた魔理沙に遮られその言葉は途切れてしまふ。普段の彼女からは想像もつかない行動に慧音が首を傾げ、

「どうした奇声なんか上げて。悪い物でも食べたか？」

「余計なこと言つな！ああもう……」

心なしか頬を赤くし、慧音から視線を逸らす魔理沙。どうやら裏で頑張る自分というものを知られたくなかったらしい。天性の才能を持つ霊夢や反則レベルの能力を持つ咲夜に比べれば、魔理沙の能力、スキルなどは一般的なそれに過ぎない。故に彼女達に負けないよう日々頑張っているということなのだろう。そしてそれを他人に知られるのは、結構恥ずかしいらしい。

……… なんとというか。

「魔理沙って可愛い奴だったんだな」

「　　っ!？」

いじらしい魔理沙の態度に自然と、蒼衣の口からそんな言葉が零れる。それを聞いた瞬間、魔理沙の顔は瞬間湯沸かし機のように沸騰し、

「このバカ!バカ!大バカ!」

「ちょ、待、落ち着、痛え!？」

手にした箒を握り締め、蒼衣を叩き始めた。照れ隠しなのか一切の加減がなく、純木製の箒はかなり痛い。真っ先に助けてくれそうないしとフランはいえば、二人揃って恨みがましい視線を蒼衣に向けている。魔理沙に可愛いと言ったのがお気に召さなかったようだが、当然蒼衣がそんな乙女心の機微を理解出来るはずもなく。

「あ、いたいた……何やってるの?」

ようやく合流し駆け寄って来た鏡花が仲裁に入るまで、蒼衣はおよそ数十回も叩かれたのであった。

「いい加減機嫌直せよ……」

「うるさいバカ」

二組が無事合流してからも、魔理沙の機嫌は直らないままだった。いくら話題を振ってみても、つつけんどんな言葉しか返って来ない。再度こいしとフランに両脇を固められ、アリスを含めた三人から圧力が掛けられる中、蒼衣はほとほと困り果てている。頭上でオロオロしている上海が、そのまま彼の心境を反映しているようだった。

「私だ。蔵書の利用と阿求との面会を頼みたい」

「承りました」

一応原因の一旦を担っている慧音と言えば、素で気付いていないのか門前の使用人と思しき女性に話し掛けていた。顔見知りなのか手短かに言葉を交わし、あっという間に手続きを済ませ蒼衣達を手招き。この場を逃れる口実を得て、蒼衣は一も二もなく後を追いつけた。

だが門を越えた瞬間、そんなくだらない思考は全て吹っ飛んでいた。

古きよき和風のお屋敷　陳腐だがそう表現するのが一番速い。平屋立ての屋敷は年季が入っているのがわかるが、しっかりと手入れされており古さや貧相さを感じさせない。広大な庭には散りかけの桜の樹があり、軽く三部屋分はありそうなサイズの池には橋が掛けられ、池の中を錦鯉達がゆったりと泳いでいる。歴史の教科書に出て来るような、平安時代の大きなお屋敷　千年もの間守られて来た光景が、蒼衣達の目の前にそのまま広がっていた。

「すごいな……」

「外の世界なら文化遺産指定されてもおかしくないレベルね……」

思わず息を呑む蒼衣に、蓮子が冷や汗混じりに呟きを漏らす。確かにこんなものが外に残っていたら、一般人立入禁止クラスの文化遺産だろう。

そんな凄まじいものを目の前に驚きを隠せない蒼衣達とは裏腹に、こいしとフランはしゃがんで池を覗き込んだり恐る恐る手を入れてみたり。……感じ方の違いなのか、ただ精神が幼いからなのか。二人に掛ければ稗田屋敷でも、ただの地霊殿マイホームや紅魔館と変わらないよ。うだ。天真爛漫恐るべし。

「言っただろ？由緒正しい人間の家系だと。外から来た人間はみんな驚くな」

固まってしまった蒼衣達に苦笑しつつ、どこか自慢げに言う慧音。そのまま勝手知ったると言った体で、使用人と並んで歩き出す。門前の使用人とも知り合いだったようだし、稗田家とは懇意の仲なのだろうか。寺小屋で教師をしているということだし、

……その為の資料を求めて稗田屋敷こいに来ていても不思議じゃない、か。

そんなことを考えつつ歩くこと数分、慧音と使用人が一際大きな部屋の前で足を止める。新品同様の襖や綺麗に磨かれた床を見ても、屋敷の手入れがしっかりと行き届いているのがわかった。

「阿求様、慧音様とそのご友人がお見えです」

「ありがとうございます。下がってもいいですよ」

恐縮ですと後退する使用人が慧音に頷き、慧音は一片の躊躇いもなく襖を開ける。中には大量の書物と巻物があり、それに埋もれるようにして一人の少女が筆を走らせていた。

歳の頃は十と少しくらいだろうが、黄緑色の小袖の上から黄色の打掛を羽織り、紅色の袴を着用している。菖蒲色の髪は肩の辺りで切り揃えられ、左側頭部には花とりボンの髪飾り。屋敷の外観と同様に、時代を切り取ったかのような純和風の少女だった。

「久しぶりだな阿求。変わりないか？」

「お久しぶりです慧音さん。おかげさまで元気にやっていますよ」

にこやかに話し掛ける慧音の声に阿求と呼ばれた少女も筆を置き、面を上げ柔らかな笑みと共にそう答える。細く華奢な身体からは儂げな印象を受けるが、不思議と弱々しさは全く感じさせない。当主の風格とでもいうのか、芯の強さが垣間見えた。

「初めまして、の方もいらっしゃいますね。私は稗田阿求、この当主で幻想郷に関する資料を編纂しています」

そんなことを考えている蒼衣をよそに、阿求は丁寧に頭を下げ、挨拶。慧音に聞いていた通りの情報に安堵を覚え、応えるように頭を下げた。

「初めまして、最近魔界から来た蒼衣です。アリスの兄をやっています」

『…………私達は？』

後ろからの恨みがましげな抗議に耳を塞いでスルーする蒼衣を見て、阿求は袖の袂を口元に当てくすくすと笑う。遠慮も躊躇いもなく素直な言葉をぶつけられる真っ直ぐな二人に微笑ましさを覚えたのだろうか、その対象に自分まで含まれるとなると素直に笑えないのは何故だろうか。

「随分懐かれていますね」

「ま、天然フラグ体質みただし。自覚がない辺りまたアレだけど」
阿求の邪気のない心からの言葉に、フォローなのかなんのか冗談染みた茶化しを返す鏡花。後ろからアリスがジト目で鏡花を見ているが、彼女はそれを躲すように踊ってスルーした。

「私は水月鏡花。こっちが神無菖蒲。一応二人合わせて蒼衣の式神みたいなもんよ」

「…………いつの間になんか事になってるんだよ」

ツッコミ所満載な鏡花の自己紹介に、蒼衣は思わず何の捻りもなくツッコミ。確かに二人共蒼衣の血を受けている以上式神に近い存在ではあるが、あくまでもそれは菖蒲の命を繋ぐ為と鏡花の人型を維持する為。契約が目的ではないのだから、式神というのも少し違う。

……………じゃあそうとなると、俺と二人の関係ってなんなんだ……………？

「それで、そちらの三人は？」

そんな思考に至り馬鹿正直に考え始める蒼衣をよそに、阿求が秘封倶楽部の面々へと振り向く。唐突に話題を振られたものの部長である蓮子は至って自然体で手をひらひらと振りながら、

「あ、私達は興味本位で来ただけよ。なんなら席外しましょうか？」

「話が長引きそうだしその間待たせっぱなしなのもなんだから、先に書庫に行ってもらった方がいいと思うわ」

「ではそのように」

巻き込まない為にも理由を付けてそう答えたアリスに頷き、阿求が手元の呼び鈴を鳴らす。一分もしない内に現れた使用人に二言三言告げると、彼女は三人を先導するように歩き始めた。

「じゃ、縁があつたら会いましょ。なんだかんだで結構楽しかったわ」

「お世話になりました」

「またいつか」

およそ上流階級の家でしかお目にかかれぬ光景に目を丸くしている蒼衣達に、三者三様の別れの挨拶が投げ掛けられる。我に返った蒼衣は軽く手を振ることで彼女達に答え、こいしとフランはメリーに向かつて両手を元気に振っていた。

「……蒼衣達は例の異変を解決すべくあちこち奔走していて、資料がないかと稗田屋敷を訪ねて来たんだ」

にこやかに微笑みながらメリーが襖を閉めると同時、慧音の瞳に真剣な色が宿る。足音が十分遠ざかったのを確認してから、彼女はその事実を口にした。瞬間、

「あ、あなたが紫さんの呼んだ『切り札』さんですかっ！？極めて強大な力を持ち漆黒の大剣を振るい、深淵の闇を操るあの！？」

「……何故だろう、物凄く否定したいのに否定出来ない」

勢い良く立ち上がった阿求が蒼衣をまじまじと見詰め、およそ人間とは思えない速度で文机越しの蒼衣の前へ。……なんだろう、この馬の目の前に人參を吊した的な反応は。

「ぜひその際のお話などを！！というかアレです、幻想郷縁起に載せるので取材させてください！！」

両目をキラキラと輝かせ、蒼衣の両手をしっかりと握り締める阿求。憧れの有名人を前にした少女のような様に、蒼衣は思わず後退ってしまう。一体あのスキマ妖怪はこの少女に何を吹き込んだのだろうか。

「いや、あの」

「大丈夫です！！お時間は取らせませんから！！なんなら蒼衣さん好みに記事を脚色しても」

ともあれ対話を図ろうと声を出す、興奮しているのか阿求の耳には全く届いていない。どっかの地底在住の鬼も話を聞かない人間

人間？ だったが、あれは万人に対してだ。蒼衣だけに過剰反応を示すこの少女とは若干ベクトルが違 ぁあもう、

「落ち着け」

「あきゆっ!?!」

いい加減考えることが億劫になり、蒼衣は阿求の頭にチョップを落とす。よくわからない悲鳴を上げ頭を押さえる少女にやれやれと嘆息し、本当に千年も転生を繰り返しているのだろうかと失礼な感想を抱く。……まあ、何はともあれ、

「話自体は状況説明の為にでもするけど、取材に関しては時間もなし遠慮させてもらうよ。話せるようなものもないしな」

「そうですね……、残念です……」

落ち着いた頃合いを見計らってそう答えると、阿求は心底残念そうにしなから了解の意を返す。話せるものなら話してやりたいが、蒼衣の陰惨な過去を聞いたところで何の意味もない。こいしやフランの暴走の話など論外だし、今は何より時間が惜しい。阿求のそんな様子に罪悪感を刺激されながらも、蒼衣は魔界を出てからここに至るまでを手短に説明した。

「なるほど……。しかしそうなるダークマターと深遠なる闇が消えたのは何故な

んでしょっ?」

「少なくとも自然に発生したモノなら、紫ちゃんに対応出来ないはずがない。誰かが裏で糸を引いてるって考えるのが妥当だと思うよ」

一通り話を聞き終えた阿求が頷きと共に首を捻り、当然といえば当然の疑問を口にする。自然物であるならなんらかの影響で消滅する可能性も有り得るが、あの八雲紫が手も足も出ない自然物など考えられない。だとすれば、

「…………つまり黒幕が蒼衣、或いはなんらかの要因を鑑みて、方針を変えたってこと?」

「おそろくね…………。兄さんが深遠なる闇ダークマターに対抗出来る存在だと証明された以上同じ手を打ったところで効果は薄いし、続けたら足が着きかねないもの」

鏡花の口にした考え、それがこの場にいる全員の共通認識だった。アリスの言う通り蒼衣の力は、二度に渡り感染者を打ち破っている。いかに満身創痍での勝利とはいえ、勝ったことに変わりはない。マトモな思考の持ち主なら作戦を変えるか、蒼衣自身を潰しに来るはず。そして前者は難しいが、後者は思いの外簡単だ。何故なら、

…………… フランレベルの感染者を一度に複数人当てれば、俺を倒す

こと自体は不可能じゃない、か。

「蒼衣、幻想郷内に感染者の気配はないのか？」

「今のところは。発現していないだけの可能性も否認ませんが」

脳裏を過ぎった最悪のケースに表情を歪めながらも、蒼衣は感覚の網を広げ慧音の質問に答える。念の為こいしとフランに振り返ってみるも、二人は揃って首を横に振るのみだった。蒼衣よりも先に菖蒲の気配に気が付いた彼女達でさえ掴めないのならば、蒼衣の感覚は頼れそうもない。本来彼の対深遠タクマターなる闇感覚器官は、広域探査より精密精査に特化している。面と向かえば一発なのだが、幻想郷の住民全員を相手にそんなことをしていたら何年掛かるかわかったものではない。つまり、

「手掛かりを探してあちこち回りつつ、向こうのアクションを待つしかない訳か……」

「現状それしかないな……」

消極的ながらも一番効率の良い行動方針に、不承不承といった体で慧音が同意する。実際蒼衣達には絶望的なまでに情報が足りない為、それくらいしか手の打ちようがないのだ。今は出来ることを少しずつ積み重ねていく以外に道はない。

「家の資料にそれらしきモノはなかったと思いますが、その目で見
て来た人達が見れば違つかもしれません。僭越ながら私もお手伝い
させていただきます」

筆を片付けた阿求がゆっくりと立ち上がり、真剣な光を宿した瞳で
蒼衣達を見据える。例え限りなくゼロに近くとも、僅かに可能性が
あるならそれに賭けるべき。縋れるのなら藁にでも縋る。そう雄
弁に物語っていた。

「忙しいだろうに悪いな……」

「いえいえ、気になさらないで下さい」

思わず口を衝いて出る謝罪の言葉に、また柔らかな笑みを浮かべそ
う答える阿求。少しくらいは話をして報いるべきかなあと思いつつ、
蒼衣は阿求の後を追うべく立ち上がった。……良い結果が出るとい
いのだが。

「いちごです」

阿求に案内された先　奥まった廊下の突き当たりには、重厚な雰
囲気を感じさせる木製の扉があった。よほど重要な資料が集められ
ているのか、無粋な来訪者を拒絶するようなオーラさえ感じさせる
のは錯覚ではないはずだ。異様なプレッシャーに気圧され、口の中
が渴いて来る。

阿求が袂から取り出した鍵を錠に差し込み、半回転させると小さな
金属音が空気を震わせる。相当な年季が入っているであろうにも関
わらず、しかし扉はすんなりと開き稗田家当主を内に迎えた。

中に入ると視界に映るのは、壁沿いに並べられた大量の棚と、ぎっ
しりと詰め込まれた数えるのも嫌になる程の書物。部屋自体が紅魔
館の大図書館より狭い為、凄まじい圧迫感を受ける。まるで全ての
本から睨まれているような、沈黙という名の圧力。蔵書量こそ大図
書館には一歩及ばないが、密度は格段にこちらの方が上だろう。

「いっぱい詰まってるね……。ちよつと大変そう……」

「こんな時の為の『ひとつみせんじゅつ』、でしょ？」

「……『じんかいせんじゅつ』な」

雰囲気に吞まれるフランと間違いを正されてへ、と舌を出すこいし
を尻目に、蒼衣はとりあえず端から当たることにした。よほど丁寧
に管理されているのか埃を被っているものはなかったが、それが逆

に手に取ることを躊躇わせる。外部の人間が易々と触れてもいいのかと、そんな不安を抱かせるのだ。

「こ、これは……!？」

さてどうしたものかと腕を組む蒼衣の背後から、驚愕の色を宿した声が響く。何事かと振り向いてみれば、本棚の一点を注視して冷や汗を流す鏡花の姿。何か問題でも発生したのだろうか。

……………まさか虫が怖いとかはないよな？

「どっした？」

「これを見て」

さすがに野に生きていた彼女ならそれはないだろうと思いつつ、蒼衣は鏡花の隣に立つ。真剣な表情の彼女の視線は、とある一画に並べられた数冊の本に向けられていた。タイトルを見てみると、『今の社会を生きるには』、『日本の伝統文化』、『飯の美味しい店五十選』、『パッチを当てることで防ぐ悲劇』、『スーパー茸兄弟攻略本』、『タイピング入門』の計六冊。

……………え、何このこの訳のわからないチョイス。整理中？

一瞬思考が止まり微妙な表情を浮かべる蒼衣をよそに鏡花は口を開き、

「一見するとなんの法則性もないこれらだけど、よく見てみて。こうして横に並べて一番上の文字を繋げて読むと浮かび上がるのは

『今日飯パスタ』。つまり今日の晩御飯はパスタにしるという神からのお告げ……、あらどうしたの蒼衣？怖いくらいの笑顔を浮かべながら右の拳を握り締めて」

次の瞬間。

廊下で掃き掃除をしていた稗田家使用人は、少女の姿をした何かが壁を突き破って吹っ飛んで行くのを目撃した。

最初こそ驚いたものの、幻想郷でこのような騒ぎは日常茶飯事なので、すぐに何事もなかったかのように掃除に戻った。

壁を貫通し飛んでいった鏡花^{馬鹿}のことを即座に忘却し、蒼衣は手近な棚の目に付いた一冊を手取る。ザツと見た感じ陰陽道に関する資

料のようだが、木火土金水は大体八卦虚式で代用が利くので別段習得の必要もない。使えそうな術式が載っていればラッキー、程度にパラパラとページをめくっていると、

「ちよつと！可愛い式神を殺す気!？」

「アホなことで騒ぎ立てるからだ。あと本当に可愛い奴は自分で可愛いと言わない」

馬鹿が壁の向こうから戻って来た。抗議の声を冷たくあしらい、目を通し終えた本を棚へと戻す。魔界の万魔図書館に収められている参考文献程詳細な記録はなかった為、得る物はなかったのが残念だ。気を取り直しその隣にある、妖物退治に関する本に手を掛け

「いや冷た過ぎでしょ!？会話しようよ会話！キャッチボールプリーズ!」

「真面目に調べつつならな。あと馬鹿なネタ振って来たら容赦なく二重の意味でホームラン返してやる」

再度ツツコミを入れる鏡花に素っ気なく答え、闇を操るといふ妖怪退治の項目に目が止まる。随分前の出来事らしく、今はお札で力を封印されていて無害なのだとか。おそらく深遠なる闇とは無関係だダイクマターらうと結論付け、閉じた本を棚へと戻した。

ふと視線を動かしてみれば、各々が思い思いに本を手を取っている。真面目に黙々と調べている阿求や慧音、童話と思しき絵本を読んでいるこいしやフラン、意外なことに真剣に調べている神綺などなど、それぞれの性格を体言したような光景が広がっていた。

ふとその光景に足りない人物に気が付き、蒼衣は周囲に視線を巡らせる。よく見ると神綺の陰になる形で座り込んだアリスが、何かの本を熱心に読んでいた。

「何見てるんだ？」

「!?!? ななななななんでもないわよ!?!」

蒼衣の声にビクツと身を跳ねさせ、吃りながらもどうにか答えるアリス。慌てていたにも関わらずかなりの速度で隠された為、読んでいた本のタイトルはよく見えなかった。兄と妹の禁断の、までは読めたのだが……。なんだろう、兄を犠牲にするタイプの魔法でも見付けたのだろうか。

……………だとしたらやだなあ……………。

まさかとは思うが反抗期だろうか？アリスは蒼衣が魔界に来てから一年もしない内に幻想郷へ行ってしまった為、実質一緒に暮らしていたのは一年にも満たない。そんな遙か昔の繋がりなど十年も経て

ばないに等しいし、どう接すればいいのかなどわからない。蒼衣とて人間の頃は一人っ子だった為、十年ぶりに会った義理の妹相手にどうすればいいかなど知るはずもないのだから。

「あ、あつた！」

思わず後ろ向きな思考を展開してしまう蒼衣の耳に、再度鏡花の聲が響き意識を現実へと引き戻す。今度はなんだと呆れ半分、いや先程言ったばかりだし今回こそはと期待半分で振り返ってみれば、

「過去の刀剣に関する書物の纏め、しかも家にあつたのより詳しい！さすが幻想郷、妖刀の類もすっかり境界を超えてたのね……。これなら私の顕現テリアライズのレパトリーも……、ってどうしたの蒼衣？またまた笑いながら黒鐵を召喚して」

次の瞬間。

庭で鯉に餌を与えていた稗田家使用人は以下同文につき省略。

「ちょっと！今はノーカンでしょ！？てか天井！？」

「『あつた』とか紛らわしいこと叫ぶからだ。それにさっきはグーで今回は黒鐵だから天井じゃない」

壁の向こうから戻って来た馬鹿に冷たく返し、一瞬でも期待した自分が馬鹿だったと思う蒼衣。今後この馬鹿には戦闘時以外は期待しないようにしようと、そんな決意を胸に秘めつつ。

さて再開せねばと鏡花から視界を動かすと、低めの位置に白い髪が映った。見れば菖蒲が床にぺたんと座り込み、何かの本を熱心に読んでいる。……というか彼女、千年以上も祠に封じられていたのに文字が読めるのだろうか。

「なんかあつたのか？」

その辺りもはつきりさせておくかと内心考えつつ、蒼衣は膝を折り菖蒲と視線の高さを合わせる。彼女が指差した先、カラフルなページを見てみれば、大福や団子、羊羹などの和菓子の写真が載せられていた。どうやら外の世界の雑誌のようだ。

「……美味しそう」

瞳を輝かせながら、そんな呟きを漏らす菖蒲。興味津々と言った様

子でそれらを眺める様は、おそらくこういった食べ物も口々に食べたことがないのだろうことを容易に想像させる。

いや、それ以前に人らしい生活を送ることさえ出来なかつただろう。

彼女は他の村を呪う為に生み出された存在。ならば呪うこと以外に何もする必要はなく、当然周りもそのようにしただろう。故に彼女は知識も、感情も、命の意味も知らず、ただただ人を殺めることしか出来なかつた。

そんな彼女は今、ようやく普通の生活をスタートさせた。彼女は知ることを欲し、感情を覚え、一つ一つ物事を理解していつている。ならばせめて彼女を『使つてやる』と宣言した者として、今自分に出来ることは、

「そつだな。いつか母さんに作ってもらおうか」

「……………うん」

「ちょっと待てええええい!!」

サラサラとした白い髪を撫でながらそう告げると同時、菖蒲が嬉しそうに表情を緩める。そんな様子に釣られて蒼衣自身も笑みを零し

てしまうが、後ろで馬鹿が急に吠えた。なんだよ良い所だったのにと振り返ってみれば、

「何よこの扱いの差！？理不尽じゃない！？」

言われた蒼衣は首を傾げ、しばし思考するかのように視線を宙へ。そのまま三つ程間を起き、アリスと神綺と顔を見合わせ、

「だってほら……、菖蒲だし」

「菖蒲だしねえ」

「菖蒲ちゃんだし」

満場一致の結論が出た。しかも反論を許さない類の。

「しかし中々見付からないな……、わかってはいたが」

いじけて部屋の隅で体育座りを始めた約一名を華麗にスルーし、蒼衣は溜め息と共に書庫内を見回す。馬鹿とのどつき漫才染みた何かをしている内に阿求や慧音、検索魔法を使用した神綺がほとんど調べ終えていたのだが、それらしき資料は存在しなかった。

「この書庫以外に資料はないのか？」

「今三人が行っている別の書庫がありますが、そちらには異変の類のモノは置いてないです。なのでここで見付からないとなると八方塞がりなのですが……」

阿求の答えに頷きながら、蒼衣は思考を巡らせる。元々あればラツキー程度にしか考えていなかったとはいえ、現実を突き付けられるとやはり辛い。こうなれば非効率的なのを承知であちこち探し回るしか

「あやや、こんな所にいましたか。探すのにちょっと苦労しました」
そんな思考を断ち切ったのは、この場の者ではない少女の声だった。全員の視線が集中する先、馬鹿が突き破った壁から一人の少女が入って来る。

髪は黒のボブで、頭の上には赤い山伏風の帽子。左側に派手な紅葉柄の入った白いフォーマルな半袖シャツと同じ紅葉柄が右側に入った黒いフリル付きミニスカートを着用し、下駄のような赤い靴を履いている。周囲には黒い羽が舞っており、彼女の背には鴉を彷彿とさせる黒い翼。おそらく飛んで来たのだろう。

「あ、文!？」

「あやや、アリスさんも一緒にしたか。というか大分人多いですね?」

驚きの声を上げるアリスと、気心が知れているのかフレンドリーに話す文と呼ばれた少女。視線を巡らせ鏡花や菖蒲を見ると一瞬止めるも、最終的に蒼衣の目の前へとやってくる。何かと思わず身構える蒼衣に苦笑しつつ文は胸に手を当て、

「どうも初めまして。文々。ぶんぶんまるしんぶん新聞を発行している天狗、妖怪の山一の美少女妖怪、清く正しい射命丸文です。本日は」

同時、使い込まれた手帳とペンを神速の速さで取り出し、

「
幻想郷を騒がせている不可解な闇の異変、その解決に奔走する蒼衣さんの密着取材に参りました」

にこやかな笑顔と共に、そう宣言したのだった。

第三十一話「稗田乙女」（後書き）

今かーぜのなーか飛ーびまーわるこーの姿はー
きつと見ー付けらーれる・ことーはーないー

とまあ某サークルの風神少女アレンジはさておきあやや登場。蒼衣
という名の特ダネにとぅとぅブン屋が食い付きました。この後どう
なるやら。

ちなみに鏡花の壁抜きネタは某電撃文庫の偉大なる鈍器から。アレ
面白いのに分厚さから敬遠されがちなのよねえ……。十月からア二
メ始まるから見ようぜ！

次回、人里編終結。

第三十二話「賑やかしの幻想ブン屋」(前書き)

お待たせしました、三十二話です。前回同様はっちゃけておりますのでご注意を。

ちなみに14000文字。前回より地味に増えてる。やっちゃったね！w

ではどーぞー！。

第三十二話「賑やかしの幻想ブン屋」

「蒼衣・シュヴァルツシルト。昨今幻想郷を騒がせている不可解な闇の異変解決の為、十日程前に魔界から呼ばれた妖怪。アリス・マーガトロイドの義理の兄であり、魔界神である神綺の養子。極めて強大な力を持ち漆黒の大剣を振るい、深淵の闇を操る八雲紫の『切り札』。一週間前に暴走した古明地こいしを撃破、救済。更について昨日同じく暴走したフランドール・スカーレットを撃破し救済。以上、私があなたに関して知っている全ての情報です」

手元のメモ帳　いや、ネタ帳と言うべきか　をパラパラとめくりながら、当たり障りのないプロフィールを口にする文。一見なんでもないことのように思えるがしかし、いずれの情報も当事者以外知りようがないものだ。

当然ながら文はどの場にもいなかった。それはつまり、彼女に情報を流した第三者がいるということ。そんな行動を取り得る者といえ

ば、
「…………紫の差し金か？随分と嗅ぎ付けるのが速いじゃないか」

「ええ、珍しいことに向こうから『力になってやってくれ』と頼まれました」

蒼衣と同じ結論に至ったのか、一步前に出た魔理沙が己の推測を告

げる。対し文は別段隠すつもりもないのか、なんでもないことのようにサラリと答えた。だが、

「力になるって……、どついう意味だ？」

蒼衣の記憶が確かならば、天狗はかなり強力な部類に入る妖怪だ。全国的に有名な妖怪の一つであり、鴉を従え空を舞う大妖怪の伝承は数知れず。単なる異変が相手ならば、とても心強い味方になっただろう。

しかしいくら力があつたとしても、対深遠ダイクマターなる闇要員として考えた場合評価は激減する。あの八雲紫でさえ干渉出来ない深淵の闇を、一介の天狗がどうこう出来るとは思えない。

「先程も言いました通り、私は新聞記者です。故にネタを求め幻想郷を飛び回っており、つまり鮮度の高い情報を大量に手に入れることが出来ます」

ならば何故、と考える蒼衣の耳に、文の答えが響き納得の二文字を得る。

元々蒼衣達が稗田屋敷ヒトに来たのは、この異変に関する情報を得る為だ。しかしここまで異常極まる前例などない上、『既存の幻想郷住民に直接害が及ぶ』異変の資料などあるはずもない。

故に紫は新聞記者であり、情報通たる天狗の彼女をこちらにやった

訳か。何も異変解決に必要なのは戦力だけではない、情報収集も大事な戦略なのだ。

「私としても協力するのはやぶさかではありません。今までに類を見ないこの『生死に直結する異常な異変』が解決するに越したことはありませんし」

書庫内を闊歩しながら、己の心情をハッキリと述べる文。どうやらこの異変の異常性に関しては、きちんと理解しているらしい。

今までの異変　紅霧異変や春雪異変などは日光が当たらない、春が来ないなど、確かに間接的な害はあった。しかしこの異変は違う。人間の生命力を吸い上げ妖怪を暴走させるあの闇は、直接的に害を生じさせている。

今までになかったタイプの異変が一体何を意味するのかまではわからないが、少なくとも良からぬ何かがあるのは確か。早急に解決しなければ何が　少なくとも幻想郷の住民にとってマイナスになる何かが起きる可能性は極めて高い。

しかしさすがは新聞記者、幻想郷こんな世界でそんなものをやっているだけはあるようだ。頭の回転も速いようだし、これは思わぬ味方が出来たかもしれない。しかし彼女はですが、と前置きしてから、

「目の前に特ダネが転がっているのにスルーするというのはもうなると言いますか……、ものすごい消化不良というか、お預けを喰ら

った犬のような心境でしてね……」

キビキビとした今までとは打って変わり、緩慢な動作でどんよりとした瞳を蒼衣に向ける文。……いや、その記者魂はわからなくもないが。生命に関わる異変を優先させるべきなのはわかってはいるようだが、理性と本能が鬨ぎ合っているらしい。

「という訳でぜひ詳しいお話などを……文々。新聞に載せるので取材させてください……」

が、どうやら理性は敗北したようだ。凄まじい速度で動いた文が蒼衣の手をがっしりと握り、瞳をキラキラと輝かせずいずいと迫って来た。

「いや、あの」

「大丈夫です！！お時間は取らせませんから！！なんなら蒼衣さん好みに記事を脚色しても」

押され気味になる蒼衣への距離を更に詰めつつ、理性をごまかすように早口でまくし立てる文。……あれ、これってひょっとしてなくとも二度ネタ？

「落ち着け」

「あやつ!?!」

なので蒼衣も二度チヨップネタで返した。響いた快音からして多少は通ったかに見えたが、文は即座に再起動し瞳を怪しく輝かせ、

「ふっふっふっ、甘いですよ蒼衣さん……。不肖この射命丸文、チヨップ一発で引き下がる程優しくは」

「じゃあ首を刎ねたら静かになるかしら?」

アリスの一言で書庫内が完全に凍り付いた。

ギギギと油の切れた機械のようなモーションで二人が振り返った先、これ以上ないくらいの笑みを浮かべたアリスがいる。しかし周囲には深遠なる闇ダークマターなんて目じゃないレベルのどす黒いオーラが放たれており、百獣の王を目の前にした兎のような心地を植え付けて来る。

……いかん、狩られる。

「……なんででしょう、アリスさんが凄まじく荒れてらっしゃるよう
な……」

「いや俺に聞かれても……」

同時に同じ感想を抱いた二人は全力で視線を逸らし、ヒソヒソと生き残る為の作戦会議を始める。とは言っても何が原因か全くわからない為、具体的な対策を練ることなど出来るはずもない。そんな様子を見てまたアリスは嫉妬の炎を燃やし、一連の悪循環が生まれる。それが爆発しそうになった瞬間、扉を勢い良く開く音に全員の視線が集中した。

扉に半ば寄り掛かるようにして立っているのは、一人の少女だった。紫のリボンで結われた茶髪のツインテールに、文と同じデザインの紫色の天狗帽子。襟に紫のフリルが付いた薄いピンクのブラウスに、黒と紫の市松模様が描かれたミニスカートを着用。黒のネクタイと同色のハイソックスという着こなしは現代風で、腰には小ぶりな茶色のポーチ。右手には黄色の携帯電話を握りしめ、しかしそれらの印象を全て吹き飛ばす程に荒い息をついている。喘息を患った人の過呼吸状態のようだ、と表せば伝わるだろうか。……よくよく見れば足もガクガクと震えている。

「さ……、昨今幻想郷を……、騒がせている……、異変の解決家が……、いると聞いて……、飛んで来ました……」

大丈夫かこいつと場の全員が思うと同時に、紫の少女が口を開く。息切れが酷く話すのも辛そうで、下手したら死ぬんじゃないのかと認識を改めさせるレベルである。場の全員が引き気味になる中文が気

が付いたように口を開き、

「あやややや、遅かったですね？」

「あなたが……、速過ぎんのよ……」

息も絶え絶えに返す少女を見る限り、どうやら二人は知り合いのようだ。言い返すだけの気力は残っているようだが、身体がそれについていけない。……座るなりなんなりすればいいのに何故立っ
たままなのだろう。

「……大丈夫か？」

「う……、ご心配なく……。この程度で倒れる程……、天狗は柔じ
や……」

お前の相手だろなんとかしろよという意図を含んだ視線の集中砲火を受け、蒼衣は恐る恐る声を掛けてみる。呼吸の合間に問題ないと答える少女だが、つかえつつかえな時点で全然大丈夫に思えない。母に頼んで新陳代謝促進の符でも渡そうかと考えた瞬間、

何の前触れもなく少女がぶっ倒れた。

木製の床に顔面を強打した鈍い音が響いたにも関わらず、少女はピクリとも動かない。三つ程間を置き、場の全員が顔を見合わせると同時に、

「あや？ちよ、はたてー!？」

文の悲鳴が書庫内に響き渡った。

「本っ当にすみません！なんて謝ったらいいか……」

目を覚ました少女が真っ先に行ったのは、潔いことに土下座だった。足裏、足首、膝、腰、上体、腕、指先。どの点を取っても見事の一言に尽き、いつそ清々しさまで覚える。顔は畳に溶接したと言わんばかりに押し付けられ、感服の念を抱かせた。

そう、今蒼衣達がいるのは書庫ではない。ぶっ倒れた少女を客間まで運搬し、布団に寝かせ目覚めるまで待機していたのだ。当然というか何というか運ぶのは蒼衣が買って出たのだが、こいしやフランに恨みがましげな目で見られたりアリスが黒いオーラを放ったりと散々だったのは記憶に新しい。というか鮮烈過ぎて忘れられない。

「いや別に気にしてないから、とりあえず顔上げろよ」

三人のことは一先ず忘れ、とりあえず少女に身を起こさせる。改めて座り直した彼女はぺこりと頭を下げ、

「初めまして……。私は姫海棠はたて、かかしねんぼつ花果子念報ねんぱうという新聞を書いている鴉天狗よ」

先程とは打って変わりフランクに話し掛けて来た。恐らくはこちらが地なのだろう、今の話し方の方がしっくり来る。

「てことは文と同じ用件か？」

別段態度に文句を付けるつもりもないので、蒼衣は無用な手間を省き率直に質問をぶつける。僅かな時間差こそあれど、二人が来たのはほぼ同時刻だ。加えてどちらも鴉天狗であり新聞記者 関連性がないと考える方が難しいだろう。そんな意図が込められての質問にはたては口を開き、

「ええ。紫さんは私と文に頼んだんだけど、文が真つ先に飛び出しちゃって……」

「はたてが遅いんですよー。引きこもってばかりいるから体力が

ないんです」

恨みがましげな視線を向けられるが、文は手をひらひらと振りながら笑みと共にそう答える。悪びれもしないこの少女、相当難があるというか性格に癖があるようだ。見ている分には楽しいが、あまり話していると疲れそうな気がする。と、

「引きこもってて新聞なんて書けるの？」

「『念写をする程度の能力』が私の能力だからね。既存の写真に限れば古今東西どこからでも持ってこれるわよ」

引きこもりというワードに興味を引かれたのか、元鳥籠姫が首を傾げながらはたてに尋ねる。諸事情故口々に外へ出たことがないからか、親近感を覚えたのかもしれない。問われたはたてとは言えば自慢げに胸を張り、携帯電話の画面をフランに見せる。数枚の写真を見ればなるほど、確かにどこかで見たような写真ばかりだ。

……… 外の世界や魔界まがいで言うインターネットの画像検索みたいなものか。

蒼衣が心中で呟き納得の頷きをすると同時、しげしげと写真を眺めていたこいしが口を開き、

「つまり……、パクリ？」

「ふっ」

邪気のない率直な一言がはたての心臓をダイレクトに穿っていた。さすが無意識に生きる少女、他の人間なら躊躇うような言葉でも遠慮なく発言するようだ。本人が無自覚な辺り、なんともやりづらいつ言つか何と言つか。

「大丈夫大丈夫、私も色々パクってるから」

胸元を押さえよると身を丸めるはたてに、気にすることはないと笑いかける鏡花。だが、

「……お前のはパクリの次元を超えてるけどな」

「えー……？」

あまりにも安っぽい発言に蒼衣がツッコミを入れ、それに鏡花が不満げな表情で返している。彼女の能力はあくまでも『脳裏に思い描いた刀を物質化する』というもの。そこに真偽の区別はないし、彼女が望めば本物とは掛け離れた偽物でさえ生み出せる。これではパ

クリという以前に単なる改変・改造だ。

つまり単純に言ってしまうと、『彼女がイメージ出来るならばどんな特殊効果を持った刀であろうと物質化出来る』ということ。世界を断ち切る　とまではさすがに行かないが、辺り一面を火の海に変えるもの、神の雷を落とすものなど、街の一つ二つや小国程度なら軽く滅ぼせる刀は伝承に数多く存在する。

菖蒲との戦闘で雷切を手放しても消えなかった点を見ると、物質化した刀の存続は彼女の意志次第だと考えるのが妥当。もしそんな力を持つ刀を量産することが出来たら

「まあ新聞論はさておくとして……。実際のところ、なんか情報掴んでるのか？」

脳裏を過ぎった別段意味のない思考を振り払い、蒼衣は二人の鴉天狗を見据え直す。単に興味本位で来た可能性も否めないが、今は少しでも情報が欲しい。稗田屋敷ではなんの手掛かりも手に入らなかったし、聞くだけならタダなのだから。蒼衣の言葉に文は神妙に頷き、

「確証はありませんが……。少し気になるものが」

文の答えに感心したように、慧音がほう、と視線を鋭くする。文の発言は場の流れを自分のペースに持って行こうとする、戦時の交渉役のような上手い話術だ。肯定でも否定でもなく、あえて相手の興

味をそそる答え方。そして今は戦時ではなく身内の会議　乗ってやらない理由はない。

頷きを返した蒼衣に淡く微笑み、文ははたてに視線を送る。腰のポーチに伸ばされた手には、いつの間にか一枚の写真。文机に置かれたそれを、蒼衣達は円陣を組むようにして覗き込む。

結論から言えば写っていたのは、見知らぬ一人の少女だった。こちらに背を向けている為顔立ちは見えないが、その装いは漆黒の一角ゴスロリ風のドレスを纏った身体は、十の半ば程であろうか。月光を受け煌めく銀色の髪は、現実では有り得ないような美しさを秘めており、見る者を魅了すると同時に不安にさせる。魔性の美、とても言えばいいのか。急な撮影だった為かピントはズレているが、その異常なまでの魅力は写真越しでも怖いくらいに伝わって来る。現物を見たら言葉を失い呆けてしまいそうだ

「つい最近知り合いの天狗が撮影したそうです。私の記憶が確かなら、こんな容姿の人物は幻想郷にいません」

「ですね。私も見覚えがありません」

「結界を越えてやって来た新参者なのか、或いは身を隠していた古参妖怪なのか……。どちらにしる警戒した方がよさそうですね」

真剣な面持ちで告げられた文と阿求、はたての言葉に、知らず蒼衣達の身も緊張で堅くなる。ネタを求めてこの狭い箱庭を飛び回る新

「聞記者や、『一度見た物を忘れない程度の能力』を持つ阿求ですら知らない存在が、幻想郷のどこかにいる。その意味を理解出来ないような者はここにいない。深遠なる闇ダークマターとの関連性こそ定かではないが、未確認の不穏分子がいるということは確定した。敵か味方もわからない以上、十分に上に警戒しなければ足元を掬われかねない。

「今後もこういった情報は集めて行くつもりです。天狗仲間には顔が利くので、多少は有用な情報を持って来れるかと」

そんな反応に満足したのか、文はパラパラと手にしたネタ帳のページをめくる。ページの中程で手を止めると、サラサラと慣れた手つきで何かを書き留める。かと思えば更に数十ページ程めくると今までは一転した明るい笑みを浮かべ、

「さて、では取材と行きましようか」

理解不能な一言を放った。……少なくとも蒼衣にとっては。

「……いやいやいや、ちょっと待て」

思わず素で反応出来ず、三十秒程経ってからようやく再起動する蒼衣。力無いツツコミを向けられた元凶文はと言えば、

「あやや、どうしました？あ、はたてなら連絡用に連れてつてもいいですよ？競争相手減りますし」

「サラツと身内を蹴落とすんじゃないわよ……」

どうかしたのかと言わんばかりに可愛らしく小首を傾げ、さりげなく同僚はたてを陥れていた。いや、確かに記者同士だから対抗心などはあるのだろうが、冗談とはいえサラリとそんな発言を日常会話に組み込む文には恐れ入る。はたてももはや慣れっこなのか、ツツコミがぞんざいになっていた。

……いやいやいや、流されてるぞ！

「態度こそツンツンしてますが落ちればデレるのは確定的に明らかなので、いつそ恋人にするというのも」

思わず本題を見失っていた蒼衣が心中でセルフツツコミを入れると同時に、文が一見真面目な表情　しかし瞳に悪戯っ子のような輝きを宿して口を開く。だが彼女のボケ発言は、物差しサイズの槍が眼前を掠めたことにより強制終了させられた。

「あらごめんなさい、手が滑ったわ」

僅かに断たれた髪がハラハラと落ちて行くのを視界の隅に収めながら、文は声が聞こえた方へと恐る恐る振り返る。視線の先にはこれ以上ないくらいの笑みを浮かべ、上海の槍を手先で器用に弄ぶアリスがいた。当然の如く、どす黒いオーラ全開で。

「じ、冗談に決まってるじゃないですかー！やだなーアリスさんったらー！」

冷や汗を滝のように流しながら、文は慌てて否定の言葉を口にする。理性と本能の叫びに全力で従い、格上アリスの存在に媚び諂い始めた。上海ですらガクガクと震え蒼衣の陰に隠れる程だ、直接睨まれている文の心中は想像に難くない。

「そうよね、冗談よね。うふふふふ……」

「あ、当たり前ですよー！あ、あは、あははは……」

ほんの少しだけ表情を和らげたアリスが微笑み、魔理沙が嫌そうな顔をするのを尻目に文も乾いた笑みを零す。うふふふふ、あははははと二人の対照的な笑い声が部屋の空気に溶け、

「焼鳥にしてあげましょうか？」

「すみませんでした」

一瞬で勝敗は決した。先のはたてに勝るとも劣らない土下座を文が全力で敢行し、それでようやく溜飲が下がったのかアリスはいつもの表情に戻る。……文といいはたてといい、鴉天狗という種族は土下座が必須科目なのだろうか。案外土下座の段位検定なども行っているかもしれない。きつと年末年始には『魅せる土下座』を競い合うエクストリーム土下座大会を開催し、優勝者は『土下座チャンピオン』として幻想郷にその名を轟かせ、

………ねーよ。

「悪いが話せるようなこともないし、取材に付き合ってる時間は……」

「何言ってるんですか。あるでしょう？あなたにしか話せないことが」

脳内で形成された天狗の面白土下座社会を否定の一言で抹消し、上海の頭を軽く撫でながら蒼衣は口を開く。しかし最後まで言い切る前に、その言葉は文の若干呆れたような声に遮られた。彼女の言う

蒼衣にしか話せないこと、それは、

「ダークマター 深遠なる闇のこと、だね」

「さすがは神綺さん、察しが良いですね」

既に解答へと辿り着いていた神綺が静かに口を開き、文はそれに満
足げに頷き片目を瞑る。当然ながら慧音や阿求はとうに理解してお
り、神綺の言葉で蒼衣とアリス、魔理沙に鏡花も合点が行く。しか
し未だ何が言いたいのかわからないのか、菖蒲とこいし、フランが
首を捻り、

「え、どういうこと？」

「簡単な話よ。今幻想郷はダークマター 深遠なる闇なんて未曾有の災厄に見舞わ
れてる。本来なら太刀打ちすることすら出来ないけど、幸いなこと
に蒼衣はそれらに詳しい」

そう、つまり文とはたての真意は、

「ダークマター 深遠なる闇に関する特集記事を私とはたてで組んで幻想郷中には
らまきます。そうすることで全員に情報が共有され異常が発見しや
すくなり、自然と警戒度も上がるので早期発見・解放に繋がる、と。

「一石二鳥でしょう？」

唄うように自分達の思惑を告げ、どうだと言わんばかりに蒼衣へと振り返る文。戦いで重要なのは戦力だけではない、周りの人間の見方や状況さえも操作し自分達の、引いては全体の益になるように導いて行く内政、情報操作なども立派な戦略の一環だ。蒼衣という戦^役力と呼ぶだけでなく、文やはたてさえも協同させる。彼女は本当に幻想郷を愛しているのだなあと、蒼衣は場違いな感動・感嘆を得ていた。

意識せずそんな感傷に浸っていると、真面目な表情に戻った文とはたてが目と鼻の先にいた。蒼衣は思わず一步下がろうとするが、

「これは新聞記者としてではなく、幻想郷の一住民としてのお願いです。蒼衣さん、あなたが知り得る限りの情報を、私達に提供してくださいませんか？」

「今後も出来る限りのバックアップはするわ。だから、お願い」

二人の真剣な言葉に口を噤み、蒼衣はしばし思考。とはいっても返すべき言葉は、とっくのとうに決まっていた。

「……阿求」

「え、は、はい？」

唐突に名前を呼ばれ戸惑いながらも、阿求は蒼衣へと視線を向ける。閉じていた目をゆるりと開いた蒼衣は何かを決めたように一つ頷き、

「空き部屋を一つ……、八人くらい入れるのを用意して欲しい。頼めるか？」

空き部屋……、ですか？と首を傾げる阿求にああ、と肯定を返し、

「二人も三人も大して変わらない。なら少しでも多くの人に知ってもらう為、語り部は増やしておくべきだ。……受けるよ、取材」

蒼衣の告げた最後の一言に、文やはたでただけでなく阿求の表情も明るくなる。神綺もよく出来ましたと言わんばかりに、穏やかな笑みを浮かべて息子を見ていた。

彼女達の提案は普通に考えて、これ以上ない破格の申し込みだ。情報を集められることや発信出来ることもだが、単純に『仲間が増える』という事実が心強い。幻想郷縁起を編纂している阿求の口添えがあれば、人々の信頼も得られるだろう。それすらも見越してのことなのだろうが、紫の根回しの良さには舌を巻かされるばかりだ。

ともあれ蒼衣は神綺と慧音の方へと向き直り、

「母さん、慧音さん、知識と頭脳を借りたいんですが頼めますか？」

「オツケーだよー」

「ああ、わかった」

魔界を創造せしめた神と幅広く深い知識を持つワーハクタク。二人の頭脳があればあやふやな情報でも、信憑性の判断や新たな事実の発見に役立つことは間違いない。許可を得て安堵の息を吐きつつ、続けて蒼衣はこいしとフランに向き直る。

「こいし、フラン、元感染者として改めて話を聞きたい。いいか？」

「う、うん！」

「もちろんだよ！」

二人の妹。彼女達も重要だ。この幻想郷内で唯一感染経験があり、その際の記憶がある二人の言は、それだけでも十分参考に値する。菖蒲の感知ということさえやってのけているし、例え僅かでも可能性があるなら十分だ。可愛い妹分達の頭を撫でながら天狗二人へと視線を戻し、

「この五人で出せる情報を全て出し切る。後は慧音さんや阿求達と一緒に纏めてくれ」

「お任せ下さい！」

「やってやるわ！」

文が笑みと共に手帳とペンを構え、はたてが拳を己の手の平へと打ち付けながら気合いを入れる。これだけの人数がいれば里の人間だけでなく、各地の妖怪達にも興味を抱かせる記事など容易に作り出せるはずだ。最後に蒼衣は文机に置かれたままだった写真を手に取り、

「アリス、魔理沙、鏡花、菖蒲、その間にこいつに関する情報を集めて来てくれ。望みは薄いけど聞き込みで目撃情報を」

「ええ！」

「おう！」

「りょーかい！」

「……ん」

四人の返事に満足しながら、蒼衣はアリスへと写真を手渡した。この四人は特段知識がある訳でも感染経験がある訳でもないの、その間足で情報を探してもらおう。先程とは違い写真という手掛かりもあるし、今回得られる回答は『見た』、『見てない』の二択。これなら大分やりやすいし、なんの手掛かりもなく探し回るより遥かに効率的だ。

「こつちが終わったら連絡する。じゃあ……、いつちよ始めるか！」

蒼衣の開始宣言に、場の全員が関の声を上げた。静かな、しかし確かに意志の籠ったそれは、それぞれの心に信頼と自信、熱意を持たせる。絶対にこの異変を解決する。蒼衣は再度心に誓い、案内役として先導する阿求の後を追った。

やがて時はあつという間に流れ、太陽が地平線にかかる頃。稗田屋敷の門前に集う、十二人の姿があった。深遠なる闇ダークマターに関する情報を出し終えた蒼衣達と、聞き込みから帰って来たアリス達であるということは、言うまでもなく予想出来るだろう。

「今日はありがとうございました。おかげで有益な情報もたっぷり手に入りましたし」

「残るは新聞にするだけね。余すことなく行き渡るようレイアウトとか配置とかしっかり考えないと」

大空を飛び回る天狗達には広い空間の方が心地好いのか、伸びをし彼女ながら充実した表情を浮かべる文。携帯電話を操作し情報を確認しながら、はたても満足げな笑みを浮かべる。巷で有名な深遠ダイクマターなる閻幻想郷を揺るがしかねない特ダネを得たのだ。記者冥利に尽きるとはまさにこのことだろう。

そんな二人を見ている、しかし不安は微塵も感じない。数時間に及ぶ話し合いにより、彼女達の性格はだいたいわかっている。態度こそ普段通りだが、その胸の内では情熱を燃やしているのは容易に想像出来る。だから、

「情報は確かに託した。あとはお前達にしか出来ない。……頼んだぞ」

蒼衣はその一言だけを告げ、挨拶でもするかのように片手を軽く上げる。意図を汲んだ文とはたてが笑みと共に、蒼衣と続けざまにハイタッチを交わした。そのまま彼女達は背の翼を広げ、

「では皆様、またいつか！」

「次会った時は普通の取材が出来ればいいわね」

別れの挨拶を残し、空高く飛び立って行った。さすがは最速の妖怪と謳われる鴉天狗、妖怪の山の方角へと向かったのは理解出来たが、そちらへ向き直った時には既に見失っていた。風みたいな連中だと苦笑いを漏らしたのは、阿求と並び立つ慧音だ。

「私はこれから阿求と作業だ。この異変の資料も纏めないとな」

「裏方は引き受けますので、進展するまでしっかりと休んで英気を養って下さい」

言われて蒼衣はこの一週間と少し、自分達がロクに休みなしで動き回っていたことを思い出す。当然ながらあの写真の少女の目撃情報は皆無で、現状は待ちの一手しかない。新聞がばらまかれれば何かしら状況は動き出す可能性は高い、ならばその時に備えて休んでおくべき。全くもってその通りだ。その気遣いは素直に受け取っておこう。

「何かあったら連絡してくれ。すぐ飛んでくから」

万が一ということもないだろうが、念の為に蒼衣はそう告げる。真剣に頷きを返した慧音と柔らかに微笑む阿求を促し、二人は背後再び屋敷の中へと戻って行った。

「今まで慌ただしかったけど……、ようやく一段落、かしら？」

「本当にようやく、だけどな」

やがて残ったのは身内八人。他者がいなくなったことで張り詰めていた気が緩んだのか、全員が同時に息を吐いた。そのまま顔を見合わせなんとなく笑みを漏らし、怒涛のような十一日間だったなあと、蒼衣とアリス、神綺に魔理沙は苦笑を交わす。途中参加した妹達や式神とは違い、この四人は最初から異変に関わっていたのだ。互いにしかわからない感覚、というものもあるだろう。

「それじゃあ……、帰ろっか」

ひとしきり笑い、静かに口を開いたのは神綺だった。夕陽を背に柔らかな笑みを浮かべる彼女の姿に、蒼衣達も頷きを返す。

「帰るとしますか……、十日ぶりのマーガトロイド邸に」

我が家

口を開いた蒼衣が日の沈む方　西に向かって歩き出す。人里を抜

けた魔法の森の中にある、マーガトロイド邸を目指して。

「今からじゃ家に着いた頃は真っ暗ね……。晩御飯はサツと作れる
麺類にしましょうか」

「パスタ？ねえパスタ？」

「……今度はスペカでぶっ飛ばしてやるうか？」

「まあまあ、お兄ちゃん落ち着いて……」

「あ、じゃあ私のレーヴァテインで……」

「……黒焦げ？」

「魔理沙ちゃんも良かったら食べてく？」

「お、良いのか？悪いな」

取り留めもない雑談を交わしつつ、八人は人の増えて来た通りを並んで歩いて行く。今日は久しぶりにゆっくり過ごせそうだなと、蒼

衣はそんなことを思ったのだった。

日が暮れかかり、人が多くなった人里の通り。楽しげに語らう八人の集団の横を、一人の人物が通り過ぎる。

所々破けたジーンズとマゼンタのシャツを着用し、薄い茶髪のショートカットに薄い黄色の帽子。二股にわかれ犬耳のように見えるそれを被っている。背には身の丈を超える鉄製のホツケースティックを背負っており、身を覆うのは漆黒のロングコート。見るからに異常極まりない姿だが、しかし誰も彼女を気に留めない。

その少女は何かに気が付いたように、すれ違った集団の方へと振り返る。視線はそのままにポケットを漁ると、マゼンタの携帯電話を取り出し見もせずには操作。おもむろに耳へと当て、コール音を聴き続けること数秒。向こう側から聞こえて来た声に、少女は静かに口を開いた。

「……………こちら戌子^{いぬこ}。聞こえてる？」

戌子と名乗った少女の口から零れたのは、アルトに近い声だった。向こう側の相手とは親しいのかそれだけで通じたらしく、相手も碎けた口調で答えて来る。しかもご丁寧に、戌子の嫌いなあだ名で。

「ワンコって言うな！……まあそれはさておき、今さっき例の奴とすれ違ったよ。……そう、君がやたら気に掛けてる黒いの」

戌子の最後の一言に、向こう側の相手の声が途切れた。付き合いの長い彼女にはわかる、今相手は纏う空気を百八十度回転させ、真面目な表情になっているはずだ。

「なんか肩の荷が下りた表情してたよ？ここ最近深遠なる闇追っ掛^{ダークマター}けてあっちこっち走り回ってたから疲れてたんじゃない？」

相手の質問に現実と推測を答え、戌子はやれやれと溜め息。この十日間で並外れた激戦を三回　内一回はイレギュラーとはいえ、普通なら倒れていてもおかしくはない。つまりそれだけ『彼』も並外れているのだが、彼女達の『目的』にはまだまだ足りない。

「……Jud^{ジャッヅ}、それもそうだね。とりあえず現状はスルー、わかってるよ」

不干渉を厳命する相手の声に答え、戌子は空いた手を振るいウィンドウのようなものを展開。片手で器用にコンソールを操作しつつ、相手の声に耳を傾け、

「こっちもすっかりやってるよ。命蓮寺、だっけ？目星付けてる『種』の子もしっかりチェックして来たから大丈夫」

今日一日張っていた場所の住人、幻想郷の信仰を集めつつある僧侶の妖怪寺を思い出す。戌子達の鍵である『種』となる少女も、問題なく利用出来そうだと。ただ、

「見慣れないのが一人……。ぼけぼけしてるけどちょっと警戒かな」

戌子は思い出す。一日の大半を縁側に腰掛けて過ごしていた、得体の知れない少女の存在を。端から見たらレモン飴を頬張っているだけだったが、その身に秘められた力は凄まじく、最低でも『彼』と互角、或いは

「ん、三人拾って帰るよ。そろそろ動き始めないとだもんね」

考察を打ち切り相手に答え、戌子は手を振るいウィンドウを消す。そろそろ約束の時間だ、見落としたりしたらあまりにも笑えない。故に会話を締め掛かり、

「はいはいJud・Jud。わかってるって。それじゃ、また後でね。……魅月」

最後に相手の名を呼び、戌子は通話を終了する。ふうと軽く息を吐くと同時、

「戌子さん」

戌子の立つ十字路の右手、少女の声が彼女を呼んだ。振り向けばそこにいるのは、十の半ば程に見える小柄な少女。肩にかかるくらい淡い緑色の髪は、赤いリボンで括られている。青のプリーツスカート、白いシャツにニーソックスと装いは現代風で、一回り大きなサイズの黒いコートを羽織っている。儂げな印象も相俟って、コートに着られているような少女だった。

「あ、詩歌^{しつか}。そつちも終わり？」

「うん。……じゃなくてJud。『歪み』を一番活かせそうな場所は見付かったよ。これならあの止まった場所の人達も動かせると思っ」

尋ねられた詩歌は彼女達共通の挨拶で答え、己の活動を報告する。具体的な言葉は省かれているが、それでも戌子には十分通じる。あえて四文字で表すのなら、『万事順調』だ。

「上々。で、そつちは？」

詩歌に笑みと頷きを返し、戌子は首だけを動かして背後に視線を送る。

平屋立ての建物の屋根から飛び降り颯爽と着地を決めた少女が、こちらへと歩み寄っていた。

赤みの強い茶髪は胸元辺りでロールしており、小さなリボン髪を各所に飾っている。薄いピンクのワンピースに黒のハイソックス、丈の短い白のジャケット、そして上から羽織るのは漆黒のロングコート。病的なまでに肌が白く華奢な印象を受けるが、ブーツを履いた足取りはしっかりとおり揺らぎない。静かな雰囲気纏った、刃のような少女だった。

「こつちも下見は終わったわよ。どちらの『種』も素質は十分。神々と妖怪の住まう山……、期待以上に利用出来そうだわ」

「さすが。山の上の二柱のデータも送つといてね、摩理まじ」

戌子の言葉にJudと頷き、摩理はウィンドウを展開しコンソールを操作。詩歌も倣い戌子のウィンドウにデータを送信すると同時に通りの向こう側からもう一人の少女がのんびりと歩み寄って来た。

薄い紫色の髪は腰の辺りまで伸ばされ、瞳は逆に鮮やかな紫。霊夢のものによく似た紅白の巫女服を着ており、しかし袖は白ではなく赤だ。少女は右手に握った鯛焼きをぱくついており、左手には鯛焼きの入った茶色い紙袋を抱えている。しかし何よりも異彩を放っているのは、側頭部から生えている羊のものに似た漆黒の角。羽織られた同色の衣共々奇妙なオーラを放っており、幸せそうな表情とは裏腹にどこか近付くことを躊躇わせる。

「音羽^{おとほ}もお疲れ様。どう？」

「骨が折れるどころの話じゃないのです。居住地を探すのにとっても苦勞したのですよう」

しかし戌子は別段気にも留めず、紙袋の鯛焼きを消化する少女を労う。音羽と呼ばれた少女はぶんすかと怒りながらも、鯛焼きを頬張る度に幸せそうな表情を浮かべる。くるくると喜怒哀樂が変わり、見ている分にはとても面白い。

「でも、その労力に見合うだけの成果は得ました。聖人達の居場所は完全にマーク出来ましたのです」

「オツケー、文句なしの出来だよ」

鯛焼きをくわえながら器用にコンソールを操作する音羽に頷き、戌子は集まった『種』達の情報を流し読みする。人通りチエックし終えウィンドウを閉じ、戌子は三人の少女達へと向き直った。

「さて、我等が魅月様からのお達し。作戦を本格始動させるってさ」

瞬間、外見も性格もまるでバラバラだった三人の瞳が鋭い色を宿す。

いいねえその表情、最高だ、と戌子は内心で獰猛な笑みを浮かべ、

「まあ最初は様子見がてら、瑠璃がちよっかい出すみたい。その時の相対次第で、今後の動き方を決めるって話だよ」

リーダー格の注釈に三人は殺気を緩めるが、その瞳の暗い光は未だ健在だ。今後の魅月の作戦とやりに異常なまでの執着を見せているのは、誰の目から見ても明らかだった。

「遂に……、始まるんだね……」

「始まるのです……、世界を終わらす為の戦いが」

「そして、世界を正しく作り直す為の……、ね」

まるで待ち侘びた想い人と再会した乙女のように、各々が期待に胸を踊らせる。戌子も平静を装ってはいるが、心中は昏い喜びではち切れそうだ。今すぐにも雄叫びを上げ、戦場を駆け回りたい

「さて、それじゃ『アナグラ』に帰ろうか。ここしばらく外回りだったし、ゆっくり休もう」

炎のように燃え広がる闘争心に蓋をし、戌子は静かに三人を促した。Jud、と応えた少女達を引き連れて、戌子は『彼』達とは正逆の方向へと歩き出す。

間もなく日は完全に沈む。夜は妖怪 即ち戌子達の時間。暗くなり徐々に明かりが灯り始めた通りを、最後にもう一度だけ振り返り、

「掛かっておいでよ、もう一人の私達。滅びの担い手と相對して、正逆の君達は一体どうするのか……」

願わくは、

「共に同じ道を歩みたいねえ……、蒼衣・シュヴァルツシルト」

第三十二話「賑やかしの幻想ブン屋」(後書き)

うわあキナ臭っ 書いた人

イイハナシダナーで終わると思った？残念でした！(おい
という訳で人里編も無事終了、次回からは休息編と題打って、短編
的な話を四話程投下する予定です。無論ネタ全開で。

次回、蒼衣とアリスのデート。

第三十三話「アリスの割と幸せな一日」(前書き)

お待たせしました、三十三話です。ここからは今までと一変ほのぼのの続きです。

ちなみに前回同様約14000文字。仕方ないね、アリスへの愛故に(あ

ではどーぞー。

第三十三話「アリスの割と幸せな一日」

魔法の森の中に立つ洋館、マーガトロイド邸。やや開けた場所に立つここは生活面を考慮してか、日当たりが良くなるよう設計されている。よくよく見てみれば数多の人形達が掃除を始めたり、郵便受けを覗き込んだりと、徐々に活動を開始している様が見受けられた。太陽は既に地平線から離れている。即ち朝、一日の始まりだ。

そんな動の空気に包まれ始めた洋館の中、窓から差し込む朝日を受け、ベッドから身を起す影がある。Tシャツにハーフパンツという軽装で伸びをしているのは、十一日ぶりによくマトモな睡眠を取れた蒼衣・シュヴァルツシルトだ。

上半身を起こしたままぼーっとすること数秒、意識が覚醒したのか瞳に宿る色が意志を伴ったそれに変わる。現在時刻を体内時計から概算し、六時半前後と判断。他の面々は起きているだろうかと身体を動かそうとしたところで、腕を引っ張られたような感覚を得る。

原因を特定しようと思いついた彼は、己の寢床を見て言葉をなくす。彼の母がどこからともなく用意したシングルサイズのベッドに身を横たえていたのは、義理の息子だけではなかった。

蒼衣にしがみつくように、まるで母を求める子供のようにして古明地こいしとフランドール・スカーレットがそこで眠っていた。

……… オークイ、まずは落ち着こう。

朝っぱらからとんでもない光景を見せられても、一応蒼衣は冷静だった。動揺する心を押さえ付けようと、一度大きく深呼吸。

だが蒼衣は自らの行いを、一秒と経たずに後悔した。すぐ傍で眠る二人からは女の子特有の　　上手く言葉に出来ない類の甘い香りがある。黄緑と赤のパジャマ姿という新鮮さ、あどけない寝顔という無防備さもそれに一層拍車を掛け

……… いかん、泥沼だ。

変な方向に脱線する思考を慌てて振り払い、ともかく夕べの記憶を辿る。半分はもちろん状況を整理する為、もう半分は己の潔白を証明する為だ。

マーガトロイド邸に無事帰宅したのが、昨夜のおよそ九時頃だった。アリスは魔理沙を伴い即座に晩御飯パスタの用意に取り掛かり、神綺はどこからともなく人数分の家具を調達し部屋の模様替えを開始。別段することのなかった蒼衣は妹と式神に家の案内をした後、神綺の手伝いに参加した。幸いなことに空き部屋はそれなりに多かった為、こいしとフランの相部屋、鏡花と菖蒲の相部屋、蒼衣の一人部屋と、本人達の希望通りの部屋割が出来た。

晩御飯を消化し終えた後はアリス達や五十を超える上海も加わり模様替えを再開。交替で風呂に入りつつ、一時間と経たずに作業を終え、そのまま泥のように就寝した。風呂の際に一緒に入ろうと画策

する約二名やはしゃぎ回って大騒ぎする馬鹿がいたが、その辺りは思い出したくもないのでスルーする。

……………で、こいつらはいつの間に忍び込んだんだ……………？

一通り過去回想を終えるも、記憶と現状が一致せず蒼衣は軽く混乱する。いくら眠っていたとはいえ、気配を悟らせず隣に横たわるなんて出来るはずが

「ん……………」

必死に寝起きの頭を回転させる蒼衣をよそに、左手側で眠るこいしがぎゅっと兄の腕を抱く。それで蒼衣は思い出す　こいしの能力だ。彼女が本気を出せばその気配を感じ取れるのは、この家の中では神綺くらいのもだろう。ましてや就寝中で気を抜いていた蒼衣如きが、それに気付けるはずもない。

現状の把握はどうか終えた。次は自分の行動を決定しなければならぬのだが

「……………ゴメン」

すやすやと眠る二人に謝りつつ、蒼衣はそっと布団から抜け出す。何故かわからないがこんな状況をアリスに見られたら、ボコボコに

されて家から放り出されるような予感　危機感に近いそれを覚えていた。誰だつて命は惜しい。故に選択肢は一つしかなかった。ヘタレなどと言つてはいけない、あの状態のアリスは赤ん坊の目の前に腹を空かせたライオンを解き放つくらいに危険なのだから。

ともあれ無事に任務完了。部屋を出た蒼衣はついでに持つて来たいつもの服に着替え、寝間着代わりの服を部屋の隅にスローしてからリビングの方へ。耳を澄ませばキッチンの方から、包丁がまな板を叩く音や何かを煮込むような音が聞こえてくる。

……………そういえば、上海達に家事をさせてるんだっけ。

小さな身体を懸命に動かして働く人形達を思い出し、リビングへ至る角を曲がると、

「……………お？」

「……………あら？」

既にいつもの服に着替えたアリスが、エプロンを付けて調理中だった。リビングを掃除している上海達に指示を飛ばしつつも、野菜をカットして皿に盛り付けたり煮込んでいるスープの様子を見たり。そこに一瞬神綺^母の姿が重なって見えたのは、気のせいではないだろう。

「おはよう兄さん。てっきり今日は寝てるかと思ったけど」

「おはよ。仮に寝てたらどうするつもりだったんだ？」

飛んで来た上海を軽々と抱き留めつつ、蒼衣はアリスに尋ね返す。別段深い意味はなく世間話程度の質問だったのだが、アリスは僅かに頬を赤くし視線を背け、

「……………昼過ぎくらいに起こしに行こうかなって」

……………あつぶねえ……………！！

思わず心中とはいえ全力で安堵の息をついた。二人の性格からして蒼衣が寝たままなら、起きたとしても二度寝に入るだろう。無論くつついたままで。そこを起こしに来たアリスに目撃されたら最後、コンティニュー無効でゲームオーバーだ。まさに危機一髪。知らずとはいえ自分の命を救っていた。伊達に健康的な生活を送っていた訳ではなかったようだ。

「そ、そんなことより！今日は何するか決めてるの？」

習慣の勝利に心中でガッツポーズを決める蒼衣をよそに、話題を逸

らすようにアリスが口を開く。彼としても話題が移るのありがたい、今までの記憶を手繰り寄せ、

「いや、特に何も」

率直にそう結論した。幻想郷に来てから二週間にも満たない蒼衣に約束するような相手など数える程しかない。おそらくこいしやフランの相手をさせられるか、鏡花に振り回されるのが関の山だ。前者はまだしも後者は遠慮願いたい。

「じゃあ……、午後から買い物に付き合っただけで、いい？」

「ああ、お安いご用だ」

なのでアリスのどこか躊躇いがちなその誘いも、蒼衣は二つ返事で了承した。無為に一日を過ごすよりはよっぽど建設的だし、何よりアリスと会話出来る。

再会してから今日で十二日目になるが、蒼衣はアリスとマトモに話せた記憶が未だ全くない。来て早々に地底へ向かい、こいしに付きっ切りになったかと思えば、今度は紅魔館でフランに付きっ切り。そして本来の目的である、人里の用事を済ませたのが昨日。合間合間に多少は話しているものの、十年の空白を埋めるにはまるで足りない。魔界の面々の様子も気になるだろうし、アリスの提案は渡り

に船だった。

「準備出来たら声掛けてくれ。俺はいつでも大丈夫だから」

「え、ええ」

まだ六時間近い猶予があるので、蒼衣はそう告げておく。二人が起きて来たら最後時間なんて一瞬で流れてしまっし、それで約束をすっばかすのも大変よろしくない。一応自分でも気を付けるつもりだが、やはり約束した本人に言ってもらうのが確実だ。人生何が起きるかわからないし、それがベストだろう。

熱に浮されたかのように生返事を返すアリスに若干の不安を抱きながらも、蒼衣はリビングへと移動する。もう少し話しておきたいところだが今話すと後々ネタがなくなるし、そもそも今の状態ではマトモな返答は期待出来そうもない。

……………上海達の手伝いでもするか。

午前中の過ごし方を模索し、そんな結論に落ち着く。まだ家が穏やかな今の内はせめてくつろいでおこうと思いつながら、蒼衣は布巾を手に取ったのだった。

一見平静を装いながらも、アリスは心中でガッツポーズを決めていた。それはもう改心の、今世紀最高と言っても過言ではないレベルで。

デートである。

誰がなんと言おうとデートである。

例えば蒼衣が単なる買手^{相手}だと思っただけでも、アリスの認識上では寸分の狂いもなくデートなのである。

魔界から離れ約十年　兄は見違えるように成長していた。自分と同じ蒼い瞳こそ変わらないが、背も大分伸び体付きも逞しくなっている。なんてことないように振る舞ってはいるものの、顔を合わせただけで心臓が高鳴って止まらない。故に自然と素っ気ない返答になっってしまった、せつかくの機会を生かすことが出来なかった。異変解決に奔走したり、こいしやフランという強敵^{ライバル}が現れたことで更に機会を失し、何度悔しい思いをしたことか。穴があれば入りたい、なければ地面をのたうちまわりたい程の度し難い失態だ。

そんな兄が自分の誘いを、笑顔で承諾してくれた。断られても不思議じゃないのに、即座に了承してくれた。自然と頬が緩んでしまい、気を抜けば鼻歌が漏れてしまいうさだ。出来ることなら今すぐ自室に戻り、歓喜に身を任せベッドの上を転がりたい。あまりの現金さに冷静な自分が苦笑しているが、そんな瑣末なことはどうでもいい。

具体的なプランは全く考えていないのだが、嬉しさのあまり脳が考えることを放棄している。約六時間後の近い未来を想像するだけで、

いけないとわかっていてもやけが止まらない。きつと今鏡を見たら、とんでもなくだらしない表情を浮かべているだろう。

「……………えへへ」

いけないいけない、つい笑いが漏れてしまった。喜ぶのは後でいくらでも出来る、今は他にやるべきことが

……………あ。

重大な事実に気が付いたアリスは、バツとコンロの方へと振り返る。長い間火にかけられていたスープはいつしか完全に蒸発し、玉葱やベーコンなどの具が死体の山のように積み重なっていた。

異臭が発生していないのを幸いとはかりに、アリスは即座に証拠を隠滅しに掛かる。幸い具はまだ使えそうなので流用し、再度水を火にかける。浮かれるのも程々にしないと、とアリスは気合いを入れ直すか、

「……………ふふっ」

やはりどうしても、頬の緩みだけは止められないのであった。

「……異変だ」

昼食を終えた十二時半過ぎ。自室に戻った蒼衣は一人そう零していた。目の前には約六時間前と寸分違わぬ光景　未だ安らかに寝息を立てているこいしとフランの姿がある。侵入者二人

そう、寸分違わぬということは、微動だにしていないということ。文字通り半日以上寝ているにも関わらず、二人は起きる素振りさえ見せない。肩が上下していなくなったら、死んでいるのではないかという危惧を抱きかねない程に。

まさか何かの病気とか深遠なる闇の後遺症かと不安になるが、しかし記憶を辿った蒼衣は目の前の光景に合点がいく。地霊殿や紅魔館から魔法の森まで蒼衣達を必死に追い掛け、菖蒲との戦闘に巻き込まれ、拳句聞き込み調査に模様替え。ただでさえ二人は子供なのだ、そんなハードスケジュールに耐えられるとは思えない　身体が休養を欲しているからこそその睡眠だろう。

そう納得すると過剰なまでに心配していた自分が馬鹿みたいに思えて来て、蒼衣は知らず顔に苦笑を浮かべる。二人に布団を掛け直し、顔に掛かっていた髪を掻き上げそのまま頭を優しく撫でる。

『んー……』

感觸が心地好いのか、二人は頭を手に押し付けるように身じろぎする。むず痒そうな、しかし明らかに喜の色を宿した穏やかな笑みに、蒼衣も表情を緩め微かな笑みを浮かべた。

……………母さんもこんな気持ちだったのかな。

胸の内に沸き起こるのは、微笑ましさと懐かしさ。かつて魔界にアリスがいた頃は、神綺を挟むようにして川の字になって寝ていたものだ。昔の自分達を今の彼女達に重ね合わせるとなるほど、確かにそっくりで。自分が彼女達にとっての神綺のような存在になれば、

……………あの時死ななかっただけの価値はあった、かな。

遠い昔　もはや過ぎ去ったモノである忌まわしい記憶を振り払い、蒼衣はゆっくりと立ち上がる。かつての自分がそうだったように、彼女達が居場所だと思えるようになれたなら。それはきっと、この上なく嬉しいと思えた。

「……………さて、そろそろ行くか」

感傷に浸ること数分、ふと時計を見れば短針が示す数字は十二から一へと移っている。そろそろアリスも後片付けや出掛ける準備を終えた頃だろうと予想し、踵を返し歩き出す。

「……良い夢見るよ」

最後にそれだけを言い残し、蒼衣は静かに自室を後にした。

「……到着、っと」

魔法の森から歩くこと十数分。さしたる問題もなくアリスと蒼衣は人里に到着していた。昨日の今日で訪れた場所は別段変わった様子もなく、いつもの賑わいを保っている。相変わらずここは、幻想郷の穏やかな空気の流れが凝縮されたような場所だと思う。

「相変わらずどうも違和感が……」

「魔界みたいな大都市に比べたらそれはね……」

そんな光景を前にして、隣に立つ蒼衣は何とも言えない表情で首を捻る。文明が発達した魔界という土地で育ったからだろう、アリスとて来たばかりの頃は戸惑ったものだ。

しかしいざ通い慣れてみれば、ご近所付き合いが密なこの場所は魔

界とよく似ていて。知らず故郷の面影を重ねてしまうのも、時間の問題だった。過ごしていく内にこの良さもわかるだろうと、アリスは一人笑みを零した。

「で、買い物はいいけど何買ったんだ？」

不意に妹への振り返りと共に、そんなことを尋ねる蒼衣。買い物に付き合っただけで欲しいと言われていない為、実際何を買ったのかまでは知らない為だ。アリスは突然の質問に慌てながらも口を開き、

「とりあえずは日用品かしら。長いこと家を空けてたし、食料品も調達しないと」

頭の中の買い物メモを整理しつつ、アリスは淀みなく問いに答える。一見なんでもなさそうに見えるが、しかし実はいつぱいいつぱいだ。不意打ちに近い形で目と目が合ったせいも、やけに頬が熱い。悟られまいと思わず視線を逸らしてしまい、再び自己嫌悪。どうしてこうもいざ好きな人を前にすると何も出来ないのかと、頭を掻きむしりたくなってくる。

「オッケー。んじゃ……」

ふむ、と頷いた蒼衣はそう口を開き、宙を彷徨わせていた視線をアリスに戻す。道案内頼むな、と続くはずであった言葉はしかし、

「とりあえず神楽屋行こうか」

アリスの期待を裏切って、かなり具体性を伴った言葉となって返って来た。

「えつと……、兄さん？」

すたすたと歩き出す兄を呆然と見送り、二人の間が五メートル程になつてからようやく口を開くアリス。どうも自分はアドリブに弱いなあと、また冷静な自分がどこかで分析しているがそんなことは二の次だ。

「あ、もしかして別の通いつけあつたりするか？」

「ないけど……、なんで神楽屋を？」

動かないアリスが気になつたのか振り返りと共に蒼衣が質問するが、アリスはそれを逆に質問で返してしまう。蒼衣はまだ幻想郷トホホに来て二週間にも満たない上、人里を訪れたのは昨日が初めてだ。大通りに面した店ならまだしも、八代屋のような穴場を何故知っているのか

「昨日稗田屋敷で合流するまでに慧音が色々と教えてくれた。利用頻度の高そうな所は大体覚えてる」

「そ、そう……」

対し蒼衣の答えは至って簡単なもので、アリスは不満ながらも納得を得る。確かにあの世話焼きの寺子屋教師ならそのくらいはしそうだ。穴場をしっかりと押さえている辺り、あの少女も侮れない。

……………おのれあの半獣……………！！いつか覚えてなさい……………！！

『幻想郷に不慣れな兄に人里を案内する』という大前提を思わぬ横槍で崩され、アリスは高速で思考を回転させつつプランを練り直す。心中で復讐を誓いながら、アリスは蒼衣の後を追った。

「へくしっ…」

「あらあら……、風邪でも引きましたか？」

「いや、一応頑丈だからそんなはずはないんだが……」

「もしかしたら誰かが噂してるのかもしれないね」

「どちらかと言うと殺気に近い悪寒が……。って、そんなことより資料を纏めるぞ」

「はい」

そんな訳で兄と歩くこと数分、アリスは神楽屋の前に辿り着いていた。通りから少し外れた所でひっそり営業している、二階建ての木造家を改築して作られた店。八代屋同様アットホームな雰囲気を感じさせる万屋（まんや）。それが神楽屋だった。八代屋同様見付けにくい立地だが顧客は多いらしく、経営難になったという話は聞かない。きつと店主達がいい人だからだろうかと、アリスはそう思っている。

「いらっしやませー」

引き戸に取り付けられたベルがカランカランと低く籠った音を鳴らし、同時に店の奥から一人の少女が現れる。艶やかなピンクの髪はポニーテールに束ねられ、背はスラリと高い。白いシャツに黒いミ

ニスカート、同色のベストにネクタイと装いは現代風、藍色のエプロンには白い文字で店の名前が書かれている。どこからどう見ても間違いなく、この店員だ。

「あ、アリスじゃない。久しぶりー」

「久しぶり。相変わらず元気そうね、セラ」

パアツと笑みを浮かべ話し掛けて来る店員ことセラに、アリスは碎けた口調で答える。頭に疑問符を浮かべる蒼衣をよそに、女子二人はそのまま雑談を開始。世の中はいつだって、少数や異端が肩身の狭い思いをすることになるのだ。同情はするが声は掛けない、何故なら

「そっちは？」

ふと気が付いたのか、セラが隣の兄へと視線を動かす。慌てて妨害
インターセラフト
しようとするが時既に遅く、

「初めまして。アリスの兄の蒼衣だ」

一人置いてきぼりだった蒼衣は、ここぞとばかりにセラの質問に食いついていた。矛先が向かないようになるべくアリスが引き付ける

つもりだったのだが、やはり無理があったか

「ああ！噂の兄さんか！」

蒼衣の答えを聞き、セラは納得したようにうんうんと頷く。そんな言われ方をして疑問に思わないはずがなく、

「噂ってなんの？」

「そりゃ当然アリスの……」

セラが何かを口にする寸前に、アリスはその口を塞ぎ店の奥まで引きずっていく。紅魔館でも似たような光景があったなあとデジャビユを覚えるが、今はこちらが最優先だ。

「余計なことは絶対に言わないで。いい？」

アリスの言葉とほぼ同時、何かに怯えるようにブンブンと頷くセラ。偏に目が笑っていない笑顔のせいなのだが、当の本人は全くわかっていない。未恐ろしい少女である。

何はともあれ納得してもらえたので手を離し、二人で蒼衣の所へ戻る。当然のように蒼衣が首を傾げるが、

『なんでもないなんでもない』

二人の見事なシンクロっぷりを訝しみながらも、とりあえずは引き下がった。アリスがホッと一息つくと同時に、セラが一步前に進み出る。

「改めまして、私は高坂セラ。アリスとはちょっとした付き合いだね」

「妹が世話になってるみたいだな」

そんなことを口にしながら握手を交わし、互いに苦笑する二人。気安く兄へと触れられるセラに少しムツとするが、そこは我慢だ。

……………頑張れ私、ええそうよ私はやれば出来る子 ……！！

「そついえばちとせは？」

「いつも通り奥。カウンターでへばってテレビ見てるよ」

意識を逸らしながら話題を探していたアリスが、ふと気付いたようにとある人物の名を口にする。セラは背後を指差し応え、ああとアリスは納得する。確かに彼女ならばカウンターを任せただ方がいいだろう。

「ちとせ？」

「この店主。身体が弱いから基本的に出て来ないわ」

当然の如く彼女を知らない蒼衣に、アリスは手短かに説明した。とうか彼女の病弱っぷりを知らない者に、全てを語っていたら軽く一日は掛かる。

曰く、ボールを避けて屈んだら足を疲労骨折。

曰く、体力作りのランニングを試み担架で運ばれ帰宅。

曰く、ストレッチをしていて股関節脱臼。

曰く、コマを回そうとして右肩を捻挫。

曰く、くしゃみをして肋骨を剥離骨折し、治ったかと思ったら肺炎で入院。

曰く、永遠亭通院回数ダントツトップのお得意様。

一部捏造が入っているのではないかと思いたくなる程だが、どれも

これも全て真実。一々上げていたら枚挙に暇がないのである。

「で、今回は何がご所望？」

「いつものシャンプーとボディソープのストック、それからティッシュにトイレットペーパー、絆創膏と包帯と消毒液……、こんな感じかしら」

セラもそれをわかっているのか、話題を切り替えるようにアリスへと向き直る。問われ脳内のメモを引つ張り出し、それを淀みなく読み上げて行くアリス。後半の医療品は間違いなく隣で首を傾げている兄の為なのだが、当の本人は全くわかっていない。未恐ろしい少年である。

「その辺は確かバックヤードにあったはず……。纏めて持って来るからシャンプーだけ取って来て。場所はいつもの所」

エプロンのポケットから使い込まれたメモ帳を取り出し、在庫情報をチェックしながらそう答えるセラ。言うが早いか踵を返し、店の奥へと姿を消してしまう。初見の客には訳がわからないだろうが、彼女が顔馴染みにこのような対応をするのはデフォルト。気を使わず自然体で接することが出来る、数少ない人数にしか見せない一面だ。

勝手がわかっているアリスも慣れたもので、一分と掛からず言われ

た品物が陳列された棚へと辿り着く。が、どうやら整理中だったのか、棚には様々な種類のシャンプーが雑多に並んでいた。

「えーと……」

いつもならササツと選んで終了なのだが、これは思わぬ伏兵だ。目当ての品を探して視線を彷徨わせるアリスに、

「これだろ？」

あっけらかんと探し物を見付けだし、蒼衣はそれを差し出した。

「凄い……、あの中から数秒で見破るなんて……」

受け取りながら感嘆の息を漏らし、アリスは兄が手を伸ばした場所を見遣る。山のように重なっている中から一品だけ見付け出すまるで命蓮寺の妖怪鼠のように鮮やかな手際だった。軽く尊敬の入った目で見える妹に蒼衣は、

「まあ、アリスの髪と同じ香りだったしな」

サラリととんでもないことを口にした。

「……………っ!?!」

あまりの衝撃にフリーズしていた頭にその言葉が浸透すると同時、アリスの顔が一瞬で赤く染まる。不意打ちで想い人にそんなことを言われて、冷静でいるなど不可能だろう。ズブズブと思考の泥沼にはまっけていき、思考回路はショート寸前だ。

「どうかしたか?」

「っな、なんでもないわよ!」

なんでもないことのように首を傾げる兄に反射的に答え、顔を見られないよう店の奥へ駆け出す。さっきから心臓がバクバクいっぱなしで、熱を持ったように全身が熱い。早くいつもの自分に戻らなければと思うが、

……………いつもの私ってどんな私よ　!?!?

「はいはいお待たせ……………、どしたの?」

「べべ別になんでもないわよ!?!」

テンパりまくりのところに戻って来たセラが現れ、状況は更に面倒なことに。付き合いが長いだけあり、一瞬でアリスの異常に気が付いた。普段ならそんな気遣いが嬉しいところだが、今この状況下では大きなお世話以外の何物でもない。

「いやでも顔真つ赤よ？熱でもあるんじゃない……」

「いいから！！早く会計！！」

心配そうに問い詰めてくるセラに、アリスは思わず叫ぶようにしてそう答える。背後からは兄が追い掛けて来ているし、そうなれば状況は最悪も最悪。絶体絶命とはまさにこのことだ。

………ああもう神でも悪魔でもいいから誰か早くなんとかして
！！！！

「セラちゃん、そのくらいにしといてあげて」

心中の叫びに応えるように、セラの背後から静かな声が聞こえて来た。三人がカウンターに視線を移せば、そこには一人の少女が座っていた。

外の世界で言うセーラー服のようなデザインの服を着ており、上からは半纏を羽織っている。長い金髪は三つ編みで纏められ、低めの身長や細い身体からは儂げな印象を受ける。彼女こそが件の店主
神楽ちとせだ。

「アリスちゃんもいっぱいはいみたいだし、あんまり問い詰めると後でとんでもないことに……」

「今すぐお会計させていただきます全力で」

困ったような笑みでちとせがそう告げると同時、セラが人間を超越した速度でカウンターの内側に回り込む。手早く値段を電卓に叩き込む店員に苦笑しつつ、店主は蒼衣へと向き直った。

「アリスちゃんのお兄さんですよ？初めまして、ちとせです」

「あ、ああ。初めまして、蒼衣です」

神綺に似てどこか浮き世離れた雰囲気呑まれ、思わずどもりながら答える蒼衣。そんな様子にちとせは柔らかな笑みを浮かべ、

「セラちゃん共々良くしてもらってます。今後よろしく願いしまあ
あいたあー!!」

丁寧に頭を下げ、カウンターに額をぶつけていた。

「こちらこそ。ちよくちよく遊びに来ますよ」

「ん、アリスの兄さんなら安くしとくよー」

そんなちとせにどこかの母親を思い出したのか、フツと表情を緩めそう答える蒼衣。セラも笑みと共にそう告げ、諸々が入ったビニール袋を蒼衣に手渡す。

ぶつけた額をさすりながらちとせも身を起こし、アリスをちよいちよいと手招き。首を傾げながらもアリスが近寄ると耳元で口を開き、

「頑張つてね」

ハツとしたように振り返るが、ちとせはニコニコと笑ったまま。見透かされていたことに恥ずかしさを覚えるが、友人の励ましは素直にありがたい。頬は赤いまま頷きを返し、アリスは会計を終えた兄と共に店を後にした。

「これで一通り買い物は終わり。お疲れ様」

「いやいや、このくらいお安いご用だ」

両手に買物袋を提げた蒼衣の言葉に、アリスも僅かに表情を緩める。あの後も店先の品物を眺めたり食料品を調達しながら、人里をぶらぶらと歩き回った。セラのような顔見知りにからかわれることもあったが、そこは念入りに口封じをしたので問題はない。ポ力をやらかすこともなかったし、プチデートとしてはなかなか良かったんじゃないかと思う。

そんな楽しい時を過ごしていたからか時間は矢のように過ぎ、今はもう夕暮れ。外に繰り出していた人々は帰途に着き始めており、お開きの時間も近い。しかしアリス個人としては、出来ることならいくらでも引き延ばしたい。故に、

「帰る前に少し休憩しましょうか。どこがいい？」

「任せる。好きなところでいいよ」

兄の言葉に頷き、アリスは脳内でよさ気な場所をリストアップしていく。結果兄妹の好みとの合致から、一番馴染みのある甘味処『A QUE』を選択した。

和風な趣が漂う木造の平屋立てに入ると、途端漂って来る甘い香り。この店は和洋を問わず、文字通り『甘味』ばかりを出すちよつとした人気店だ。しかも店長のこだわりなのか、どれを取ってもとんでもなく美味しい。年頃の少女である自分は当然、意外なことに実は甘党である蒼衣も満足出来るだろうと考えてのチョイスだ。

「なんじゃアリスか。久しいのう」

盛況な店内の様子を眺めていること十数秒、奥から歩いて来た少女が話し掛けて来た。長い金髪は無造作に散らされており、しかし不思議と不潔な印象を与えさせない。頭にはヘッドドレスがあり、ゴスロリのドレスの上から店名の書かれたグリーンのエプロンを着用している。小脇に抱えたお盆も様になっており、美形な看板娘といったイメージだ。

「久しぶり。玖亜も元氣そうで何よりだわ」

「二週間前の縁日以来じゃな。みんな褒めておったぞ？」

風格を感じさせる言葉遣いに気圧されることもなく、玖亜友人と言葉を交わすアリス。初対面ではその外見も相俟って口を開きにくいが生来のものなので気にしなればなんともない。面倒見もよく優しいので、近所ではかなり人気があるとか。

「縁日で何かやったのか？」

「うむ、子供向けの人形劇をな。大好評じゃった」

玫亜の口にしたワードに興味を持ったのか、会話に首を突っ込む蒼衣。返って来た言葉にほうと感心したように頷き、隣のアリスの頭をぽふぽふ。

「すげえなアリス。さすが」

「べ、別に大したことじゃないってば」

笑みと共に賞賛の言葉を送られ、気恥ずかしさから頬が赤くなる。口ではそう言っているものの、口元が緩んでいる辺り喜びを隠しきれていない。蒼衣に気付かれていないのが、せめてもの救いだらう。

そんな様子を半目で眺めていた玫亜がふと思いつたように、

「……もしか噂の兄さんか？」

瞬間、両者が完全に固まった。

「……多分そうだと思うが噂ってどんなだ」

「それはもちろんアリスの」

「わーっ！わーっ！」

恐る恐る聞き返した蒼衣に頷き、口を開こうとした玖亜をアリスが慌ててカット。それを見ておおよその事情を把握したのか玖亜はニヤリと笑みを浮かべ、

「ふむ、そういうことならゆっくりしていくといい。幸い奥の方に空き席があるからの、多少の物音なら気付かれな」

「早く案内してくれるかしら、店長さん？」

思わぬ反撃を受け少し後退りながらも、玖亜はちえーとでも言いたげに頷く。どう見てもウエイトレスにしか見えない店長の後に続き、二人は客席へと通されたのだった。

「……みんな相変わらずなのね」

あれからの魔界についての話を聞き終え、身も蓋も無いというか予測可能だった結論を告げる。とうかがぶっちゃけて言ってしまうえば、それ以外にコメントのしようがなかった。

「ああ。エリスなんかしょっちゅう騒ぎ起こしてるしな」

「あー……、やっぱり？」

お冷やを啜りながら遠い目をする兄の言葉に、アリスは脳裏に悪魔^{エリス}の笑みを思い浮かべる。自分達よりもかなり長生きしているはずなのに、あの少女の快活さというかアクティブさはそれを全く感じさせない。率先して物事に首を突っ込んで、場を引く掻き回して面倒な状況にしてしまう、天性のトラブルメーカー。その底抜けの明るさに救われたことも多々あるが、真面目に相手をするとなれる夕イブだ。

「夢子がてんでこ舞いだつたな……。サリエルは相変わらずどっか抜けてるし、ユウはユウでマイペースだし。ユキやマイがいなきや色んな意味で死んでたと思う」

いつもそうだった。エリスが何かやらかして、自分と兄が巻き込まれて。サリエルはフォローしようとして逆に混乱を加速させ、ユキとマイ、夢子が解決に奔走して。だけどくたくたになつて帰って来

ると、母が笑顔で迎えてくれて。思えば毎日がとても騒がしくて、
けどとても楽しくて。

会いたいと思う。何せ十年だ。たった一人で家族もなく、異郷の
地で生きるとは想像以上に辛い。いくら強がって見せたところで、
所詮は二十にも満たない子供。郷愁の気持ちを抑えることなど、出
来るはずもないのだから。

「でもまあ……、安心したよ」

今は遠い過去の記憶を懐かしむアリスに、対面の兄が笑いかける。
何を安心したのか問い掛ける前に、

「たった一人で幻想郷なんて場所で生きて行けるのか不安だったけ
ど、しっかりやれてるみたいでホッとした。ちゃんと友達もいるし
な」

晴れ晴れとした笑顔と共に、そんな一言が来た。

「……何よ、子供扱いしなくてもいいじゃない」

そんな兄の言葉に、今の心境を見透かされた気がして。赤い頬を隠
したい心境と混ざり合い、思わずそうつつけんどんに返してしまう。
妹のそんな様子に微笑ましさを覚えたのか兄は苦笑しながら、

「そりゃ大事な妹だからな。過保護にもなるさ」

……………妹、か。

そんな風に思われて嬉しい反面、自分は兄にとってどのような存在なのかという疑問も膨らんでいく。いくら想い続けたところで、相手にその気がなければ空回りし続けるだけ。結局のところ、問題は全てそこに集約されるのだ。

蒼衣・シュヴァルツシルトにとって、アリス・マーガトロイドとは、一体どのような存在なのか。

ただの可愛い妹なのか、或いは

「兄さ」

「ほれ、注文の水羊羹二つお待ちじゃ」

タイミングが良いのか悪いのか、思わず口を衝いて出た質問に重なるようにして、玖亜が注文の品を運んで来た。血迷った質問をせずに済んで良かったと思う反面、やはり聞きたかったという想いもある。

り、

「……なんじゃ、親の敵でも見るような目をしておって」

「……別に」

心中で玖亜に謝罪しつつも、思わず鋭い視線をぶつけてしまっアリス。そんな心境を知る由もなく、蒼衣と玖亜は顔を見合わせ首を捻るのだった。

会計を終えて外に出た頃には、もう日は地平線に沈んでいた。玖亜も交えて雑談していた為か、思ったより長い間留まっていたらしい。

「早く帰るか……。馬鹿が飯々うるさいしな」

夜空に輝く星や月を眺め、目を細めながら蒼衣が口を開く。鏡花式神也と菖蒲どきの二人に関しては、放って置く訳にも行かず結局引き取ることになっている。それだけならまだいいが、タダ飯食らいの片割れがやたら食つこと食つこと。少食なもう一人を見習えと言いたいが、言ったところであの馬鹿にはあまり意味がないだろう。

夕食時に思いを馳せ憂鬱になる蒼衣だが、ふと隣にアリスがいないことに気が付き振り返る。今日一日楽しそうだったアリスは、まるで別人のように静まり返っていた。思い出を懐かしむかのように通りを眺めているその様は、何かの絵画のように浮き世離れた雰囲気。波打際の砂の像のように、このまま突如消えてしまいそうな危うさを孕んでいた。

「どっかしたのか？」

「……え？あ、なんでもないわ」

脳裏を掠めた考えを振り払い、蒼衣はアリスに声を掛ける。一応反応は返したものの、アリスの表情はどこか暗い。その目は夕方になり三々五々散っていく子供達の、まだ遊び足りないと楽しい時を求める、あの瞳によく似ていた。

「……また来ればいいさ」

だから、だろうか。気が付けば蒼衣は、そう口を開いていた。

「確かに一日は有限だけど、未来はそれこそ無限なんだ。いつでも何度でも、来たい時に来ればいい」

大真面目にそんなことを口にしていて自分に恥ずかしさを覚え顔を逸らしながらも、己の思いの丈をぶつける蒼衣。確かに楽しい時の終わりは寂しいが、それでも子供達は笑顔で別れを受け入れる。明日も明後日もその次の日も、また会えると信じているから。笑顔で手を振り『また明日』と、一日の終わりを迎えられるのだ。

「じゃあ……、また付き合ってくれる？」

「ああ、俺なんかで良ければな」

恐る恐るといった体で尋ねて来るアリスに、蒼衣は笑みで答えを返し頭をわしゃわしゃ。わっと可愛らしい反応を返す妹は、兄の鼻根目を差し引いてもかなり可愛いと思う。こんな少女に頼まれて断れる程、自分は甲斐性なしではない。

十年前、公園に迎えに来た時の神綺を思い出し、彼女と同じように左手を差し出しながら、

「ち、帰るじ」

「……ええ」

素直に手を取ったアリスを伴い、蒼衣はゆっくりと歩き出す。十年

前ぶりに手を繋いで、二人は共に帰路に着いた。

第三十三話「アリスの割と幸せな一日」(後書き)

アリス「可愛い

これ真理。テストに出るので覚えましょう。これ覚えとくだけで100点取れます。

という訳でアリスがようやくヒロインしてた訳ですが、次はこいフラがメイン。さてさてどうなるやら。

そういえば今回から書き方ちよつと変えてみました。主にシーン遷移のとか。その辺のご意見もあつたらバシバシ言っちゃってください。

次回、こいフラの一日。

第三十四話「いいしとフランの迷走気味な一日」(前書き)

お待たせしました、三十四話です。

まさかの一週間足らずでアリスとほぼ同量。ホラ子とかFate/Zeroでテンション上がってるし現実逃避したいから仕方ないね

(おい

ではごーぞー。

第三十四話「こいしとフランの迷走気味な一日」

時は流れ午後一時過ぎ。マーガトロイド邸の端の方にある、他の部屋より間取りの大きめな一室。女子供が集まる中心部に混ざる訳にもいくまいと、あえて離れを選んだ人物の部屋。その『蒼衣の部屋』と書かれたプレートの架けられた扉が、微かに音を立てながら少しずつ開いていく。

扉の隙間から現れたのは、黄緑色のパジャマで身を包んだ古明地こいし。寝ぼけ眼をだぼだぼの裾で擦りながら、ふらふらと廊下に歩み出る。神綺がどこからともなく取り出したパジャマとセットのスリッパが、彼女の歩みに合わせてぺたぺたと可愛らしい音を立てていた。

彼女に続いて部屋から現れたのは、これまた赤のパジャマを着たフランドール・スカーレット。姉貴分に渡された弱点对策の十字架は、賢明なことに寝る際も提げたままのようだ。マーガトロイド邸は生活面を考慮して南向き、加えて今は昼下がり。もし寝る前律儀に外していたら、窓から燦々と降り注ぐ日光を浴びて灰に還っていただろう。

通算で十三時間近くも寝ていた少女達は、ぺたぺたとスリッパを鳴らしながらふらふらとリビング目指して歩く。長い眠りで疲れは取れたが、寝過ぎた時特有の倦怠感が身体を包み込んでおり、頭は未だ半分以上夢の中だ。

時折壁にぶつかりそうになりながらも、二人は無事リビングに到着。リビングでアナログテレビを見つつ、ベーコンエッグトーストを頬張っていた影が顔を上げる。長い銀髪を朝日に煌めかせながら少女

が口を開き、

「こいしちゃん、フランちゃん、おはよー」

神綺の明るく柔らかな挨拶に、二人はこくりと頷きを返すことで答えとする。挨拶もそこに半分閉じたままの瞳を部屋に彷徨わせ、

「…………お兄ちゃんは？」

全くの同時に同じ言葉を口にした。開口一番にこれかとも思うが、元々二人が起きたのは隣にいたはずの兄がいなかったから。故に欠伸を噛み殺してここまで来たのだが、

「蒼衣君ならアリスちゃんとお出かけしたよー？」

「…………ふえ？」

神綺の寝耳に水な回答に、二人は眠気も忘れ目をぱちくり。そのまま軽く十くらいの間を置き、互いに顔を見合わせる。聴覚から得た音の連なりをようやく言葉として認識し、その意味がじわじわと頭に染み渡った瞬間、

『うにゃ ああああああ！！』

様々な感情がごちゃまぜになった二人の叫びが、午後のマーガトロイド邸を揺るがした。

「それではただいまより、緊急対策会議を始めます。議長は私、古明地こいしです」

神綺が用意した朝食兼昼食を囲み、こいしが真剣な面持ちで口を開く。既にパジャマからいつもの服に着替えており、戦闘態勢はバツチリだ。

859

「同じく議長その2、フランドール・スカーレットです」

「外野の水月鏡花です」

「……神無菖蒲なの」

いろとりどりのメニューが並べられたテーブルを囲む、相棒とノリのいい仲間達。そんな様子を食器を洗いつつ見守る神綺も、ニコニ

コと頬を緩ませている。

「議題は抜け駆けでお兄ちゃんを独り占めしているアリスについてと、今後の行動方針です」

頼もしい顔触れにうんうんと頷き、議題を宣言したこいしは背後のホワイトボードへ手の平を叩き付ける。どこからともなく用意してくれる辺り、少なくとも神綺は敵ではなさそうだ。アリスの母である彼女が自分達を見逃してくれるのは意外だが、これでかなり動き易くなるのも事実。無闇に藪を突くのは止めておこう。

「議長！質問！」

「うむ、何かね鏡花君！」

真っ先に口を開いたのは、蒼衣の式神その1こと水月鏡花。開始早々積極的なのは良いことだと、こいしは頷きと共に彼女を指名。場の注目が集まるとおもむろに口を開き、

「ぶっちゃけ二人の方がよっぽど独り占めしてるよね？」

議長二人

思いもよらぬカウンターに、こいしとフランは面食らう。鳩が豆鉄砲を食らったような、と形容するのに相応しいポカンとした表情を

浮かべ、二人は顔を見合わせた。

「いや、でも私達妹……」

「アリスも妹だったはずだけど？」

怖ず怖ずと言い返すこいしだが、鏡花の反論に口を噤まざるを得なくなる。こいし達のように口先だけではなく、血こそ繋がっていないもののアリスはれっきとした妹。先程の理論で言えば、アリスが蒼衣を独り占めしたとしても何も文句は言えないのだ。

「鏡花はどっちの味方なんだよう！」

埒が明かないことにむくれたフランが、癪癪を起こした子供のようにテーブルをバシバシと叩く。アリスの対策会議だったはずなのに、いつの間にかアリスを擁護する流れになっているのだからある意味当然とも言える。だが鏡花は宙を眺めながら、

「んー……、どっちかって言うとアリス側？」

「退場！レッドカード！」

しれつと放たれた一言に、こいしはホイッスルを吹くようなジェスチャー。まさかこんな身近に不穏分子が潜んでいるとは、夢にも思わないだろう。灯台下暗しとはまさにこのことだ。

えーと不満そうな表情を浮かべつつも、素直に席を立つ鏡花。しかし彼女を制止するように、白く細い手が頭上に伸ばされる。動きを止めた三人がそちらに振り返ってみると、

「……………私も、アリス側」

蒼衣の式神その2こと、神無菖蒲の一言にこいしとフランは顔を見合わせる。議員の半分が脱落し、残るは自分達二人のみ。無意識と箱入りで世間知らずな二人が、あーでもないこーでもないと会議をすればどうなるか。その想像には五秒も掛からなかった。

『……………退場しなくていいです』

どうどうと両手を前にし、切実な言葉を口にする二人。鏡花は面倒見がよく鋭いところがあるし、菖蒲は天然なせいかわ折思いも付かない名案を口にすることがある。無力な小娘である妹達は、誰かの力を借りるしかないのだ。鏡花もそれをわかっているのか素直に座り直し、

「まあそれはさておき実際どうすんの？異議ありーって押しかけたところで勝負は見えてると思うんだけど」

『あつ……』

情け容赦のない厳しい指摘をぶつけて来た。確かにこいしやフランの外見は、どう見積もっても十代前半。しかしアリスは蒼衣と同じ十代後半。どちらをそういつた対象に見るかと問われれば、特殊な性癖でもない限り答えは一つだけだろう。しかも年頃の少女らしく起伏に富んだアリスと違い悲しいかな、二人はそれらしい兆しすら見えない。大袈裟に言ってしまうえばこれは、『ボンキュツボン』VS『つるんぺたんすとん』。趣味嗜好は人それぞれだが、常人なら大半は前者を選ぶのではないだろうか。

「^{クマタイ}加えて言うならあつちの方が付き合い長いし。二人にしても^{ダイ}深遠なる闇の件があったから付き合い出来たんでしょ？」

『づく……』

それだけならまだしも、二人には時間という名の最大のネックがある。十年というブランクがあるにしろ、アリスと蒼衣は一年近くの長い付き合いだ。対し妹達の場合、会ってからまだ二週間。フランに至っては一週間にも満たない。共に過ごした時間が全てを決めるとまでは言わないが、この点ではアリスが大きくリードしているのは確かだ。そうなるといよいよ、二人の勝ち目は薄くなって来る。

「私達は協力出来ないし、もう諦めた方がいいんじゃない？」

『むきや ああああああ！！』

詰め将棋のように追い詰められ、拳匂下された結論に二人が未知の言語で叫びを上げる。フランに至っては災厄レイヴァテインの杖を取り出し、今すぐにも鏡花に切り掛かりそうだ。戦う前から敗北を確定されるなど、屈辱以外の何物でもないだろう。

が、暴れるの二人の拳動は一瞬にして、その全てを禁止される。二人が視線を動かした先には、

「……………喧嘩しちゃ、ダメなの」

指先に黒い光を灯し、言い聞かせるように言葉を紡ぐ菖蒲。彼女の能力 『呪詛を穿つ程度の能力』 によるものだと、二人は遅れて理解する。蒼衣の血と神綺の髪飾りのお陰か、能力を行使しても身体はなんともないようだ。……………やられる側の妹達は堪ったものではないが。

「大丈夫大丈夫、私は喧嘩するつもりなんてないし。二人も今は混乱してるだけだろうし、能力解除してあげて？」

「……………ん」

鏡花に笑みと共に諭され、菖蒲は素直に能力を解除する。ようやく身動きがとれるようになった二人も頭が冷えたのか、すぐに椅子へと座り直した。やれやれと溜め息をついた鏡花が口を開き、

「考えてごらんなさい？十年よ十年。どんな理由があつたかは知らないけど、アリスは十年間独りで生きて来た。それでようやく再会出来たのに、異変やらなんやらであつちこつち駆け回つて、ロクに話も出来ず終い。……ちよつと可哀相だと思わない？」

紫に解決を依頼されたこの闇の異変。唯一の対抗策である蒼衣はあちこち奔走しているが、アリスにとつてはたつた一人の兄。危険な場所に赴くのは当然反対だろうし、故にすれ違いは続いていく。不憫と言えばあまりにも不憫。そうなれば今日という日は十年と十日ぶりに掴んだ、ようやくの機会なのだ。

「助けてもらったのが嬉しくて、それで頼りたい気持ちとかはわかるよ？かくいう私もその一人な訳だし」

「だけど、

「今の二人みたいな気持ちを、あの子はもつと長い間味わつてたのよ。……少しくらい、譲つてあげてもいいんじゃない？」

鏡花とて何も嫌がらせで言っている訳ではない。昨日の馬鹿騒ぎのお陰か、現在マーガトロイド邸にいる八人は大分打ち解けている。こいしのアクティヴさもフランの真つ直ぐなところも、自分によく似ていてすぐ仲良くなつて。だけど鏡花は友人よりも、命の恩人である蒼衣とアリスを選んだ。ただそれだけのことだ。

鏡花の思いの丈をぶつけられ、二人の間に沈黙の帳が落ちる。そのまま一分、二分、そして三分が過ぎた頃、

「……っ!」

「あ、フラン!？」

突如立ち上がったフランが、脇目も振らず走り出した。こいしが窺うように鏡花の顔を見るが、当の本人は素知らぬ顔。しばし逡巡するも立ち上がり、慌てて後を追いつけていくこいし。菖蒲が何か咳いていたが、彼女の耳には届かなかつた。

わからない。

フランの心を埋め尽くすのは、ただその一言に尽きた。

いや、正確に言えばわかりたくなかった。

十年。その程度がなんだと言うのか。その五十倍近い時間を、闇に囚われ生きてきた自分を差し置いて。

何故。何故。何故。

今から二人を追い掛けてしまおうか。アリスを力付くで引き離し、蒼衣を独占してしまおうか。やってやれないはずがない。元よりこの身は、破壊^{それ}だけに特化したモノなのだから。

当然そんなことをすれば、蒼衣にとても怒られるだろう。アリスに今の自分と同じ、寂しく辛い気持ちを押し付けることになるだろう。それが醜い嫉妬だということは、本人が一番わかっている。だけど、それでも、

……………お兄ちゃんずっと触れ合っていたい……………。

そう願ってしまうことだけは、どう足掻いても止められなくて。やめると冷静に諭す自分と、奪えとけしかける自分が自分の中で争って。他者と関われぬままに生きてきた幼い少女が、己の感情を律する術など持ち合わせているはずもなく。そんなことを考えてしまう自分がひどく穢らわしい存在に思えて、気が付いたらアリスの家を飛び出していた。

「こんなところにいたんだ」

己の世界に浸っていたフランの意識に、聞き慣れた声が静かに響く。抱えた膝から視線を上げれば、眼前にはもう一人の自分がいた。自分と同じ闇を抱えていた、自分と同じ感染者。そして何より自分と同じ、蒼衣にその闇の底から救い上げてもらった少女。自分の唯一無二の親友　古明地こいしだ。

「やっと見付けた。急に飛び出してたから心配したんだよ？」

安心したように頬を緩ませながら、スカートを押さえ隣に座るこいし。ここは魔法の森の中でも、かなり毒素の薄い地域。真昼の太陽を程よく遮るその一角は、隠れた名所といったところか。風通しも良くマーガトロイド邸からも近い為、遊ぶには持って来いだろう。

「……鏡花の言ってることね、わからなくもないんだ」

無言で足元を眺め続けるフランに習い、膝を抱えたこいしがぼつりと呟きを零す。この後に及んでまだ説教かと、口を開こうとしたフランが振り返った先には、

「昨日お兄ちゃんと会えた時、私すっごく嬉しかったの。心がふわって軽くなって、悩みなんか全部吹っ飛んじゃうくらい」

柔らかな笑みを浮かべ、僅かに頬を染めるこいしの姿があった。

「抱き着きたい、手を繋ぎたい、頭を撫でて欲しい、そんな想いでいっぱいだった。たった三日会わなかっただけなのに、ものすごく待ち遠しかった」

同性でも思わず見惚れてしまう可愛らしい表情に言葉を失う中、親友の独白は続く。幸せそうに兄のことを語るこいしの表情は、まさに恋する少女のそれで。

………夕べにお兄ちゃんのことを話し合った時も、こんな顔してたっけ。

半日前と寸分違わぬ笑みを前に、フランはそんな感想を抱いた。

「だから……、ね。今までのアリスは、昨日までの私の千二百倍辛かったのかな……。なーんて思ったら、何も言えなくなっちゃった」

えへへ、と力無い笑みを浮かべるこいしは、端から見ても弱々しくて。ああ、この子もお兄ちゃんが大好きなんだなあ、と。なんの嫉妬や羨望もなく、素直にそう感じ取れた。

「……私は、今まで紅魔館のみんな以外と関わったことはなかったから。だからきつと、必然だったんだと思う」

だから、だろうか。気が付けば釣られるように、フランも口を開いていた。自分が関わった紅魔館以外の存在は、霊夢と魔理沙と蒼衣だけ。霊夢のような能天気なマイペースとも違う、魔理沙のよう
な少し捻くれた真っ直ぐさとも違う。蒼衣のどこか陰を抱えた、優しくもどこか過剰なまでの温かさが気になったのだ。

「一緒に遊んでる内に、段々お兄ちゃんが存在が大きくなって、気が付いたら朝いないだけで取り乱しちゃうくらいになって……、すごく驚いた」

「……同じだね。私と」

独り言葉を紡ぐフランに、過去を懐かしむような口調でこいしが頷く。その瞳はそう、自分達の大好きな人 蒼衣のそれによく似ている。まるでそう、昔の自分を見ているような色を含んでいた。だからもしかしたら、彼もそうなのかと思つて。一度気になりだしたら止まらず、我に返れば彼をただ目で追っていた。

「だけど私にはわからないもの。ただ一緒にいたいただけなのか、それ以上を望むのか。そもそも私なんか、それを望んでもいいのか
さえ」

ただの好奇心かもしれない。子供故の独占欲かもしれない。彼は文

字通り命懸けで、自分の闇に相對してくれた。なのにそんな軽々しい気持ちで、彼の抱える何かに手を出してもいいのか。泥沼に沈み始めた少女の思考はしかし、

「うりゃ
」

隣の少女に頬を引っ張られたことで強制終了させられた。

「いひゃいひゃい……」

「辛気臭い顔する子にはお仕置きなのだー」

思わず涙目になるフランの頬を、ぐにぐにと弄び笑うこいし。とは言っても痛みはなく、彼女がふざけていることはすぐにわかった。故にフランも無理には止めず、されるがままになること数分。ようやく離される頃には、フランの頬は少し赤くなっていた。

「……わからないならさ、探して行こうよ。その答えを」

不意に立ち上がりながら放たれた一言に、フランは頬を摩っていた手を止める。視線を上げれば何かを決意したような笑みのこいしがいて、

「私だってこれが友情なのか、恋愛なのか、依存なのかさえわかってない。けどありのままの私を、飾らない私を見て欲しい。真剣に向き合えばきっと、お兄ちゃんも答えてくれるから」

その後のことはわかんないけど、

「そうやって手に入れたモノは、きっと何一つ無駄なんかじゃない。きっと掛け替えのない、大切なモノだと思うんだ」

全く、この少女は。

何が『自分と同じ』か。見当外れもいいところだ。ただ腐っていた自分とは違い、彼女はきちんと前を向いている。それはきっと彼と出会ったことで得られた　心の力だ。

「こいしには……、敵わないな」

「えへへー」

半分呆れ、半分感心の笑みを向けると、こいしは自慢げになだらかな胸を張る。彼女が彼と出会うことで前向きになれたのなら、

……… だったら私も、そうなれるはずだよ。

「さて、それじゃあお兄ちゃん達を追い掛けよっか」

密かに心中で気合を入れるフランに振り返り、こいしは唐突にそんなことを口にする。ぽかんと開いた口もそのままに顔を向ければ、

「何も言い返せないけど、私悪い子だから。黙って見送ったりなんか出来ないもん」

悪戯っ子のような笑みを浮かべるこいしを見ると、不意に身体が震えて来て。笑いを噛み殺しているのだと気付いた時には、フランは身を折って大笑いしていた。

「そっだよ……。私だってお姉ちゃん紅い悪魔の妹だもん。悪い子になってもおかしくないもんね」

目尻に浮かんだ涙を拭いそう口にするフランに、こいしはピースサインで答える。ふっふっふっ、と悪い笑顔を顔に張り付け、互いにガシツと手を握る二人。進むべき方向は決まった、ご丁寧に道もある。ならば二人に出来ることは

「さ、行く？」

「うん！」

全力で、突き進むのみだった。

「……で、着いたはいいけどどうするの？」

人里の入口に立ち、背後の親友を振り返るフラン。正直なところ彼女に乘せられるままに来た為、蒼衣を探すと言っても具体的な方針までは考えていない。故に自然とこいし頼りになるのだが、

「んー……、やっぱり聞き込みかなあ……」

「……二人じゃ辛い？」

だよねえ、と二人揃って溜め息をつき、つい昨日のことを思い出す。魔理沙や蒼衣を伴った聞き込みは意外と手間が掛かり、その割には得られるものも少なかった。あの時より難易度は下がっているとはいえ、さすがに人手が足りなさ過ぎる。……フォーオブアカインド

を使えばいいような気もするが、同じ人物が四人も歩き回っていたらただのホラーだ。

「……ねえこいし、一つ聞いていい？」

「ほえ、なあに？」

ふとあることに思い至ったフランが、真剣な色を宿した表情で言葉を紡ぐ。首を傾げながら振り返ったこいしに対し、

「……人里の地理、わかるの？」

問われこいしは首を捻り、腕を組み、空を見上げ。やがて何かを悟ったようにニツコリと微笑み、

「無意識にうるつけばなんとかなるよ！！」

「行き当たりばったりにも程があるよ！？」

思わず全力で突っ込んでいた。深く考えず突き進めるのも一つの美点だが、過ぎると堪ったものではない。故にフランは軌道を修正しようとして、

「じゃあまずあの駄菓子屋に行ってみようか」

「フランも大概ノリノリだね!？」

全力で突っ込み返された。口でこそそう答えたものの、こいしはむしろ率先して入って行く。ともあれ目的を蒼衣探してから駄菓子屋探索へと切り替え、二人は店内に突入。昨日お世話になった店員に手を振ることで答え、陳列棚を見た二人の目に飛び込んで来たのは、

『飢饉者トーマスシリーズ……!!』

ここ最近大量のアナログテレビが幻想入りして来たことに伴い、紫が面白がって引っ張って来た外の世界の回線を河童達が弄り回し、結果として幻想郷内でもテレビが普及している。元より閉ざされた社会である幻想郷、珍しいものはあつという間に浸透していった。

飢饉者トーマスは毎週金曜夕方五時より放送されている、外の世界でも人気なアニメ。飢饉に喘ぐ村の青年が、家族を救うべく食べ物を探し求め廃線となった線路上を奇声を上げて爆走するという内容だ。シニールな設定、飢饉故の飾り気のないキモい顔、見た目とは裏腹な濃密なシナリオとかなり癖があるが、何故か好評を博している。

グッズも当然無修正でキモいが売れ行きは右肩上がり、作者にまで『どうしてこうなった』といわしめた一品。……現実には小説よりも奇々怪々である。

「これは買うしかあるまいて……!!」

「飢饉に喘ぐトーマスの為に……!!」

当然こいしとフランも視聴しており、今後の金曜日は同志神綺共々テレビの前にスタンバる予定だ。グッズで得た収益は飢饉の村へ回されるといふ体の宣伝故か、小銭を握って来店する子供が絶えないとか。ちなみに実際はどうかと言え、真面目に国外の難民に回しているのだから驚きだ。それが敵わぬ幻想郷内では、永遠亭や寺小屋などの公的機関の増設や修復に当てている。なんだかんだでみんなノリノリなのであった。

という訳で神綺からもらったお小遣いとにらめっこしつつ、買い物カゴをどこからともなく取り出す二人。本来の目的も大事だが、トーマスも結構大事なのだ。……同列に扱われる蒼衣が哀れな気もするが。

「やっぱりガムかな……。いや、グミも捨て難い……」

「神綺はふりかけだっけ……。おまけのシール欲しいなあ……」

神綺^{同志}へのお土産も吟味しつつ、こいしとフランは慎重に買う物を選定していく。神綺ならいくらでもお小遣いをくれるだろうが、それはあまりにも人として間違っている。優しさに甘え過ぎず、しっかりと遣り繰りする。それが二人の約束。自由奔放に思われがちな二人だが、姉や蒼衣のおかげかこういったところはしっかりしているのだ。

「じ……、これは……」

「トーマス水鉄砲……、だと……」

時折目に入るグッズに煩惱を激しく揺さぶられながらも、二人は楽しく買い物に勤しんだのだった。……ちなみに、出費は蒼衣との約束通り三銭で抑えたらしい。

『ダメダメじゃん!!』

トーマスを満喫し時は夕暮れ、昨日慧音が漏らしていた甘味処『A QUE』でほくほく顔をしていた二人は、ふと我に返ったように互いに突っ込んだ。眼前のテーブルには戦利品のトーマスグッズ達と、先程注文したオレンジジュースが二つ。本来の目的であったはずの

蒼衣探しは、遙か彼方まで吹っ飛んでいた。

……………これはいかん、由々しき事態だ。

トーマスグッズを巾着袋に戻し、こいしとフランは真剣な表情で思考を巡らせる。今日一日を無駄に過ごしてしまった分、アリスは大きくリードしているだろう。どうやって巻き返すべきか、どうやってアリスに勝つべきか、考えることは山程ある。額に皺を寄せむむむと唸っていると、

「なんじゃもう帰るのか？ ゆっくりして行けばいいものを」

「時間が時間だからね……。またその内顔出しに来るわよ」

自分達の横を通った少女達が、そんな会話を交わしていた。しかも後者の声には、ものすごく聞き覚えが。気取られないようそつと振り返った先に、

「世話になったな。また来るよ」

「うむ、アリスの兄なら安くしておくぞ」

「……セラといいあんたといい」

入口へ案内する店員と楽しげに歓談する、アリスと蒼衣の姿があった。

……いたああああ！！

危ういところでその叫びを心中に押し込め、顔を見合わせ親指を立てる二人。こんなところで再会出来るとは思わなかったが、これはまたとないチャンス。時間帯からしてこれから帰宅するところだろうが、家に帰るまでがお出かけ　つまり介入の余地は残っている。なんらかのアクションを起こすなら、機会は今しかない。

そんな思考をしている内にも、二人は店を出て行ってしまふ。フランも慌てて後を追おうと

「待つて」

したところで、対面の親友に止められた。

「……どうしたの？」

「見て、アレ」

振り払おうと顔を動かせば、何やらこいしは真剣な表情である一点を見据えている。視線を追えば一人の客が、そそくさと店を出るところだった。

それだけならばなんてことはない、どこにでもある普通の光景だろう。だがこいしがその客を示した理由は、誰の目にも明らかだ。

「どう思っ？」

「……すごく怪しい」

『漆黒のロングコート』で全身を覆った客を見送り、二人はテーブルで顔を突き合わせる。目だけ動かして窓の外を窺い見れば、歩き出した二人の後をこそこそと追う黒い客。端から見たらバレバレだが、幸か不幸か蒼衣達は気付いていないようだ。

「敵かな」

「わかんないけど……、お兄ちゃん達は気付いてないみたい」

単なる不審者程度なら、あの蒼衣が遅れを取るとは思えない。それでもなお心配なのは、今が異変の真っ最中だからだ。昨日天狗に見

せられた写真の少女も、何の因果か黒装束。そこに関連性を疑ってしまうのも無理はない。

「……………捕まえる？」

「吸血鬼フランの脅力で止まるといいけど……………、戦闘になったらお兄ちゃんはずぐ感付くと思う」

唯一の懸念事項は、自分達が瞬殺されないかどうかだけ。そうならばなんの前触れもなく、蒼衣が大変な目に遭うかもしれない。

……………それだけは、絶対に嫌だ。

『神綺、聞こえる？』

故に二人は見栄を張らず、素直に頼れる者へと相談することにした。蒼衣達に悟られることなく、自分達に助力してくれる存在。そんな者など一人しかいない。

『ん、どしたの？』

『お兄ちゃんとアリスの後を付けてる人がいる』

突然の念話に驚いた様子もなく、のほほんと聞き返して来る神綺。しかしこいしの発言を聞いた瞬間、纏う空気を一変させたのが思念越しにでも理解出来た。やがてしばしの間の後、

『異相空間を経由して手元にお友達送ったから、その子の視界にその人を映してあげて』

幾分か真剣味を宿した声と共に、紫のスキマとよく似た不気味な音が二人の間に響く。お友達？と首を傾げながらもテーブルの下を覗き込んでみると、

『はじめまして』

何か、得体の知れないモノがいた。

それは、有り体に言うのであればアリクイに似ていた。全長は五十センチ程だろうか、丸みを帯びた頭やふさふさの尻尾が愛らしい。……しかし、しかしだ。一体どこの世界に、体表が緑色で脚が六本あるアリクイがいるというのか。よくよく見れば単に色違いなだけではなく、その身体は植物で出来ている。草木で構成されたその存

在を表すには、『草の獣』という表現が一番しっくり来るだろう。

『お友達のクーちゃんだよ』

『クーちゃんです よろしくね?』

思わず絶句するこいしとフランをよそに、神綺と草の獣ことクーちゃんはなんでもないことのように自己紹介。しかし二人の反応は、ある意味当然と言える。こんな訳のわからない生物 動物か植物かもわからないそれを前にして、果たして何人が冷静でいられるだろう。

『どうも……、こいしです』

『フランです……、よろしく』

『こいし ふらん おぼえました』

ともあれ気を取り直し、怖ず怖ずと自己紹介。素直にぺこりとお辞儀するクーちゃんが可愛かったので、二人はそれ以上深く考えるのをやめた。常識に囚われていては精神が持たない 深淵やら顕現やら呪詛やらを見て来た二人はそう悟っていた。

『とりあえずその子を抱き抱えて連れてって。視界はリンクしてるから私にも同じものが見えるよ』

神綺の声にようやく落ち着いたのか、二人が互いに顔を見合わせる。何故こんな状況になっているのかといえば、身元不明の不審者への対処法を尋ねたのだ。くーちゃんのインパクトにより頭から吹っ飛んでいた本題を思い出し、指示通りにこいしがくーちゃんを抱っこする。と、

『きゅーしゅー』

くーちゃんの一言と共に、こいしの身体を心地好い感覚が包み込む。まるで熱々の風呂に入った時のように、全身の筋肉が緩むようなあの感覚。椅子に寄り掛かるように座ったが最後、骨抜きになったかのように脱力してしまう。ある意味最強のダメ人間育成装置ではなからうか。

『この子は熱を吸収して生きる動物化した植物で、主に生物の疲労を余剰熱として食べてるの。抱っこすると気持ちいいよー』

『ふえー……』

神綺の解説に感嘆の息を漏らしつつ、こいしはその感覚に身を委ね

る。草の獣の温かな感触は、兄が抱きしめてくれた際のそれにとてもよく似ていて。ずっとこのまま過すのも悪くないと思えてしま
う。が、

『こいし、急がないと見失っちゃう!!』

『……あ、うん!!』

肩を揺するフランの声に、幸せな幻想から現実へと戻って来る。今は他にすべきことがあるし、何より後で本人に抱き着けばなんの問題もない。まどろみのような誘惑を振り切って、こいしはフランを追い店を出る。

会計を済ませ外に出た頃には、蒼衣もアリスも不審者も見失っていた。既に太陽は沈みきり、通りは帰路に着く人々で溢れ返っている。この中から見付け出すのはかなり難しいだろう。

「どう!?!」

「……………いた!!」

左右を忙しく見回すこいしの手を、フランが引つ張り走り出す。吸血鬼という種族柄か、大分夜目が利くらしい。ものの数分も掛か
らずに、二人と一匹は三人の後ろ姿を捉えていた。

『……………何て言うか、ベタというかコテコテの尾行だね……………。気配遮断も出来てないし距離も不定で適当……………。素人だよ』

不審者を観察すること一分ジャスト、苦笑いの混じったような口調で神綺はそう断言した。そこまで差し迫った問題ではないとわかり、知らず二人は安堵の息を漏らす。どうやら最悪の事態だけは避けられたようだ。

『じゃあほつといても問題ないの？』

『あえて素人を使った可能性も否認ないからなんとも……………。見た感じただの人間みたいだし、直接聞いた方が早いかも』

フランの安心したような質問に、思考を巡らせながらそう答える神綺。確かに黒幕に直接的な関係がほとんどないとわかった以上、直談判が手っ取り早い。しかし蒼衣達と不審者の距離はおよそ五メートル、立ち話など始めれば気付かれかねない。ならば

「……………よし」

どうしたものかと考えるこいしの横、何かを決意したように頷いたフランがぐるぐると肩を回す。何をするのかと思えばクラウチング

スタートの構えから横の通りへ駆け出し、

一つ先の通りを過ぎるところだった不審者を、音もなく横から搔っ攫って行った。

「……………ちよ、フラン!?!」

『はやいのー』

遅れてその意味を理解したこいしが慌てて後を追いつけ、くーちゃんも眩きと共に前脚をパタパタ。すぐそこの角を曲がれば、ちよとフランが不審者を地に押し倒すところだった。

「きゃっ……………!?!」

「さあ白状しなさい!!!こそこそお兄ちゃんの後を付けて何してたの!?!」

外見からは想像もつかぬ可愛らしい悲鳴を上げる不審者を、フランが強気な口調で問い質す。漆黒のコードを引っぺがしてみれば、中から現れたのは対照的な純白のゴスロリ。長い茶髪とアホ毛が特徴的な、アリスと同年代と思いきその少女は

『あれ、笙ちゃん？』

「…………え？」

「…………はい？」

つい昨日アリス他三人がお世話になった八代屋服屋の店長、八代笙その人だった。

「…………要するに、アリスが見慣れない人お兄ちゃんと歩いてたのが気になって」

「邪魔するのも悪いからこっそり追い掛けて観察してた…………、ってこと？」

神綺と笙の説明を聞き終え、こいしとフランは頭を押さえながらそう尋ね直す。理由は至って簡単。神綺の話はともかくとして、笙の口から語られた真相が、あまりにも間の抜けた現実だったからだ。

「アリスさんは付き合いの長い大事なお友達ですしね。気になっち

やいました」

わざわざ^{店員}玖亜がバックヤードから取って来たというロングゴートを置みつっ、苦笑と共にそう答える筈。その気持ちはわからないでもないが、端から見たらあまりにも怪し過ぎる。天然といふかなんというか、独特の価値観を持ち合わせているようだ。

『はあーっ……………』

急にバカらしくなって気が抜けたのか、二人はその場にへなへなと座り込む。緊急事態かと思つて奔走した結果が、このなんとも締まらないオチなのだから無理もない。あなたの頑張りは全て徒勞でしたと言われたも同然なのだから。

「ご迷惑をおかけしました」

『気にしないで。大したことなくてよかったです』

ロングゴートを紙袋に仕舞った筈は、丁寧に草の獣へとお辞儀。くーちゃんを会して思念通話で答える神綺も、ホツとしたのか気楽なものだ。最悪の可能性を予測はしていたが、外れてくれるに越したことはない。

「それにしても……、お二人は蒼衣さんのことが大好きなんですね」
不意に振り返りと共に放たれた言葉が、自分達へ向けられたものと理解するのに一分。もう一分掛けてその言葉の意味が脳に浸透すると同時、

「……んな、な、なななな！？」

「iiiiiiiiいきなり何をっ！？」

薄暗い中でもわかる程顔を真っ赤にし、呂律も回らない中どうにか言い返す二人。そんな微笑ましい表情に笙はくすりと笑みを漏らし、
「いくら妖怪さんだとしても、好きでもない人の為にそこまで出来ませんよ。余程気に入ってるんですね、彼のこと」

『あっ……』

続く言葉に二人は口を閉ざすしかなかった。ペースを崩された幼い少女達が反論出来るはずもなく、全くもってその通りなので何も言えない。羞恥のあまり耳まで真っ赤にしている妹二人を背に立ち上がり、

「ではそろそろ私は帰りますね。結論も出ましたし」

晴れやかな笑みを浮かべた笙にくーちゃん、否、神綺が顔を上げる。尻尾で地面を軽く叩き、

『で、実際どうだった？蒼衣君は』

真剣味を感じさせるその質問に、笙は柔らかく微笑んで。

「アリスさんだけでなく、こんなに可愛い子達からも慕われているんです。……答えるまでもないでしょう？」

『えへへー、私の自慢の息子だもん』

尻尾を振りながら得意そうに述べる神綺に頷きつつ、彼女はこいしとフランに振り返る。再度深々と頭を下げ、

「それでは皆さん、おやすみなさい。今度『AQUE』でお詫びに何かご馳走させて下さいね」

顔を上げると同時、静々とその場から立ち去って行った。残された

のはくーちゃんと、未だ頬の赤い妹達だけ。

『……とりあえず一件落着、かな？』

笙の後ろ姿が薄闇へと消えるまで見送り、神綺が振り返りと共にそう零す。ようやく落ち着いたのか二人も顔を見合わせ、

「……帰ろっか」

「……そうだね」

大分疲れの窺える声と共に、そう結論したのだった。

第三十四話「こいしとフランの迷走気味な一日」(後書き)

まさに迷走(おい

という訳でこいフラらしく元気いっぱい時々真面目な感じで書いて
みました。とりあえず二人はお疲れ様でしたw

次回、鏡花と菖蒲の一日。

第三十五話「鏡花と菖蒲の頑張る一日」(前書き)

大変長らくお待たせしました、三十五話です。

ここ最近学校のスケジュールが本格的に殺しに来てる中ちまちま書いてたのでクオリティが所によって違う気もしますがそこはご了承ください。というかそうでもなきや死んじゃう(あ
ではどーぞー。

第三十五話「鏡花と菖蒲の頑張る一日」

バタバタと部屋を出て行った二人を、神無菖蒲は素直に羨ましく思う。自分は感情表現が下手で、あんな風に思ったまま行動することが出来ないから。動く前に色々と考えてしまって、結局は動けず終い。だから失敗したとしても、何度でもトライしていく二人が菖蒲には眩しく映っていた。

「……憎まれ役」

「……バレてた？」

そんな誰にも聞かせることのない思考を打ち切り、右斜め前に座る親友を見て口を開く。言われた少女　水月鏡花は悪びれた様子もなく、苦笑を浮かべてそう答えた。

彼女はくだらない嫌がらせで、あのようなことを言う人間ではない。おそらく気後れしている妹二人に発破を掛け、ついでにアリスの焦燥を煽り積極的にさせる　そういった感じの目論見だろう。そしてその予想は、その的外れでもないはずだ。伊達に口を噤み考え続けている訳ではない。まだ一日の付き合いだが、彼女のことはそれなりにわかつているつもりだ。

「逆にこれで引き下がるようなら、二人の想いはその程度だったってこと。半端な覚悟で関わったとしても、良いことなんてないもの」

鏡花はトースターからまだ温もりを保った食パンを引き抜き、バターを塗りたくると一口で半分近くを口に収める。あっという間に二枚消化する彼女の食べっぷりは、見ていて逆に清々しい。……主人である蒼衣やアリスは呆れているが。

「救いを知らないまま彷徨い続けるのと、その存在を知りながら待ち続けるの……、どっちが辛いんだろうね」

ナプキンで口元を拭い終え、どこか遠くを眺めながら、誰に向けられたものでもない言葉を零す鏡花。その瞳に映っているのは、果たしてアリスか妹達か。

いや、或いは。彼女が気にかけている、菖蒲自分のことなのか
もしれない。

「あーやめやめ！私に辛気臭いのなんて合わないし」

やがて思考の袋小路に至ったのか、鏡花がそんな声を上げて場の空気をリセットする。明るくアクティブな彼女には、こういった真面目というか堅苦しい雰囲気は合わないのだろう。と、

「ふえ、呼んだ？」

「……しんき違いなの」

辛気と神綺を聞き違えたのであろう魔界神にそう告げ、菖蒲も食事を再開する。両手で持ったトーストを少しずつ食べる様は、可愛らしい小動物を想起させる。何をして過ごそうかと考えながら、十五分掛かってようやく食べ終えたのだった。

神無菖蒲の日常　そんなものは存在しない。今までずっとあの祠に封じられていたのに、習慣化されたそれがある方がおかしいだろう。そのことを神綺に尋ねると「菖蒲ちゃんの好きなように過ごせばいいよ」と笑みで返されたが、そもそもからしてその『好きなこと』さえないのが現状。まさに羅針盤も何もなく、小船で大海に放り出されたような心境だ。

故に彼女はその時間を、自らに足りないものを埋める作業に当てることにした。昨日の人里でも思ったことだが、自分には現代の知識が足りなさ過ぎる。千年以上封じられていたのだから当然といえは当然だが、いつまでもそれを言い訳にするのはよくない。知らないなら学べばいい　至って簡単な結論だ。

「……」

自室のベッドにもたれ掛かり、神綺に与えられた本をパラパラとめくっていく。本とは言っても小難しいそれではなく、年少にも読みやすいよう絵が多めに描かれた漫画という本だ。歴史についてわかりやすく記されたそれを読むと、自らに足りないモノが満たされて行くような感覚を覚える。それが知ることの喜び　知恵の実を手にしたヒトが得た禁忌の喜びだ。

本をぱたりと静かに閉じ、読了ゾーンの本の山に積み上げる。わかりやすく図説された書物のおかげで、千二百年の歴史は大まかに把握出来た。……とはいえ幻想郷の文明は明治時代　およそ二百年程前で止まっているのだが。

ともあれ菖蒲の欲しいモノは得られた。生活習慣や風習は追い追いついて行くとして、これから何をすればいいのだろう。

「……ん」

それを知る為にも、本を読むという行動は建設的だ。知識が増えれば見識も広がるし、趣味や娯楽を見出すことが出来るかもしれない。周りの本を気遣いながら菖蒲はゆっくりと立ち上がり、神綺に他の本を借りに行くことにした。

本の山を抱えて辺りを見回せば、ふと鏡花の姿がないことに気が付く。いつも自分を気遣ってくれるあの少女にしては珍しく、別行動なのだろうか。

……鏡花、何してるのかな。

自分と対照的な明るい笑みを浮かべる少女を脳裏に思い描き、菖蒲はリビンググに向かって歩き出した。

薄暗い魔法の森の中を、一人の少女が駆けて行く。身を低くした前傾姿勢を以て、人の姿を持ちながら時速四十キロを叩き出すその少女は、両の手に刀を携えていた。黒と銀を基調とした対の刀は見る者を引き込む魔性の美を孕んでおり、担い手の端正な顔立ちも相俟ってこの世のモノならざる幻想を思わせる。和歌の心得があるものならば、その光景を見てこう口にしたかもしれない。

まるで鏡花水月のようだ、と。

「……ッ!?」

何かに気付いたように少女が右手の鬼切 正式な銘を髭切という源氏の宝刀を背後に一閃。反射的に振るわれた意味なき一刀はしかし、音もなく少女に迫っていた星型の弾幕を切り裂いていた。

それを確認する間もなく、少女は即座に地を蹴りその場を離れる。計ったように先程までいた地点に緑光色のレーザーが叩き込まれ、

少女の背筋を嫌な汗が伝う。慣れぬフィールド、不安定な足場、そして狙われているという事実。形勢は誰の目にも明らかだった。

しかしそれでも少女は足を止めず、木々を遮蔽物に奥へ奥へと駆けて行く。まだ諦めてはいないのだと、その瞳に灯る光が雄弁にそう語っていた。

そんな少女の駆け抜けた地点を、僅かなラグの後に追う影がある。白黒の装束が特徴的な、箒に跨がった魔法使いの少女。霧雨魔理沙だった。

「ちいっ………!!」

逃げる鏡花を追跡しつつ、舌打ちを漏らした魔理沙は加速する。この鬼ごっこのような追走劇は、既に三十分以上続いていた。自らの足で駆ける鏡花に対し、こちらは魔力を用いた箒。消耗はあちら程ではないといえ、

………ここまでやり合うとはな………!!

数十メートル先を走る背中を、魔理沙は心中で素直に称賛する。まさかこうまで巧妙に立ち回るなど、想像だにしていなかった。

魔法こじの森は己のフィールドだと、魔理沙はそう自認している。広大

な敷地に見通しや足場の悪さ、加えて宙を舞う茸の孢子。空を行く魔法使いである彼女にとって、これ以上有利な戦場は存在しないと、言っても過言ではない。

しかしそんな状況にありながら、鏡花は自分の攻撃を凌いでいる。豪雨と称しても差し支えない猛攻を受けつつも、決定的な致命打だけは避けきっている。理由は至極単純。ただ単に、鏡花の身体能力が馬鹿げているのだ。

柔らかい地面を全力で蹴ったとしても、返って来る自分を押し戻す力。反発力は自ずと減衰される。ぬかるんだ地面を全力疾走したところで、思ったようには走れないもの。故にこそ魔理沙は魔力を消費してでも、箒に乗ることを選んでいるのだ。

しかし鏡花はその類い稀なる身体能力を駆使し、強引に地を蹴っている。当然その力は本来の八割にも満たないが、人ならざる者の力ならばそれで十分。

加えて彼女が行っているのは、どちらかと言えば疾走というより跳躍に近い。連続的に地を踏み締め加速する疾走とは違い、跳躍はその一歩一歩で滞空する程の爆発的な加速力を得る。一歩の間隔が長くなる分、当然地面の影響は受けにくくなる。野に生きて来た妖狐故か、自然の中で戦うという行為に、かなり慣れてるように思えた。

「感心してる場合じゃないか……!!」

現状整理の考察を打ち切り、八卦炉から弾幕を乱れ撃つ。しかし鬼

切と蜘蛛切を前に、その悉くは担い手に届くことなくその身を散らして行く。煌めく光がまるで花火のようだ。

菖蒲との戦いでも思ったことだが、あの太刀捌きは尋常じゃない。いくらイメージの産物とはいえ、刀は最低でも三キロは下らない鉄の塊だ。そんなものを片手持ちで振り回すなど、妖怪の膂力といえど長持ちはすまい。それでもなお三十分も双の剣を扱い、弾幕を切り裂き自らを守る。単純な技量だけで言えば、おそらくは蒼衣を上回るだろう。

だが、退けぬのはこちらも同じ。魔力を加速に回し、魔理沙は風となり前へ行く。距離を詰め、星を生み出し、地を行く妖獣目掛けて連射。それらを予定調和のように躲し、切り裂き、鏡花は更に速度を上げる。一度も止まることのないその動きは出来た劇でも見ているかのように、現実感を伴わない。例えそこが戦場だと理解していても、なおその演目を見届けたいとする者は少なからずいるだろう。

「恋符」

しばし続いた均衡を、しかし魔理沙は自ら崩しに行く。どこからともなく引つ張り出した符に描かれているのは、光り輝く一筋の魔砲。彼女の代名詞とも呼べる力の名を、

「マスタースパーク」ッ！！」

全力で、叫んだ。

当然魔理沙の行動は、鏡花の目にも見えていた。しかし両者を隔てる距離は、少なめに見積もっても百メートルは下らない。いくら鏡花の身体能力を以てしても、魔砲の発動を阻止するのは不可能

「五雷神君奉勅」

その結論を脳内で叩き出すと同時に、鏡花は既に動いていた。一瞬で顕現させた三本目の刀身に指を這わせ、その力を解き放つ呪を唱える。

瞬間、主の意志に応えた刀が帯電し、青白い光を放ち始めた。視界の隅では魔砲が発動され、こちら目掛けて一直線に宙を突っ走って来る。対し鏡花は慌てることなく、

「千鳥打ちッ！」

雷神をも切り伏せる希代の名刀を、横薙ぎに振るった。

ドンピシャで振るわれた雷切が稲妻を炸裂させ、光の奔流とぶつかり合う。どちらの光も一步も引かず、互いに喰らい、潰し、削り合っていく。拮抗する力と力の激突はしかし、

「はっ!!!」

雷の勝利を以て、決着した。

魔理沙のスペルはおよそノーマルクラス、対し鏡花の雷は急増とはいえエクストラクラス。妖物を切った名刀は、それぞれのものが強力な魔具。そこから放たれる力は、例え咄嗟のものでも並々ならぬ力を帯びているのだ。

魔理沙が面食らい動きを止めるが、しかし鏡花は容赦しない。即座に雷切一本から鬼切二刀流と蜘蛛切に切り替え、ぬかるんだ地面を全力で蹴る。大上段からの鬼切と、逃げ道を塞ぐ横からの蜘蛛切が振るわれ、

昼過ぎの魔法の森に、低く鈍い音が響き渡った。

鏡花は己の目の前に広がる光景に絶句した。直前で峰打ちに変えたとはいえ、刀剣鉄塊の一撃はかなりの重みを伴う。魔理沙くらしいの体格なら喰らえば打撲、マトモに受けても吹っ飛ばされるはず。しかし魔法使いの身体は、確かに目の前に在った。

ならば何故と感覚を総動員し、鏡花は視界から得られる限りの情報を精査。結果左上方に映ったのは、

「 箒!？」

……間一髪だったな……!!

魔力を通した箒で器用に二刀を受け止めながら、魔理沙は心中で冷や汗を流す。咄嗟の思い付きだったのだが、どうやら上手く行ったようだ。

負けず嫌いな性分が功を奏したのか、鏡花が地を蹴った瞬間には身体が動いていた。ありったけの魔力を箒に流し、硬化させたそれを二刀の軌跡上に配置。鏡花の性格からして直前で峰打ちにすることはわかっていた為、その動きに迷いはなかった。

もしこれが峰ではなかったら、こんな箒など一瞬で切られていただろう。イメージとはいえ、いや、イメージだからこそ、源氏の宝刀髭切と膝丸はよりその力を増す。その切れ味に関しては、語るまでもないだろう。

しかし魔理沙は鏡花を信じ、賭けに勝った。加えて、

「チェックメイト、だな」

魔理沙は左手の箒で二刀を止めている。ならば右手はどこか。その答えは簡単だ。肩から目線で追った先、右腕は鏡花の胸元に伸びている。その手の先にあるのは当然、魔理沙愛用の八卦炉だ。

この距離ならばバカでも外さない。レーザーでも魔砲でも、好きな弾を放てばそれで終わり。つまりこの状況は、

「……私の負け、か」

鏡花が溜め息を零しながら、二刀を消し数歩下がる。魔理沙も箒を手放し左手をブラブラと振りながら、

「でもこれが模擬戦じゃなかったら死んでたぜ。さすがに実戦で峰打ちする訳じゃないだろ？」

そう、勝敗を分けたのはそこだ。これは実戦ではなく模擬戦、当然殺しは御法度だ。故にこそ魔理沙の起死回生の一手が効いたのだが、実戦なら首と胴がサヨウナラ。間一髪としか言い様がない。

「それでも負けは負けじゃない。……あーもー悔しー!!」

魔理沙のコメントにそう返しながら、鏡花が両手を振り上げ叫びを上げる。あと一歩というところだったのだ、悔しさもひとしおだろう。

ともあれこうして、二人の模擬戦は終幕と相成った。

「……しかし、暇だって言っただけで普通模擬戦する？」

マーガトロイド邸のリビングに帰還し、テーブルにだらしなく寝そべっていた鏡花がふと思いついたように口を開く。そもそも何故模擬戦をしていたのかといえば、遡ること数十分前。することもなくて暇ねえとぼやいていた鏡花の一言を、耳聴く聞き付けた魔理沙が持ち掛けて来たのが発端だった。別段断る理由もなく受けたのだが、まさかああまで熱中するなど誰に想像出来ただろう。

「時間も潰せたしいいだろ？動かないと鈍るしな」

対し勝てたのが嬉しいのか、魔理沙は気持ち良さそうに伸びをしながらそう答える。一日サボると取り戻すのに一週間掛かるといってしまう。まさしく正論なのだが、そのあまりの清々しさに若干の悔しさも覚えてしまう。あと一手違えばあそこにいたのは自分なんだと考えてしまう辺り、鏡花も大概負けず嫌いだ。

「それにいつまた感染者が現れるかわからないし、蒼衣だけじゃキツイだろうからな……。私達もサポート出来るようにしとかないと」

だが続けて放たれた一言に、だらけていた鏡花も纏う雰囲気を真剣なそれに切り替える。どこか遠くを見ている魔理沙に向き直り、

「かなり入れ込んでるみたいじゃない。何？惚れた？」

「命が惜しけりゃ冗談でもそれは口にするな」

冗談めかしてみたのだが真顔で懇願された。……確かにあのアリスの様子では、冗談でも色々と危ない。このネタは控えた方が良さそうだ。

「……私が初めて、だからな。あいつがこっちに来てから出来た友達」

照れ臭そうに頬を掻きながら、魔理沙はボソツと口にする。自分と出会う前のことはあまり知らないが、魔界という離れた場所にいたことだけは聞いていた。いくら妹に会う為とはいえ、不慣れな土地に来ることに不安もあったはずだ。そんな中初めて出来た異郷での友達が、こんな風に気遣ってくれている。それはとても、嬉しいことだと思えた。

「……そう思われてる主人の式神としては、素直に嬉しいかな。私

の目は間違っ
てなかつたみたい」

思わず頬を緩めながら、鏡花は素直に心情を吐露する。曲がりなりにも自分は式神、人格の優れた人に仕えたいと思うのは当然のこと。自らの主を疑う訳ではないが、魔理沙の言葉を聞いて安心出来た。蒼衣彼女もそれをわかっているのかなんせ、と口を開き、

「会って三日の奴の為に命懸けで戦ったり」

「怪我した妖獣わざわざ探しに来るような」

言葉の続きを鏡花が口にし、互いに苦笑を交わし合う。今頃人里でアリスと仲良くやっていることを期待しつつ、

「お人よし、だもんなね」

共通見解を口にした二人は、再度笑みを交わした。

「……あ」

あれから数時間が経ち、徐々に辺りが暗くなって来る頃。ページをめくる手を止め、ある一説を何度も読み返していたことに、菖蒲はようやく気が付いた。

結局あの後はやることもなく、神綺に本を借りるという結論に落ち着いた。喜んだ彼女がどこからもなくドサドサと本をいつぱい出してくれたが、それはまた別の話だ。どこから出したのか、とか何故部屋を埋め尽くす程の本を持っているのか、など疑問は尽きないが、世界を創造するような神様相手にそれを問うたところで意味はないだろう。

ともあれそうだった訳で、両手いっぱいの本を借りた菖蒲は自室へと戻り一冊一冊消化していた。目の前で開いたままになっているのもその一つで、文庫サイズの小説だ。内容はごくありふれたもので、年頃の少年と少女が互いに惹かれ合っていていく触れ合いを描いたもの。彼女が気に留めたのはその中の一説　少女が少年に手作りの弁当を渡すというシーンだ。

試行錯誤を繰り返して、ようやく完成したちっぽけなお弁当。大した量もないだろうそれを、しかし少年は幸せそうに食べていた。そんな様子に少女も安堵の笑みを漏らし、場を温かな空気が包み込む。見ていて心が温かくなるような、そんな日常の一コマだ。

「……………嬉しそう」

何故そこで手が止まったのかといえば、理由は偏にその一言に尽きる。少年に主人^{着衣}の姿が重なってしまい、想像してみたら心が温かく

なつて。彼が喜んでくれるなら、それはとても良いことのように思えたのだ。

思えば自分は今の所、命の恩人である彼になんら返すことが出来ていない。返せるものもないのだし仕方ないといえば仕方ないのだが、それで引き下がれるのかと問われれば答えは当然否だ。盛大なお返しは出来なくとも、小さなものをこつこつと重ねることは出来る。目の前のそれは、まさに打って付けに思えた。

……私が作つたら、喜んでくれるかな……。

ふと脳裏を掠めたそんな思いを、菖蒲は慌てて振り払った。あくまでもこれは恩返しであり、見返りを求めるのは間違っている。あちらがしてくれたことに比べれば、ささやか過ぎる小さなことなのだから。

でも、だけど、優しい彼なら

そんな一抹の期待を頭の片隅に押しやり、菖蒲は慌ただしく立ち上がる。思い立ったが吉日ということで、菖蒲は神綺を頼ることにした。

「え、お料理？」

当然と言えば当然だが、唐突な申し出に神綺は目をぱちくりとさせていた。なんの前フリも説明もなく『料理を教えて欲しい』などと口にすれば、その疑問は当然だろう。

「あ……、えと……」

気が逸るあまり、説明をすっ飛ばしてしまったようだ。早く説明しなければと焦りに近い思いを抱くも、何から話せばいいのかという迷いと板挟みに遭い、上手く言葉にすることが出来ない。元々無口で口下手で、他人と話したのも昨日を除けば千年以上前のこと。突発的な状況に対応出来る柔軟さなど、自分は一切持ち合わせていな

「えいつ」

迷走し始めた思考はしかし、温かな感触に包まれたことで頭から吹っ飛んだ。現実を意識を戻してみれば、神綺がこちらの身体を抱きしめている。柔らかな感触、人肌の温かさ、全てを包み込むような優しいなオーラ。それらの全てが相俟って、菖蒲の頭に浮かんだのは『母』の一文字だった。

「大丈夫。ちゃんと聞いてあげるから。だから一旦落ち着いて、ゆっくり話してみて？」

言葉の通り優しく、ゆっくりと頭を撫でながらそう諭す神綺。蒼衣のそれに似た優しい手付きに心中も落ち着いて行き、菖蒲は説明の為口を開いた。

「……そっか」

事情を聞き終えた神綺は二、三回頷くと、菖蒲を愛おしそうに抱きしめる。再びの感触に戸惑うも、

「ありがとね、菖蒲ちゃん」

唐突なお礼の言葉に面食らい、思わず口を閉ざしてしまう。突発的な事態に弱い自分が嫌になるが、そもそも急にお礼を言われたら誰だって面食らうことに気付かない辺り菖蒲も天然というか抜けている。

「あの子は昔ちよつと色々あったから……、誰かに好かれるってことに慣れてないと思うの。だけどホントは『居場所』をものすごく大事に出来る、とってもいい子なんだ」

そう語る神綺の瞳は、優しさに溢れた母のそれ。血は繋がっていないくとも、彼女にとって蒼衣はただ一人の息子。こんな母に育てられれば、あんな風に育つのも頷けた。

「だからありがとね、菖蒲ちゃん。あの子を好いてくれて」

「……礼を言うのは、私の方」

ニツコリと笑みで告げる神綺に、菖蒲も微かに笑みを浮かべる。直接聞いた訳ではないが、彼の背景はおぼろげながら想像はつく。あれだけの力を持っているのだ、周囲から奇異や嫌悪の混じった視線を向けられたことも多かつただろう。

だからだろうか、彼は種族や能力など一切関係なしに、相手をただ一人の存在として見る。閉じた恋の瞳、悪魔の妹、呪怨の輪廻。そういった肩書きとは無縁でただ彼にとって、こいしはこいし、フランはフラン、菖蒲は菖蒲なのだ。

その在り方はおそらく彼の過去が関係していて、それが自分達とどこか似通っているからで。出自に様々なものを抱える彼女達にとっては、これ以上ない救いでもあった。

例えるならそれは温かな闇。母に包まれて眠る時の、暗い空間でも信じられる優しい温もり。そういうものを持っているから、彼はあんなにも想われているのだろう。……もれなく一部で争奪戦も発生しているが。

「……だから、お返ししたいの」

そして菖蒲自身は、彼の優しさに甘えるだけのつもりもない。もらった以上の幸せを返して、また相手から返されて。さっき読んだ絵本に書いてあった幸せスパイラルという考え方は、菖蒲の目的にこれ以上ないくらい合致していた。

「じゃあ、一緒に頑張ってみよっか」

「……ん」

そんな決意を感じ取ったのが、神綺がいつもの笑みと共にソファーから立ち上がる。心持ちいつもより強く頷き、菖蒲は先生神綺の後を追った。

「あー……、文明社会最高だわー……」

なんとも年寄り臭いセリフを口にしながら、脱衣所から一人の少女が現れる。満足げに頬を緩めているのは、青いジャージに身を包んだ水月鏡花だ。頬は上気した薔薇色で、水気を含んだ髪は光を反射して艶やかな光沢を放っている。

元々彼女は野に生きる妖狐であり、文明社会に馴染みはない　と

思われがちだが、実はそうでもない。彼女の家系は鍛冶師の一族であり、必然人の姿を取ることが多く、人間と変わらない暮らしを営んでいた。蒼衣の血を得るまでは人型になることは出来なかったが、それでも人型に変化出来る母や祖母に連れられ入ったことはある。その気持ち良さたるや池や湖の比ではなく、鏡花は現代かぶれの妖狐になったという訳だ。

ほかほかと湯気を上げる長い髪を適当に拭いつつ、牛乳でも飲もうかと鏡花はキッチンへ移動。視界の端に見慣れた白い髪が見えたので視線を横にスライドさせてみると、

「菖蒲？何してるの？」

呼び掛けにエプロン装備の菖蒲が振り返り、その手元が明らかになる。まな板の上にはじゃがいもや人参、玉葱に鶏肉などが置かれており、神綺が立つコンロの前には大きめの鍋。これから晩御飯の用意を始めるところのようだ。

「……………あおいに、料理」

「ふーん……………、蒼衣にねえ……………」

菖蒲までいるのは珍しいと思つての質問だったのだが、どうやら菖蒲が作るらしい。脳裏に主人の顔を思い浮かべるも、視覚から入つて来る情報に目の前へと引き戻される。

菖蒲はいつもの巫女服の上から、やや大きめのエプロンを着用している。巫女服にエプロンというだけで大分形容に困る光景だが、問題はそのエプロンの柄がひよこ。明らかに子供向けのそれなことだ。大方神綺が貸したのだろうが、だとしてもかなりツツコミづらい。常々思っていたことだが、とても二児の母とは思えない。あの意味この家で一番精神年齢が幼いんじゃないだろうかとさえ思えてしまう。

……冷静になりなさい私。ええ、突っ込んだら負けなのよ気にしたらああ菖蒲可愛いなあ抱きしめたいなあ頭撫でたいなあ。

途中から思考が脱線していたが、深く考えたら負けだ。可愛いは正義。そして菖蒲は可愛い。つまり菖蒲は正義で私は正当。大丈夫だ、問題ない。

「……きょうかは？」

「私？ちよつと身体動かしてたからシャワーをね」

小首を傾げながらの質問に現実逃避を中断し、鏡花は未だ熱を保ったままの髪を指し示す。魔理沙との模擬戦後はとくにやることもなく、時間潰しに外で修業をしていたのだ。

とっさの戦闘に対応出来るよう、筋トレをしつつタイマーが鳴った

らどんな状況であろうと一秒半以内に妖刀・宝刀クラスを顕現させるといふもの。走り込み中だろうがスクワット中だろうが腹筋中だろうがお構いなく、神綺に借りた腕時計のタイマーが鳴った瞬間その場を飛び退きつつ様々な刀をイメージし作り出す。ランダムで鳴るように設定してもらったのでスリル満点、身にもなるので言うことなしだ。……端から見たら不審人物でしかないが。

ともあれ顕現マテリアライズに要する時間は、当初の半分程に縮んだ。草薙や十拳のような神剣レベルは流石に時間が掛かるだろうが、愛用の鬼切・蜘蛛切ならノータイムで呼び出すことも可能だろう。シャワーを浴びていたのもそんな理由からで、本格的にやることなくなり部屋でごろ寝でもしようかと思つた所、キッチンに並んで立つ二人の姿が目に入ったという訳だ。

「真面目だね、鏡花ちゃん」

「やることなかったからね。ふて寝してたせいで後々役立たずとか笑えないし」

冗談めかして答える鏡花に、神綺は変わらず優しい笑みのまま。相手の心の奥底まで見通すような観察力は、流石神様と言つたところか。気恥ずかしくなつた鏡花は頬を掻きながら視線を外し、

「ってちよおおおおお!？」

自分の手に包丁を落とし続ける菖蒲を見て思考が全部吹き飛んだ。

「大丈夫！？怪我ない！？」

何をトチ狂ったのか包丁でザクザク自分の手を切っている菖蒲の手を止め、新雪のように白い肌を観察する。小さく華奢で柔らかかな手は、無残にも切り傷と鮮血でボロボロに

「……………無傷？」

呆然と鏡花が口にした通り、菖蒲の手には切り傷どころか刃物を当てた後すらない。ひっくり返してもこすってみても、種も仕掛けも見当たらない。狐に抓まれたような顔をしていた鏡花だったが、視界に入ったあるものを見て顔色を変える。

それは、有り体に言えば首飾りだった。刃物で刻んだような跡で『鹿島』と書かれた薄い鉄の板が、仄かに青白い輝きを放っている。

鹿島　これはまさか

「……………さっき指に引っ掛けた時、何ともなかったの。……………だから、
実験」

「日本最高位の軍神の加護が込められてるからね。包丁くらいじゃ傷一つ付かないよ」

菖蒲と神綺の言葉を聞き、鏡花はそれを確信する。香取の姓と共に武芸の神とされ、鍛冶に携わる者が例外なく崇める日本最強の軍神鹿島大明神。そんな名だたる神の加護があれば、一般家庭の包丁どころか真剣でも傷付くかどうか。神綺なりに彼女を思いやってのことだろうが、菖蒲の行動が想像の斜め上過ぎた。もし運良く怪我しなかったただけだったとしたら……、想像するだに恐ろしい。

「貸して」

菖蒲の手から包丁を引ったくり、鏡花は手頃な大きさのじゃがいもを手取る。刃先で器用に皮を剥き、ものの数秒で綺麗に一繋がり薄い皮と実に分けてしまった。

「……すげいの」

「ま、これでも鍛冶師の娘だからね。刃物の扱いならドンと来いよ」

得意げな笑みを浮かべる鏡花を、菖蒲が感嘆と尊敬の入り混じった目で眺めていた。純粹で素直な子だからか、混じり気なしのキラキラした瞳は、なんだか照れ臭くも感じる。

「端から見ると危なっかしいからね……、協力したげるわ」

「やったね菖蒲ちゃん、百人力だよ」

「……ん」

髪を手早くポニーテールに束ねながらの鏡花の言葉に、神綺と菖蒲の表情も目に見えて明るくなる。スキルの高い、しかも気心の知れた知人と料理　楽しいことになりそうだ。

「で、何作るの？」

大方の予想はついているが、確認する為に鏡花は二人の顔を見遣る。二人の口から返された答え、それは

「ただいまー」

「ただいま、っと」

ノリノリで扉を開けるアリス妹に続き、蒼衣も我が家へと帰還する。

繋がれていた手は家に入る直前で手放したが、浮かれた様子のアリスは気にも留めず、鼻歌でも歌い出しそうなテンションだった。ようやくマトモに話せたことだし、アリスの機嫌も上々。今日という一日は大成功だったと言えるだろう。

あまり詳しくない食品品の類をアリスに託し、日用品の類を収納するべく蒼衣は共用クローゼットの方へと向かう。と、

「これ……、カレーか？」

途中リビングに通じる部屋から、スパイシーな香りが漂って来た。独特の香りに確信に近い予想を抱きつつも、蒼衣は手早く買ってきた物を収納。こいしやフランがすっ飛んで来ないことに違和感を覚えたが深くは気にせず、リビングの定位置へ戻ろうと

「……………あおい」

したところで裾を引っ張られる感触に振り向けば、菖蒲がどこか所在無さげに立っていた。その瞳はあちへふらふらこっちへふらふらと落ち着きがなく、何かと葛藤しているように見える。……………ともあれ、別段急ぎの用がある訳でもない。ゆっくり待ってあげるとしよう。

「えと……、あの……」

何度も口を閉ざしては、チラチラとキッチンの方を窺う菖蒲。しよ
うがないなあと言いたげに苦笑した鏡花が何かをよそうような動作
と同時に、菖蒲の隣にトレーを持って並ぶ。それでようやく決心がつ
いたのかトレーの方を眺めながら、

「……作つたの」

鏡花が運んで来たトレーの上には、平皿に盛られたカレーライス。
一口サイズにカットされた野菜や肉、それらを覆い包むカレーソー
ス、ふつくらと炊かれた白米。見るからに美味しそうで食欲をそそ
るそれは、初めて作つたとは思えない程の出来映えだった。

「私は指示を出しただけ。鏡花ちゃんが食材を切つた以外は、全部
菖蒲ちゃん一人で作つたんだよ」

キッチンで刻み盛り付けた野菜を運びながら、補足するように口を
開く神綺。いよいよ以てこのカレーのすごさを理解し、自然と期待
も高まって行く。

「すごいな。俺よりよっぽど上手いんじゃないか？」

なんの偽りもなしに賞賛するが、菖蒲は静かに首を振る。頬を緩め
ながら口を開き、

「……二人が、手伝ってくれたから」

「だとしても、だよ。頑張ったな」

逆になんのアドバイスもなしで、ここまでやれたら異常過ぎるだろう。それだけ菖蒲が頑張ったのだと考えれば、感慨もひとしおだ。やはり素直でいい子だ。蒼衣はその事実を再確認し、労いの意味も込めて頭を撫でてやる。嬉しそうに目を細めながらも菖蒲は真っ直ぐに蒼衣を見据え、

「……食べて」

蒼衣が頷きと共にトレーを受け取り、スプーンを構えカレーと向き合った。壊れ物でも扱つかのような慎重さでカレーにスプーンを差し込み、白米とカレーが程よく混ざった部位を掬い上げる。

あまりに真剣な蒼衣の瞳に、菖蒲だけでなく鏡花も緊張して来る。ほんの少しとはいえ自分も関わったのだ、気にならないはずがない。

一秒が一時間にも感じられる時の中、覚悟を決めたのか蒼衣がスプーンを口に含んだ。ゆっくりと咀嚼する様を固唾を飲んで見守るこ

と一分、蒼衣の口から飛び出したのは、

「……美味しい」

率直ながらもその感想がよく伝わる一言だった。

「……ホント？」

「ああ、本当だ。これならいくらでもお代わり出来そうなくらい」

笑みでそう答える蒼衣の言葉に、菖蒲もようやく不安げな表情を消し去り笑顔を見せる。会話が終わるや否や普段からは考えられない速度でカレーを食べ始めた様子を見れば、誰だって心配は杞憂だと理解出来るだろう。思わず心中で歓喜の叫びを上げ鏡花がガッツポーズを決めていると、

「ただいまー……」

疲労困憊といった体の妹二人が、よろよるとリビングに入って来た。あつという間にカレーを平らげた蒼衣も気が付いたのか、椅子越しに振り返り二人を迎える。

「おかえり。どこに行ってたんだけ？あんまり遅くまで出歩くと……」

『お兄ちゃんあああああん！！』

だが彼を視界に入れた瞬間、二人は文字通り兄目掛けて飛び掛かっていった。受け身こそ取ったものの椅子から叩き落とされる形になった蒼衣は、訳もわからず目を白黒とさせる。

「え、ちょ、何！？何事！？」

「お兄ちゃん分が足りない！圧倒的に！」

「だから大人しく私達と遊ぶのだー！今夜は寝かせないぞー！」

慌てて身を起こすも二人の挟撃に遭い、もみくちゃにされる蒼衣。彼らには知る由もないが、彼女達は彼女達なりに蒼衣の為に頑張っていたのだ。その反動が今来た、といったところか。

「何よ騒々しい……、って」

「あー……、タイミング悪いなー……」

もはや暴走と言っても差し支えないレベルの騒ぎが気になったのか、奥からアリスが顔を出す。この状況では言い逃れも出来ないだろうと、鏡花は主を見捨てることにした。非情などと言ってはいけない、人の恋路を邪魔する者は、馬に蹴られて死ぬ定めなのだから。

「二人共、もう遅いんだからあんまり騒ぐと……」

「うるさい！ 抜け駆けしたくせにー！」

「デート一回で勝ち組気取りかー！ 私と代われー！」

「なっ！？ ベベベベ別にデートなんかじゃ……」

蒼衣とのイベントが後を引いているのかいつもより優しげに諭すアリスだが、こいしとフランの発言に顔を赤くしいつもの調子に戻る。ついさっきまでは静かだったというのに、彼がいるだけで場は騒々しく、しかし明るくなっただけで行く。これがこの家の在り方なんだろうなあと、鏡花は一人頷いた。

「よかったね、菖蒲」

ぼかんとした顔で騒ぎを見守る菖蒲に近付き、その頭にぽふっと手

を乗せる。我に返ったようにこちらを見上げた少女は頬を緩め、

「……………」

満面の笑みを、見せたのだった。

第三十五話「鏡花と菖蒲の頑張る一日」(後書き)

菖蒲可愛いなあ菖蒲(おい)

という訳で蒼衣の式神の二人の一日でした。二人共二人なりに主人を想っているとか上手く書けてたらなあど。

次回、亞愛と紅魔館の一日。

第三十六話「亞愛の割と暇な一日」(前書き)

大変長らくお待たせしました、三十六話です。

ホント多忙過ぎてもう……。マジで学校滅びねえかな(おいとまあれ今年最後の投稿。出来ればゆっくり見て行ってやってください。

ではごーぞー。

第三十六話「亞愛の割と暇な一日」

吸血鬼とは本来、夜行性の生き物である。……死体だとか生ける屍だという論もあるが、ともかく夜行性である。日が沈むと同時に寢床から現れ、夜の王として半日を過ごし、日の出と共に寢床に帰る。それが一般的な吸血鬼像だ。そのイメージと現実は大差なく、多くの吸血鬼がそのような日々を送っている。

しかし、そんな在り方に真つ向から逆らう者もゼロではない。日傘を差して外に出て、普通の人間と変わらない暮らしをする者もいる。元より私達吸血鬼は、この世界の在り方から外れた存在だ。風変わりなのはさほど珍しいものでもなく、特に違和感なく受け入れられていた。

中でも特に変わっているのが、漆黒の悪魔と呼ばれる一人の少女だ。世界初の吸血鬼とされるアカーシャ・ブラッドリバーの血を引く、最強クラスの吸血鬼。姓を赤夜、名を亞愛というその少女は、かなり変わったタイプの吸血鬼であった。

「……………おおおおおお」

そも、何故こんな話をしているのかといえば、全ては現状を理解する為に必要な知識を復習している訳であるが。ともかくとして、赤夜亞愛は変わり者であるという大前提を理解していただきたい。出自や二つ名からして普通ではないし、日中でも平気で出歩いたり、妹に等しい昔馴染みの吸血鬼を弄り倒したり。……それこそ枚挙に暇がないが、時間の都合もあるのでその辺りは割愛しよう。

彼女の思い付きは基本的に、子供の我が儘とそう変わらない。己がやりたいことをやりたいようにやる。いっそ清々しいまでに自分本位の生き方だが、それが結果的に他者を幸せにすることも多々あるのだから始末が悪い。

例としてついこの間だって、ふらりと現れた風変わりな妖怪と共に永き因縁に縛られた姉妹の心を闇の檻から解き放った。その風変わりな妖怪にしても、普段は言い争いが絶えない仲だったが、戦いが始まるとそんなことはなかったと言わんばかりのコンビネーションを見せた。結果姉は亞愛に背を押され、妹は妖怪に懐いた。文句の付けようがないくらい、問題は全て解決された。……妹がその妖怪を追って、姉の元から離れてしまったことを除けば、だが。

今日でフラン妹がいなくなつて三日目。あの蒼衣妖怪に任せておけば問題はないだろうが、ようやく打ち解けたばかりの姉としては何とも言えない微妙な心境だ。妹を取られてしまった嫉妬のようなものだが、やはり寂しさは拭えない。

それを理解しているからか、亞愛はここ二日過剰なまでに姉を構っている。結果散々な目に遭つてばかりだが、なんだかんだで楽しく過ごせているのも事実で。

だから私、レミリア・スカーレットは、赤夜亞愛が大好きで大の苦手だ。

「おおおおおおお！！」

と、どうやら無駄話はここまでのようだ。どこの誰とも知れない誰か、現実逃避に付き合ってくれてありがとう。今日もまた散々な一日になりそうだけれど、私はめげずに頑張っ行ってこうと思う。だからどうか、今日一日を無事に終わらされたら。また少しだけ、私の愚痴に付き合っ欲しい。

「おっはよー！！！」

聞かせる相手のいない語りを終わると同時、意識を無理矢理現実に戻す。扉を無遠慮に開けて入って来たのは、先程話していた赤夜亞愛その人。ケープ付きのロングコートも、ツインテールのように結われた短髪も、驚くくらい真っ黒で。だからこそ生き生きとした輝きを宿す、アメジストの瞳が一際目を引く。全力で生を謳歌している。そんな印象を抱かせる少女だ。

「かーらーのー、亞愛ダイブ！！！」

そんな観察をしている内に、全力でこちら目掛けて駆けて来た亞愛が宣言通り宙を舞う。両手を大の字に広げ、陽光を受け輝くその姿は、在りもしない背の翼を思わせる。しかしなんだ、観察していたらいつの間にか亞愛との距離が目と鼻の先、

鈍い音が、早朝の紅魔館に響き渡った。

「ほらほら起きなさいレミィ！せっかく日光水銀その他諸々を無効化する亞愛ちゃん特性十字架ネックレスあげたんだから盛大に一日を遊び倒すわよさあ早く！！」

華麗なダイビングを決めた亞愛は即座に身を起こし、布団の中からレミリアを引っ張り出す。悠久の時を生きる強力な種族であろうと、いつどこで何が起きるかわからない。時間は有限にして貴重。その言葉は万人共通なのだ。……その貴重な時間を全て遊びに向ける辺り、この少女はある意味バカ天才なのかもしれない。

「亞愛、あまり騒がしくしないでちょうだい。世界最古の吸血鬼様はマナーすら知らないのかしら？」

と、不意に音もなく亞愛の背後に、一人の少女が現れる。青を基調としたメイド服を着こなした、涼やかな印象を与える少女だ。制止の声に気分を害された亞愛は頬を膨らませながら振り返り、

「咲夜は相変わらず冷たいわねー、前ボッコボコにしたことまだ怒ってんの？大人気ないぞー」

「あなたがお嬢様を疲れさせているからよ、前科がないとは言わせないわよ？」

涼しげに返すメイド咲夜の言葉を踊ってスルーし、亞愛はレミリアへ獲物と視線を戻す。が、

「それともう一つ言っておくけど、最初の一撃で落ちてるわよ」

肝心のお嬢様とはいえば、安らかな寝顔のまま気絶していた。

「……あるえー？」

おっかしいなーと言わんばかりに首を傾げる亞愛だが、あちらとこちらではそもそも体格が違う。女の子とはいえ外見が五年近く上の相手に寝起きダイブされれば、誰だっどこうなるだろう。

こうしてレミリアの一日は、ジャンピングプレスを喰らうところから始まった。

「朝っぱらから死ぬかと思ったわ……」

目を覚ましたレミリアが、開口一番にそうばやくのも無理からぬことだろう。寝起きにあんな一撃を喰らって、ピンピンしていたら逆に怖い　　というか普通なら重傷だ。例え相手が妹同然の吸血鬼とはいえ、どうかしているとしか言い様がない。

「だって普通に起こすんじゃ面白くないじゃない」

「大多数は普通がいいの」

それだけの理由しかないのだから、ほとほと対応に困るのが亞愛の亞愛たる所以だ。レミリアも五百年生きた割に幼いと言われるが、亞愛に比べれば百倍はマシだろう。相も変わらず、常識に囚われない少女のようだ。

「まあまあ、早寝早起きは健康にいいですよ？」

「……健康を気にする吸血鬼ってのもなんかシユールね」

ムスツと頬を膨らませるレミリアを宥めるように、黒髪のメイドりんが柔らかな笑みを浮かべる。差し出されたアプリコットティーを受け取りながらも、レミリアはツツコミを忘れない。朝日を背にラジオ体操している吸血鬼なんぞがいたら、それこそ見世物としか思えない。

「ほら、健全なる精神は健全なる肉体に宿るって言うじゃない」

「神への反逆者とされる吸血鬼が健全？ちゃんちゃらおかしいわね」

ニヤニヤと笑いながら亞愛も話題に乗るが、レミリアはそれを一笑する。元々吸血鬼が十字架に弱いとされるのは、神聖なる神が創造した『人』というカテゴリーから逸脱した存在だとされるからだ。レミリアやフランは別段十字架に弱い訳ではないが、鬼だ悪魔だと罵られる存在が健全云々を気にするなど、笑い話以外の何だと言うのか。しかし素っ気ないレミリアの対応に二人はますます笑みを深くし、

「あんまりツンツンしていると揉むわよー？」

「もしくはさすりますよー？」

「どこを！？何を！？」

思わぬ発言にティーカップをガチャガチャと鳴らしてしまった。再会初日に散々弄られたことは、妹の暴走という事件を経てもお記憶に新しい。自らの身体を抱くようにして、全力で後退りしてしまうのも無理はないだろう。

「そりゃあ……」

「……ねえ？」

何を言っているのかといった表情で、同時に顔を見合わせる二人。口元に浮かんだ意味深な笑みが、レミリアの背筋を凍らせ恐怖を煽る。蛇に睨まれた蛙の心境が、痛い程によくわかった瞬間だった。

「全く……、何を言っているのよあなた達は」

そんな二人に呆れた声を投げ掛けたのは、お茶請けの洋菓子を運んで来たメイド長の咲夜だ。優雅な所作でトレーをテーブルに置き素早く振り返りながら、

「そこはぺろぺろ一択でしょう常考！」

『帰れヘンタイメイド!!』

場の全員のツッコミを咲夜は跳つてスルーした。ここが言の葉が弾幕になる空間だったのなら、さぞかし面白い曲芸が見れたことだろう。

「冗談はさておき口直しにキャンディーはいかがでしょうか」

涼しげな顔の咲夜は何事もなかったかのように、どこからともなくぐるぐる渦巻きが特徴的な西洋の飴菓子を取り出す。が、

「……なんでそんなやたら大きいの？」

「妹様が喜ぶかと思ったのですが、生憎とないので。元々先の発言はこの為だったのですが」

咲夜の解説に頷きを返しながらも、レミリアは軽く引いたままだ。人の頭とそう変わらないサイズのキャンディーを渡されれば、普通は誰であれ引くだろう。

……あれ、でもフランは喜びそうね。

はたと気が付き周りを見回せば、誰もこのキャンディーに動じていない。まさかこれに動揺しているのは、自分だけだとも言っただろうか。なんだろう、この凄まじい疎外感。別段おかしなことではないはずなのに、何かに負けた気がしてくる。

……負けてたまるか……！

義務感のようなものに背中を押され、レミリアはキャンディーにかぶりつく。が、

「……………かひゃい」

当然ながらキャンディーとは、水飴・砂糖などを煮詰めて作られている為固い訳で。思いつ切り噛んでしまったせいか、割と結構な痛みが返って来る。思わず目の端に涙を浮かべたレミリアは、大人しくなめて消化することにした。

そんなレミリアの様子を見て、吸血鬼とメイド二人は静かにサムズアップ。当然初めから打ち合わせていた訳ではないが、ことレミリアイジリに関してなら三人のコンビネーションは阿吽もかくやという程。今日もまたその絆が遺憾無く発揮された。ただそれだけのことである。……………ついでに言えば亞愛の揉むは肩、りんのさするは背中だったのだが。勘違いさせたままの方が面白いので、修正はないでおこう。

「うー……………、全然減らない……………」

意気投合した三人は、そのままレミリアがキャンディーを消化するところを眺めることにした。

大図書館内の空気は、変わらず静謐なままだった。数日前までは賑やかで活気があったものだが、やはり本の園には沈黙が相応しいと、この主であるパチュリー・ノーレッジはそう思う。

薄暗い部屋の中、数多の財産本に囲まれてそれを消化する。蒐書家ヒラリオマニアにとって、これに勝る喜びがあるだろうか。いや、ない。

故に彼女は今日も今日とて、薄暗い穴蔵に引きこもって過ごす。いつまでも変わらない平坦な日々、約束された予定調和。それが彼女の暮らす世界の全てだ。

「……で？こんなところになんの用かしら？」

いや、だったと言っべきか。彼女の数少ない楽しみの時間は、今まさに奪われてしまったのだから。そう

「レミイと親友やってるんでしょ？私がいなかった間の話聞きたいな」とか

天性の賑やかしである、親友の姉赤夜亞愛の存在によって。

「大方あなたが想像してるのと大差ないと思うわよ？」

「……………ですよねー」

デスクに寄り掛かるようにして身を乗り出す亞愛を諫めつつ、パチユリーは額に手を当てる。騒がしさに事欠かないのが赤夜亞愛という人物の特徴だが、不思議と嫌悪感を感じない。その騒がしさが温かい、いわゆる一家団欒的なところから来ているからかもしれない。

「……………ま、いいわ。退屈凌ぎに付き合っただけ。こぁー？」

「はいはい、アプリコットでよろしいですかー？」

構わないわと返事を返し、考察を打ち切ったパチユリーはデスクを軽く片付ける。それなりに大事な話だ、本が山と積まれた場所で語るは無粋というものだろう。

スペースが取れたタイミングを計ったように、こぁが紅茶を運んで来た。杏の香りが漂うそれに口を付け、

「まず互いの見解の確認。あなた、あの二人の軋轢についてどこまで知ってるの？」

「ん、全然。四百年ちょっと前に別れた時は、めっちゃくちや仲良さ

そうにしてたもの」

まあ、当然と言えば当然か。彼女が『赤夜亞愛』として過ごした時間は七百年程。二人は百年もしない内に幻想郷へ移住しただろうし、会う機会などなかったはずだ。

「なら始めから話した方が良さそうね。……といっても、蒼衣やレミイの残留思念と私の推測頼りなだけで」

土地や人に焼き付いた記憶を読み取るくらい、魔女である彼女に掛かれば造作もない。相手が吸血鬼レミリアや深遠蒼衣という強大な存在だった為断片しかわからなかったが、それだけでも推測は容易。

「あなたと別れたレミイと妹様フランは、当面は平穩に仲良く暮らしてたみたい。元々双子みたいなものだから、上手く行かないはずがないわよね」

姉は妹を可愛がったし、妹は姉に懐いていた。誰も羨む理想的な姉妹関係。問題は何もなく、二人は平穩無事に暮らして行けるはずだった。

「だけど、二人はどこまで行っても二人。互いしか話す相手がいないから段々と……、飽きてしまったのよ。吸血鬼としての生き方に」

例えどんなに気の合う友人でも、数十年間その友人しか話し相手がないとすれば段々活気は失われて行く。確かに姉妹は仲が良く、常に寄り添い話をしていた。閉塞された世界故に、話題もすぐに底をついてしまったのだ。

そんな中妹は、人間達に興味を示した。かつて亞愛が関わりうとしていた、世界で最も弱く、醜く、しかし強く儂い存在に。ただでさえ好奇心旺盛なフランのこと。前例もいたことだし、人間に興味を示すのは時間の問題だった。

「あなたが渡した日光避けが災いしたんでしょね……。羽さえ隠してしまえば、ただの幼い少女にしか見えないから」

吸血鬼とて人の姿で生きる者。万が一を想定し、羽を霧化して隠すくらいは出来る。亞愛の能力が込められた十字架さえあれば、どこにでもいる普通の少女と変わらない。故に二人はそれを持ち出し

「そして、それは起こるべくして起こってしまった」

あくまで十字架の効能は、吸血鬼の弱点たる日光や水を無効化するもの。吸血鬼の馬鹿力を抑制することなど、当然含まれてはいない。力のコントロールが出来ないフランは加減を見誤り、

「フランが正気に返った時は、一面血の海だったそうよ」

証拠隠滅とばかりに皆殺しにした場所は、かなりひどいものだった。全員が全員人としての原形を留めておらず、肉塊と称するにもおこがましい。五人の部品を集めてようやく一人分　そんな死体に人としての尊厳など有りはしないのだから。

そして何よりそれを恐れたのは、惨劇を産み落としたヒロインそのもの。己が秘めた破壊の力に、それを躊躇いなく振るってしまった自分自身に。姉の為免罪符という言い訳など、なんの意味も持ち得なかった。

「だから彼女は、唯一自分を抑え得る姉に哀願した。自分がもう誰も傷付けないよう、封じ込めてくれと」

当然レミリアも拒絶した。こうなってしまったのは自分がしっかりしていなかったからだ。フランは何も悪くないのだと、必死に訴えかけた。だが、それでも、フランは殻に閉じこもることを選択した。

「人が来ないような辺境の地に館を立て、地下室に彼女を封印。だけれど恐怖と罪悪感に蝕まれて、次第に二人共歪み壊れて行った　そんな話よ」

誰が悪い訳でもない。ただ、ほんの些細な擦れ違いと、偶然が重なってしまっただけ。言葉にすればたったそれだけの　数百年に渡

る悲しき物語だ。ようやく解き放たれたとはいえ、その傷痕はあまりにも深い

「……で、あなた達がここに住むようになるのにどんないきさつがあった訳？」

納得したように頷き手中のティーカップから視線を上げ、亞愛は真剣な面持ちでパチュリーを見据える。心配性だと笑われるかもしれないが、姉代わりとしては妹の交遊関係も気になる。何故なら、そう

数多い吸血鬼の中でも、真祖を普通アカーシャ 亞愛の吸血鬼として受け入れてくれたのは、彼女達だけだったのだから。

「……最初に接触したのは私。どちらかと言えばレミィが勝手に押しかけて来たんだけど」

パチュリーもそれがわかつているのか、苦笑と共に答えを返した。彼女の書齋に転がり込んで来た吸血鬼の少女 開口一番の言葉は、今でも鮮明に思い出せる。

「助けたい人がいる、ってね」

初めて見た吸血鬼という存在に興味をそそられたこともあり、パチユリーは彼女の話を書くことにした。ほんの些細な好奇心と、少しばかりの同情と。書斎が蔵書でパンク寸前だったこともあり、彼女は紅魔館へと移住することを選んだ。

「正しい知識を教え、人の温かさを教えられる者。幸い教本は山程あったし、最初こそ苦労したけどそこまで難しいことじゃなかったわ」

毎日地下の少女の下へ通い、本を読み聞かせては簡単な感想を聞く。請われれば教え、また彼女が興味を持ちそうなことを話す。パチユリーの語り聞かせる様々な世界に、彼女はどんなのめり込んでいった。後に使い魔として小悪魔も召喚し、紅魔館での生活サイクルは安定。ごく平穏な日々が続いた。

そんな日々を過ごすこと数十年、レミリアは二人目の住人を連れて来た。中華風の赤い髪の少女を、彼女は門番に据えると宣言したのだ。

「並外れた強さこそないけれど、頑丈で我慢強くて優しい者。遊び相手になってあげられるよう、レミィなりの配慮だったんでしょね」

実際彼女の狙い通り、美鈴はフランと遊ぶことの出来る数少ない人物となった。始めこそ生傷が絶えなかったものだが、何度も根気よく教える内にフランも次第に力加減を学んで行った。遊び相手とい

う友達を得て、徐々に笑顔も見せてくれるようになった。

そして最後の人物が来たのは、今からおよそ十年前。薄汚れたボロ布を纏った、十にも満たない幼い子供だった。

「身の回りの世話を出来る者。時間停止なんて力も持ってたし、逃げるだけなら簡単なもの。仕事は仕込めば覚えられるし、咲夜は適役だったのよ」

心酔されたのは計算外だったでしょうけど、とパチュリーは当時を懐かしむ。悪魔だと迫害されていた咲夜を保護する意味合いも兼ねてのことだったのだが、想像以上の速さで咲夜は様々なことを習得していった。いつしかメイド妖精を纏め上げ、リーダーシップを發揮していた時は驚かされたものだ。

「そして彼女自身も、力を蓄え強くなって行った。またフランが自分を見失っても、身体を張って止められるように」

フランを救う鍵となる人物を呼び寄せながら、レミア自身も鍛練を怠らなかった。またあんな悲劇が起きてしまわないようにしつつも、最悪の場合を想定し己を磨き、妹と対等に渡り合えるよう貪欲に力を求めた。スペルカードルルという誰もが平等に戦える舞台の話の聞き、幻想郷に移住することも厭わなかった。が、

「罪の意識に耐えられず、既にフランは壊れていた。……優し過ぎ

たのよ、彼女は」

レミリアが地下室に赴いた時には、既に手遅れだった。彼女を見るなり態度を豹変させ、殺す気で襲い掛かって来たのだ。パチュリーや美鈴達の助力を得てどうにか押さえ込んだものの、事態はあまりにも深刻だった。

「閉じ込められたと憎悪する妹に真実を打ち明ける訳にも行かず、姉は一つの決断を下した。自ら汚れ役を引き受け、妹の心を守ることを」

次にパチュリーが会いに行った際フランがこの件を忘れていたことが、レミリアの背中を後押しした。全てを他の住人に託し、自分はただ暴君の仮面を被る。自らの想いと妹の心を天秤に架け、姉は後者を選んだのだ。

「私達に世話を任せ、自らは大好きな妹の憎まれ役。……ホント、手が掛かるったらないわ」

溜め息混じりにぼやきながらも、その声に温かさが込められていたのは、意識せずとも自覚している。パチュリーも、美鈴も、咲夜も、小悪魔も。彼女達姉妹が大好きだったから、ただ裏方に徹していた。いつか破綻するかもしれない思いながらも、それ以外に方法がなかったから。

「で、そんな時に現れたのが蒼衣達とあなたって訳。後は語らずともわかるでしょう?」

こんなに饒舌なのはいつ以来だろうかと思いつつ、喉を潤す為パチユリーは紅茶を一口。再び沈黙の帳が落ちる中、緩やかな時間が流れて行く。が、

「……よ、それ」

静寂の中にポツリと、小さな声が響いた。何事かとパチユリーが視線を移してみれば、

「何よそれ……!ふざけんじやないわよあの愚妹……!」

今すぐにでも人を殺しそうな程に激昂した、亞愛の姿があった。莫大な魔力が噴水のように溢れ出し、拳を強く握るがあまりぽたぽたと鮮血を滴らせている。それは道化師染みた彼女が初めて見せた、激しい憤怒の感情だった。

即座に立ち上がるや否や、亞愛は身を翻し図書館を後にする。彼女の性格からして行き先に見当は付いたので、あえて止めず見送ることにした。

「ホント、似た者姉妹ね……。感情任せに紅魔館^家を飛び出すところとか」

やれやれと苦笑したパチュリーは、ゆっくりと立ち上がりながら小悪魔を呼ぶ。この後使いそうな本を見繕うことで、彼女に報いる為に。

「あんの、バカ……！」

霧の湖を一足飛びに飛び越え、亞愛は何度目になるかわからない咳きを零す。バカだバカだとは思っていたが、まさかここまでどうしようもないとは思わなかった。

思えば昔からそうだった。いつだって彼女は妹を想い、その身の全てを賭して来た。

転んで膝を擦りむけば、救急箱を抱えて飛んで来て。

ソフトクリームを地面にぶちまければ、ほとんど食べていない己の分を差し出して。

凜猛な野犬に襲われれば、身体を張って妹を守って。

いつも彼女は妹を気に掛け、唯一無二の半身のように大事にして来

た。あの温かさに溢れた館さえも、結局全ては妹の為で。

しかしその想いの全ては、彼女に全然届いていない。拳句今の彼女は、紅魔館を離れていて

「一番大事な問題が解決してないじゃないの……!!」

渡した日光避けの十字架に染み付いた魔力を辿り、亞愛は白い洋館の前へと辿り着く。ノックをするのもどかしく、扉をぶち抜こうかと拳を振りかぶり

「……あなたは」

ちょうど扉から出て来た顔に、すんでのところでどうにか止めた。

「……あれ」

ふと目を覚ましたレミリアは、自分が寝ていたことに遅れて気が付いた。いつの間にかその身はベッドに横たえられており、記憶と現状の齟齬に違和感を覚える。寝起きのぼんやりする頭を動かし、直

前の記憶を辿ってみると、

「……ああ、キャンディーか」

元が大の甘党であるフランの為の一品だったからか、例のドデカキヤンディーはやたらめったら甘かった。一時間以上掛けてどうにか消化したところで凄まじい胸焼けに襲われ、ダウンするように寝入ったのだ。

「……絶対身体に悪いわよ、アレ」

摂取し続ければ絶対病気になりそうな代物を記憶から消し去り、身を起こしたレミリアは大きく伸び。ふわっと絨毯敷きの床に降り立ち、自室を後にする。

既に辺りは暗く、夜の帳が落ちていた。窓越しに差し込む月明かりだけが、レミリアを薄く照らしている。

彼女が保有する紅い広大な館は、不気味なまでの静けさに包まれていた。普段ならメイド妖精 能力はともかく数だけはそれこそ五万という彼女達すら見掛けない。集団でサボっているのだろうか

「……咲夜？いる？」

試しに背後の虚空へ言葉を投げ掛けてみるも、それに対する返答はない。呼べば能力を行使しコマゼ口秒で現れるのが彼女の常だが、それすらないのは異常だ。メイド妖精の件もあり、徐々に心中に暗雲が立ち込め始める。

……一体、何が……？

ともあれ調べてみようと思いを閉じ、レミリアは感覚を研ぎ澄ませる。妖怪の身体能力は人間を遙かに上回るが、五感においてもそれは同様。ましてや吸血鬼ともなれば、数百、数千倍の感覚さえも持ち得る。自らを中心に網を広げるように、レミリアは住人の気配を探る。

……いた。大広間。

程なくしてそれは見付かった。この館で最も大きな空間 部屋 パーティ用の大広間。そこにメイド妖精を始め咲夜や亞愛、おまけに滅多に大図書館から出て来ないパチュリーや、門番を任されているはずの美鈴までいる。いよいよ以て何をしているのかわからない。

……なんのつもりかしら？

純粹な好奇心もあるが、自分だけ除け者というのもいただけない。レミリアは軽く地を蹴り、滑空するようにして移動を開始した。

狭い屋内での飛行だが、さすがレミリアも慣れたもの。翼で器用に体勢を維持し、ものの数秒で数百メートルを踏破。大広間に至る扉の前へと辿り着く。ここ紅魔館は自分の城、躊躇う必要などどこにもない。

故にレミリアはなんの気負いもなく、豪奢で重厚な扉を押し開ける。しかし目に飛び込んで来た光景を脳が咀嚼する前に、

「
お姉ちゃん」

そこにいた人物の顔を見て、彼女は言葉を失った。

「えへへ、来ちゃった」

眼前でそう笑みを漏らす人影を、見間違えるはずがない。数百年の軋轢を乗り越え、ようやく和解した相手。何よりも大切な、この世でたった一人の妹。夢にまで見た彼女の笑顔が、今まさにそこにあった。

「な……、んで……」

だが感情とは裏腹に、レミリアは驚愕を隠せない。彼女は今、あの妖怪と行動を共にしているはず。今頃あの人形遣いの家にいるはず

で、紅魔館にいる訳がない。

しかしこれは現実。夢でも幻でもなんでもなく、確かな真実としてここに在る。ならば、何故

「なんであなたがここにいるのよ……、フラン」

「なんでって……、決まってるじゃない」

震える声で問い掛けた姉に、妹　フランドール・スカーレットは首を傾げながら答える。何を言っているのかと、心底不思議そうな表情で、

「ここは、私達のお家だもん」

彼女が一番欲しかった、言葉をくれた。

「……あれ、フランは？」

夕食の時間を間近に控え、リビングに顔を出した蒼衣はふと疑問を

零す。思えば昼食を共にしてから、彼女の顔を見ていない。いつもならこいし共々どたばたと押しかけて来るのに、珍しいこともあるものだと思っただけだ。

「ちょっと出掛けるって。明日には帰って来るらしいから心配しなくても大丈夫よ」

兄の何気ない質問に、アリスはお玉で鍋のシチューを掻き混ぜながら答えた。その手つきは慣れたもので、とろみのあるシチューをより一層美味しそうに見せている。隣で見ているこいしがよだれを垂らしそうになっているのも、仕方ないと言えるだろう。

とは言えこんな夜遅くに外出。実年齢はともかくとして、見た目や精神はまだ年端も行かない幼い少女だ。万が一がないとも言いきれないし、少し不安を覚えてしまう。

「……大丈夫よ。単にお節介な真祖様が、最後の懸け橋を作ってるだけだから」

そんな兄の心情を察したのか、アリスが遠回しに答えを告げる。それなりの付き合いだ、言わんとしたことはそれだけで察せた。安堵の笑みを零した蒼衣はゆっくりと頷き、

「……じゃ、素直に信じますか。あのバカ女を」

ダイニングの椅子に腰掛け、この件にはノータッチでいようと決めた。気にならないと言えば嘘になるが、自分が首を突っ込んでも拗れるだけ。ここは素直に、真祖専門家に任せるとしよう。

「ねえねえ、何の話？」

そんな様子を変に思ったのか、こいしが無邪気に首を傾げて尋ねて来る。エメラルドの瞳には好奇心の光が宿っており、気になって気になって仕方ないと言わんばかりだ。だが、

「大したことじゃないさ。な？」

「ええ」

言うのもなんだか野暮なので、蒼衣は苦笑と共にアリスに話題を振る。その意図を理解しているからだろう、微笑ましそうな笑みを浮かべながら、アリスも同意を返して来た。

「むー……。隠し事してる……」

自分だけわからないのが不満なのか、頬を膨らませて拗ねるこいし。そんな彼女の愛らしさが、更に笑みを加速させるのだから困ったも

のだ。

「ほらほら、遊んでやるから機嫌直せ」

「ホントっ!？」

頭をぽふぽふと叩きながらそう告げると、こいしは一瞬で表情を喜のそれに切り換える。現金だなあと思わなくもないが、言わぬが華というやつだ。ここは黙っておくとしよう。

……すっかりやれよ、バカーシヤ。

「じゃあ一緒にお風呂に!」

「いや、入らねえからな?」

心中で友人に励ましの言葉を送り、こいしの言動には的確にツッコミを入れる。永い夜になりそうだと苦笑しながら、蒼衣は紅魔館の方を見遣るのだった。

「亞愛達に聞いたんだ。お姉ちゃんのこと」

思わず固く拳を握り締めてしまいうレミアに歩み寄りながら、フロンは続けて口を開く。ここに来てから語り聞かされた、数百年に及ぶ真実の物語をなぞりながら。

「今まで頑張ってきたこと、隠してたこと。辛かったこと、苦しかったこと、他にもたくさん」

それは、二人の少女が主役のお話。閉じ込められた妹を救う為、姉が必死に頑張るお話。知識が豊富な魔女や、頑丈な格闘家、完全無欠なメイドを仲間に加え、たった一人の家族を助けに行く物語。

「お姉ちゃん言ってたよね、私が弱かったからだって。私が向き合えなかったからだって」

違っただよ。

「本当に弱いのは私。自分の犯した罪から逃げたくて、全部『お姉様』のせいだって押し付けて。ひどい子だよ……。お姉ちゃんはいっだって、私の味方だったのに」

思えばいつもそうだった。昔から姉は妹を思い、その身の全てを賭して来た。

転んで膝を擦りむけば、救急箱を抱えて飛んで来て。

ソフトクリームを地面にぶちまければ、ほとんど食べていない己の分を差し出して。

獰猛な野犬に襲われれば、身体を張って妹を守って。

いつも彼女は妹を気に掛け、唯一無二の半身のように大事にして来た。この温かさに溢れた館さえも、結局全ては妹の為で。

しかしその想いの全てを、妹は理解していなかった。あまりにも大き過ぎるスケールの愛に、孤独な少女は気付くことすら出来なかったのだ。

「だから、ね」

だから、ここが本当のスタートライン。このことを解決して初めて、二人は元通り。否、それ以上の絆を育むことが出来る。全ては真祖によって語られた、ならば後は応えるのみ。

「ごめんね、お姉ちゃん」

眼前に立った妹は、姉を強く抱きしめる。そして、

「ありがとう。私のたった一人の、大好きなお姉ちゃん」

その言葉を聞き終えると同時、レミリアは自らの頬を何かが流れ落ちて行く感覚を得た。涙を流していると理解したのは、更に数秒後のことだった。

「私はもう大丈夫だから、もう頑張らなくてもいいんだよ。今までずっと大変だったよね……」

強く強く抱きしめながら、フランは何度も感謝の言葉を繰り返す。今までの空白を埋めるように、失った時間を取り戻すように。

端から見ればただそれだけの、なんの変哲もない普通の行為。だが彼女にとってそれは、どんな美辞麗句よりも称賛に値する。妹のたった五文字の言葉、それだけで、

彼女は、報われたのだから。

「……今更過ぎるわよ、バカ」

怖ず怖ずと、しかし力強く、レミリアはフランを抱きしめる。ようやく掴み取った大切な 自分の一歩の宝物を。

「えへへ、頭悪くてごめんね」

「全くよ。このバカ妹」

困ったように、しかし嬉しそうに答える妹に、姉も笑みと共に答えた。泣き笑いになって上顔は涙でぐしゃぐしゃだが、それくらいは大目に見てくれるだろう。外分を取り繕うよりも 今はただ、この温もりに浸っていたかった。

「……さ、それじゃあ始めましょうか」

そんな様子を見守っていたのか、歩み寄って来た亞愛が二人を纏めて抱き寄せる。ふと我に振り返り恥ずかしくなったが、フランが笑っていてくれるので良しとしよう。

「始める？何を？」

「決まってるでしょ？そりゃあ」

ともあれ本来の目的　全員でこんなところに集まって何をしていたのかを説明すべく、レミリアは疑問を投げ掛ける。ニヤリと笑った亞愛は両手を広げ背後を指し示し、

「大宴会よ!!」

その背後にあるものに、レミリアはようやく気が付いた。

そこは有り体に言えば、立食パーティーの会場と化していた。点々と設置されたテーブルにはいろとりどりの料理が並べられ、広間全体が豪華に飾り付けられている。メイド長の指示の下、普段はやる気のないメイド妖精達がせっせと働いていた。

「聞きなさいあな達！今ここに、姉妹の絆は完全に取り戻された！何も考えるな！ただ祝え！今日という日を彼女達の最高の思い出にすべく、力の限り盛り上げなさい！はい返事！」

『　仰せのままに!!』

ノリノリで音頭を取る亞愛に、同じくらいノリノリで答えるメイド妖精達。あの怠け者達を上手く乗せるところが、また亞愛らしいというかなんというか。カリスマ染みた何かと表現すべき何かで、彼女はメイド妖精達を鼓舞していた。

「やれやれ、相変わらず騒がしいわね彼女。……ま、秘蔵の酒を開けるんだからそのくらいは必要か」

「私が密かに作り上げた超名物酒　　ようやくお披露目の機会が来たようですね」

パチユリーも苦笑と共に古めかしい酒瓶を数本取り出し、咲夜も背後に大量の酒樽を召喚する。百年の魔女の秘蔵品と、時間操作で熟成されたブランデー。どうやら飲み物には困らなさそうだ。

「料理やおつまみが切れたら言って下さいね。中華系ならドンと来いです！」

「パチユリー様の下で培った運搬スキル、全力で解放しますよお！」

奥の仮設キッチンでは美鈴やりんが中華鍋を振るっており、それをこあ、あざいむ、コウがテキパキと配膳している。美鈴はあれでなかなか料理が上手いし、咲夜の仕込みを受けたりんに関しては言うに及ばず。味も量も万全、文句なしだろう。

そして、ここまでされたら自分とて黙ってはられない。

「紅魔館の主、レミリア・スカーレットが宣言するわ！今夜は無礼講よ 遠慮なく楽しみなさい！！」

張り上げられた頭首の大声に、広間全体がワツと歓声を上げる。主直々のお許しが下った無礼講 これは楽しまなければ損というもの。俄然盛り上がりは最高潮に達し、更に賑わいを見せ始めた。

「行こ、お姉ちゃん」

「ええ、行きましよ」

笑顔でその中心に誘う妹に答え、姉はその手を優しく握る。亞愛の穏やかな笑みを背に、二人は会場目掛けて走り出した。

まだまだ、夜明けまでは永い。

第三十六話「亞愛の割と暇な一日」(後書き)

はい、という訳で休息編最終回。亞愛と紅魔館のその後でした。補完みたいな感じです。

はちゃめちゃんな亞愛さんですが、やることはきっちりとする人です
(キリッ)

次回、冥界編始動。

第三十七話「来訪者達」(前書き)

お待たせしました、三十七話です。

いよいよ魅魍月も起承転結の「承」に突入、異変が加速して行きま
す。

要するに厨二が加速するんですが、良ければゆっくり見て行ってね！
ではごーぞー。

第三十七話「来訪者達」

暗い、昏い、闇の中。この世のいずことも知れぬ場所にある幻想郷^{楽園}の、更に秘境にある暗闇。誰一人とて気付くことのない、深い深い黒の底。特定の者達から『アナグラ』と呼ばれるその場所は、普段と同様静寂に包まれていた。空間を支配しているのはウィンドウのポップアップ音とタイプ音、そして暗闇特有の安心感だけ。

「……………あれ？」

そんな中『特定の者』の一人である少女が、ふと気付いたように声を上げる。大きなリボンで飾られた紫色の長髪に、霞み掛かった背中の白い六枚翼。巫女服とワンピースを足して割ったような黒装束の少女は、名をキリノという。歳の頃は十四程度にしか見えないが、実質ここのNo.5だ。見る者が見れば、きつと度肝を抜かしただろう。何しろ

妖精の身でありながら鬼や天狗、吸血鬼にすら勝る力を秘めているのだから。

「リーゼロツテさん、瑠璃さんは？」

しかし本人はそんな様子を露程も見せず、ただっ広い空間^{部屋}の中でも目を引く豪華なソファアールに腰掛けウィンドウを数十展開している少

女に振り返る。問われたリーゼロッテ　漆黒のゴスロリドレスを纏ったリーゼロッテ・ヴェルクマイスターという名の少女は面を上げ、

「言われてみれば今日は見てないな……」

手を振るうだけで全てのウィンドウを消し去りつつ、首を傾げるリーゼロッテ。長い銀髪や碧の瞳といったパーツが並外れて美しい為か、そんな単純な仕草も驚くくらい様になっている。これが魔性の美、というものなのか。十代半ばにして暗黒魔術に精通した少女の魅力は、悪魔のそれとなんら変わらない。

「たまにフラツといなくなるわよね、あの人」

と、そんな問答が気になったのか、片膝を抱え部屋の隅で座っていた少女も口を開いた。赤みの強い茶髪と数多の小さなリボン、薄いピンクのワンピースに、その上から羽織った漆黒のロングコート。リーゼロッテが非現実的な異彩を放っているとすれば、この少女

花城摩理は現実的な異彩を放っていると言っべきか。方向性は違えど本質は同じ。顔立ちが整っていることも相俟って、見る者を圧倒する静かなオーラを纏っていた。

「摩理さんも知りませんか……。戌子さんは？」

「最近まで私達とそっちは別動隊だったんだよ？逆にこっちが聞きたいねー」

落胆したように肩を落としたキリノは、中央の卓袱台でだらける面々に声を飛ばす。それに間延びした口調で答えたのは、摩理達下位メンバーを統轄する獅子堂戌子だ。マゼンタのシャツとダメージィーンズを着用し、犬耳のようにも見える二股に分かれた帽子を被った、薄い茶髪の少女。身長はやや低めで見た目や名前こそ愛らしいが、肩に羽織っただけの漆黒のロングコートと、手元に置かれた身の丈を超える鉄製のホツケースティックがその感想を一瞬で打ち砕く。その可愛らしさは、何も知らぬ愚かな餌を呼び寄せる為か鋭く尖った八重歯も相俟って、狩人のような印象を抱かせた。

しかし今は戦場ではなく休息の時。少女の獰猛さは鳴りを潜めており、なんとも緊張感のない抜けた声で、

「なんなら賭けでもするー？私は人里に一銭ー」

「またそんな……。あ、じゃあボクは甘味処に五銭なのです」

戌子の発言に卓袱台の一角に座っていた少女が、鯛焼きを頬張りながら便乗する。羊に似た漆黒の角を持ち、腋の開いた巫女装束の上から漆黒の衣を纏った少女。とある鬼の一族の末裔である彼女

日向音羽は鯛焼きをくわえたまま、裾から蝦蟇口を取り出しごそごそと弄り始めた。おそらくは言葉通り、掛け金を出すつもりなのだろう。

「とか言いつつ音羽もすっかり賭けてるじゃないか。ちなみに私は『AQUE』に十銭だ」

『同じだろ!』

音羽に呆れつつも更に乗ったリーゼロッテの一言に、場の全員が揃って突っ込む。魔女はそれを踊ってスルーし、部屋の奥に置かれた玉座へと振り返った。退廃的な意匠を施された王の座、その主であり魔女の相棒はといえば

「……魅月、何をしている?」

「あ?見りゃわかるだろ?暇潰しだ」

「……そうか」

どうやら魅月^{彼女}の脳内では、身体を地面に対して垂直にした指立て伏せは単なる暇潰しの範疇らしい。相変わらずよくわからない、というかわった少女だ。

……そういえば、魅月が鍛え上げた連中はどいつもこいつも、バカ

みたいに身体能力が高かったな……。

「魅月さん、瑠璃さん知りませんか？」

戌子や摩理、音羽を眺めながら遠い目をするリーゼロッテをよそに、キリノが魅月　この異質な集団を纏め上げるリーダー長に質問する。汗一つかかず玉座に腰掛け直した魅月は、長い黒髪と漆黒のロングコートを整えながら口を開き、

「あいつなら白玉楼だろ。咲西行妖かない桜とやらにずいぶんご執心だったみたいだしな」

仲間の消息が知れると同時に、張り詰めていた空気が緩む。しかしそれは安堵のそれではなくむしろ、

「なーんだ、みんな外れか」

「まあまあ……、コーヒー淹れたからひとまず落ち着こう？」

頬を膨らませながら掛け金を仕舞う戌子の眼前に、湯気を上げるマグカップが差し出される。視線で追ってみれば、お盆を抱えた少女が隣に立っていた。

ニソックスにプリーツスカートと現代風の服で身を包み、淡い緑色のセミロングヘアは、赤いリボンで軽く結われている。小柄な身体を覆うのは、一回りも大きな漆黒のロングコート。浅上詩歌 儂げな印象と浮き世離れた印象が同居した、どこか危うげな少女だった。

「サンキュ、詩歌。相変わらず気が利くな」

「えへへ……、そんなことないよ」

我先にとマグカップを受け取りながらの魅月の言葉に、表情をほころばせる詩歌。気を利かせたキリノが追加分を用意し、場を穏やかな空気が包み込む。が、

「……お前達には緊張感というものがないのか？」

その空気は五分と経たず、冷たく静かな声によって切り裂かれた。

リーゼロッテの視線の先、暗がりから歩いて来る一人の影がある。この暗い空間において最も闇と同化していた、No.3の伊織貴瀬だ。

瘦身の長軀を覆うのは、いつそ不気味ささえ感じさせる漆黒のスーツ。短い銀の髪は周囲を威圧する鈍い輝きを宿し、縁無し眼鏡の奥から覗く金眼は、それだけで人を殺せそうな程に鋭い。この世の全

てを己の敵とし、ただ力で押し伏せる　そんな殺気を纏っていた。

「いつあのスキマが気付くかもわからん、すぐにでも動いた方がいいのでは」

「大局を見過ぎて目が腐ったか？足元が疎かだぞ貴瀬」

神経質そうに革靴で床をカツカツと鳴らす貴瀬だが、魅月の発言に口を噤む。否、正確には噤まざるを得なかった。

「始めたのは他ならぬこのオレだ。方針も全部オレが決める。口を出すな、嫌なら消えろ」

そう口にし顔も向けずこちらを見遣る魅月は、口調こそ変わらないが纏う空気を一瞬にも満たぬうちに変質させていた。赤く禍々しく輝く瞳に込められているのは、敵意、戦意、悪意、殺意、ありとあらゆる負の感情。貴瀬の存在が全てを敵と見做すなら、魅月のそれは全てを殺戮せんとす狂気の魔眼。殺し、戮し、塵し、なお足りぬ

今この瞬間場の全員の五臓六腑を切り裂いてもまだ足りぬ
尽きることなき負の深淵に、貴瀬だけではなくキリノや戌子達も圧倒され、リーゼロッテですら冷や汗をかいていた。

「元より最初のターゲットは妖怪桜と亡霊の姫だ。実質あいつが一番槍　義務感にしろ私事にしろ、やる気があるに越したことはな

い。違うか？」

玉座に腰掛け直しながらそう尋ねて来る魅月に、どうかJud、とだけ頷きを返す貴瀬。それこそが貴瀬やリーゼロッテを差し置いて、彼女がトップに君臨している理由だった。

一瞬だけ彼女が見せた、その仮面の内に秘めた本性。仲間をよく見る目、天性のカリスマ、それらは彼女をリーダーたらしめるに十分値する。

Jud・と満足げに頷きを返し、魅月はマグカップを口に運ぶ。温かな液体を嚙下すると、程好い苦味が口の中に広が

「ぶふお!？」

違和感を感じた瞬間、堪らず魅月はコーヒーを噴き出した。醤油を直に飲んだ時のような、表現しがたい感覚に襲われたからだ。

「なん、これ、しょっぱっ!？」

「あーやっぱりかー。はい、勝ち分はリーゼロッテと私で山分けー」

咳き込み口元を拭う魅月とは対照的に、戌子は冷静に掛け金を配布して行く。没収されて行く財産に、卓袱台のメンバーが悲痛な声を

上げていた。

「うー、いい加減塩と砂糖の区別くらい付くと思ったのですが……」

「現実が非情なのは今に始まったことじゃないでしょう？ 気にしないことね」

「私達……、またやつちやった……」

「ド、ドンマイです。失敗は次の成功に繋がりますからっ」

各々が感想を零す中、意外なことに甘党である魅月は謎の唸り声を上げている。誰一人として彼女のフォローに回らない辺りが、らしいと言えばらしいだろうか。

「……頭が痛い」

やがて頭を抱えた貴瀬が一言漏らすと同時、騒がしい集団に背を向けた。やれることをやっておかねばと、そう言いたげな表情で。

世界の終焉おわりを願う者達の集う場所、アナグラ。そこでは作戦の決行日でも、バカみたいな賑やかさを保っていた。

冥界。閻魔による死後の裁判を受けた者が転生、或いは成仏する順番待ちの間、幽霊として住む世界。顕界と同様に四季があり、春は桜、秋は紅葉で美しく彩られる。今は四月の第三週　綺麗に植えられた桜の木々は、未だ薄桃色の花弁を咲かせていた。

そんな桜並木を歩いて行く、一人の黒い影の姿がある。漆黒の和服で身を包んだ、長い茶髪が特徴的な少女だ。月明かりに照らされた肌は雪のように白く、花びらが飾り上げた空間を舞うのは、幽体の如くおぼろげにその姿を見せる黒い揚羽蝶。不吉な印象を与えるそれらだが、不思議なことに悪寒は感じない。恐らくはその少女が、並外れた美しさを誇っていたからだろう。

いつそ、この世ならざる者のように。

「ほとけには　桜の花を　たてまつれ　我が後の世を　人とぶらはば」

歌うように短歌をそらんじたその少女は、眼前にそびえ立つ一本の大樹を見遣る。樹齢千年はあろうかという桜の樹には、しかし一点の彩りもない。壮観な周囲との対比もあってか、その桜はかなり浮いていた。

しかしそれも当然のことだろう、何せこの桜は妖怪桜。富士見の娘

によって封じられた、誘蛾灯のように人を引き寄せる魔性の美。

見る者を死に誘う、魔の桜なのだから。

「咲かない桜、か……」

死そのものとも言えるそれを前にしても、少女は至って平然としている。風のない湖面のような穏やかさを感じさせる笑みを浮かべ、少女はそっと幹に触れた。

「花は咲いてこそ意味がある。花開いて風に散り行くが定め。なら……」

ドクンと脈打つ。死が胎動する。亡き者と成り果てた少女の鼓動と、絡み合うようにシンクロして行く。まるで初めからそう在ることが定められていたかのように、少女と大樹は一切の違和感を抱かせることなく、一枚の絵になっていた。

止まり木を求めた無数の黒揚羽によって、いつしか漆黒の花を咲かせた大樹。禍々しくも美しい死^{それ}を見上げた少女は。

「一緒に咲かせよか。終わりの始まりを告げる祝宴^花を、な」

薄ら寒さを与える、笑みを浮かべた。

幻想を覆う闇。払い手の語る真実に迫る。

昨今幻想郷全土で、一風変わった現象が起きている。人妖を問わず身体を侵し、力を吸い上げるといふ深遠の闇の存在だ。幻想郷の管理者である八雲紫が深遠なる闇と名付けたそれはここ最近、爆発的にその被害を大きくしており、巷でまことしやかにその噂話を囁かれている。

今までの事態を考察すると、この闇の感染には大きく分けて二つのパターンがある。一つは力なき者。主に人間や名も無き妖怪達の身体を覆い、その生命力を吸い上げるといふ従来のもの。こちらに關しては三日前より発見の報告がなく、ひとまず脅威は去ったと見て問題ないだろう。

問題はもう一つ。強力な妖怪に感染するパターンの方にある。このタイプの闇は十一日前が初の確認だが、既に二件も同じ事件が起きている。無意識を操る地底の覚り妖怪、ありとあらゆるものを破壊する紅い館の吸血鬼。どちらも元来の力が凄まじく、並の者では一瞬で葬られてしまうだろう。何より恐ろしいのはこのタイプの闇が、『感染した妖怪の力を爆発的に強化させる』という点にある。博麗の巫女や異変解決屋の魔法使いですら手を焼く戦闘力に、妖怪の賢者の能力ですら干渉出来ない闇。そんなものを前にすれば、誰であろうと匙を投げるしかないだろう。

しかし現状、取り立てて大きな被害は出ていない。それは何故か？
答えは単純明快だ。

この闇に対抗出来る者を、八雲紫が呼び寄せたからである。

彼の者の名は蒼衣・シュヴァルツシルト。何の因果か深遠なる闇と
全く同質の闇を操る能力者だ。その力は紛れも無く本物であり、先
述した二件が解決したのも彼の活躍があつてのことである。

多少知恵の回る者なら、彼こそがこの事件　深遠異変の主犯では
ないかと疑うだろう。実際この世に全く同じ能力を持つ者は存在し
ないというのが定説であり、ならばこそその可能性は濃厚。言い逃
れは不可能だ。

しかし私はとてもそうとは思えない。取材して見て来た彼の
妖怪性は、善良な一般市民のそれではない。ましてや幻想郷には、
彼の妹である人形遣い　アリス・マーガトロイドが在住している。
口にこそ出さないが、彼が彼女を気に掛けているのは明々白々たる
事実。幻想郷内での彼女の立場を危うくしてまでこんなことを実行
する理由など、彼にはないように思えた。

ならば真相はただ一つ。彼の仕業に見せ掛けようとしている何者が
犯行という可能性に絞られる。単にそれが目的なのか、まだ裏があ
るのか　詳しいところは未だ不明だが、用心に越したことはない
だろう。

現在本記者こと射命丸文、並びに姫海棠はたてが積極的な情報提供

を呼び掛けている。この記事を読んだ方、些細なことでも知っていることがあれば、ぜひご一報を。有力な手掛かりを提供してくれた方には、山の上の神社のお守りを進呈致します。

どうか、どうかご助力を。この薄気味悪い異変 命に関わる異変を、終わらせる為に。

「……どこの三流ゴシップ記事だよ」

読み終えた新聞 文々。新聞と書かれたそれを折り畳みながら、少年は呆れと苦笑の混じった声を漏らす。郵便受けから取って来てくれた上海の頭を撫でつつ、意見を聞こうと彼 蒼衣は正面に視線を移した。

「まあ普通はそう思うわよねえ……」

「あながち的外れでもないのがまたねえ……」

向かいのソファーに並んで座り、テーブルに広げた花果子念報かかしなんぼうと書かれた新聞を読んでいた二人 アリスと鏡花も溜め息を漏らす。いかに胡散臭くとも、書かれていることが全て真実なのだから苦笑いするしかない。似たような感想を抱いたのか、鏡花の隣で記事を

覗き込んでいた菅蒲も口を開き、

「……………これ、効果、ある？」

「あんまり意味ないような……………」

蒼衣の隣からこいしも追従し、場に不信の雰囲気広まって行く。三日掛けて上がって来たものがこれ。あの少女達は一体何を考え、このような記事を書いたのだろう。思わず考え込む蒼衣達に、

「怖い話や都市伝説みたいな噂話って、なんで広まるか知ってる？」

そんな問い掛けを放って来たのは、キッチンで朝の洗い物をしている神綺だ。何の前触れもない唐突な話題に、一同は首を傾げるしかない。そんな様子を笑みで見守りながら、

「答えは簡単。面白いから。誰かと話題を共有するのに、一番手っ取り早いからだよ。……………例え、真偽が定かではないとしても、ね」

神綺の口から聞かされた答えに、蒼衣とアリス、鏡花はああと頷いた。そういつた噂話の伝播速度は、目を見張るものがある。元より信じ難い深遠なる闇のこと、それっぽく纏めてやれば、その存在は怪談の如くあつという間に人々に知られて行く。語らずにはいられ

ない　　人というものには、そういうた習性があるのだから。

「情報が欲しいのは確かだけど、周囲に知らせて予防するのも大事。そもそも感染させないのが一番早いからね」

文ちゃんもわかってるみたい、と微笑む神綺に、菖蒲とこいしもようやく納得する。情報を広めることで話半分になでも警戒させ感染を防ぎ、仮に情報が来れば儲け物　　神綺や天狗の少女達は、そういう考えで動いていたのだ。

「じゃあ、適度に期待しつつ向こうの出方待ち、ってこと？」

「果報は寝て待て、だよっ」

こいしの首を傾げながらの問いに、神綺はニコニコと人差し指を立てながら答える。やれることはやった、後は結果を待つだけ　　今までの事件によりマトモな生活も送れていないし、適度に気を張りつつ英気を養えということだろう。神綺達の意図を汲み取り、リビングの空気が徐々に弛緩して行く。と、

「帰ったぜー」

「ただいまー」

扉の開く音と共に、外出中だった魔理沙とフランが帰宅する。所用で少し出ていたフランを、魔理沙が迎えに行っていたという訳だ。

「おかえり」

「ただいまお兄ちゃん」

飛び付いて来たフランの頭を、わしゃわしゃと撫でる蒼衣。嬉しそうにより一層擦り寄る紅い妹と、むっと対抗するように兄に張り付く緑の妹。そんな二人に挟まれる主に式神は溜め息をつき、

「で、どーすんの？」

「んー……、アリスや母さんの手伝いか、こいしやフランの遊び相手が妥当かなあ……」

鏡花の質問にそう答え、蒼衣はアリスに振り返る。が、当の本人が顔を赤らめ視線を逸らしてしまった為、彷徨った視線は最終的にキッチンへ。そこにいるのは食器洗いを済ませ、タオルで手を拭っている神綺だ。

一週間以上家を空けていた為、炊事洗濯掃除にゴミ出しとやるべき

ことは山程ある。この三日でほとんど片付いた　というより神綺が片付けてしまった　のだが、それでも何もすることがないと言えは嘘になる。出来る範囲で手伝うかと、蒼衣が腰を上げた瞬間、

ピンポーン。

『おっ。』

『えっ。』

『っっ。』

来客を告げる唐突なチャイムの音に、全員が疑問の声を上げた。…余談までに補足すれば、上から蒼衣と鏡花と魔理沙、アリスと神綺、菖蒲とこいしとフランである。

ピンポンピンポーン。

「はいはい、今出ます」

玄関の方に声を飛ばしながら、くっついたままの妹達を引きずり歩き出す蒼衣。一分と間を置かず再度鳴らす辺り、どうやら来客は気

が短いようだ。それなりに広いマーガトロイド邸だ、チャイムの音もよく反響し

ピポピポピポピポピポピポピポピン。

『やかましいわ!!!』

居間のメンバーを含めた全員で総ツツコミを入れつつ、チャイムを高速連打する来客^{馬鹿}の姿を拝むべく蒼衣は扉を勢いよく開ける。朝日が燦々と降り注ぐ魔法の森、視線の先にいたのは、

「大ニユースですよ蒼衣さん!」

「人ん家のチャイム十六連打するバカがどこにいる」

「あいたあ!?!」

相手が顔見知りだったこともあり、とりあえずツツ^{チョップ}コミだけは入れておいた。

「で、なんだよ大ニユースって」

ともあれ気を取り直し、来訪者射命丸文をリビングに上げた蒼衣は疑問を投げ掛ける。さすがに悪ふざけでピンポン連打するような妖怪人ではないはず　と思いたい　だが、だとすれば何の用があつて訪れたのだろうか。記事の感想を聞きに来た、という訳でもなさそうだが

「つべこべ言わずにこちらをご覧ください!」

冷め気味な蒼衣達とは対照的に、文は興奮した様子で一枚の写真をテーブルに勢い良く叩き付けた。先程と同じようにして、蒼衣達は輪になってその写真を覗き込む。そこに写っていたのは

「……桜?」

「だよね?」

菖蒲とフランが言う通り、被写体は大きな桜の樹だった。不鮮明なのは相変わらずだが、見れないという訳でもない。薄い月明かりが照らされた齡千年を超えるであろう大樹には、しかし一輪も花が咲いていない。今は四月の半ば程、背後に見える他の桜達のように、咲いていなければおかしい時期だ。見たところ枯れている訳でもな

さそうだし、一体何故

「……見て」

蒼衣がそんな感想を抱く中、神綺がふと気付いたように写真の一点を指差した。釣られるように全員がその指先を追い、それを視界に捉える。

瞬間、背筋が凍った。

大樹の幹に寄り添うようにして、一つの黒い人影があった。黒い蝶を周囲に漂わせるその姿は、幻影のような儚さを感じさせる。この上なく絵になってはいるが、亡霊染みたその姿に不気味さの方が先走るのは致し方ないことだろう。

その少女は長い茶髪を風に揺らし、黒い着物を身に纏っていた。顔は陰になって見えないが、二つだけわかることがある。

一つは少女がその身から莫大な力を溢れさせ、周囲を己の靈力で染め上げていること。そしてもう一つは

少女がその口元を、笑みの形に歪めていることだ。

「何……、これ……」

こいしが呆然と眩きを漏らし、身体を震わせながら蒼衣へと縋り付く。フランに至っては口も開けないのか、碎けるんじゃないかというくらいに蒼衣の腕にしがみついていた。それも仕方ないだろう。端から見ても少女の力は、

この場の全員を軽々と上回っていた。

「手加減なしの菖蒲と五分……、いや、ギリギリ押し勝つくくらいの力は有りそうね……。馬鹿げてるってレベルじゃないわ」

「亡霊どころの話じゃない……。時代が時代なら神霊として祭り上げられてもおかしくなさそう……」

鏡花は彼我の戦力差を分析しながら苦々しげに表情を歪め、アリスの顔色も心なしか青ざめている。詳細不明の神綺を除くとしても、曲がりなりにもこの場にいるのは、全員が一騎当千の実力者だ。だからこそ解ってしまう。この写真の少女が秘めた、あまりにも強大過ぎる力が。今までの感染者や暴走した菖蒲を凌駕する、暴風染みた靈力の奔流が。

更に言えばもう一つ、蒼衣だけが気付いた要因ファクターがある。少女の色に呼応しているのか、その身からは覚えのあり過ぎるあるものの反応を感じ取れた。言うまでもない。深遠なる闇ダークマターだ。しかも、

……こいつ、暴走していない……！？

少女に宿った深遠なる闇は、それこそ写真越しにも感じ取れる程に、こいしやフランのそれよりも強く身体を侵食している。にも関わらず彼女は暴れ回ることなく、平静な自然体を保っているように見えた。

「……これを、どうで？」

「つい昨日、冥界で。末端の天狗が撮影したものをはたてが見付けました」

文からの返答を聞いたことで、蒼衣の疑念は確信へと変わる。彼女が従来感染者と同じなら、天狗程の妖怪の目を欺くのは不可能だ。つまり、

彼女は深遠なる闇の莫大な力を、自らの管制下に置いている。

「……どう思う？」

「聞く意味ある？」

視線だけを動かしこちらを伺う神綺に、蒼衣は思わず笑みで答えてしまふ。自分達が束になっても敵うかどうか怪しい謎の少女、しかも深遠なる闇のオマケ付きダークマター　笑いでもしなければやっていられない。

ようやく手掛かりを掴んだと思う反面、こんな人外を相手にどうしろというのかとも思う。少女の周りを舞う蝶が、まるで死の使いのように見えて来る。仮に彼女と相對した場合、どうすればアリス達を守れるのか

「ああ、ここにいたか」

負のスパイラルに沈み込んで行く思考は、しかしこの場にいない者の声によつて断ち切られた。全員が振り返った先、聞き覚えのある不気味な音と共に空間に亀裂が走る。無数の目が覗く空間の境界　そこから姿を現したのは、一人の少女だった。

ゆつたりとした長袖ロングスカートの服に青い前掛けという中華風の服装は、古代道教の法師を思わせる。髪は金のショートボブで札の張られた白い帽子を被っているが、何より目を引くのはその腰部扇状に伸びる金色の狐の尾が九本　九尾の狐という単語が浮かぶのに、そう時間は掛からないだろう。よくよく見れば帽子には、耳と思われる二本の尖がりがあった。

『な、藍！？』

「久しぶりだな。先月の宴会以来か？」

驚いたように言葉を八毛らせるアリスと魔理沙に、砕けた口調で話し掛ける九尾の少女。二人のことを気に留めず、彼女は蒼衣へと向き直る。

「君が蒼衣・シュヴァルツシルトだな？初めまして、紫様の式神の八雲藍だ」

一礼と共に差し出された手に、蒼衣も反射的に応じる。キビキビとした動作からは、真面目な印象を受けた。

「紫さんの？ってことは……」

「ああ、大方予想通りだ。言伝を一つ預かって来た」

ふと自己紹介の中で引掛かったワードを聞き返すと、頷きと共に藍は古代中国の官職などがよくやる、腕を互いの袖の中に隠すような形で腕を組む。紅魔館で別れて以来姿を見ない紫だが、神綺曰く解決に尽力しているのだとか。ならば深く詮索はせず、こちらはこちらに出来ることをすればいい。そしてその『出来ること』とは

「『冥界に向かいなさい』、とのことだ」

藍の回答と同時、リビングの空気が凍った。

「…………理由を聞いても？」

「怪しげな人影が目撃されたのもう聞いたか？それ単体ならまだいい…………、いや、よくはないんだが。ともあれ場所が問題なんだ」

ドンピシャ過ぎる話題に場の全員が口を噤む中、蒼衣がどうにかそれだけを聞き返す。テーブルに置かれた文の写真を横目にしつつ、藍は重々しく口を開いた。

「あそこには西行妖というちょっといわくつきの妖怪桜があつてな…………。これだ」

ごそごそと袖から取り出されたのは、一枚の古ぼけた写真。写っているのは金髪の少女と、桜色の髪をした少女。そして二人の背後に立つ、儂げな印象を感じさせる桜の樹。満開と言うに相応しく咲き誇っているが間違いない、この桜と文の写真の桜は

「……完全一致じゃない」

「……ピンチ？」

いわくつきの妖怪桜と、その付近で目撃された謎の少女。不穏な現実と暗い予想に、背筋を冷たい汗が伝う。この場に霊夢がいなくとも、全員が口を揃えて言うだろう。嫌な予感がする、と。

「冥界、ねえ……。どんなところ？」

「裁判を受けた死者が転生、もしくは成仏する順番待ちの間幽霊として暮らす場所だ。顕界。こちらの世界と同様に四季があり、今の時期だと桜が見頃だったか」

そんな本心に蓋をして押し込め、誰にともなく蒼衣は質問する。その問いに真っ先に答えたのは、当然というか藍だった。死後の世界というイメージの割には、今いる世界とそう変わらないらしい。…
…背筋は寒くなりそうだが。ともあれ、

……迷ってる暇はなさそうだな……。

文の写真が撮影されたのは昨日。日数が経過すればする程、手掛かりは遠退いて行くだろう。事態はいつ動き始めてもおかしくないならば答えは一つだけだ。

「で、どうやって行けばいいんだ？冥界。まさか死んで下さいとは言わないよな？」

「まさか。顕界と冥界の境界は、とある異変以来薄くなっている……」。生身の人間でも出入り出来るぞ」

蒼衣の皮肉混じりの問い掛けに、藍も不敵な笑みと共に答える。……簡単に出入り出来るなど冥界がもはや冥界ではない気もするが、振り返ったアリスの瞳が気にしたら負けだと語っていたので、深く突っ込むのはやめにした。人生は往々にして理不尽や矛盾に溢れているのは、身を以て知っているのだから。

「冥界は紫様のご友人が管理しているが、万が一ということもある。……気を付けてくれ」

「死なない程度に頑張ることにするよ」

気遣うような視線を向けて来る藍に、蒼衣は苦笑混じりに答える。今までだって散々無茶をやらかして来たのだ、今更気にする程のことでもない。この異変を解決しない限り、幻想郷の住民達に安息の

「二文字はないのだから。」

「アリス、魔理沙、道案内頼めるか？」

「ええ」

「おう、任せとけ」

ゆっくりと立ち上がりながらの言葉に、二人の魔女は頼もしく答える。それを見て安心したのか、藍はほんの僅かに微笑み、

「最後に蒼衣。」「武運を」

その一言だけを残し、再びスキマへと消えて行った。

「……じゃ、行きますか。冥界」

境界の残滓を見送り、振り返った蒼衣は異変解決の始まりを宣言する。暗にここで降りてもいいんだぞと告げる彼の声にしかし、

『おー！ー！ー！』

七人の仲間達は、手を振り上げ頼もしく答えたのだった。

第三十七話「来訪者達」(後書き)

のっけから飛ばしてます、ハイ。今までほのぼの過ぎたんで反動が・
・・、ね(遠い目
結構喋ってた黒幕達ですが、今後はちよくちよくと出て来ます。理
由は活動報告参照。

次回、あのお方が登場。

第三十八話「半人半霊VS剣神妖狐」(前書き)

お待たせしました、三十八話です。

ノンストップ厨二+川上節。なんのこっちゃという人は読めば多分わかると思う)あ
ではごーぞー。

第三十八話「半人半霊VS剣神妖狐」

『……………帰りたい』

「ギブアップ早いなお前ら」

背後で倒れ込むような音を聞き、振り返る間もなく聞こえる約二名の声。呆れ混じりに視線を向ければ、息も絶え絶えな妹こいしとフラン達がそこにいた。

マーガトロイド邸を出発しおよそ十五分。顕界と冥界とを隔てる結界を越えた蒼衣達の前に現れたのは、果ての見えない大階段だった。大陸の意匠が施された急な石段は、目算でも軽く千単位の段を誇る。終わりの見えない戦いにげんなりしつつも、愚痴ったところでどうしようもないので登り始めた訳だが。

「疲れたー……………、もう歩きたくなーい……………」

「お兄ちゃん……………、おんぶしてー……………」

「やれやれ……………」

石段に座り込むこいしと、俯せに寝そべったフランという醜態を、

なんだかんだで面倒見の良い彼が看過することなど出来るはずもなく。溜め息と共に歩み寄る蒼衣に、示し合わせたかのようにほぼ同時に擦り寄る二人。甘える気力は残っているのかと感心する反面、若い二人にこの苦行じゃ仕方ないとも思う。大の大人でも根を上げそうなそれを前にすれば、人間より身体能力が優れた妖怪とはいえ、精神の方が先に参ってしまうだろう。むしろここまでよく頑張った方だ。

そんな二人を見兼ねたのか、最後尾を軽快に歩いていた神綺が口を開き、

「ちょっと休憩しよっか？」

「別に構わないけど……、このペースで登ってたらゴール出来るのは日没後よ？」

ふうと息を吐き出しながらのアリスの言葉に、蒼衣は進行方向未だ終わりの見えない階段を仰ぎ見る。休憩で体力を回復出来たとしても、気力ばかりはそうもいかない。二人に合わせていたら休憩の頻度が増えて行くのは、誰の目にも明らかだ。しかし置いて行く訳にもいかないし、どうしたものか

「よ、よーし。頑張るぞー」

「お、おー」

と、急に立ち上がったこいしとフランが、ぎこちない所作で腕を振り上げながら階段を登り始める。二人の性格と冥界という場所の特性、日没後というワード。それらを加味して考えれば、自ずと答えに辿り着く。

「……お前らそれでも妖怪か？」

『それとこれとは話が別なの!!』

半目で尋ねる蒼衣に対し、同時に叫ぶように答える二人。恐怖心をごまかそうとしているのだろうが、足がガクガクと震えて一歩も進んでいない辺りまだまだ子供である。……別に我慢しなくてもいいのになあとか内心で思ってしまう蒼衣も五十歩百歩だが。

ともあれ意地っ張りな妹達を多少強引に抱き寄せ、安心させるように頭をわしゃわしゃ。表情を緩める二人に苦笑いしつつ、

「最悪こいつらは俺が抱えて行くとして……、アリス達は大丈夫か？」

「まあなんとか。それなりには鍛えてるし」

振り返りながらの蒼衣の問いに、拗ねたように答えるアリス。しかし蒼衣がそれに気付く訳もなく、視線は隣の魔理沙へと移る。それに気が付いたのか魔理沙は上空を見上げ、

「飛んで行ければすぐなんだけどな……」

「それは言わない約束だろ……」

何が起こってもおかしくない為、目立つような行動は避けるべき

神綺の意見は確かに理に適っているが、さすがに疲労が溜まると愚痴りたくもなるか。飛んで行けば十分と掛からないらしいのだが、リスクとリターンを天秤に架けた判断の為強く言うことも出来ない。

「……てかお前らピンピンしてんな。脳筋の鏡花はともかく菖蒲は平気か？」

「誰が脳筋よ誰が」

マイナスに傾く思考を打ち切り、反対隣の式神達に声を掛ける。自らの扱いに不満があるのか鏡花が突っ掛かって来るが、

「まずはその兎飛びを止めてから言え。説得力皆無にも程があるぞ」

えー、と渋々立ち上がる鏡花はこの十五分間、文字通り兎飛びでこの石段を上がっていた。修業だと言うのでスルーしていたが、冷静に考えれば頭おかしい人種認定は免れない。汗すら掻いていない辺り、相変わらずというかなんというか……、脳まで筋肉で出来ているのではないかと不安になる。

ちなみにそんな馬鹿の隣の菖蒲はといえば、

「……疲労、呪ってるから、平気」

「……お前も大概ぶっ飛んでるよなあ」

蒼衣のぼやきに無表情でブイサインを決める菖蒲だが、やっていることは無茶苦茶としか言い様がない。速度や攻撃力だけじゃ飽き足らず、疲労まで呪うなど誰が想像出来るだろう。もしかしてこの少女に不可能などないんじゃないかと、嫌な汗が背筋を伝う。

「……母さん？何してるの？」

「ちょっと裏技」

ふとそんな声に視線を戻せば、しゃがみ込んだ神綺が何やら足元で手を動かしていた。好奇心の赴くままに見てみれば、彼女は赤い液

体 恐らく血文字だろう で何かを書いていた。

「……『線路』？」

不思議そうに首を傾げながら、こいしが書かれた二文字を読み上げる。しかしここは階段であり、間違っても電車の通る場所ではない。全員揃って頭に疑問符を浮かべるが、神綺の奇妙な行動はまだ終わりではなかった。

どこからともなく取り出されたのは、俗に言うレジャーシート。花見や遠足の際などに地面に敷く、カラフルなタイプのアレだ。鼻歌混じりにシートを広げ、神綺は再度文字を書く。鮮やかな紅で描かれるのは、

「『電車』、つと」

外の世界や魔界での移動手段 電気を動力にレール上を走る鉄道車両の名を刻み、神綺はハンカチで指を拭う。先程まで生命の証を流していたにも関わらず、その白い手には傷一つない。不可解な出来事の連続に戸惑う中、

「 展開、起動」

神綺の静かな声と同時に、血文字が青と白の淡い光を点す。染み込む

ようにして文字が消え、そして変化は唐突に現れた。

レジャーシートが、突如宙に浮いたのだ。

『……はい？』

七人の声が綺麗にシンクロするが、それも無理はないだろう。種も仕掛けもない普通のレジャーシートが、いきなりふわふわと浮遊し始めたのだ。その様はアラジンの魔法の絨毯を想起させるが、浮いているのが安っぽいレジャーシートの為かどこかシユールさを伴っている。マジックシヨールならよそでやって欲しいが、生憎とこれは現実だ。

「ん、バッチリ ほらほら、みんな早く乗ってー」

『いや、あの、お母様？』

満足げに頷いていた神綺は総ツッコミを受け、どうかしたのかと言わんばかりに首を傾げる。どうやら本格的にわかっていなさそうなので、

「……何これ？」

とりあえず代表して蒼衣が全員の心中を代弁するが、問われた神綺は頭上に疑問符。みんなの視線を追った先、未だふわふわしたままのレジャーシートを視界に収め、

「何って……、見ての通り電車だよ？」

『わかるかつ！！』

再度総ツッコミを受けるが神綺はふえ？とマジボケ状態。これ以上は聞いても無駄になりそうなので、七人はどこか遠くを眺めることで答えとした。長いものには巻かれてなんぼである。

「ほらほら、騙されたと思って乗ってみて」

そんな心中に気付いていないのか、神綺は笑顔で手招き。なんとも言えない微妙な表情を浮かべる中、やはり最初に出るのは蒼衣だ。一人だけ男というのもあるが、仮に落ちそうになっても重力操作があれば難を逃れることも出来る。

神綺以外の全員が固唾を飲んで見守る中、蒼衣は慎重に片足を乗せた。感触は当たり前だがレジャーシートそのもので、僅かに凹んで

いることから体重を掛けていることがわかる。

眼前の光景が幻覚でないことを脳内で三回程確認し、蒼衣は大きく深呼吸。重力操作がいつでも可能なことを心の頼りに、勢いを付けて一気に飛び乗る

が、蒼衣がそこから落下することはついになかった。レジャーシートはしっかりと蒼衣を支え、なおもふよふよと宙を漂っている。

『……………ドッキリ?』

「だったらどれだけ気が楽か……………」

レジャーシートは階段に対し平行に浮遊しているが、垂直に立つても転がり落ちることはない。足場になんらかの力が働いていると見るべきだろうが、詳細は全くわからない。何しろ、

……………俺もアリスも、母さんの能力を知らないんだもんな。

夢子やサリエル達は知っているらしいが、そのことに関しては一切口を開こうとしない。ただ魔界という一つの世界を作り上げた以上、その力は相当なものはずだ。今までの戦闘で負った負傷もいつの間にか治されているし、相変わらず雰囲気に対して底が知れない。

「地面との角度とか考えずに足場を下だと素直に認識するのがコツだよー」

「慣れがいるけどな……」

蒼衣生贄が無事だったこともあってか、残りの六人も恐る恐ると乗って来る。神綺のアドバイスもあってか、蒼衣が手を貸すまでもなくすんなりと済んでしまった。

「じゃ、しゅっぱーっ」

満足げに頷いた神綺が腕を振り上げると同時に、ゆっくりとレジャーシートが動き始めた。階段との距離は保ったまま、上へ上へと登り始めたのだ。山の中を登る路面電車というのが一番近いだろうか、速度は緩やかだが明らかに徒歩より速く階段を駆け上がった行く。

「わー……、すごーい……」

「……不思議」

ちやつかりと蒼衣の隣をキープし感嘆の息を漏らすこいしや、首を傾げながらレジャーシートをぺちぺちと叩く菖蒲の様子は見えて微笑ましいが、しかし根底には不明瞭なしこりが残っている。一体

どんな機構カラクリなのか……、気にならないはずがない。

「ねえねえ、これってどんな仕組み？」

思うことは同じだったのか、蒼衣の反対隣をキープしていたフランが背後の神綺に質問する。対しマジックの仕掛け人は、

「ふふ、内緒」

あくまでタネは明かさないと宣言した。

えー、と頬を膨らませたフランが神綺の方に移動して行くが、蒼衣は既に追究を断念していた。ああ見えても母は頑固で、あの柔らかな雰囲気であらゆる言葉を押し止める。いくら聞いたところで暖簾に腕押し糠に釘、柳に風と受け流すだろう。故に、

……ホント、なんなんだろうな。これ。

心中で疑問を零しつつも、蒼衣は本来の目的　大階段の先へと視線を移した。その果てはまだ見えないが、終わりはそう遠くない。

「……あっさり着いたわね」

地面と平行になったレジャーシートからふわっと着地し、拍子抜けしたように鏡花が口を開く。目の前には大きな和風の門があり、実質的な冥界への入口だということは誰の目にも明らかだった。

「襲撃されてもおかしくないとは思っていたが……、杞憂だったか？」

「警戒するに越したことはないけど、肩透かし感は否めないわね……」

レジャーシートという足は確保しつつも、全員警戒は怠っていないかった。およそ十分程周囲を索敵していたが、それらしい反応はゼロ。結果あつという間に頂上に着いてしまった訳だが、何だか違和感が拭えない。どうしたものかと考える蒼衣の思考は、しかし中断せざるを得なかった。何しろ、

「おおおおお兄ちゃん、ぜぜぜぜ絶対に離れないでね!？」

「いいいいいいいきなり脅かしたりしたら、どどどどどかーんしちやうんだからね!？」

現在両脇を震度3×2で固められているからである。

「お前らゴブリ過ぎね……」

というかそんなにくつつかれると離れる以前に歩けないのだが、さすがにこれは言わないでおこう。今でもガタガタ震えているのに、この上半狂乱になられたら面倒だし。なんだが振動がマツサージチエアを彷彿とさせるが、当然ながら凝りを解す効果などない。ともあれ、

「じゃ、行こっか」

「……出発」

神綺と菖蒲の声に頷き、蒼衣は妹達を引きずるようにして歩き出す。踏ん張って抵抗しているような感触が両サイドにあったが、当然無視して歩みを進めた。シユール極まる光景に呆れつつ、アリスや魔理沙達も後を追う。しかし、

『わあ………』

その歩みは程なくして、視界を埋め尽くす大量の桜によって止まっ

てしまった。

「……桜、綺麗」

「そついや藍が見頃だとか言ってたな……」

「……確かにこれは」

「見惚れちゃうよね……」

空を覆い隠す程に生い茂った桜花を見上げ、感嘆の声を上げる一同。花鳥風月というのは、まさにこういったもののことを指すのだろう。今までに見て来たそれとは比較にならない程、その桜は美しく、風が吹けば飛んで消えそうな儂さが、その一時を見守れることに喜の感情を衝き動かす。この光景がもつと世に知られて欲しいとも、逆に秘されたままであって欲しいとも思える二律背反。そんな風に思わせる、この世で最も美しく儂い桜だった。

そんなことを思う蒼衣の視界、右の隅の方に白い何かは漂っている。首を動かし視界の中央に捉えると同時、桜の感想は一瞬ですっ飛んだ。

大きさは子供と同じくらいだろうか、白く半透明な姿は人魂を思わせる。重力に逆らいふわふわと浮かぶそれはいつの間にか数を増やし、桜に魅入られたのか周囲をふよふよと漂っている。……ああ、

いい加減認めよう。

それは、見紛うまでもなく幽霊であった。

『ぎゃあああ出たああああ!!』

感染時よりも速いんじゃないかと思われる速度で、兄の背後に隠れる妹二人。そんな少女達とは対照的に、蒼衣は気負った様子もなく幽霊に手を伸ばした。

すり抜けるかと思ったが、意外なことに指先にはプリンに似た柔らかかな感触があった。イメージとそう変わらないひんやりした触感だが、長く触れると凍傷になりかねない。霊体とはいえ元は人間、興味本位でべたべた触るのも悪いので、蒼衣は好奇心に蓋をし調査を切り上げた。

しかし何が気に入ったのか、手を離してもその一体はふよふよと寄って来る。首を傾げながら撫でてみると、幽霊はお辞儀のような動作と共に群れの方へと帰って行った。手を振り見送った蒼衣がやがてぼつりと一言、

「……案外可愛いな、幽霊」

『色々すっ飛ばすけど超越し過ぎだよお前!!』

ツッコミの嵐を受けたが蒼衣は踊ってスルーした。ともあれ、

「いつまでもお花見してる訳にはいかないな。行こうか」

確かに桜は美しいが、自分達にはやるべきことがあり、それは疎かに出来ないものだ。じっくりと鑑賞するとすれば、この異変を解決してからだろう。蒼衣の促しに頷きを返し、各々冥界の奥へと歩き始める。が、

「待つて」

凜と響いた少女の一言に、全員足を止めざるを得なくなる。

「……鏡花？」

「静かに」

怪訝そうな菖蒲の声を遮り、鏡花は桜並木の奥へと目を凝らす。その様子にいつもの明るさはなく、ただ戦士としての張り詰めた緊張感があった。振り向き首を傾げる蒼衣達に構いもせず、やがて鏡花が目を細めると同時、

蒼衣の背後から、剣戟の音が響いた。

「　　っ!？」

瞬時に警戒を最大レベルに引き上げ、こいしとフランを下がらせながら蒼衣は振り返る。いつの間にか主人を庇うようにして、鏡花が鬼切と蜘蛛切で襲撃者の一撃を防いでいた。庇われた、という不甲斐なさはあるが、鏡花が身を呈して守ってくれたことが素直に嬉しい。が、礼を述べるのは現状を切り抜けてからだ。

襲撃者の正体は、意外なことに一人の少女だった。銀色の髪をボブカットにし、黒いリボンをカチューシャの用に付けている。白いシヤツに青緑色のベストとスカートを着用しており、背と腰にはそれぞれ刀の鞘。右手には少女の身に合わせ大きな刀を、左手にはやや短めの刀をそれぞれ握り締めている。そして何より特徴的なのは、傍らに巨大な人魂がいること。等身大のそれは白く半透明で、向こう側が透けて見える。彼女が人ならざる者　　^{冥界}こちら側の存在だということとは明白だった。

襲撃失敗を悟ったのか、得物を弾きながら少女が一気に後退する。鏡花も力に逆らわず、バックステップで数歩を下がる。油断なく二刀を構えながら、

「……あんだ、何者？」

「……侵入者に名乗る名などない」

にべもなく答えながら、少女も二刀を構え直す。ようやく脳が事態に追い付いて来たのか、少女達の顔に警戒の色が宿って行く。が、

「あら、妖夢じゃないの」

アリスはなんでもないのでのように、襲撃して来た少女に話し掛けた。

「っ！？あ、アリスさん！勝手にバラさないで下さい！」

それでペースを崩されたのか、少女は手をばたばたと振りながらアリスを窘める。先程の一撃は確かに脅威だが、あわあわと慌てている少女を見ると何とも言えないギャップを感じる。こっちが地なのではないだろうか……。

「……で、結局あんた誰？」

「あ、失礼しました。私ここの庭師をしている魂魄妖夢……、って違ーう！」

ともかく状況を仕切り直そうと、蒼衣は少女に声を掛ける。対し少女 妖夢は素直に答えてくれたものの、思い出したように綺麗なノリツツコミをかましてくれた。

「あなた達、冥界に一体何の用ですか？みだりにこちら側に来てはいけないとされているはずですが」

表情を引き締めながらの一言に、蒼衣達は思わず顔を見合わせる。冥界に向かえというのは、藍を介してはいるが紫の指示だ。故に当然、相手側には話が行っていると思っていたのだが……。

「何って……、紫さんに頼まれたんだけど」

「……紫様？しかしそのような話は……、なるほど、そういうことですか」

紫のことは知っているのか、妖夢は首を傾げつつ思考を巡らす。やがて納得したように頷きながら、しかし二刀を下げることはなく、

「妖怪の賢者である紫様の名を出せば通れると思ったのですが、読みが甘かったですね。そんな見え透いた嘘に引っ掛かる私ではありません」

……いや、ちょっと待て。

「いや、これマジなんだけど……」

「くどいです。何度言おうと答えは変わりません。幽々子様に危害を加えようとするなら、全て切り伏せるのみ」

蒼衣の言葉をつっぱねながら、妖夢は右手の刀を蒼衣に向ける。露を払うように左の腕を振るい、

「この刃に打ち勝てねば、その身は冥界に届かないと知りなさい。それすら適わないのなら……、妄念ごと叩き切ってみせましょう」

風に髪を僅かに揺らし、しかし視線は鋭く蒼衣達を射抜き、

「……さあ、私の相手はどなたですか？」

「……で、どいつする？向いつはノリノリみただけど」

二刀を構えた妖夢に背を向け、円陣を組んだ蒼衣達は早速相談を始める。もはや何を言ったところで効果はなさそうだし、ならば向こうの言う通り力付くで道を開くしかない。

「ここはやっぱり私がマスタースパークでズドンと」

「いやいや、私がレーヴァテインでドカーンと一発」

「サブタレイニアンローズでバコーンも捨て難い……」

「……なんで擬音縛りなんだお前ら」

思わず突っ込んでしまったが、確かにこちらは有利だと言える。魔理沙やフランなど火力には事欠かないし、こいしのような変則的なタイプもいる。一見不利要素はないように思えるが、

「擬音はともかく私達じゃ分が悪いわ。あの速度じゃマスタースパークは当たらないだろうし、レーヴァテインも躲されたら隙だらけ。サブタレイニアンローズにしても斬りながら押し進みそうだし……、私も人形設置してる間持ち堪えられるか……」

そう、一番の問題は相手の速度。いかに不意打ちだったとはいえ、向こうの襲撃に誰一人として気付けなかった。戦闘時なら気を張り

詰めている為ギリギリ対応出来るだろうが、鏡花がいなかったらと思つとゾツとする。

「…………じゃあ、私？」

『反則だからダメ』

そんな中菖蒲が名乗り出るが、満場一致で否決された。彼女の能力
呪いは確かに強力で、その気になれば一瞬で決着がつくだろい
だが規格外の力にはそれなりの制約があり、一応抑えているとはい
え身体へのダメージはゼロではない。この純粹で優しい少女に、そ
んなことを任せたくなかった。

しかしそうなる残り三人。神綺はどう考えても除外枠であり、

「そうなる俺しかないか…………」

自然と蒼衣に決まってしまう。確かに重力加速があれば速度は互角
かやや有利、後の問題は太刀筋を追えるかどうか。そこはアドリブ
でどうにかしようと、蒼衣が妖夢に振り返る。が、

「私が相手してあげるわ」

既に式神^{鏡花}一号がやる気満々であった。

『うおい』

「あんたのそれ、中々の名刀みたいね。銘は？」

「……聞かれて答えると思いますか？」

蒼衣達の総ツツコミを当たり前のようにスルーし、すたすたと歩み寄りながら鏡花が気さくに話し掛ける。しかし妖夢の表情は堅く、応答も素っ気ない。おそらく先の一撃を防いだ鏡花を警戒しているのだろう。そんな様子にやれやれと溜め息を漏らし、

「ま、いいわ。使えばわかるもの。」

マテリアライズ
顕現」

鏡花の一声と同時に、その両手には妖夢のものと全く同じ刀が握られていた。

「なっ、どうして楼観剣と白楼剣が……!?!?」

「へー、楼観剣と白楼剣っていうのね、これ」

思わず慌て取り乱す妖夢に、引つ掛かったなと言わんばかりに笑みを向ける鏡花。鏡花の能力はあくまでイメージの物質化であり、これは外見を真似ただけ。妖夢の剣の曰くや来歴など知らないし、故に今鏡花が握っているこれは紛い物以外の何物でもない。鏡花もそれをわかつているのか二刀を掻き消し、

「まあいいや。姿形だけ真似たって模倣は模倣。だつたら
オリジナル
妄想
の方がよっぽど強いもの」

彼女本来の武器と言える、鬼切と蜘蛛切を構えた。妖夢の顔には未だ警戒の色があるが、もはや驚きのそれではない。目の前の相手を敵と認識し、戦術を見極めんとする警戒の色だ。

「西行寺家庭師兼護衛、魂魄妖夢」

「蒼衣・シユヴァルトシルトが使い魔の一、水月鏡花」

名乗りは同時。構えも同時。ならば後は仕合つのみ。故に、

『参る！！』

二人は全力を以て、開戦の一步を踏み出した。

刀と刀、近接戦闘を主とする両者の踏み込みは、一瞬でその距離をゼロへと縮めた。妖夢の楼観剣と白楼剣と、鏡花の鬼切と蜘蛛切が、火花を散らしてぶつかり合う。

『 つー！』

交錯は一瞬、しかし理解は十全。二人はほぼ同時に地を蹴り、一瞬で十数メートルの距離を稼ぐ。互いに向き合うようにして後退しながらも、脳内では先程の一合いを正確に分析していた。

刀というものは見ての通り、鋼鉄の塊である。力任せに叩き切る西洋の剣とは違い、刀はあくまで切断に特化した薄い刃だ。そんなものをぶつけ合っていたらどうなるか。しなり、折れ、いつか砕けてしまうだろう。……最も、イメージの産物である鬼切や蜘蛛切は当然として、妖怪が鍛えた名刀である楼観剣と白楼剣もそんな心配とは無縁なのだ。

ともあれどちらも同じ二刀流。なので両者は力量を見極めるべく、先手として同じ動作をした。右手の楼観剣を何の捻りもなく、袈裟掛けに叩き込んだのだ。普通に受ければ刃が欠ける一撃だが、それに対する行動も全く同じ。もう片方の手に握った白楼剣の腹で、受け流すようにして刃を止めたのだ。

いかに名刀であろうと刀は刀、しっかり握らねば取り落としてしま
うし、そうなれば衝撃はダイレクトに使い手へと伝わる。剣豪と称
される大男さえ例外でなく、マトモに受ければ手は痺れる。細く筋
力もない少女達の腕には、十分過ぎるダメージだろう。

しかし少女達はその力を、技によって補っている。刹那にも満たぬ
手捌きによって、衝撃を己の身体から逃がし切ったのだ。当然これ
は並大抵の者には不可能な芸当であり、素養があってもかなりの修
練が要る。失敗すれば自分にダメージが来る、諸刃の剣とも言える
体術。一手の間違いが死と敗北に直結する実戦において、しかし少
女達はやり遂げたのだ。

……出来る……！！

故に剣士達が心中に思うは同じ、警戒の度合いを更に引き上げる。
互いの得物が業物であることは既に理解しており、ならば刃へのダ
メージを度外視した戦い出来る。小手調べは今の一撃で終了、な
らばここからは全力だ。

思考は同時、しかし実行は僅かに鏡花の方が速かった。野に生きる
獣の思考は、反射に近いそれだ。一瞬という何気ない瞬間は、戦場
に置いてとてつもない価値を得る。

故に鏡花は行った。握り直した源氏の宝刀を、上半身の捻りも加え
て横からぶち込む。重心と体重の乗った一撃に対し、

「……！！」

妖夢は一步、前に踏み込んで来た。

端から見れば自殺行為に見えるそれだが、実際には的確な判断と言える。前述の通り刀とは切断武器であり、その真価を發揮するには、『対象に刃を当て引き切る技術』と『一定の間合い』が要る。

遠ざかるならばまだ良い、更に一步を踏み込めばギリギリ射程圏内だ。だが近寄られたらそれも行かない。引きながらの斬撃の威力など高が知れている、肉を裂くくらいなら出来るだろうが骨まで断つのは不可能だ。ましてや相手が行っているのは踏み込みながらの勢いを乗せた斬撃　下がれる道理はない。

加えて妖夢の行動はこれだけではない。逆手に持ち替えた左の白楼剣で、己の右半身をガード。彼女から見て右側から迫る二刀に対しての盾としたのだ。

更に空いた右手が握り締める楼観剣を、腰溜めに構え突きとして解き放つ。高速で大気を切り裂く刃は、もはや点と言って差し支えない。空気抵抗も最小限に抑え、至近距離からの目視困難な攻撃だ。万が一無理矢理下がったとしても、楼観剣のリーチは一步分の不足を補ってなお余り有る。故に、

……回避は不可能です!!

そう結論付けた思考に従い、妖夢はただ行く。万全を期して放たれた必殺の一撃。鏡花の腹に突き刺さるはずだった一刀は、

しかし宙を虚しく貫くのみだった。

妖夢は見る。先程まで眼前にいたはずの鏡花が、円弧を描くようにして自身の側面、背後に回り込んでいるのを。何故と疑問し思考を走らせ、間髪入れずその答えは返って来た。それは、

「…………遠心力!?」

「ご名答という言葉を中心に落とし込み、鏡花は慣性に身を任せ妖夢の横を擦れ違う。回転しながらの斬撃には、二重の意味があったのだ。」

全力を込めた一撃とは、必殺の状況でもない限り博打に値する。その一撃で決めるつもりで放つのだ、搦め手一でもない限り躲された場合《後先》を考えないのが普通だ。確かに鏡花の速度はかなりのものだが、それだけでは必殺足り得ない。それをカバーしたのが、妖夢の口にした遠心力だ。

身を捻り体重を乗せたことで、鏡花の攻撃には遠心力　円運動を

している物体が、回転の中心から遠ざかろうとする力が宿った。剣戟に威力を乗せる目的もあったが、それ以外にも使い道はある。直撃の際二刀を押し込むことによって、威力の底上げを図りつつ、

……反動を活かして身を飛ばす!!

反発力というものがある。物体に力を与えると、与えた側にも反動が返って来るといわずと知れた物理法則だ。何も遠い場所の話ではない。疾走や跳躍も『足場を蹴ることによって返る反発力』の賜物なのだ、極論してしまえば歩行さえもそれで成り立っていると
言える。

ならば後は簡単な話だ。二刀をぶつけた反発力に加え、自ら跳躍することで一気に距離を取る。全力の攻撃を叩き込みつつも、自らは横へ回避が可能という訳だ。加えて白楼剣を盾としている為、そちらに避けてしまえば追撃は来ない。結果として鏡花の眼前に広がるのは、無防備な妖夢の背中だ。

……取った!!

勝利を確信した鏡花は、再度身を回し横薙ぎの斬撃をぶち込んだ。重ね合わせるようにして放たれた一撃はしかし、相手に届かずその役目を変える。理由は簡単。妖夢が左手の白楼剣を、バックハンドの要領で突き込んで来たのだ。

こちらを見ずに放ったせいも、精度は甘く狙いは雑だ。しかし当た

る可能性がゼロではない以上、鏡花は防がざるを得なくなる。しかも点に近い攻撃を逸らすには、横から打撃を叩き込むしかない。自ら踏み込む形の鏡花だが既にモーシヨンが確定した以上、円の内側で躲すのは不甲斐。故に、

「っ……っ」

鏡花は二刀で無理矢理白楼剣を弾き、全力で後退した。刺突が迫るより速く、自ら背後に下がったのだ。攻撃のチャンスを逃すことに不満はあるが、敗北することと天秤に架ければ答えは一つしかない。

一方躲された妖夢の方も、表情に苦いものが混じる。カウンターで叩き込んだ一撃を、高速で宙を行く薄い刃を、まさか弾くなど誰が想像するだろう。アドリブとはいえ渾身の一撃だ、バランスを崩した状態で追撃には移れない。よって妖夢も態勢を立て直すべく、後退を余儀なくされる。

今の攻防によって互いの立ち位置は入れ代わったが、目的は未だ果たされていない。ならば取るべき行動は一つだけ 戦闘続行を置いて他にない。

故に二人は再度地を蹴り加速する。勝利をその手に掴む為、言葉の代わりに刃を交わし、剣戟の舞踏に身を踊らせた。

戦いの場は音に溢れている。

身体が風を切り裂き行く音。

得物を交り合わす残響の音。

大地を力強く踏み締める音。

戦場を埋め尽くす様々な音。

それら全ての音は、余すことなく己と相手が生み出すもの。

それら全ての音は、余すことなく己と相手へと向かうもの。

己と相手が、世界の全てを埋め尽くして行く何よりの証明。

その至上の感覚を、好敵手とも呼べる相手と交わせる喜び。

今少女達の胸中は、得難き喜びの感情と、互いの技巧に対する称賛に満ち満ちていた。

魂魄妖夢は思う。

速度を上げると。

水月鏡花は思う。

回転を上げると。

冥の少女は思う。

無駄をなくせと。

頭の少女は思う。

迷いを捨てると。

剣士二人は思う。

ただぶつけると。

業と力の全てを。

出し惜しみなく。

「人符
」

「忌剣きけん
」

なればその宣言は、示し合わせたかのように全くの同時。幻想の地に生きる少女達の本懐は、弾幕スベルカードごっこにあると言っても過言ではない。

「 「現世斬」!! 」

宣言の機は同時、しかし発動の速さは妖夢に軍配が上がった。楼観剣を居合いの形で腰溜めに構え、残像すら見える速度を以て一気に踏み込む。おそらくは高速の抜刀と共に斬り抜けるつもりだろう。だが、

「夜よ駆け」！！」

妖夢の現世斬が高速だとすれば、鏡花の夜駆けはまさに神速。意図的に呼吸をズラし、霊力で強化した脚力を用いた抜刀術は、もはやそう称するに足る領域にまで踏み込んでいた。残像すら視認させぬその速度は、忌むべき剣の名を冠するに十分値する。

宣言の為後退し、十数メートルの距離を挟んで相對していた二人は、しかし刹那の間に互いの位置を逆転させる。瞬間移動を想起させるがなんのことはない、単に二人の体術が桁外れだというだけだ。

踏み込みが高速と神速ならば、その延長線上で交わされる剣戟を誰が捉え切れるだろう。一際大きな金属音が響くと同時、二人の身体には傷があった。鏡花は左の脇腹を、妖夢はそれぞれ左の二の腕と右の太ももを。致命傷こそ避けたものの、完全に躲しきるのは不可能であった。

負傷の数は妖夢が多いが、鏡花の傷の方が僅かに深い。長々と切り結ぶことは出来ないだろうが、戦闘の続行には支障なし。両者はそれだけを確認し、再度身を反転させ斬撃の嵐に飛び込んで行った。

着実に終わりが見え始めた、この相対を心から惜しみながら。

「……あいつも大概ノリノリだな」

ぼやくように呟きを零し、蒼衣は二人の戦闘を目で追う。今剣士達が演じているのは、斬撃主体の高速戦だ。互いのスペルカードが一撃必殺クラスだとわかった以上、発動の隙を見せればその瞬間に決着がつく。故に戦いは隙のない、斬撃主体と相成った訳だ。

際限などないと言わんばかりに二人の動きは加速し続け、そろそろ正確に捉えるのは難しくなってきた。宙を駆ける白銀の軌跡と、得物をぶつけ散らし合う火花。引つ切り無しに飛び回る二人に集中するあまり、首をブンブンと動かし過ぎたこいしとフランが、鈍い音と共に声に鳴らない悲鳴を上げていた。

この領域まで至ってしまうと、反射に近いレベルでの応酬だろう。一手でも読み違えれば、その瞬間に勝負は決まる。そしてそれはそう遠いことではない、何しろ 人であろうとなかろうと、集中力には限界があるのだから。

「くっ ……！」

「ちいつ　　！！」

それぞれ頬と脛を掠めた白刃に、二人は苦々しげな声を漏らす。戦場には朱の色も混じり始め、肌には浅いが結構な数の切り傷があった。

負傷すれば誰とて感情は乱れる　　おそらくはあと数分もせずに結果が出るはずだ。

そんな思考とほぼ同時、断続的に響いていた鋼の音が消える。視線を戦場に移してみれば、再度距離を取った二人が睨み合っていた。

互いに肩で息をしており、服にも赤色が滲んでいる。あの高速の剣戟が長く持たないと察し、一度後退したのだろう。

スベルカード
切り札を、確実に当てる為に。

「人鬼　　」

「忌剣　　」

カードを宙に放ると同時、二人の周囲に靈力が渦巻く。その量は先の比どころではなく、離れたところから見ている蒼衣達でさえ肌に殺気を感じる程。この一合で決着する　　誰もがそう確信した。

不意に風が止むと同時、二人は間髪入れず地を蹴った。一気にトッ
プスピードに乗った二人の刃は、コンマゼロ秒の間を以て交錯する

「そこまでよ、っと」

寸前で、四本の刀は二本の扇によって止められた。

刃が今まさに交わされようという瞬間、ふわりと降り立った少女が
両手の扇を以て、二人の斬撃を受け止めたのだ。目で追うのも困難
なあの速度に割って入るなど、尋常な人間のすることではない。

割り込んだ少女の第一印象は、一言で言えば幽霊だった。死装束を
思わせる水色の和服に身を包み、腰の辺りには青い帯が巻かれてい
る。肩に掛かるくらいに伸ばされた桜色の髪には、紫のものに似た
ナイトキャップのようなベールと三角巾付きの帽子。周囲には小さ
な幽霊数体を従えており、見るからに 妖夢以上に冥界らしさ、
死を感じさせる少女だった。

「なっ………!?!?」

「ゆ、幽々子様!?!?」

虚を突かれたように動きを止め、しかし即座に二人は矛を収める。あんな斬撃を片手で受けていたにも関わらず、少女の所作は優雅なまま損なわれていない。底が知れない。それは場の誰もが覚えた戦慄であろう。

「騒がしいと思って来てみたら……、ずいぶんと盛り上がってるみたいね」

ゆっくりと扇を袂に仕舞い、埃を払うように膝を叩きながら立ち上がった少女が、鈴の鳴るような透き通る声で言葉を紡ぐ。その外見や所作も相俟ってか、少女の雰囲気は和を思わせた。

やがて視線を彷徨させた少女は、蒼衣を視界に収め薄く微笑む。そちらに向かってすすたと、何の気負いもなく歩きながら、

「さて、詳しい話を聞かせてもらいましょうか？ 深遠異変の解決家さん」

伸ばした指先に桜色の蝶を止め、首を傾げ微笑んだのだった。

第三十八話「半人半霊VS剣神妖狐」（後書き）

はい、今回はここまでです。

良い感じにハッスルしてた妖夢と鏡花の間に降り立った謎の少女の
正体とは一体（棒

次回、おそらくgggg回（未定だなんて言えない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8640p/>

東方魅魍月 ~ the Dark of Schwarzschild.

2012年1月13日23時52分発行